



又除

針 定 ヲト 西セマウ

只 曰 シ 佛ニ 華イ

驕 虞 不 折 生 草 茎

い 実ニ 心 情 オ 貫 キ 能 モ ノ ナリ

左 新 島 氏 後 山 谷

ナリ 云 然 心 係



心為ニシテガシク在ニ心  
洞素々ナシ梵ニ似  
クハシニ只天子師

心中如傍

血便  
留々



# 新島襄全集

4

書簡編Ⅱ

新島襄全集編集委員会 編

*The Complete Works  
of  
Joseph Hardy Neesima*



同朋舎







新島 襄 湯浅一郎画

謹う書うハリス老且下ニ呈ス陳者王殿ニ

昨年未だ校ノ為深ク復舊スル所ヲ賜ヒ憐ニ

巨類ノ金ヲ寄附スル事送ニ松万邦ノ多中ニ在

シタリキ嗚呼事殿ノ室ヲ所ホキ我カ東洋未

常有ノ美早中ニシテ集 恩由志ニ真ニ海山只サス

我カ同胞老シヨリ以テ福利ヲ受リト謝スルガ

我カ同胞老シヨリ以テ福利ヲ受リト謝スルガ



吾ハ詔ノ語ニ

△  
美依テモ一恒テ未だノ肯ミヲ奉戴シ一

理學

字ヲハ役立シ之ヲ同志社大子ニリテ理學部ト

傳

稱シルハ世ニモ多クノ鳴位ヲ明表シテ忘ル

一勿カレシメント欲ス今同我カ同志社員一トハ特

謝辞ヲ呈ス一オモクニ哀ニ托シタル哀ニ送

事ヲ認メ考知ノ好意ヲ鳴謝シ候セテ天父良ナキ

恩寵永ク多クノ上ニ止ラレテ祈ル所白

同志社  
現代  
新島三喜

ハルリス花且至同下

侍



大磯臨終図 久保田米僊画

新島襄全集 4 ■書簡編 II ■凡例



I 史料は編年順に番号を付して排列した。同一日付に複数存在する場合は、親族をさぎにし、他は宛名のアルファベット順とした。また、宛名・月日を欠くもののうち、本文内容等から推定できるものは「」で囲んで表示した。

II 各史料には本文の前にその形態・出典・所蔵者等について次の注記を施した。

- 1 ①封筒裏に差出人（新島）の住所が記されている場合に限り、これを表示した。
- 2 ②封筒表の受取人の住所を記した。また脇付等の添書をも表示した。
- 3 ③史料が葉書若しくは電報である場合、或いは封筒のみの場合これを表示した。
- 4 ④史料が墨書の場合は「墨」、黒あるいは青インク書は「インク」、赤インクで毛筆を用いている場合これを「毛筆（赤インク）」と表示した。

5 ⑤史料の所蔵・出典状態を示す。原史料を同志社社史資料室が所蔵する場合、これは特に記さない。「複写」・「写真」は、それぞれ原本のコピー若しくは写真を所蔵することを示す。ただし、複写・写真で所蔵機関等が判明している場合、これを（ ）で表示することとし、例えば写真（国立国会図書館憲政資料室所蔵）と表示した。刊本・雑誌等からの転載は、号数・発行年月日を示した。

6 ⑥史料全体に関わる事項について、これを表示した。

III 原史料の表記およびその体裁を尊重し、かつ読解の便をも考慮して、翻刻は原則として次の基準に拠った。

- 1 史料には適宜句読点を施した。
- 2 翻刻にあたっては、原則として常用漢字を用いた。
- 3 略字・合体字・異体字などは用いず、原則として常用漢字もしくはカタカナに直した。また、変体仮名はひらがなとした。ただし、「陳者」「江」「而」「也」など、若干の例についてはもとのまま残した。

- 4 仮名遣いは原文のままにした。カタカナとひらがなの混用、清濁音の混用も、そのままにした。
  - 5 外国人名・地名、その他の外国語のカタカナ表記が、現在と著しく異なる場合は、常用の表記を「」で示した。また、適宜中黒点を補った。
  - 6 新島による造字は通行の文字に改めたが、当て字は原文のままにした。脱字は「」で囲んで補った場合もある。(例・郷↓聯 嘲↓朗)
  - 7 原文のルビや返り点はそのまま残した。また、踊り字は概ね原文のままにした。
  - 8 原文中の○、△、※等の記号、および弧線、傍線、圈点なども原史料のままにした。
  - 9 補筆は「」で囲み本文中の該当箇所へ挿入し、その右肩に「補」と記した。挿入箇所不明の場合は、記されている箇所へ掲げた。また、「朱」は、補筆が朱(赤インク)でなされていることを示す。
  - 10 判読不可能な字句は、字数がわかるものについては□□で、字数不明の場合は「」によって表示した。
  - 11 判読が曖昧な字句には「カ」を、文意不明の字句には「ママ」を、それぞれの右に傍記した。
  - 12 抹消されている字句は、左傍にミを付し、右傍に訂正された字句を示した。抹消文字が判読不可能な場合は■で示した。抹消・訂正が長文にわたる場合はそれぞれを「」で囲み、その右肩に「抹消」「訂正」と記した。
  - 13 原史料中のスケッチ等は、原則としてその該当箇所へ掲げたが、不鮮明なものは一部省略した。
  - 14 印章はその形に従い、㊦、㊧などで示した。
- Ⅳ 史料中の編集者による注記等は「」で囲んで表示した。また、史料中の\*印は巻末の注解を示す。
- V 稿本が複数存在する場合、森中章光写を底本として他本との異同表記を次のごとく表示した。森中写がない場合

は柏木義円写を底本としている。

- 1 底本と他本が異なる場合、底本の異なる字句の左傍に・点を打ち、右傍に他本の字句をへゝで囲んで表示した。

(例 御送可申へり申すべき由依よし委頼ニ及)

- 2 底本にはあるが、他本にない字句は、当該字句の左傍に・点を打ち表示した。

(例 御愛母様にもよろしく御伝言)

- 3 他本にはあるが底本にない字句は、字数分だけあけ左傍に・点を打ち、右傍に他本の字句をへゝで囲んで表示した。

(例 有之候間)



新島襄全集 4 ■書簡編II ■目次

## v i

一八九一—一八九〇年

明治二十二（一八八九）年

565	564	563	562	561	560	559	558	557	556	555
一月二十九日	一月二十九日	一月二十八日	一月二十六日	一月二十三日	一月十九日	一月十九日	一月十八日	一月十七日	一月十七日	一月十五日
湯淺治郎・徳富猪	徳富猪一郎	伊勢時雄	小崎弘道	加藤勝弥	福岡教会	明石教会	陸奥宗光	北垣国道	〔浜岡光哲〕	中山光五郎
27	26	25	23	20	20	18	17	16	15	13

583	582	581	580	579		578	577	576	575		574	573	572	571	570	569	568	567	566
二月十五日	二月十五日	二月十四日	二月十四日	二月十三日		二月十二日	二月十一日	二月九日	二月九日		二月九日	二月六日	二月六日	二月三日	二月三日	二月二日	二月二日	二月一日	〔一月〕
永岡喜八	広津友信	大和博	永岡喜八	徳富猪一郎		不破唯次郎・杉田潮	小田川全之	徳富猪一郎	九鬼隆一		〔同志社憲法発布〕祝会	徳富猪一郎	北垣国道	河波荒次郎	風斗実・森信夫	中山光五郎	永岡喜八	頭山満	須田逸平
53	52	51	50	48	45		44	43	42	41		40	39	37	36	33	33	31	30

603	602	601	600	599	598	597	596	595	594	593	592	591	590		589	588	587	586	585	584
三月十九日	三月十六日	三月十三日	三月十三日	三月十一日	三月九日	三月七日	三月五日	〔三月二日〕	三月二日	三月一日	〔二月〕	二月	二月二十一日	二月二十一日	二月二十一日	二月二十日	二月十九日	二月十九日	二月十六日	二月十五日
徳富猪一郎	目賀田護法	近藤喜則	海老名弾正	中山光五郎	下村孝太郎	中村栄助	徳富猪一郎	新島公義	山岡邦三郎	不破唯次郎	新島公義	安部井磐根	杉田潮・杉山重義	杉田潮・湯浅治	小崎弘道	永岡喜八	永岡喜八	片桐清治	井上馨	〔沢沢栄一〕
76	76	75	74	72	70	69	66	66	65	63	62	61	60	59		58	57	55	54	53

622	621	620	619	618	617	616	615	614	613	612	611	610	609	608	607	606	605	604
四月二十六日	四月二十二日	四月二十二日	四月二十日	四月十七日	四月十五日	四月十二日	〔四月初旬〕	四月六日	四月五日	四月三日	〔四月二日〕	四月一日	三月三十一日	三月三十一日	三月三十日	三月二十六日	〔三月二十一日〕	三月二十日
阿部充家	井上馨	不破唯次郎	新井毫	岩崎〔甚〕	井上馨	下村孝太郎	福島における有志家	兵庫県以西諸教会兄弟	海老名弾正	川西光三郎	高松における大学賛成有志家	白石村治	中村栄助	海老名弾正	徳富猪一郎	加藤寿	原六郎	石田貫之助・内藤利八・鹿島秀麿・善積順藏
104	103	102	100	100	96	95	94	93	91	89	89	86	85	83	83	81	79	78

643	642	641	640	639	638	637	636	635	634	633	632	631	630	629	628	627	626	625	624	623
五月十二日	五月十二日	五月十日	五月十日	五月十日	五月十日	五月九日	五月七日	〔五月六日〕	五月六日	五月五日	五月五日	五月五日	五月五日	五月四日	五月三日	四月三十日	四月三十日	四月二十九日	四月二十七日	四月二十六日
徳富猪一郎	徳富猪一郎	浦木弘	奥村新之丞	野田卯太郎・永江純一	川本政之助	徳富猪一郎・湯浅治郎	徳富猪一郎	中村栄助	中村栄助	徳富久子	新島公義	中村栄助	中村栄助	海老名弾正	松山高吉	中山光五郎	北垣国道	徳富猪一郎	井上馨	五十田勇治郎
127	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	114	113	112	111	111	110	109	108	106	105

661	〔六月七日〕	ハリス	150
660	六月四日	井上馨	148
659	〔六月二日〕	小崎弘道	147
658	六月二日	徳富猪一郎	146
657	〔六月一日〕	徳富猪一郎	144
656	六月一日	徳富猪一郎	141
655	五月三十日	北垣国道	141
654	五月二十七日	大和博	140
653	五月二十五日	柴原宗助	139
652	五月二十四日	北垣国道	138
	健起		137
651	〔五月〕二十三日	広津友信・花畑	136
650	五月二十三日	海老名弾正	135
	起		133
649	五月二十二日	広津友信・花畑健	133
	新聞社		132
648	五月十七日	上野理一〔大阪朝日〕	132
647	五月十六日	児玉仲児	131
646	五月十四日	〔同志社幹事〕	130
645	五月十三日	北垣国道	129
644	五月十二日	〔徳富猪一郎〕	129

677	七月一日	徳富猪一郎	168
676	七月一日	中村栄助	167
675	〔六月〕	金森通倫	167
	男・竹内甚吉		166
674	六月二十八日	内田政雄・垣見敬	164
673	六月二十八日	徳富猪一郎	162
672	六月二十四日	堀俊造	161
671	六月二十二日	中山光五郎	160
670	志垣要三・森田久万人		158
	坂田丈平・南熊夫・清水泰次郎		
	路一三・福島綱雄・藤田愛二		
	郎・浮田和民・奥田吉次郎・山路		
669	六月十九日	金森通倫・加藤勇次	157
668	六月十八日	田中賢道	156
667	六月十八日	北垣国道	154
666	六月十五日	小崎弘道	153
665	六月十四日	宮口二郎	152
664	六月十二日	中村栄助	151
663	六月八日	小崎弘道	151
662	六月七日	中村栄助	151

698	697	696	695	694	693	692	691	690	689	688	687	686	685	684	683	682	681	680	679	678
八月十七日	八月十四日	八月十二日	八月十一日	〔八月四日 新島公義〕	八月二日 徳富猪一郎・湯浅治郎	七月 〔大阪における有志家〕	七月三十日 浜岡光哲	七月三十日 萩森長五郎	七月二十七日 飯田勇紀	七月二十六日 中村栄助	七月二十二日 〔佐竹篤〕	七月二十一日 徳富猪一郎	七月二十日 井上馨	七月二十日 広津友信	七月二十日 不破唯次郎	七月二十日 伴直之助	七月八日 中村栄助	七月六日 北垣国道	七月二日 徳富猪一郎	〔七月一日 新島公義〕
木村鎮太	広瀬源三郎	徳富猪一郎	湯浅治郎	新島公義	徳富猪一郎・湯浅治郎	〔大阪における有志家〕	浜岡光哲	萩森長五郎	飯田勇紀	中村栄助	〔佐竹篤〕	徳富猪一郎	井上馨	広津友信	不破唯次郎	伴直之助	中村栄助	北垣国道	徳富猪一郎	新島公義
191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180	177	176	174	173	172	172	171	169	169

719	718	717	716	715	714	713	712	711	710	709	708	707	706	705	704	703	702	701	700	699
十月四日	十月四日	〔九月〕 青年之光記者	九月二十七日 徳富猪一郎	九月二十六日 徳富猪一郎	九月二十六日 徳富猪一郎	九月十八日 北垣国道	九月十七日 田中賢道	九月十六日 田中賢道	九月十四日 徳富猪一郎	九月十四日 大島正健	九月十日 松尾音次郎	九月一日 伊勢時雄	八月二十七日 徳富猪一郎	八月二十七日 徳富猪一郎	八月二十五日 吉田清太郎	八月二十五日 滝口可成	八月二十三日 松尾音次郎	八月二十二日 大隈重信	八月二十二日 松尾音次郎	八月十八日 広津友信
徳富猪一郎	田中賢道	青年之光記者	徳富猪一郎	徳富猪一郎	徳富猪一郎	北垣国道	田中賢道	田中賢道	徳富猪一郎	大島正健	松尾音次郎	伊勢時雄	徳富猪一郎	徳富猪一郎	吉田清太郎	滝口可成	松尾音次郎	大隈重信	松尾音次郎	広津友信
213	211	210	209	208	208	207	206	205	205	204	203	201	200	199	198	197	196	195	193	192



740	739	738	737	736	735	734	733	732	731	730	729	728	727	726	725	724	723	722	721	720
十一月二日	十月三十日	十月三十一日	十月二十六日	十月二十六日	十月二十五日	〔十月〕二十四日	十月二十四日	十月二十二日	十月二十一日	十月二十一日	十月十八日	十月十八日	十月十七日	十月十七日	十月九日	十月八日	十月六日	十月五日	〔十月五日〕	十月五日
古賀鶴次郎	下村孝太郎	和田正幾	児島惟謙	伴直之助	横田安止	德富猪一郎	德富猪一郎	大隈重信	德富猪一郎	広津友信	德富猪一郎	大隈重信	德富猪一郎	德富猪一郎	山中百	德富猪一郎	〔大沢善助〕	田中賢道	中村栄助	中村栄助
232	231	230	228	228	226	226	225	224	223	222	222	221	220	220	218	218	217	216	216	215

761	760	759	758	757	756	755	754	753	752	751	750	749	748	747	746	745	744	743	742	741
十二月八日	〔十一月〕	〔十一月〕	十一月	十一月二十八日	十一月二十七日	十一月二十六日	〔十一月〕二十五日	十一月二十五日	十一月二十三日	十一月二十三日	十一月二十一日	十一月二十日	十一月十九日	〔十一月十六日〕	十一月十六日	十一月十三日	十一月十一日	十一月十日	十一月九日	十一月五日
新島八重	德富猪一郎	広津友信	〔広津友信〕	德富猪一郎	中山光五郎	德富猪一郎	德富猪一郎	松方正義	横田安止	德富猪一郎	新井毫	井上馨	〔広津友信〕	德富猪一郎	德富猪一郎	渋沢栄一	德富猪一郎	吉田賢輔	德富猪一郎	德富猪一郎
257	256	255	254	252	251	249	248	247	245	244	243	242	241	240	239	238	237	236	234	234

明治二十三（一八九〇）年

793	792	777	776	775	774	773	772	771	770	769	768	767	766	765	764	763	762
一月一日	一月一日	十二月二十二日	十二月二十二日	十二月二十日	十二月二十日	十二月十六日	十二月十六日	十二月十六日	十二月十四日	十二月十四日	十二月十四日	十二月十四日	十二月十二日	十二月十日	十二月九日	十二月九日	十二月九日
河原林義雄	半田平次郎	新島公義	新島公義	吉田賢輔	広津友信	新島八重	井上馨	広津友信	時岡恵吉	新島八重	新島公義	新島公義	徳富猪一郎	新井毫	徳富猪一郎	徳富猪一郎	新島八重
314	313	278	277	276	275	273	272	271	268	266	264	263	263	261	260	259	257

795	794	791	790	789	788	787	786	785	784	783	782	781	780	779		778
一月一日	一月一日	十二月三十日	十二月三十日	十二月三十日	十二月三十日	十二月三十日	十二月三十日	十二月二十八日	十二月二十八日	十二月二十八日	十二月二十四日	十二月二十四日	十二月二十四日	十二月二十三日	十二月二十三日	十二月二十三日
新島公義	新島公義	新島公義	新島公義	新島公義	新島公義	新島公義	新島公義	新島公義	新島公義	新島公義	新島公義	新島公義	新島公義	新島公義	新島公義	新島公義
315	314	312	311	310	305	303	300	299	298	297	290	289	287	284	279	279

## 年次未詳

824	823	822	821	820	819
三月七日	二月二十五日	一月二十四日	一月十九日	一月十六日	一月四日
伴直之助	三輪振次郎	鎌田助	十字六四文	河原林義雄	中村栄助
361	361	360	359	359	358

807	806	805	804	803	802	801	800	799	798	797	796
一月十三日	一月十一日	一月十日	一月十日	一月七日	一月六日	〔一月四日〕	一月三日	一月三日	一月三日	一月三日	一月二日
小谷野敬三	原忠美	新島八重	北垣国道	広津友信	松尾音次郎	新島八重	吉田賢輔	新島八重	松本勘十郎	半田平次郎	杉山重義
336	334	332	330	326	324	322	321	319	318	318	316

830	829	828	827	826	825
六月二十一日	六月五日	六月三日	五月三十日	五月十四日	三月二十七日
同志社寮長	い葉らぎ也	同志社寮長	北垣国道	北垣国道	北垣国道
365	364	364	363	362	362

818	817	816	815	814	813	812	811	810	809	808
〔一月〕	〔一月〕	一月十七日	一月十七日	一月十七日	一月十六日	一月十六日	一月十五日	一月十五日	一月十五日	一月十五日
〔一月〕 広津友信	新島八重	時岡恵吉	新島八重	原忠美	横田安止	渋沢栄一	木原勇三郎	河波荒次郎	広津友信	青柳〔新米〕
356	354	352	350	349	345	344	343	342	339	337

831	七月七日	竹内雄四郎	366
832	七月十四日	徳富猪一郎	366
833	七月十九日	北垣国道	367
834	八月二十四日	三輪振次郎	368
835	八月 鎌田助	.....	369
836	九月十二日	山口通	369
837	九月十三日	松山高吉	371
838	九月二十六日	堀俊三	372
839	十月九日	堀俊三	373
840	十月十日	中村栄助	373

年月日未詳

850	年月日未詳	安藤嘉左衛門	382
851	年月日未詳	〔新島公義〕	383
852	年月日未詳	新島公義	383

追加

1	明治十三年五月十七日	広瀬又治	386
2	明治十四年四月十三日	広瀬又治	387

841	十月十三日	小崎弘道	374
842	十月二十五日	中村栄助	375
843	十一月一日	北垣国道	376
844	十一月二十五日	藤谷為寛	377
845	十一月二十六日	北垣国道	378
846	〔十一月〕 徳富猪一郎	.....	378
847	十二月三日	中村栄助	379
848	十二月十日	〔中村栄助〕	380
849	〔十二月二十五日〕	新島公義	380

853	年月日未詳	〔某〕	384
854	年月日未詳	〔某〕	385

3	明治十四年十一月十七日	土倉庄三郎	387
---	-------------	-------	-----

遺言

4	明治十六年九月十二日 杉田定一…… 389
5	明治十七年一月一日 広瀬又治…… 390
6	明治十八年九月三十日 山田良斎…… 390
7	明治二十一年二月二十二日 内藤兼備…… 391
8	〔明治二十一年〕四月二十九日 金森通倫…… 392
9	明治二十一年十月十五日 加藤寿…… 394
1	遺言(明治二十三年一月二十一日 午前五時半 同志社社員)…… 403
2	遺言(明治二十三年一月二十一日 陸奥宗光、広津友信、人見太郎、大久保真次郎、横井時雄、横田安止・古賀鶴次郎・浜田正稲・波多野培根、富田鉄之助、新井毫)…… 411
3	三日午前三時五十分)…… 405
3	遺言(広津友信、横田安止、古賀鶴次郎、浜田正稲、波多野培根、諸教会牧師、宣教師、アメリカン・ボード、デイヴィス、信州・福島東北伝道など)…… 411
4	個人宛遺言(明治二十三年一月二十一日 波多野培根、原六郎、井上馨、北垣国道、渋沢栄一、横田安止)…… 414
10	明治二十二年〔十一月〕 広津友信…… 394
11	明治二十二年〔月日未詳〕 大久保真次郎…… 395
12	〔年次未詳〕一月十九日 広瀬又治…… 396
13	〔年次未詳〕三月十七日 金子常五郎…… 397
14	〔年次未詳〕十月二十二日 鈴木清…… 398
15	〔年月日未詳〕 根岸〔某〕…… 399

解 注

題 解

507 421

前見返しは第六五九号書簡一四七一—一四八ページ  
後は第七五二号書簡二四六ページ

装幀・小島友幸



書簡Ⅱ

一八八九—一八九〇年



明治二十二（一八八九）年

543 一月一日 富士成豊

①神戸寄寓 ②北海道札幌北四条東一丁目 ③はがき ④印刷（表書は墨）  
⑥代筆 宛名は「富士成豊」としている。

謹賀新年

明治廿二年一月一日

神戸寄寓  
西京同志社  
新島 襄

544

一月一日

半田平次郎

- ①神戸寄寓
- ②群馬県下碓氷郡原市村
- ③はがき
- ④印刷（表書は墨）
- ⑥代筆

謹賀新年

明治廿二年一月一日

神戸寄寓

西京同志社

新島

襄

545

一月一日

堀内徹\*

- ①神戸寄寓
- ②江州彦根五番町
- ③はがき
- ④印刷（表書は墨）
- ⑥代筆

謹賀新年

明治廿二年一月一日

神戸寄寓  
西京同志社  
新島 襄

546

一月一日

井上馨

⑤写真（国立国会図書館憲政資料室所蔵）

新年之慶賀目出度申納候、陳ハ昨年中ハ敝社之計画ニ関ハリ候私立大学之件ニ付、不一方御高配ヲ蒙リ御蔭ヲ以て右計画モ着々歩ヲ進メ、其成功モ遠キニアラサルヘシト深ク奉拝謝候、本年モ不相替御眷顧被下置、尚一層御助力之程偏ニ奉仰候、右年始之祝詞奉呈併テ御左右御伺申上度、早々敬白

明治二十二年

同志社

新島 襄

金森通倫

一月一日

井上伯爵殿

547

〔一月一日〕

徳富猪一郎

②東京々橋区日吉町廿番地

④印刷

⑥新島八重の名刺を同封する。

謹賀新年

新島 襄

548

一月四日

松尾音次郎\*

⑤森中章光写

新年之御祝詞御郵送被下奉謝候、本年之新年会ハ非常ニ盛大なりし由、定而諸君ニも大愉快之御事なりしと奉存候、茲ニ一応貴君に御依頼申上度一事有之候、ソハ他ニ非らず大久保七熊君前期ニケーデー氏英語級ニ於テ落第ニ被及候よし、然ル処ケーデー氏ニハ何ニカ再試験ハセヌトカ被申候由、其ニ付キ大久保君ハ大ニ不平を鳴ラサレ、右様不深切ナル教師ナレハ予ハ退校スベシトカ被申候旨効ニ聞及大ニ心痛いたし居候、何レケーデー氏之再試験をセヌトカ申セシハ多分再試験も無益ナリト被思候ナランカ、乍然本校正規之要スル所ナレハ再試験ヲ止ムル都合ニハ参ル間敷候



間、右義ハ弥ホントウナレハ一応主監ニ御照会アリ再試験之相叶候様御工風被下度候、且七熊君も何ニカ自身ニ欠点アレハコソ落第二至リシ事ナレハ、己ヲ顧ミ再ヒ試験ニ出ソル事ヲ被試験様貴君より充分御勧被下度候、尤同君之事ハ大兄牧野伸顕君<sup>\*</sup>より懇々御依頼も有之、是非同志社ニて卒業ニ至ラシメ呉トノ御話も有之候間、一旦之短氣ニ而已<sup>(2)</sup>ヲ不顧、却而教師之不深切ナドを鳴ラスハ余り好ましき事ニ非らず、是非とも心棒被致候様呉々も御忠告被下度候、右至急得貴意度、早々頓首

一月四日

新しま襄

松尾音治郎君

尚々、今に広津君ニハ帰校なきよし、何卒同級生より御書面モ御遣し速ニ御帰校之御促被成下テハ如何

549  
一月五日  
松山高吉

⑤森中章光写

恭賀新年、御家族様方御無事御重歳ト奉欣賀候、小生事も来神以来先差当り事無之、数日前一回非常ニ咳嗽をいたし候得共、一兩日に而落付申、当時尚外出ハ見合いたし候次第、御書中新潟之事を御申越被下難有奉謝候、此四五日中

加藤<sup>\*</sup>より已ニ三回之電報有之、昨夜ナドハ内村止メタドウソ浮田をヨコセト法外之注文を申来候、右ニ付已ニ一昨日ハ金森兄トモ相談いたし置候得共、トテモ浮田を借ス事ハ出来不申、小生の考ヘニ先ツ福島之綱島氏ナランカト存候、□□校長又ハ教頭之名義ヲ附し得難クハ仮教頭之名義ニテ同氏を招キテハ如何<sup>(朱点)</sup>、又福島ハ実ニ奥州之咽喉トモ可申要地ニ有之候ハ、<sup>(朱)</sup>其ノ要柵ノ点ヲ論スレハ、仙台ニ比シテ兄タリ難ク弟タリ難ク、实ニ肝要ノ一根城ト申シテ苦シカラス、綱島ノ代リニ当分山岡邦三郎氏ニユキテモライテハ如何、同氏ニハ近々村井<sup>\*</sup>之代リニ高松ニ至ルの計画あるよし、高松ニハ当分増野<sup>\*\*\*</sup>ニ行キモライテハ如何、左スレハ高松も都合ハ出来ベク、又福島よりハ山岡君カ時々若松之伝道を兼ネラレテハ如何、小生ハ近来伝道ニ喋々スヘキ筈ニアラサレトモ新潟よりハ頻ニ小生ヘ当テ電報ヲ遣し呉候間、小生も黙止し難ク一応貴兄迄御相談申上候間、速ニ金森兄ニ御相談、又外人中ゴルドン先生之意見ナド御聞被下度候也、右得貴意度、早々頓首

一月五日

新島 襄

松山教兄

新潟ニ於テハミシヨント学校ハ密着之關係ヲ有セシメオクハ将来該地伝道ニ甚必要ナリ、此時之ヲ挽回シテ再ヒ信者ノ手ニ取ルハ天又吾人ニ賜ハル也、吾人奮い且勇テ之ヲ受ケサルノ理アラランヤ

550

〔二月七日

新島公義〕\*

⑤ 森中章光写

御申越之趣拝読仕候間、直ニ金森方へ相回し申候、過日より新井毫氏当地方ニ被参、当時吉野ニ滞在中ならん、た分  
数日中ニ大阪ニ可被参候間、伊賀行之事ニ付御相談有之度候也

551

一月八日

伊勢時雄

⑤ 森中章光写

寸書拝呈仕候、陳者内村氏ハ弥新潟学校を引揚タルヨシ有之候、何ソ人カ直ニ彼ノ校へ趣キ之ヲ管理スルニアラサレ  
ハ到底落付キ不申事ト存候、就キテハ在米国之小矢野敬三氏ハ如何、同氏ハ多分招キサヘスレハ歸リ来ルヘシト存  
候、然シ其迄ニ何人カ之モ加勢スルニアラサレハナルマシト存候間、当分森本介石君ニ諸事片付之為ニ被趣候事相成  
間敷や、何卒速ニ小崎兄ト御協議被下度候、私もスカダ氏より手紙ヲモライ候間、不取敢御両兄之御協議ト御決断ト  
ヲ仰度奉存候、森本兄ニハ何レ新聞上ニ入用之人ナレハ只漸時之事ニ而加勢ニ行キクレマシク也、先方ニも森本氏之

来校ハ被望居候よし、先は御相談迄、早々頓首

一月八日

新島 襄

伊勢時雄兄

552

一月十日

新島公義

①神戸諏訪山和楽園 ②大和国奈良水門村 ④墨 ⑥封筒表に「十七日返書  
ス」と毛筆（赤インク）で記されている。

先日吾人之差出セシ年始状之一件ニ付、貴君より之御小言有之候間、直ニ金森氏へ相送申候ハ、同氏より昨日別紙之  
通申来候間、不取敢御送可申候間御一覽被下度候、右ニ付私よりも一応仕度候  
人ヲ馬鹿ニスル云々ノ口上ハ何人ノ口上ナルヤ、吾人ヨリ差出セシ年始状ハ吾人一個人之資格ニアラス、大学發起人  
ノ資格ニ而其賛成者ニ向、其好意ヲ謝シタル迄ノ事ニ而、年始状ニテ金ヲ出セト促シタルヲ無之、人ヲ馬鹿ニスル  
云々ノ口上ヲ吐タル人カ何人ナルカ、何卒其人ノ姓名ヲ御知セ被下度候、吾人ヨリ謝意ヲ表セシニ右様ナル口上ヲ  
吐カル、ハ余リジエントレメントハ被思不申、全体無礼千万ノ口上ト存候、彼等ハ吾人ノ心中ヲ知ラス頭カラ人ヲコ  
ナシツケル無風流ノ御方カト被思候、且貴君ニモ右同様ニ被思タルヤ、私一人ハトニカク金森ニ向ヒ二十二年ノ第一

ノ失策トハ如何ニモ過激ノ言語ナリト言ハサルベカラス、貴兄ニモ彼ノ輩ト同感ノ如クニ被思候、吾人ノ失策ハアルカモ知レス候得共、貴君カ如何ニモ礼儀ヲ知り世間ノ交際ヲ心得タル如クニ右様頭コナシニ人ノ非ヲ駁スルハ、君子ノ所為トハ難認候、如何ナレハコソ貴君ニハ右様過激ナル言語ヲ吐カレシヤ、甚心得難キ事ニ候、人ノ非ヲ矯メントナラハ少シク譲リテ言語ヲ吐カルヘキニ、右様大人連中カ小供ノ何等ノ礼儀ヲ知ラス世間ノ交際ヲ知ラヌモノヲ叱カリ付ケルカ如キ仕方ハ、私ニ於テモ甚其意ヲ得不申候、将来ノ交際ニモ関係ノ有之候事ナレハ、吾人ノ年始状ニ付人ヲ馬鹿ニスル云々ノ語ヲ吐キシ人物ハ如何人カ其姓名ヲ記し御知セ被下度候、如斯人物ニハ吾人モ必ラス注意ヲ加ヘ度存候

右は用事のみ、早々以上

一月十日

新島 襄

新島公義君

一月十一日

神山（阿部）充家\*

①神戸諏訪山和楽園

②熊本県下熊本区七軒町十二番地

⑤複写（阿部大三

郎氏所蔵）

⑥封筒表書は「阿部充家様」

過般は華墨被下、御地方有志家資産家之姓名等御知被下候間、拙書を添へ其々へ大学旨趣書等差出置候間、貴兄御巡回之際は是非トモ御面談、大学賛成之事ハ充分御奨励被下置度候、又已ニ御計画ニも有之候付、熊本新聞紙上ニハ大学之旨趣等御登録被下候事と存候、御地方募集之件は御負担被下候様奉仰候、小生も拝眉を得し後一度ひ甚しき咳嗽等引起し大ニ困難を究候得共、又々宜しき方ニ候間御安心可被下候、兼而御相談申上置候彼ノ海老名氏之関ハリ候学校之事ハ、其後如何之御運ニ相成候哉、一切海老名氏よりハ何ニ之通知も無之、已ニ先日（力）も一書差出置候得共、其返事スラ不参如何之事カト心配いたし居候、鄙考ニハ今トナリテハ遅々大事を取るよりも、非常之果断を以而決行するより他ニ策ハあるまじと存候、右為貴答得貴意、重ネテ同志社大学之件ニ付、御地方有志を募ると右寄附取集ニ至る迄も御依頼申上度、如此候也、早々敬具

一月十一日

新島 襄

神山充家君

梧下

尚々、田中賢道君、大迫真之君、海老名君等ニ宜しく御致声可被下候様奉仰候



554

一月十一日

野田卯太郎・永江純一\*

①京都寺町通丸太丁上ル十三番戸 当時神戸諏訪山和楽園止宿

②福岡県下三池郡大牟田駅 ⑤複写（福岡県地域史研究所所蔵）

一書拝啓仕候、陳者小生ニハ未タ両君トハ辱知之榮を蒙らざるも、過日在熊本神山充家ト申候小生之知人、又敝校同志社之一生徒なる柳川産広津友吉ト申者より照会有之、両君ニハ小生輩之企居候私立大学之挙ニ付大ニ御賛成被下候趣を以而、小生より一書奉呈是非とも特別ニ御依頼可申上旨被勸候間、喜欣措く能ハス茲ニ秃筆を把リ寸書を呈シ交誼を結び、右大学之挙ニ付此上充分之御賛助を仰度、又可相成は御地方有志金取纏之件も両君ニ而御負担被成下、御便宜次第福岡日々新聞社ニ御送附被下候ナリ、又ハ敝社へ御直送被下候ナリ宜しく御依頼奉申上度候、貴県より被参候生徒之内、已ニ普通科ニハ八九名之卒業生も有之、又既ニ三十三四名之入学生有之候次第なれば、将来大学設立之日ニ及候ハ、必らず多分之来校生も可被来と希望仕居候間、幾重ニも大学之挙ハ御賛助被下候様切望悃願之至ニ不堪候、右御依頼迄得貴意度、艸々敬具

一月十一日

新島 襄 印

野田卯太郎殿

永江純一殿

逐伸、兩君へハ兼而右大學設立旨趣書等御送呈仕置候得共、今回二十部并同志社設立始末書二十部御郵送可仕候間、御知人中ニ御分配被下度、又充分之御奨励被成下度奉切望候

再白

野田君之御紹介ニよると申、本日左記之人々<sup>\*</sup>へも拙書を添へ大學設立旨趣書差出し候間、左様御承知被下度奉希候

一月十一日

新島 襄

野田卯太郎殿

立花弘樹君

小野隆基君<sup>〔林〕</sup>

小林秀知君

団 琢磨君

小山副局長君

神原富文君

555

一月十五日

中山光五郎\*

⑤『上毛教界月報』三三六号（一九二六年十一月二十日発行）所収

新年の祝詞御送り奉鳴謝候、陳者御地の伝道も余り果敢々々敷参らざる由御申越に候得共、御地方の如きは真に新開の地に有之候間、一寸の事には参間敷候得共、将来必ず發達し好果も可結と存候間、充分主の御名の為又御地同胞の為御堪忍御伝道被成候様仕度候、縦令又一兩年中に好果なきにもせよ伝道上の便宜として、佐野、栃木又鹿沼の如きは是非とも将来連絡を可通地に有之候間、其目的にて先づ佐野に本營を御定被成候事必要の事かと存候、小生も何れ上毛の兄弟に御勸申、栃木鹿沼に連絡を通じ候様仕度候間、天父の御助に依り一度揚げたる十字の旗は決して巻き給はず、必らず勝利に至らしめ度奉存候、先は為貴答得貴意度、早々頓首

一月十五日

新島 襄

中山光五郎君

梧下

尚々、多田君には宜敷御伝言被下度候、兼て同君には大学の賛成にも頼み置候間、何卒貴君より御勸あり大学の為尽力致呉候様仕度候

何ぞ近著の書籍等にて御入用のものは無御遠慮御申遣被下度候、乍不及御周旋申上度候

⑤ 森中章光写

寸楮拝呈仕候、陳者過日は当地常盤舎ニテ不計も拝眉を得喜欣の至リニ奉存候、扱茲ニ得貴意御勘考相願度事出来仕、不取敢奉達高聞度候、其事別儀ニ非らず、昨日小生義内海知事ニ面会中、当地之資産家へ大学賛成之義御勸可被下ト御頼申候へハ、同知事之先京都之豪家ヲ取纏メ来レ、左ナキ上ハ当地之資産家ニ談スモ無益ナリ、先京都之手本ヲ出セ、京都之基ヲ示セ、大学之可立京都府下之人ニシテ若シ奮発シテ之ヲ賛趨セラレ〔ママ〕〔ザレ〕ハ、他所人ハ到底之ヲ助クルノ感情は薄カルヘシ、若し豪家ニシテ何千円出シタト申ス基カアレハ其ヲ基トシ、スタンダルドトナシ、当地之人ニモ相勸可申云々被申候、新紙上ニ承知候に近頃当地方之僧侶も大奮発、同志社ニ抵抗シテ一ノ大学ヲ創立スルノ企等ヲ初メタルヨシ、左スレハ多少同志社之賛成ニ影況ヲ及ホシ可申、先ンスレハ人ヲ制スル理モ有之、敢テ僧侶ト競争申ス訳ニハ無之候得共、寄附金之妨ケヲ為サレテハ随分困却之至ト存候間、願クハ右僧侶之計画ニ未タ発表セサルニ先ダチ京都大阪神戸等之豪家之寄附ヲ取纏申度、右義ニ付本日知事公へも申上至急又英断之御工風を仰キオキ申候間、可相成は貴殿ニも近々知事公ニ御面談被下、何ニトカシテ京都府下豪家丈ケデモ速ニ御取纏メ被下候御考案ハ無之モノヤ、伏テ御勘考之程奉望候、又近々金森氏ニモ参堂被致可申候間、篤ト同氏ニ御差図被成下度奉仰候、右至急得貴意度、艸々敬具

一月十七日

新島 襄

557

一月十七日

北垣国道

①神戸諏訪山和楽園

②京都上京第廿二組土手町

御親展

④墨

一書拝呈仕候、陳者一昨日は御來訪被下種々之御高談を拝聞仕大ニ愉快を覚、御計畫之不遠好果を結はん事を奉希望候

茲ニ一之捨置難き事件有之、不取敢奉達高聞度奉存候、其儀他ニアラス、昨日午後当県庁ニ罷出内海知事ニ御面会申候而当地之資産家ニ大学賛助之義御勸可被下旨御依頼申上処、同知事之被申候ニ先京都府之豪家を纏め來レ、左ナキ上ハ到底談判ストモ無効タルヘシ、京都之豪家某カ何千円何百円ト申、基力定マラサレハ当地之有志家ニモ先大概何円位ハ出セト申事ニモ参兼ヘク、又少シ位ノ寄附ナラハ何時ニテモ出来可申候得共、大キク纏マリタル金ヲ出サシムルニハ此地方之人々ハ必ラス京都ヲ基ニ為スヘク候間、先京都之手本ヲ示セト被申候、然るに御存之通京都府之豪家ニ而一千円以上之申込は更ニ無之（千円ノ寄附者独族岡氏アルノミ）他ニ対し余リ大ニナル手本ハ無之、此点ニ至リ大ニ困却仕、内海知事ニハ何ニカ出来難キ仕事ヲ為シテ來レ、去レハ自身ニモ骨折可申ト仰セラルカ如ク、何ニトモ右様ノ事ニテ当地ニ手懸リノ無之ニハ閉口仕居、昨日ハ談判之落着モ付カス退キ参候、其後種々熟考仕候而別ニ明策モ出テス、此レヨリ京都ノ豪家ノ賛成ヲ得ル事甚必要ナルヘク、又一昨日高聞ニ奉達候通大坂ニも大分緒ヲ開参候間、大坂之豪商ヲ取纏め又可相成は同時に京都之方モ速ニ取纏申度候間、甚恐入候得共何ニトカ御工風被下間敷や、浜岡氏ニも一書差出し参館之上是非トモ知事公之御高案ヲ拝聞シ可呉ト頼ミオキ申候間、今回ハ特別之御配慮ヲ以豪家中ヲ御取纏被下候様

惘願之至ニ不堪候、小生之京坂神之寄附を至急に取纏申度ハ余之義ニアラス、近頃僧侶連中ニも吾人ノ企ニ反對シ、此之地方ニ一大学ヲ創立スルノ計画有之由、万一右之計画公然発表致シ候ハ、多少吾人之企ヲモ妨ケ可申、先ンスレハ人ヲ制スノ理モ有之、今茲ニ躊躇致し時機ヲ失イ候ハ、他日臍ヲ嚙ムモ難及、今回コソハ最早猶余モ出来難ク、充分手ヲ延ハシ、セメテ京坂神丈デモ速ニ取纏申度候間、何ニとカ閣下特殊之御工風奉仰度候、何レ金森氏をも近々参堂可被仕候間、御差図被成下度奉願上候、右至急得貴意度、艸々敬白

一月十七日

新島 襄

北垣明府殿

閣下

尚々、取急キ乱文之義ハ御海容被下度奉仰候

558 一月十八日

陸奥宗光

⑤写真（国立国会図書館憲政資料室所蔵）

恭賀新年

近頃御起居如何慎而奉伺候、其後ハ小生より存外之御無音申上候条、伏而御海容被下度奉仰候、昨年来厚く御高配を

蒙り候大学之事も遂ニ天下之一問題トハ相成申、近来頻ニ京坂神之間ニ着手仕居、今春迄ニハ是非和歌山ニも遊説員を出張可為致心組ニ有之、已ニ先達中より児玉氏<sup>\*</sup>ニハ打合せ内応致し呉候様仕置候、此地方ニも随分賛成者<sup>ハ</sup>ニ乏しからず候得共、未タ充分ニ踏込ミ呉候者無之、未タ著しき進歩ハ相見不申候得共、多少好果ハ可有之ト樂しみ居候御地ニ而は近来<sup>(キ)</sup>メリシコート御条約御結ヒニ相成候由、定而御多忙之事ト遙察申上候、当时御存知ニ可有之候通日本全国政事上之運動相初まり申、随分茲彼シコニ非常之エキサイトメント有之候始末ニ而波瀾再起リト申候而可なり、是レも弥来年之準備ニ可相成候而、此よりハ甚ヤカマシキ世之中トハ相成可申、小生も此時代に遭遇するは随分愉快之事と存し弥奮テ大学ニハ従事仕度奉存候、何レ閣下ニも来年ハ必らず御帰朝之御事ト存し屈指奉待上候、右は新年之祝賀旁奉伺御起居度如此候也、敬白

一月十八日

新島 襄

陸奥公使殿

閣下

乍憚御令夫人様へも新年之祝詞被仰聞被下度奉希候、小生も昨年十月中一度帰宅仕、昨十二月中より休養之為神戸諏訪山ニ参居り、先当分滞留之積ニ御座候、当時ハ先少々宜しき方ニ御座候間、何卒御休慮可被賜候、乍憚長坂邦輔君ニも御致声之程奉仰候

波期<sup>(所)</sup>頓之アメリカンボールド之局長クラーク氏へ例之五万弗之事ニ付、懲兵<sup>(懲)</sup>猶余之事ハ記載無之様申遣候得

共、右五万弗ハ乃チ猶余云々之コンディションニ而寄附可申候間、黙止ハ出来難ト被申居候、若し再ヒ申出候ハ、一応御落手為し置被下度奉希候



559

一月十九日

明石教会

⑤ 森中章光写

⑥ 森中写によれば、封筒表書は「川本政之助」とある。

逐伸、未タ慥ナル事ハ存し不申候得共、憲法修正意見書聯合委員ノ手許迄差出し之事ハ今一月ノ末ト申事ナルカ、多分来二月ノ末迄日延相成可申様ニ伝聞仕候

先般<sup>\*</sup>回状を以御照会ニ及候件ニ付、ギユリク氏より別紙回答有之候間、不取敢御郵送申上候也、頓首

一月十九日

新島 襄

明石教会

御中

560

一月十九日

福岡教会

① 神戸諏訪山和楽園 ② 福岡県下福岡基督教会 ④ 墨 ⑥ 封筒表名は「奥亀太郎」とある。

先般回状を以御照会ニ及候件ニ付、ギユリク氏より別紙之回答有之候間、不取敢御郵送申上候也

一月十九日

新島 襄

福岡教会御中

尚々、諸教会より憲法修正意見書差出し期限ハ、今一月之末迄ト申事ナルガ、未タ慥カナル事カハ存し不申候得共、多分来二月之末迄日延ニ相成候様伝聞候間、為念御知セ申上オキ候

〔同封・印刷〕

拝啓、十二月廿日廿五日并に廿九日の御芳翰正に落手仕候、数多の教会よりして小生に熊本より送りし手簡、大坂の會議にて朗読せし紙面并に憲法の改正に付小生の可と認る忠告のケ条を、宏く告白の為印刷する様にとの求有之由御申し越被下、小生深く諸教会と牧師諸君の厚情を感謝致し候、貴下より各位によりしく御伝への程奉願上候

御求に對し左の如く御返事申上度存し候、小生已に合併委員及此事の為に撰はれし同僚の宣教師共とも談合仕りし事有之、又テビス、ラーネットの両君合併可否の討議にこまれる総ての問題に關し、書面即諸教会に撒らす処の書面の

〔ママ〕

認の依頼を受居られ候に付、且此書面ハ諸教会各位の情願に對し、小生に印刷せよと御求めある処の者より更に一層の満足を御与へ申す可く存候に付、甚乍失礼小生御求に従ひ不申、御求め被下るゝ諸君をは右両君の御書面を御覽ある様御すゝめ申す方、小生にとりて甚た都合よろしき事と存し候

加えて申述憲法改正委員ハ凡ての宣教師并に教会に改正を望むに付ては、忠告を為しくるゝ様申し出候られぬ、此請求にハ応す可く存し居候

〔ママ〕

外部一致なる此重要の問題を討議するに当り、智慧と恩恵の与へらることを望み、且信し候

千八百八十九年一月七日

京都に於て エス、エル、ギエリキ

新島 襄閣下

(裏面)

Kyoto Jan. 7th 1889

Rev. Joseph H. Neesima;

My Dear Sir;

Your favors of Dec. 20<sup>th</sup>, 25<sup>th</sup> and 29<sup>th</sup> have been received, telling me of the requests that have come in from many churches, that I print for general circulation the letters sent from Kumamoto, the paper presented at the Osaka Convention, and such suggestions as to the revision of the Constitution as I would personally favor.

Please let me express through you to the churches and pastors my appreciation of their courtesy and kindness.

I would say in reply to that request that I have consulted with the Union Committee and with my fellow missionaries on the matter; and that in view of the fact that Drs. Davis and Learned have been asked to prepare papers on the subjects involved in the whole discussion of Union, which papers will be distributed to the churches, and in view of the fact that these papers will satisfy the desires expressed in these requests in a better way than I could satisfy them by printing what is asked for, it seems to me wise not to yield to the requests but to refer those who have asked to the papers of these gentlemen.

I would also add that the Committee on Revision has asked all the missionaries as well as the churches

to make what suggestions they may desire as to revision. To this invitation I am planning to respond.  
Trusting that we may all be given wisdom and grace in the discussion of this most important question  
of organic union.

I am yours Respectfully,  
Sidney L. Gulick

561 一月二十三日

加藤勝弥

⑤田中良一写

スカダ先生へハ別ニ御回答不申上、何卒貴兄より宜しく本文之趣御通知被下度候、何卒将来も学校ハ政党ニ立  
加ラサル様與々モ御注意有之度候

先日より度々書信スカタ先生より一通、又貴兄より一通被下、大概内村氏之過去之事等相分、真ニ貴校之為ニ神之御  
手之存在する事も思レ申候、全体同氏ハ右様なる人物トハ覺エス（少し色変リノ人物タルハ前ヨリ承知）彼ハ近頃少  
少狂氣之体も有之候事カト推察申候、兎角右様之訳デハ到底校長之地位を保ツハ覺束ナク存候、（学力ハ有之実ニ残  
念千万、小生ハ同氏トハ此三年来甚懇意ニ致し居）、去リトテ彼ニ代リ人カ見当ラスハ此レモ亦大不幸ト云フヘシ、

小生も去十二月中ヨリ神戸ニ参リ、一々京都之人々ト相談出来不申候得共、書面を以て京都在京之人々ト相談ハ致し居候得共、何分書面位ニテハ参ラス、又御注文之浮田氏ヲ差シ上クル事ハ決シテ出来不申、只今ハ福島之綱島氏カ又東京之森本カ申事ニモ未タ決シ不申候、尤森本氏ハ是迄之履歴ニヨレハ随分豹変<sup>〇</sup>し易キ人物ナリ、若シ森本を引キ上タルナラハ長クシテ先半ヶ年丈ハ差支ハナカルベシト存候、其点ハ甚覺束ナク存候（如此キ申分ハ貴君ヲ信シテ申上候間決而御他言ハ御無用）、故ニ森本之外他ニ人ナクハ先ツ半ヶ年位之見込を乃半ヶ年モ助ケ呉レト申ス初ヨリ頼ミニナサレテハ如何、而シテ在米国小矢野<sup>〔谷〕</sup>敬三氏を招キニナリテハ同氏ハ学力アル人ナリ、又信徒ニシテ甚温和ナル人物ニシテ決シテ内村ノ比ニアラス（内村ハ極粗漏ナル日本魂ト云テ可ナリ）、将来事ヲ托スヘキ人カト存候、又宣教師方トハ喧嘩ハナスマシト存候、扱如斯申上候得共、小生も病氣休養中ニ而諸方之人々ト相談も出来候間、貴兄カスカダ先生カ東京ナリ京都ナリヘ御出懸直接ニ人々ヲツラメ御相談アルカ上策ナリト相考申候、又御地方説教家之事も御序ニ御工風有之度候、大阪ニ増野ト申人アリ、殊ニより候ハ、参上スベシ、然し若し来六月迄御待被成候事ナラハ、広瀬孝太郎氏ヲ招クノ御談判ヲ早クヨリ為シ被置而は如何、実ニ人を得事難き時ナレハ予メ御注意有之度候也、

早々貴答

一月廿三日

新島 襄

加藤勝弥兄

562

一月二十六日

小崎弘道

①神戸諏訪山和楽園

②東京麹丁区上二番丁二十二番地

④墨

保守新論<sup>\*</sup>ニ大ニ同志社大学ノ計画ヲタ、ケリ、願クハ貴紙ニ於テ充分ノ返駁<sup>〔反〕</sup>ヲ御試ミ被下度候、何レ国民ノ友ニモ試ミ呉レベシト存候

本日一寸葉書を呈し、ノイス氏<sup>\*\*</sup>渡航之事ニ関し貴兄ニ御周旋を乞、又同氏将来之ステーション等ニも充分之御意見御陳へ被下候様、同氏ニ宛テ今朝差出シタル書面ニも相記し申候、同氏へノ書面ハ和田彦迄頼ミオキ申候得共、恐クハノイス氏ノ手ニ渡ルマシト存シオリ候間、茲ニ一書差出し一応御相談申上度候

同氏ハ御存之通アメリカン・ボールドより来ルニアラス、一ケ之教会より来り候事ナレハ、何分アメリカン・ボールドノミシヨント共ニスル訳ニハ当分參ルマシ、去レハ該ミシヨンに關係ノナキ地方ニ一ノ新シキステーションヲ開ク

方カ当然ノ事ト存候、然ラハ何レノ地カ可然場所ナルカ吾人ハ間接ニ同氏ヲ賛成致し度候、鄙見ニハ九州テハ大方<sup>〔朱〕</sup>

「福岡、熊本ト将来合併セシメタク候」、東海道デハ浜松<sup>〔朱〕</sup>「将来西京ト交通セシメタク候」、奥州路ニテハ宇津宮<sup>〔朱〕</sup>「朽

木ハ将来上毛ト連絡セシメタク候」(一致会ヨリ着手ハアレトモ、他ヨリ入込ムトモ苦シカラサル場所ト存候)、信州

テハ長野<sup>〔朱〕</sup>「将来新潟ト通セシメタク候」、又秋田「此レハ飛ヒ離レテ他ト無關係ナレバナリ」等ナリト存候、何卒充

分御熟考被下度候、先生ニハ他之宣教師よりモ余リヨクハ受マシト存候間、貴兄方ニ於而何卒御深切ニ御相談被下度候、又神戸ニ来ルヘキ趣御通被下度候、小生ハ先生之ステーションを決定セサル前ニ一応面談ヲ遂ケ度奉存候、早々

頓首

一月廿六日

新しま襄

小崎弘道兄

563

一月二十八日

伊勢時雄

⑤ 森中章光写

今日宮川氏来神致し候際、伝道会社より貴兄米〔国〕行之件<sup>\*</sup>ニ対シ如何ナル意見ナルヤト相尋申候処、伝道会社ニハ貴兄之企を助ケ御留守宅迄ソポルトスル事ハ不相成ト被申候、右ニ付貴兄ニハ随分御困難ノコトニアルベシト存シ大ニ心配致し居候

擬右件ニ付如何之御工風可有之や、何人カ御留守中之為ニ何ソ良案を出し呉候哉、大会堂建築之事ニ付キ小生ニハ貴兄ト御同感ニ有之、是非東京ニ右様之設ハ必要ト申事ハ申迄も無之候得共、伝道会社之輿論カカク有之候上ハ他ニ賛成者を求むるより工風ハ無之候ト存候

兼而御依頼之添書ニ付近々差上申上度存居候得共、貴兄ニハ深伝道会社ニよらすして他ニ御工風相立候哉、此点ニ付一応御知被下度奉希候、貴兄之企ハ随分反对者ハ可有之候得共、小生ニハ御企ハネセッセリより公之事ナレハ、何



トカ事之成就いたし候様切望致し候事ニ候、早々不具

一月廿八日

新しま襄

伊勢時雄兄

本日押川兄参り呉半日程も縷々之談話有之候、御老人様方御令閨様ニよろしく

564

一月二十九日

徳富猪一郎

①神戸諏訪山和楽園

②東京々橋区日吉町廿番地

民友社

④墨

過日ハ貴書を賜ハリ后直ニ奈須君迄一書差出し申置候\*

金森氏之思立ニ而、今回地方之長官、裁判官、警官、府県會議長等来月十一日之祝典ニ上京被致候ニ付、此を好機となし大隈、井上兩伯之ウォームイントロダクションを申、又何ソ折あらは兩伯より一言談し呉候都合ニも参り可申事ならば、同氏上京も将来之ために被成可申と申事ニ而、小生ニ本日相談ニ被及候間、相談之上先貴兄并ニ湯淺其他之社員諸氏之御見込、殊ニ貴兄之御考ヘニ而一応兩伯ニ御計被下候上、兩伯共好機と被申候事ニ而添書も可被賜旨被申候事ならば、金森氏ニハ直々上京可仕候間、此事ニ付一応御工風御奔走被下間敷ヤ、御考ニ而今回は格別之効能もあ



るましと之事ならば、先同氏も見合セニ可被致候、若し好機ト思召さるゝならば電報を以而小生迄ツゴウヨシコイと御知被下候様、又上京ニ不及と思召候ハ、其趣御通知被下度奉希候、右は得貴意度、艸々頓首

一月廿九日

新島 襄

徳富猪一郎兄

梧下

先ッ高等中学廃スヘシノ御論ニ付、近頃府下之議論ハ如何、御序ニ御漏し被下度候

昨夜は宮川、金森両氏神戸新会堂ニ而大学之為演説被致候ニ、聴衆ハ先ッ千五百人位ト申ス事ニ候

今日之報ニ丹波船井郡中ニ而是非一千円ハ大学之為ニ募ルト有志家ハ奮発被致呉候よし伝聞仕候

保守新論ニ同志社之大学をタ、キ申候、御序ニ御返駁<sup>〔返〕</sup>なし置被下度候

当時大坂之方大学之為動キカ、リ申候

565 一月二十九日

湯浅治郎・徳富猪一郎

①神戸諏訪山和楽園 ②東京々橋区日吉町廿番地 民友社 ④墨  
⑥封筒表書は「徳富猪一郎」。

此度京都ニ而大沢氏之手ニより寺町之頭今出川上ル五六丁之所ニ六千九百廿七坪之地<sup>\*</sup>を一千四百六十三円五十銭ニ而  
買得申候、此は機に投し買得候故、御相談申上候折も無之、在上方社員丈ケ承知之上買得申候間、左様御承知可被下  
候、其近傍ニハ買地も尚多分ニ有之候間、機ニ乘し未タ騰貴せざる内ニ尽く買得申度候、右ニ付金子三千円も入用ニ  
候間、岩崎君寄附之内より三千円ハ土地ニ向ケ呉可申様今回頼ミ遣し申候間、多分差支無之事ト存候、右は沢沢君之  
方ニも右三千円岩崎氏承諾之上ハ直ニ京都之支店ニ差回し呉候様頼ミ上候間是亦御承知可被下候、右得貴意度、艸々  
敬具

一月廿九日

新しま襄

湯浅 治郎

兩兄

徳富猪一郎 御中

乍憚小崎、伊セ之兩氏へハ御序ニ右土地買得之事ハ御通し被下度候、尤右土地買得之事ハ当分他人之名義ニな  
しオキ候間、他ニハ御発表無之様仕度候、若し御序も有之際、井上、大隈兩伯、青木子ナドニハ右土地買得之

事ハ御知セオキ被下度候、右地ハ真ニ得難キモノニ候処、案外ニ手ニ入<sup>リ</sup>ニ申、又意外ニ廉価ニ候

566

〔一月〕

須田逸平\*

⑤ 森中章光写

寸緒拝啓仕候、陳者其後は案外之御不音何分申訳無之次第眞平御免可被下候、当地ハ大ニ温和之好時節と相成候得共、御地ハ今に余寒も不退事ト奉遙察候、御一同様ニハ何ニも御替ハ不被在候哉、敬而奉伺候、扱昨年中ハ私共不一方御世話ニ相成候条、呉々も奉鳴謝候、其後何ソ京都之物産ニ而差上度存し居候得共、其後漸く留守ニ相成居旁々以大ニ延引ニ及候条、何とも不本意之至ニ奉存候、此之油紙包ミ即京都之織物一反千木良家へ相呈し度候間、宜しく御取計被下度奉希候、且私より宜しく申上候条、呉々も御伝言被下度奉希候、右御礼旁得貴意度如此候也、艸々敬具

須田逸平君

梧下

新島 襄

尚々、貴君よりハ種々厚く御厄介ニ預リ千万忝く奉鳴謝候、私事も去十二月より神戸ニ参リ申候処、氣候ハ京都よりも少しく温和ニ有之、旁以近来ハ大ニ快キ方ニ有之候間、何卒御休慮可被下候、又乍憚木暮武太夫君も

右御通、又先般は大学の方へ御寄附被下候条、小生ニ代リ宜しく御礼御開陳可被下候

同志社大学之事ハ貴君ニも御承知之通已ニ天下ニ発表致し候間、貴君ニも御賛成被下度候、又御地之知人中且

浴客之錚々たる人ニハ賛成之義御勸被下度奉希候

家内八重よりも宜しく申上候

油紙荷物ハ先東京麻布仲之町廿番地粟津方鶴田三郎方相遣し、同人より上野ステーション前三鱗社又内国通運  
会社ニ相托し御送申候事と致し置候

567

二月一日

頭山満\*

⑤ 森中章光写

未タ拝鳳之榮ヲ得サルモ敢て一書奉呈仕度候、陳者弊社同志社之一生徒ニシテ近比福岡ヨリ帰省セシモノ、過日帰校  
之際小生方ニ立寄呉、小生輩之兼而企居候大学御賛成之事ハ是非貴殿ニ御依頼可申旨被申候間、何ツカ御交通致シ度  
キモノト存居候折柄、柳川ヨリ帰校ニ可及一書生広津友信ト申者迄帰校之路次必ラス高門ヲ敲クヘキ旨申遣候処、同  
氏ニハ過日拝眉ヲ得テ私立大学賛成之件ヲ御依頼申上候ハ、貴殿ニハ大ニ賛意被表候由同氏ヨリ聞及ヒ喜欣之至、  
茲ニ秃筆ヲ把リ小生ヨリ改而右之義御依頼申上度候

擬大學之事ハ昨年十一月中ヨリ公然ト天下ニ發表致シ候付、貴殿ニハ同志社大學設立旨趣書ハ已ニ御一覽ニ及ヒシ事ト存候間、最喋々スルニ及ハスト存候得共、小生ヨリ一応開陳致シ度キハ將來之青年志士薰陶之一事ナリ、今之青年薰陶之結果ヲ見テ我邦ノ將來ヲトシ得ヘキハ小生ノ平素固ク信シテ疑ハサル所ニ有之、是ヨリ全力ヲ竭シ民力ヲ以テ一大學ヲ創設シ、真ニ憂國愛民之氣怍ニ充チタル有為活潑ナル青年ヲ続々輩出シ、我カ邦家千百年ノ大平ヲ立タキ事カ畢生之志願ニ有之、是非江湖人士之贊翊ヲ得テ此願望ヲ達度候間、貴殿ニモ此一点ニ必ラス御同感タルヘシト存候間、願クハ御地方ニ於テ普ク御知人中且財産家ヨリ有志寄附金ヲ御募被下間敷ヤ、可相成ハ貴社之新紙福岡新報ニ私立大學之件ヲ掲ケ広〔ク〕九州地方之志士ヲ鼓舞奨励被下間敷ヤ、且乍御面倒義捐金募集之事迄も御負担被下間敷ヤ、真ニ鉄面皮ナカラモ此等之件ヲ御頼申上候間、御承諾之程奉切望候、右為願用得貴意度如此候也、敬白

二月一日

新島 襄

頭山 満殿

梧下

568

二月二日

永岡喜八

- ①神戸 ②京都寺町通丸太丁上ル十三番戸 新島内 ③はがき ④墨  
⑥日付は表書による。

容大様之御近況ハ如何、御知セ被下度候

松山高吉様カ毎日午前拙宅ニ而御勉強可被成候間、坐敷之上之处ニ御出テニ相成候様ニト申上候、何卒おトヒニ御命  
シ火体ニ火ヲアケ屏風ヲ立回ハシ上候様仕度候、又御帰ノアト火ノ本ヲ気ヲ付候様御命シ被下度候  
公債ノ書替ハ出来申候哉、御尋申上候

569

二月二日

中山光五郎\*

⑤森中章光写

来四五月中ニハ同志社ノゴルドン上毛ニ可被参候間、貴兄モ御地ニ御招キ被成、大間々ノ高橋等ヲモ招キ、佐  
野、栃木、鹿沼等ニ基督教演説会ヲ為サレテハ如何、又予メ御用意アリテゴルドン氏被参候ハゞ土地ノ有志家

二面会ノ出来候様御計被下度候

但シ伝道費トシテ可呈金子ハ後便ニ可呈候間、何卒御地方伝道之御見込等今一応御知セ、且御住所ノ番地等委しく御知セ被下度候

其後は如何、御地之門戸も主之御蔭ニより段々相開候事を遙察仕、毎々貴兄の働き之事ニ付其大切ナルコトヲ感シ、常ニ主之御手之御助ケアラソコトヲ切望仕居候、御存之通両毛鉄道ハ遂ニ落成ヲ告ケ可申、左スレハ下毛モ上毛モニ齊シク伝道之長足ヲ延ハシテ大ニ為スアルノ地ト相成可申、今日より申迄モナク明白ノコトト信ス、此際ニ当リ我力組合会ハ伝道上之便宜ヨリ申シテ両毛ヲ連絡セシムルハ至テ必要ト存候ハ、伝道中二個ノコトニ御注目有之度候、第一ハ老個人ヲ救道ニ導クコト、第二ハ伝道之中央要路ヲ定ムルニアリ、此第二之策ニ対シテ我力組合会之甚不長所ニシテ此迄モ伝道上之要路ハ往々一致、メソヂイストニ派ノ為ニ占メラレ、ヤ、モスルト収縮手段ニ出スルコト有之、小生ハ甚不満ニ存シ居、是非トモ将来ハ一地方ヲ連絡セシ〔メ〕テ力ヲ協セ伝道スルノ上策ニシテ、将来ノ大運動ヲ為ントナレハ必ラス一地方ノ要点ハ早く着手スルニ如カスト存候、小生ノ甚痛嘆ニ堪ヘサル所ハ今ノ伝道会社ハ余リ活潑ノ運動ヲ為サス、更ニ新開拓ニ着手セサル収縮手段ニ出テラレタルコトナリ、小生ノ兼テ着眼シテ疑ハサル所ハ両毛ハ地理ト云ヒ又人氣ト云イ、平民主義ノ発達スル望アル所ヨリ云フテモ実ニ両毛ハ手ヲ取リテ共ニ伝道上ノ運動モ為スヘキノ地ナリ、去レハ今ヨリ早く下毛ノ要点ニ着手スルハ甚欠クベカラサルノ運動ニシテ一日モ猶余スヘキニアラス

下毛伝道上ノ鄙見ハ此ヨリ佐野ヲ中央トナシ、又進テ栃木ニ着手シ早く土地ノ有志家ト結ビ、ドウトカシテ講義所ヲ開ラキ一根拠ヲ定ムルニアリト存候、何レ此夏迄ニハ他ノ二派(一教、メソヂイスト)ヨリハ該地ニ着手スヘク候間、可相成ハ貴兄

モ時々栃木ニ御出張將來ノ為ニ御計被成候様仕度候、何レ第一ニ土地ノ有志家ニ接シ其門戸被開ニ有之候ハ、小生も貴兄之為ニ直ニ工風可仕候間、是非トモ栃木ニハ此夏ノ来ラサル前ニ一ノ組合会ノ根拠ヲ御定メオキ被下度候、又栃木ヨリ不遠内鹿沼迄鐵道ヲ可架候間、鹿沼ニ着手スルニハ栃木ニ着手シオクハ甚順路ノ手段ト存候、小生モ成丈ケ心〔懸〕県ケ此夏迄ニハ是非トモ何人カ栃木ニ伝道ニ出懸ケル様工風可仕候間、何卒貴兄ニハ好結果ノ速ニ見ヘサルヲ以テ落胆シ賜ハス、此一兩年ハドウアツテモ佐野地方ニテ御尽力有之度候、縱令好果ナクトモ將來全下毛ヲ救フノ必要手段ト思召大胆ニカマヘ、決シテ小人的ノ御心ハ御出シ遊ハサレサル様精々御忠告申上候、小生ハ上毛ノ兄弟ニ向ヒ下毛伝道ハ飽マテモ主張可仕候間、小生ハ兩毛伝道上ノ熱心賛成家ト御認メ被下度候、右栃木ニ着手ノ為小生ヨリ其圖〔郡〕度々々貴兄之御手迄御送金可仕候間、一応上毛ノ兄弟トモ御計、栃木御着手ノコトハ是非御決行被下度候、小生も其後宿痼全ク癒ヘス、當時ハ京都ニ止マル能ハス、療養之為神戸ニ止宿仕居候、小生も毎々御地方伝道上ノコトニ不及ナカラ焦心致シ鄙見ヲ陳シ御参考ニ供候、何卒御同感ナラハ是非躊躇セスシテ御断行有之度奉希候、吾人力は迄モ例ノ不断行ヨリ毎度々々好機ヲ失ヒ申候、老個人ヲ救フモ一地方ヲ救フモ矢張主ノ御手ニ任セテ特別之断行ヲ要度候、先は得貴意度、早々敬具

二月二日

中山光太郎兄〔五〕

新島 襄

尚々、多田新君ニ宜しく御伝言被下度候

栃木行ニ付、今回小生より右御費用之為金拾円御差回申上候



是非上毛ノ兄弟ニ御勸メ板木着手ハ彼等ノ賛成ヲ得度存候

570

二月三日

風斗実・森信夫\*

①神戸諏訪山和楽園 ②福岡県筑後国柳川南長柄町 ④墨 ⑤亨 ⑥封筒表  
書は「森信夫殿」とある。

逐伸、広津氏ノ勸メニ依リ三池郡大牟田ノ永江純一、野田卯三郎<sup>〔太〕</sup>ノ兩君、其他同郡上内村立花弘樹君、歷木村小林隆基君、且三池ノ小林鉦山局長、同ク団琢磨君、小山副局長、集治監長神原富文君ニ小生ヨリ依頼書差出し置候間、左様御心得置キ被下度候

過日広津友信君帰校ノ節小生ノ寓所ニ立寄、御地ニテ御兩君カ御協力ノ上同志社大学資金募集ノ事ニ付大ニ御尽力被下候旨申通し吳、小生ニ於テ実ニ鳴謝千万ノ事ニ奉存候、何卒右義ニ付此上モ充分御賛翊被成下、吾人ヲシテ遂ニ彼岸ニ達セシメ賜ハン事小生ノ切望シテ止マサル所ニ御座候、御兩君ニハ御県下ニ御交際モ広ク、至ル所有志家ト称スル人物ハ御承知ト存候間、御兩君ニテ御奔走ノ勞ヲ取ラセ賜フノミナラズ、地方至ル所其有志家ト称スル人々ニ右大学習成家募集ノ事ヲ御依頼被下間敷ヤ、小生モ当時健康ノ身ニ候ハ、是非九州地方遊歴ヲ試度候得共、如何セン近キハ兎角多病ニ罷在、医師ノ命ニ随ヒ當時病ヲ当地ニ養フ次第、乍去前途ノ計ニ付少シモ落胆ハ不仕、銳意益々進取ノ

策ヲ可立候間、両君ニハ御地方奨励之義ハ御負担被下、縦令一時ニ集金不相成モ、月賦ナリ年賦ナリ長ク人々ノ賛成シ具候様御工風被下度、右は其後ノ御無音ヲ謝シ、併セテ将来ノ事ヲ御囑托申上度如此候也、敬白

二月三日

新島 襄

風斗 実殿

森 信夫殿

571

二月三日

河波荒次郎\*

⑤ 森中章光写

過日奈須君熊本行之序、華墨御遣し被下拝読仕、今回同氏熊本行之義ニ付甘樂伝道ハ貴君御負担被下候由、貴書ニ添へ奈須君よりモ詳細承り、貴兄右様御地ニ在リ伝道之任ヲ御受ケ被下候事ハ御地之信徒ニ取リテモ非常ニ幸福之事ナリト存候、近頃奈須氏熊本行之事ハ聞及ヒ、且該地ニ而至極入用之人ト存シ大ニ賛成致し候得共、御地之後任ハ如何可相成ト大ニ心痛致居、同氏ニモ後任ヲ得テ然ル後出発スヘシト迄忠告致し候次第ナリシ、然ルニ貴君カ御地ニテ直ニ其後任ニ御当リ被下候事ハ実ニ天幸之至、小生も大ニ喜ひ申候、貴君ニハ未タ神学等御脩メナキヨリ或ハ少シク躊躇スルノ憂モ可有之候得共、ツマリ伝道上之事業ハ不撓之信仰ト不拔之精神ニヨリ好結果ヲ可期候間、何卒区々差少

之御心配ハステオキ、主之為ニ罪惡ニ沈メル同胞ヲ救フヲ以テ大主眼トナシ、充分之コンフィデンスヲ以テ御尽力有之度奉希候、當時世間之人々ハ些々タル世上ノ名譽ノ為メニモ身ヲ犠牲トナシ、又些々タル名譽ヲ以、満足セラル、カ如キハ以謂<sup>〔所〕</sup>ユル一時之夢見ミルモノト稱シテ可ナルヘキカ、何卒世上之差々タル改良等ハ世人ニ任セオキ、吾人ハ御同様ニ改良中大根原トモ可稱人心之改良ニ從事致シ、一日モ早ク主之御国ヲ我カ同胞之心ニ来ラシメタク、真之黃金時代ヲ我カ東洋ニ現出セシメ度候間、貴君ニハ充分之御決断ヲ以テ伝道ニ御従事有之度切望之至ニ不堪候、御書中貴君之御決断ヲ見テ大ニ喜ヒ候間、大ニ之ヲ賛シ併セテ御断行アラン事ヲ奉仰候、小生モ當時旧痼<sup>〔宿〕</sup>未タ不癒、為メニ京都ヲ去テ当地ニ休養仕候次第ニテ、兼テ計畫致居候大学之為メニ奔走モ叶ハス随分遺憾ニ存候得共、病氣之事ナレハ真ニ致し方ナク、不得止只々皇天ニ向ヒ哀泣スルノミ、乍去此企ニ付キ決シテ怠リ不申、昨十一月以來数千通之書狀ハ天下之人士ニ差出シ、此一月以來自身ニモ已ニ百余通之書面ハ相認申候、何卒御地ニ於テモ信者不信者ヲ問ハス廣ク有志家ニ詔<sup>〔新〕</sup>ヘ、此事ヲ賛成シ吳候様御尽力被下度奉願上候、右貴答旁為願用得貴意度、艸々頓首

二月三日

新島 襄

河波荒次郎君

尚々、御地之斎藤君并ニ其他之信者方ニ宜しく御伝言被下度奉希候<sup>※</sup>

572 二月六日 北垣国道

⑤ 森中章光写、柏木義円写

一書拜呈仕候、御着京後如何御起居被遊候ヤ奉伺候、定而日々御多忙之事と奉遙察候、陳者今回全国之知事方カ御上京之事ニ可有之候間、之を契機と見做し小生代理金森氏を上京せしめ、閣下並に井上、大隈両伯之御紹介により一応知事方へ一面識丈でも得せしめ、以て将来之端緒となし置度存候得共、熟考之上トテモ今回は右一面識するも如何やと心痛仕、先同氏東上は見合被為致申候、乍去閣下ニハ所々御奔走中、多分之知事方ニ御面会之好機も可被為有ト存候間、万一御差支無之候ハ、小生之兼而苦慮焦心仕居候同志社大学設立之事を御談し置き、将来弊社より其御管下ニ向ケ遊説員を出張せしむるの日ニハ御合置之上充分御助力被下候様御頼ミ被下度奉懇願候、乍憚京都より東上致されたる富永裁判長、財部警部長、田中議長（尤同氏へハ一書差出申置候）ニも御序ニ右之義御周旋有之候様御依頼被成置度奉願上候、且御旅館迄御尋候御知人中へも大学旨趣書等御渡し置被下候様奉希上候、如此毎々御高配を奉勞候は甚不本意ニ有之、又屢なれば自然親友より疎セラル、の恐も有之候得共、右件ニ付已ニ全天下ニも訴出申候事なれば、如何なる時機をも活用仕度存候間、何卒此点は御一笑ニ被附、トンダヤカマシキ人物を御管下ニ持賜ひしと御明らかめ被下度候、嗚呼志ハ全天下ニ馳するも、身ハ諏訪山下之一亭内に空しく病魔之囚人と相成小生之心中も御了察被下度奉仰候、右為願、得貴意度、頓首敬白

二月六日

新島 襄

北垣明府殿

閣下

逐伸

来ル十一日ハ実ニ古今未曾有之盛典ト存じ、日本臣民之身として御同様ニ奉慶賀候、大学之件ニ付御面談を願  
置分ハ重モニ関西之知事方ニ有之候得ハ、追て福島ニ着手之折を得可申候間、可相成は山田知事殿ニ一寸御一  
言被成置度奉希候

大阪之純友家より三千元之寄附致し候旨本日金森〔氏〕より通知有之候、同家如此卒先致し呉候は甚好都合ト奉存  
候

573

二月六日

徳富猪一郎

- ①神戸諏訪山和楽園 ②東京々橋区日吉町廿番地 民友社 ③はがき ④墨  
⑥日付は表書による。

北垣氏山下御門外ニ居ラサルトキハ御穿鑿ノ上御在宿所ニ御届被下度候

乍御手数同志社設立始末并ニ旨趣書三十部ツ、木挽丁三丁目二十一番地杉浦サト方田中源太郎氏へ、又同各三四十部

ツ、山下御門外横田旅人宿方北垣京都府知事迄御遣し被下候様奉希候（民友社より小生ノ依頼ニヨルト被仰候而）、金森ハ東上を見合ニいたし申候、自然地方之人物ニ御面会も可有之候間、此機を大学之為御活用被下度奉希候

574 二月九日

〔同志社憲法發布〕祝会委員\*

⑤『DOSHISHA 文学会雑誌』110号（一八八九年二月十五日發行）所収

御書拝誦仕候、陳者来る十一日には我が国未曾有の大典に際し、我が校の諸士にも祝会の御催可有之由を以て私共兩人を御招被下候処、小生も今尚は療養の身にて堅く戸外にすら出でざる次第にて、出頭の義は難相成遺憾此事に候、右御祝会の事は苟も愛国男子を以て自ら任ずる者の決して無頓着に附し置き難き事なれば、何卒極めて爽快に御執行ありて益校中の愛国心を振起發達せしむる様御注意有之度候、右貴答迄、艸々頓首

二月九日

新島 襄

祝会委員御中

二月九日

九鬼隆一\*

⑤ 森中章光写

一書拝呈仕候、陳者閣下ニハ本日当港より御乗船之由伝聞仕候間、其後打絶拝眉を不果、旁是非とも参館仕度奉存候得共、今に休養中ニ有之外出之義ハ医者より禁せられ居候間、乍遺憾参趨之義ハ御断奉申上候、扨先般来段々金森氏を以テ御高配を奉劳候三田家より同志社大学へ御寄附之件も、当時何ニとも片付不申其儘ニ相成居、殊ニ隆義公ニハ余リ御ハズミ無之様聞及候得共、未タ断然と御謝絶と申訳ニハ無之候、依而願クハ閣下ニも御序之節ニハ充分御賛成之義御勧置被下間敷哉、何卒御尽力之程伏而奉希候、閣下ニハ最早御帰京御急之事と奉察候、海上御無事御安着之程奉祈候、艸々敬白

二月九日

新島 襄

九鬼図書頭殿

閣下

576 二月九日 徳富猪一郎

①神戸諏訪山和楽園 ②東京々橋区日吉町廿番地 民友社 ④墨

湯浅兄、人見兄方ニヨロシク

寸楮拜啓仕候、陳者来ル十一日之盛典は如何アルベキカト乍遠方種々想像致し居候

貴社よりも御出席アルヘシト存候ニ之レナキハ如何、平民社会主義ハ尚未タ容レラレサルカ、将タ御撰ニ当ラサリシカ

過日葉書テ相頼候大学旨趣書、北垣知事ト田中源太郎之旅館へ御送附之事ハ已ニ周旋被成候事ト存し奉謝候、今回御

地ニ出必ラス御尋可仕、京都之伊東熊夫ト申人ハ御存も可有之通、南綴喜郡之一有志家ニシテ旧自由黨員ニアリ、近

時ハ大ニ実業上ニ尽力、又政事上運動之氣慨概モナキニアラス、先府下ニ於而希有之人物ニシテ、矢張平民的之運動ヲ

為ス等ノ事ハ必ラス貴兄之御訓示ニ同意スヘキ事ト存候間、参上之節将来之運動又新聞紙等之御相談モ有之候節ハ、

何卒充分之御加勢被下度候

数日前大坂より通知、純友家住よりハ今回金三千円寄附之事ニ決定致し呉候、此レハ全ク彼ノ実地理財ニ有名ナル広瀬

宰平翁ト当時之若支配人伊庭貞剛氏之英断ニヨルト存候、此両人之決意を以大坂府下之卒先家トナリ呉タルナリ、彼

等世間之躊躇シオルヲ遺憾ニ思ハレ、如斯も此之事業なるを思ハレテ断行致し呉タルナリ、両氏好意之程ハ小生ノ深

ク謝スル所ナリ、此レ維新以来多分之寄附ヲ出シタルモ、三千円ノ高ニ上リシハ初メテノ事ナルヨシ承知仕候、右は

用事ノミ、艸々頓首



二月九日

新島 襄

徳富猪一郎兄

昨日上毛之新井毫被参、将来貴兄方ト共ニ運動シタキ旨被申居候間、向來親シク御交リオキ被下度候

577 二月十一日

小田川全之\*

⑤ 森中章光写

お互に憲法発布を祝賀す

本月五日付の華書慎て拝誦仕候、陳者兼て小生等の計画仕居候大学の企に付、貴兄には大に賛意を被表、已に警醒社に托し金貳拾円御寄附被下候趣御通知、又該社新紙上にも右御寄附之趣掲載有之、御好意の段深く奉鳴謝候、又御親著に關はり候理學協會雜誌第六輯老冊御恵与に相成難有落掌、永く同志社書籍館に蔵め可申候、抑大学設立の事に付可成丈易為き所より相初め、往々工理化学等に及ぼし申度存候間、何卒将来御心添の程奉仰候  
右御礼迄得貴意度、艸々敬白

二月十一日

新島 襄

小田川全之兄  
梧下

尚々、当大学賛成の件に付、何卒広く普く御知人中に御誘導被成下度奉希候

578 二月十二日

不破唯次郎・杉田潮・杉山重義

⑤ 森中章光写、柏木義円写

御互ニ憲法発布ヲ祝賀ス

其後ハ御無沙汰申上候、御地方之近況ハ如何、小生ノ心ハ毎度々々御地方之方ニ引カサレ弥将来之望ヲ属シ居申候、

其後憲法修正ニ付如何被成候哉、定而上毛丈ケノ御相談ニ付キ大体ノ方針ハ御決定ノ事ナラント奉察候、已ニ御存之

通ギユリク氏ヨリ修正意見等ハ諸教会ニ差出ス事ヲ宣教師ノ會議ニテ差止メラレ、其ノ代リニレールネド、デウイス

両氏ヨリ銘々ノ見込ニ応シ其ノ意見ヲ吐露スル事ニ決シ、已ニ其ノステートメントハ配布ニナリシト存候、然シ其レ

ハ甚簡短ナルモノニシテ格別満足ナルモノニアラス、余リ憲法修正ノ助ケニナラスト存候、然シ京都ニ於テシドネ

ーギユリク、デウイス氏ヲ初トシ、四五名ノ先生方ガ修正案ヲ作り委員ノ手ニ迄出セシ分ハ小生モ至極ナリト存候、

此ノ艸案書ハ小崎ノ手ニ一通、伊勢氏ノ手ニ一通参居候間、伊勢氏出發前ドウカシテ其艸案ハ

タク

存候、此義ハ至急古莊氏ニ御斗被下間敷也、若シ右ノ策成ラズバ上毛ノ先生方ノ内一人ハ上京、小崎ニ御面会同氏ノ手ニアルモノヲ一応御覽被成下而ハ如何、何卒一日モ手後レニナラサル様精々御注意有之度候、右ギユリク氏等ノ艸案ハ部会モ総会モ其儘ニ存シオキ、只オーソリテイーヲ与ヘス、教会自治権ハ教会ニ存シ、右ノ三会ノ如キハ只コンミティーノ如キモノニナシ、総テ決議ハデセ、シヨシノ性質ヲ持タシセス、即チアドワイズリーニ為ストノ事ナリ、之ヲアドワイズリーニ為ス以上ハ殆ト純然タルコングリゲイシヨナル派主義ト申スベシ、予ハ大ニ之ヲ賛成仕候  
兄  
先日押川方來訪之上、一致会中ノ内部ノ相談ニテドレ程修正ヲ加ヘ、又出来ル丈ノ勘弁ノ出来タル点ハカク、ト被申候

一部会ニテ教会ヲ建設スト直言セス

即チ Assist to organize or organize <sup>(a)</sup> Adopt or admit <sup>(c)</sup> Church organized

憲法中面倒ナル手續キ等ハ By laws ニ廻ハスト被申候

一 Appeal <sup>(a)</sup> フアッペンギキスニ廻ハン、ドクメナドニ関スル分ハ尽ク除キ、只 Discipline ノ分ヲ残シオキ度よし

一 <sup>(a)</sup> Dicisive 判決 Reference or arbitration 仲裁ニ替ヘタシト被申候

一 <sup>(a)</sup> Decision 判決 Reference or arbitration 仲裁ニ替ヘタシト被申候

如斯被申候上、未タ <sup>(a)</sup> Advisery ニ為ス事ハ尚六ヶ敷ト被申候

押川ノ申分ニ付キ貴兄方ノ御意見ハ如何御知セ被下度候、新ラシキクリードヲ作レト申候ハ合併ノ後ニ為シテ呉

レ、今只言出シテハ六ヶ敷ト被申候、元来押川氏ノ如キハ一致会中尤磊々規律ニカ、又人物ニ候間、同氏一人

ノ如キハ不規則千万ノモノナルモ双方ノ教会協議ノ上ニ而合併ストアレハ、決シテ一ケ人ノ相談ノ如キ輕卒ノ事ハ出来不申候、同氏ハ小生ノ意見ヲ書キテ公然ト出セト被勸候、然シ若シ出サハ非常ノ自由主義故却テ不都合ニナルト存

候

一ギユリク氏修正案ハナニトカシテ是非御手ニ入レ被成候様仕度候<sup>〔下〕</sup>

一武州秩父郡大宮ヘハ御地方ヨリ伝道ニ着手アリ度奉存候<sup>〔御〕</sup>

少々位ノ入費ノ御加勢可仕候

一栃木県下栃木ヘモ佐野ヨリ御着手アリ度奉希望候、又今出サ、レハ将来必ラス其機ヲ失ヒ可申候<sup>〔ノ〕</sup>

又栃木ヨリ鹿沼ヘモ将来手ヲ出スヘキ筈ト存候間、栃木ニ着手スルハ第一着步ナリ、而シテ栃木県下ニ於テ此三ヶ所、佐野、栃木、鹿沼ニ着手スルハ栃木県ノ中央部ニ着手スル訳ニシテ、将来上毛ト連絡セシムルニハ甚必要ノ手段ナランカ、上毛伝道会員中ニテ御英断有之度奉仰候、入費ノ点ハ小生モ御加入可申候、少シモ御猶予ナキ様奉切望候、尤栃木ニハバプテスト派被出候ヨシナレトモ、其伝道者ニ申合セ此方ヨリモ着手スルカヲ申シテ仲ヨク共ニ働カバ、少シテ「モ」故障ハナキ事ト存候<sup>〔ノ〕</sup>

先は三兄迄為御相談得貴意、早々頓首

二月十二日

新島襄

不破唯次郎兄

杉田 潮兄

杉山 重義兄

御協議之上御決定之廉ハ何卒御漏シ被下度様奉希望候<sup>〔ノ〕</sup><sup>〔ノ〕</sup><sup>〔洩ラ〕</sup><sup>〔候〕</sup>

藤岡、佐野之近傍ニ関スル伝道ノ入費ハ何レニテ御取扱ヒナルヤ、東京ノ委員ナルカ、将タ上毛ノ或ル委員ナルヤ御尋申上候、小生ヨリハ大宮ト栃木ヘ着手ノ為トシテ少々ノ金ハ（加勢ノ為）中山、茂木ノ両氏ノ手許ニ相送申候、若シ将来上毛ノ委員ニ差出ス事カ却テ都合ト思召ナラバ左様可仕候

○森大臣ニハ昨日刺客ノ為ニ刺、レシヨシ

## 579 二月十三日 徳富猪一郎

①神戸諏訪山和楽園 ②東京々橋区日吉町廿番地 民友社 ④墨

御互ニ憲法発布ヲ賀ス

一昨日又昨日両回之電報ヲ以テ森大臣云々之事御通知被下、御手数之程奉万謝候、右暗殺之事之原因を見出スニ苦シ  
〔キ〕ニ、昨日大坂公論に大臣之去七日大学職員生徒ニ為シタル演説中甚不穩之語アリ、是等カ或ハ此度之兇変之一源因ニハアルマイカト存し居候、何レ紙上ニ相分り可申候得共、御序ニ實際之所御漏し被下度候

何ニカ例之国粹保存家ナル日本人ニモ大学之企有之候よし、又慶応義塾ニモ大学之御企（福沢氏ニハ少々）可有之候、<sup>又</sup>左上方地方ニは僧侶等カ大学之企をなし、已ニ先日ナド相国寺之得庵老僧カ大坂之藤田氏方へ被参大学ノ寄附ヲ乞ヒ居りしよし、如斯大学が又々一時之流行物之如ク相成り縦令完全之物ハ出来サルニ致セ、自然吾人計画之邪魔ニモ可相成

候間、成丈吾人ハ長足を為し全天下之賛成家ヲ握取スルコソ必要ナリト存候間、貴兄ニハ湯浅兄ト御相談之上何トカ御明案被成下度候

大坂も少々動きカ、リ居候間、早晚好果可有之ト存候、藤田氏ハ矢張賛成セリ、高島中將、児島控訴院長、遠藤造幣局長等は尽ク賛成ナリ○又北浜クラブ之連中も賛成ナリ

神戸ハ少シク渋滞セリ、然シ賛成セサルニアラス、只々多分ヲ出サ、ルノ憂アルノミ

御手数ナカラ東京之方ハ絶ヘス手広ク賛成家ヲ御入レ込ミ被下置度候、右は用事ノミ、早々頓首

二月十三日

新島 襄

八重より御老母様、妻君、御姉様〔へ〕宜シク申上候

徳富猪一郎兄

渋沢氏より本日来状有之、大分我大学ニハインテレストヲ置被下候間、何卒折々ハ御暇ツブシナカラ御交際アリテ其ノインテレストヲ御繋、同氏より他ヲ動カシクレ候様御工風被下度候

二月十四日

永岡喜八

⑤ 森中章光写

容大様御事ハ如何ニ相成候哉御案し申居候、先日大国屋へ相頼オキ候□もしや艸ハ已ニ八重ハ当地ニ而求申候間、至急御断被下度候、錦小路ノ株式取引所之安藤文平氏ニ八重より頼置候公債証書書キカヘノ義ハ如何相成候哉、余リ長引キ三十日ノヨニ成レリ候様ニ被思、万一間違等も出来候ハ、不都合ト存候間、貴君御手数ながら取引所へ御越被成、安藤氏ニ御面会御尋被下度候、手紙位デハラチ明カス何卒御直談被下候方カ宜しきト存候間、懇切ニ御談しオキ先方之意ニ当ラサル様御注意被下度候、然し手後レニナラヌ様御用意被下度候也

二月十四日

新島 襄

永岡喜八様

老母へも 私も段々よろしき方ニ候間、あん心致し呉候様精々御語らひ被下度候

581 二月十四日

大和博\*

①神戸諏訪山和築園寄寓 ②筑後国三池集治監 ④墨

過日は同志社之広津氏迄御書面被下、御地方ニ於而大イニ同志社大学之為メニ御尽力可被下旨承知仕、小生ニ於テモ喜欣千万之至ニ御座候、依而小生より此書面を「以テ特」ニ貴君ニ御依頼申上候、可成丈御地方ニ於テ広ク有志家ニ御面会之上、充分同志社之性質又将来之目的等御話シアリテ懇切ニ其賛翊ヲ御求被下度奉切望候、小生等此兩年之企ハ今日ニ至リ漸ク全天下之公認スル所トナリ、思ヒモ付カサル所ヨリ賛成家ノ起リ来ルニ実ニ驚キ入り申候、天下之「機運」モ亦自カラ吾人之挙ヲ助ケ候ト存シ大ニ元氣ヲ得、弥奮テ此事ヲ成就セシメント覚悟致シ居候、小生ヨリモ過般來監長神原富文君ニモ一書相呈シ御賛成願置キ、又鉾山局長副長之諸君ニモ同時ニ御依頼書差出置キ候間、御面会之上貴君ヨリモ宜シク御頼ミ被下度奉仰候、右御依頼迄、得貴意度、艸々敬具

二月十四日

新島 襄 ㊤

大和博君

尚々、御落掌証之義ハ何卒貴君より之仮受取ニなし置、時々一ト纏ニ為シ敝社へ御送被下度候、而シテ本受取ハ本社より差上可申事ニ仕度候、且御地方之人々ニ満足ヲ得セシムル為ニ一ト纏ニ被成候時ハ、福岡之日々新聞ニ御頼ミ其寄附高人名等ハ紙上ニ掲呉候様被成下而は如何、該紙ハ本社之為ナラハ右様周旋ハなし呉ヘシト存候



582 二月十五日

広津友信\*

⑤ 森中章光写

三池地方之御指名ノ人々ニハ已ニ書面差出し申、且風斗、森両氏ニ已ニ謝礼状ヲ出し、又近日大和君ニも一書差出置申候

同志社全校より憲法發布之祝文ヲ

我カ

天皇陛下ニ奉ルノ事ニ関シ一昨日之ヲ賛成申、至当ノ手續ヲ為サルベシト申上ケ置キ、念ノ為民友社ノ徳富氏ニ問合申候に別紙之電答参り候間、不取敢御知申上候、早々以上

二月十五日

新島襄

何卒祝詞ハ充分立派ニ御書キ立被下度候

広津友信君

別紙予備校之加藤寿君ニ御届被下度奉願候

〔徳富よりの答電〕

シゴクヨロシ、スミヤカニタテマツレ

583 二月十五日

永岡喜八

- ①神戸諏訪山 ②京都寺丁通丸太丁十三番戸 ③はがき ④墨  
⑥日付は表書による。

大学旨趣書并ニ同志社設立始末書各二百部ツ、幸便ニ托し急而御差回被下度奉希候也  
容大様御出発之事御知被下難有奉存候

584 二月十五日

〔渋沢栄一〕\*

⑤印刷

〔前欠〕

又原氏之一件は小生も大に心痛仕居候、同氏ハ初より少々不同意之様子ニ相見申候得とも、種々懇談上大ニ打解ケ、先六千円寄附丈ケハ承諾致し呉候得共、右金は正金銀行ニ入れ置き年々其利金のみ小生方ニ可送旨被申候間、昨年大隈伯集會之節之相談ニハ一切貴行ニ可相願事ニ決定致したれハ、宜しく貴行まで御振込アリタシト申遣候得共其後何之回答も無之、小生も如何可致哉之を屢々之催促ニ及、小子も如何やと懸念仕り、昨年も已ニ井上伯迄其考案を仰き申候事も有之候、甚恐入候へ共該伯御面語之節一応御相談被下間敷哉、本年ハ大学ニ関シ已ニ土地買揚ニ着手シ又生徒外行之事ニ可及と存候、彼是費用も相嵩可申候間、何ニとか原氏之都合も相付き候様切望致し居候先は御礼旁御相談とし得貴意度、草々敬具、

二月十五日

585

二月十六日

井上馨

①神戸諏訪山和楽園  
館憲政資料室所蔵)

②東京麻布区鳥居坂

御親展

⑤写真(国立国会図書

慎テ

憲法発布ヲ祝賀ス

一書拝呈仕候、陳者過日は尊館ニ於而御出火有之、殆半焼ニ及ヒタル由新紙上ニ而承知仕、実ニ驚駭笑止之至ニ奉存候、御家族様方ニハ何ニモ御怪我等無之候哉、其日ハ閣下ニモ多分御留守之御事ニテ、皆々様ハ嘸々御心配被遊候事ト乍遠方彼是心痛罷在候、先は不取敢御左右奉伺度、艸々敬白

二月十六日

新島 襄

井上伯爵殿

閣下

逐伸、尊館御出火之義ニ付、家内義も笑止千万ニ奉存、令夫人様へハ呉々モ宜しく奉申上候

森大臣殿暗殺之件ハ実ニ驚入候次第ニ御座候、小生義モ寒氣之為著しき進歩ハ無御座候得共、先漸々力付候間、乍憚御安慮被賜度奉希候

京都ニ於而先日來已ニ七千坪ヨ大学之為ニ土地買得仕候

586

二月十九日

片桐清治\*

⑤ 森中章光写

過日は御懇書被下置御好意の程千万奉謝候、陳は御地の模様も段々宜敷、学校ハ評判宜しく、教会にも働手参られ大

に御地の為に喜居申候、何卒学校の為に充分御尽力有之、東華之美名に負かざるやう仕度候、水沢には是非貴兄の後任を速に御催促希度候、近來伝道の働滞に流れ易く大に苦心仕居候、又水沢地方には同志社大学の為に募金被下候由、何卒御追手(序)に兄弟まで宜敷御伝言被下度奉希候

貴兄には毎日同志社を御紀念被下候由、実に小生に取り喜欣感佩之至、何卒同校の前途は全天下の仕事を負担仕居候間、日々御祈被下候様呉々も奉切望候

右御礼旁貴答まで、艸々頓首

二月十九日

新島 襄

片桐清治兄

憲法發布を祝す

森大臣の暗殺には実に驚入候、水沢の阿部君に宜敷御伝言被下度奉希候

587

二月十九日

永岡喜八

⑤ 森中章光写

荷物中ニ入置候<sup>〔赤インク〕</sup>「荷物中紙張ノ箱ノ中ニ有之候」別紙花畑、古賀兩氏宛之書状ハ甚大切之モノニ有之候間、貴君自カラ兩氏之内一人ニ御渡し有之、且秘密之件ヲ含ミオリ候間、何卒注意アレト御語被置被下度候、而して右之反物ハ至急烏丸通高辻下ル高島屋迄葉書差出し、序ニ店之若者カ右之反物ヲ取りニ参リ候様御申遣し被下度候、私共別ニ替る事無之候間、何卒老母に安心致し呉候様、又寒氣未タ退き不申候間、呉々も用心致し呉<sup>〔候様〕</sup>御話被下度候、御序ニ尊宅へも宜しく御伝言被下度奉希候、早々以上

二月十九日

襄

喜八君

御遣しの旨趣書等ハ正ニ落手仕候也

588

二月二十日

永岡喜八

⑤森中章光写

神戸之鈴木清君ヨリ百円ノ申込ミ

東京之三好退蔵君當時洋行中より参百円申込ミ有之候

今朝反物并ニ紙箱之中ニ一封之書状、花畑、古賀兩人迄宛之モノハ先後便迄ハ御手本ニ御預被下置被下度候、右差出  
セし後少々別ニ考ふる所有之候間、漸時見合セニ致し度候、然し已ニ御手渡しに相成候ハ、已を得ざる次第なり、早  
々以上

二月廿日

裏

喜八様

589

二月二十一日

小崎弘道・湯浅治郎・徳富猪一郎

①神戸諏訪山和楽園

②東京々橋区日吉町廿番地

民友社

④墨

⑥日付は消印（神戸）による。封筒表書は「徳富猪一郎」とある。

一書拝呈仕候、陳者今回同志社之教授會議より三四名之名義を以而社員へ一通之書を送り種々苦情を申立候付御地之社員方ニも右同断之書類相呈し候様被申候、右申分を勘考仕候に他に非らず、吾人大学之企ニ付、今之本校ニハ一切力を添へさるとの苦情と相見申候、又御存之通教科等も一層高尚ならしむるにモニモなく教員も足らず、此上ハ社員ハ何ニを為し呉るゝやとの申分なり、是は随分困難なる申分に有之、必らず右様之苦情ハ起るへしとハ兼而覚悟之上の事ニ有之候得共、今更別ニ上分別も無之、可成丈出来ル丈ケ之力を以而事ニ従事するのみと存候得共、御地之兄弟方ニ何ソ御明策も有之候ハ、御聞被下度候、何レ京都ニ於ても東京より之御回答之有之次第社員会を催し、一応前途之事を協議致し度ものと存居候間、左様御心得被下度候、幸中村氏も帰京ニ有之、京都府中大学之運動ハ好都合かと奉存候、今回之苦情ハ余程之苦情ニ有之、教員を増加するカ又ハ生徒の員数を減殺すへしとの申分ニ有之候、何卒双方満足の好工風良策をモミ出し度奉存候也、早々頓首

新島 襄

小崎

湯浅 兩兄

御中



590

二月二十一日

杉田潮・杉山重義

①神戸諏訪山和楽園 ②群馬県下上州原市 ③写真（杉田信雄氏所蔵）  
④封筒消印（神戸）は二月十二日。封筒表書は「杉山重義」。

先日來度々書面を呈し貴兄を御勞し申候条別儀ニ非らず、小生之心中尤貴重とする所、自由主義之教会をして我カ東洋ニ永存せしめ度存候処より如斯も度々書を呈せし次第ニ候

貴兄方ニ而已ニシドニ一 ギュリク氏之修正案ハ御一覽ニ相成候哉、聞く所ニよれハ、我カ組委會委員ニハ、來三月四日ニハ委員會を開らぎ、諸方より提出せる修正説ヲ折中して一之修正憲法を制定せらるゝならん、諸方之教会より本月之末迄ニ修正案差出さゝれハ、恐くハ來月四日之集会ニハ間ニ合ハサルベシ、若シ間ニ合ハサルトキハ、必ラス之ヲ度外視ニテ修正之仲間ニ入レサルベケレハ、願クハ上毛地方ヨリハ何事オキテモ本月ノ末迄ニハ諸教会より之修正案ハ御差出被下度候、左ナキハ必ラス上毛ノ意見ハ擯斥セラルベシト心配致し居候、小生ノ心配致し候処ハ、今回モ委員ニハ一致会ヲ憚カリ果斷ノ修正ハ致スマジト懸念仕候、若し我カ自由分子ヲ入レス、教会ノ自治独立ヲ明言セス、又各教会ノ上ニ自ラ權柄ヲ有セシムルノ者ヲ置クカ如キアラハ、吾人ハ斷然吾人ノ主義ヲ固守スルノミ、一致ス

ベキ為ニ我カ自由ヲ大安売スベカ〔ラ〕スト存候、貴兄御注意之為、来月四日委員会之事を預メ御知申上候也、早々  
頓首

二月廿一日

新島 襄

杉田 潮

両兄

杉山重義

591 二月

安部井磐根\*

①京都同志社

②「綱島佳吉氏ニ托ス」

⑤複写（佐藤宇磨氏所蔵）

一書奉拜啓候、嚴寒之際益御多祥奉欣賀候、陳者今回小生より御地ニアル一友人綱島佳吉氏ニ相托シ進呈仕候同志社  
設立之始末、同志社大學設立之旨趣等ニ於而御覽可被下候通、小生義多年計畫仕參候大學設立之件ニ付、昨年中より  
東京并ニ其他之諸大新聞紙ニ托し天下之人士ニ訴出申候処、今ヤ幸ニモ翊賛する所と相成、近畿を初め〔と〕し諸方よ  
り送金又申込等を以大ニ賛意を表し呉候運ひニ立至候、依而貴下ニも右大學之旨趣書等御一覽之上充分此挙を御賛成  
被下度、又広く御知人中をも御誘導被下候様悃願之至ニ不堪候、尚大學計畫ニ付詳細之所ハ綱島氏より御聞取被下度  
奉希候、右為願用得貴意度如此候也、敬白

二月

新島 襄

安部井磐根殿

侍史

逐伸、御手数之至トハ奉存候得共、貴鼎々會議員中御誘導之義ハ貴下ニ而御負擔被下、議員諸君ニも小生之御〔ママ〕請求ニ被応、此挙を御賛翊相成候様奉切望候、尤小生より副議長〔ママ〕矢部君、常置委員山口、谷、柏原、荻宿之諸君ニも一書相呈し置申候

592

〔二月

新島公義〕<sup>\*</sup>

⑤森中章光写

御五ニ

憲法発布ヲ祝賀ス

○森大臣之遭難ニ驚入申候

○前週ニ大阪ノ住〔友〕家氏ヨリ―大学―三千円ノ寄附アリタリ、昨日三好退蔵君ヨリ三百円寄附セラル

先般は葉書を以而伊セ行之御通知相成、又十五日付之御書ニ而詳細此行之事を御知セ被下、貴君ニも今回ハ初めニテ伊セを去りし以来之面白からざる胸雲ハ相霽申候に心得、予も亦為に喜申候、世之人ハ兎角小人輩之流言を輕卒ニ信用スルヨリ人ヲ誤リ、又事ヲ謬ルノ憂ヲ可生候間、中々世間之流言ナドニハ容易ニ信用ヲ置キ難キハ貴君も初メテ悟リシナラン、故ニ貴君之初メノ伊セ行ハ随分将来之修行之為ニナリ、真神カ如斯經驗ヲ賜ワリ〔シ〕カモ知レサルコトト存シ候、右之如キハ中々書物上ニハ得難ク、実物ニ当リ実物ヨリ発シ得ルモノナレハ、貴君身ニ受タルコトヲ此レヨリ貴君ノ生涯中他人ニ受ケシメザル様御注意アレハ、伝道者ノ職分トシテ人ヲ導クニハ甚必要ナル手段ト存候間、呉々モ貴君ハ修行之一端ト思ヒ却テ御喜有之度候也

伊勢ニ於ても今ト成ツテハ貴君ノ御働キヲアツブリシエートスルナラント存シ候間、右之事ニ付該地之人ニハ一言モ御吐キ不被成様仕度候、又可相成は度々該地ニ御出張アリテ已往之事ハ更ニ意ニ介セサルコトニナシ御交際

〔後欠〕

593

三月一日

不破唯次郎

⑤写真（末広吉之助氏所蔵）

御書拝見仕候、陳者貴兄ニハ愛令閨<sup>\*</sup>をして天国ニ趣かしめしより以来、態々諸事御不自由御困難、時々ハ御失望も可有之ト遙察仕、ディヴァイングレース之貴兄之上ニ止り、貴兄を慰め賜はん事を奉折候、扱先日ヨリ上州地方之兄弟

ニハ屢書を呈し、先ツ上<sup>下</sup>毛ト連絡を通し、我カ自由主義之運動を試度存し中山兄を奨励致し置き、先日來別途伝道費として金十円、又秩父郡伝道之為としても茂木兄の方ニ金八円遣し申置候、将来御送金申候時ハ何人ノ方ニ御送申候か御都合ニ可相成や御序ニ御知被下度候、我輩ヨリハ武州ニハ一切着手無之候間、セメテ秩父郡丈ケデモ我カ輩ヨリ着手致し度事ニ候、又将来も不及ながら伝道費之御加勢ハ致し度奉存候、右は願クハ伝道会社ト御地方之諸教会ト一有志家なる小生ト三方之手ニ而之ニ從事致しテハ如何、小生之見込ニデハ該地ハウマク参候ハ、直ニ自治自助し得へしと存候、是レハ是非トモ上毛諸教会之御働ニ而上毛ト連絡を通せしめ度奉切望候、倉ヶ野ニ横浜之女教師カ来り伝道する云々之事ハ已ニ耳朶ニ達申候得共、該地ハ他人之手ニ入ラシムルハ得策ニ非らず、松本氏<sup>\*</sup>も有之事故我組合会之仲間ニ入置度候

一致之件ニ付、吾人之望ミ通りニハ一致会の方ハ承知セサルベシ、左スレハ一致合併ハオボツカナシ、我カ方ニモ腰ヲ屈シテ合併スルノ理由ナシ、近頃同志社教会中ニ盛ニ我カ自由主義ヲ維持シテ、此レハ一致会ニ限ラス他会トモ極ブロードナルエヴァンジェリケルエライヤンスを組織すへしと切論スルモノ有之候、小生モヘタニ我カ自治主義ヲ屈シテ御付キ合ノ様ナル一致を致スヨリモ、寧ロ今之エライヤンスを為し、諸教会間互ニ氣泳<sup>〔泳〕</sup>ヲ通スルニ却テ得策ナラシカト存候、何レ近々同志社中ニ鬱積シツ、アルエライヤンス論ハ、世間ニ公発スベシト存候得共、小生よりも預御参考之為御通申上候、近々磯辺<sup>〔部〕</sup>ニ御集会之節ハ何卒此事モ御勘考中ノ重大事項ニなし置被下度候

御存之通小生ハ上方ニアリ同志社学校ニ從事致シ居ルモ、特リ教会ノ運動ニ至リハ小生ノ心ハ常ニ上毛地方ニ走り申候、貴兄等ニモ何卒小生ノ心緒御洞察被下度候、右は貴答迄、早々頓首

三月一日

新島 襄

不破唯二郎兄

何卒杉田、杉山、其他之諸君ニ宜しく御致声被下度候、河波君ニハ奈須氏之後を負擔せられし由、実ニ困難中不絶プロヴィデンス之吾人を助賜ふを奉謝候

御申越之ノイズ氏来上之事ハ当人カ承諾サヘアレハ差支ハ無之事ト存候得共、此レハ一応アメリカンボールドノミシヨント御照会アリタル上ノ事ニ被成候方か至当かと奉存候  
同志社大学之事も宜しく御依頼申上候

594

三月二日 山岡邦三郎\*

⑤ 森中章光写

其後ハ御地方の事聞ク所ニヨレハ貴兄ニハ近々ニも高松ニ御移転之由、イツ比御出發被相成可申哉、万一御地之御都合出来候而速ニ御出發出来候ハ、直ニ高松ニ御越し被下様仕度候、其理由ハ他ニ非ず、近頃該地ニ県会相開ク様子ナリ、願クハ開会中該地ニ而一応同志社大学之為之演説致し度候間、貴兄ニシテ御来高之上ナラハ至極好都合ト存候迄也、右御来高之時日御尋申上度如此也、早々以上

三月二日

山岡邦三郎兄

神戸諏訪山和楽園  
新島 襄

尚々、妻君ニよろしく、且又中村君初御地之兄姉方へ宜しく御伝言被下度候也

595

〔三月二日

新島公義〕\*

⑤ 森中章光写

御遣し之奈良漬ハ一昨日来到難有収納致し候、右御礼迄如此候也  
八重よりもよろしく

神戸  
新島 襄

596

三月五日

徳富猪一郎\*\*

① 神戸諏訪山和楽園

② 東京々橋区日吉町廿番地

民友社

④ 墨

華墨拝誦仕候、陳者御申越之伊勢大廟云々之事共其ニ驚入たる次第ニ候、我カ同邦之如斯も変化易く如斯も飄々たるは甚与ミし易くして、到底我東洋ニ鍊腹男子なる彼ノピーリタン人種ハ出来さる哉ものやと毎々疑念を抱き居候、乍去數百年之星霜を経ハ或ハ難期事とも存し不申、只今日ヨリハ其準備ニ着手いたし度候、其着手ハ先吾人をして真之自由教会ト自由教育を得せしめよ、此二件ハ車之兩輪あるか如く是非トモナカラネハナラサル者と確信仕居候、其ニ付けても御心配被下候例之一致事件も我組合会中錚々たる者ハ、意外ニも自由論者ノ版図内ニアラサルカ如ク実ニ近來殆ト説明ニ困ミ候現象とも可申候、世人カ兎角自由を論して実ニ自由を味ハさるは意外之事と存候、将来を深く慮カリ候ハ、只一致之為ニ吾人ノ自由を寡人政治ノ中央集權ニ犠牲ト為すハ遺憾千万ナリ、我カ党之中ニも兎角事物ニアキ易ク、一時熱度熱ヲ高メテ喋々スルカト存スレハ、イツノマニカ淡泊ニ冷胆ニ他人ノ誘導ニヨリ容易ニモ反対ノ地位ニ移転スルモノガ出来ハスマシキヤト甚心配仕居候、若し一致会ニ而吾人ノ申分を容レサル上ハ、断然ト一致ヲ止メ他ノ教会赤丸を誘導シテエヴァンジエルエライヤンスヲ主唱致度候間、「此一点ニ貴兄ノ御意見ヲモ拝聞仕度候」内人見、池本之両氏ニハ充分貴兄より御申含、万一関西より右ノ議論ノ起リ来ルトキハ、関東ニモ充分ニ応援致し呉候様御準備有之度候、返スノも貴兄ヨリ此両氏ニハ一致ヲ止メテエヴァンジエルエライヤンスヲ主唱赤丸致し呉候様御勸置被下度候、青木子ニハ我カ自由主義を賛成被致候や、御書面中ニハ右様承知仕候得共、少々御文意解し難キ様ニ見受申候

小生ニハ飽マテ自由主義ヲ屈ケテハ一致致し度無之候

大学之件ハ別ニ著しき事ハ無之候得共、金森氏ハ大坂ニ而四分五裂之中ニ奔走致し、当時殆纏リ参候様ニ見受申候、其準備ニ大ニ骨折レ甚其結果ハ「尚未赤イシケタ」相見不申候迄ニ高島中將、建野知事、児島控訴院長等之催ニ而一集會を可



相開ト屈指待居候、其節は小生も出張之積ニ候、当港ハ未タ著しき結果無之只今県會議員中ニ小生ヨリ着手致し居候、又大坂之出来次第当地之紳商ニ訴ヘ可申胸算ニ有之候、又外国商人ニも着手之心得ニ而已ニ横文之主趣書數百都ハ用意致し居候、只今ハ米國英國獨國等之領事之回答を待居候次第、二週前ニイヨノ今治松山等ニ一人出張セしめしに纏方意外ニ宜シク候、金森氏ハ五六日前和歌山ニ出向キ昨日帰坂之よし、小生出京之事を御促被下候間、是非貴命ニ順ヒ度存候得共、八重カ未タ不同意を唱居申候、彼ハ小生ニ取り大警視を以而自任仕居候

同志社ノ教授会より何ニカブウミニ申立参候、眼前之事ノミを見る先生方ニハ大閉口、<sup>〔赤インク〕</sup>「然し又」之ヲ満足せしむるも大切ニ候ハ、何ソ工風<sup>〔赤インク〕</sup>一致し、是より非常之果斷ニ取懸候も難計候、来秋<sup>期</sup>月謝を毎期ニ四円五十錢ニ増加するは少々懸念致し居候得共、如何御考可被下也篤ト御熟考被下度候、又下村君招聘之件丈ケ速ニ御回答被下度候、先は為貴答得貴意度、艸々敬具

三月五日

襄

徳富猪一郎兄

机下

尚々、青木子ニして若し一致之件ニ何ソ御意見アラハ、御聞セ被下度奉希候よし御序ニ御漏被下度候

大隈、井上両伯ハ不相替御面晤被成下、充分ノインテレストヲ御繋置被下度候

小生も二月上旬以来先風邪ニも罹ラス先退歩ハ無之候間、御放慮被下度奉希候

○九州ニ而大同団結之不成ハ御胸算通ト奉存候

○新井毫御尋申候ハ、何卒厚く御交際被下度候、当人ハ実着的平民主義を取候もの也、先般も備后辺ニ而大ニ

独立的平民主義を演述被致候よし、彼一奇人ナリ、上毛ニ而運動を試可申よし、貴兄ト湯淺兄ハ余程信用いたし居候、先日も談判中新島宗を上毛ニ主唱すへしなど雑談を吐居候

○呉々も人見、池本兩氏ニハ一致之件ニ付容易ニ動カズ、自由主義ヲ曲ケテハ決シテ一致セサル事ニ御決心可有之様、又青年中此之議論を拡張被致候様、貴兄より御奨励御誘導御薰陶有之度候也

597

三月七日

中村栄助

④墨

貴墨拝誦仕候、陳者貿易会社之御都合も宜しきよし大ニ喜欣奉賀候、御尋之鵜飼氏ハ大分精神家之様ニ見受又甚困究之よしニ候間、小生より少々援助いたし候に、其后同志社ニ入之資格もなく、又余リアチコチヲ弁し廻ハリ格別ニ勉強ハ致さ<sup>レ</sup>ざる様ニ見受申候間、小生も昨夏以来一切扶助ハ不仕候間、左様思召被下度候乍御手数別紙ハ上野栄三郎君ニ御渡し被下度奉希候也

御宅へよろしく奉希候

兼而御配慮被下候同志社大学之件も、御手スキ次第随分京都管内ハ御負担被下度奉仰候也

先は貴酬迄、艸々頓首

三月七日

新しま襄

中村栄助兄

梧下

598

三月九日

下村孝太郎\*

④墨

過日中村栄介氏〔助〕帰来被致、貴兄之御伝言拝聞仕候

当時大坂神戸此近県ニ而金森氏奔走、大学之為寄附ヲ募リ居申候、随分此事ニハ骨折申候

骨折多クシテ結果ハ却テ少シ、乍去早晚吾人ノ目的ハ達シ得ベシト存候

先日来一書可呈心得ニ存候得共、貴兄御招聘之件ニ付、先日京都ニ而上方丈之社員会を開かしめ、同志社より改而御招状を可差出事、貴兄ニ可呈月給、御帰国之旅費、又御留守宅ニ可呈分等之事ニ付相談致さしめ、而して其決議を在東京之社員迄申通し其回答を待居候処、折悪しく小崎兄東京不在故か今に其回答不来、然るに今回米国ニ幸便も有之候間、一書相認め申、必らず同志社ニ而再御尽力被下候様社員も切望致居候間、先同志社之招聘ニ御応し被下候様御決心有之度候、尤後便迄ニハ東京之回答も可来候間、尚改而御招聘書差出可申候間、最早御知承諸被下度奉希候、右は

不取敢得貴意度、艸々敬具

三月九日

新島襄

下村孝太郎兄

一 先般は縷々之御書面被下難有奉謝候、已ニ前書ニ申上候通、レールネド氏之一友人（ニューロンドンノ人）  
一万弗<sup>（サイエンス）</sup>スイヨンスホール之為寄附致し呉、又続而五千弗寄附相成り、又殊ニより候ハ、サインテフィクデイ  
パルトメントノ為メニ五万弗ノ寄附アルトモ難計候\*、左スレハサイヨンス拡張ノ為ニ大ニ勢力ヲ得可申事ト  
存候

一 過般御申越之湯浅兄（吉郎君）招聘之事ハ、小生ハ兼而より志願致し居候間、先便ニも一個之見込丈申上候  
次第、先日社員会ニカケ相談を求メ置キ候得共、何ニカ本校之資本ノ都合カ充分ニ出来ヌトカ申事ニテ、未  
タ判然不仕候

貴兄御申越之神学拡張ハ至極御同意ニ御座候

東京之社員之回答次第御留守宅之方へも幾分ノ金子御進呈可仕事ニ相成可申候

一 先日家永君より写真ト書面送り被下落手候間、右御語らひ被下度候

三月十一日

中山光五郎\*

⑤ 森中章光写

貴兄の進退は宜しく上毛の兄弟に御計被下度、又後任の来らざる内は何卒他に御移転ナキ様仕度候、何卒大胆にカマヘ将来ノ大計ヲ立賜ヘ

御申越之為替証ハ先日已ニ誤正願さし出オキ候間、定而御地ニ回ハリ候事と奉存候、然し念ノ為本日郵便局迄催促書さし出申候、貴君若松行ハ貴君御承知もなきに、右様命令然として貴君を左右するとは聞ヘさる所也、近来伝道委員之所業を察するに、一定の計画もなく新地開墾の手段は施さず旧地保守の手段のみ、錢はつかはず寄附も多分に募られず、如何にも長足を以て進むの政略は為さるが如し、殊に貴君の着手せられたる佐野の如きは栃木に近接し、栃木に伝道する便ありて真に栃木中央の地を占めたりと云ふ可きなり、之を根城として他日の計を為すは実に栃木県下一円に伝道するの良策と云はさる可らず、小生の兼てより上毛の兄弟に御勧め申候は、上毛下毛は大に平民の多きを占むる地方なれば、平民自由自治主義の教会を培養するは我が東洋此二国を除きて何れに之を求む可きぞ、又上毛下毛は生産的の地方なり、独立自治の教会を設立するは此ノ地方の如く望を属ス可キハ又他にアラサルベシ、生ハ武州秩父大宮ニ着手せられん〔事を〕上毛の兄弟に勧めタリ、秩父モ亦生産的ノ地方ナリ、随テ自治教会ヲ起ス可キ地ト認め候間、小生ハ飽迄モ該地伝道ヲ御勧め、又殊ニ上毛ヲシテ下毛ト連絡ヲ通し、両毛大運動ヲ計ルニ時機已ニ至矣ト申スベシ、即鐵路一条両毛ヲ連絡スルノ手段トナリ、吾人ニ与フルニ進テ取ルヘキ時機ヲ以テセリ、此時機ニ臨ミ

ナガラ之ヲ取ラサレバ、下毛ハ遠カラズ何人カノ有に帰し、上毛の兄弟ト認ム可キ下毛ハ恐クバ吾人ト異主義ナル教會員ノ手ニ落ツ可キハ明白ノ事ナルベシ

此ノ良地方ニ根拠ヲ占メ此好時機ニ投シテ将来ノ計ヲ為スニ当リ、之ヲ捨テ他ニ転セヨトハ伝道委員ノ御胸算ハ何レニアルカヲ知ラス、チト前途ノ策ヲ誤ルモノニアラサルナキヲ保証シ難シ、小生ハ兼テヨリ両毛聯合ノ説ヲ主唱シ、是非トモ伝道上ノ連絡ヲ試ミント企居候間、貴君ノ若松行ハ甚不賛成ニ有之候、若松ハ他人ヲシテ行カシメ、貴君ハ御地ニ止マリ前途ノ策ヲ緩タト立テラレテハ如何、速ニ結果ノ見ヘサルヲ以テ意ト為シ賜フ勿レ、播カヌ種ハ萌エヌト申シテ、当時貴君ノ働キハ種播ノ時代ナリ、本年播キテ萌エサレハ尚一年試ム可シ、来年萌エサレハ尚一年ヲ試ムベシ、是レ小生ノ熱心ニ御勸申ス所ナリ、先ハ貴答迄、早々頓首

三月十一日

新島 襄

中山光五郎君

先日代人ヲ以テ為替証ヲ差出候故、代人カ名前ヲ誤リ右之不都合ヲ来セシナリ

600 三月十三日

海老名彈正

⑤ 複写（海老名道子氏所蔵）

過日当港御来着之上直ニ御尋被下候処、折悪しく他出致し居（大学之事ニ関シ）御来訪をして空ふせしめしハ遺憾之至ニ奉存候、兼而御尽力被成候御地学校之事ニ関シ種々拜聞致し度次第も有之、今回拜眉之不相叶ハ残念千万ニ奉存候

却説茲ニ一之願分有之、是非とも貴兄之御採用を相願度一事有之候、ソハ他事ニ非らず、京都府知事北垣国道君之令息確君<sup>カタシ</sup>と申すを貴校<sup>\*</sup>ニ差上、九州之極質朴風ノ御仕立を蒙ラシメタキ事ナリ、同君ハ知事公之御依頼ニ応シ一昨年来予備校ニ御受申候に、兎角不勉強ニ有之、時□申上候ハ錢遣ヒ荒らく毎々私共ニ心配を相懸申候間、今回広津友吉等之発議ニよりは是非九州ニ遣し貴兄之薫陶を受けしめ、且九州之質朴なる境遇ニ置かば自然之療治自然之勸化<sup>（感）</sup>ニ被化、又挽回之望も可有之候間、確君を救はんとならば断然之御所分アレト北垣知事ニ御勸申候ハ、知事ニも至極同意、貴校ニ御依頼申上度旨被申候よし、同君ハ非常之難物と申程ニハ無之、余リ家力近き所より、錢を遣ひ過せし時ハ内愛母より姑息之所分有之ニより、子供を腐敗せしむるの弊を生し、今日の不都合を来タシたるならんと存候、甚御迷惑ニも可有之候得共、誰ソ嚴重なる人物ニ御托し置キ蔽ニ濫費を防ぎ、且勉強生之中ニ入置かバ自然勉強も可被致候間、三四年なり共少々位後レ候共、貴校卒業迄御試被下候様仕度候、北垣氏ニハ是非御遣しの事ニ御決心之よしなれば、何卒御引受御薫陶被下候様仕度奉希候、右ニ付乍御手数も至急御回答被下度奉仰候也、早々頓首

三月十三日

新しま襄

海老名弾正兄

尚々、先般は御土産被下難有奉謝候、八重よりも宜しく申上候

601

三月十三日

近藤喜則\*

⑤森中章光写

過刻は御来訪被下鳴謝之至ニ不堪候、即チ御依頼申上候所之大学旨(意書等御好意ニ任セ数十部差上申候間、何卒広く御志人中ニ御分配被下度奉仰候、早々頓首

三月十三日

新島 襄

近藤雅兄

机下



602

三月十六日

目賀田護法\*

⑤目賀田護法書簡（七月二日付新島襄宛）中に目賀田が筆写しているもの。

御書拝見仕候、陳者金森氏参堂之事ニ付、兼而同氏に申通置候間、早晚御伺可申事と奉存候、同氏の如斯在再是迄遅延ニ及候は、何分多忙ニして其都合も得ざり事ならん（し説カ）と奉存候、貴論中此両三日中同氏の参堂を御促被成候得共、同氏ハ当時此地ニ不在ニ候間、直ニ貴論ニ応し候事ハ到底相叶難き事と存候、左レハトテ拙寓迄御来訪之義ハ固く御断申上候間、左様御承知可被下候、尤同氏方へハ本日幸便之序ながら御来示之事ハ相通可申候間、同氏参堂之事ハ何卒同氏之都合相叶候迄御待有之度候、早々貴答

三月十六日

新島 襄

目賀田護法殿

603

三月十九日

徳富猪一郎

①神戸諏訪山和楽園 ②東京々橋日吉町 民友社ニ而 ④墨

先達而貴書を賜ハリ、小生より何ソ書書を十冊又多少ニ及ふも御送り可申旨御申越〔書〕相成候得共、御存之通小生此三四年ハ全く病氣之為ニ侵サレ、其余力ハ学校之為、又殊ニ大学之為ニ費シ居、別而書藉界ニハ身を寄不申候間、乍遺憾御求ニ応し難く候間、此際御免可被下候

先日は態々電信を以而婦人音楽会之景況御知セ被下難有奉謝候、甚恐入候得共湯浅兄ニ御頼ミ、渋沢君之方へ益田孝君ニ可呈請取証二千円を二分して一千円ツ、ニなし置被下度候、同氏ニハ已ニ一千円を入レ、他之一千ハ来六七月之比ニ可納よし、何卒湯浅兄より之を二分するの勞に預り度奉希候、何卒湯浅兄ニハ、若し渋沢君ニ御面会あらば原六郎君より呈せし書面ニ対し小生より詳細弁解可仕候間、同君ニハ御心配被下間敷様御通し被下度候

後藤内閣ニ入るの事ハ如何思召され候也、将来大同団結ニ如何程之影況あるや、之を知り度存候、同志社大学之事ニ関し将来東京之運動ハ如何可致也篤ト御工風なし置被下度也、彼福沢先生之計畫ハ如何、近報ハ御知被下度奉希候、金森氏ハ名古屋ニ在リ近々帰坂致し、来廿五日大坂ニ而一会相開可申候、児島、高嶋、遠藤、建野等之人士ガ府下之紳商に對し尽力致し候事ニ相成候、建野氏之転任ニ付き多分後任之西村氏ニ臨席を求むる事ニ相成可申候、先は用事のみ、早々頓首

三月十九日

新しまゝ

徳富猪一郎兄

三月二十日

石田貫之助・内藤利八・鹿島秀磨・善積順蔵\*

⑤ 森中章光写

拝啓、陳者過般諏訪山迄御光来を奉仰候処、御前約有之候趣ニ而御断相成遺憾此事ニ候、依而本日乍粗末晚餐を奉呈度候間、午后第五時を期し諏訪山一力亭迄御来車被下候ハ、大幸之至ニ奉存候、右各位迄得貴意度、艸々敬白

三月廿日

新島 襄

石田貫之助殿

内藤利八殿

鹿島秀磨殿

善積順蔵殿

尚々、右様御連名ニ而御招状相呈し候は甚失敬之至ニ候得共、実は四君共御協議之上御操合被成下、御揃ニ而御光来被賜候ハ、大慶ト奉存、如此も御連名ニ而寸書奉呈候次第、何卒不惡思召被下度奉希候

605

〔三月二十一日

原六郎〕\*

④墨 ⑥草稿

数日前渋沢氏より来状有之、同君より貴殿ニ向ケ同志社資本募集之事ニ付御督促申上候処、貴殿より右ニ対し御貴書被差出候写を回ハシ、右拝読仕候処、御文中小生ニ対し其意を得サセラレ〔ザル〕様承知仕甚驚入、且右様事之成り来申候ハ全く小生之手技より生セシ候事ト認め、一応御弁解可仕候間、御了察之程奉仰候

一六千円御寄附御依頼申上候事 貴殿ニハ御承諾相成候

一右金子ハ大隈伯官邸ニ而寄附金相成候上、寄附承之御申合ニ而来十一月迄ニ委皆第一銀行ニ振込之事  
(悉)  
 是は全く両伯之御周旋ニより右様相達申候事

此事相定候上、小生共ニハ直ニ工風致し、此之利子一千五百五十円  

$$\begin{array}{r} 31,000 \\ 5 \\ \hline 155,000 \end{array}$$
ト相成候ハ、先第一ニ可然同志社出身

之書生徒中錚々たる者を独乙之大学ニ送り、将来ノ教師ヲ仕立ベシト存候、右外又其余分ハ創業費ニ充タスヘシト存候、十一月中ニ委皆一ト纏ト相成候ハ非常之好都合ト存候次第、又右利子ヲ以テ都合アラハ出来得ヘキ丈ケ土地を求メオキ度存候

右計画ハ本年中ニ決行致し度存候、資本ノ一ト纏ニ相成候事ヲ大ニ切望致し候

又資本を一手ニ纏メ置く時ハ、文部省より将来同志社を認可学校ト為スノ日ニハ資本若干円ハ慥ニ某銀行ニ入置キ、同月より同志社之資本トナリ、一年中ノ利子ハ若干金同志社所有金として、其探索ヲ受クルトキニハ諸事タンジブル

ニ有之候ハ、大ニ好都合ト存候廉モ有之候

小生帰京之後此ノ件ニ付

前上二件之内第一件ハ多分去年十月中拝眉之際御談申上タルト存候、第二件モ後ニ至リ益重要ノ事件ト相成来候

昨年御来状ニ付キ小生より御回答不致を以而、貴殿ニハ甚御不審トモ思召サレ候事ト存し候

右之事實ハ左記之次第ニ御座候

資本を一ト手ニ集め其利子を以而直ニ運動を初め候事ハ、井上伯ノ頗る御承知被下候所ニ有之、貴殿殿より御申越之件

ニ付如何可仕也、実ハ同君迄御伺申上、又小生之意見等も申上、可相成は同伯ニハ初より之事情逐一御承知之上、原

君ニ御面会之節ハ御話し置被下候旨願上、又其比北垣知事ニも東上被遊候間、多分右之事ニ関し小生ノ所望を願上候

事ト存候、旁以井上伯より之御回答を待居、何ニとか御返答可呈積ニ有之候逐々処遅延ニ及ヒ申、又同伯ニハ实ニ我カ物

ノ如クハ御周旋被下候間、必らず貴殿迄御照会被成下事ト信し居、去二月之比渋沢君より或ル友人氏ニ頼し御伝言有之

候節、兼而御依頼之寄附金ハ未タ悉皆手許入ラス云々、依而小生より同君迄一書ヲ出し、乍御手数も御払込なき諸君氏

ヘハ御督促可被下旨申遣し候節、甚心くなし候も貴殿より之御引キ合セ有之候事ヲ打漏らし候故、渋沢君ニハ其前大隈

伯官邸之決議ニより自身ニ引受ラレ候事処も有之、是非該行迄例之三万百一千円ハ相談之通御取纏被下度被存、屢諸士ニ

も御催促ニ被及候次第、又小生よりハ別ニ故意アリテ渋沢君により貴殿御払込を御督促申ス訳ニも無之候得共、小生

よりの御通し漏らし、又同君之敝社之為ニ熱心ニ御尽力被下候処より、大ニ貴殿之御心情中面白カラヌ御感情を惹き

起し候事かと存候、右様御思考ニ及ヒタルハ御尤千万ト存候、又小生ノ手落ニ痛ク讀メ、小生之通知ニ怠りしより

右様渋沢君迄御迷惑相懸ケ申、両君ニ対し実ニ汗顔之至ニ奉存候

前陳之如き種々ノ行違ヒより貴殿ニ於而も小生之所為甚不当なりと御認被成候ならん、乍然右様相成は小生ニ於而  
只々金サヘ取ラハヨヒナドノ考ヘハ毛頭無之、只々熱心ニ大学之前途を計画致し、一日も早着手致し度キ処より種々  
心配致し、又病中之事故兎角諸事手落ニ相成易く○

京都之本部ニ書記一名ハ置申候得共、小生之手許ニ参候ハ、書簡小生病中〔カ〕乍も一手ニ自引受居候処より、諸事不行  
届之段等も有之次第

今回之不都合も多分此レ等ニ原因致し居候訳ニ□、小生ハ貴殿ニ対し更ニ決而 ungrateful feeling ヲ抱キ候義更ニ無之  
之予備校御寄附以来実ニ貴殿は吾人之恩人ト思ひ、末久く御交際を仰き度存し居候ハ、無理促催を昨年来之間違よ

り為し、金サヘ受取ラハヨヒナドノ念慮ハ更ニ無之、何分逆鱗ニ触る事有之候ハ、小生ニハ只々御再考之上御勘弁  
被賜ト開陳致候ノミ、殊ニヨリ候ハ、小生四五日中ニハ一応上京致し度心算ニ候間、拜眉之上縷々開陳可仕候

606

三月二十六日 加藤寿\*

④墨

一書拝啓仕候、陳者当地方ニ於而段々同志社教育之方針ヲ賛成スルモノ逐々相見ヘ、先日も当県之書記官木場定長君  
来訪致サレ、是非とも其姉之子鎌田某を同志社ニ依頼致し度旨、尤東京ニハ差出スノ見込ミ無之趣被申、可相成は予

備校ニ来期より入校致シ呉レトノ依頼ニ有之候得共、當時ドノ位迄進ミ居リ候哉相知兼候間、甚御面<sup>〔御〕</sup>到ニ候得共、来期之科目ノミナラス、詳細ニ何々読本、算術ハ何ニミミ、漢書ハ何々ト御記し、又一二之入学志願者ハ入校相叶可申候也

同志社大賛成人より之依頼故、何ニトカ御都合ハ出来間敷也、何レ塾舎ハ何員なるヘシ、若シ入学相叶候共、外宿ならではなるまじと存候、通学デモ入学ハ相叶可申也、タツテノ頼ミニテ如何ニモ拒絶ハ難成、一応問合可申ト申オキ候間、至急御知セ被下度候、兩人共入学志願之者ハ只今高等小学卒業致し候まゝ也、此人共が直ニヨビ校之第三期ニ入学ハ相叶可申也、一寸御答被下度候、先は御問合セ迄、早々頓首

三月廿五日

加藤寿兄

新しま襄

先日金子之見込有之候処、只今何分勝手ニ仕用致し兼候、大ニ困却申居候、前文之義ハ加藤勇次郎兄と御相談被下度候也

607

三月三十日

徳富猪一郎\*

②三条小橋 万屋方 ④墨

昨日ハ御来訪被下奉万謝候、小生共今午后帰宅仕、明日ハ山田君御同伴ニ而御来車を奉待上候、尤御来訪ハ午前午後ニ限らず御都合次第ニ被成下度候、早々敬具

三月卅日

新島 襄

徳富猪一郎様

御双親様ニ宜しく御致声被下度奉希候

608

三月三十一日

海老名弾正\*\*

⑤複写（海老名道子氏所蔵）

一昨夜発之船ニ而神戸より被参候北垣知事之令息確君ニ極匆卒之間一書を添へ貴兄ニ御紹介申上候間、直ニ貴宅迄参



上被致候事と存候、右確君ハ一昨年より同志社ヨビ校ニ御遣しニ相成候処、何分勉強心ニ乏しく、又家も近辺ニ有之候事故、兎角我カ儘起し神戸辺より被参候錢遣ひの荒ラキ少年輩ト一緒ニ被成乱費之弊を生し、旁以勉強ニ不熱心ニ被相成、何ニとも不都合之至、広津友吉君之工風ニ而熊本辺ニ被参候ハ、境遇宜しかるへしと被申候間、小生も大ニ賛成致し知事ニも相勸メ御依頼申上候次第、先般も一書相呈し御依頼申候処、其後御回答無之候処より、或ハ御不承知ナランカト存し少々心配致し居候に、同令息ニハ已ニ神戸迄被参候よし、又貴兄より電信ニ而差支なしと被存候と存候、何分如此已ニ発途被致候事ニ候ハ、御引受ケ、九州男子之精神と御吹込ミ、又直朴之風俗を御見習被下度、入校中極質朴ニ御仕立御地方之生徒ト一樣ニ御取扱被下度奉希候、小生ハ知事ニ勸メ今回コソハ是非背水之策を為し賜ヘト申候

若し貴兄之御薫陶ニテ挽回之望出来候ハ、乃一人を救ふのみならず、一人之有志者を基督教ニ導き得へく、又仮令信仰せざるとも基督教々育之賛成人を得候、随而基督之光輝を社会ニ放チ得へしと存候、元来吾人ハ金ニ頼ミ人間ニ頼マサルハ申迄も無之候得共、北垣知事之如き人物（熱心家）之好意を繋ぐハ同志社之運動ニ取り隠然助クル所甚多シ、右様青年ヲ助ケテ其父之心ヲ繋クハ基督教々育主義を社会ニ拡張スルノ良手段、否公平ナル所分ト申スベシ、又ハ基督教々育義之力ヲ社会ニ証拠立ヘキ事ト存候間（此ノ事ハ貴兄ニ向ヒ申迄も無之候得共）、何卒此青年薫陶ニハ一しは御尽力被下度、又何人カ校中之可然人物を御托し置被下度、又計会之事ハ貴兄なり又幹事之御手許より御負担被下、当人ハホンノ小遣ヒノミ御渡し、校ニ納ムルノ金ハ全ク御預リオカレ当人ノ手ニハ御渡被下間敷候

過般貴校ニ対し鄙見を吐キ置候事ニ付キ未タ御確答も無之候間、定而尚御勘考中之事たるへしと存候、右様ボシティヴに為すは危嶮之場合ニ立至るも難計候得共、之ヲソポルトする校友を作り置き、金と人とをソツプライせしむるの

策なり、乍去紫溟会之如き挙動ハ飽までも度外視シ置クニ如カス、彼等ハ余リ長キ命脈ハアルマジト存候、何卒是より隠然ト士を養ふの大源となし永久之策を立賜はん事貴校ニ切望する所也、早々頓首

三月卅一日

新島 襄

海老名弾正兄

此書未タ封せざる内ニ貴書来着拝読仕、北垣之為御工風御負担可被下旨、同氏之為ニ大ニ喜ひ又小生も難有奉存候、何卒充分九州男児之元氣を御吹込ミ被下度奉切望候、学資金之事ハ宜しく御預リ被下度奉仰候、妻君ニ宜しく八重よりも申上候、過日御尋被下候処折悪しく外出致し居甚残念ニ奉存候

609 三月三十一日 中村栄助

①寺町丸太丁 ②京都五条橋二丁東 ③はがき ④墨 ⑥日付は表書による。

御家族様方ニ宜しく

昨午后帰宅仕候、当地ハ神戸より尚寒冷ニ有之候間、此兩三日ハ外出ハ見合申候積ニ御座候、先ハ帰宅之事御報知申上度、艸々以上

先日貴書落手仕、勿々御回答可申筈候処、小生も昨年十二月中より神戸にて宿痼休養致居、昨日帰宅候故を以て該地は拾日余り奔走は不致候得共、来人応接に繁忙、又同時に大阪並に此近県に着手致し、病中ながらも及ぶ丈ケは手紙等負担致候、此十日間是非常に勉強致候、昨日帰宅致し候上大に疲労を覚申候次第にて、貴兄偶々の御懇書に接しながらも如斯延引に及び、再度の貴書に接するは意外の赤面伏て御海恕被下度候

却説御地方伝道の事は小生も兼て大に主唱し、乍不及も学校の事などには大に心配致候得共、内村氏は平安の人に非らず、為めに大に不都合を生して伝道上大に不良の影況を及ぼせしならん（と大に心配いたし居候、小生は未だ御地に遊歴不致候故地理に暗らし、然れ共其地の人物に接するに真に望を可属頼母敷強情にして、事を為に不撓の精神あると切に（嘗之長岡成庵の戦争を見よ）基督教に取りては真の良田と確認申候、故に屢々生徒之新潟行を勧め、及ぶ丈ケは御地の為に尽力致し居候次第、殊に長岡の如きは新潟県中人物の剛胆なるよし、真に全力を尽すべき所と認申候、又柏原（ママ）の如きも是非第一に着手せねはならざるの地と存候、然し長岡は別して手薄になしてはならざる事と存候間、其積にて御尽力有之度、小生も強壯の身ならば是非御地に踏み込み、一年に一回位は御加勢の為参上仕度候得共、近年に至りては只生命を維持するに汲々たる有様にて甚残念の至、弘涙時々吟伏櫪（ママ）□小生の心中御了察あれ、坂田氏\*\*\*は何故に五泉を去られ候や御序に御漏し被下度候、伝道は速に移転するは好ましからぬ事共なり、本年の英語卒業生の中にも何人か

御地に参上の事は是非相勸可申候得共、御地よりも鄭重に御招き被下候様仕度、ディメンド多くソップライ少なき時なれば、何卒人物引揚げには御尽力有之候様御地の信者方に御勸被下度候、貴兄には聖書註解類の如きは如何なるものを御所持被成候哉、D. シヤフ<sup>\*</sup>の新約註解は御所持なるや御尋申上候、又何そ御入用の書類は少々なり共御周旋申度候間、無御遠慮御知せ被下度候也、右者過日貴書に接し取急貴答として如斯候也、艸々頓首

四月一日

新島 襄

白石村治君

取急き乱文の義御免可被下候

### 新潟県下伝道策

一新潟並ニ長岡とは青年薰陶に尽力すべき事

一一日も早く新潟には良牧師を聘すべき事

一 人物揃ひたる上は新潟、長岡、新発田、其他重要な場所には不絶基督教演説を拡張し、県下の与論を変し、有志者を基督教賛成者否真ノ信者と成らしむる事

一 柏原には必らず着手すべし

一 坂田氏は何れに行かれしや五泉も空しく放抛し置くべからず

一 長岡辺の信者中品格も高く文字のある人物を勧めて別課神学に入らしむべし

一青年の望みある人物は同志社の英学科に御遣しありたし（予め充分の御打合を要す）

一外国教師には充分内国兄弟の意見を知らしめ教師を孤立せしめず、又独断の所業を為さしめず、県下大体の運動は内国人の計画するものと為し、教師をして直接に之を助けしめは至極なり（此れは内国人が外人を使役する事にはあらず、内国人は事情に明らかなれば外人が吾人の意見を容るゝは伝道上必要と存するなり、御地には矢張内国人が卒先して働らき、外人よりは只内部の応援を受くる方却て得策ならん、又可成内外の事情に克く々々曉通し得て互に誤解のなき様致したき事）

一伝道者の心得は基督の心を以て心と為し、ポールの精神を以て模範とすへし、又道を伝ふるに一樣の手段に出てす、説く所の道は必らず純<sup>じゆん</sup>乎<sup>こ</sup>。た<sup>る</sup>。福<sup>ふく</sup>音<sup>おん</sup>たるへきも、之を新奇ならしむる恰も雨余の春色の如くならしむれば、決して人を飽かしめざるべし、又常に信者を一樣同等に取扱ふへし、教会内は可成共和政治を行はしめ、寡人主義を断行せしめざる様御注意あれ、又深切と堪忍を以て飽まで主の忠僕たる職分を尽し賜へ、又然諾を重し、真実を主とし、品格を高ふし、行為を慎み、信仰に充ち、慈愛に富み、以て主の栄光を顯はし賜へ

尚、種々申度事有之候得共、帰宅以後甚繁雜匆卒の間相記し候間、将来御相談あるに於ては乍不及御返答可仕候

611

〔四月二日

高松における大学賛成有志家〕\*

⑤ 森中章光写

肅啓、陳者過般ハ御地ヘ向ケ弊社大学創立費募集ノ為本間重慶氏ヲ差上候処、不<sub>レ</sub>一方御配慮ニ与<sub>レ</sub>リ速ニ懇談会ノ準備被下、同氏より御地之有志諸彦ニ大学設立之意見目的等開陳するを得しハ、偏ニ貴下方ノ熱心なる御幹旋ニ之レヨルト存し、深く奉拝謝候、尚此上共御知人中広ク御誘導被成下、吾人ノ志願をして速ニ成就せしめ賜ハ、大幸之至ニ不堪候

右御礼旁々御依頼迄、得貴意度、艸々拝具

612

四月三日

川西光三郎\*\*

④ 墨

① 京都寺丁通丸太丁

② 兵庫県下兵庫永沢町

音羽花壇ニ於而 中川様氣〔付〕

御懇書拝誦仕候、陳者中川様ニも格別之御障も不被為在再諏訪山ニ御帰リ之御計画なる由、何卒御自愛被成候様精々

奉希望候、小生事も先土曜日ニ一寸帰宅仕候処、京都之氣候ハ大分諏訪山とは相違ひ少し加減も不宜候間、不日都合次第再帰神之積ニ有之候間、又該地ニ而拝眉を得度存し居申候、兼而中川様ニも御配慮被下候姫路ニ於而大学之為之集会ハ已ニ金森氏と御打合出来、同氏も中川様御帰宅之上参上可仕事ニ相成候は非常之好都合と奉存候、御存之通近來ハ僧侶輩大ニ安眠を醒まし尊王奉仏大同団とか奇々怪々之事を發明し、愚民を籠絡し我大学之計畫を妨け申候は実ニ不徳義千万不見識千万、吾人を呼而乱臣賊子なと申候得共、吾人ハ一身をも抛ちて我同胞之利福を計候に彼等無礼ニも之を妨けんとするは彼等こそ国家之進歩を妨害する俗物と申而可なるべし、<sup>〔姉〕</sup>乍去吾人ハ彼等ニ取合申すハ甚恥か〔し〕く存し候間、其儘ニなし置只々吾人之為すへき所を為し、其結果ハ天父之御旨ニ任するのみ、何卒此等は御主人ニも御含置被下将来永く吾人之企を御助け被下候様具々も奉切望候間、貴君より宜しく御致声被下度奉希候、右為貴答、艸々頓首

四月三日

新島 襄

川西光三郎様

尚々、御主人ニ宜しく御伝言御撰生專一ニ被成候様仕度候



①京都寺丁通丸太丁十三番戸

②熊本県下熊本区新屋敷傘町三百五十六番地

⑤複写（海老名道子氏所蔵）

⑥書留

先日書面にて北垣知事之令息之事を重ネテ御依頼申上候処、昨日同知事より使を以而四十円之金を被送、便送之事を小生に托し被參候間之を受取、且右之義ニ付一切貴兄ニ御任セ申上候間、宜しく御預り月謝月俸等ハ貴兄より学校ニ直ニ御払込被下、当人へハ只々小使ノミ御渡被下度候、尤小使金ハ御地之生徒中アヴェレジノ費用も御分りと存候間、余り多分ニハ御渡し無之様仕度候、乍憚右費用之帳簿ハ御手ニ御預り置、一ケ年之末ニ北垣大人之方へ御回被下候ハ、幸甚、又当地ニ而は知事之息子ト申事ニ而何レノ店ニ而も錢なしに御貸し申、月末ニハ御宅之方ニ多分之書キ出しを持參被致、北垣夫人ニハ大ニ御迷惑之事も毎々有之候よし、依而乍御迷惑も先小使ハ過分ニ無之、又近傍之洋物店筆墨紙屋菓子等ニハ預メ御断有之、貴校之生徒として北垣ト申者被參候〔トモ〕決し而カシ売ハ不被致旨御通し、カシ売被致候上ハ決而貴校ヨリハ払ハざる旨被仰候而、錢ナシニ物品を買ふ事を御予防被成下度奉希候、若し余分ニ御渡し被成候ハ、殊ニヨルト其余分ヲ郵便局ニ預ケ置キ、将来脱走ノ費ニ充ツルモ難計候間、時々郵便局之方も御吟味被下候様奉希候、北垣氏ヨリハ只今別ニ書面を不呈旨被申候付、特別小生より宜しく御依頼、且御伝言なし呉レト御頼ミニ相成申候、北垣氏より之來狀御覽ニ呈し候間、同氏之心情も御了察被下度奉希候也、小生も五日前帰宅、又少々風氣ニ而不快、乱文之義ハ御免被下度候、右は為願用得貴意度、艸々已上



四月五日

裏

海老名兄

〔北垣国道書簡〕

拝啓、一昨日御帰京之処少々御風氣之趣折角御保養專一祈上候、扨昨日は御令室様早速御来訪被下、海老名君之書状御廻しを蒙り御厚情奉万謝候、海老名君書中其教育法之厳正深切実ニ不堪感佩之至候、如此嚴師如此教育深ク熱望致し候小生之精神ニ候間、確ニ於テも如此嚴師ヲ得タルは無上之幸福と存し候、然ルニ万一其教育厳正ニ耐ヘ兼ネ候場合ニ至リ候得は、モハヤ世ニ無用之動物ト相成リ一生ヲ可終と極込ミ候、小生カ右等之懸念は海老名師之推想ト能ク符合スル所ニシテ、尚一層渴望之念相増し申候、乍御手数御次手之節尋常之生徒よりモ尚嚴重ナル教育ヲ与エラレ候様御申送り被下度、此段御依頼申上候、右得貴意度、艸々頓首

四月一日

国道

新島先生

四月六日

兵庫縣以西諸教会兄弟<sup>\*</sup>

⑤ 森中章光 写

肅啓、慎而貴会兄弟之御安否ヲ奉伺候、陳者今回神戸ニ於テ開カレタル兵庫縣下七教会之春期親睦会ニ於テ、各会ヨリ派遣セラレタル代議士諸兄カ發起人ト被成、同志社大学資金募集之為近傍之諸教会ヘ向ケ奨励委員ヲ派出セラレ度旨決議ニ及ハレ候趣ヲ以、右之議會ヨリ小生迄御照会ニ相成候付、右議會之委員長田時行兄ト協議之上、明石教会之牧師川本政之助兄ニ兵庫縣以西之諸教会ヘ巡回之勞ヲ御委托申候間、同兄参上候ハ、希クハ御地方ニ於テ特別之集会ヲ御開ラキ、同兄ヨリ詳細御聞取被下、弊社大学御賛成之件ニ付兄弟方充分之御奮発ヲ奉仰候也、敬白

四月六日

西京同志社長

新島 襄 印

兵庫縣以西

諸教会兄弟

御中

兵庫縣以東巡回之義ハ長田時行兄ニ御委托申、且本文之議會ヨリハ日本国中之諸教会ヘ向ケ大学賛成奨励之檄文ヲ差出サレ候事ニ決候由承リ及、右大学發起人ナル小生ニ取リテハ喜欣之至、深ク我カ天父ニ奉感謝居候大阪ニ於テハ府下並ニ近傍之諸教会ヲ招キ、大学之為一大会ヲ来水曜日ニ於テ被開候由、乍序御吹聴申上候

〔四月初旬 福島における有志家〕\*

④墨 ⑥草稿

肅啓、陳者敝社之計畫ニ関ハリ候私立大学創立費募集之為、小生之友人綱島佳吉ト申者、先般来御地方於<sup>ニ</sup>而奔走致し  
 呉候処、小生よりも特ニ一書を呈し貴下迄御依頼可申上旨申来付、未タ拝芝之栄を蒙ラさるも敢而寸書を呈し、右  
 大学御賛成之義を御願ひ、且広く御知人中をも御誘導被成下度惓願之至ニ不堪候、右大学ニ付自然御質議等有之候ハ  
 ハ綱島氏へ詳細御問合被下度奉希候、右御依頼迄、得貴意度、艸々敬具

尚々、本文願分<sup>〔カ〕</sup>之義ニ付、最早綱島氏より御依頼申上候事とも存候得共、同人之申越ニ随ひ小生より特更ニ御  
 依頼申上候也、何卒充分御尽力之程、伏而奉希候

616 四月十二日 下村孝太郎

④墨

今朝米国へ差し郵便出発之様承り至急ニ相認候間、乱文之義ハ御免可被下候、右ハ用事ノミ、早々頓首

寸楮拝呈仕候、陳者先般來貴兄御一身之事ニ付早々協議之上可申上筈之処、近頃は東西ニ委員有之、重要之事件ハ一相談仕候事ニ相成居、又大学之事件なと有之、委員会相開らき候に彼是時日を消し、又小生も当時ハ京都ニ罷在、昨冬中より神戸ニ参居休養致し居候次第にて、諸事兎角無益ニ暇モ取り、又貴兄之御一身ニも関〔し〕一二之意見も無之、此之延引を來候間、御了察被下度候

一ハ、貴兄に此秋御帰國を願ひ度トひ申候者有之候、右ニ付旅費として乍少々三百円ハ御送申度ト迄相決候

御留守宅へも此五月之初より少しも御不自由之無之様御送金申上事に相決し候、此四月迄ハ小生より少々ツ、差上置候

一ハ、貴兄ニ今八九月カ一ヶ年御滞米相願ひ、例之大学之為資本募集之勞を願ひ度との動議なり

右動議ニ付宣教師方ニハ不同意を抱き居候様子ナルモ、敢て抗抵する程ニハ無之候、何レ御滞米相願候上ハ少くとも

大学の方より一千円位ハ御送金申サネハナラズと申居候、右ニ付貴兄サへ御同意被下候ハ、第二之策を決行仕度存し居候、左スレハ第一之策ハ先当分見合ニ相成可不申、乃チ此夏御帰リ之為旅費を呈する事ハ当分見合セニ可仕候、此レハ逐々協議之上可申上候

右様先日協議之大体ノミ申参、詳細之事ハ小生留守故相分不申候得共、貴兄より至急ニ御返答を願ひ度は弥今八九ヶ月又ハ一ヶ年程も御滞米、大学之為資金募集之為御奔走可被下也、否之所御通報被下度候、若し御滞米之御都合相叶不申上候、第一之如く旅費として早々三百円御送り可申候間、左様思召御決意之所速々御回答被下度候也

四月十二日

新島 襄

下村孝太郎兄

レールネット氏之友人ハルリス氏之イントレストハ御ツナキ被下度候、貴兄之御目的ニ関し大切ト奉存候

617 四月十五日

井上馨<sup>\*＊</sup>

⑤写真（国立国会図書館憲政資料室所蔵）

左之書面ヲ認ムルニ当リ、今回大坂ニ於ケル企ノ成否ハ一ニ閣下之御承諾下サルムト否トニ関スベシト存シ、拙筆ヲ下シ乍ラモ小生ハ最早河ヲ渡リ背水ノ陣ヲ為スノ感情ヲ以テ相認候間、文章甚拙ナルモ小生ノ精神ハ御洞察被下度奉希候

拝啓、先日來御帰神之程屈指待居、拝謁之上御配慮ヲ奉煩度事項二三有之、慎テ左ニ記載仕候間、伏テ御一覽ノ上何

ニトカ御高配被下度奉仰度候

一 先日來神戸ニ於而内海知事ニ御依頼申上、当港之資産家ヲ集メ呉ラレ候様相計候処、同知事又野村上人氏ナドモ集會ヲ開クナラハ銘々ノ名ヲ以テ致スハ迷惑ナリ、宜シク大学發起人ノ名義ヲ以集會ヲ開ラキ区内ノ有志家ヲ招クベシト被申候、然ルニ御存之通小生ハ神戸ニ知ラレタルモノニ非ラス、又大学云々ト申セハ猶更來會ノナキハ当然ノ事タルヘシト心配仕居候、乍去知事又は他之人々カ其名義ヲ以テ集會ヲ促シ呉レ候ハ、來会人モ期スヘキ事ト存候得共、只今其都合ニ運ヒ兼大ニ困却仕居候、又屢スレハ疎セラル、恐レモ有之候間、先日來神戸之事ハ不得止默々ニ附シ置キ、閣下御來港ノ上何ニトカ程ヨク御工風被下度モノト御待受申候次第、何卒神戸港之端緒ヲ開ク事ハ御工風被成度奉仰候

一 大坂ニハ去月二十五日兒島控訴院長ノ邸内ニ於テ、高島中将、遠藤造幣局長諸官ノ御催ニテ一集會ヲ開ラキ、招ニ応シ來會スル者十四五人有之候得共、甚不滿足ノ所モ有之候付、其來會者カ再發起人ト相成、此二十五日比ニ一ノ大会ヲ催シ府下ノ錚々タルモノ壹百五十又ハ貳百名程ヲ招待スルノ計畫ヲ致シ居候得共、茲ニ困却トスル所ハ其内卒先者ト認ムヘキ人々ノ奮発卒先シ呉レサルノ恐レ有之、大ニ心配致居候間、閣下御來坂ノ節ニハセメテ左記之人々丈ケニモ御面談、左記之金額位ハ奮發致シ呉候様御奨励被下間敷ヤ、大阪之高島、兒島兩君ナドニモ随分御心配有之、此一点ハ矢張 閣下之御力ニ御依頼スルノ外他ニ上策良工風ハ無之ト迄被申居候、甚御迷惑千萬ト奉存、又如斯小生毎々閣下ヲ奉煩候は実ニ恐縮之至ニ候得共、実ニ他ニ良策ナク、最早此上ハ 閣下之御助力ヲ仰ノミト決断仕、又今回失敗仕候ハ、実ニ上方地方之運動ハ丸デ失敗ニ至ルベキノ恐レモ有之候間、何卒特殊之御誘導被成下、是非トモ左記之金額位ハ募集相成候様仕度候

三千円

藤田伝三郎

三千円

鴻之池善左衛門<sup>(右)</sup>

千円

久原庄三郎

千円

藤田鹿太郎

千円

松本重太郎

千円

阿部彦太郎

千円

広岡久右衛門

千円

芝川又右衛門

千円

殿村エツ

千円

田中市兵衛

右等之人々之被申候ニ、我輩カ多分ニ出金致シタラハ他ノ人々ハ必ラス投金セサルノ憂可有之候間、我カ輩ヨリハ却テ多分ニ出金ナキ方が府下ノ多人数ヨリ巨額ノ金ヲ募ル為ニハ便宜ナラント被申候由ナレトモ、金森氏ニハ府下之人人ニ接シ其内意ヲ窺ヒ候ニ、其ノ申分ニ反シ候テ彼之人々カ奮發出金サル、ナラハ、吾人モ応分ノ寄附ハ為スベシト迄被申、又同志社大学ヲ助クルノ一点ニ至リテハ、同心協力互ニ政党ノ区別平常ノ分争等ヲモ相恐レ<sup>(ズ)</sup>応分ノ力ヲ尽シ度モノト被申居候由、又今回之事柄カ幾分カ四分五裂之党派ヲ調和セシムルノ手段ト相成候モ難計候間、閣下御来坂之際セメテ右之十人程之人々ニハ寄附ノ事ヲ御勸メ、可相成ハ其金額迄モ御高配被下置候様仕度候、東京ニ於テ御配慮ヲ蒙リ候時は実ニ花々敷手初ノ戦争之如クニ有之候得共、今回大阪之企之如キハ背水ノ陣ト齊シク、大坂ノ一

敗ハ非常ニ上方地方ノ運動ニ影況ヲ波及セシムヘク候間、願クハ閣下ニハ右之十人丈ハ御引受ケ御工風被下間敷ヤ、左レハ同府下他之人々ノ所ハ必ラス敗竹之勢ヲ可呈、又各俱樂部ニモ随分請求ニ応シ呉レベシトハ申居候輩モ有之候間、何卒此ノ尤モ困難ナル端緒ヲ御開キ被下候様折入テ奉悃願候、小生共モ此ノ二十五日比ニハ大坂ニ一大会ヲ可催ト準備仕居候間、閣下御来坂モ多分其前ニアルベシト存シ、千歳ノ一遇モ必ラス此ノ好機ニ於テ期スヘシト迄心窃カニ断言仕居候、閣下ニモ已ニ御承知之通近來大学カ天下之流行トハ成來リ、福沢氏ニモ已ニ此地方ニ手ヲ廻ハシ募金被致居候間、小生輩モ此時機ヲ失ハ、再ヒ之ヲ得ルノ機ハ来ルマジト心痛仕候  
以上陳述仕候事件ハ小生輩ニ取リテハ甚重大之者ト存し閣下之御助力ヲ奉仰候間、乍御迷惑モ御承諾之程伏而奉仰候、何レ拜謁を期詳細開陳可仕候得共、イツモ御来賓多ク為メニ縷々之閑話モ難期ヲ恐レ、匆卒之間筆記仕候段、乱文之義ハ御海容被下度奉願上候、敬白

四月十五日

新島 襄

井上伯殿

閣下

尚々、内海知事ニハ何分請求ニ応シ呉レ御様子相見不申、神戸之運動ハ甚覺束無ク存シ大ニ困却仕居候、然ルニ兵庫県下モ西ノ宮・姫路ノ如キハ殆演說会ヲ開ラクノ準備迄も出来候得共、神戸ニ於而端緒之相開候を待居候よし、茲ニ内海知事又神戸二三之有力家カ率先致し呉候ナラハ随分応スルモノハ可有之ト存候、仏法云々ノ話も有之候得共、尽ク仏家之奴隸ニアラス、必ラス応スルモノモ可有之ト存居候

○川崎正藏氏<sup>\*</sup>ニモ一千円程も出シ呉候様御勸被下度奉願上候



618

四月十七日

岩崎〔某〕<sup>\*</sup>

①中山手通ダツレー氏方 ②兵庫日之上町 岡本内ニ而 ③はがき ④墨

少々御依頼申上度事有之候間、若し御出懸ケ之御序あらは、今日明日ハ午前迄ニ一寸御尋被下間敷や御伺申上候  
四月十七日

619

四月二十日

新井毫

④墨

小生も不日帰宅可仕候

何卒大人様其他御一統ニ宜しく

先日和田君御夫婦ニハ京都ニ於而拝眉を得申候

御帰郷後一書御投与被下千万奉謝候、随分政治上之波瀾も起リ人心ニ不穩之体なるは、独り上毛ニ限らず何レ之所も  
一様波及せざるはなく、実ニ功名心を以而充塞せる空氣之上ニ飛揚して之を眺むれハ、面白くもあり、おかしくもあ

り、又或る場合ハ甚氣之毒千万之者も有之候様被思候得共、世之中ハ矢張人間之世之中なればコルロブションもあり、イントリーグもあり、繁雜千万何ニもかもゴツタマゼ之如きに見へ候中ニ真理ハ全く其力を失ハす、恰モ引力之地上を吸収維持する如く人間社会をも統轄するを見れば、吾人も仙人然として此世を経過すへからず、必らず此雜沓社会中ニ自カラ一個各自之ミッションを賦与せられ、又之を竭すへき義務を有する動物たる事を了知致し候ハ、縦令山河を隔つるも願クハ御互ニ義務負担の動物として一生を了したきものニ有之候、先日一寸帰宅致し候処、京都ハ氣候大ニ不順故再神戸ニ戻り申、尚流寓之身と相成居、近頃降り続ける風雨之為に幽閉せられ戸外ニハ一步も踏み出さず、只日々禿筆を把り彼之大学之為諸方へ書面を出す事を以而小生之業務となし居候間、殆花の散りなん春も知られすと迄申居候、小生も病ノ為ニ隙なる身にありなから多事に苦むは、矢張雜沓の動物たるを免かれず、自から為せる禍ハ逃るヘカラストハ故人之確言ありて、小生も矢張此繁雜社会に一生を了すへきもの哉と窃ニ微笑しツ、一身之前途も予想致し居候、先貴君之御笑ひ艸として得貴意度、艸々貴答

四月廿日

新島 襄

新井毫君

梧下

尚々、乙瓢大人より之御注文ハ随分コマツタモノなりと存候、是則木ニ依り魚を求むる類ならんか、乍然大人之御要求ニ背く能ハす、何レイツカ大奮発ニ而一筆相試可申候

○松本、岡崎之両氏ハ已ニ一書差出申置候

四月二十二日

不破唯次郎

①神戸中山手通六丁目

ダツレー氏方

②群馬県下前橋神明丁三番地

④墨

先般より兩度之御書御遣し拜見仕候、陳者御申越之女学校<sup>\*</sup>之事ハ大ニ賛成仕、発起人之中一人ニ相加リ候事ハ甚望む所ニ有之候、男子宣教師を御招きの事ニ付アンドワ之御考へも有之候得共、右は余り得策ニアラス、随分之ニハ不同意を唱ふる者ハ可有之、又アンドワ之方よりも寧ロプレシペテリヤン派より招クベシナトノ議も相起り可申候間、先当分ハ見合セ置き相成、此義ハ小生一ト骨折り可申候間、小生ニ御任セ被下間敷や、アンドワよりハ随分有為之人も可參候得共、日本より招クト相成候ハ、米國ニ而物議恟々たるへしと存候間、チト御注意被下度候、若しノイス氏ノ如クニ突然參り候を御招き候は好都合カモ知<sup>レ</sup>不申候得共、招待状ヲ出セハボールトハ大ニ不愉快ニ存セラレルヘシト存候、先は貴答迄、艸々拜具

四月廿二日

新島 襄

不破唯二郎兄

四月二十二日

井上馨\*

⑤写真（国立国会図書館憲政資料室所蔵）

拝啓、陳者昨朝常盤舎ニ於テ一書奉呈仕候間、定而御一覽ヲ垂レ賜ヒ、且何ニカ小生ノ願分ニ対シ御高配ヲ賜ハル事  
 トハ推察仕居候得共、本日思立候事有之、何分黙々ニ附シ難ク再ヒ尊厳ヲ奉犯候条、御海恕可被賜候、扱兼而承リ候  
 所ニヨレ今回ハ大坂ニ御立寄賜ハル、ヨシ、故ニ昨日奉呈仕候書中大坂之豪商十人程ノ人々ニ一応敝社大学賛成之御  
 勸ヲ奉仰候次第、万一右ノ十名ニ御一言被下候事ハ御不都合ト思召サル、ナラハ、セメテハ藤田、鴻之池、其他二三  
 之人ニ御一言被下間敷ヤ、又幸ヒ川崎氏方ニ御滞在被遊候事ナレハ同氏ニモ一応御勸メ置被下間敷ヤ、且当地御滞留  
 中当地ニ於テモ何ニトカ其端緒ヲ御開置被下間敷ヤ、近頃少シク御不例之由、且絶ヘス御多忙ニ在セラ、閣下ニ向  
 ヒ右様ノ事迄度々相願候ハ、実ニ小生之心情ヲ苦シメ恐縮之至ニ奉存候得共、閣下ニアラサレハ在朝大臣之御身分  
 トシテ野ニアル小生輩ノ挙迄モ顧慮シ賜フモノナク、又閣下ノ如ク本邦ノ豪家紳商ノ瞻望ヲ握リ賜フモノナク、且閣  
 下ノ如ク大胆ニモ民間ノ挙ヲ助ケ賜フモノナキヲ確信シ、他ニ頼ムヘキモノナキヲ知り如此モウルサクモ閣下ノ御賛  
 助ヲ奉仰候次第、昨日ノ書中ニ開陳仕候通、小生ハ最早河ヲ渡、水ヲ背ニシテ陣セシ者ナリ、今回ノ勝敗ハ偏ニ閣  
 下之御助力アルト否トニ関スヘク、幸ニシテ勝ヲ制セハ大勝利タルヘク、不幸ニシテ敗ヲ執ラハ大敗北タルヘシト決  
 心仕居、心中多少之恐レナキ能ハス、且昨年今日ハ小生東京ニアリ感涙ヲ流シテ閣下ノ御好情ヲ拝謝シ、今年今日  
 ハ当地ニ在リ血涙ヲ灑ソキ再ヒ閣下之御賛助ヲ哀求スルニ至ルハ、又如何ナル縁因ソヤ、伏テ希クハ小生ノ区々邦家

ニ竭サントスル衷情ヲ御憐察アリ賜ヘ、頓首敬白

四月廿二日

新島 襄

井上伯殿

閣下

622

四月二十六日

阿部充家

①神戸中山手通六丁目荅番地 ダツレー氏方  
②熊本県下熊本区 熊本新聞  
社 ⑤複写(阿部大三郎氏所蔵)

山田武甫君ニ御面会之節、宜しく御伝言被下度奉希候

肅啓、百花爛熳之時節益御多祥奉欣賀候、陳者敝社大学設立之件ニ付先般来段々御手数被成下候条、御好意之程千万  
忝く奉拝謝候、然ル処本月三十日ヲ以而第一回募集期限締切ニ相成可申に、尚統々義捐金送附有之ニ付、来五月より  
十一月迄を以而第二回募集期限ト定メ、一層手広ク天下之義捐を促し度候間、重而御手数を相願候は甚恐縮之至ニ候  
得共、義捐金募集広告并ニ右領収方尚一期間御継続被下間敷や、伏而御承諾之程奉仰候也、早々敬具

四月廿六日

新島 襄

阿部充家<sub>下上</sub>

梧下

貴名転倒之義ハ御免

逐伸、近頃は徳富君御帰省中ニ而嘸々御愉快之御談話等可有之ト遙察申上候、同君ニハ何時頃京都へ被帰候や  
屈指待居候よし御通被下度候也

大迫真之君ニ宜し〔く〕御致声被下度候

本月卅日迄ニ御手許ニ御領収相成候敝社義捐金之分ハ、京都トコルレスボンデンスを有し候御地之或ル銀行之  
証書ニ代ヘ京都迄御遣し被下度候、尤敝社は京都之第一銀行支店に金円等ハ相預申候間、御承知可被下候  
貴社新聞ハ来五月より一ケ年間分、同志社ヘ御送り被下度也

623

四月二十六日

五十田勇治郎\*

⑤森中章光写

昨日一寸参趣候処、御手厚き御取扱に預り難有奉拝謝候、又二宮、平井之両君ニ御面会をも得、甚大慶之至ニ奉存  
候、右御礼迄、艸々敬具

四月廿六日

新島 襄

五十田勇治郎様

尚々、拝借之御風呂敷ハ逐而京都より御返却可仕候、二宮、平井之兩君へも宜く御伝言可被下候

624 四月二十七日 井上馨

⑤写真（国立国会図書館憲政資料室所蔵）

昨朝使を以而此書面を常盤舎迄拝呈仕候處、名田（義）より直ニ御乗船之趣承り使之者持帰候付、甚粗略之書面ニ候得共、此儘東京へ郵送可仕候間、本文之義ハ御含置被下候様奉悃願候

肅啓、陳者一昨日は御不例之處、厭ハサレス漸時之御面謁被仰付候条、御好意之程深く奉拝謝候、小生義一昨日は西之宮に立寄逐々時刻を移し、昨日ハ雨天ニ有之、今朝帰宅仕候事ニ相決し候間、御暇乞之為参趣仕候義ハ御免可被仰付候、一昨日拝謁之際一寸御願申上候積ニ有之候處、失念仕候件有之、右は即原六郎之一事ニ御座候、昨冬より渋沢氏カ屢原氏へ向納金之事を促し候事ニ付、何ニカ其間ニ事之齟齬致候事有之、原氏よりチト面白からぬ書面を渋沢氏ニ送り、何ニカ小生ニ向ヒ候而も其意を得ざるかの様ニ心得ラレルよし、右ニ付此上閣下を奉勞煩候は恐縮之至ニ候間、詳細北垣知事東上之節原氏迄ハ伝言相托可申候間、閣下ニハ先般御談被成下候通、此六月迄ニハ例之六千円ハ渋沢氏迄被送候様、御序ニ御取計被下候ハ、万謝之至ニ不堪候、且御序ニ小生ハ常々原氏之恩義を感じ居候者ト御話し

置被下度奉仰候、右様之事迄閣下を奉煩候事ハ不本意千万ニ奉存候得共、原氏ニハ少々小生を誤解し居候様ニも心配仕居候間、御含置被下度伏而奉願上候

御着京之上侍史ニ命し賜ひ、川崎氏（ハ）之挨拶も御漏し被下候ハ、大幸之至ニ不堪候、本日帰宅を取急ぎ参趨之礼を欠き候段、何卒御海容可被賜候、敬白

四月廿七日

新島 襄

井上伯殿

閣下

尚、発前取急ぎ乱文之義御免可被賜候、天下之人ニも大望を属し候、御一身之事ナレハ何卒御自愛可被遊様奉

切望候



四月二十九日

徳富猪一郎

①京都寺丁丸太丁

②神戸海岸通五丁目

安藤方

④墨

前略御免、小生も一昨日帰宅仕候間、此段安藤迄相通申置候

田中氏も当地へ向出発被致候よし、当時小生も東京ニ於而相計りし様なる挙動ハ少し出来難キ様ニ相成候間、先得止成丈ケ其事ニ関セざる様ニ致し居度候、尤竹越トハ充分打合せも致し置候間、田中君ハ直ニ竹越へ御面談被成候様貴兄より御勧め置被下度候

右合併之件ニ付貴兄に御依頼申上度も有之候間、左様思召被下度候、御来着を奉待上候

四月廿九日

新島 襄

徳富猪一郎様

梧下

四月三十日

北垣国道\*

①「差上置」 ②「閣下」 ④墨

肅啓、陳者今朝は参館仕御多忙中御邪魔申上候条御海容可被賜候、過刻金森氏来訪致シ西郷大臣へ御面謁仕度候付、閣下之御添書を頂<sup>〔載〕</sup>載ニ罷出候処、御不在故空しく罷帰候由申居、且明早朝再参趨仕候而是非とも 閣下之御添書を拝領仕度旨申居候間、明朝も多分御多忙ニ可被為在候間、右御添書之義ハ今夕より願上置、同氏明朝参上候ハ、直ニ右頂載之相叶候様被下置度奉仰候、且又 閣下ニも大臣殿ニ御面接之際敝社大学之企ニ付御賛助可被下旨御話置被下間敷や伏而奉願上候、薩州之大臣中未タ何人も敝社之大学ニは賛成不被呉甚遺憾之至ニ奉存候、小生も本年中ニハ出京仕、黒田総理大臣殿ニも御依頼仕度胸算ニ罷在候、右侍史迄、得貴意度如此候也、敬白

四月卅日

新島 襄

北垣明府殿

閣下

四月三十日

中山光五郎

⑤森中章光写

貴書拝誦致し候、御申越之次第ニよれハ御地も決し而望なきニあらず、段々御手も延可申候間、貴兄御働之結果ハ主ニ任セ、成丈ハ心静ニ御伝道被成候様具々も奉望候、何レ新開之地ニハ速ニ大収獲ハ難期候間、此段御承知有之度候  
 今回受洗者有之候よし、大ニ喜欣且慎て主ニ拝謝仕居候、先日差上候金子之中御地之演説費ニ御充被成度旨、何ニも御地方之為ニさし上候事なれば決而小生ニハ（異）意議不申、無御遠慮其方ニ御遣ひ被下度候、又御地之働源熟し候ハ、他ニ移転云々之御申越も有之候得共、未タ充分事業之成らざる内より他ニ移転之御考ハ無之方可然ト存し候、貴兄ニハ少々學問不足之点より右様御考被成候事トハ存候得共、自己之準備ハアマリ御心配なく主ニよりて為すの勇氣を御振興し、常ニ快樂之御心持を以て伝道被成候事甚必要カと存候、又如何なる事も御失望ナキ様精々切望仕居候、先は為貴酬、早々頓首

四月卅日

襄

光五郎兄

何ニなり共御相談被成度有之候ハ、決而御遠慮ニ不及、何時ニても御漏し被下度候、小生之力之及候事ハ御相談仕度候

628

五月三日

松山高吉

⑤写真（松山初子氏所蔵）

本日午前第十時徳富氏之来訪被致候様ニ取計申置候間、御都合相叶候ハ、第十時迄ニ御光来被下候様奉希候也

五月三日

新しま襄

松山老兄

629

五月四日

海老名弾正

①京都同志社 ②熊本県熊本区新屋敷町 ④墨 ⑥封筒裏に“Kind, Kind”とある。

過日北垣知事ニ面会之節、同知事之被申候に、愚息之実効相見候上、改而御礼且将来も御依頼可申上候間、序

ニ小生ヨリ宜しく御伝言アレト懇々依頼ニ被及候

去月廿五日付之華書拝見仕候、陳者過般御依托申上候北垣之令息も漸く入学御許相成候由、難有奉拝謝候、何卒同人は御校ニ而御仕立被下候様奉切望候、御存之通当地は往々都会に<sup>長</sup>生成せし青年輩入来、都会之文弱風を輸入来り、為

ニ境遇宜しからず、断然貴校ニ相願候次第、嚴父となり嚴師となり御養成被下度奉希候、先は貴答迄、艸々拝具

五月四日

新しま襄

海老名彈正兄

尚々、妻君ニ宜しく御致声可被下候

630

五月五日

中村栄助

④墨

其後は御起居如何、陳者数日前和歌山之県会議長兒玉仲兒君より飛報、和歌山臨時県会此七日より三四日間で相開可申候間、同志社員何人カ出張アリタシト(大学ノ為)申来候間、何人カ罷出可申旨回答ニ及置き、金森ト相談仕候処、先宮川ニ頼ムベシト被申候間、小生ハ同氏ハ少シ<sup>〔テ〕</sup>アタニナラズト申、別ニ工風スヘキ旨申候、然ルに金森君より宮川ニ懸合申候に、十三日後ナラデハ出張ハ出来スト昨日申来候、依テ差当リ甚御氣之毒なる願分ニ御座候得共、貴兄ニ御多忙中何ニトカ御操合、明六日カ又ハ七日比ヨリ該地迄御出張ハ出来マジクヤ、今日直ニ公義ニも申遣し、奈良ヨリ直接ニ和歌山ニ出張シテ貴兄ト<sup>〔若シ御出テ相叶候上ハ〕</sup>共ニ一運動ナシ呉レト頼ミ遣し、回答ハ電報ニ而可遣旨願置候間、多

分六日より十日比迄ハ同人ニハ差支ハなかるへしと存候、然し同人耆人ニ而は何分重きを加へず、貴兄御出張被下候ハ、第一ニ社員を代表し、第二に貴兄之御名義も一個之書生ニアラス、此迄之御履歴等大ニ先方ニ対し重キを加へ、又貴兄より先方之人々ニ丁寧ニ御話被下候ハ、非常之好都合なりと存し、万一御都合相叶候ハ、難有仕合ニ奉存候、右不取敢御依頼申上候間、可相成ハ今日中御勘考之上御回答被下度奉仰候、頓首

五月五日

新島 襄

中村栄助兄

梧下

御存之通金森も少し妻君之手ハナシ出来ズ、小生も未タ少し六ヶ敷大ニ困却仕候、然し先日ハ下痢アリシヨシナレハ、無理ノ御出張ハ願兼候

631

五月五日

中村栄助

④墨

右様之事ハ小生出頭之上御願ひ可申筈之处、何分雨天故乍略義以書面願候段御免可被賜候過刻老書を呈し御依頼申上候事件有之候处、使之者ハカシコマツタト被仰候旨申来候、然ルに貴兄之御言葉ハ小生之

書中御勘考之上、本日中御回答被下度ト申上候付、其事ニ付カシコマツタト被仰候様ニも相見へ、又和歌山行ニ付カシコマツタト御回答有之候様ニも相見へ少々解し難く候間、甚恐入候得共今一応此者ニ短簡なり共不苦、和歌山行之御都合相叶可申也、且若し相叶候上ハ何日ニ御出発可被下也、何卒御聞セ被下候様奉願上候、今朝公義迄貴兄之御回答ハ電信而相通知可申ト迄申置候間、同人も定而御左右相待居候事ト存候、右得貴意度、艸々拝具

五月五日

新島 襄

中村栄助兄

梧下

尚々、御老母様初御一統ニ宜しく御致声可被下候

632

五月五日

新島公義

①京都寺町通丸太丁

②大和国奈良水門村

至急用

④墨

過日御安着之報ハ落掌仕候、其後貴君之御元氣ハ如何、大ニ心配いたし居候

却説茲ニ一ツ至急御依頼申度事件出来、貴君ニ御頼申スヨリ他ニ良工風無之候、其義他ニアラス、和歌山出張ノ一事ナリ、数日前該県会議長兒玉仲兒君より、此七日より三四日間臨時県会相開可申候間、同志社より大学之為何人カ御

出張アレト申来候、此レ兼而私より同人ニ御頼申置候事故、此度誰も出張セサレハ先方も大ニ氣抜ケ致スモ不被計、故ニ何人カ是非出張ト相計候得共、金森氏ハ未タ出張出来不申、大坂之宮川ニ金森氏より相計候処、宮川氏ハ十三日已後ナラハ都合スベシト申来候、然ルニ七八九日之間ナラデレ出張も無効タルベシト存候、今日中村氏ニ相計貴君ト共ニ一ト働キ被成下度ト申遣、其返事次第弥ノ所ハ御通可申候、若しや同君御出張不相叶も貴君ハ一人ニ而も御出張被下間敷や、セメテ明日より来ル十日十一日比迄該地ニ遊説被下候ハ、大ニ効能ハアルベシト、已ニ金森氏モ一回参リインテレストハ惹起シ置候間、随分賛成人ハアルベシト存候、中村氏承諾ナラハ旨趣書ヲ持タセ大坂ナリ出張致サセ、貴兄ハ直ニ五条ヲ経而該地ニ（順路ハ知り不申）御出張被下、共ニ力を合セテ該地之有志家ヲ動カシ、速ニ賛成可成丈ハ寄附迄も約し呉候様仕度候

奈良ニ対し先日も留守又々ト申サハ甚氣之毒ニ候得共、此度之日曜迄ニ帰ルトセハ別ニ差支ハアルベシト存候  
右為御依頼至急得貴意度、艸々敬具

五月五日

新しま襄

公義君

中村君之成否ハ本日中電信ニ而御通可申上候、中村君出ズハ旨趣書ハ直ニ和歌山ニ相送可申候  
宿<sup>富士</sup>ハ藤源本丁三丁目ナラント思フト定ムベシ

賛成セシ人ハ（金森出張ノトキ）

松本知事、吉永裁判長（河合君ノ添書ヲ要スベシ）、秋山書記官、森尾警部長、長屋区長



紀陽、和歌山ノ両新聞社も承諾セシ由、新聞社ニ参ル前ニ兒玉ノ差図ヲ受ベシ

○此ノ人々ニ面会ノ節ハ金森出張ノ節大ニ御周旋被下シヲ謝スベシ、又金森ノ妻少々負傷致シオリ候故、参上仕兼候趣ヲ陳スベシ、又負傷ハ大分宜シク、室中ハ早ヤ運動スル位ニナレリト御話アレ

襄ヨリ宜シクト丁寧ニ陳シ賜ヘ

633

五月五日

徳富久子<sup>\*\*\*</sup>

⑤ 森中章光写

一筆申上候、先日御帰京之節御願申上度存し居遂ニ失念仕候間、此度熊本之田中賢道君御東上被成候間、同君ニ御願ひ申、兼て御約致し候貴会建築費之分として金十円、又別ニ五円差上候間、是は鶴田三郎君之学費として同君へ御渡被下候様奉願上候、先般来御越之处、私も留守にて甚御無礼いたし居、何とも不本意之至ニ奉存候、先日ハ猪一郎君御出被下、彼は同志社之為御配慮被下候条、小生ニ取り而ハ巨大之力と存し候、甚難有奉存候、右は御左右同度早々以上

五月五日

徳富御北堂様

新島 襄

乍憚一敬大人初御一統ニ宜しく御伝言被下度奉希候

634

五月六日

中村栄助

④墨

拝啓、過刻は御来車被下祈謝候、御嘶申上候通知事公之御添書を被送候間差上申候、又小生より児玉君へ老通差上候間御持参被下度候、金森氏ニも必ラス是才（如）ハなき事とは存候得共、松本知事、其外書記官、警部長、裁判長などニ御面会之節金森氏より宜しく申上ルト御一言被下方可然と存候、又々小生よりも未タ拝芝之栄を蒙らざるも宜しく申上、且貴地ニ而御賛成御尽力之事ハ伏而御依頼申上候ト御開陳被下度奉希候、此度ハ実ニ御苦勞千万と奉存候、何卒宜しく充分該地方を賛成家となし御帰京被下度候也

五月六日

襄

中村栄助兄

特別児玉君ニ宜しく御致声被下度候也

一 今ノ学校ヲ進テ高等中学ノ位置ニ至ラシムル事

一 理化学ヲ進ムルノ目的

一 智徳併行教育主義

一 今ノ同志社ハ宗教ノ一点ハ自由ニ任ス（已ニ僧侶モ入学シオル云々）

一 大学ヲ立ツルノ目的ハ、全ク社会ノ用ニ供シ得ヘキ人物養成ノ為種々ノ学科ヲ設置スルヲ要ス

（世人ノ誤解ヲ御トキ被下度候）

一 将来資本ノ増加スルニ随ヒ政事、経済、法律、哲学、文学、理化学、医学等ヲ設置スベシ

大学ノ目的ハ一時ノ急ニ応スル位ノ事ニアラス、又小生等一代ノ仕事ニアラス、累代志ヲツキ他年盛大ナル大学ニ至ラシムルノ目的

御演説中以上之要点ハ御陳被下度候

風波荒ラクアルベシ候間、何卒明早朝より御陸行可然ト奉存候

鼎会ハ明七日相開可申候

636

五月七日

徳富猪一郎

①京都寺丁通丸太丁上ル

②東京々橋区日吉町廿番地

民友社

④墨

肅啓、過日は無滞御安着被成候事ト奉存候、陳者近来一致之事ニ関し諸方より小生之意見に問合参り、彼等百万手を  
尽し小生之同意賛成を得んとするか如し、小生も過日一寸申上候事を履行せんには、彼等ニ向ひ余り反対之辭を顯す  
も決而得策ニ非らず、又去リトテ甲を脱し降伏ハ出来不申、先当分は局外之地置ニ立ツモノト存し置候方都合なりと  
存候間、此点ハ御含置被下度候、而して小生も近来右之事件ニ関し成丈黙止し居、又当分ハ黙止し居候方都合ト存候  
間、何レも文通ハ不仕候間、此事を御承知有之度候

五月七日

猪一郎兄

[端裏書] 'private'\*

五月九日

徳富猪一郎・湯浅治郎

①京都同志社より

②東京々橋区日吉町廿番地

民友社

④墨

已ニ御存知も可有之通、上方之諸新聞ハ京阪神各社連名之上、五月一日第二回募集ニ着手致し呉候、又間各社之名義東京之新聞紙雜誌社ト連署之上、従前之如ク広告スルモ差支ハナキ旨被申候間、東京之各社承知之上ハ連名ニ而御揭示被相成候様御取計被下度候

左スレハ京阪神之各新聞社ニも其儘（乃チ東京ノ各社ト連名）広告致し呉候様相頼ミ可申候

五月九日

新島 襄

湯浅 治郎兄

徳富猪一郎兄

近着ノバセフィクニ別紙片紙ノ如キモノ相見候間、御覽ニ呈し置候

五月九日

裏

猪一郎兄

638

五月十日

川本政之助

⑤ 森中章光 写

乍御手数御手許ニ有之候諸教会之集金額ハ、直接貴兄御手より姓名ニ添へ大阪之朝日新聞社ニ御送被下候様奉  
希候

御書拝読仕候、陳者此度は甚御迷惑なる事を御依頼申上候処、快く御承諾相成漸く貴会牧養之勞を打捨られ、此事ニ  
従事被下候は弊社に取り深く鳴謝する所ニ御座候、又貴会ニも貴兄御奔走之事を喜テ御承諾被下候は、是亦小生之深  
く貴会ニ謝する所ニ候、乍憚貴兄より兄姉御一統ニ右之御礼御開陳被下候様奉願上候  
右は不取敢為御礼得貴意度、如此候也、艸々頓首

五月十日

新島 襄

川本政之助兄

梧下

尚々、右様諸会より快く寄附致し呉候は、偏ニ貴兄御奔走之勞に是レ依ると存し深く奉拝謝候  
何レ寄附金之義ハ何レカノ新聞上ニ掲載可仕候

五月十日

野田卯太郎・永江純一

①京都寺町通丸太丁上ル十三番戸 ②福岡県三池郡大牟田駅 ⑤複写（福岡  
県地域史研究所所蔵） ⑥封筒表書は「野田卯三郎、永江純一」

肅啓、逐々温和之候ニ相趣候際各位益御清適奉欣賀候、陳者過般考書を呈し敝社大学資本募集之件ニ付、第一ニ御賛成を相願ひ且御地方有志御奨励之事迄御依頼申上候処、直ニ御承諾被下置、今回民友社之徳富猪一郎氏<sup>\*</sup>帰京之際、御地方之集金ハ同氏ニ御渡し被下候旨同氏より申聞かせ、且各位ニハ是非ニ大学之為御尽力被下候由逐一承り、真ニ御好意之程奉万謝候、但し大学之奉たる只ニ資金募集之事ニ止まらず、資金相整候上ハ地方より広く人物之募集を致し有為之國器を養成仕度候間、末長く吾人之奉を御賛翊被下、御互ニ我カ邦家百年之大計を立度候間、何卒此一点ハ本日より御合置被下度奉切望候

右御札旁御左右伺度、如此候也、艸々敬具

五月十日

新島 襄

野田卯太郎殿

永江 純一殿

尚々、御連名ニ而一書相呈し候段御免可被下候

尚此上も御地方之有志家ハ御奨励被下候而逐々他県ニも波及し、九州一円此舉を賛成致し呉候様仕度候  
九州ニ而も敝校へ書生を多く出せし分ハ、独福岡と熊本のみ、大分ハ僅ニ、薩州、日向も尚未タ僅少なり

640

五月十日

奥村新之丞\*

①西京寺町通九太丁上ル十三番戸

②丹波国船井郡桐之庄村

⑤写真

肅啓、逐々温和之時節に相成候際益御清適奉欣賀候、陳者已ニ御存知も可被為在候通、小生事大学資金募集之為、昨年四月より出京致し、在京中大病ニ罹カリ医師之命ニ随ひ休養之為去年十月迄ハ関東ニ止まり、漸く帰京致し候ハ、又々京都ハ養生之為ニ不相成と申す事ニ而、再ひ神戸ニ遣ハされ漸くして二週間前ニ帰宅相叶候次第ニ而、其後打絶へ意外之御無音ニ及候段伏而御海容被下度候、兼而小生より願上置候御地方募集之義ハ、一方御尽力被成下、先般已来毎々募集金額等御送附被下、真ニ貴下御好意之程深く奉拝謝候、依而御礼旁一応御地方ニも参趣可仕之処、未タ余り奔走ハ医師より許されず、乍遺憾右之義ニ不及候間、御序ニ寄附諸彦ニ貴下より小生ニ代り宜しく御礼御陳述被下候様奉仰候、其後余り御無音申上候間、段々御幹旋之勞を奉謝度、併而御左右奉伺度、如此候也、艸々敬具

五月十日

新島 襄

奥村新之丞殿

梧下



尚々、乍失敬拙影毫葉拜呈仕候間、御笑納被下候ハ、幸甚之至ニ不堪候

641

五月十日

浦木弘\*

④墨 ⑥前欠

〔前欠〕

候為其々之有志家ト被認候人々ニ御勸導被下間數ヤト御依頼申上置候処、本日同兄より一書飛来、貴兄ニハ明十一日より御出發可被成候間、大学旨趣書相回可申旨御通知被成候付喜欣ニ不堪、本日直ニ郵便ニ托し同志社設立始末書、大学旨趣書等差上候間、宜しく右之小冊子を御配布被下、可相成ハ懇々御誘導なし置被下度奉希候、右之義ハ全く貴殿之御見込ニ御委任可申上候得共、当時西之宮之五十田勇次郎、平井半介之両氏ニ相托し、已ニ辰馬氏などニも応分之力ハ可被尽旨被申候よしならば、何卒辰馬氏其他該地之金穴家ハ御勸置被下度候、又御影、伊丹辺之郡長初彼之小西家などニハ宜しく端緒を御開らき置き被下候様奉願候、御役目上チト被成ニクキ所も可有之候間、御迷惑ニ不成限ハ充分御尽力之程奉希上候、右為願用得貴意度、艸々拜具

五月十日

新島 襄

浦木 弘兄  
梧下

尚々、同志社旨趣書等ハ今朝川本泰年兄方迄差出申置候

642 五月十二日

徳富猪一郎\*

④墨

此週間ニ米国より来着之書中、コンネテカト洲ニユーロンドン邑之住人ピー、エー、ハルリスト申人

(但シ同志社之レール  
ネド氏ノ父母方ト懇

意ノ人ナル由ニテ、同氏ノ  
年齡ハ殆八十年ニ達スル由

昨年中同志社校科之内、理化学ヲ盛ニ致サレ度志望ヲ以テ、理化学教場建設ノ為トシテ一万弗ヲ

寄附シ呉レタルニ、一万弗ニテハ充分ノ事ハ出来マシキヲ恐れ、又更ニ五千弗ヲ逐加ヘラレ、而シテ近着ノ書面ニ

ヨレハ己レノ信用ヲ置クヘキ知人中三名ヲ撰ヒ委員トナシ、己レノ一身上万一ノ事アルモ此寄附金、乃チ尅万五千弗

仕出ノ事ニ関シ決シテ差支ノナキ様ニ取り計ラレ、何時ナリ〔ト〕モ右ノ金額入用ノ時ハ此ノ委員ヨリ送金スヘキ事ニ

決シ置キ、其ノ上ニモ尚此理化学科ヲ皇張セシメンカ為メ、維持費トシテ五万弗ヲ寄附スヘキ事ヲモ約サレ、一兩年中

ニハ悉皆納金ノ見込ニテ、矢張前上三名ノ委員ニ托シ、自身死去ノ後モ右ノ金額ハ其ノ所有金ノ内ヨリ差支ナク

同志  
日本

社ニ送金スヘキ為メ一ノ約条書ヲ認メ、三名ノ連署ニ赤  
(總  
二二二  
印)シールヲ附シテ送ラレタリ

理化学ノ機械類買得ノ為當時米国ノメレーラント洲ボルチモア市ノジョンズホプキンス大学ニ理化学科ヲ修学シ

居ラル、下村孝太郎氏ノ求ニ応シ、理化学機械買得ノ為、先ツ八千弗

〔朱  
補〕

此八千弗モ実ハ充分ノモノニアラス、貴社ニ

テ御記載被下候ナラハ、金額ハ矢張載セサル方カヨロシカト存候」ヲ何時ナリトモ同人ノ手ニ渡スベキヲ承諾セラレ

タリ、但シ此下村氏ハ元來同志社ノ教授タリシニ、此三四年前理化学特修之為米國ニ趣カレ、當時尚ジヨンスホブキ

ンス大学ニアリテ修学中ナルカ、不遠歸朝サレ同志社ノニ於テ設置セントスル理化大学部ニ教授スルノ目的ナル由、

ハルリス氏ハ実ニ吾人ニ何ノ縁故モナキ米國人ナルニ、曾テ吾人カ我カ日本青年黨陶ノ事ニ熱心從事シオルヲ聞キ、

今日銳意文化ニ進マントスル日本人ノ精神ヲ大ニ愛セラレ、其ノ所有ノ金ヲ惜マス喜テ我カ同志社ニ投セラル、ハ真

ニ博愛ノ人子ト称スヘキナリ

何ソ我カ日本ノ同胞ヲ奨励スヘキ事柄ヲ御加ヘ被下候ハ、幸甚

先ハ取急キファクトノミ相記シ候間、願クハ貴兄之御筆ヲ以テ御記シ、可然國民ノ友ニ東京之諸大新聞ニ御掲載被下候ハ、重々

ノ事ニ奉存候

五月十二日

猪一郎君

裏

明十三日中別紙\*ノ如キモノヲ東京ノ同志社募集ヲ承諾シ呉レタル諸新聞、雜誌社ニ送り、尤当地ニテハ十四日

中大坂京都神戸等之新聞ニ記載可仕候

○國民ノ友ニ御記載可被下分モ諸新聞ニ出シ候分ト齟齬セサル様御注意ヲ奉仰候、尤諸新聞ニ出シ候分ハ成丈

穩便ニオトナシク相記し申候

①京都同志社より ②東京赤坂区榎坂五番地 ④墨

本日ハ午前同志社之集りに出頭仕候処、説教之後ニ於て合併之相談有之、先ツ会之修正憲法之下ニ合併スヘキヤ否之問題起リ、合併スヘカラスノ論甚盛ナリシカ、余リ激烈ニ互ルト申ス事ニテ二時間開議之後、遂ニ同志社ヨリ提出セシ修正四ヶ条ヲ此度之総会ニ提出シ、飽マテ之ヲ貫徹スベシ、若シ貫徹シ得サルトキハ云々ノトノ申分アリシガ、云云ニ付キ之ヲ熱議スルノ時間ナキヲ以テ散会セリ

其四ヶ条ハ尽ク記憶ハ仕ラス候得共

第一ニ古キクリードヲ删除スベシ

第二ニ各教会ニ自治ノ主権ヲ有スル事ヲ明言スル事

第三ニ部会ニハ勸告丈為ス事ヲ許シ決行権ヲ与ヘサル事

第四アツピールヲ删除スヘシ

此四点ハ一点モ屈ゲスト断言被得候

此ノ<sup>ハ</sup>全会之輿論ナリ、近頃榎坂より参候書生も有之候間、此人より榎坂之何人ニカ御通知可申候間、此事ハ内々人見君丈ニ御通し、先ツ他ニ内々ニナシオキ可被下候、然シ人見君ヨリ他ニ御他言アルハ小生ヨリ之ヲ禁止スルノ意ナク候、只小生ヨリ此ノ通知アルヲ知ラシムルハ甚不得策ナリト存候、貴君ニも御了察ノ事ト存居候

同志社之生徒全体ニ本日ノ如キ自由ヲ愛スル元氣ヲ示セシハ、小生モ未タ曾テ目撃セサル所ニシテ、小生モ天父ノ恩恵ヲ蒙リ今日迄此ノ世ニ生息スルヲ得テ、如此自由ヲ愛スルノ精神ノ我カ校中ニ発達シ来ルヲ見ルヲ得ルハ、天父ニ向ヒ偏ニ感謝スル所、又生徒ニ対シテ大ニ満足ノ意ヲ抱キ、小生モアマリ無益ニハ今日迄生息セサリシ事ヲ少シク感シ居候、又書生中本日之如キ快楽ニ活潑ニ然しジュントルマンリーニ自己ノ深ク信スル所ヲ述ヘラル、見テ此ノ、多年病魔ノ為ニ制セラレテ漸ク此ノ世ニ生命ヲ偷ミ居ル癯物然タル此ノオヤジモ、少シク此事ニ關係アルヲ知リテ心中竊カニ愉快ヲ覺エ申居候、但シ關係アルトハ小生平素取ル所ハ極端自治論ニアレバナリ

御一覽之上ハ Destroy 被下度候、小生ハ近頃自治主義ニ反對する我カ党ノ具眼者ト自ラ称スルモノヨリハ、少シク御眼ヲ載載キ居申候間、先ツ当時ハ将来ノ策ノ為ニ黙シ居ル事カヨロシカラント存居候

国民ノ友ニテ同志社寄附金ヲ右様御広告被下候、實ニ非常ノ Effort 難有奉謝候、湯浅兄より諸新聞雜誌社ニ御送り被下候廣告文ハ至極ト存候間、多分各社ハ承知致し呉ベシト存候、本日ハ午后多分之来人有之大ニ疲労致し居、乱文之義ハ御免可被下候

五月十二日夜

裏

猪一郎君  
梧下

644 五月十二日

〔徳富猪一郎〕\*

①京都寺丁通丸太丁 ②東京々橋区日吉町廿番地 民友社 ④墨  
⑥日付は消印（京都）による。

別紙<sup>\*\*</sup>熊本より田中君宛ニ而参候間、同君参上候ハ、何卒御渡被下度候也

本日熊本之シトニー キュリク氏より之来状ニハ未タ英文之新憲法熊本ニ達セサル由、委員ニハ今ニ英文ヲ他ノ宣教師中ニ分配セサルヨシ、委員之仕事ハカクモ他人之権ヲ顧ミサルカ如シ、同氏ノ被申候ニ修正憲法も矢張モデーファイドプレシテベリヤニズムなりと断言被致候

先日御覽ニ呈し候米国之新紙数片ハ旧憲法ニ付論セシモノ、如し<sup>（今ニ日本文ノ附録ハ諸教会ニ配布セラレス）</sup>

今夕同志社ニ而は合併先途之方針ニ付相談有之候よし、如何ニ成行候哉未タ相分不申候

ギユリク氏之被申候ニ海老名氏<sup>\*\*\*</sup>ハ中央集権論者ト相変シ○伊セ氏ノ説ナリ、中央部ニ執行之権ヲ有スルハ大運動ヲ為スニ

必用ナリト主唱セラレ候由、彼ハ已ニ平民的之人物ニアラス、此レヨリ執行ノ権ヲ中央ニ握ラントスルハ彼等ノ切望

スル所ト見エタリ、我カ党中已ニ此ノ傾向アルハ小生ノ此二兩年來看敗セシ所ナリ、而シテ憲法ヲ以テ之ヲ決行スル

ニ至レハ、我カ教会ハ将来貴族の独断的政治ノ下ニ生息シ、百年ノ後ニ至ラハ吾人ノ当時甘受スル所ノ自由ハ何レヘ

カ消滅シ去ントスルハ、本日ヨリ断言仕ルベシ、小生近頃黙止スト申居候間、以上ノ言ハ誰レモ他ノ人ニ語ルニアラ

ス、小生ノ最信用致候徳富猪一郎君迄噴火山之勃々ト其焰を吐出スルカ如ク吐露スルノミ、嗚呼

五月十三日

北垣国道

②「御受」④墨

謹啓、陳者過般来少々噂も有之候米国人より敝社へ之寄附之義ハ弥近着之来書ニより確定仕候間、左ニ記し奉達御高聞候

一寄附人ハコンネティカット州ニューヨーク郡之住人ハルリス氏ニ御座候

一理化学教場建築費トシテ曩キニ壹万五千弗之寄附を申込、又右維持費として更ニ五万二千弗を逐加被致候

一右二項之金額送附之義ニ付、同氏之信友三人を撰ミ委員となし、<sup>五</sup>壹万二千弗ハ已ニ委員ノ手ニ相渡シ、何時ニ而も

敝社ニ而入用之節ハ受取得ヘキ事ニ相成居候、且五万二千弗送金之事も多分一兩年中結了可仕計算ニ候而、仮令同

氏之一身上万一不慮之事有之候とも、此三人之委員<sup>ら</sup>なるは同氏之財産中より必らず分割して敝社ニ送る事ニ相成、

三人連署之条約書も此度来着仕候

敝社大学計画ニ付毎々御高配を蒙り候間、先不取敢御報道奉申上候、乍恐縮御序ニ尾越、森本両書記官ニも御通知被下置候様奉希候

右御報道迄、艸々敬白

五月十三日

新島 襄

北垣明府殿

閣下



逐伸、御蔭を以而和歌山募集之事も好都合ニ相運偏ニ奉拝謝候

646

五月十四日 〔同志社幹事〕\*

⑤写真（関一之氏所蔵）

此書持参之板倉正身君ハ備後三上峯村之人ニ有之、曾テ学事ニ尽力セラレ同郡庄原ニ於而英学校を創立セラレ、今度其校之教師を同志社卒業生中より聘し度目的を以而態々来訪被致候次第、如此学事熱心之人ニ有之候ハ、何卒我カ校之事ニ付問合セ等有之候ハ、詳細御答被下度、又校内も一覽之為御案内被下度奉願候、勿々頓首

五月十四日

新しま襄



五月十六日

児玉仲兒\*

①京都寺丁通丸太丁

②和歌山県下那賀郡粉川村

⑤複写（児玉正之氏所蔵）

寸楮拝呈仕候、陳者過般は臨時県会之日取予め御通知被下候付、貴命ニ応シ敝社々員中村栄助氏ニ付添へ従弟同苗公義を出頭為仕候処、諸事御懇切ニ御幹旋被下以御蔭神速之好都合ニ相運ひ、殊ニ貴殿よりも直ニ御寄附被下候条千万忝く奉拝謝候、尚御地方将来之運動ニ付何卒御心添、可相成ハ神速ニ御着手被下候様奉切望候、右為御礼侍史迄、得貴意度、艸々拝具

五月十六日

新島 襄

児玉仲兒殿

侍史

尚々、前般中村、新島之両氏出頭之上紀陽新聞ニも広告并ニ募集取扱等相頼申候処、承諾被致候哉ニ心得居候に、数日前態々一書を遣し右之義謝絶ニ被及候付、又々右依頼可仕心組ニ有之候間、御序も有之候ハ、何卒御奨励被下置度候、大学賛成之事ニ付万一政党派之相違を以而拒絶ニ被及候而は、随分不都合之至ト奉存候、小生等ハ可成文党派坏と兀然して大学之事ニ従事致し居候、自然御面会之節中西君ニも宜しく御談し置被下間敷や、乍去弥不被聞ト申事ならは不得止黙止可仕候

何卒御地方ニ於而は賛成家之熱度を御進め、決而冷却せざる様御工風被下度奉希候

648

五月十七日

上野理一（大阪朝日新聞社）\*

①京都同志社 ②大阪朝日新聞社ニテ ⑤写真（朝日新聞大阪本社所蔵）  
⑥代筆

謹啓、時下益御多祥奉欣賀候、陳ハ弊社大学設立費第一回募集期限中、御取扱被成下候義捐金五百六拾三円参拾貳錢五厘也、三井銀行為替券ヲ以テ御送附被下正ニ落掌仕、段々御手数之程深ク奉拝謝候、右御送金ニ対シ別紙受取証差上候間、乍憚義捐者諸君へ御致声之段宜敷御配慮被成下候様奉切望候、先ハ為御受得貴意度、艸々拝具

五月十七日

於同志社  
新島 襄

於大阪朝日新聞社  
上野理一様

〔大阪朝日新聞社よりの通知書〕\*

払

記

一金百三拾九円八拾錢也 本社新聞掲載金高

内五拾老円七拾錢 貴社へ直送即御請取済ノ金高

〔印〕

指引八拾八円十錢

今回送付金高

右ハ貴社大學設立義捐金第二回ノ募集金額ニ有之、今般満期ニ付別紙第一銀行大坂支店為替証券ヲ以テ及御廻送候条御查收被下候、義捐者ニ関スル明細ハ別冊之通ニ有之、即相添差出申候、右ニテ完了候議ト御承知可被下候  
追而御手数之至ニ候得共、前記金額ニ対スル領収書御廻付被下度候

第一一〇号

寄附金受収証\*

金五百六拾参円参拾貳錢五厘

第壹回募集中御取扱被下候金額

右は同志社大學設立の資金として御寄附被下正に受収仕候也

明治二十二年

五月十五日

同志社々長

新島 襄 印

大坂朝日新聞社  
御中

丙第五八号

寄附金受収証

金百三拾九円八拾錢

第二回募集御取扱ノ分

右は同志社大学設立ノ資金トシテ御寄附被下正ニ受取致候也

明治廿二年

十二月十七日

同志社々々長

新島 襄 印

大阪朝日新聞社

御中

649 五月二十二日

広津友信・花畑健起\*

⑤ 柏木義円 写

本日ハ弥総会<sup>\*4</sup>之初日ニ而如何聯合之<sup>5</sup>談も相行くやと多少之案事なきにあらされ共、最早今となりては大胆ニかまへ自ら信する所に向ひ歩むより外なき事なれば偏に天父之宜しきに御導きあらん事を切望す、小生も病氣にて今回之総会ニ出席之成らざるは遺憾ニ候得共、小生ノ一身ハ天父之御手ニ任せ出席するも幸出席せざるも亦不幸と認不申、甘んじて天意之存する所ニ随のみ

昨日上州ノ連中又小崎、市原などに面会申候、此度ハ議場ニ分争などの出来ざる様懇談会の如きモノニテ御説諭ノ如キモノハ加へず、只々各代議人之意見、乃チ各会之意見を問合セ為ニ到底調和之見込なき時ハ聯合相談御中止、否停止スルニ如カスト申合置候間、左様御承知被下度候、乍去議場ニ臨ミ此前ノ如ク宣教師方カ統々起立、誘導を試みら

るゝか如き場合に及はゞ君等よりも動議を起し彼シドニー・ギュリク氏之スピーチを求むへし、同氏ニハ今回一つ吐露意見あるよし、同氏ハ平和を破るを好まず他より平和を敗り来るニ於テハ同氏も平素之持論防禦之為不得止弁護に可及候間、此段御含被置度候、右は得貴意、早々頓首

五月廿二日

襄

広津友信

兩友

花畑健起 御中

小生ハ偏ニ天父之御導きを仰ぎ、只々将来我邦家改進黨達す可きに尤適當なる所を示し賜はん事を祈居候

650 五月二十三日 海老名弾正

②神戸下山手通六丁目、鈴木清様氣付 ⑤復享（海老名道子氏所蔵）

取急乱文ハ御免可被下候

先般来北垣之令息御厄介相願候處、遂ニ入校相許被下候よし真ニ奉万謝候、已ニ申上候通、北垣知事ニも甚困却致し被居候よし、然るに先般小生方に御遣しの書面を同氏安心之為相示し候ハ、大ニ被喜、逐而謝礼書も可呈旨被申候、

依而甚恐入候得共入校后之様子如何有之候哉、トテモ半年哉一年モ経過せされハ漸く九州男子之氣風を吸収するハ難期トハ存候得共、先ッ落付勉強被致候ハ、少しく安心可仕候間、何卒一寸確君之近情御知セ被下間敷也、知事ニも明後廿五日ニハ上京可被致候間、可相成ハ其前ニ令息之近情吹聴致し候ハ、大ニ可被喜ト存候間、右ニ付御回答之程奉仰候、右得貴意度、艸々頓首

五月廿三日

新島 襄

海老名彈正兄

今回之聯合相談ハ何卒分裂之生せざる様平穩ニ結局候様奉切望候

651

〔五月〕二十三日

広津友信・花畑健起\*

⑤ 柏木義田 写

御書拝見仕候、陳者已ニ憲法逐条審議ニ御取懸リ之よし、是迄ハ一致の方より重モニ其 Form ニ関し此方ニ申込タルニ、此方ヨリハ之ヲ擯斥セリト世間ニ明言シテ狹隘ノ罪ヲ吾人ニ帰セラレタリ、依テ今回ハ吾人ノ方ヨリ此レノ Condition ヲ以テ聯合スヘシト先方ニ申込ミ、先方ニテ之ヲ受ケサルノ日ハ狹隘ノ罪独吾人ニ止ラス、今回ノ憲法中

枝葉ハ兎モアレ我ガ自治主義ノ大本ヲ固守シ主權ノ教会ニ存スル事ヲ明々白々ニ憲法中ニ一大書スルヲ以テ憲法審議  
ノ大眼目トナシ度候

○部会ハ即各教会代人ノ集合場ニスル可ナリ

(ギュリク氏ハ克ク憲法ヲ分析セリ一応御相談アレ)而シテ此ノ再修正ノ憲法ヲ一致ノ方ニ送り聯合ヲ促スハ上分  
別ナリト存候、其上彼レ採用セサルニ於テハ一致会吾人ノ申分ヲ取ラス、吾人ノ自治自由主義ヲ容レスト申ス事ニ  
成リタル上可然前途ノ工風ヲ致度候、艸々敬具

廿三日

襄

広津

兩君

花畑

御中

652 五月二十四日

北垣国道

①「差上置」

②「乞御親展」

④墨

肅啓、陳者先朝は罷出一応御依頼可申上積ニ御座候而、遂ニ打忘候事有之、又々參堂仕度奉存候得共、却而御迷惑ト  
奉存、茲ニ拙書を以而願上度事件ハ、本年六月之末ニ京都看病婦学校卒業式執行仕度候間、極簡短なり共閣下之御祝

文を載<sup>〔殿〕</sup>キ度一事ニ御座候、万一御臨席相叶候ハ、該校教師初生徒之面目とも奉存候得共、右御都合不相叶候ハ、尙通之御祝文御送附奉願度候、本日ハ定而御多忙ニモ可被為在候間、御回答ハ令夫人様ニ御托し置き被下候様仕度、何レ愚妻も近々参館否之所御伺可仕候間、左様思召被下度奉希候、右御願迄得貴意度、草々拝具

五月廿四日

新島 襄

北垣明府殿

閣下

逐伸

看病〔婦〕学校卒業式ハ来六月二十五日午后ニ有之、卒業生之員数ハ七人ニ御座候

653

五月二十五日

柴原宗助<sup>\*\*</sup>

⑤写真（金沢豊治氏所蔵）

肅啓、陳者今午后五時比より坂田先生と貴兄之御来車を仰き、三本木茨木屋ニ而晚餐を奉呈候間、御操合御光来賜ラハ幸甚之至ニ不堪候、右得貴意度、艸々敬具

五月廿五日

新島 襄



柴原宗助兄

梧下

尚々、四時半比より拙宅へ御越し被下候ハ、御同行仕度候、尤坂田先生ニハ直ニ三本木ニ御越被下候様申上置候

654 五月二十七日

大和博\*

④墨

華墨拝誦仕候、陳者過般御依頼申上候処之同志社大学資金募集之義ニ付、御地方ニ而御尽力被下、其集金ハ民友社ニ御托し相成候よし、御手数并ニ御好意之程千万忝く奉拝謝候、願クハ今回を以而募集結了と不被認、尚将来も御機会あらは大学之為御募集被下候様奉切望候、右為御礼得貴意度、如此候也、早々貴答

五月廿七日

新島 襄

大和博様

梧下

尚々、佐藤好順君ニ御面会之節ハ宜しく御致声被下度奉希候也

655

五月三十日

北垣国道

⑤ 森中章光写

肅啓、陳者昨日拙妻より承り候に、閣下ニハ近頃御不例之由大ニ心配仕候、何卒御休養之程伏而奉切望候、扱昨日来着之米信中、兼而弊校へ六万七千弗(五万ハ維持費 他ハ建築諸雜費)寄附致し呉候ハルリス氏より、又々三万三千円(弗)之逐加寄附致し合計十万弗ニ可致旨申来候間、此段不敢御報道奉申上候  
右御起居奉伺旁米信之御報仕度、如此候也、敬白

五月卅日

新島 襄

北垣明府殿

閣下

656

六月一日

徳富猪一郎

① 京都寺丁通丸太丁

② 東京々橋区日吉町廿番地

④ 墨

今回組合会之結議等ハ大体基督教新聞ニ而御一覽可有之候事ト存候、貴兄御預言ノ如ク此度も矢張ブチコワシ集候

而、バツトフーリングを互ニ相離散セシ様相見申候、老人連中よりも若手之論鋒自由主義ニ基キ滔々ト弁セシニヨリ、到底常常ノ手段デハ片付マジクト存し、懇談会ニテ小児オドシノ如キ手段ヲ旋サレシハ、一ハ若手ニ激シ隠ニ若手ノ尻オシナルモノ何人ニカ激シ非常ノ過論ヲ為セシヨシ

此レハ余リ若手ノ正価ヲ見サル近眼家ノ所為ナリト云ハサルヲ不得、又反対者ヲ敗壞論者ト見ナシ右之手段ニ及ヒシハ、矢張彼等淺慮薄智ノ敗壞論者ト云ハサルベカラス

又同志社之固ク自由主義ヲ取ルヲ見テ小生カ然ラシメシト申立ツルハ、真ニ同志社ノ真価ヲ見サルモノト云ベシ、多年達育セシ自由空氣カ然ラ「シメ」タレハ、何人モ之ヲ左右スル能ハサルヲ知ラサルハ実ニ淺見者ト云ハサルヲ得ス

小崎、湯浅等ハ小生ニ向ヒ最終ノ方針ヲ決セヨト勸メラレ候得共、小生ハ確答ヲ為シ不申候、之テ小生ノ心情ヲ察セサル所為ニテ如何ニモ感服ノ出来サル次第

一ハ二三ノ教会カ不服ヲ申セハ、之ヲ捨テ、モ合併スベシ

二ハ一二ノ教会カ不服ヲ申サハ、先ハ合併ハ見合ニスベシ

此ヨリ先キハ此ノ二手段ニ出ルニ他ナシ、彼等ハ已ニ御聞及モ有之候通、先夜ノ懇談会ニテ一二ノ教会カ不服ヲ申セハ之ヲ捨テ、モ合併スベシト断言被致候は、小生ノ考ヘニハ<sup>〔朱丸〕</sup>大失敗ノ所為ト存候、小生ハ此ノ大失敗ニ同意ハ出来兼

候間、篤ト勘考ノ上確答スベシト申シテ、先ツ平氣デ其場ヲ過ゴシ申候得共、早晚誰レヘカ偏セネハナラス事ト存候、

第二ノ手段ニ決心可仕ト存し候得共、断然彼等ト反対ノ地位ニ立チ敵意ヲ示スモアマリオトナゲナキ事ニ候得ば、尚

此上も彼等ヲ敵視セス、又我カ同意者ハ殊更敵視セス、両間ニ跨カリ双方ノ仲裁人トナリ度存候間先ツ<sup>〔通知〕</sup>知通申上候、

先日モ小崎、湯浅兩人カ小生ヲ其党中ニ入レ度否小生ノ意見ヲ聞カレ度被存、戒規申告ノ二件ニ付相談ニ被及候トキ

モ幾分枉ケニマイルドニ地位ニ立チ少々位ハ枉ケテヤツテモヨクハナイカ

○戒規ノ件ニ付凡テ教會員タルモノハ其所屬教會〔赤インク〕「此レハ牧師モ此中ニ入ル、精神ナリ」ニ於テ戒規ヲ受ベシ、乍去教師ハ部

会ニテ按手礼モ受ケタレハ、部会ニ「於テ」戒規ヲ受クモアマリ不当ニハアラス

此レハ修正憲法トハ又少々ノ修正ヲ加ヘタル論ナリ

申告ノ点ニ付申告ハ元來癡癡ヲ望ミタレトモ、是非入ル、ナラハ教會ノ要求ニ応〔シ〕勸告モスベシ、又判決モ為スベシトアレハ随分勘弁カ出来ル云々、之レモ修正憲法ヲ又々修正シタル論ナリ

小生モ如斯論セシハ前説ヲ變セシモノニアラス、小生ノ説ナレハ自治主義ヲ決シテ害セスト存候、又右様マイルドノ説ヲ出セシハ、小生ハ徹頭徹尾彼ノ若手ノ如ク彼等ト反対スルハ決シテ宜シカラスト存候〔得〕バナリ

此一点ハ若手ニモ誤解ナカラン事ヲ要ス

今日ハ彼老成人中ハ尽ク非常ナル情疑〔弱〕ノ眼鏡ヲ以テ小生等迄モ見ラレ候間、決シテ小生ノ心情ハ了察シ呉不申、又小

生ヨリ若手ニ文通スルカ如キハ彼等ノ甚恐ル、所ノ如クニアレハ、此上ハ何人ニモ文通不仕、只小生ヲ克々洞察シ賜

フ〔當時教會外ニアレトモ〕貴君一人ニ吐露シ得ルノミ

彼等ニ対シ回答セント考ヘ別ニ喋々セスシテ只簡短ニ

一 生ハ彼等ニ向ト敵意ヲ抱クモノニアラス

一 彼等大砲ヲ打生ニ来ラハ、生ハ甘シテ其的以テトナルヘシ

一 一二ノ教會ヲ捨テ、モ合併スルヤ否ノ問題ニ至リテハ、李伯〔白〕ノ詩中ノ句ヲ以テ之ニ答フヘント存候、曰ク

騶虞不折生草茎

此レハ真ニ小生ノ心情ヲ貫徹シタルモノナリ

一 左レハ反対ノ地ニ立ツモノナリト云ルレハ、生ハ只々カク陳センノミ

君等小生ノ心情ヲ察セサルニ付<sup>ノ</sup>キ甚キヲ嘆キ

心中如湧 血涙潜々

右様陳シオク積ニアリテ、此上彼レ此レ面倒ナル事ニハ立入ラサルツモリニ候間、此段只々貴兄迄御通申上候  
此書ハ将来ノ為貴兄ノ御手許ニ御置被下度候也

六月一日

襄

猪一郎兄

657

〔六月一日〕

徳富猪一郎\*

④墨

慶応義塾ニモ一万三千ヨ出来候ヨシ御通知被下難有奉謝候

今回之社員会ハ一昨日結了、小生も意外ニ疲労し昨日も今日も休息致し居、一書相呈し度存候処、遂ニ延引ニ相及申候段御免可被下候

扱社員會議中種々ノ事有之候得共、逐一記載スレハ中々長文ニ相成可申候間、湯淺兄ニ相托申置候

今夕ハ少々気分宜しく漸く筆を把り様ニ相成、電報を以テ慶応義塾之寄附御知被下貴君之御好氣を謝し旁今回組合

会之情況をも申上度候間、別紙御一覽可被賜候、又今回米国之ハルリス氏よりハ逐加寄附として先之六万七千弗ニ三

万三千弗を加へ、合セテ十萬弗と成し吳申候、実ニ氏之好意ニハ感服之外無之候、尤前注文之通右之資本ハ全ク理化

学否サイ「エ」ンテフィクスクール之維持費に相充可申旨申来候、是亦御承引被下度候也、右は取急得貴意度如此也、

早々頓首

新島 襄

徳富猪一郎兄

梧下

六月二日

徳富猪一郎\*

①京都寺丁通丸太丁

②東京赤坂区榎坂五番地

④墨

御書面ハ尊宅ニテ御披見被下度候、又御用スミノ上ハ別紙御ヤキ捨被下度候

此ノ草案ハ貴兄ノ御友人中只一人丈ケニ御示し被下度候

本日小崎（湯浅氏ニモ）氏ニ相送候書面之草案ハ念之為奉呈貴覽候、此レハ此レハ小生ノ立前ヲ示シ度候、縦令小生ノ名ヲ奇貨トスルモノアルモ、小生ノ心情ヲ知レルモノハ之ニ誘導セラレサル様御注意有之度候、若シ小生ノ名ヲ乱用スルカ如キ場合アラハ、速ニ御知セ被下度候、小生ハ新聞紙上厳正中正ノ地位ヲ持ツト明言可申候間、左様御心得被下度候

（神戸総会ノ決議ハ不満足ナレトモ一步モ其レヨリ引カサル覚悟ハ同想者中必要ナリト存候

（自治党主義ノ連中ハ其ノ自カラ信スル所ヲ固ク執ルヨリ他ハ良策ナカルベシ

先達而之社員会ハ何レ湯浅氏ヨリ可申上候、草案ハ金森先生ノ手ヨリ（社長代理トシテ）、同氏ハ七月ヨリ先一ケ年間校長之任ニ当ル事ニ決セリ（注ニ曰、総長代理ハ権カナイト申ス事承リ申候、此ハ極内々申上候）

他ニ湯浅之持参候元素ニ付一々御尋被下度奉願上候

六月二日

徳富兄

襄

小生も時々貴兄を思出し時々心胆を吐露して諸事御協議仕度候、小生ヲ知ル者ハ天下只猪一郎君アルノミ、小生モ一方ニハ心細ク存候得共、君一人アルヲ以テ亦心大ク罷在候

659

〔六月二日

小崎弘道〕\*

④墨

先夜御同車之節一寸神戸總會之情況を御談有之候節、小生ハ実ニ呆了果何ニとも御答之出来兼タル次第、右様御情疑〔中〕もアリシ事ナラハ一応御打合モアリテ可然ニ、左之御手続もナク平常老練家なる諸兄ニシテ、若手ニ向ヒ何ニカ強迫ガマシキ御手段ノアリシハアマリ上出来トハ申兼、又殊ニ一二之教会カ不平ヲ鳴ラシテ同意セサレハ、之ヲ打捨テ、モ合併ス云々ト御断言アリシ等ハ、若手ヲシテ恐縮セシムルヨリモ寧ロ益激抗セシメタル甚淺薄ナル御所為ニアラスヤト懸念仕候、最終之方針ヲ示セヨトノ御談判乃チ一二之教会カ不同意ヲ唱フルナラハ之ヲ捨テ、モ合併スト断言サレタル〔筋〕タル以上ハ、遂ニハ合併スヘキモノスラモ分離セシムルニ至ラシムルノ御所為カト被察候、又右様過激強迫然タル御所為ハ老成人ナル兄等ニシテ一ノ失敗ト見ナサ、ルヲ得ス、小生ハ「〔赤インク〕甚賛称セサルナリ」、而シテ小生ニ向ヒ直ニ兄等ニ同意セヨトノ御勸ノ如クニ相見ヘ候得共、小生ハ右ノ失敗ヲ称賛ハ致サ、レトモ、又不同意トハ断言不申、又弥方針ヲ定ヨト御セマリ被下候ハ、小生ハ只曰ハン



〔赤インク〕  
「傷メル章ヲ折ルコトナク、煙レル麻ヲ熄スコトナシ」

●●●●●●●●●●  
騷虞不折生草茎

此レハ実ニ小生ノ心情ヲ貫キタルモノナリ

左レハ新島氏ハ後非合併ナリト云ハル、ナラン、然ラハ兄等ハ小生ヲ強テ敵対ノ地ニ置クノ御所為ニシテ、少シク小生ノ心情ヲ御洞察ナサレサルニ似タリト考ヘ、小生ハ只天ヲ仰キ

心中如湧 血淚潸々

小生ハ強イテ兄等ヲ敵トナスノ心アルモノヤ否ヤ、只々兄等ノ御熟考ヲ仰クノミ

660 六月四日 井上馨

⑤写真（国立国会図書館憲政資料室所蔵）

肅啓、逐々暖氣催候際 閣下之御起居如何慎而奉伺候、陳者過般御來神之節強而拝謁を相願候廉ハ何卒御海容被下度奉希候、其第一応御願申上度存居候得共、御不例之趣承知仕候間、先控置、今回北垣知事出京被致候間、同知事ニ御頼ミ申、過般原六郎氏ト渋沢栄一氏之間ニ少々例之寄附之事ニ関し面白カラヌ書面之原氏より渋沢氏へ参リシ事等有之、又其源因を推察仕候ハ、原氏カ何ニカ小生ニ対し誤解被致候廉も有之やに承り候而、事少々込ミ入申書面上ニ

難尽事件を、此度可成丈了明ニ北垣知事ニ示談仕、原氏之誤解を解散し、兼而御配意により例之六千円も此<sup>六</sup>五月中ニハ渋沢氏之手許迄被相送候様仕度候間、右之誤解弁解ハ北垣知事ニ相托候得共、例之六千円ハ閣下之御高配を奉仰度候間、何卒此儀ハ御含置被下候様奉懇願候、小生ハ金サヘ取レハ後ハカマワヌト申ス如キ輕薄ナル者ニ無之事ハ、御序ニ原氏ヘ閣下よりも御談置被下度奉仰候、過日已ニ新聞上御覽も有之候通、近比米国之有志家コンネカット洲ニューロンドン邑之ハルリス氏より、理化学教場建築之為一万七千弗寄附相成、統テ五万弗ヲ右維持費トシテ寄附致し呉候処、近着之來信ニヨレハ又々三万三千弗ヲ逐加スヘキ計画モ有之候由、友人より通知有之候間、此レハ当人之望ニ応し全ク理化学之為ニ相用候事ニ決定仕候

昨十一月より本年四月迄之寄附金ハ僅カニ老万<sup>ニ</sup>有之候得共、決而落胆不仕益勉強可仕候間、左様思召尚将来も閣下之一臂を御添被下候様奉仰候、過般御話被下候通、原氏ヨリ六千円差出呉候ハ、渋沢氏之手許ニ有之候分ニ加ヘ候而二万五千六百円ニ相成可申候間、其利を以書生二人丈ケハ将来大学教授準備之為、独乙ニ遊学ニ遣し得ヘク候間、此辺も御含置被下度候、其後御無音申上候間、御起居奉伺度、且前上之事件も御含置を奉願度、如此候也、敬白

六月四日

新島 襄<sup>㊦</sup>

井上伯爵殿

閣下

逐伸、逐々暖氣相催候間、折角御自愛被遊候様奉切望候

乍恐縮令夫人様へ御致声被下度奉願上候

## 〔六月七日〕

ハリス\*

④墨、朱 ⑥日付は「同志社社員会記録」六月七日の条による。本文墨筆は  
新島による。抹消、補訂は朱筆でなされ、全て異筆である。

謹テ書ヲハルリス老台ノ下ニ呈ス、陳者貴殿ニハ昨年来敝校ノ為ニ深く顧慮スル所アリ賜ヒ、続々巨額ノ金ヲ寄附セ  
ラレテ、遂ニ拾万弗ノ多キニ達セシメラレタリキ、嗚呼貴殿ノ寄附ノ如キハ我カ東洋未曾有ノ美挙ニシテ、其ノ恩惠  
ヲ被ル吾ハ真ニ我カ同胞ノ被ムルヘキ<sup>福社幾何ハカリゾヤ、</sup><sup>〔補〕</sup>「実ニ其恩惠ノ深サ高サハ」海山只ナラス、我カ同胞モ之ニヨリ永ク福利ヲ受ク  
ル可キ福利ハ窮極ナカル可シ<sup>〔補〕</sup>ヘシト断言セサルベカラス、依テ吾人ハ慎テ貴殿ノ旨意ヲ奉載シ、一大理学部ヲ設立シ、之ヲ同志社大学ハルリス理  
学部<sup>〔補〕</sup>一部ハ館ノ誤ニアラザル乎」ト称シ永ク後世ニ垂<sup>伝ヘ</sup>レ、貴殿ノ鴻徳ヲ明表シテ忘ル、事勿カラシメント欲ス、今回  
我カ同志社々員一同ヨリ特ニ謝辞ヲ呈スヘキ旨ヲ襄ニ托シタレハ、襄茲ニ一書ヲ認メ貴殿ノ好意ヲ鳴謝シ、併セテ天  
父ノ限ナキ恩寵永ク貴殿ノ上ニ止ラン事ヲ祈ル、敬白

ハルリス老台閣下<sup>侍</sup>同志社長總代 新島 襄<sup>員</sup>

662

六月七日

中村栄助\*

④墨

明七日午前第九時、山本氏方ニ而同志社々員常議會相開申度候間、御光来奉仰度候、万一御留守ニし而本日御帰宅之事も御分りに相成不申候ハ、其由御知セ被下度候、私より電信ニ而御帰を御促かし可申候、甚乍御手数神戸之御所書キ御知セ被下度奉希候、以上

六月七日

中村栄助兄

新しま襄

663

六月八日

小崎弘道\*\*

④墨

貴書拝見仕候、貴書中小生之申上候過激之御所為に付、誤解被遊候様相心得申候間、之ヲ改正申上度候、過激之所為ト申タルハ總會議決ヲ差指しタルニアラス、已ニ御面会之節モ右決議ニ付キ不同意トモ不申、小生ハ議決ニ付キ申シタ

ルニアラス、<sup>〔朱丸〕</sup>懇談会ニ於而一二ノ教会デモグツミミ不同意ヲ申シ立ツルナラハ、之ヲフリ捨テ、モ合併ス云々ト「或  
ル老練家カ」仰セラレタル事ナリ、此レは或ハ最後ノ止ムヲ得サル手段カハ存し不申候得共、何ニトナク激シオリタ  
ル若手ニ向ヒ右様ノリマールクスヲ発言サレタレハ、漸々ト説明ヲ下セハ或ハ貴兄方ニ御同意モ申スヘキモノモ、意  
気ハリヅグニモ合併ハセヌトノ氣込ヲ起スモ計ラレス、一二ノ教会ヲ捨テ、ヤルト断言セラレタレハ、捨テラレテモ  
合併ハセヌソト申ス輩モ起リハセヌカト杞憂致候ヨリ、小生ハチト称賛シ能ハサルナリト貴兄迄申上候次第ナレハ、  
總會ノ決議ニ不同意ト御取被下候テハ、全ク小生ノ意ニ無キ事ヲ御想像被下候事ナリ、書中總會ノ議決ニ不同意トノ  
言葉有之候也、<sup>ヤ</sup>今一回御一読被下度候也、先貴兄之誤解ヲサシ正誤仕度、如此候也、貴酬

六月八日

新島 襄

小崎弘道兄

664

六月十二日

中村栄助

- ①寺丁丸太丁 ②京都市五条橋東二丁目 ③はがき ④墨  
⑥日付は表書による。

金森氏校長委托之申渡し<sup>\*</sup>ハ、明朝午前第七時三十分礼拝堂ニ而生徒一同之前ニ執行可仕候間、可相成ハ御臨場被下度

奉希候也

665

六月十四日

宮口二郎\*

⑤森中章光写

過日は静岡より御書御投与、又御安着之御報被下大に安心仕り候、何分御弱体の事なれば諸事御注意充分御撰生被遊、又他年来校之事を切望仕り候、途中にも種々御心配被成候事と遙察申上、殊に母上様には永々之御看病にて御疲労も可有候間、何卒御用心被遊度、是亦奉切望候、先は不取敢貴答迄、艸々敬具

六月十四日

新島 襄

宮口二郎兄

梧下

尚々、令閨様并令息に宜敷御致声被下度、又杉山牧師、半田、中島、綱屋之諸家へ宜しく御伝言被下度奉希望候也

①京都寺丁通丸太丁 ②東京麴丁下二番丁七十一番地 ④墨

本月十三日之御書拜見仕候、先日申上候事ハ已ニ御承知之通、総会之不同意と申せしに非らず、只懇談会中何人か之リマールク中に一二之教会も不同意ヲ唱ふナラハ、之ヲ捨テ、モ合併スヘシト仰レタル事ハ、小生ニハチト称賛ハ出来サルナリト申上候事也、其理由ハ右様発言アリタル上ハ円滑ニ談判モト、キ、合併ニモ致ルヘキモノモ之ヲ激セシメテ、遂ニハ意氣張ヅクニモ合併セスト主唱セシムル事ニ至リハセヌカト存シテ、如斯申タル次第ニ候、右ノ事ハ貴兄ヨリ御発言ナリシヤ、又他ノ兄弟中ヨリ出シヤ、懇談会中ニ右様ノ語ヲ発セシモノアリシト承リ、余リ過激デハナイカト存スルヨリ貴兄迄申上候次第、<sup>貴兄ニ</sup>小生モアレ又他ノ兄弟ニ致セ右様ノ発言アリシハ、他ヲ誘導スルヨリモ却テ激セシタルナラント存シ、幸貴兄ヨリ御談モアリタル事故申上タル次第ニテ、老練家一体ヲ攻撃シタリト御取り被下候而は迷惑ニ候、其ノ発言アリシハ甚オンハピーノ事ト存スルヨリ申上タル也

先日申上候内、貴兄ニシテ御存知ナキ事カハ存シ不申候得共、先般湯浅兄ヨリ小生ニ御談有之候際、一二ノ教会ヲ捨テ、モ合併スルノ方計ヲ取ラネハナラヌ場合ニ立至ルトキハ、小生ニハ如何ノ方針ヲ取ルヘキヤ御問アリシトキ、小生ハ即答スル能ハサリキ、小生ニハ取違ヒカハ存シ不申候得共、一二ノ教会ヲ捨テ、モ合併スルト云フ事ニ同意セ「ヌ」ナラハ、トリモ直サス非合併者ト見做サ、ルヲ得スト云ハレタル所ヨリ、熟考ノ上右様ノ問題ニ容易ニ即答モ出来サル所ヨリ、小生ハ只黙シ居申候、貴兄ヘ呈セシ書中ニ右ノ問題ニ即答セサルモノハ（湯浅兄ノ語氣ニヨレハ）、

其者ヲ非合併者ト見ナスト云ハレタルガ如シ、故ニ即答セサレハ非合併者ト見ナサル、ナラハ、即答ノ出来サル小生  
ヲ反対ノ位置ニ逐ヒヤラル、ニ似タリト思フ所ヨリ、貴兄ヘノ書中ニ相記シタルナリ、小生ヨリ湯浅兄ニ特別ニ申上  
クヘキヲ貴兄ヘ申上タルハ小生ノ誤ニ候ハ、此点ハ御海涵被下度候也、兎ニ角右之問題ハ中々紙上ニ尽シ難キ次第  
ニ候ハ、貴兄近々御西遊之際御示談仕度候、小生力鮑適合併ニ反対スルモノナラハテハ、先般貴兄ト湯浅兄ノ御来  
訪ノトキ申告戒規ノ二点ハ小生ノ開陳シタル通ニテ、成丈双方ノ習慣ニ反セサル所ヲ執テ御答申上候次第ナレハ、小  
生ハ徹頭徹尾合併ニ反対スルモノニアラサル事ハ明ナリト御賢察有之度候也、右は貴答迄、艸々頓首

六月十五日

新島 襄

〔朱〕

一〇教会ノ依頼ニ応シテ部会ニハ申告ニ対シ勧告モスヘシ、又判断モスヘシ

此レハ双方満足スルナラント存候」

小崎弘道兄

逐伸、小生ニ於テ兼テ尊敬スル貴兄ニ対シ、少シクモタイムリーリング無之事ハ天父之前ニ断言仕候間、左様思  
召被下度候也



六月十八日

北垣国道

⑤ 高橋元一郎写

肅啓、御着京後如何御起居被遊候哉、最早入梅ニ相成候間、殊更御注意御加養被遊度奉切望候、陳者過般書面にて相願上候通、京都看病婦学校ニ今回七人之卒業生有之候付、御来臨被下御祝詞を奉願度、又御不在ならは御祝文を御送附被下度奉切望候

且此度ハ看病婦学校同志社女学校二校の卒業式にて来廿七日同場同志社公会堂にて合併執行可仕候間、可相成は御祝文中先女学校へ御一言被下、続て看病婦学校へ御一言被下様奉仰候、右取急ぎ侍史迄得貴意度、艸々敬白

六月十八日

新島 襄

北垣明府殿

閣下

尚々、女学校ニ於テハ五人之卒業生有之候間、是亦御承知被遊度候、土倉政女ハ其一人ニ御座候\*

668

六月十八日

田中賢道<sup>※</sup>

④ 墨

肅啓、陳者過般拝眉之際小生之胸算丈申上置候通、今般同志社々員評議會ニ於テ議決之上、敝社計画ニ関候私立大学資金募集之事ニ付、九州一円遊説之義ハ貴殿へ御依頼申上度候間、此段御承引之程奉仰候也、敬白

明治廿二年六月十八日

田中賢道殿

梧下

京都同志社々長

新島

襄 印

六月十九日

金森通倫・加藤勇次郎・浮田和民・奥田吉次郎・山路一三・  
 福島綱雄・藤田愛二・坂田丈平・南熊夫・清水泰次郎・  
 志垣要三・森田久万人\*

⑤ 森中章光写

肅啓、梅雨之時節各位弥清適奉喜賀候、陳者当期近日を以而其局を結ひ可申候付、御互ニ諸方ニ散せざる先キ一日を期し甚爽快なる懇親会を催度候間、右義御賛成ナラハ貴名之上に点懸ケ又ハ御調印被下度候、且御一同御同意之事ニ候ハ、小生より会場并ニ食事等周旋委員トシテ左之三名ニ御周旋之勞を御依頼申上度候間、是亦御同意被下度候

周旋委員

加藤勇次郎君 山路一三君 志垣要三君

三君ニハ御辞退無之様奉希候

但シ会費トシテ各位方三十錢御持参被下度候事

又会日ハ此ノ土曜日ハ如何、且来会之時刻等ハ周旋委員方之御決定ニ御任申置度事

廿二年

六月十九日

発起人

新島 襄

金森 通倫兄

加藤勇次郎兄

浮田 和民兄

奥田吉次郎兄

山路 一三兄

福島 綱雄兄

藤田 愛二兄

坂田 丈平兄

南 熊夫兄

清水泰次郎兄

志垣 要三兄

森田久万人兄

諸兄記名ハイロハ順序ニ従ひ候事

御書拝見仕候、陳者栃木御移転之事ニ付縷々御申越之段委細承知仕、御意見之所ハ御尤至極大賛成仕候、乍去茲ニ第一之注意を可要事ハ

バプテスト派伝道者ト御照会御移転アリテモ異存ヲ申立テサル様予メ承知セラルメ、共ニ相助ケ双方之働キヲ防<sup>シ</sup>ケサル様可仕トノ御約束アルハ大切ノ事ト存候、又小生ヨリ伝道会社ニ申立ツルヨリモ、寧ロ上毛教会之牧師ヨリ該会社ニ御照会アル方可然ト存候、而シテ貴兄ヨリハ、上毛牧師ニハ佐野ニ住居スラノ都合モ出来ス甚困難ヲ究ムルニヨリ、一ト先引キ揚ケ栃木ニ移リ、該地ヨリ一週ニ一回位佐野ニ伝道シテ働<sup>シ</sup>ヲツ、ケ、栃木ニ着手シ、又加鹿沼ニ伝道スルモ栃木ニ移転スルハ便利ナル由詳細ニ御陳シ被成、又栃木ニ御移リナラハ講議所<sup>〔義〕</sup>ノ費用トシテ月ニ二円、又近傍鹿沼伝道ノ為トシテ一円ツ、一ケ年間小生ヨリ支弁可仕候間、右之趣キハ上毛ノ牧師中ニ御通し、其賛成ヲ得テ伝道会社ニ御照会アラハ却テ都合宜シカルベシト存候、尤伝道会社ヘハ栃木ヘ移ル事ナレハ、或ル有志家ヨリ講義所并ニ伝道費三円出スモノ有之趣ヲ以懸合、小生ノ名義ハ御差出ナキ方可然ト存候、且上毛牧師ヘ御通知之トキ栃木ニアルバプテスト派ノ伝道者ニモ異存ノナキ旨モ、能々御通しニ相成候事ハ至テ大切ニ候間、此点ハ予メ御準備被下度候也、右は栃木御移転大賛成仕、至急御回答申上候也

六月廿二日

新島 襄

中山光五郎兄

栃木ニ御移ナラハ、小生モ及丈ヶ当夏ハ佐竹君ヲ御加勢ニ御地方ニ出テラレ候様可仕候  
何卒勇進御移転之御計画可被成候

671

六月二十四日

堀俊造\*

④印刷

⑥封筒あり

拝啓仕候、陳ハ本月二十七日当学院内礼拝堂ニ於テ、第十四学年卒業式挙行候間、午後二時御貴臨被成下度、別紙執  
行順序相添御案内仕候、頓首

明治廿二年六月廿四日

同志社学院長 新島 襄

〔墨〕  
堀 俊造「殿

六月二十八日

徳富猪一郎\*

⑤写真（徳富蘇峰記念塩崎財団所蔵）

草不謝榮於春風　木不怨落於秋天

誰揮鞭策驅四運　万物興歇皆自然

如此小生之生死も偏ニ天父之手裏に在り存する事なれば、人間榮枯之如きハ喜ぶニも足らず、又悲むにも及ハず、親友中区々たる誤解も強て弁解するに及ぶ間敷、又差々たる世評も敢而意とするに足らず、従容身を自然ニ委ね魂を天父に任せ、慎而其摂理内ニ徘徊するを以而畢生之大歓樂となし、甘んじて小生之デスティニーに達せんと覺悟致し候ハ、聊平安を心に曉申候

扱小生も多年平素多病之事なれば、今より活眼を開らき小生之後任に注目し置くは、余り杞憂に過ぎたる事とは存し不申候ハ、後任者指名之義ハ遙かに小生に優りたるメンタマを具有し賜ふ貴兄之御意見に御任申置度候間、左様御承引被下度候也

廿二年六月

新島 襄

徳富猪一郎賢兄

尚々、先日来金森氏とハ充分打合せを為し将来之事共等相托し候間、同氏ニも充分注意致し呉候事ト存候間、

此段御通知申上置候、同氏カ弥後任者ト相成可申かハ自から別之問題ニ有之、此ノ一ケ年間之手ギワを篤と見届申度候小生之固執来候主義ハ御存之通、自由宗教ト自由教育ニ有之候也

小生之一身上万一之事有之候節ハ、総長撰挙之義ハ只々僅々なる社員ト教授会之手ニ任かせず、卒業生全体之意見ヲ克々聞糺シ可然人物を御撰被下度候様仕度候、我カ社員中ニも二三之者ハ他人之意見通り之好人物有之候間、社員中多数ニ而決定せしめハ随分懸念之至なり、貴兄予しめ御準備被下度候

六月廿八日夜

襄

猪一郎兄

世間多凡庸 凡庸占世間

小生ニハ大学ノ益必用を感じ居申候、本日米国より之来状中ニも、或ル教友輩ハ小生大学ノ企ニハ大ニ懸念致し居ルモノモアルヨシ、彼レモ亦凡庸



六月二十八日

徳富猪一郎\*

①京都寺丁通丸太丁上ル十三番戸

②東京赤坂区榎坂五番地

⑤写真

(徳富蘇峰記念塩崎財団所蔵)

近頃ハ小生一身上ニ関し、或ル者ハ其功ヲ貪ホリ。仕事ヲ若手(多分旧バイブルクラスナランカ)ニ譲ラス為メニ、或ル者ハ少しく不満ノ情モアル由云々小生ノ耳朶ニ達セリ、又愚妻一身上ノ事ニ付彼は無根ノ評ヲ為ス者モ有之ヤノ由、或ル者ノ婦女子ノ風説ナドニ信ヲ置キ、吾人ヲ疑ヒオラル、ハ矢張小生不徳ノ然ラシムル事カト思ヒ候得共、吾人教会ノ錚々タルモノト自信スル連中凡庸人ノ多キヲ占ムルニハ小生モ大ニ失望仕居候(補)「此レモツマリ合併論ニ意見ノ異ナルヨリ遂ニ茲ニ及ヒ来ルカ」去ナカヲ、同志社之計画ハ現情ヲ以テ満足スルニアラス、将来為スアルノ胸算ナレハ尚待ツヘシト申居、且忍ヒ且望ミ居候

小生之心に常ニ爽快之感情ヲ起さしむる者ハ貴兄と只二三之同志社学生アルノミ、主義之異なる所より異主義連中ハ何ニとなくソコニ懸隔し来るの感なき能ハす、東京ニ而小生之尤心情を吐露して談し度キハ人見君なり、上州辺之一二之連中も幾分カ同色之旗ハ取り出し候共、何分其力ニ乏しきを遺憾と為す、此夏は武州大宮ニ大久保真次郎君を派出するの計画に有之、又野洲ニ一運動致すの目的なり

◎合併中止論ハ願クハ人見兄(宋林)雄文ヲ振ヒテ一ノ檄文を作り同主義之諸会ニ廻ハシ「◎関東ノ諸教会ニ熟談ノ上中止論ヲ同意セシメ」(補)「理由ヲ充分明カニナシタシ」早ク邪魔之入り来ラサル内ニ、確乎不拔ノ基をスヘ置クハ甚大切ニシ

テ一日モ遅延スベカラサル事ト存候〔朱穂〕「関東一致セハ関西ノ或ル教会ハ必ス此中止説ニ応セン広津氏ハ自任セリ」小生ハ近々種々面白カラヌ事アリ合併論ニハ口ヲ閉チ居申候

近頃感する所アリ而一ノ狂歌ニ吐き出し申候

見ぬふりや聞かぬ振りやら知らぬふり馬鹿のふりして世を渡るかな

此歌の中ニ振リ之文字四ツアリ、依而歌よみのあるじを四振斎と称す

六月廿八日

四振斎主人

猪一郎賢兄

梧下

御一覽之上ハ焼捨被下度候

書中ノ英神学生中広津友信ト申ス人ハ真ニ頼母敷人物に有之候、普通科中ニも一二之望ミアル人物有之候、又今ノ四年生中三四之愉快なる青年有之候間、同志社之前途決して望なきにアラス、寛き前途之計を為すの覚悟ニ候

同志社ハ是非将来深山大沢ニなし度候間、貴兄も充分此之為ニ御工風御尽力被下度奉仰候

○慶応義塾之義捐金ハ当時若干ニ相成候ヤ、御承知ナラハ御知被下度候

六月二十八日

内田政雄・垣見敬男・竹内甚吉\*

⑤写真

過般御投与被下候貴兄方写真之交易として拙影壹葉ツ、呈上候間、御落手被下度奉仰候、早々頓首

六月廿八日

新島 襄

内田

垣見 三愛兄

竹内

〔封筒ウツ書〕  
「同志社ニ而

内田政雄君

垣見敬男君

竹内甚吉君」

675

〔六月〕

金森通倫\*

⑤ 森中章光写

不肖襄義、同志社創立以來天父之冥助ト内外教員并ニ生徒諸君之愛顧を蒙り本校々長之重任を汚参り、且昨年来本社社員評議會之決議ニヨリ同志社諸学校総長之榮称ヲ頂載致居負フノ面目ヲ忝フシ候処、兎角多病ニ罷在其職務を難尽候付、今回社員評議會之決議を経而來七月一日より向一ヶ年間、本社予備校、普通校、神学校三校々長之「名義ヲ以小生之」職務を全く貴殿へ御依頼申候間、此段御承引有之度候也、敬白

同志社総長  
新島 襄

金森通倫殿

676

七月一日

中村栄助

② 京都市下五条橋二丁東ニ入

③ はがき

④ インク

今夕六時ニ拙宅ニ而常議員(舍)相開可申候間何卒御光來之程奉仰候

七月一日

新しま襄

677 七月一日 徳富猪一郎

②東京民友社 ④墨 ⑥封筒表書に「保高正起氏持参」とある。

福岡県

保高正起

右は今回普通科卒業被致、将来東京ニ於而勉学之見込ニ有之、貴兄ニ御面会を切望被致候間、御面接被下宜しく諸事御引立相成候様仕度候、右願用迄、勿々拝具

七月一日

新島 襄 ④

徳富猪一郎賢兄

御紹介相成候八木、川上之両君ニハ昨日御面会仕候

〔七月一日〕

新島公義<sup>\*</sup>

⑤ 森中章光写

当地ニ夏期学校<sup>\* \*</sup>相開候間、御都合被成数日間なりと御出テニナリテハ如何、学校ト申シテ〔モ〕重モニ説教祈禱会問答会等之類ニ候、若此週間丸デ御出〔出〕来ズハセメテ此土曜日と日月位迄御出テニ成リテハ如何

七月二日

徳富猪一郎

① 京都寺丁通丸太丁

② 東京々橋日吉町

民友社

④ 墨

謹啓、陳者 敝校之助教<sup>(采期よりハ正教員ニ爲すの體有之候)</sup>ニして鹿児島人なる山路一三氏なる者、此休暇中出京之上是非共拝眉を得而御差図を蒙り、政事社会之実況等を伺ひ知度、又其二三人ニ御紹介を相願度旨申居候間可然御配慮被下度奉仰候、同氏ハ二年前本科卒業此二年間ハ敝校ニ而助教致し呉、傍非常ニ勉強致し、又教授等ニハ大ニ勉励被致候故、書生中ニ甚人望を得、殊気慨ある者ハ尽く同氏と親しく交際致し候体ニ而同氏ハ我カ校ニ取リテハ将来見込アル青年ニ有之候間是非大切ニ致し度存居候、就而は同氏東京ニ参リ候迄<sup>候ハ、</sup>も宜しく御教示被下、前途之大計を誤らざる様御誘導被下候ハ、

幸甚之至ニ奉存候、又同氏ハ近頃種々ノ思考する所あり、郷里なる鹿兒島も只今之儘ニ而は到底将来ハ世之中ニ後レ可申候付、気骨ある青年ハ同志社ニ引出し度計画も有之候間、殊ニ此一点ニハ御賛助相成、平民主義之妙理ハ随分御談し置き被下度候、又同志社ニ取り而も彼地方之壮士之入り来る事ハ甚好ましく、殊ニ九州男子之氣風を校内ニ吹かしめ近畿之婦女子風ハ全ク搏滅致し度候間、何卒此等之事ハ御含置被下度候、又同氏ハ政事経済学等ニ将来従事致し度旨なれば、東京ニ於而可然有力之学者ニも御紹介被下度候、兎ニ角同氏此度之東京行ハ同氏之利益と相成候様呉々も御工風被下度、又人見君とハ充分之御交際出来候而将来之運動ニハ互ニ相図リ相助候様連絡を御附ケ置被下度候、当時我カ社会もヤ、モスレハ貴説之如く庸工之手ニ陥リ易キ憂も有之候間、今より自治之基を固くし自由之為ニ計ルハ今日も遅延すへからざる所なりと考へ、着々歩を進め吾人之目的を達し度存候、貴兄よりハ充分関西より參候青年を御誘導被下度奉切望候、勿々敬具

七月二日

新島 襄

徳富猪一郎賢兄

人見君ニも御尋アリテモ同氏モ御同感タルベキ他ノ人物ハ神学卒業生柳川人広津友信ト申ス人ナリ、此レハ沈勇温和ニシテ経倫有之候ト存候間、此人ハ充分御愛顧被下度候○同氏も八月比ニハ出京可仕候、又山路一三氏之出京ハ多分二週間ノ後ナラント存候

680

七月六日

北垣国道

⑤ 森中章光写

向暑之砌近頃御起居如何乍遠方御案事奉申上候、陳者閣下御出發前拝謁之上縷々相願上候原六郎君寄附金之義ハ、定而御配慮ニ預リ候事ト奉存候得共、茲ニ一寸心付候事有之候間、一応奉達高聞候上、万一御賛成被下候ハ、同君迄御談被下度奉仰候、其儀ハ即チ同君より寄附金之義ハ万一正金ニ有之候ハ、直ニ公債ニ替へ度候間、寧ロ公債ニ而御寄附被下間敷也、已ニ御承知も有之候通大隈、井上兩伯之御周旋ニ而寄附金ハ一ト先渋沢氏之手許ニ取纏候事ニ相成候得共、不幸ニして彼是之行違ひ相生し、原君ニハ面白からぬ御感情も有之候由ニ而、小生も大ニ事之齟齬より生せしとハ乍申甚心配仕居候間、原君之御寄附ハ直ニ小生之手許ニ御送被下候様仕度候、且御寄附之事なれば同君之御都合ニ相任申度候間、諸事宜しく御取なし被下度奉仰候  
右得貴意度如此候也、敬白

七月六日

新島 襄

北垣明府殿

閣下



681

七月八日

中村栄助\*

④ 墨

乍御足労今夕第五時常議員会相開度候間、何卒御操合御来車奉仰候也

七月八日

中村栄助兄

新しま裏

682

七月二十日

伴直之助

① 京都寺町通丸太丁

② 東京々橋区出雲丁老番地

⑤ 写真

先夜は御来訪被下難有奉謝候、其節御依頼申上候件ニ付、直ニ御通知被下是亦難有奉鳴謝候、小生も何レ出京可仕候間、其節ハ渡辺君ニハ是非面会之上御依頼可仕候間、何卒貴兄ヨリハ同君之インテレストヲ御繋ぎ置被下度奉切望候、先は御礼旁為貴答、勿々頓首

七月廿日

新島 襄

伴直之助様  
梧下

尚々、田口君ニハ宜しく御致声被下度奉希候、又渡辺君へも御序ニ宜しく奉願候

683 七月二十日 不破唯次郎

①京都寺丁通丸太丁 ②群馬県下上州前橋神明丁三番地 ④墨

〔朱〕  
○ 本年栃木ニ御着手ナレハ、至極ノ事ト切望仕居候、本年着手セサレハ来年ハ一致ヨリ必ラス着手スベシ、バ  
プティスト一手ニテハ充分ナラス、此ノ方ノ出張ハ苦シカラスト存候

一昨日御書拝領仕候、又昨日佐竹君より来状有之、貴兄方ニハ下毛伝道ニハ御奮発之由、大慶之至ニ奉存候、佐竹氏  
ニハ旅費等伝道会社より受取ル分ハ、未タ受取ラレ〔ザ〕ル由、右之為ニ時日ヲ空フスルハ得策ナラス、直ニ出張可然  
ト存候、然ハ<sup>モシ</sup>栃木ニ御着手ノ御目的ナレハ、栃木ニ参リバプティストノ先生方ト懇談之上、只一ト手ニテ引受ケス我カ  
輩ニ余地ヲ与ヘ共ニ働カシメヨト談判ヲナシ、成丈ケ懇親シテ互ニ説教会ナドヲ為スノ約ヲ互ニ助ケ合フト云フ事ニ  
テ、来年ヨリ栃木ニ一ノ根據ヲ定メテハ如何、此ノ談判ハ一トツ佐竹ト中山兄ニ試ミサセテハ如何、上毛諸兄ノ御決  
断ヲ奉仰候、佐竹君ノ御入用ノ分トシテ先ツ二十円立替ヘオキ申候間、御返金ノ所ハ御地方ヨリノ分ハイクラ、又伝

道会社ヨリノ分ハイクラト明カニ御示し被下度候、御都合ニヨレハ其内幾分カハ上毛ニ寄附スルモ苦シカラス、兎ニ角金ノナキ為ニ手ヲ延ハサ〔ザ〕ルハ甚不得策ナリ、栃木着手ハナル丈ウマク初メタキモノナリ、此レハ諸兄之御決断ニ御任申上度候、勿々頓首

七月廿日

襄

不破唯二郎兄

尚々、幸便ニより此度十五円七八九ノ三ヶ月分、貴兄ノ御加勢之分トシテ御送申上候、此レハ他日前橋教会ニテ御増給ノ日迄相ツ、ケ申度候間、若し近々ニモ増給ニ相成候ハ、相止メ申ス事ニ定メオキ候

15  
+ 20  
35円

684 七月二十日 広津友信

⑤ 森中章光写

昨日は縷々之御書面拝誦仕候、小生よりハ三回之書面中一般之紹介書ハ差上候間、右ニ而御間ニ合セ被下度候、又日下知事<sup>\*</sup>へは別紙特別之書面相認候間、若し長崎行之御都合相叶候ハ、重々之事ニ奉存候、御県下出水之事ハ実ニ惨状

ヲ究候由、受害之人民ニハ氣之毒千万之事ニ奉存候、依而御県下ニ而大学寄附募集ハ好時機ニ非らず、長崎辺ニ其鋒を御転し被下候も得策カト存候、確君ニ付海老名君ハ少し氣短カニアラル、カ、今少々之御心棒被下候様貴兄ヨリ御依頼被下間敷也奉願上候、肥後御遊説之事ハ充分御注意有之度候也

七月廿日

裏

友信君

貴兄之旅費不足ヲ告クルトキハ小生ヨリ喜テ御送金可仕候

森家、風斗家ヨリハ御懇切之御伝言痛ミ入申候、何卒重ネテ御伝言被下度奉仰候

八重事ハ一昨夜ヨリ腸胃カタルニテ大病ニ有之候得共、本日ハ只々疲労ノミニ而大分宜しく候、御案し被下間敷候

小生も大学之為不日大阪へ出陣、乃チ背水之陣之心得ニ罷在候、為メニ御祈被下度候

七月二十日

井上馨

⑤写真（国立国会図書館憲政資料室所蔵）

肅啓、炎暑之砌如何御起居被遊候哉、近頃は磯辺ニ而御休養被遊候由、我邦家之為御自愛被下度奉切望候、陳者昨年四月より七月ニ至ル迄、実ニ不一方御配慮を蒙り、大学資金として参万余円之巨額も一時ニ取纏り真ニ意外之賜モノト深く奉拝謝候、御蔭を以て小生も爾来非常之元氣を得、今尚著しき進歩ハ相見不申候得共、不撓不屈風濤ニ向居候間、早晚該港ニ着し得へしと決心仕居候、昨年昨夜は例之三万余円之寄附相定候故、小生ニハ頻ニ閣下之御惠恩を逐念し、感謝之至茲ニ秃筆を把り聊謝詞を陳呈し、併せて暑中之御起居奉伺度如此候也、敬白

七月廿日

新島 襄

井上伯爵殿

閣下

尚々、炎暑中折角御休養被遊度奉切望候、乍憚令夫人ニ宜しく御致声被下度奉仰候、次ニ小生も近来大分宜しき方ニ趣候間、何卒御休慮可被賜候、休養中なからも大学事件丈ケハ不相替鋭意担当罷在候間、小生之心情も御遙察可被賜候

七月二十一日

徳富猪一郎

①京都寺丁通丸太丁

②東京赤坂区榎坂五番地

御親展

④墨

茲ニ貴兄之御教示を仰キ〔度〕一事件出来仕候、其義他ニアラス公義一身上ノ進退ナリ、已ニ御存之通同氏ハ何ニヤラ伝道会社ノ先生方トハ相合ス、又容レラレス、種々無根ノ空評ヲ採用セラレ、同人ヲ目シテ或ルモノハ姦通セリナト申ス輩モ有之、小生モ同人ノ事ハ克々存候、又無能無芸ナルハ明カナルモ婦人ニ対シテハ〔補〕「少シモ間違ナク、小生モ此一点丈ハ」是迄最信スル所ナルニ、或ル小人先生方ニ右様ノ説ヲ申立、同人ヲ京都近傍ニ置カサルカ得策ナリト迄被申候輩モアルヤニ内々承リ、実ニ同人ニハ無実ノ罪ニシテ、吾人も同人ノ為其冤ヲソ、キタクモ、之ヲ口外ニ出セハ益他人ノ疑ヲ引キ起スノミニテ何ニノ効能モナク、真ニ同氏ノ為ニ氣ノ毒ニ存居候、去リトテモ伝道会社ニモ少シク小生ニ憚ル所アリ、断然ノ所置ハ出来ス困リ奥尔由、元来貴兄之御存之通公義ハ旧バイブルクラスよりハ一切容ラレス、江戸ノ仇キハ長崎ニ打タル、ノ憂ハアルヤモ知レス、小生モ甚不愉快ニ存候間、断然伝道ハ止メサセ度候、去リトテ彼ニ何ニカ出来ルカト申セハ先新聞之探訪位ナルベシ、英文ヲ讀ミ得サルモノナレハ自ラインブローヴスル能ハス、到底記者トナルノ見込ハナシト存候、然シ同氏ヲ活カシテ何レヘノ社会ニ入レ将来立身之計ヲ為サシメ度候、依而貴君ノ御智恵ヲ借用シテ同人之計ヲ為シ度候、貴兄ニハ如何御考被下候也、彼レ若シ新聞ニ見込ナクハ商法ニハ如何、トニカク彼ハ旧バイブルクラスノ連中ノ直轄ヲ脱セシ方同人ノ幸ナルヘシト存候

別問題

同人ハ此秋ヨリ関東ニ趣キ、新井毫ト同行シテ上下毛、新潟、信州辺ニ大学ノ募集ノ為遊説シタシト申居候、小生ノ考ヘニハ此行ニモ多分金森氏ヲ初メ湯浅兄等ニハ<sup>\*</sup>反対セラルベシト存候、只今「ノ」如クニトコモ手ヲ出サ、レハ金ノ来ル望ハ無之、真ニ小生も社員ノ御手ニ入リシヨリ已来却テ自由ノ運動ヲ防ケラレ果敢々々敷運動モ出来ス、庸工ノ手ニ入レリト云テ可ナランカ<sup>\*\*\*</sup>

貴兄ニハ此ノ企ニ付キ如何御勘考可被成候也、只々御意見丈御漏し被下度候、先は御問合迄、勿々頓首

七月廿一日

襄

猪一郎兄

是より秘密ノ性質アル書面は貴宅ニ可呈候間左様思召被下度候、先日大久保ニ托し申上件ハ同人よりも縷々御聞取有るへし

小生ハ彼ノ大先生方ニハ益失望致居候、已ニ卓見ナク見キリナク迂遠ニシテ仕事師ニアラス、毎会壯士ノ為ニタ、カレ其怨ヲ今トナリ小生一身ニ持来、小生ヲ怨居候由「敢テ小生ニ向ヒ議論モナク只<sup>〔補〕</sup>

女ラシキイヤミノミ、ア、」先日ノ談判ニ而先生方ハ幽霊ヲ<sup>ツカ</sup>握マントシテ握リ遂ニツカミ得ス、何ニトモ談判調ハス未タ主義如何ノ談判ニ移リ不申其儘ニナリ居候

○人見君ニ御注意アリテ同志社ヨリ御地ニ参候花畑ト中人ハ正直過キタル人物故、余リ一致ノ談ハナキ方ヨロ

シカルヘシト御話シオキ被下度候「<sup>〔補〕</sup>八月ノ末ニ広津友信ト申ス人参上スベシ、此レトハ人見君モ充分ノ談判

ハナサレ度候」

先日も御願申上候件ニ付、湯浅兄ニハ未タ渋沢氏ニ面会致し呉不申候也、近頃同氏兄よりハ返事無之候④同兄ニハ一致ノ件ニ付、或ハ小生ニ不愉快ノ感情ナキモ保証シ難候

近頃ハ委員方カ大分大学ノ事件ニ立入り区々ノ小見ヲ以テ人物ヲ評シ、少シク活潑ニ仕事ヲ為サントスル人物ハ何ニトカトカ申立之ヲ容レス、而シテ少シモ着手ノ途ハ立タ、ス、\*、當時ハ已ニ慶応義塾ニ卒先セラレ資本モ遙ニ後レ軍サト相成候、金森一も一刀流ニシテ将来此近傍丈ハ助力スヘク候得共到底見込ナシ\*\*\*

誰ソ可然担任者を得度存候得共其人ニ見当ラス、牧師輩ハ皆々急ハシク又適當ノ人ナク甚困却ナリ、只今大坂ニ下リ金森ト小生兩人ニテ充分奔走ノツモリニ候、大体ノ運動ニ当ルヘキ人ナク甚困リ居候、誰ソ御心当リハナキヤ、可然人物ヲ得度渴望仕居候、何レ此秋ハ上毛ニ出張ノツモリ

又下毛、福島、新潟、信州辺ニハ新井ト毫ニ公義ヲ差シ向ケル事ニ付充分御勘考被下度候

湯浅兄ニハ必ラス此企ニハ不同意タルベシ、彼新井ノ如キタイプノ人間ヲ好マス、貴兄ヨ充分ノ御勘考被下、

御忠告之程奉仰候\*\*\*



大間々町御差出ト佐野より之貴書兩ツなから拝誦仕候、貴兄ニハ断然栃木県下ニ御趣キ被下候事ハ、當時如何ニも不毛之地之様ニ相見ヘ候得共、沙漠ニ薔薇之花ヲ開カシムルトハ真神之御約束ナレハ、下毛ハ尚未タ不毛沙漠ノ如クニ相見候得共、何卒神約に御信仰オキ賜ヒテ、中山兄ト御相談之上、先ツ佐野町ヲ根拠トナシ、岩ヲモ徹レノ御精神ニテ該地ハ勿論、御申越之田沼宿ト申所ヘ直ニ御着手アリテハ如何、且貴兄御滞留中栃木之浸礼伝道者ト御懇意ニ成セラレ、共ニ栃木県下之運動ヲ為スノ御談判アリ、互ニ門戸ヲ閉チス互ニ相通シ互ニ相助ケ、又共ニ説教会位ヲ開ラキ、力ヲ協セテ不信者社会ニ向ヒ一層勇マシキ運動ヲ為スヘキ事ヲ御約束被成候而は如何、中山兄ニハ先日之御来状ニヨレハ、チト御落胆ノ様ニ見受候得共、此レヨリ御兩人ニ而御互ニ御運動被成、諸事前途之計ヲ為シ賜ヒテ、カブリ付キテモ離サス、是非トモ確定ノ中心トナシテ、又栃木ニモ着手シテ連絡セシメ、栃木県下ニ此両中央ヲ作り、将来鹿沼ナリ又鉄道上ニテ他ノ場所ヘモ面白キ運動ハ出来可申ト存候間、中山兄ニハ今年一年間ホドモ御心棒アリテハ如何ト存候、何レ新開墾地ハ中々好果ヲ一時ニ見ル能ハス、人民ノ輿論ヲ一変セシムル迄ニハ少々時間ヲ費ヤサ、ルヲ不得、然ルニ未タ輿論モ一変セサル内ニ此方ヨリ手ヲ引クハ、決シテ得策ニアラス、又一兩年間好果ナシトスルモ決シテ憂ルニ足ラス、御両兄ニハ断然ノ御決意アリテ栃木県下ニ主ノ救ノ道ヲ開拓シ賜ハン事切望ノ至ニ不堪候、若し講議所ノ費用ニ御入用トアレハ、小生ヨリモ御加勢可申候間、充分ノ御運動有之度候也、乍去炎暑中之事ハ何卒御撰

生ニ而精々御注意被下度、是亦奉切望候也、勿々貴答

七月廿二日

襄

688

七月二十六日

中村栄助

- ①大坂 自由亭 ②京都五条橋東二丁目 ③はがき ④墨  
⑥日付は表書による。

此三四日ハ例之大学之為ニ奔走仕居候

昨日田中源太郎殿迄、明晩之御招ニ難応旨申上候得共、小生も明午后ハ一ト先帰宅仕、少々休息仕度候間、若し気分もよろしく候ハ、罷出候而も御差支ハアルマシキヤ、予め御内談申上置度候、勿々頓首

七月二十七日

飯田勇紀\*

⑤森中章光写

先日御来車之節御話有之候海老名君御招聘之義ニ付、可然代人サヘアレハ至極ト存し申上置キ、其後熟考仕候に、只今同君に代ルヘキ人ハ何分思ヒ当ラス、又熊本之地□□尋常一樣ノ人物ノ能ク当り得ヘキ事ニアラサレハ、可然代人カ見当ラサレハ先方モ同君ヲ離サ、ルヘク、又同君モ該地ヲ去り得サルベシ、同君ニシテ可然代人ノナキニ該地ヲ去ラハ該地ノ学校ハ忽瓦解ニ至ルベシト存候間、小生ハ尚探カ「ス」ヘシ、海老名ヨリモ余リ劣等ナラサル人物カ代人トナルナラハ同君モ御招キニ応スルナラント存候ト迄申上置度候、□□無理ニ同君ヲ引揚ケ可然代人ノナキナラハ非常ノ困難ト奉存候、小生ノ熟考ハ此点ニ有之候間右様御承引被下度候也、敬白

七月廿七日

新島 襄

飯田勇紀兄

尚々塚本君ニ□□□御通知被下度候也、又小生ノ意見トシテ他ノ人ニ御談有之候モ不苦候

690

七月三十日

萩森長五郎\*

⑤ 森中章光写

過日は懇々の御芳書御出しに相成り拝誦仕候、貴命に随ひ弊校規則書差上候間、定めて御落掌の事と奉存候、却説御知人中御入学の件は別に申上候事も無之候得共、只々御勧め被下度候、若し御当人にて御勉学の志を抱かれ候はゞ、何卒父兄方にも充分御賛成有之度候

是よりの青年は真に実働実力を有し度事に候、弊校には七百余の青年入学致居り中には随分将来望を可囑人物も有之候間、御本人にも来学あらば此等の輩は喜而御交可致候、先づは貴酬迄、艸々敬具

七月卅日

新島 襄

萩森長五郎殿

梧下

691 七月三十日 浜岡光哲

⑤写真

岐阜県  
同志社普通科

卒業生

白木 是

此者ハ商業重モニ又工業之方ニ趣キ度旨申居候得共、自身ニも将来如何ナル工業ガ尤必要ノモノト相成可申也、又自身之尤適応ヘスヘキ所ヲ決定致し候に困却致し居、小生方ヘ相談ニ被参候間、将来工業等ニ而社会ニ尤必要を可感モノ等ヲ知ル事ハ貴殿と御相談申スガ得策ナラント相勸メ置候間、同氏事参堂候ハ、何卒同氏之意見も御聞糺し、又工業中将来尤必要ノモノト認ムル所之モノニ付、充分御意見ヲ御聞セ被下候ハ、同氏将来之方針を定メ候に大なる力ト相成可申候間、何卒御面接被下度奉仰候、右は御紹介迄、得貴意度、艸々拝具

七月卅日

翼

浜岡光哲殿

先夜ハ態々御書面難有奉謝候、其翌朝小生義少々不快ニ罷在参上を不果候、何レ明日ハ下坂致し候間、必す土居氏を相尋可申候

692

七月

〔大阪における有志家〕

⑤ 森中章光 ⑥ 森中亨によれば草稿とある。

夫レ大学ハ智識ノ源泉ニシテ文明ノ基礎ナル事ハ、已ニ天下識者ノ認ムル所ニシテ、吾人モ深ク之ニ感スル所アリ  
曩ニ吾人多年ノ計画ニ関ハル私立大学設立ノ旨趣ヲ發表シ、天下ノ人士ニ訴ヘ其賛翊ヲ仰キタルハ他ナシ、即チ吾人  
ハ奮テ我日本帝国臣民タルノ義務ヲ竭シ、我将来文明ノ一端ヲ助ケンスト欲スルノミ  
今ヤ幸ニ大方諸君子ノ賛助スル所トナリ、已ニ多少ノ金円モ寄送セラレタレハ、大学設置ノ地ニ尤モ接近シ尤モ密着  
ノ関係ヲ有シツ、アリ、又関西最大都会ト称スヘキ大阪市中ノ有志諸彦ニハ特ニ此挙ヲ賛翊アリ賜ヒテ、速ニ吾人ヲ  
シテ成功ニ臻ラシメ「ラレ」ン事、切望ノ至ニ堪ヘサルナリ、敬白

明治廿二年七月

同志社總代

新島 襄

693

八月二日

徳富猪一郎・湯浅治郎

①大坂土佐堀二丁目三十六番地 国本 ②東京赤坂区榎坂五番地 ④墨

金森君も矢張当地ニ出張いたし居候

過般来渋沢君ニ願ひ置たる老万九千円之所分ニ付、彼是御願申上候得共、貴兄ニハ御留守ニ被為在候よしにて何之御回答も無之、又為メニ渋沢氏ニも末タ小生之注文ハ決行致し呉レサル事ト存候、又例之金円所分ニ付大ニ注意致し可成丈慥ニ可成丈多分之利子を生し候様ニ仕度、就而は大学事務所ニ頼ミ入候広瀬源三郎ト申者を来ル月曜日より御地へ向け出発為致候間、此段予御通知申上候、尤此人を差上候は他なし、是迄如何之事ニ渋沢氏ハなし置呉候哉、又可相成ハ整理公債ニあらずして新公債トカ申モノニテ、整理よりも大分割合之よろしきモノヲ求めサセタク候次第ナリ、何レ月曜日ニ出発為致度積ニ候得共、万一渋沢氏ニ而已ニ整理公債証書を被求候ハ、広瀬も態々参上ニハ不及ト存候間、一寸電報を以テ御差止メ被下度候、若し日曜之晩迄ニ御飛報ナキニ於而は、同人ハ月曜之朝より出発可仕候、尤電報ハ大坂土佐堀二丁目三十六番地国本方広瀬源三郎氏へ御差し被下度候、右至急得貴意度、勿々拝具

八月二日

新島 襄

湯浅 治郎殿

徳富猪一郎殿

小生も明日よりタルミ辺ニ参リ少々休息可仕候、又大坂へハ時々出張之事ニなし置、此地を可成丈速ニ相固め申度候、左スレハ此秋より諸方ニも出張出来可申ト存候  
炎暑中ニ候得共小生も案外ニ奔走出来申、別ニ障も無之様存居候、何卒渋沢氏ニ対するの所為ハ同氏之好意ヲ損セざる様ニ仕度候

694

〔八月四日

新島公義〕\*

⑤森中章光亨

御書拝誦仕候、陳者少々御勝さるよし何卒御信念御加養被下度候、御申越之事ハ本日書面を以て岸原へ申遣置候、又同氏ニハ単身にて備中行を被試候様相勸申候、私も昨日垂水ニ参候、大阪ニハ二週間滞留いたし候、少々結果有之候



八月十一日

湯淺治郎\*

① 播州垂水 松下方 ② 東京々橋日吉町廿番地 民友社 ⑤ 複写

貴兄より御差出被下候電報は、留守居之者より只今端書を以て申通来候

小生事或ハ大坂ニ在リ、或ハ垂水ニ参リ居候処より行違ひ、御返事之処も大ニ延引ニ相成候得共、右書面ハ最早五六日前ニ差出申候間已ニ御手許ニ相届候事ト奉存候、依而別ニ御回報ハ不差上、又広瀬ナル者も数日前大坂を発し上京仕候間、此者よりも詳細可申上候、本日直ニ電報<sup>(カ)</sup>を以御回答申上度候得共、辺鄙ニして明石カ神戸迄出テサレハ電報を難懸候間、先小生之御回答ハ最早御落手之御事ト存し、其手数を御省キ申候、先は貴答旁奉謝御手数度、匆々拝具

八月十一日

播州垂水村  
新島 襄

湯淺治郎兄

尚々、過日御回答申上候件ハ左之如し

一 老万円ハ渋沢君ニ預ケ年六朱之利ヲ渡シモロウ事

一 残金ハ整理公債ヨリモ寧ロ新カ旧公債ニ致し置キ度事<sup>遣</sup>

一 過日貴兄ヘ老書呈セシ節渋沢氏ニモ老通差出し申度候

小生ハ先日來屢大坂ニ出カケ募金ニ尽力仕居候、又明日モ出張之積ニ罷在候

696

八月十二日

徳富猪一郎

①播州垂水村 松下万亀方

②東京赤坂区榎坂五番地

御親展

④墨

炎暑之砌御起居如何、小生も此五六日已來垂水ニ参り休養致し居、時々大坂ニ参り大坂之紳商輩ニ面会致し、大学之賛成を乞ひ候に、幸ニ此度は其端緒も開候間、充分闖入之策を立居申候、何レ大坂之運動ハ此一挙ニ限らず、此より幾回も、否不絶出張を致し、広く賛成を得るは甚必要と奉存候、又大坂より帰り候ハ、十日間程も有馬に参り休息仕度候、扱兼而御話も有之候上毛行之事ハ如何、本年養蚕之実況ハ宜しく候哉、若し上毛ニ出懸ケ申候ハ、序ニ下毛并ニ福島県、新潟、信州等へ出張之工風も仕度候、兎ニ角此行ニ関シテハ貴兄之御差図を仰度候間、宜しく御工風なし置被下度候、此地方ニハ先大坂を通り抜け、兵庫、和歌山、愛知等之地方ニ出張仕度候、静岡ニも少々手懸リハ有之候付、先は御相談として、得貴意度、勿々頓首

八月十二日

新しまゐ

徳富猪一郎兄

尚々、上毛行ハ湯浅兄之御意見を充分御聞糺し被下度候

先日御問ヒ合之米国ニアル特別之新聞紙中尤固く論弁候モノハ別紙之ハセフィク社なり、続而同一之地位ニ立  
チ候モノハシカゴ市之 Advance なりと存候、尤該新聞其レ自ラハ非常ノ（非）ニアラサルモ、其周囲ハ尤非ノ  
地位ニ立ツ神学者、伝道師、牧師過多ならんと存候

[別紙]

「The Pacific

\$2.50 A YEAR, IN ADVANCE

No. 7 Montgomery Av., San Francisco, Cal.」

697

八月十四日

広瀬源三郎\*\*\*

⑤写真

東京より御差出之御書一昨日垂水ニ而落手仕其夕来坂候間、湯浅氏迄電報を相懸申候、御申越ニよれハ彼壹万円を以而  
已ニ公債証を被買候よし、証書債ノ外右公債証書御持参相叶候ハ、至極と奉存候、右公債も都合之よろしき時に売却  
(カ)

し、例之新カ旧公債ニ変更する方得策なるへしと存候、若し渋沢君ニ御面会相叶候ハ、一応御面談、将来之理財法等御談し置被下度候、私も一昨夜来坂、明後日迄滞留之積ニ御座候、先夜相懸候電報ニ而湯浅兄も懸念被致候ハ、此書面を御示し被下候而も無差支無之候、先は用事迄、勿々以上

八月十四日

新しま襄

広瀬源三郎様

698

八月十七日

木村鎮太\*

①播州垂水村 松下方 ②岡山県下備中窪屋郡羽島  
⑤写真（荒木清志氏所蔵）

貴書拝誦仕候、陳者御問合セ之備后地方之学校之義ニ付、同志社より誰一人も応し呉候モノ無之ニより、不得止先方へハ断り申置候得共、万一貴君ニして向ヒ一ケ年丈ケデモ该校ニ御働き被下候事ナレハ、小生より直ニ先方ニ相談ニ可及候間、今一応御回答可被下候、早々頓首

八月十七日

襄

鎮太君

備后国庄原ト申所ニ有之候学校ニ而、是迄ハ福沢氏之卒業生相預り居候よし、ギソー文明史を讀候モノ五六人ハ有之候よし、月級ハ二十円、時間ハ一日ニ幾時間ナルカ未タ承知不致候、弥御越ニ相成候ハ、先方ニも懸合可申候、御回答ハ摂州有馬佐野や方へ御遣し可被下候、小生も明後日より有馬ニ参り、本月中ハ該地ニ留り可申候

誰一人も応スルモノナキニより先方も大ニ失望之よし、然し貴君御越ニ相成候ハ、先方之喜一方ならざるへし

699 八月十八日 広津友信

⑤森中章光写

小生昨日帰宅之上三通之華書拝誦、貴地屢震セしも先以御安全之よし安心仕候、御友人中御病人も有之候よし、右ニ付大学之為遊説も御延引之よし、右義ハ当時九州ニ而好時機トハ存し不申候間、先淡泊ニ御着手有之充分私立大学必要之事丈ハ有志之脳髓中ニ御吹込オキ被下度候、小生も前週ハ大阪ニ而奔走いたし、結果ハ見エサレ「ド」モ結果を得るの信仰丈之働ハなし置申候、御来遊之路次四国、中国之連中ニ御懇談アルハ至極必要之事と奉存候、此ハ御決行之方可然ト賛成仕候、私共も明日より右処ニ参り、本月未迄カ来月四五日迄ハ逗留可仕候、早々貴答

八月十八日

襄

友信君

尚々、森、風斗両家ニよろしく、御病人ハ大切ニなし被下度候、是迄差上候小生之書類ハ御出発前尽ク御火葬可被下候、八重よりも宜しく申上候、確君ハ少々御改心之よし重々之事ニ奉存候、尚此上も御励まし被下度候上州ノ杉山氏ナドハ総会以後少しく合併ニ傾きしに、近頃之来信中断然中止ヨリ策ナキ様申居候、小崎モ小生談判ノ上ハ大ニ安心致し候よし

700

八月二十二日

松尾音次郎

⑤ 森中章光写、柏木義円写

本日貴書ニ接し、<sup>〈シ〉</sup>当時京都ニテ御病氣御再発之よし承り甚驚入申候、小生も先日明石ヘ罷越し候ハ、<sup>〈ニ〉</sup>一ハ安息日を明<sup>〈テ〉</sup>石の兄弟と共に守り候得共、其実貴兄ニ御面会致度存候に、豈図らん其前日御帰村之よしニ而<sup>〈リ〉</sup>残念ニ奉存候、<sup>〈私共〉</sup>去十九日垂水を去り、同二十日当地ニ参<sup>〈リ〉</sup>申候、今朝貴書ニ接シ甚御氣之毒と奉存候、御病氣とあれば不得止事なり、道中も長く有之旁一ト先ツ明石ニ御帰り御摂養ありて、再ヒ御平癒之上高崎ニ御越被成<sup>〈愈〉</sup>方可然ト奉存候、御

病氣をニ押して御着高之上も来人多分ニテにて御休息ハ六ヶ數かるべしと存候間、一ト先退軍、充分銳氣を養ひ御出陣被成候而てハ如何、又御病氣にて種々心中憂鬱ニ堪へざる所も可有之候へ共、決して御失望あるべからず、失望ハ失敗之基たるべし、如何なる困難前ニ横ハるも、大胆不敵従容として天父の御手に任せ之 Child of Providence と被成、静に前途之策を御立て可被成候、先ハ為御見舞如斯候也、此 勿々貴答

八月廿二日

↕  
裏

音次郎君

尚々、小生も病氣之為幾回か失望せし事も有之候間、必らず失望宗之フレンドたらんと存候故に貴君之御心中ハ克々御推察申上候、然シ決して失望アリ賜フ勿レ、天父之摂理ハ却而貴君之失望中ニ成熟するも難計、八重よりも宜しく申上候、私共帰宅も本月中にあらざれば来月之初なり

〔案〕  
「Do not be afraid of your illness, we will pray for you. We are sure that the Lord will be with you in your most trying hours.」  
\*

701 八月二十二日

大隈重信

⑤ 森中章光写

旅行中粗略之段御海容可被賜候、炎暑中御休暇も取らせられず兼而御負担被遊候条約改正之大事ニ御尽力中之由嘸々容易ならざる御事と奉遙察候

陳は先日洪沢氏より通知有之、閣下より兼而御約束被下候壹千円ハ同氏手許迄御送附被成下候由申来リ、御好意之程千万奉拝謝候、希クハ尚此上も御助力を添ヘラレ、小生多年計畫仕候大学之企を成就せしめ賜ハむ事悃願之至ニ不堪候、就而は此度佐賀県知事石井殿ニハ出京被致候よしニ而、閣下ニハ必らず御面会之折も可被為在候間、其節ハ同知事ニも小生大学之挙を賛成被致候様御一言被下度候、尤佐賀市ヘハ小生等之為周旋致し呉候者も有之候、又當時一之遊説員も派出致し、宜しく時機に乘し寄附金募集ニ為取懸度候間、同知事ニも可然人物ニ奨励被致候様呉々も御勧置被下度奉仰候、右御礼并悃願之趣開陳仕度如此候也、敬白

八月廿二日

新島 襄

大隈伯爵殿

閣下



⑤ 森中章光写、柏木義円写

京都ヨリ之御書に對シ直に御返事差出シ候間、定而御落手ナラント存候、其後貴兄ノ御一身に付相考候處、明石に返リ御養生アルモ至極ハ存候ヘ共、余リ保養ノ分ハ無之カト存候、付、暫時有馬ニ御遊ヒニ御出ニ相成候而ハ如何、此処ニハ此ゾト申保養ハ出来申間敷モ、一ノChangeヲ与ヘ大ニ心ヲ養ヒ可申候間、何ントカ御工風被成、少々御快ク候ヘバ御出デニ相成候而ハ如何、私共此四五日ハ滞留ノ積ナリ、貴兄ニハ一週以上又十日間位御逗留被成、日々一回位カ又ハ二回御入浴、而シテ炭酸水（此地デ噴出ス）ナド御飲ミ被成、静ニ浩然之氣ヲ養ヒ被成候ハ大ニ益スル処アラント存候、万一其費用等ニ御困リ、被成候ハ不及ナカラ小生御加勢可仕候、主ノ役者タル者ハ鉄腸鐵身ヲ要シ候、先ハ御相談迄、勿々頓首

八月廿三日

次

松尾音治郎君

新しま裏

若シ京都ヨリ御出カケ出来候ハ、直ニ御出、相成候テハ如何、小生ハ茲ニ持合セノ蓄ハ無之候ヘ共、京都ヘ歸リ候ハ、何トカ工風仕候、小生ノ御勸メニ御応ジナサレテハ如何、病ノ為メニ決シテ御落胆ナシ賜フ勿

・レれ

703

八月二十五日

滝口可成\*

⑤ 森中章光写

屢々之華書拝誦仕候、陳者御依頼之点に付何とも御確答ハ難出来、同志社の方にも其れ其れ人も各其要路に当ておぎ候間、直ちに御相談ハ難出来事と奉存候、又伝道の御念願も被抱候よし、此も拝眉の上ならでは到底御相談も仕兼候、何れ小生事も来月早々帰京可仕候間、其節御面談可仕候、早々貴答

八月廿五日

新島 襄

滝口可成様

侍史

尚々、小生も兎角多病に有之、貴君御一身の為に充分御心配可仕事も出来兼可申候間、此点予め申上置候

八月二十五日

吉田清太郎\*

⑤ 森中章光写

再度之御書拝誦仕候、陳者加納君ニ向て上京之企有よし御申越被成候得共、同君カ京都ニ而糊口之途を得事は随分困難なるへしと奉存候、同君ニハ少々之文字ハ有之候得共、是ソト申ス職業ハナキ人なり、加之年齢も相加候ハ、新ニ職業ニ従事するも亦困難なり、小生へ別ニ懸合もなき上ハ何とも申遣兼候得共、同氏之出京ハ随分見込之なき事かと心配いたし居候、氏ハ士族ニして通常平民之労働ニハ堪へざる事ハ昭々たり、氏か一身ニて決心致し出京ストアレハ誰人も難止事なれ共、若し小生をタヨリ出京被致候上ハ小生も何ニと乎工風致さねばならざる地位ニ立可申、只困難なるは氏之用<sup>ヒ</sup>所<sup>ナリ</sup>なり、乍去自己独立之運動を為さんとて出京致<sup>さ</sup>るゝならは之を止むる途も無之候、兎ニ角貴兄ヨリハ出京之事ハ決し而御促不被成様被下度候、先は貴兄御心得迄ニ申上度候也

八月廿五日

裏

吉田清太郎君

小生ノ少しく望を抱き居るハ同氏ノ令息なり

705

八月二十七日

徳富猪一郎\*

⑤写真

其後は御不沙汰仕候、陳者数日前広瀬源三郎出京之際、同氏へ御伝言被成候節、近頃御意見御差出し被成候由、小生ハ未タ同氏ニ面会不仕候得共、右御意見書云々之事ハ金森氏ニ被話候よし、右ニ付金森氏ニハ御意見書之何たるカ拜見致し度旨申参候、右御書ハ先日公義之事ニ付御答被下候御書なるか、将タ其後別ニ尊書御投与相成候哉、此段少しく不分明ニ有之候間一寸奉伺候、御注意迄願上度事ハ将来御意見書（同志社ニ対する分なり、大学ニ対する分なり）誰人ニも見セテモ差支無之様、又他之雜件之類ハ何卒別紙之御認オキ被下候ハ、重々之事ニ奉存候、<sup>（二）</sup>閃カニ聞く所ニよれハ、平民主義之徳富兄ニハ此度之合併論ニハ、隠ニ国民之友青年連中ニ教唆致され居る云々之世評有之候、<sup>（補）</sup>「此レハ熊本辺ニも此評判アリシ由伝聞仕候」、此は御注意迄申上オキ候、小生も何レ都合之出来次第上京仕、又上毛地方ニ罷越し度存居候間、何卒上毛行なとハ何時か宜しく候哉、又湯浅兄之御意見も充分御叩キ被下度候、小生も此夏中ハ度々大坂ニ出張致し、當時有馬ニ而漸時休養仕居候、右は御意見書云々之事御伺申上度、如此候也、敬白

八月廿七日

新しま襄

徳島猪一郎賢兄

尚々、米国ミシガン洲之有名なるロス氏より来状有之、合併之事ニ付同氏之意見書遣し候趣申参候、何レ帰宅

之上一読候ハ、御覽ニ呈し度奉存候、小生も本月三十日迄ニ帰宅可仕候

706

八月二十七日

徳富猪一郎

⑤写真

此地方之新紙上ニ、頻ニ貴兄之御紹介ニ而熊本之改進黨ハ已ニ自治党(由)ニ入リタシナト公然申居候、又貴兄御自身も該党ニ入ラレシ事ハ確証アル云々申者も有之、又大同派之人々ハ貴兄ニハ兼て改進黨(大隈)と連絡を通せられしと思ひしに、自治党ニ御加入ありしハ意外之事なと申人も有之候

小生ハかゝる事ハあるまし且右様之事件ハ一切知らすと申居候、小生ハ貴兄之容易ニ彼之二三ノ政党派中ニ御加入あるましと確信致し居候、(何レニカシーバセーを御持被成候事有之候トモ)此レハ別事ニ有之候得共、一応貴兄之御

意見を御伺申上度候、此度之卒業式執行之際、アーモストコルレジニ於而小生ニ

L.L.D.

之学位を被送候、\*右ニ付小生も大

ニ困却致し過分之学位と存し、之を辞退致し度旨西京之宣教師方ニ協議ニ及候処、誰レモ之を辞す勿レ同志社之為ニ

之を受ケ置ケト申呉候、小生ハ飽まで過分之学位と存し大ニ困却致し候、又々コルレジ之切角折なる好意ニ背くも氣之

毒ニ存し、甘ジテ喜而受クルニアラス、又致方ナク之を受クルニ致し候得共、貴兄之御意見ハ如何、小生ハ兼而無位無官之

身を以て一生を畢へんと思ひ居候に、右様之学位を受クルトハ実ニ意外之出来事ニ而大ニ赤面致し居候、此レハ湯淺

兄、小崎兄等と御相談被下度奉仰候、早々拝具

八月廿七日

新しま裏

猪一郎賢兄

707

九月一日

伊勢時雄

⑤ 森中章光写

七月十四日ポパールムニ於テ御認ノ華書数日前来着、敬テ拝読仕候処、貴兄ニハ其後御無事所々御遊説被成、先ハ集金ハ五千六百元ニ及ヒ候ヨシ、切ニ一万弗ニ達シ候様奉望候、小生事モ四月ノ末ニ帰宅仕、此七八月中ハ度々大学集金ノ為ニ大阪ニ参居リ、其後休養ノ為十日程垂水ニ参リ、又残り十日程ハ有馬ニ参リ、数日前帰宅仕候次第ニテ、諸事未タ手ニ着キ不申、何ニトナク混雜ニ存シ居申候、河原町ニモ別ニ替候事ハ無之、只久栄女ノ我儘ナルニハ私共大ニ心配致候、将来如何カノ者ニ可相成ヤ甚被案候、日本ニハ当時政事上ノ大問題ハ条約改正ノ一事ナリ、民間ニハ大分不同意者有之候様相見候得共、内閣ハ不動ヤニ伝聞仕候、華書ハ例ノポパールムニ於テ御認ノヨシ、実ニ小生ノ屢安眠セシ病室ニテ、小生帰国後モ病氣ノ節ニハ毎度其室トベールカル老夫人ノ深切ヲ思ヒ出申候、小生ヲ受領候事ニ付御祝詞ヲ拝領仕、実ニ汗顔ノ至ニ奉存候、小生ノ如キ何ノ功劳モナク又学識ニ乏シキニ、如斯重大ナル学位ヲ受

L.L.D.

クルハ自身ニオンウォルジー・オンフェットヲ感スルノミニ候得共、アームホルストノ好意ニ背ク都合ニモ参兼、先受領致ス事ニ数日前漸ク決意仕候、先日來大阪ニテ奔走致シ居候得共、其結果尚甚少ナク、漸ク大阪文ヶデ六七千円ニ相達申候

此頃北堂ヨリオエツ様、平馬君ノ写真御遣シ被下候処、オエツ様ノ御顔カ何ニトナク穩和ニ相成、大人ノ顔容ニ相似参候ト私共互ニ語り合申居候

森田、市原、村井ノ三兄<sup>\*</sup>ニハ已ニ出發致セラレ候間、実ニ近々御面会可被成候、青木要<sup>(吉)</sup>三氏ニハ此夏本郷ニ参リ相働キ居候、此兩三日小生ノ手が甚ノルヴォスニ有之、筆ヲ把リ候テモ筆意ノ如クニ動キ不申候間、乱文ノ義モ御免可被下候、欧州行ハ御見合ノヨシ、是レハ甚残念ニ候得共、不得已御情実モ有之候事ナランカ、兎ニ角此十二月比ニハ御帰朝ニ可相成ト奉待上候

先般來炎暑中少シ無理ヲ致シ候故、所々へ大ニ御不沙汰致シ居、グリーン先生ニモ其後書状ヲ不呈候間、御序ニ宜シク御伝言被下度奉仰候、又ハーデー、ペーカル兩夫人ニ御面会被成候へハ呉々モ宜シク御伝言被下度奉願上候、勿々頓着

九月一日

新しま襄

伊勢時雄兄

尚々、同志社ノニューウスハ、此六月社員會議中大分社務ヲ社長ノ手ニ執ル事ニ決シ申候、小生病氣ニ付、金森兄校長ノ職務ヲ一ケ年間執ル事ニ決申候、小生ハ旧ニ依リ総長ノ名義ヲ持居候



○十日間夏期学校ヲ開キ申候(兄ニ已ニ委シキ報道ヲ得ラレシナラン)

708

九月十日

松尾音次郎

⑤ 森中章光写、柏木義円写

○<sup>〽</sup>星野君ト御同居ナルカ、左レハ宜しく御伝言被下度候<sup>〽</sup>  
.....

御書拝見仕候、其後御病氣もよろしからず<sup>〽</sup>当時東京ニ御滞留之由甚氣之毒に奉存候、貴君の御進退にハ種々御心配可有之候<sup>〽</sup>得<sup>〽</sup>共、可成丈静に御考へ東京ガ万一咽喉之為ニ宜シからず<sup>〽</sup>ハ再び播州ニ御戻り被成、御休養ありてハ如何、御病氣ナルニ余り種々御心配アルハ却而よろしからず<sup>〽</sup>東京にて充分御養生相叶<sup>〽</sup>ハ御止被下てハ如何、然シ東京ハ随分ダンプあり如何やと心配仕候、決して無理を被成候事ハよろしからずと存候、万一数月間も咽喉を用ゆるの見コミ無之候ハ、断然休養之策に出づるに若かずと存候、姑息之仕事ハ不得策なりと存候、先ハ匆々<sup>〽</sup>拜具<sup>〽</sup>  
.....

九月十日

〽  
裏

音次郎君

明治22年



九月十四日

大島正健

④墨

其後ハ打絶御無音申上候、貴家如何御消光被成候也、秋冷催来御地ハ定而秋色を帯候事ト奉遙察候、此度は馬場君ニも幸ニ好配偶を得られ小生共も大ニ喜ひ居申候、何卒同氏将来も充分御引立、御地ニ於而相応之働き相立候様精々切望仕居候、又同氏に相托し当地方之模様ハ申置候間、定而縷々御聞取被下候事ト奉存候、伊東家之御老人初貴家之御一統ニハ御替リハ無之候哉、満ボウ先生ニハ不相替奇抜之御言行有之候事ト毎々話居候、御地伝道之事乍遠方心配仕居候、何卒御地方ニ於而充分独立平等之教会を振ハしめ、他日北海之元氣精神トなし賜ハん事切望之至ニ不堪候、先ハ御左右御伺申上度、早々拝具

九月十四日

新しま襄

大島正健賢兄

此度御地へ向小生遠縁家之一少年を遣し候間、馬場君ニ御依頼申安息日ニハ必らず貴会ニ出頭候様取計申候間、宜しく御誘導被下度候、彼ハ法外之智慧不足なる少年ニ有之候間、先職人となし度存候也

御一統へ宜しく御伝言を奉乞候

八重より令閨君へ宜しく申上候

710

九月十四日

徳富猪一郎\*

②東京々橋区日吉町 高田寅次郎氏持参

④墨

岡山県平民

高田寅次郎

右は同志社四年課を了、出京之上専門学修学致し度旨被申候ニ付、賢兄迄御紹介申上候間、可然学校へ御差図被下度奉切望候、且拝眉之節ハ宜しく御面接被下度奉願上候、勿々頓首

九月十四日

新しま襄

徳富猪一郎賢兄

711

九月十六日

田中賢道

④墨

謹啓、陳者兼而小生より御通知ニ及候通、貴兄ニ於而御都合之上特別御出張被成候節なり、又ハ他之事故あり御派出被成候際なり、九州地方ニ於而同志社大学資金募集方之義ハ、社員決議之上、貴兄ニ御依頼申上候間、此段御承引有

之度奉願候也、敬具

九月十六日

同志社々員總代

新島 襄 印

田中賢道殿

712 九月十七日

田中賢道

④ 墨

肅啓、陳者此度ギュー〔リ〕ク老先生より來書有之、近々地方ニ出向カレ候付、貴兄も御同行可有之、就而は例之大学募集之事を御托し申候候而ハ如何ト被申候間、貴兄之御都合ハ如何ナルヤ未タ承知不仕、女学校募集之事も未タ結了セサルヤノ様ニ相心得候間、直ニ御承諾相叶候哉否ハ存し不申候得共、兎ニ角別紙御依頼申上候間、何卒後日之為御預置被下度、此度好機も有之候ハ、御用被下度、若し好機も無之候ハ、他日迄御待チ被下度奉存候、此夏中広津氏ハ佐賀、長崎之両市ニ罷出、其々之有志家へ面会致し、他日可然募集委員も出張可致旨被申置候由ナレハ、十一月中カ十二月勿々両市へ御出張被下間敷や、此両市ハ多少之準備相叶申候、小生も時々文通致しオキ、不絶連絡を通しオキ可申候間、貴兄ニして其比ニ御出張被下候ハ、至極之事ト奉存候、右御依頼迄、早々敬具

九月十七日

新しま襄

田中賢道兄

金三円差送申候間、地震罹災者ニ御与へ被下度候、尤右救与ニ急ヲ告ケサルナラハ、女学校の方へ〔朱〕有志家  
ヨリトシテ」御回し被下度候、此は全ク貴兄之御独断ニ御任可申候  
尤金員三円ハ内国通運会社ニ相托可申候

713 九月十八日 北垣国道

⑤ 森中章光写

華墨敬而拝読仕候、陳者榎本大臣殿へ御談被下候趣重々難有奉拝謝候、右御礼迄、勿々貴酬

九月十八日

新島 襄

北垣明府殿

閣下

昨日は疏水事務所ニ参候処、田辺、島田<sup>\*</sup>両技師之御案内を蒙り、御蔭を以而充分工事を拝見仕、又電気水車等  
迄拝見仕候而喜欣之至ニ不堪事ニ御座候

714 九月二十六日 徳富猪一郎

①キヨト ②キヨバシクヒヨシ丁廿バンチ ミンユウシヤ ③電報

チヨウビヨウニアラズ、スコシカツケノキミナリ、モハヤヨロシ

715 九月二十六日 徳富猪一郎

①京都寺丁通丸太丁 ②東京々橋区日吉町廿番地 民友社 ④墨

本日ハ態々御懇切ニ電報ヲ以而小生之重病云々ニ付御尋問ヲ載キ、御厚情ノ忝ナキヲ奉拝謝候、右重病云々ハ京都日ノ出新聞之探訪者不注意ノ廉ヨリ右様大ソウラシク書立候次第、毎々彼ノ雜報ノ間違ニハ閉口仕候、其後アマリ重々シク書キ立ラレテハ大ニ迷惑ト存し候間正誤致しオキ候、小生も大体ハ大分宜しき方ニ候得共、先日來少々脚氣相起リ、医師ノ命ニ従ひ夜分丈丸山之正阿弥楼ニ宿泊候次第、此レハ平胆ノ地ノ夜氣ハ脚氣ノ為ニ宜シカラサル由、最早大分宜しく候間近々都合致し一ト先上京致し度存居候、甚御面倒ながら小生之上毛行ハ其機ト認メテ可ナルヤ否、一応湯浅兄之意見ヲ御聞き被下、何卒同兄ニも此度は大ニ奔走致し呉候様仕度候、又貴兄ニハ少々ノ時日ナリトモスバ

ヤ被下候訳ニ参リ申間敷や、此段奉伺候、何レ来月ハ早々都合致し上京仕度候間、湯浅兄ト貴兄之御都合ハ如何可相成候や、御知セ被下度奉希候、勿々頓首

九月廿六日

新島 襄

徳富猪一郎賢兄

梧下

716 九月二十七日

徳富猪一郎

①京都寺丁丸太丁

②東京々橋区日吉町

民友社

④墨

昨日ハ御親切ニモ小生重病云々ニ付、電信ヲ以テ御問合セ被下深く御好意ヲ奉謝候、依て直ニ一書相呈し重病ニアラサル旨ヲ詳明仕候間、本日中ハ御落掌タルヘシト奉存候

茲ニ賢兄之御多忙中申兼タル事ニ候得共、デウイス先生之著書基督教ノ基本ト題スルモノニ序文ヲ頼マレ、拒絶モ出来兼候間、サツト一文ヲ綴リ申候処、御存之通小生之文ハ甚不規則ニシテ見ルニ足ルヘキモノニアラス、依て恐入候得共御加筆被下、只々之ヲ上梓シテ余リ見苦ルシカ〔ラ〕サル丈ケニ御添刪被下候様奉願候、右為願用得貴意、(皮脱カ)勿々拝具

九月廿七日

新しま襄

猪一郎賢兄

昨夜第三高等中学校<sup>\*</sup>之教授一同ヲ招キ、図書館ニ於而懇親会ヲ相開申候処、皆々満足ノ体ニ而被帰、将来も親しく交通之途を相開申置候

117 「九月」 青年之光記者

⑤『青年之光』一号（明治二十二年九月二十四日発行）

肅啓、陳ば貴会には近々青年之光と称する一雑誌発兌のよし承り欣喜此事に候

貴会員には御存知も可有之候通、当府下に於て数年前より青年会の設ありしも、是ぞと申す著しき運動もなく真に有名無実の嘆なき能はざりしに、近頃に至り諸君の御奮発により都合宜しき会場の御設も整ひ、且加之一雑誌発兌の御企あるに至りしは甚頼母數、御手初めにして大に将来の好果を卜することゝ奉存候

仰き願くば諸君此青年之光をして只々会員以内に止まらしめず、大道は勿論小巷の暗隅迄も其光輝を及ほし賜はん事を

右は聊か鄙見を陳し祝意を表し度、匆々敬白

青年之光記者御中

118 十月四日 田中賢道

④ 墨

一書拝啓仕候、陳者兼而貴兄ニ相願向ヒひ九州ニ於而同志社大学之資金募集方御負担相願ひ候処、女学校之御責任有之候事ニて御辞退相成候間、不得止其儘ニ待居候次第、就ては大学之事業も其後果敢々々敷進ミ不申、為メニ大ニ苦慮仕、我輩基督信徒ノ如斯世間ニ向ヒ公然ト一大事業ノ挙ヲ発表シ、半途ニシテ事成ラストセハ、実ニ吾人ノ面目ニ関候スルノミナラス、我カ基督教社会全体ニモ関シ不名誉ヲ来タシ不申候間、是ヨリ断然ノ挙ニ取懸リ度奉存候、就而は貴兄ト一応御相談申上度候間、何ニトカ御都合被成下、京都迄御光来被下間敷や、貴兄ニハ定而女学校之建築資金等ニ御負担之由ニ而甚御迷惑トハ存候得共、右資金之義ニ付候而も少々工風有之候間、兎ニ角御光来被下間敷や、尤モ小生ニハ来月中ハ関東ニ参リ東京上州間ニ奔走可仕候得共、金森氏京都ニ罷在諸事御相談可仕候、若し小生ニ直接御相談ノ方御好ミナラハ、小生関東ヨリ帰宅ノ上ハ直ニ電信ヲ可呈候間、御出発被下度候、然シ此事は金森氏モ充分含ミ居候事ニテ、大学運動ノ事ハ小生ト同意見ニ候間、一日モ早ク御越シ被下候ハ、幸甚之至ニ不堪候、貴兄ノ御出ヲ願度ハ



即チ此地方ニ於而一御奔走相願度キ事也、何分小生ノ病氣ニ付充分ノ奔走不相叶、昨春已來金森氏小生ニ代リ奔走致し呉候処、當時ハ同志社ニ於而小生ニ代リ全校務ヲ取ラレ、更ニ余暇ナク、到底同氏ハ此上決シテ余リアテニ相成不申、去リトテ別ニ適當ナル人物無之、此地方之牧師輩モ皆多忙ノミナラス、中ニハ随分不適當ニモ可有之候故、未タ其ノ人ヲ得ス、近來事務大ニ渋滞致し、茲ニ可然人物サヘ有之候ハ、随分世間ヲ動カシ得ベキニ、人物ナキ所ヨリ逐々時機ヲ失スルノ恐モ有之、小生モ中々心痛仕候、小生ノ胸算ニハ貴兄ニ相願候より別ニ可然人物に考ヘ当ラス、金森氏モ至極同感ニ候而、是非トモ貴兄ニ御依頼可申旨被申候、依而先相願ヒ申度ハ第一ニ御出京ノ事、可相成ハ速ニ御出京被下度事、御承諾トアレハ旅費ハ直ニ御便送可申候、第二ニ此近畿御遊説相願ヒ度キ事、第三ニ其都合ヲ見テ漸時九州ニ御出懸ケ、先ツ佐賀、長崎等ノ下ゴシラヘ相出來候地方ニ御出張ノ事、第四可相成ハ先ツ一ヶ年此大学ノ為ニ御奔走相願度事、熊本女学校之事モ貴兄之御世話ヲ可要候得は、誰ソ可然人物ハ貴兄ノ御代リニ御見当リハ無之候や、若し貴兄御來京相成、御地方ノ為ニ御奔走被下候ハ、熊本女学校之建築資金不足ノ分ハ當時借用被下間敷や、而シテ其利子ハ私共ヨリ貴兄御不在中ハ全ク御負担申上候事ニなしオキ被下候而は如何、左スレハ不足ノ分ハ當分借用ニテ御間ニ合セオキ、漸々何人カヲ以テ不足ノ分ヲ御募リ相成候而は如何、小生モ今少シ相立候ハ、少々位ハ女学校ヘ寄附ノ見込モ有之候、只懸念致ス所ハ貴兄ノ當分ナリトモ熊本ヲ去ラル、ノ一事ナリ、小生共モ貴兄ナラハ此地方ニ於而御奔走ヲ相願ヒ度、又貴兄ニハ充分ノ信用ヲオキ可申候間、此大学ノ存亡ハ吾人基督信徒ノ盛衰ニモ大關係ヲ可有候間、此御要求ハ是非トモ御承引被下候様奉懇願候、小生モ病氣未タ癒不申候得共、此ノ十二日ニハ東行之積ニ候間、御回答ハ速ニ東京々橋日吉町之民友社迄御遣し被下候様奉希候、先ハ御依頼トシテ得貴意度、勿々頓首

十月四日

新島 襄

田中賢道兄

尚々、大学モ未タ充分緒ニツキ不申候間、多分ノ報酬ハ呈シ兼候得共、先ツ一ヶ月ニ二十五円ハ差上度モノト存居候、尤他ノ費用ハ一切ニ別途ニ差上可申候

基督信徒大学ノ企ハ日本開国已来初メテノ事、又民間ノ拳ニシテモ吾人カ先着鞭致し度<sup>候</sup>訳ナレハ、万一遅々進マス天下ノ信用ヲ失ナヒ、事遂ニ敗ル、ニ至ラハ、何ノ面目アツテカ吾人頭ヲ拳テ天下ノ人士ニ面会スヘキゾ貴兄ヨ願クハ特別之御英断ヲ以御承諾アリ賜へ、是レ小生畢生ノ願望ニ候間、伏而御承領アリ賜へ

119

十月四日

徳富猪一郎

①京都

②東京々橋区日吉町廿番地

民友社

④墨

東京ヨリ帰路静岡ト名古屋ノ二ヶ所ニ立寄、大学ノ為一工風仕度候間左様思召被下、又両地ノ可然人物ハ御考オキ被下度候

広津友信ト申者此度上京候間御面接被下度候、同氏ハ同志社教会中有力ノ自由論者ニ御座候、人見君トハ已ニ

知己タルベシ

此度は御面倒なる事相願候処直ニ御加筆<sup>※</sup>被下<sup>※</sup>万々難有奉謝候、又貴書ニよれば此中旬ニハ御来遊被下候よし喜欣之至ニ不堪候、小生ニ<sup>ハ</sup>本月早々上京之筈ニ候処種々之事故相生し、為ニ延引ニ及候、又来ル十日ニハ不破氏結婚<sup>※</sup>之式を頼マレ申候間、不得止上京之事ハ十日後ニなし置候、尤十二日比ニ神戸より乗船之積ニ御座候<sup>〔補〕</sup>陸行ハ小生心臓ノ為ニ余リ宜シカラス」然し貴兄御来遊トアレハ上京ノ期日ハ少々位延ハシ申候テモ苦シカラス、乍去貴兄之御都合相叶十日比迄ニ御来遊ハ相叶不申候や、左スレハ小生ニトリ尤好都合ト存候、全体此二日カ三日ニ出發之積ナルニ下村氏之帰京有之、為ニ宴会之催等も有之候旁出發時日を延ハシ、又不破氏結婚之為ニ十日迄延引為致候次第ナレハ、十日比ニ御来京相叶候ハ、重々ノ事ニ奉存候、小生も此度ハ是非トモ十二日ニハ出船いたし度存居候、小生ハ御存之通寒氣参リ候ハ、一日モストウナキニオラレス、又風邪より直ニ心臓ニ及ホシ候間寒氣ノ来ラサル内ニ東上仕度候、依而十日比迄御来遊相成候ハ、至極ノ事ト奉切望候

山県伯之決断即改正決行ヲ待居申候

十月四日

襄

猪一郎賢兄

尚々、湯浅兄より一書一昨日到来仕候

万一懸違ひ京都ニ而拝眉を得不申候ハ、何レ東都ニ而縷々御相談申上度候、兎ニ角イツ比御出デカ相叶候也、至急ニ御知セ被下度候、尤他ニ内々又幾日位ノ御逗留相叶可申也、此ノ地ニテハ金森氏ト御面会之上、同氏カ

大学ノ為ニ尚一層尽力被致候様吳々モ御勸オキ被下度候、同氏ハ一方ニ行ケハ一方ハ甚御留守ナリ、当時全力ヲ同志社本校ニ尽クシ大学ノ熱ハ少シ冷ヘタルカ如シ、先生ハ兩刀ヲ用ユル能ハス

720

十月五日

中村栄助

②京都市五条橋東二丁目

③はがき

④墨

⑥日付は表書による。

来ル七日之午后第六時円山弥阿弥楼<sup>〔也〕</sup>ニ於テ下村君歓迎会相催し度候間、御来車被下度奉仰候、其序ニ社員常議<sup>〔具〕</sup>会も仕度候間、同日午后第四時迄ニ同所ニ御越被下候様奉願候

721

〔十月五日〕

中村栄助\*

④墨

今朝葉書相呈し来七日之夕也阿弥ニ而下村君歡迎会相開度旨申上候得共、中村楼ニなし度候間左様御承引、同日第四時中村ニ御越被下度候也、何卒此少年ニかしを<sup>〔封〕</sup>ふじ一円丈御持タセ被下度奉希候、勿々以上

新しま

中村栄助兄

722

十月五日

田中賢道

④墨

〔異筆 端裏書〕  
「入きり不申候間上袋ハトリ申候」

昨日一書呈セシ逐加として奉申上度候、陳者已ニ相願上候通、貴兄ニハ同志社大学之為一ト御奔走被下度と小生共之呉々も熱望シテ止マサル所ニ候間、可相成ハ速ニ御決断被下候ハ、先ツ御来京被下候而諸事金森氏ト御打合被下度

奉存候(尤小生ハ十月一杯ハ、多分閑果ニアルヘシ)、若し御来京被下候事ナレハ直ニ金森氏へ宛御書面なり電報ナリ御送被下候ハ、旅費ハ御送可申手筈ニなし置候間、左様御承知被下度候、小生之如斯至急を要候は他なし、本年中ニ此近傍丈ハ充分ニ募集ニ尽力致し、来来より其々他地方ニ出懸候様ニト存候なり、右御依頼迄得貴意度、勿々頓首

十月五日

新島 襄

田中賢道君

梧下

723

十月六日

〔大沢善助\*〕

④墨

下村君歡迎之為明七日第六時祇園中村楼ニ於而同志社々員会合仕度候間左様御承引被下、又其序ニ常議〔員〕会も相開度候間御都合被下、第四時迄御来車被下候様奉希候、且松山牧師ニ御面会被下、先日ハ誤テ也阿弥ト申上候得共中村楼ニ可仕旨、又第四時ニハマチガヘスキツト御光来被下候様御談し置被下度候、同牧師ハ近頃時間ヲ後レ来ル事有名ナリ、金森氏も大ニ心配致サレ時間之処ハ小生ニ呉々も相頼申候、早々以上

十月六日

新しま襄

十月八日

徳富猪一郎

①ケウト　ドウシシヤ　②ヒヨシ丁二十番地　ミンユウシヤ　③電報

キミノシツパツワガユクマデマテ

十月九日

山中百\*

①京都寺丁通丸太丁　②愛媛県下伊予今治通丁五十六番地　④墨

貴書拝読仕候、陳者来ル十三日ニハ弥十年祝期并ニ貴兄按手礼式、御結婚等重々目出度御式会ニ候ハ、御丁寧ナル御招待ニ謹応シ、何ニトカ都合之上参上仕度存居候処、社用有之先日ヨリ上京セヌハナラヌ事出来、本月早々出発セネハナラヌ筈ノ処、種々之用向相起、為メニ本日迄も延引ニ相及、遅くとも十一日比ニハ出発セネバナラサル事ト計画仕居候ニ、一昨日より老母之様子俄ニ宜しからず、八十二年之老齡故大ニ心配仕居、若し宜しからずハ東京行も又々見合ニ可仕ト迄存候次第、諸事不極マリニ相成候始末ニ候、兼而八重ト相語らひ、若し小生之出頭六ヶ敷候ハ、セメテハ八重丈デモ参上致し候（柳瀬之妻君ニ御約束もアリタレハ）心組ニも有之候処、老母之様子余り宜しからず、甚残（ハ）こし置クハ不安心

ニ候間、是も參上之希望ヲ絶タレ兩人共大ニ失望之至ニ候、私も多年病氣ニ有之、漸ク今治地方ニ參上不仕、只今ナレハ時候も宜しく久々ニ而參上致し度モノト兼々思居候に、東京行之必要相起り、又東京行スラモ殊ニより候ハ、見合ニ相成候も難計候次第、此度ハ希有之祝会ニ參上之出来難キハ如何ニも残念千万ニ候得共、何分致方無之次第、決而不惡思召、會員御一同ニも右之情實御説明相成候様奉希候、兼而願置候大學之事も有之、貴命之通募集ニハ好機とも存し候得共如何、右開陳之始末ニ候間、不得止出頭之義御断奉申上候、何卒小生ニ代り十年祝会ニ於而一言之祝詞御陳へ被下度、又改而小生より貴兄按手礼式、御結婚式を奉祝賀候、右得貴意度、艸々拝具

十月九日

新島 襄

山中百兄

尚々、八重よりも宜しく申シ候間、右柳瀬家へ御通し被下度候、又殊ニハ八重ヨリ新郎新婦ニ向ひ、目出度御結婚を奉賀候



726

十月十七日

徳富猪一郎

①成瀬方「午后御光来被下候旨奉待上候」

④墨

昨日御帰京之よし、本日参上仕度存候得共却而御邪魔に相成候而は不相成ト存し相扣候次第、差当同志社之一事件ニ付御相談を要し度、又大学前途之運動ニ関シ種々御工風も仰度候間、願クハ此週間中在京之社員中時日を期し、一回御集会被下候様御取計被下度、此段湯浅兄トモ御相談奉希候、尤小崎兄モ通知次第出席可仕ト被申候、先は御依頼迄、勿々頓首

十月十七日

新しま襄

徳富猪一郎兄

727

十月十七日

徳富猪一郎

②「拝復」

④墨

午后ハ在宿候間何時ニ御来車被下候而も差支ハ無御座候也、伏而御出を奉待上候

十月十七日

徳富兄

襄

728

十月十八日

大隈重信\*

⑤ 森中章光写

謹啓、陳は今年後何者カ敢而玉体ニ向ヒ無礼ヲ加ヘシモノアリト<sup>\*\*</sup>伝聞仕候間驚駭之至、  
勿々事実取糺申候処些少之御負傷ニ止マリ候由一ト先安心仕候、時節柄乱暴之挙動ヲ可仕輩モ可有之候間、  
国家之為御自重被遊候様切望之至ニ不堪候、先は不取敢御起居奉伺度、勿々敬白

十月十八日

新島 襄

大隈伯爵殿

閣下

尚々、小生事数日前出京罷在候

729

十月十八日

徳富猪一郎

④墨 ⑥封筒あり。

御通知ニ預リ難有奉謝候、先つ微傷ト申事ニ而大慶ニ奉存候

十月十八日

襄

猪一郎賢兄

多分御多忙ナルベケレトモ御歸リカケニ一寸御立寄被下而は如何

730

十月二十一日

広津友信\*

④森中章光写

本日旅費として金子御渡し申せし時、何ニカ君ニハ少し御遠慮ありし様ニ見受甚心元なくそんし、明朝永岡を以て此書中ニ少々金を入レ不時之用ニ可供積ニ而差上置候間、若し残り候ハ、新潟地方伝道ニ御回し被下度候、明朝は永岡

氏を以小生之代理として御暇乞之為差上申候、何卒前途吾々を眷顧シ賜ふ真神之御手に任せ、活潑なる愉快なる大運動之計画有之度、又北越ハ柳川辺とは違ひ寒氣も甚しく可有之候間、此より御身ニハ真ノフラ〔ン〕ネルを御着ケ寒氣之防禦ニ御怠無之様吳々も奉切望候、又真神之御手貴君を御守アラン事を祈る、敬白

十月廿一日

喪

友信君

何卒君之前途之運動ハ、常ニ神若し許シ賜ハ、成矣之御覚<sup>〔悟〕</sup>晤有之、又神之御計画中ニアリ御運動アラン事ヲ望ム

Goodbye, God be with you, henceforth & forever. Be strong in Him!

731 十月二十一日 徳富猪一郎

④墨 ⑥封筒あり。

昨夕ハ御来訪難有奉謝候、陳者今朝ハ青木子ニ御面会相成候や、本日一寸参社御尋可仕之处、少々風氣ニ有之大事を取外出不仕候間欠礼之段御免可〔被〕下候、何卒青木子ニ御面会之結果一寸御知被下候ハ、幸甚、此事ニ付御尋申上候

は他之義ニ非らず、即チ群馬知事<sup>\*</sup>を動かスノ一良案ヲ得ルニアリ、一応広津氏ニ御話被下候ハ、幸甚、明夕ハ都合仕、三縁亭ニ六時前ニ参上仕、御待可申上候、勿々以上

十月廿一日

襄

猪一郎賢兄

732 十月二十二日 大隈重信

⑤森中章光亨

肅啓、陳は大臣殿御遭難ニ付直ニ参趨御起居御伺可仕筈之处、御見舞人モ多ク参館スヘク候付却而御邪魔ニ相成可申と奉存、態ト御遠慮申上参上不仕、過日己ニ寸書ヲ奉呈仕候次第、伝聞ニ依レハ其後漸々御快方ニ趣キ被遊候由、邦家之為又大臣殿御一身之為慶賀之至ニ不堪候、乍去御大患之事ナレハ御大切ニ被遊候様日夜切望仕居候、令夫人様ニハ嘸々御心配被遊候御事ト奉推察、又大臣殿御回復ヲ祈居候趣令夫人様迄被仰上被下度奉及御依頼候也、敬白

十月廿二日

京都同志社  
新島 襄

大隈伯爵殿

執事御中

733 十月二十四日

徳富猪一郎

①「御親展」

④墨

昨夜新井毫氏被参、又今午后参り上州之運動等ニ付篤ト打合致し度旨被申候、然るに内密之事なるか種々湯浅兄ニ対し同氏カ申分有之趣、右ニ付公然湯浅兄ト對話之上ニ而談判ニ可及也、又貴兄御老丈ケ一寸なり今五時比ニ小生ノ宿迄御来臨可被下候也、御回答之廉ハ今朝十一時迄ニ同氏迄申遣し度候間、一寸御答被下度奉願上候、勿々拝具

十月廿四日

新しま襄

猪一郎賢兄

島田三郎君ハ今夕差支有之旨を以相断申候、此三四日ハ非常ニ多忙なるよし

734

〔十月〕二十四日

徳富猪一郎\*

②「国民ノ友」 ④墨

毫氏只今相見候間、御都合次第御光来被下度奉仰候也

廿四日

猪一郎兄

裏

735

十月二十五日

横田安止\*\*

①東京々橋区南鍛冶丁四番地 林文右衛門方より  
②京都相国寺門前 同志社 ④墨

本月二十一日之御書一昨日来着、再三拝読仕候而京都出發後同志社之模様想像通りニ有之、徳富氏之演説アリシハ大ニ満足之至、又同氏と縷々之御談話アリシハ将来必らず好果アルベシト楽シミ居候、小生着京後大隈伯遭難并ニ内閣之辞職等、実ニ邦家問題ニ取り容易ナラサル事件ナリ、又条約ハ一ト先延期ニ至ルベシト一決セシ由、稍退歩之形ナ

ルモ中止トハ違ヒ早晚断行アルヘシト存候、此ゴテミミ之中ニ小生之経倫ニ関ハル同志社之事ハ兀然トシテ動カス、大風怒濤ニ向ヒ抗進スルノ覚悟ニ有之、此人心洶々タルニモ拘ハラス、单身独行天下之人士ニ訴ルノ策ヲ立居候間、天父ニ向ヒ吾人ヲ助ケ賜ヘト御祈禱被下度候、当地ニ於而ハ広津氏<sup>\*</sup>モ相尋クレ種々前途も相計申候、又一昨日ハ大久保氏<sup>\*</sup>出京致し呉、不相替非常之元氣ニ而伝道之話等致し呉候、其後校内之実況ハ如何、余リ天下之大事に對し無頓着ナルハ決シテ取ルヘキ所ニ非ラス、何卒書生之修学中ハ勉強ニ汲々タルヲ以テ他事ニ関スル能ハスト雖、常ニ眼ヲ開キテ天下之真想ヲ監察シ、志ヲ励マシ、鋭ヲ養ナイ、胆力ヲ練リ、勇氣ヲ蓄ヘ、他日雄飛スルノ策ナカルベカラス、我カ同志社ヲ以テ将来小玩器之製造場トナラサル様、生徒諸士ニモ精々御注意有之度候、是レ小生之日夜我カ邦家之為ニ祈リテ止マサル所ナリ、小生も本月一杯ハ在京之積り、来月ニ至リ候ハ、上毛并ニ福島地方ニ出張致し一運動試度存居候、来京已来身体ニも別ニ替る事ナク候間、御休慮可被賜候、右は貴君之懇書を謝而為貴答として、勿々拝具

十月廿五日

横田安止君

新しま襄

当今天下之実況ヲ見、弥、時危思偉人ノ語ヲ想起シ、偉人之勃乎トシテ起リ来ラン事ヲ切望致し居候



736 十月二十六日 伴直之助

①成瀬方ニ而 ②京橋区出雲丁壱番地 ⑤写真

昨夜は態々御光来被下候処、宿之者共小生迄通しも致さず御断申上候由、甚不都合之至御海容可被下候、小生も何レ近々御尋可申上候心得ニ罷在候、右得貴意度、勿々敬具

十月廿六日

新島 襄

伴直之助殿

尚々、小生事昨夜ハ按摩療法致し居候処より御断申上候旨、宿之者申訳仕居候

737 十月二十六日 児島惟謙\*

⑤森中章光写

秋冷相催候際益御多样奉欣賀候、陳者其後小生よりは甚御無音に打過候条御海容可被賜候、過般令息正一君御入校之

時令夫人には態々御來訪被下、又御土産頂戴仕難有奉万謝候、又兼て御高配を奉勞候大学之件に付不相替御配慮被下候趣承知仕、御陰を以て久原、藤田鹿次郎氏之兩人よりは老千円差出呉候より甚恐入候得共、此上は鴻之池之寄附御工風被成下度呉々も奉切望候、小生事も当秋は関東にて一運動可仕計畫に有之候処、条約改正の爭動、大隈伯之遭難、内閣之變動等より暫時は着手も控居候得共、一兩日中には新内閣も相定可申、随て人氣も落付可申候間、来月一杯は関東に着手之心得に罷在、郷里なる上州並に福島地方へも出張の心組に御座候、近頃大阪の金融は面白からざるやと承及候得共、金森氏度々出張の手筈に仕置候間、諸事宜しく御差図被下度奉希候、御存知之通私共兎角世事に迂遠に有之候間、運動之方法等尚此上も無御遠慮御教示被下度奉仰候

右願用旁近來之御無音を奉謝度如此候也、敬白

十月二十六日

新島 襄

兒島控訴院長

閣下

乍憚高島中將、西村知事、遠藤造幣局長等之諸高官に御面会之節は宜しく御鳳声被下度奉仰候、又殊に令夫人へ宜しく仰上被下度奉希候

近頃國家之実況を見、時危思偉人の句を痛く感し時々吟誦仕居候\*

十月三十一日

和田正幾\*

⑤ 森中章光写、柏木義門写

御懇書拝読仕、今回出京之序御地迄参上之義御促し被下候得共、出京以来兎角身体相振ヒ不申、先日迄ハ毎日所々ニ出張致し、兼而計画致居候大学之事ニ付運動ヲ試ミ、已ニ上州地方ニ出張ノ積、又殊ニより候ハ、栃木、福島ニモ一運動ヲ試ミ申度、其序ニ是非共仙台迄参趣仕度存候処、此五六日已来病魔ノ為ニ侵サレ、先キニ風邪統キニテ、胃病、脳病相起リ、今尚臥床致シ居次第、又逐々寒氣モ相催シ来、ストヴナケレハ一日モ堪兼候次第、乍残念此度ハ<sup>上</sup>京<sup>上</sup>。

上毛地文ニ限りオキ可申ト存居候、乍去上毛地方ニ出張致候上、随分奔走ニ堪ヘ可申ト相認候ハ、栃木、福島之運動モ相試申、順而仙台迄モ出張候モ難計存候得共、只今ノ分ナレハ到底六ヶ敷事ト存居候、カ、ル始末ニ有之候ヘハ、今回ハ御招キニ不応候は虚弱体ノ許サ、ル処ニ関シ可申候事ニ有之、小生ノ心中モ御洞察被下度候、少しく運動ヲ試申候ハ、直ニ斃ル、有様ニテ、遺憾千万之至ニ候、何卒前文之趣デホレスト氏初宣教師方、東華中学校之諸彦ニモ宜シク御通知被下度奉希候、右為貴答得貴意度、勿々拝具

十月卅一日

新島 襄

和田正幾兄

其後仙台へハ意外之御無沙汰ニ相成、不本意千万ノ至ナルモ、何分病体ノ身ニテ諸事意ノ如ク運ハス残念之

至、乍去貴校てハ段々諸事御整頓ノよし大慶之至、何卒貴兄方ノ御奮発ニヨリ、将来東華之美名ニ背カサル様御尽力ヲ奉仰候、何卒義会ノ諸士ニモ宜シク御致声被下度奉希候、尤先日一寸松平知事ニハ面会仕オキ申候、乍憚妻君ヘモ宜シク御伝言被下度奉希候、正一君ニハ定而御成長ト奉存候

739

十月

下村孝太郎

④墨

⑥封筒あり

拝啓、陳者貴殿今般無恙御帰航相成、尚旧ニ依我同志社之為ニ御尽力可被下候条、我等一同喜欣満足之至ニ不堪処ニ御座候、依而今回改而同志社ハルリス理学部教授之名義ヲ以テ貴殿ヲ奉聘、年給八百四十拾円ヲ呈シ将来之御尽力ヲ切望仕候間、此段御承引被下度候也、敬白

明治廿二年十月

下村孝太郎殿

同志社員総代

新島

襄

㊤

740 十一月二日

古賀鶴次郎\*

①東京々橋区山城丁山城軒 ②京都相国寺門前 同志社 ⑤写真

此兩三日中ハ不加減ニ而床ニ伏したり、乍去最早本日ハ快復セリ

過日は御懇書被下数回読了し、如何ニも貴君ニ御面会致し貴君之御言葉を聞くか如し、句々有精神、節々有奇骨、大ニ生之心を慰め、出京已来胸中ニ蟠まる種々無量之鬱屈せる隱雲を一掃したるか如し、我カ同志社之青年中我カ邦之前途を見る事、貴君之如き者数輩を見るに至らは、生ハ頗る信す、我カ校之設立ハ我邦家ニ対し決而無<sup>効</sup>ノモノたら

ざるを、貴君勉メヨヤ、将来之天下も矢張君等青年之掌握内ニ可有之は明々白々、龜を用ゆるニ足らされは、仰願ク

ハ益千里之志を養ひ、我カ邦家を救ふ之大計を立賜へ、富貴功名ナニモノゾ、願ふ所ハ偏ニ此民を救ひ此民を導き、

一日モ早く真之文化之域ニ達しコールデンエージ之極点ニ至らしめん事なり、願くハ日々鋭を養ひ、胆を練り、此大事ニ至るの準備をなし賜ハ、生之喜ひ争てか之に若くものあらん、今ヤ滿天下腐敗矣、之カ為ニ涙を灑く者幾人カ

ある、君等宜しく改革家となりて此不潔なる天下を一掃し賜へ、決而名利ニ汲々たる輕薄兒之轍を踏ミ賜ふ勿れ

着京已来病体ニ取り随分多事、匆卒之間相認候間、粗文意を尽さず、只々生之精神之存する所を御洞察アレハ幸甚

十一月二日

新島 襄

古賀鶴次郎君



本日

生も明日ハ京都ニ在生徒諸君之運動会ニ臨ミ得ざるを遺憾とす、  
貴君之県よりハ此度来島と云ふ一奇人を出せり、<sup>\*</sup>氏之心情を察す  
れは氣之毒千万なり、実ニ一身をカク誤用せしも天下の為ニ惜ま  
ざるを得ず

〔傳〕

願くハ深山大沢生竜蛇之句を服庸し、当時学校ニ在るハ深山大沢  
ニ蟠まるの感を持、将来竜蛇となり芙蓉峰之上迄も達せん事を期  
し賜へ<sup>\*\*</sup>

福岡よりハ兎角忼慨悲奮之士を産ス、乍去沈思遠謀ノ人ニ乏キニ  
似タリ、忼慨悲奮ノ士トナルハ易シ、沈思遠謀ノ人トナル難シ、  
貴君ハ何レヲカ撰フカ、生ハ満天下沈思遠謀之人ニ乏シキヲ甚遺  
憾トス

741 十一月五日

徳富猪一郎

② 日吉町 民友社 佐藤重記君持参 ④ 墨

会津之産ニして佐藤重記ト中人、エマルソン氏之開化論を訳し、本日長岡を以て小生ニ面会を求め参り、面談之末一応貴兄ニ御面会スヘキ旨申候ハ、紹介致し呉候ニ被申候間、直ニ貴社迄罷出候様相勸候間、御面接被下候ハ、幸甚之至ニ不堪候、勿々頓首

十一月五日

新島 襄

徳富猪一郎兄

742 十一月九日

徳富猪一郎

② 「国民之友 乞御回答」 ④ 墨

昨朝は松方大臣迄御苦勞誠ニ重々之至ト深く奉謝候、昨夜は竹崎一二氏他ニ二人ノガキ大將<sup>〔率〕</sup>ヲ卒ヒテ来訪セリ、又近々他ニ老人ヲ連来ルト被申候



小生ハ本日風雨故他出不仕、例之御頼ミノ額面ニ拙筆ヲ振ヒ度候間、何ソ奇語四字五字七字迄位之所ヲ御遣し被下度候、小生も少し相集候分を貴覽ニ呈シ候間、ヨシト御認被成候分ハ ニヤ ※ヲ御附被下度候也

一 騶虞不折生草茎

一 深山大沢生竜蛇

一 丈夫起処自由家

一 精神一到金石亦徹

一 草不謝榮於春風

一 木不怨落於秋風

一 真理照丹心

一 時危思偉人

一 天真爛漫(漫)

一 堅忍不拔

一 取義為仁

一 志在千里

一 神色奇骨

一 饑渴暴義(義)

一 清心者福矣



支那語聖書御かし被下度候也

十一月九日

猪一郎賢兄

裏

743 十一月十日

吉田賢輔\*

⑤写真

華墨拝誦仕候、陳者過般は参堂久々ニ而拝眉を得ラレ 誠ニ幸甚之至ニ奉存候、又数日前態々御使被下、且本日ハ結構なる硯石御投与ニ預リ難有頂戴仕候、<sup>〔戴〕</sup>貴命之月之輪之硯石ハ多分手輕ニ求め得へき事と存候間、帰宅之上相計可申候、又御筆跡頂戴永く保蔵可仕候、貴命ニ從ひ拙影荳葉奉呈可仕候間、何卒貴影ト御交易被下候様奉仰候  
先は為御受得貴意度、勿々拝具

十一月十日

新島 襄

吉田賢輔老兄

梧下

尚々、令閨様より愚妻迄御伝言被下難有奉謝候

「ウツ書」

小弟弟

吉田先師  
敬呈  
」

144 十一月十一日 徳富猪一郎

①元数寄屋丁 成瀬方 ②榎坂五番地 ④墨

予期之如く今午后松方大臣官邸ニ参候処、小山ニ参リ呉ト申事ニ付、小山之邸ニ参リ面会、<sup>\*</sup>縷々談判仕候処、先大臣ノ親しく致し居者丈ケニ随分談判も可致旨被申候、又一小集会之事ニ付相尋候ハ、一個ツ、談判之方可然ト被申候、兎角書類等一覽之上篤ト熟考可仕旨被申候

先右様之始末ニ有之候間、好都合ト申候而可然也、偏ニ貴兄之御尽力を奉謝候、本日ハ米国より帰り候小野英三郎氏<sup>(二)</sup>相尋<sup>\*</sup>呉、是非御面談も致し度ト申居候

今夕福島より綱島氏も出京致し候得共、未タ面会ハ不仕候、此レハ福島ニ是非来レト申為ナラント存候、先は不取敢御報道迄、勿々拝具

十一月十一日

新しま襄

745 十一月十三日 波沢栄一

⑤写真

其後は御起居如何敬而奉伺候、陳者今朝参堂仕候処、御不在ニ而拝眉を不果再ヒ参上可申ト申上帰館仕候、然ル処今午后参堂之都合ニ参兼候間、不得止事書面を以而申上候

一応拝眉を得而相願度義ハ他ニ非らず、貴殿より在福島之北村芳太郎氏迄御紹介書<sup>〔載〕</sup>老通頂載仕度事也、小生ハ此度郷里なる上毛地方ニ出張仕、其より福島迄参リ、兼而大学募集之準備も仕置候間、<sup>今</sup>此回ハ是非多少之収獲を得度胸算ニ有之候処、北村氏ニハ機能く出京之よし承リ及候間、貴殿之御紹介書を得而直ニ同氏ニ面会仕置度候間、乍御手数右御紹介書ハ此者ニ御渡し被下候様奉願上候、尤同氏在京中自然御面会等も有之候節ハ、何卒敝社大学募集之事ニ関シ、福島ニ於而卒先し充分尽力斡旋被致候様御談し置候ハ、非常之好都合と奉存候、右御依頼迄、得貴意度、勿々具拝

十一月十三日

新島 襄

波沢栄一殿  
梧下

尚々、本日ハ佐野理八氏に面会仕候処、同氏ニハ幾分カ近来損毛致し候得共、多少之有志ハ可致旨被申候、依  
而今回ハ是非トモ福島地方ハ取纏申度候間、貴殿之御添書ハ是非ニ必要ト認居候間、北村氏ハ充分御奨励被下  
度奉仰候也

746 十一月十六日

徳富猪一郎

①元教寄屋丁三丁目

成セ方

②赤坂区榎坂五番地

早々御披見

④墨

昨日ハ是非とも拝眉を得度存居候処、西京之ゲーンズ氏<sup>※</sup>帰国之為已ニ西京を発し候趣拙宅より通知有之候間、同氏面  
会之為横浜へ趣き申候次第ニ而、昨日御来訪之際折悪しく不在ニ有之候ハ甚遺憾千万なり、依而今朝早々参堂上毛行  
前之計画等御相談仕度存居候処、昨日より咽喉ニ少々之痛ミを生シカタル之キミニ有之、昨夜は少し発汗も有之旁今  
朝ハ尚床中ニ伏し居、床中ニ而種々思考仕居候、何レタイシタル事ニハ無之候間、後刻ハ起立可仕候得共、賢兄御社  
ニ御越し被成候ハ、少々早目メニ御出宅相成間敷也、今朝も九時半比ニハ綱島ト一ノエンゲージも致し置候間、其前  
ニ一寸御来訪被下候ハ、重々之至ニ奉存候、尤御相談を要し候は例之松方大臣之事也、此は全力を可尽事ト存候間、  
上州、福島等は権衡ニ懸ケテ甚輕きを可覺ト存候、右願用迄、早々拝具

十一月十六日

襄

猪一郎賢兄

747 〔十一月十六日〕

徳富猪一郎\*

②「至急御披見」 ④墨

過刻ハ御来訪難有奉謝候、待チニ待チタル網島氏只今参り、弥榎坂之御招キラ受クル事ニ決シタリト被申候、何レ同氏も後刻人見君ニ御目ニ懸ルト申居候、右御報道迄、早々拝具

猪一郎賢兄

襄

飴一箱差上候間御社之若手御連中ニ而御尽し被下度候也

748

十一月十九日

〔広津友信〕\*

⑤ 柏木義円 写

近頃宮川<sup>※</sup>関東ニ参られ小生を訪ひ、懇々将来之運動殊ニスピリチュアル上ニ同志社ヲインブルブスルノ話等有之、小崎ニモ昨夕被参、同志社ノ計画又殊ニ伝道会社ノ改革ニ付充分意見ヲ吐露シ呉候次第ニテ、先生方ニモ大ニ内部ノインブルブメントニ注目スル所アリ、此五月ノ総会ニハ伝道会社ニ一大改革ヲ与ヘタキ旨被申候、此レハ大美事ニテ小生ハ大ニ賛成致置申候、又日本中有名ナル場所、要路ニハ必ラス伝道士ヲ配置スヘシ（今ニ至リ初メテ此説出来レリ）ト申候間、此レハ小生ノ兼テノ持論ナリ、之ヲ断行シテ苦シカラスト申置候次第ニ候、昨夜ハ大分面白キ話カ出来申候、然ルニ未タ合併云々ノ話シハ無之、自然ニ泣キネイリトナルカ、又ハ当分不問ニオキ、時至ラバ断行スルノ策ナルカ分リ不申候得共、彼等ニモ若手ニ抵抗サレテハ余リ得策ニアラサル事ヲ悟リハセヌ〔カ〕トモ存候、併シ若手ノ勝利トナリ先生方ノ失敗トナリタリトノ評モアレハ、大ニ快カラサル所アラン、多分伊セノ帰国ヲマチ一相談アルヘシト存候、併シ到底出来サル事ナルヲ彼は心配サル、ハ不定見千万ナリ、早ク断念スルコソ卓見ト可申、彼等ハ合併熱ニ酔ヒタルナレハ酔ノ覚ムルニ至レハ又々至当ノ相談モ出来ベシト存候……（ママ）

題富士越之竜<sup>※※</sup>

蛇蝎世評不介意

忍蟠大沢幾千年

君見一旦風雲裏　飛上芙蓉峰上天

余ヲ以テ竜ニ比フルニアラス

只竜タルヲ学ハント欲スルノミ御一笑\*

749　十一月二十日　井上馨

①府下京橋区南鍛冶丁四番地　茂林館ニ而　御親展  
⑤写真（国立国会図書館憲政資料室所蔵）

拝啓、陳者閣下ニハ昨日午后無滞御帰館之由承知仕敬而奉欣賀候、小生事も先月来出京仕不相替大志之為奔走仕居候次第ニ有之、早速参堂御左右御伺可仕管之处、此両三日前より少々風邪ニ罷在、又近々郷里なる上毛迄暫時罷越度候間、何レ帰京之上参上仕度心組ニ罷在候、右不取敢侍史迄得貴意度、勿々敬白

十一月廿日

新島 襄

井上伯爵殿

閣下

再白

乍憚令夫人様へ宜しく御伝言被下度奉仰候

750 十一月二十一日 新井毫

④墨

過日拝眉を得しより東京ニ而手懸りと相成候仕事有之候付、直ニ上毛出頭之義ハ見合居候折柄、一寸横浜へ参リ（此先  
一回行ナリ）チト帰京ハ延引シテ夜ニ入り候故、少々冷へ冒寒致し、為ニ此十六日より臥床仕、少々熱氣も有之候処、  
熱ハ已ニ減シ気分も最早宜しく候間、三四日之内ニハ是非トモ上毛出発之覚悟ニ御座候、右御通知迄、勿々拝具

十一月廿一日

襄

毫君

梧下

尚々、先日御談之三氏<sup>\*</sup>へハ書面本日差出可申候

大人へ宜しく御致声被下度候

未タ拙筆ハ振ひ不申、大名<sup>●●●●</sup>人ニ候得は中々着手ノ覚悟ナリ

鳥居坂も帰京致サレ候得は、内閣之方計も何ニカ近相定可申候



751 十一月二十三日

徳富猪一郎\*

②日吉町 国民之友 ④墨

本日松方大臣ニ参候処来人之多キニ拘ラス面会致し呉候、依而兼而之計画通申談候処、只今ハ非常ニ多忙今少し之裕余ヲ呉レラレヨ、私モ其々に心当リ之人も有之候間機を得而克ク分カル様ニ談シ込ミ度候ト被申候、又小生より資産家ヲ指名候ハ、我輩心当之人ニなり又他ニも広く談スル積なりと被申候、小生より横浜之方ヲ少し急キ呉レト願ヒ〔候〕ハ、心得タリト被申候間、何レ幾分之結果ハ可有之候、今朝は客之待合所ニ而安場知事ニ面接致し候、又原善、朝田、平沼之三人ニも面会申候、右は御通知申上度、匆々拝具

十一月廿三日

襄

猪一郎賢兄

此上ハ河島醇氏ニインテレストヲ置カセ、時々大臣ヲ促スニ如カスト<sup>〔カ〕</sup>存候、大臣ニハ三井ニモ談シヤルト被申候

752 十一月二十三日

横田安止\*

⑤写真 ⑥封筒あり。

本月十八日付之華書御送附相成幾回モ拝読致し、実ニ貴君御好情之忝ヲ奉謝候、小生モ如此大学計画之為、久々家ヲ離レ居候は一方ニハ病氣之為ニハ宜シカラス候得共、已ニ乗出シ船如何ナル風波襲ヒ来ルモ再ヒ帰港ス可ラス、大風モ可<sup>吹</sup>、怒濤可起、只小生ハ彼岸ニ達スル事ヲ知ルノミ、半途ニシテ沈没スルモ小生ノ恐ル、所ニアラス、其実ヲ申セハ小生カ如此安心シテ外攻政略ニ尽力シ得ルハ、金森君小生ノ代理ニ当ラル、ノミナラス、内部ニ於テ貴君等僅々ノ兄弟カ真実ニ同志社ヲ我カ物ト為シ、百事心配ヲ回ラシ呉レ賜フニヨルト心大ニ喜ヒ居候、貴君御推察之通、当時募集ニハ尤困難之時ニシテ、一時ハ実ニ手ノ付ケ方ナク、小生ハ只猫カ活眼ヲ開ラキ、鼠穴之口ニイミ、鼠ノ出テ来ルヲ待ツノ有様ナリキ、動クモ目的ノ為、又忍ヒテ待ツモ計画之為、今日モ尚待ツノ有様ナルモ今トナリテハ只待ツノミナラス、農夫カ田畑ニ寒肥ヲカクルガ如ク、他日收穫ヲ得ル丈ケノ準備ハ大分致し置キ申候

政事上之実況ハ実ニ実着ナル真面目ナル男児ノ乏シキヲ覚へ、益良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ望テ止マサルナリ、小生近来ノ自詠御一覽可被下候

有感

徒仮公事逞私慾

忼慨誰先天下憂

廟議未定国歩退 英雄不起奈神州

小生モ明後日より上州へ出発、七日カ十日間ハ滞留致し、其後再ヒ帰京、漸時ハ収獲之為奔走可仕候、時々留守宅へモ遊ヒニ御越被下候由ワイフより申来り当人モ留守中之鬱ヲ散スト申大ニ喜ヒ居候間、尚御勉強之余暇ニハ御来訪、同人ヲ御慰メ余り久々之留守ニ失望セサル様御工風被下度候、又留守中同志社之内部ハ自分ニ御尽力被下、縦令区々之規則有之候トモ、生徒中藹然トシテ自治自由之春風吹居候様仕度候、小生モ兎角多病之身ニ有之候得共、我力同志社之為、我力将来青年之為、可及丈尽力可仕候間、不相替小生心身之為ニ御祈被下度奉願候、又過日広津ニモ申遣候通、小生畢生之目的ハ、自由教育、自治教会、兩者併行、国家万歳、小生之心情御洞察可被下候、先ハ貴答迄、勿々頓首

十一月廿三日夜

襄

安止君

梧下

753

十一月二十五日

松方正義\*

⑤森中章光写

拜啓、陳者一昨朝参上仕候処御多忙中ニモ拘ラセラレス御面謁被仰付候条深ク奉鳴謝候、小生事モ本日ヨリ郷里ナル上州へ出發仕、該地ニ於而大学資本募集ニ尽力可仕、且滯留時日ハ先ツ二週間ト見込ミ置キ、帰京之上ハ尚京浜間ニ奔走仕度、就而ハ先ツ別紙之資本家へハ御都合之上御談シ置キ被下度、尤緩急之所ハ全ク閣下之御胸算中ニ可有之候間、小生ハ敬而閣下之御都合ヲ可奉待上候、且貴命モ有之候通可相成ハ別紙指名之資産家之外、御心当リ之人々ニハ手広ク御奨励被成置度奉仰候、已ニ奉達高聞候通小生之手許ニ内国ヨリ募集候分漸ク六万ヨ円ニ相達候付、尚四万。円ヲ募リセメテハ拾万円ニ達<sup>〔セ〕</sup>シメ度<sup>〔符子〕</sup>致シ度、左スレハ彼米国人ヨリ寄送相成候十万弗ヲ合セ二拾三万ヨ円之金額ニ相達可申候間、来明治二十三年ニハ国会開設祝賀之為先大学之手初メ丈ハ出来候事ト奉存候、此際ニ当リ小生ヨリ邦家之要路ニ当リ多端寸暇スラ惜ミ賜フ閣下ニ向ヒ、如此モ懇々御依頼申上候ハ甚恐縮之至ニ奉存候得共、当時小生ノ胸算中閣下ニ願ヒ御助力ヲ仰クノ外別ニ良策ヲ発見不仕、実ニ滿腔之計畫自ラ支フル能ハス、血涙ヲ灑キ願出候次第ナレハ、此レハ小生畢生之歎願分ト御認被下候ハ、何卒小生邦家ノ為ニ竭サントスル区々之衷情ヲモ御了察相成、又後進生養成之事モ深ク御願慮被遊、小生輩之企ヲシテ彼岸ニ達セシメ賜ハ、小生ニハ実ニ手ノ舞ヒ足之踏ム所ヲ知ラサル次第ニ可有之候、過般来已ニ二回之拝眉ヲ得大体ハ最早申上置候得共、今朝上州へ出發ノ際尚一書奉呈、前文之儀御依頼申上候次第、重複之義ハ伏而御海容被賜度奉仰候、敬白

十一月廿五日

新島 襄

松方伯爵殿

閣下

甚不遜之至ニ候得共、小生近頃自詠之和歌を貴覽ニ奉呈候間、無風流なる小生之文句ニ拘泥し賜ハす、只々歌之心丈を御洞察被下度奉願上候

皇国を思ふ丹き心を朝間山に寄せて

朝な夕な峰に烟の絶へされは山の心根如何あるらん

754 〔十一月〕二十五日

徳富猪一郎\*

①南鍛冶丁 茂林館 ②府下京橋区日吉町廿番地 国民ノ友 ④墨

今朝河島氏ニ面会申候而横浜ニ先駆スルノ策ヲ陳シ、同氏ト松方大臣ノ力ヲ仮リ、此奇敏活潑ナル戦争ニ勝利ヲ得度旨申候ハ、同氏モ大ニ賛成致し呉候間、京浜間資産家ノ人名ヲ示し候処、<sup>〔態〕</sup>嘸々書生ニ写サセ置キ候、横浜ニ至急着手ノ事ハ早々大臣ニ相計可申候旨被申候間、先非常ノ好都合ト存候、小生留守中モ右ノ両氏ハ宜しく御奨励方之義奉

願上候、勿々頓首、グーッドバー

廿五日

新島 襄

徳富猪一郎兄

尚々、今朝ハ時間モ有之候間、霞ケ関ニ立寄執事ニ面会し、大隈大臣ノ容体ヲ相尋ネ来候

155 十一月二十六日

徳富猪一郎\*

①群馬県下前橋神明丁

関農夫雄方

②東京々橋区日吉町廿番地

国民之友

御親展

④墨

拝啓、陳者小生事昨日ハ無滞着前、別ニ疲レも無之諸事兄弟方之周旋ニ而宿所ニハ差支モナク、ストフノ準備モ出来又気候も案外ニ寒カラス候間御安心可被下候、昨日ハ御多忙之身ナカラ態々ステーション迄御越被下深く御好意を奉謝候、小生も今朝ハ直ニ佐藤知事ニ罷越し、例之計画通申入候に直答ナラス、第二部長ト相談スト申ス事ニ而相別レ申候、然し小生ノ申ス丈ハ思切テ談シオキ申候、又第二部長ニモ面会致シタキモノト申候ハ、県庁ニ参ルベシト被申候間、直ニ面会致し候処随分ハキ／＼シタル<sup>人</sup>ナリ、乍去宗教上モ政党モ一切教育上ニ関係ハ付ケサセヌト申居、

殊ニ同志社之事ハ宗教ノ色ヲ帶ヒタレハ公然ト御世話ハ出来ヌト被申候、依而大学ヲ起スノ目的ハ宗教擴張ノ為ニアラス、其結果タル、宗教ノ大敵ヲ起スモ計ラレス、吾人ハ社会ニ必用ナル諸学科ヲ以テ天下ノ生徒ヲ薰陶セントノ目的ナレハ、宗教一方ニ偏スルモノニアラス云々申候ハ、大ニ語氣モ改マリ、先知事トモ篤ト協議可致旨被申候、知事ニハ井上伯ノ添書も有之候事ナレハ少々ハ心配ハ致シ候事ト存候、何レ今明日中ニハ何ニカ回答可有之ト存候、又本日午后島田君着前後、直ニ宿ニツキ同君ヲ相尋申候処、横浜云々ノ事被申候間、委細ハ徳富君よりも承知致、又昨日河島ニ面談致シ候事も相談シ候ハ、其レハ至極ナリト被申候、又松方大臣多忙ニして横浜ノ原、茂木、朝田、木村等ニ面談相叶不申候ハ、代筆ニテモ不苦、此三四人迄書面を送り、其書中大学之計画并ニ学校之事情等ハ島田三郎力心得居ルカラ相尋ネ可申トサヘ御述被下候ハ、島田君ノ一技倆ヲ呈スルノ門戸相開可申旨被申候、先差当大臣ノ口開キガホシイト申迄也

島田君ニハ如此被申候得共、小生上毛滞在中ニ大臣ヨリ原善、茂木、朝田、木村等之人々ニ御談カ出来候ハ、至極ナリト存候間、貴兄今一応河島君ニ御計被下間敷也、尤昨日之打明ケ談シモ有之候間、河島ニハ大ニ銳意尽力致し呉ヘシト存候間、横浜政略ハ貴兄ヨリモ御計被下間敷也、又大臣ニも御面晤ハ相叶申間敷也、小生之帰京ハ多分一週日又十日間ナランカ、或ハ其レヨリモ少ナキモ知レ不申候

万一大臣ニ御面晤有之候ハ、川田日本銀行総裁ニインテレストヲ置カセ、東京中之銀行ニ一運動ヲ試ムル事モ必用ナリト島田君被申候間、先横浜ノ方ヲ先キニシ而ル后直ニ川田ニ御談判可被下旨、貴兄よりヒントなし置被下候而は如何、島田氏ニハ小野光景ニモ松方大臣より一通之添書ヲ被送、同志社之為ニ尽力スベシト申ス事ニ至ラハ、彼カ横浜中手広ク慶應義塾之為ニ奔走スル事ヲ止ムルノ一手段ナルヘシト被申候、此レハ如何、貴兄之御意見御伺申上候、島

田氏ニハ大臣ノ添書アレハ予ハ下働キハ可致旨被申候

可相成ハ大臣ヨリ原善、茂木、朝田、木村之人々ニ一応御談判アリ、金額モ御定被下候上、他之所ハ老通之御添書位ニ而島田君奔走致し呉候ハ重々ト存候

日本銀行総裁ニ関係ヲ付クルモ一大問題ト存し候、此レモ成丈速ニ致し度候、兎ニ角河島ニ御面会之上松方ニ御面晤アル云々ノ事ハ全ク貴兄ノ御独断ニ而宜しく其途ヲ御開被下度奉希候也、早々拝具

十一月廿六日

襄

徳富猪一郎賢兄

梧下

756 十一月二十七日 中山光五郎

⑤写真

其後ハ御起居如何奉伺候、陳者小生事去月中ヨリ出京仕、此度一寸前橋迄参上漸時滞留之積ニ御座候、今午后頻ニ来客も有之候為メニ裕余を不得候処、唯今一寸来客も打絶候間、乱文ながら寸書を呈し貴兄之近情を奉伺候、此地之如キハ実ニ動カサル山之如き地カモ知<sup>レ</sup>不申候得共、信アラハ山ヲモ動カスト申ス事モ主之教ヘ賜フ事ナレハ、何卒将来ヲ望ミ御働ラキ有之度候也、先般は目出度御結婚之よし重々之至ニ奉存候、其後定而伝道上非常之御助力ヲ得サセ



ラレ候事ト奉存候、其後余リ御不音ニ及候間御起居御申上度、勿々拝具

十一月廿七日

新しま襄

中山光五郎兄

尚々、小生此度之出京并ニ来前ハ全ク大学ノ事ニ関し候次第、何卒右事業之成功ニ至候様御祈被下度候也  
乍憚妻君ニよろしく

157 十一月二十八日

徳富猪一郎

①群馬県下前橋神明丁

関農夫雄氏方

②東京々橋区日吉町廿番地

民友社

④墨

島田三郎君ニハ何卒充分ノインテレストヲ御持被下度候、同氏ハ松方大臣ノ御添書文テヨイト申居候得共、願  
クハ御一言ホシイモノト存候

先制人トハ兵家之語に候得共総而此活動社会之仕事に於而勝利を得んとなれば必らず此秘訣を活用せざるへからず、  
上毛之方も知事之周旋ニより昨夜ハ僅々之資産家を寄セ一応之談判を開き申候、金額ハ未定まらず多分少数ならんと

ハ存候得共、彼等ニも募集之勞を取る事ニ相成申候

如斯身ハ上毛ニあるも只心にかゝるハ横浜之戦場なり、其後松方大臣ニハ如何之手ヲ尽呉候哉、セメテハ原善、茂木、朝田等ニ御勸あり、彼等より各一千以上又二千以上之金を出し呉候ハ、他ハ皆応すへしと存候

前橋之大体ハ明日中ニ片付可申、左スレハ高崎ニ出張可仕、又該地ニモ兩三日之日子ハ要すへし、左レハ来月三日比ニハ帰京相叶可申、其上ハ直ニ帰京、直ニ横浜ニ出張之積ニ御座候、右ニ付時日ハ後レハセヌカト少々心配仕居候次第、若し松方大臣之着手も出来横浜行ヲ速ニ要スルナラハ一寸御飛報願度存候、左スレハ高崎之方ハ後回ハシニシテモ横浜丈ケハ片付ケ申度候、又松方大臣ノ御手ニヨリ東京ノ銀行連中ニ御着手願度存候、此辺之所ハ貴兄御含オキ河島君ニ充分御示談被下候様奉希候、右は用事ノミ、早々頓首

十一月廿八日

襄

猪一郎賢兄

桐生ノ佐波吉左衛門、書上文<sup>(左)</sup>右衛門之両氏ハ東京ニオラル、由、此ノ兩人ハ農商務省ヨリ御言葉ガカ、レハ上策ト申事ナリ、此レモ一応御工風被下、可相成ハ古沢氏等ト御計被下間敷也

758

十一月

〔広津友信〕\*

⑤ 柏木義円 写

〔有感 明治廿二年十一月

徒飯公事云々ノ詩アリ〕

又<sup>ヒツ</sup>畢生之目的

自由教育 自治教会

兩者併行 国家万歳

血淚句々ヲ生ス、兄宜シク生ノ心情ヲ洞察アレ、先ツ慷慨モ今回ハ茲ニ止メ申度候

〔ママ〕……長岡之事モ先ツ当今之様子ナレハ少シ安心仕候得共、苟モ一致之分子有之候上ハ決シテ分裂ノ憂ナキ能ハス、早晚破裂ヲ可生恐モ有之候、何卒真ノ愛ト真ノ自由如何ヲ知ラシメ、之ヲ以テ之ヲ親和凝結セシムルニヨリ我組合会中今日ノ如クジエロシーヲ生ジ、互ニ其心情ヲ通セサルニ至リシハ全ク一致問題ノ然ラシムル処、尤モ前ヨリモ口外ニ発セサルジエロシーナキニアラス、小生ハ百モ承知致シ実ニ彼ノ先生等ノ心情ノ小サキヲ嘆キ居申候、然ルニ此合併問題起リシヨリ益ジエロシーヲ増加スル機ヲ出来シ、公然人々ニ向ヒ小生ヲ搏スルニ至リ、是恰モ一家ノ忤力妻ヲ持チ子供ヲ得タルトキニ、其親父ニ向ヒ早ク世。体。ヲ。渡。セ。ト申スト同一ナリト窃ニ冷笑シ、又彼等ノ喋々スル事ハ最早意ニ介シ不申候、彼等ハ実ニ自由ノ教育、自治ノ教会ノ真価ヲアツプレジエートセサルモノナリ、往々ハ他。ヨリ。注。入。ス。ル。ヨリ。外。ニ策ナシト信ス、小生兼てノ自詠ニ

あれもよし其れもよし／＼此れもよし

忍びて通る塵の世の中

只今小生より強而弁解スルモ彼等ハ決シテ承知致サ、ルヘシ、此レハ天国ニ至ル迄忍ヒテ待ツニ如カスト、此上ハ悠然トカマヘ居申候

御地ニ面白カラヌ風評等ハ、北洋ヨリ吹来ル風カ君ノ家屋ノ上ヲ經過スルト同一視被下度候、介石先生ナドハ矢張合

併ニシンバセーヲ持ッ人ナラン、介石丈ケハ先生丈ケニシテオイテ可ナリ、何ニカ同氏ヨリ小崎君迄其意見ヲ喋々申来ルヨシ聞及候〔ママ〕……

小生も出京以来既ニ一ヶ月ヲ経過シツ、アルニ、何ノ收獲モナキニ似タレトモ、今ハ農家ニ於テ寒ゴヘヲカクルガ如シ、来春ハ多少收獲アルベシ、嗚呼天下之事比々皆之ナリ、吾人豈輕々ニ失望落胆スヘケンヤ〔ママ〕……

760 〔十一月 徳富猪一郎〕\*

⑤ 森中章光享

松方大臣へ御依頼被下度分

一過日来三井之西村寅四郎氏へ面会之上、三井一統ヨリハ弊社大学へ金三千円〔是ハ大阪之住友氏分  
寄附金ト同額ト申込候〕寄附被致旨依頼仕置候間、其成否不相定前、松方大臣より一寸御一言或ハ御一書なり被下置度候事、尤西村氏へハ兼て京都府知事北垣氏より度々申込置呉候得共、決セントシテ未タ決セス小生モ大ニ心配致居候

一去十二、十三日両日間横浜ニ於而一二之資産家に寄附之義相頼ミ候処、先茂木惣兵衛、原善三郎等之寄附額ヲ取極むへし、去れハ我等も応分之寄附ハ可仕と迄申居候間、右之兩人又其外之御心当之者へ御話し置被下候而、金額等相定候ハ、他も其例ニ倣ヒ応分之寄附可仕、又来月ニ入候ハ、逐々歳末ニ近寄、為メニ不都合を可生候間、成丈本

月中ニも何ニとか御奨励相成候ハ、至極ト存候事  
一宇津宮之<sup>〔都〕</sup>河村伝蔵氏へモ松方大臣より御奨励被下度候事

761 十二月八日 新島八重

①マイパシニテ ②マルタマチテラマチ ③電報 ④電報用封筒に封入され  
ている。

コノアイダヨリスコシビヤウキダ、モハヤダイブンヨロシ、キンキントウケイヘカイルカラアンジルナ

762 〔十二月九日 新島八重〕<sup>\*</sup>

⑤柏木義円写

尚々シエツド嬢<sup>※</sup>ニ而病氣ヲ起せし事ハ一切他人ニ御話無之様仕度候、彼<sup>〔ママ〕</sup>ハマダ若キムスメニテ世間ノ交際ハ存

セラレズ、又物事ニキノ付カヌ人ナリ

後

(八)

先日前橋着ノ上一書さし上候得共、尚々引統書面も差出度存候得共、去月廿一日之夕他所ニ晚餐ニ招かれ候処、私ニ  
は前ニ大事之有之候間絶而御断申上候得共、如何ニウルサク近辺タカラ来被下ト被申、カノ米国之御婦人之事故先拠  
ナク其招きニ応シ参り候、豈図ラン極粗末なる日本御馳走、室前ニハ火ハタキ有之候得共、御ハンノ時ニハ火ヲタキ  
風之吹キ

風之吹キ

込ミ候所ニ私ラスヘオキ、

々之

風力来テコマルト申候得共格別御氣も付カセラレス、先ツ私も少々寒□□をガマ

ン致し食事を済ませ、其後少々談を為し閑様ニ帰り申候ヘトモ、夜半より腹イタミ出し、早々長岡を後藤様ニ走ラ

セ藥をモライニヤリ候処、長岡ヲツサン之ノロ調子ニテ少々腹カイタイト申候故に、先一通り腹イタノ藥ヲ呉れられ

候に、曉方に相成候而も腹ハ直オリ不申候間、又々長岡をやり後藤様御出を願ひ遂ニ皮下注射を致し、漸クイタミ丈

ハ止マリ申候得共、遂ニ腸胃カタルト相成、其後肥立宜しからず、少々之食事も致し候得共力付き遅く、食事毎ニ小

パン一切レ(鶏肉牛肉)ソツプ茶碗ニ一杯、牛乳少々ツ、位、何分ハゲシク痛ミ候後故腸胃カ少しの事ニ而痛み易く候

間、ソロ／＼ト回復可致ト存候、幸ヒナル事ニハ不破ノ奥様<sup>※</sup>日々看<sup>病</sup>ニ御越し被下、食物一切之御世話致し被下候

故、何ニも不都合ハなく、内ニテモ此迄と申申居候次第、又室内ニ氣ヲ付昼夜共火ヲタキ暖カニなしオリ候間、手当

ニ何ニも落ドハ無之候

一昨日比より大分食氣もよろしく相成、大便之通しもよく相成候間此分ならば四五日之内ニハ東京ニ帰り可申ト存候

十二月八日東京之方も大ニ延引ニ相成候得共、今少一横浜、東京ト片付一帰宅も出来候間

763 十二月九日

徳富猪一郎

①上州前橋神明丁

関農夫雄氏方

②東京々橋区日吉町廿番地

④墨

先般来度々之御書面被下候処、一々御回答不仕候段御免可被下候、陳者小生事も此地ニ来ルヤ間モナク腸胃カタルヲ初メ随分劇シキ痛ミニ有之候故カ、其後中々腸胃カ感シ易ク、只少量ノ食物ヲノミ容レ候故カ今ニ体力付キ不申、到底此四五日中ニ他ニ出懸ケ遊説ナドハ覺束ナク存候、加之ナラス天氣ハ益寒氣ヲ増シ来候間、一日モ長滞橋セハ一日モ多ク病ヲ益スノ憂アリ、此度県庁ノ方ハ至極速ニ相運ビ万事氣配宜シク候所、小生ノ病氣ニテ俄カニ頓挫セシ有様ナリ、<sup>〔大〕</sup>太間々、桐生之方ナドハ已ニ集会時日迄取極小生ヲ招キ呉候次第、之モ水泡トナリ、只今ノグワヒナラハ前橋、高崎取纏メノ分モ全ク小生ノ手ニ余ル間敷カト懸念致し居候

茲ニ貴兄ト御相談申上度ハ、当所ニ止リテセメテハ前、高二ヶ所之寄附文ケデモ取纏メ可申也、將タ此二ヶ所之分モ湯浅兄ニ托し出来ル丈速ニ帰京可致哉、小生ノ帰京之思立チシハ、当地寒氣益募候ハ、小生病氣ノ為メニハ益宜シカラスト存候ナリ、小生モ當時無益ニ床中ニ伏シオルハ実ニ一日千秋ノ思ナキ能ハス、機ニ乗シ進マント欲シテ進ム能ハス、又退ク事モナラス、床中病魔ノ一囚人ト相成候、只々心ニカ、リ候事ハ松方大臣ノ横浜商人ニ開クノ談判手後レニナリ〇〇義塾ニ卒先セラレヌカノ一事ナリ、島田君ニハ當時所々ニ出張ノヨシナレトモ、島田文ケデモ早く内相談ハ開キ呉レサルヤ

小生ハ上毛ニ於而テ<sup>〔笈〕</sup>ハ今回ハ先ツ敗軍之将ナリ、湯浅兄ニハ初ヨリ余リ当地ノ情実ヲ知り過キ、トテモ多分ハ出来マ



シト予想被致候故、充分ノ熱度ヲ以テ進ミ呉マシト心配致し居候得共、他ニ托スル人モナク、此上ハ同君ノ後トノ取  
纏ヲ托シ小生ニハ早ク帰京セン事カ上策カト存候<sup>\*</sup>、何卒御意見ノ存スル所御知セ被下度奉希望候、勿々拝具

十二月九日

襄

猪一郎賢兄

福田君<sup>\*＊</sup>ニよろしく

164 十二月九日

徳富猪一郎

①上州前橋神明丁

関方

②東京々橋区日吉町廿番地

④墨

本日老書相呈し、帰京云々之事ニ付御相談申上候得共、何卒此一点は御注意被下度候、寒氣之恐レモ有之、帰京ハ得  
策カト存候得共、松方大臣之横浜商人中ニ談判ヲ開カレサルナレハ、小生もアナカチ帰京を急ぐに及ハさるやとも存  
し候

成程病魔之一囚人ト相成、今回ハ実ニ敗軍之将タルニ相違ハナケレ共、決而落胆將軍トなりたるに非らず、横浜之方  
サヘ急カストモ宜しきならは未タ四五日滞前は無差支ト存候間、本日書面逐加として一応得貴意度奉存候也、勿々拝

具

十二月九日夕

猪一郎賢兄

裏

此一兩日ハ先痛ミも止マリ(具脇カ)腹合も落付申候間、先御安心可被下候

765

十二月十日

新井毫

④墨

其後は如何、此六七日之比ニハ御出京之様ニも御談有之候得共、未タ御出京とも思ワれず、若し又御出京とあれば何  
ニとか御通知も可有之と存し、寸書相呈し御出發之時期御尋申上度候、小生も御存之通当地ニ而空しく病魔之一囚人  
と相成、進む能ハす又退く能ハす降將軍とは相成不申候得共、先此度は敗軍之將と申て可然か、小生之心事御洞察被  
下度候、扱御地ニ於而大学募集之義ハ貴君御負担<sup>\*</sup>被下候而諸事相運候事と喜ひ居申候、今回出頭之難相成は如何ニも  
残念ニ候得共、人事兎角意之如くならず、心ニハ少しも屈し不申候得共、先得<sup>再</sup>拳を計候事ニ相決し、又々例之出タラ  
メを吐出申して

斃るれど其のこゝ「ろ」根の枯れされはまた来る春に花そ咲らむサク

此歌之意ハ小生も此度之失敗アルモ決而失意落胆ハ不致、又々再挙を計るとの事なり、又一ニハ小生大望之遂けさる内ニ病魔の為に斃るゝに至るも、誰カ余之志を継き此事業を成就せしむるあるへしと陳へたるなり、兎ニ角小生ハ死ニ至る迄も必らず為すの決心に有之候間、小生之心事を知り賜ふ貴君ニハ此の歌の意も御了解あるへしと存候

先は君之御去就御尋申上度、又弥御出発と御決し相成候ハ、其時日御漏し被下度候也、勿々敬具

十二月十日

襄

新井毫君

坐下

尚々、過日大学之為御周旋被下候諸彦ニもよろしく

別し而尊大人様ニよろしく、又愚詠をも御笑くさに御覧ニ呈し被下度候也

766

十二月十二日

徳富猪一郎\*

- ①前橋ニ而 ②東京々橋区日吉町二十番地 民友社 ③はがき ④墨  
⑥日付は表書による。

本日帰京之積之所雨天ニ有之、明日ニ延引仕候、若し明日差シタル雨天ニ無之候ハ、弥帰京可仕ト決定仕候、先は御報知迄

767

〔十二月十四日

広津友信〕\*\*

⑤柏木義門写

〔ママ〕……小生モ廿五日東京ヲ発し前橋ニ参リ大学募集ニ着手、諸事都合宜シク相運居候処、俄カニ廿八日ノ夜ヨリ腸胃カタルニ相罹リ非常ノペイン、爾来慢性ニ流レ速ニ回復ノ見コミ不相立（寒氣甚シキニヨル）、少々快ク候間断然ト見切り、本日無理ニモ該地ヲ発し午後三時過着京、今夕別ニ痛ミモナク候間御安心被下度候、此度ノ上州行ハ全敗ト申シテ可ナリ、然し将来ノ肥料トハ少シク相成可申カト存候……〔ママ〕

①東京々橋区南鍛冶丁四番地 茂林館より

②奈良県下奈良水門村「平信」

④墨

其後ハ貴君御起居如何、生も出京後何等之堪忍を以而政波之穩ならん機を待居、三条公総理トなられしより少しく政海之靜なりし様見受け候間、直ニ一運動初め出し、東京ニ而は或ル人々に相計、京浜ニ着手するの途を開らき置き、其より乃チ去月廿五日東京を發し上毛に趣き、前橋一運動相試申候処、此レも案外好都合ニ相運候処、生俄ニ廿八日之半夜より劇しき腸胃カタルニ罹リ非常ノ痛ミニ而困難を究申、其後回服ニ遅リ寒威ハ益募、到底速ニ平愈之見込無之候間、昨十三日断然赤城、榛名、妙義等之諸名山を脊ニし、奈翁モスコ敗軍之如ク志を得ずして空しく帰京致し候、世事多クハ如斯を悟り少しも落胆ハ致し不申、又々再挙を相計可申候、何卒生之心中御遙察アレ

却説、貴君将来之方針ハ何ニノ点ニ向ヒ進行セラル、ヤ、旧ニ依リ伝道スルカ將タ他ニ方向ヲ転セラル、ヤ、兼而生より御談申候新潟県下ニ伝道スルノ御覚悟ハナキカ、御存之通組合、一致両会ハ合併ハ多分水泡ニ属スヘキトセハ、

将来必ラス一致会ニハ非常ノ勢力ヲコメ我党ト競争セラルベキハ必然ノ事ニテ、已ニ近比該会伝道委員ハ新潟県下ヲ

経歴シ、無礼ニモ長岡町ヲ侵掠セント計ラル、由、我党ノ人々ハ実ニ先見ニ乏シク、又妙ク高ク上品ニカマヘ競争心

ニ乏シク、又世事ニ迂遠ニシテ伝道之方法等ノ不行届千万ナルニハ実ニ嘆息ノ至ナリ、乍去我カ自由主義ヲ拡張セン

為メニハ少シ位ハ心捧モセヌハナラヌ、又来年ハ小崎氏等ト協議ノ上、会社ニ対し非常ノ大改革ヲ旋シ申度候間将来

好都合と可相成、又来年五月ニ合併事件モ多分敗裂ニ可至候間、組合会モ必ラス一致親和スルニ可至候間、一斉伝道ニ力ヲ入レ可申ハ必定ノ勢ナリト信ス、去レハ関東ニハ上州、野州又信州ニ切り込ミ、越後ヲ固ムルハ生ノ多年経綸中ニアル所ナレハ、貴君ニハ其端緒ヲ開ケサヘスレハ、新潟県下ニ伝道スルノ意ハナキヤ否、何卒御確答被下度候、貴君弥該地ニ一運動ヲ試ミラル、ナラハ、生ハ何ニトカシテ其途ヲ申度候也、広津ニ申込シテ該地ノ模様ハ充分ニ通知スル事ニ為シ置候間、近々詳報アルベシト存候、又貴君細君ノ事ハ大失望ノ至甚御氣ノ毒ニ存候、乍去新潟ニ至ル前ニセメテエンゲージスルナラハ神戸之鈴木清君ニ御依頼アリテハ如何、同氏ハ貴君之御依頼アレハ随分可然佳人ヲ御世話可申候ト存候、佳人トハ心ノ佳人ナル意ナリ、表面<sup>上</sup>ノ佳人ノ意ニアラス  
先は用事ノミ、艸々拝具

十二月十四日

襄

公義君

尚々、前文之趣ハ兎<sup>(モ)</sup>トアレ、只今御預リノ羊ハ御愛養、一日モ早ク会堂モ築<sup>(キ)</sup>ケ、又教会モ設置ニ相成候様、御働き被下候ハ、重々ノ至リナリ

河合家、森君等ニ宜しく、河合ノ脱走環ハ如何相成候哉、帰校被致候也、御尋申上候

此度之上州行ハ東京ニテ案内ニ諸事進まず、為ニ時候後レニ相成、越後、金沢之雪山より吹き来る風の寒けさに此身も遂ニ病にかゝり、兼て企て申候上州之運動も諸事相運かけたる時床に臥し申、寒氣強き為ニ病ハ中々速ニ平癒之見込も無之により、乍残念諸事打捨昨十三日遂ニ其地を出発し、赤城、榛名を脊に為し東京ニ帰りける其旅人之心情ハ何卒々々御推察被下度候、諸昨日は意外なる天氣にて道中湯タンポの用意致し候得共、少しも寒しとは思ひ申さず、又腹部之痛みも更になく、午后三時すぎ上野ニ着し林屋ニ参り候へハ部屋ハ兼てより準備も出来、アツライタル小サキストヴも出来参り、又寒氣も上州トハ大ニ違ヒ至極ゆるやかニ、ストヴニ少しく火をタキ申候ハ、部屋も暖カニ相成、昨夜ハ医者も参り呉、速ニ手当を為し呉候故、少しの痛みも無之、昨夜ハ真ニ安全ニ相休ミ申、今日も大分気分よろしく新潟地方の兄弟へ手紙を認め申、又徳富様も御急キ中ニ御談ニ御出被下、又病氣もよろしき方ニ候間御安心被下度候、此より一周間も充分養生致候上旧トノマ、に相成可申と存候、只々あんしられ候は留守宅之事なり、御母上様ニも御不快之よし、お前様ニも久々の留守ニ而御徒然之至ト存じ如何にも御氣之毒ニ存候

逐々寒さも相増し候ハ、御母様の方ニハカノ少サキストヴ〔小〕でも御付被下、御部屋を成丈暖かニ為し、又食物も甘キヤワラカキ魚類を御さし上、最早余り長き命も有之間敷候間御病氣之不為ニならぬ丈ケニ御馳走も御さし上被下度候、又クズ湯水あめ之類ハ御老体によりしく候間御差上被下度候、私も何ニとか都合致し此年内ニ帰り度存候得共、東京

之募集之口も今開ケカ、リ実ニ大切之時に候間、ドウトカシテ之を片付申候而罷歸り申度候間、今少しの所御迷惑ながらも御しんぼう被下度候、又留守宅之所も成丈嚴重ニ御取締被下、カノロヤカマシキ馬鹿<sup>\*</sup>モノドモニ彼是云ハレヌ様吳々も諸事ニ御用心被下度候

横田君ニハ深切ニ尋ね吳候様、誠ニたのもしき若者なりと私も力強く存居候、書生か遊びに参り候はゞ何卒丁寧ニ御取扱被下、成丈御馳走もなし被下度候、彼等ハ実ニ大切之人物ニ候間大切ニ取扱申度候、御兄様より松方大臣への御書面ハ何レ早々其下書を認メ御廻し可申候間、一応御兄様ニ御キ、ニ入レ其上御認被下度候

川原町ニ吳々もよろしく、速水も氣ノ毒ニ存候<sup>\*\*</sup>、何卒此方よりハ成丈ケヤサシク勘弁シテ御付キ合被下度、先は用事

ノミ

十二月十四日

襄

八重様



770 十二月十四日

時岡惠吉\*

⑤ 柏木義円享

先般来数回之御書状を忝せしに、小生より大ニ御無沙汰仕候条御免可被下候、陳者兼て御申越之件ニ付、小生も彼是心配致し候得共、強て防禦之策ヲ施スモ男ラシキ所ニアラス、モウ此上ハ彼侵入シ来ラハ来レト、広ク胸襟を開ラキ基督ニアル一信徒忠僕トシテ、苟モ主ノ名ニヨリ来ルモノハ懇切ニ丁寧ニ交際スルヨリ外、他ニ良法ハ無カルベシト存候、侵掠云々ノ手段ハ御同様余リ快キ事ニアラサレトモ、彼レノ侵掠手段ニ抵抗セハ、吾人モ彼ニ対シ弟タリ難シ兄タリ難キノ地位ニ陥リ申セハ少シクハツカシク候、吾人ハ伝道拡張計画中飽迄熱心ニ之ヲ断行スベキモ、吾人ハ亦主ノ真実ナル忠僕タルノ資格ヲ具備セサル可ラサル事ヲバ片時モ忘却スヘカラスト存ス、此上ハ只々忠実ニ吾人ノ為ス可キ処ヲ為シ、受持ノ所ヘハ充分手ヲ尽シ、手ノ出シ得ヘキ所ニモ充分手ヲ出し、我自由自治主義ヲモ拡張仕度候、只々吾人ノ為ス丈ケハ飽クマデモ為シテ、他人ノ為ス事ニハ余リ防禦然タル事ハ為サス、来。ル。モ。ノ。ハ。拒。マ。ス。ニ。為シ置キ、金ノ出来次第、人ノ出来次第、何レノ処迄モ暇々乎トシテ主ノ治道ヲ伝ルヲ以テ吾人ノ大経綸トナシオキ度候、依テ長岡ノ為ニ計ルニ、該地ハ実ニ新潟県中屈指ノ良田ナレハ、吾人ハ十二分ノ力ヲ尽シ、御計画ノ通り市中中央ノ場ヲ撰ヒ、説教所ヲ設ケ金城鉄壁ヲ築キ、吾人ノ領地ヲ堅固ナラシムルニアリ、此向フ一ケ年間ハ必死ニ培養ニ御尽力アラハ、将来ノ所モ大ニ為シ易キ事ト存候、貴君ニハ実ニ身ヲ此大事業ニ捧、否全ク主基督ニ捧ケ、同胞ノ為ニ御尽力アラハ、主ハ必ラス貴君ノ御労働ヲ恵ミ賜フト信仰仕居候、新潟地方運動ニ付、先日來広津君より申来候

通、新発田之原兄ト新潟<sup>\*</sup>、長岡トハ鼎足ノ勢ヲ為シ、互ニ交通シ互ニ応援セハ、実ニ至極ノ事ト奉存候、小生ノ心ハ新潟県下ノ為ニ燃ヘテ止マス、焰々ノ火ハ恰淺間嶽上ノ烟ノ如シ、乍不及何ニナリトモ御相談ニ及申度、又不相替伝道会社ヨリ不行届ノ御取扱ヒ候よし実ニ呆了果タル次第、然シ此等ノ為ニ憤激シ玉フ勿レ、魔軍前ニ横ワル、之ニ向ヒ全勝ヲ試ミサルベカラス、先内部些少ノ苦情ハ主ノ為ニ差シオキ玉ヘ、小生横合ヨリモ蕭何トナリテ不行届ナル伝道会社ノ欠点ヲ補ヒ申サン、又差当リ御入用ノ為、金十円御送可申候、此レハ伝道会社ヘ立替ヘノ分ニナシオキ可申候間、左様思召被下度候、何レ該会社ヘ向ケ充分忠告ハ可仕候、月給ノ外、若シ不足アルトキハ少々位ハ御工風可仕候間、何時ナリトモ広津君ト御協議之上御申越アラハ小生多少之御奉公ハ可仕候、兎ニ角此戦場ニ向ヒ充分ノ勇氣ヲ振ヒ、主ノ名ノ為ニ決戦シ玉ヘ、此レ小生ノ主ノ前ニ跪キ貴君ノ為ニ主ニ切望哀求スル所也、小生モ去月廿五日東京ヲ発シ、上州前橋ニ至リ、大学募集ノ為ニ奔走ヲ初メ候ニ、同廿八日ヨリ腸胃カタルニ罹リ非常ニ衰弱ヲ覚ヘ、到底寒風之甚シ〔キ〕ニ前橋ニテハ回復ノ見込無之候処ヨリ断然ト思ヒ切り、昨日病氣ヲ侵、無理ニモ帰京仕候、尚医師ノ手ニアリ療養仕居候次第、此度ハ全ク大失敗ニ御座候得共、決して落胆ハ不仕、主ノ恩下ニ生命ヲ繋クヲ得ハ又々再挙ヲ可計ト胸算ヲ立居、小生モ小胆モノ乍ラ、一度企テシ事ハ貫徹スルノ覚悟ニ有之候、輕々敷落胆スルモノハ事業ヲ為シ遂ケサルヲ知レハナリ、何レ近々原、広津ノ両君モ来岡セラルヘク候間、此書状ハ御示シ被下度候也、又両兄ニ御協議之上、ニュエル氏<sup>\*\*</sup>ニセマリ、新潟県下運動ノ為ニハ同氏ニ充分ニ活潑ナル経綸ヲ立テ、区々中学ニ教ユル位ニ止ラス、傍兄等ノ大運動ニ一大助力ヲ与ヘ、セメテハ入用ナルモニー位御周旋被致候様、返ス／＼モ御工風アリ玉ヘ、播カヌ種ハハエヌトノ理ヲ同氏ニモ合点アリタキモノナリ、小生尚病床ニアリ、乱文ハ御免、早々拝具

十二月十四日

襄

時岡恵吉君

尚々、ニユエル氏ニ宜シク

長岡信者ヨリハ貴兄ノ月給ノ幾分カラ持チ候事ハ出来候ヤ、出来候ハゞ出来ル趣、出来サレハ其由ヲ詳細ニ記シ、速ニ小崎ノ手ヲ経テ本局ニ御照会相成候方可然ト存候、イツテモ事カ曖昧ニ亘リ甚嘆息仕居候

本文申上候通金十。円ノ外ニ、別ニ五円御送呈申候、此レハ全ク貴君御自身ノ御入用ニ御遣ヒ被下度候也

771

〔十二月十六日〕

広津友信<sup>\*</sup>

⑤ 柏木義円写

〔ママ〕伝道者雇入ノ為ニハ、モニーナクテハナラズ、新潟之ミシヨネリー先生方ニハ新潟県下一円ニ伝道拡張之見込ハナキカ否、是迄ノ経歴ニヨレハ兎角独立自治ヲ論シ、モニーヲ出サヌ事ヲ手柄トナシ、少シモ拡張之事ニ着目セス、  
 実ニ無神経、無経綸〔ノ〕アスピレーシヨン事ト窃ニ痛歎仕居候事モ有之候、長岡ノニューエル氏又此度来新ノ――氏<sup>名ヲ忘ル</sup>  
 ニハ如何ニ御考候ヤ、今日ノ実況ヲ陳シ、彼等モ振一振シ大ニ全県下一円伝道策ニ着目致シ、日本人ハ決して乞食魂情ハ持タヌモノナレバ、トルコ人ナド、同視セラレス、此一三年全県下一円拡張之為ニ惜シマス、モニーヲ散スルノ覚悟アルヘキ旨小生ヨリ呉々彼先生方ヘ御勸申候ト御伝言被下度候<sup>〔ママ〕</sup>……

小生モ床中ニアリ考ヘ候事ナレハイサリノ考案之如キモノナルカハ存不申候ヘトモ<sup>〔ママ〕</sup>……

772 十二月十六日 井上馨

①南鍛冶丁四番地 茂林館 ②「御直披」 ⑤写真（国立国会図書館憲政資料室所蔵）

拝啓、寒氣漸々相募候際、閣下ニハ如何御起居被遊候哉、敬而奉伺上候、陳者先般は御帰京已後早々御多忙中之処、古沢氏を以て群馬知事佐藤殿へ之御添書奉懇願候処、直ニ御附与相成、以御蔭該地之都合意外ニ相運ひ、知事初第二部長ニも殊之外尽力致し呉、県下一円募集之端緒も相開候処、遺憾なる事ニハ小生寒氣ニ侵サレ腸胃カタルニ相罹リ、到底速ニ回腹<sup>〔復〕</sup>之見込も無之候相付不申候間、断然ト引揚一昨々日帰京仕候、爾来差シタル事無之、漸々甘快ニ趣候間、乍憚御休慮被賜度奉仰候、何レ外出相叶候様ニ相成候ハ、一応参趣久々ニ而得拜謁奉希望候、何レ上州之事ハ来春花爛熳之好時節を期シ、又々再挙を可図事ニ仕置キ候、小生も一回思立候事ハ飽迄も徹貫可仕覚悟ニ罷在候間、小生之衷情何卒御了察被賜度奉希候、右得貴意度、艸々拝具

十二月十六日

新島 襄

井上伯爵殿

閣下

尚々、先日上州より持参仕候梨子、乍些少令夫人様、令嬢様方へ奉呈仕度候間、御笑納被下候ハ、幸甚之至ニ不堪候

773 十二月十六日

新島八重\*

⑤ 柏木義門写

昨日一書差上候通、私事も帰京以来段々よろしく候間御安心可被下候、今夕も医者カ参リ申候に腸は大概元之まゝに相成候と被申候、私も旅之事故食物ニは大ニ用心致候、天氣暖かに有之候ハ、車ニのり外出可致心得ニ候、諸大学募集之件ニ而此度は意外ニも松方大臣様ニハ大ニ御賛成被下、御都合次第横浜、東京之財産家ニ御談可被下旨被仰候、然る処政府之内部も相定不申、又同大臣ニハ近頃御不快之よし、又彼是する内に逐々月迫にも相成、年内ニハ殊により候ハ、事落着ニ相成不申かと存候、然る処御存之通り私も上州に而は寒氣之為病氣を起し、東京ニ而は余程暖かに有之、未だ余り霜も降らざる次第、然し茲ニ滞留するは健康之為ニ相成不申候間、暫時なりとも大磯に参り充分摂養致居、大臣殿之御都合次第横浜なり東京なりへ汽車ニ而二時間足らずに罷出候間、不遠内大磯ニ罷越可申候ニ付、米国より参り候為替ハ一枚ナルカ又二枚なるか（第一ノ為替第二之為替を要す）第一第二ト参り候上ハ郵便書き留ニなし私迄御遣し被下度候、私裏書きをなし御送可申候間、神戸堺町之正金銀行之支店へ御越し被成候は、金子ハ相渡與可申候、其上明日神戸ニ滞留ナサレズ日中ニ早々御帰り被成、直ニ第一銀行又ハ浜岡銀行に御預ケ被成、中村栄助ニタノムカ又ハ他ノ人ニタノムカ極慥カナル人ニタノミ京都府之公債（六朱付）を御求ニ相成候而は如何、偕御母様ニも御病氣又々お前様ニも如此永々御留守を為致候は実ニ御氣之毒千万ニ候得共、只今私カ京都ニ帰り折角東京ニ於る準備致し大骨折之仕事も又々立チギヘニ相成可申候間、此度は是非共何事を措いても関東ニ止まり、殊ニより候は、

越年候而も仕方無之、氣候の暖かなる大磯ニ養生致し、用のある時ニハ都図々々出京用弁致し、松方大臣又他之人々ニも私か大学の為関東ニ出張、考へを与申候は先生方ニも氣ヌケなく御世話被下、事も遂ニハ成就可致候間、此度ハ実ニ心抱仕事と存候、尤松方大臣云々の事ハ極秘密ニなし誰にも御話なき方可然と存候

横田君ニハ近々一書相送可申候間御面会被下宜しく、年の暮ニハ森田、市原等ニハ他トチカヒ少々御心付、殊ニ市原ハ近所ニ候ヘハ何卒々々御心切ニ御ツキ合被下度候

前文之通、私も此度は極大切之時ニ有之、事之成ラヌ前ニ帰宅ハ出来兼候間、御母様ニハ極々御注意、御部屋等ハ例之小サキストヴを付け少々なり共火を入レ（火ハイヤダト被仰候而もよろしく）必らず／＼火を極少し御タキ、日夜御用心被下度候、先は用事ノミ

十二月十六日

襄

八重様

松方へ御兄様より御書状ハ先ハ御見合の方よかるべしと存候

私もかく永々他へ出居候事ハ甚ツラク御坐候得共大学之為心抱致居候、何卒お前ニも右の為御しんほう被下度候



十二月二十日

広津友信

⑤ 森中章光写

先日電報ニ而申上候通、去月廿五日之貴書ハ漸ク西京より送り呉申候、真ニ奇々ノ事ニ候、却説新潟教会請求之義ニ付御相談有之実ニ驚入申候次第、君之一ケ年丈ノ逗留ハ前以テ御通知之上ト存候、又先方も此事ハ充分承諾之事と存候、君よりハ度々右之事ハ先方ニ御通知之事ト存し候間此請求あるは実ニ意外之事なり、扱之ニ所スルノ法方ハ如何、元より君之計画第一項ト可成ハ当然之事なるも、此度之事ハ此迄之相談之不行届ヨリ生セシカ先方之間違カ克々御聞糺し、又現今教会之模様も御熟覽被成候而最後之御決着有之度候、兎角小生ハイクラ考へ候而も此両三日中上分別も起らず、此度之懸ケ引ハ偏ニ君之判決ニアリト存候、本月之末ト不申、希クハセメテハ来月ノ末カ二月ノ中旬比ニ延期ヲ乞ヒ、其上ニ而御決定アリテハ如何、本月ノ末ト申シテ実ニ時日ハ多分無之候

君之御考も可有之候間今一回此書面之御返答被下度候、其比迄ニハ小生漸々ト考へ、又何ソ分別も相付申かも不被計、小生も君之御一身ノ御計画も充分熟知致し居、又君之御手ニテ折角団結し一之独立会も出来、又将来新潟県を我党ノ手ニ入ル、大計画ヨリ、又一致ノ侵入ヲ成丈ケ事業ヲ挙ケテ隠然防禦スル為メニ新潟教会之歡心ヲ失スルハ又々恐ロシク存候、此二ツノ相像之間ニ狹マレ何ニモ判決之出来難、小生之困難モ君ト御一樣ナリ、何卒先方と御返事前今一回小生迄御相談アリ度候、先日運動費として二十円御送申候間御落手ノ上ハ一寸御知被下度候、時岡ハ永ク長岡ニ適スル人ナルヤ、君之御意見ヲ御漏シ被下度候、此レハ小崎君<sup>\*\*\*</sup>之御周旋ナリ、先生ニハ折々ルース之仕事ハ被致候



間君之御内意丈御漏し被下度候也

十二月廿日

裏

友信君

775

十二月二十日

吉田賢輔

⑤写真

先般は御来訪被下久々ニ而縷々之御話を承り真ニ樂しみ申候、其節御願上候古人之語ハ早々御遣し被下難有奉謝候、又今朝は態々御尋問被下是亦奉謝候、小生漸々甘快ニ趣キ、本日五六丁徐々ト運動仕候程ニ相成候間御休慮可被賜候、先は為貴答得貴意度、早々拝具

十二月廿日

新島 襄

吉田賢輔先師

私立大学ノ件ニ付何卒御知人中ニ普ク其賛成ヲ御誘導被下度奉希候

尚々、先達而は御写真を載(載)き難有奉謝候、何卒妻君ニも宜しく御伝声被下度候

小生今朝早く目覚種々自身之心術を反省仕候中、不図一詩を得申候間、韻字ノ相叶候様、又詩ト相成候様御叱  
正被下度奉仰候

看山高巍々 観海濶洋々

味得造化妙 小心少発揚

洋揚ノ韻字ハ如何、含英もなし、詩も此二十七<sup>〔ママ〕</sup>八年全廃ニ罷在、近来甚無風流ニして更ニ詩思も起リ不申  
候

776

十二月二十二日

新島公義

①東京々橋区南カジ丁四番地

茂林館

②奈良県下奈良水門村

④墨

⑥日付は消印による。

御返書拝見仕候、陳者御回答ニよれハ新潟地方ニ伝道之御望も有之候よし重々之事と奉存候、貴君力新聞ニ従事スル  
云々之事ハ已ニ徳富氏とも熟談致し、将来之事も同氏ニハ充分承知致し呉候得共、新聞ニ従事スルモノハ実ニコマル  
程も多きに、伝道ニ従事スルモノハ僅ニ指ヲ屈スルノミ、当時之如き世之腐敗ニ益傾キ行クハ尚伝道之力全社会ニ及  
ハサルニヨルナラント深く痛嘆致し呉候際、幸広津氏新潟ニ被趣候間該地之模様等通知之事ハ相托しオキ申候、近頃

越後之長岡ニ在ル我カ党之伝道者ヨリ報道ニヨレハ、一致会ヨリハ一ノ伝道者ヲ該地ニ送り弥侵掠ノ手段ヲ施シ候よし、彼来ルヤ否直ニ組合会中ヨリ已ニ分離シテ該会ニ加入セント計ルモノアル由、畢竟スルニ彼レ我カ会ノ異分子ヲ誘導スルニ相違ナシ、是レ我党ニ向ヒ為スカラサルノ所為ナリ、聞ク所ニヨレハ植村氏<sup>\*</sup>ノ遣セシ所ノモノナル由、我カ党ニ遠謀家ナシ、新潟中ノ錚々タル場所長岡ノ如キモノヲ彼ノ手ニ渡サハ、実ニ将来新潟ニ於テ大事ヲ為スニ甚不得策ナリ、何人カ奮然之ニ当ルモノナキトキハ該地ハ中央集権家ノ所有トナラン

嗚呼、我カ伝道会社ノ悠々不断ニ痛嘆仕居候、何レ近々広津ヨリ報道アルヘク候間早々御通知可申候  
田中警部長ヘハ貴君此封書ヲ御持参、宜しく御礼御陳可被下候、先は勿々不具

公義君

裏

不相替徳富氏ニハ深切ニ世話致し呉候

177 〔十二月二十二日

新島公義<sup>\*<sub>2</sub></sup>〕

⑤森中章光写

別紙之遂加として申上候

生も東安之用事済ミカ、リテ未タ済ミ不申、去リトテ寒威も弥相募候間、廿六七日ニハ発京シテ相州大磯ニ至るべし、但シ旅宿ハムカデ屋ナリ

778

十二月二十三日

不破唯次郎・杉田潮・杉山重義\*

⑤写真(杉田信雄氏所蔵)

数日前老書差上候得共、又々信州伝道策ニ付貴兄方ニも兼而御相談も有之候通、近頃小生宿居候宿之主人ハ信州長野之人ニ而、段々長野辺之尋セに、長野近傍ハ信州中第一等之養蚕場ニ而、概して申セハ信州之富源を重ニ長野近傍ト申て可なりと、而して已ニ鑛道之便利も有之候ハ、僅々之年ニ而信州中央を主を捧さんとするの策ハ随分愉快之事ならず也と存し、種々工風を回らし申候に、近々彼之地ニ飛入へき人としてハ何分見出さす困り居候に、先日来公義より来書有之、同氏ニハ兼而伝道委員之待遇ニ付、是迄甚面白からざる事多く、婦女子之流言などを採用し、同氏之伝道地を軽卒ニ左右したる如き取扱ヒ有之、昨年来毎々不平ニ而最早伝道を停止せんと迄決心セシ事屢なりしも、小生より毎々之を差止め、将来ハ関東ニ趣くへしと勧め置き、今日迄も奈良ニ止メオキ候次第、已ニ先回なとも或ル地方より態々一二之姉妹を伝道加勢之名義ニ而奈良ニ遣し、其実ハ公義之穴サグリにありし由、窃ニ小生之耳朵ニ達セシ事も有之候次第ニ而、公義氏ハ不幸ニして彼ノ〇〇〇〇〇先生方之一部分ニ容レラレサルか如ク相見申候、又同氏も

決而申分ナキヤツト申難く候間、容レラレサルモ至当カト存し候、然し表面上別ニ是ソト申事も今ハ無之候得共、從來之面白カラヌ関係ハ兎角何ニカニ付テ相起り来り候間、彼レ之関西ニ止り候は大ニ不得策ト存候間、可成丈速ニ藉を関東ニ移すルニ如カすと存し候、依而近頃関東ニ移るへき旨申遣し置候間、多分同氏ハ来年二三月之比迄ニハ奈良之仕事を切り揚ケ（當四五十名ノ信者ハ出来居候）関東ニ来るへる候間、貴兄方ニハ長野伝道を上州部会附屬となし被下、上州教会之御慟キト成し、長野ニ御着手アラハ事却而容易ニ成就すへしと存候、勿論同氏之如きハ長野ナドニ送ルニハ力足ラス、実ニ不適當之人物トハ存候間、只今碁盤之目ヲフサギ置キ候ハ、将来信州伝道策ノ便利ニ相成可申ト存し候、彼レノ不充分ハ重々承知仕居得共、小生ハ臆セス貴兄方之御採用を仰キ可申候間、一ハ信州ヲ早ク手ニ入ル、ト思召、一ハ公義其人ヲシテ尚一層快濶ニ伝道セシムル為メト思召シ、上州諸教会ニハ一致御協力之上、近々信州長野ニ着手スル事ニ御決定被遊候ハ、如何、其四分之点ハ若シ御地方ニ都合出来不申候ハ、小生当分受持候而も不苦、乍去上州ヨリ差出ス名義ニハ公然ト被成下度、又諸兄中御協議相叶候ハ、一月早々未タ雪之深カラサル内、三兄之内誰ソ御一人長野迄内々御視察ニ御出張アリテハ如何、其費用ハ小生ハ幾分カ御加勢申上度候、且貴兄中充分御協議被下、又直ニ着手スルノ御準備等被成下、且公義も承諾致し、又奈良ヲ去ルノ手順ノ付キ候迄ハ成丈世間ニ發表セサル様御注意被下、事ノ稍執熟し候上、上州部会ヨリ長野着手ノ理由ヲ詳細ニ陳シ、又殊ニ小崎君ノ熱心ナル賛成ヲ得デミシヨシ迄御照会ニ相成候様仕度候、而シテ公義ノ事ハ成丈ヶ上州ノ御招キニヨリ信州ニ参ルトノ名義ヲ以テ、伝道会社本局ノ関係ヲタツニ至ラハ、当人ノ為メニ大ニ好都合ト存候、是等ノ事ハ三兄近々御会合も可有之候間、宜シク御協議被下、可成丈御賛成御決行被下度奉願上候

桐生ノ伝道ニ付小生ヨリ喋々申上候ハ、余り老婆心に過キ候様ニ有之候得共、御存之通小生ハ遠ク京都ニアリ、又近

頃ハ病ニ臥シオリロク／＼働キモ出来サレトモ、小生ノ心ハ常ニ関東ニ飛ヒ回ハリ実ニ一日モ忘却スル能ハス、矢張小生ヲ貴兄方之内ニ算入致し居、思想上ノ運動ハ共ニ仕度存し候より如此申上候次第、小生ノ衷情ヲ御洞察被下、小生ノ喋々スルハインテレストヲ置クノ深キヨリ生セシト思召御許容アリ度奉希候

兼而承り候通桐生ノ伝道ハ甚タデレケートなり、兼而彼ノ講議所ヨリノ注文モ有之候ハ、此一月ハ彼ヨリ招キニ応

スルノ体ニテ、一ト先貴兄方該地ニ御越シ今一度講議所ノ連中ヲ寄セ、彼ノ一致教会ト合併親和ハ出来ヌモノカト御勸アリテハ如何。其上講議所ノ兄弟容レサレハ断然ト一致トハ分離シ、桐生独立教会ノ名義ヲ以テ第一ニ独立セシメテハ如何。而シテ我カ輩ヨリハ充分ノシンパセーを示し、成丈ケ屢々加勢ニ出懸ケ漸々自由自治主義ヲ吹込ミ、往々ハ吾カ輩ト共ニ運動致し候様、其途ヲ御開被成テハ如何。若シ右様果断ノ所分ナキトキハ、此ノ六月ハ一致教会ニハ二十ヨ名ノ神学卒業生ヲ可出候間、必ラス彼ノ講議所ニモ人ヲ遣シ可申候、左レハ吾人ヨリ桐生ニ着手ノ手蔓ハ全ク断絶可申候間、来一月早々右ノ手段ニカ、ル事ハ必要ナリト存候、カク申候得ハアマリ工風師之如ク相見ヘ候得共、我カ組合会ニして桐生ニ一ノ手カ、リナキハ、将来足利、栃木ノ伝道ニモ大不利益ヲ来タスベク候間、前上ノ工風ハ貴兄方宜シク御協議ノ上御採用アラハ喜欣之至ナリ

高崎ニハ井出兄<sup>(手)</sup>モ被参候間三兄ニハ充分同兄ト御結ヒ被成、親シク御交通被成同兄憂鬱ノ心ヲ引キ立テ、快楽ニ活潑ニ長足ヲ為シテ被働候様御工風被成、将来倉ヶ野、新町辺之伝道ハ同兄ニ御委托相成、不破兄ニハ此上ハ大間々、桐生に全力ヲ御尽シ被成、其他前橋ノ近傍ハ成丈ケ田中、其他石島等ヲ御頼ミ御着手アリ、此一ケ年間ハ大間々、桐生ヲ御固タメアリテハ如何

又杉田兄、杉山兄ニハ成丈小サキ近村ノ伝道ハ教会中ノ壮年輩ヲ御引き揚ケ之ニ委托シ、成丈<sup>富岡</sup>ニ応援シ益富岡ヲ

カタメ、且ツ殊ニ此一ケ年間ハ下仁田ニ御尽力アリテハ如何、折々御都合被成、該地ニ兩三日モ御滞留之上御働キアルハ大ニ好結果アルベシト存候、而シテ藤岡ニモ時々御越し被成、茂木ヲ奨励シ可成丈同氏モ元氣ヲ出シハ幡山ニ出張シテハ如何。<sup>(三)</sup>ナリシロ余リ功能ハナキモ着手シオクハ必要カト存候、何卒同氏ニハチト元氣ヲ出サレ候様御勸被下度候

又三兄ニハ折々高崎ニ而井出君を助ケ、漸々該市伝道拡張ノ為、演説會ナト被成候而は如何

○数日前非常ノ元氣ニ、又案外柔和ナル顔色ヲ以テ秩父ノ大久保被參、該地ノ好都合を談し呉レ大ニ楽しミ申候氏ハ切レル刀ナリ、ヤリテナリ、決シテ失望スル類ノ人間ニ無之候

氏トハ武州伝道策ヲ談シニ、氏ニ秩父ヲ負擔スヘキ旨ヲス、メオキ候

又氏ノ發意ニヨリ本庄ニ着手ノ事ヲ考申候

本年六月ノ別課卒業生中、信仰ノ厚キ小寺<sup>北\*\*\*</sup>ト中人アリ、氏ニハ此人ヲス、メ本庄ニ来ラシメ、其ヨリ八幡山（児玉）

ニ着手セハ至極ナラント被申候、本庄ニハ来年は非トモ御着手アリタク候也

一兩年中ニ是非トモ熊谷ニ着手致し度候、此レハ大久保ノ方ヨリ甚都合ヨキ手カ、リ出来可申候間、此辺モ御合オキ有之度候也

小生ハ病人ニシテ近頃漸々生活力ヲ縮メラレ、貴兄方ノ卒伍ニ加ハリ主ノ為メニ快愉ナル花々數勇戰ノ出来サルハ、口惜シキ次第ナレトモ、小生近頃病氣モ少シク甘快トナルト同時ニ、小生関東伝道策ハ日夜勃々乎トシテ胸中ニ充滿シ来リ、不得止之ヲ紙上ニ吐露シ貴兄方之御參考ニ奉供候、依而此ノ伝道策ハ小生<sup>滿腔</sup>ノ精神ヲソ、キ、熱血ヲ以テ記セシモノト御認メ被成下、御採用アラハ幸甚之至ニ不堪候、又此ノ伝道策ハ日出度明治二十三年、即モストイ



ヴェントフルイヤヲ仰ル<sup>(理)</sup>為、新年ノ祝詞トシテ奉呈仕候間、左様御承引之程奉仰候也、敬白

十二月廿三日

裏

不破

杉田

杉山

三愛兄御中

尚々、佐竹君本年卒業ニナラハ大間々御遣しの御見込之様ニ相心得申候得共、野州伝道拡張之為ニハ同氏ヲ断然栃木ニ御遣しアリテハ如何、而シテ向ヒ一ケ年半計リノ処ハ、大間々、桐生ハ御苦勞ナカラ不破兄ノ御受持ト被成置候而は如何、野州ヲ他人ノ手ニ渡スハ決シテ得策ナラス、而シテ佐竹、中山兩人ノ働キ漸々揚リ参候ハ、明々年ハ断然足利ニモ御着手アリテ至極ト存候

兎ニ角来六月ニ佐竹ト小北ノ両氏ハ是非上州ニ御引揚被下度候也



十二月二十三日

白石村治\*

⑤ 森中章光亨

一書拝啓仕候、陳者貴兄には先き比御不快のよし本日綱島より聞及ひ申、又其後已に御快復のよしに候得は大に安心仕候、何卒御大切に御摂養被下度候也

扱其後御地の実況は如何、御地は実に奥州の咽喉とも可称要地に有之候間充分御固めおき、近頃仙台北部会に於て再び福島に講義所を設置する事に決せられたる由なれば、是より断然と着手と可相成候に付、自然福島県下にも活潑の運動を為すへき必定なりと存候間、今より吾人よりも速に全県下に着手するの計画を為すは甚猶予すへからざる事と存候、幸に福島出の松田順平君<sup>来訪致され候間</sup>、伊勢時雄君<sup>帰国せし上は成丈速に郡山に行き</sup>、常住伝道者と為るべき旨相勧申候、同君にして幸に郡山に被参候は、貴兄と東兄<sup>と</sup>と鼎足の形勢を為し、全県下に手クバリをなして其の近傍に着手せは、三人の伝道者にして大に福音の活種を播き得べしと存候

東君は若松地方を負擔し、貴兄は福島を中心となして二本松、川俣、<sup>〔衆〕</sup>柳川等に、松田君には郡山を根拠となし須加

川、三春、桑野等に着手し、又互に交通応援し時々処々に演説会など御開き被成候は、大に県下を動かし得へしと存候、又此処の休暇には誰そ西京の学校よりも援兵を御送り可申候間、貴兄には何卒充分の御望を以て将来の御計画有之度候

可成は御地の信者中誰そ若手にして才幹あるものは之を引揚げ、近傍伝道の加勢に御用ひありては如何、御存之通貴

地の信者はメソヂストもあり、一致もあり、組合もあれば、随分異分子多くして制御し難き所も可有之候間、之を統御する方法には充分御用心あり、成丈党派の起らぬ様、又信者は成丈極大切に、極懇切に御取扱ひ、成丈自由主義を吹込み自治政治の尊きを知らしめ、而して成丈御工風ありてヤリ手には何ぞ働きを与へ、働きに汲々たらしめて彼等のインテレストを惹起し、又信者全体は協和して何事も取られ、貴兄御一個の手にて余りヤリ過ぎざる様御注意あらは、必らず御地の働きは円滑に相進み可申、又何とか御工夫ありて自然に我が党の自由主義を愛慕致され候様御仕向け被成候はゞ、往々は必らず好果を結ぶべしと存候

以上は申迄も無之候得共、貴兄御参考迄に申上候間、小生老婆心の罪は御許被下度候也、又成丈信者は一様に御取扱ひ、又貴兄は諒然として人に接し、何事にも御勘弁あり、御勘忍<sup>(堪)</sup>あり、何んとかして人心を基督に得るの策を御工風被成候はゞ、貴兄の御働きは必らず好果を結ぶに至らん、小生の如此も汲々乎として御県下の伝道を急そき候は他なし、一は吾人より速に着手せされは他より侵入し来るは必定なり、又一には一致教会の押川君<sup>\*</sup>は非常の果斷家であり、計画家にあり、他人の働かし地の信者ニも随分不遠慮にも取こみ己れの領分と為すの成績も是迄相見候よし、押川兄は只今洋行中に候得共、帰国の上は大に福島県下に侵入すへしと存候間、彼れ来らば多分貴兄方の御働きを荒らしちらかすの恐れなき能はず、彼は人さへツラムレば速に洗礼を施す弊ある人なりと聞及へり、又都合あるも我が党の信者の受洗に彼には頼みなく、必らず仙台のディホレスト<sup>\*<sup>\*</sup></sup>又は三宅荒穀君<sup>\*<sup>\*</sup></sup>に御依頼ありて可然と存候、又少々なりとも受洗志願者ありて確信ありと御認被成候はゞ、余り長く延はして其序を待つはアブナク存候、若し押川君にツラマラは直に受洗し一致会の藉<sup>(藉)</sup>に入るゝならん、此の一点には御注意あれ、可成は若松の東君と御相談被成、益拡張の御工風もあり、是非とも近々御連署の上松田順平君に福島県下に来られ、御互に運動せられるへき旨御勸あらは、多

分同氏は承諾せらるゝならん、小生よりも本日充分に同氏に向ひ福島行を相勧めおき申候

以上は小生の福島地方に対する伝道の鄙見に有之、又其内に少し秘密の分も含みおり候間、願はくは鄭重に御取扱ひ、決して御他見なき様被下度候

君には先般来御病氣のよし、此れは甚些少に候得共、内国通運を以て金三円御見舞として御送呈可仕候間、御落手被下候はゝ幸甚、艸々頓首

十二月廿三日

襄

白石村治兄

尚々、河西徳作老兄には兼て御地にて拝眉を得、先生信仰の厚きには小生も着目し、又其母上様にも拝眉を得、此書を認むるに当り右の御兩人を思出し、河西老兄は実に信者中の老練家、熱心家と存候間、貴君には可成鄭重に御取扱ひ被下、小生に代り御伝言被下度、又小生には御存の通り、当時非常の困難なる中、同志社に於て私立大学を設立せんと、身体の甚虚弱なるにも拘らず、成らされは止ますの決心を以て、此の事に従事致し居り、已に去月下旬は上州に参り、寒氣に侵され腸胃カタルに罹り、此三四日漸く少々力付き候次第に有之、為めに大学の事業も大に遅延に及ぶ憂も有之候〔得〕共、一信天父に信賴し、此の事を成就せしめんと専心致し候間、信仰に富み賜ふ河西翁の如き御方が小生計画の為に御祈被下候はゞ、天父の聞き賜ふ事ならんと存候

小生の写真老葉を同翁に呈し御記念を願候間、貴兄より右之趣を御談御渡し、宜しく御致声被下度候、又其御

老母様にもよろしく

780 十二月二十四日

東正義\*

⑤ 森中章光写

其後は御無沙汰申上候、陳者小生事は先般来大学募集之為出京致し居候得共、兎角多病ニ而大ニ困難を究居候次第、去日在同志社之生徒よりも報道、尚々又新紙上<sup>\*＊</sup>ニも承知致候ニ、御地ニ先頃リヴァイバル有之、兄弟方ニハ非常之御恵を被蒙候よし真ニ喜欣之至ニ不堪候、小生其後不怠御地之為ニハ祈禱仕居、此事只一時之リヴァイバルニ止まらず、永く駸々乎トして進歩すへきリヴァイバルト相成候様呉々も切望仕居候、近頃承り候ニ貴兄ニ〔ハ〕余程之御大病之よし、此レハリヴァイバル中非常なる御働の御疲労ヨリ生セしものニ無之候也ト心痛仕居候、其後御容体如何、何卒御大切ニ御加養被下度奉希候、今戦争最中一方之司令官相斃候而は不相成、速ニ御回復之程奉祈候、貴兄ニハ御承知ハアルカハ存し不申候得共、東京ニ若松之産ニ而松田順平ト申人あり、彼ハ只今伊勢兄留守中、本郷之教会ニ尽力説教致し、人々も大ニ満足之よしニ而、彼ハ一ツカド働アル伝道者ニなるべしと存候間、小生昨日面会之時是非トモ福島県下之伝道者ト相成、根拠を郡山ニ占め、須加川、本宮、三春等之地ニ播種すへき旨相勧オキ候ハ、東京ニ而小崎兄カ東京ニ止メオキ、番町之助手伝道者ニ被成候ト相勧居候よし、又一方ニハ一致会之植村正久氏カ非常ニ勤メ箱館

教会ニ趣クヘキよし被勸候よし、小生ハ双方ノ招キニ不同意ニ候、小崎氏ニハ他ニ多分之書生もアリ、助手ハアリ候間松田君ノ止マル必要ハ少ナシ、又一旦松田氏ニハ一致会ト其議論ヲ異ニシ脱会サレタル上ハ、是非トモ組合会ニ止マリ吾人ト共ニ運動スヘキハ至当之事ニテ、殊ニ同人之郷里ニ近キ郡山辺ニ其根拠ヲ定メ、貴兄ト白石君ト互ニ鼎足之勢を形作り互ニ往来応援セハ、実ニ僅々ノ手ニテ福島県下一円ニ福音之活種ヲ播キ得ヘク候間、是非福島県下ニ於テ働クヘキハ同氏ニ取リテモ本望ナルヘクト存し、非常ニ小生ヨリ昨日相勸メオキ候間、御地ニテ松田氏懇意之人モ可有之候間、其レ等之人々トモ御相談ニナリ、速ニ同氏ニ御照会アリ、伊勢兄帰国セハ松田氏ハ直ニ引揚、郡山ニ被参候様充分御ス、メオキ被下度候、只今吾人ヨリ着手セザレハ此六月ニハ一致会ヨリ必ラス郡山、三春辺ニハ着手スヘク、已ニ仙台中会ニテハ福島ニ再ヒ講義所ヲオク事ヲ決セシ由、左スレハ押川氏帰国之上ハ福島県下ニ充分長足ヲ延ハシ、吾人カ手薄スニアレハ吾人ノ働キハカキアラサレ、彼ノ掌握ニ帰スヘキ事ハ疑フヘキ事実ニアラス、因テ来二三月ヨリ早々（伊勢ノ婦リ次第）松田氏ヲ郡山ニ派遣し、該地其近傍ニ着手シ、着々其働キヲ延ハスハ今日一日モ猶余スベカサル事実ト認メ申候間、貴兄ニモ必らず小生福島県下伝道策ハ御賛成ト存し候間、若松之御朋友トモ御連合、又白石氏トモ御相談之上、是非トモ松田氏ハ御招キ被下度、尤伝道会社ニモニナク、派遣之都合も相叶不申候ハ、小生何ニトカ工風致し其途ハ相附可申候、何卒此儀ハ中村虹造兄其他御地之兄弟方ニハ御相談、松田氏ニハドウアツテモ何事ヲ捨テ、モ郡山辺ニ行カネハナラス様ニ御勸被下度候、同氏ハドコニ行クトモ未タ決定不致候間ニ有之内ニ同氏ヲ速ニ同意セシムルハ、兵家ノ所謂ル先ンスレハ人ヲ制ストノ語言ニ倣フ仕方手段ナリト存候、此段至急御拝答申上候也、返ス／＼も御病氣ハ御大切ニ被成度候、早々拝具

十二月廿四日

新島 襄

東 正義兄

尚々、御地之兄弟姉妹方へ宜しく御致声被下度候

此度内国通運会社に托し、金五円貴兄御病氣御見舞として御送呈仕候間、御落手被下候ハ、幸甚、金子差出人ハ小生ノ代理永岡喜八ニ御座候間左様御承引被下度候

781

〔十二月〕二十四日

徳富猪一郎\*

②日吉町廿番地 国民之友 ④墨

金森氏ニハ多分本日着京可仕ト存し候、就而は来廿六日午后第四時ヨリ、貴兄ト湯浅兄ニ御さし支ナクハ当旅店ニ而、社員会を相開度候間御光来之程奉仰候、尤右会議ニ付一応貴兄トハ御相談を遂げ度事も有之候間、今午后又明日午后（明日カ却而ヨロシカラシカ）御帰宅前一寸御立寄被下間敷也、此段奉伺候、早々頓首

廿四日

襄

徳富猪一郎賢兄



十二月二十八日

広津友信\*

⑤ 柏木義円写

新潟県一円之地図一ツ御投与相成幸甚之至ニ不堪候、小生ハ当時大ニ関東ノ地図ヲ講究セリ、嗚呼生ノ如キハ地図上ノ伝道者ナルモノカ

本月廿三日付之御書ニテ御地之近情逐一承知仕、新潟教会之漸々自由自治之主義ニ向ヒ候ヲ奉賀候、何卒該会ハ将来他主義ノ為ニ輕々ニ動カシ得サル様、充分御キタヘオキ被下度候

扱、前書ニモ申上候通貴君之去就ハ一ノ困難事件ナリ、何故ニ新潟之兄弟カ右様取チカヘタル考ヘヲ持チ居リシヤ、

君ニ洋行ノ企アリ、該地ニ行クハ只々一ケ年間ノ御約束ニ止リ、先方モ其事ハ承知之上御越シヲ願ヒタルタルナラン

ト存候ニ、牧師ニタノム積ト申上、貴君ヲツカ〔シ〕メントスルハ恐クハ貴君御来着ノ上、大ニ兄姉ノ歛心ヲ得タルニ

アラスヤト存候、最早新潟人ノ性質ハ御洞察アリタル事ト存候通、一寸円滑ニ話ノ調ヒ難キ所アリ、怒レハ中々聞カ

ヌ風アリ、又其歛心ヲ得ルニ至ラバ大ニ厚キ所モアルベク、随分頼母敷有之ト存候間、貴君御誘導被成候ニ成丈怒ラ

セヌ様、又決シテ我カ自治主義ニ心ヲ分離セヌ様、精々御注意アリタシ、又此一点ニハ貴君ニ充分御注目、小生ノ決

シテ申迄ニハ無之ト存候、新潟一円ノ運動ニ付、貴君前書詳細御記被下候事ハ小生モ至極ト存シ大ニ喜ビ居、又米國

ヨリ間露<sup>〔ママ〕</sup>トカ申ス人之被帰、我党ト共ニ運動被致候事ハ重々ト存候、何卒充分御工風アリ、其人ノ心ヲ繋ギオキ、同

氏ニ別ニ為ス所ナキナラバ新潟県下之伝道者トナラレテハ如何、決シテ一致会ノ方ニ頼マレヌ様ニ仕度、而シテ同人

ヲシテ非常ニ自由主義ノ運動ニ同意セシメ、何レヘカノ要地ヲ預メ伝道セシメテハ如何

願クハ積雪ノ尚未タ深カラサル内、貴君、要地五泉、村上、三条、燕、柏崎等ノ場所ニ御巡廻、各所ノ名望家、有志家ニ御面会被成、福音ト共ニ吾カ自由主義ノ将来、我邦家發達ノ要素タル事ヲ明示シ、之ヲ干涉貴族主義ト判然ト区分シ、其ノ利害得失ヲ曉ラシメ永ク固ク我カ党ノ朋友ト為シ、将来共ニ運動スル事ヲ御約シ置カレ而、積雪深ク行路難キ時節ニ至ラハ時々彼等ヲ奨励スル為、縷々ノ御書面ヲ呈セラレ、又伝道者ナクトモ基督教ニ関スル書類等ノ名目ヲ御授ケ、自ラ研究ノ出来候様ナシオカレテハ如何、之レハ積雪中ノ伝道策トナシオキ、三月ノ末雪ノ稍ヤ消滅スル候ヲ待ち、断然又々大収獲否播種ノ御着手アリテハ如何、其時ハ旅費モ多分ニ可要候間、小生モ乍不及御要求丈ケハ御加勢可仕候、又積雪中貴君ニハ成丈ケ新潟ノ教会ヲ固メ、其信仰ヲ養ヒ其ノ断乎トシテ取ル可キ主義ヲ翫味固守セシメ、春風和氣ノ中ニ達セシムル如クナシオカレ、充分其鋭ヲ養ヒ、積雪後ニハ大ニ為スアルノ準備ヲ為サシメ、有為ノ精神アリ、又技倆アルモノニハ各為スヘキ仕事ヲ与ヘ、各々ヲシテ其分業ニ暇アラサラシメハ、大ニ内部ヲ養ヒ外攻政略ヲ施行スル一手段ナリト存候、又此自由主義ヲトル所ノ人ヲ撰ヒ、新潟市中何レヘカノ要点ニ一ノ講義所ヲ作ラレテハ如何、而シテ将来之ヲ第二独立教会ト為シテハ如何、又サンデースクールヲ成丈ケ盛大ニナシ、又祈禱会ハ成丈會員ノ手ヲ用ヒテ導カシメ、又青年ヲ鼓舞シテ成丈ケ感情等ヲ自在ニ吐露セシメ、自然ニ彼等ヲシテ不知不知伝道者ノ資格ヲ用意セシムル事ハ必要ト存候、又祈禱会ナドニ會員ヲ採用スルハ、会衆ヲシテ教会ハ我カモノナリ、牧師長老輩ノモノニアラサルヲ冥々裡ニ悟ラシメ、大ニ彼等全体ノインテレストヲ惹キ起スニ至ラン、何卒此等ノ事、新潟田ノ原兄、長岡ノ時岡兄ト共ニ協議被下、小生ノ鄙見トシテ申来タト御話アリテ不苦、兎ニ角新潟、長岡、新発田ノ固ク鼎足ノ勢ヲ形作り、弥同一体ノ御運動アリ度候也、長岡ニハ来六月後ハ如何ナル變動ヲ来シ申スヘキ



カ、更ニ予期シ難シ、兎ニ角該地ヲ手薄ニナスハ甚不得策ナリ、時岡君ニハ充分ノ御加勢アリタシ、既ニ前書ニモ申上候通、時岡君ニ入用ノ書類、註解等ハ同氏ニ先ツ警醒社、福音社等ヨリ書籍目録(籍)ヲトリヨセ、其内入用ノ書名御知セ被下候ハ、小生ヨリ直ニ該兩社ニ申遣シ御送致可仕候間、貴君ヨリモ右ノ事ハ御勸メオキ被下度候、小生モ近頃小崎君トハ段々打トケ、伝道上ノ相談モ仕候間、貴君ニモ成丈ケ小崎君トハ親シク御交接、同氏ヲ御ツナキオキ被下度候、茲ニ小生ノ未タ断言ノ出来サル事ニケ条アリ

一貴君ノ新潟ニ対スル御所分ヲ判然ト断言スル事

一貴君ノ代人ニハ誰ヲ得テ宜シキカ、実ニ其人ヲ見出スニ苦シミ、誰レヲ貴君ノ代人ニ御送り申スト未タ断言出来サル事

貴君ニ書ヲ送り申候度毎ニ、貴君ニハ面会閑話致度切望シテ止マサルナリ、数日前下村、金森ノ兩先生来京ス、是レハ大学其他ノ学校ノ実況ヲ実視シ参考ニ供スル為ナリ、金森ニハ益元氣ヨク自任シ呉レオレリ、弥理学科ニ着手ノ事ニ取カ、レリ、又政事、理財部ニモ取カ、ルノ相談アリタリ(東京ニ於テ)、小生ハ昨日正午東京ヲ発シ無滯大磯ニ至リ、何ニモ替リ無之、漸々甘快ニ趣キ申候間御休念被下度候

田中賢道氏御来着、九州ニ向ケルノ相談出来タリ

過日来小生前橋ニアリ、上州地方伝道策ヲ立テ、明廿三年ニハ先ツ大間々\*ヲカタメ、可成ハ桐生ニモ手カ、リヲ作り、栃木ニ一ノ根拠地ヲ起シ、該県下伝道ヲ計リ、漸々ト足利ニモ着手ノツモリ、又上州ニハ下仁田ニ全力ヲ尽シテ之ヲカタメ、高崎ニハ井手氏被参候ニ付、該市ノ伝道ヲ取締メ、其レヨリ新町ニ着手シ、藤岡ヲ助ケ、来六月ヨリ同志社ノ小北氏ヲ招キ武州本庄ニ新開墾地ヲ開キ、同州児玉\*又其近傍ニ伝道スル事ニ相談アリ、大久保氏ハ先日態々出

京シ将来ノ計画ヲ為セリ、同氏ハ大元氣益々秩父郡ニ伝道スルヲ以テ自任セリ、福島ハ綱島去ラレ、榎坂ノ聘ヲ受ケ白石氏之ニ代ル、福島一円ノ運動ハ若松ト福島ト郡山トヲシテ鼎足ノ勢ヲ作ラシメ、各地ノ近傍ニ着手セバ得策カト存候、東京ニハ伊セノ教会ヲ受持チオル松田順平氏ニ、伊セ帰国次第郡山ニ赴クベキ旨ス、メ候ヘハ、多分行ク事ニ決シタル様子ナリ⑧（又茲ニ一新策起リ来リタルハ真ニプロヴィデンスト固ク信シ候一件アリ）少シク御閑暇アラハ

松田氏ニ御書ヲ御送り、是非福島辺ニ着手、此ノ時機ヲ遅延無カラサル事、懇切ニ御勸メオキ被下度候

⑧一新策トハ何ソ、即チ信州ニ新開墾ヲ試ミントスル一事ナリ、小生過日フトシタル所ヨリ宿ヲ京橋区南カジ町四番地茂林館ニ転シタルハ他ノ義ニアラス、部屋ノ中ニストヴヲ置クト置カサルトノ問題ニヨリ、成瀬ヲ去リ茂林館ニ移転セシナリ、而シテ茂林館ノ主人ハ信州長野ノ産ニシテ少シク文学アリ、氣慨アリ、宿屋ノ主人ナドニハ実ニ希有ノ

人物ナリ、同人ノ父ハ兼而佐久間象山ノ愛顧ヲ受ケタルモノニシテ、同人ハ象山先生ノ書ヲ蔵シオリ甚得意ナリ、已ニ御承知ノ通小生ニハ上州ニテ大学ノ募集ノ端緒モ愈快ニ開ラケ、事將ニ成ラントシテ俄カニ病魔ノ為メニ妨ケラレ、志ヲ得スシテ空シク帰京スルニ至リ、着京後モ一兩日ハ甚疲勞シ、二三ノ書面位ハ認メ居リ候得共、心中寥々何ントナク平カナラサル所アリタルニ、宿ノ主人見舞ニ出テ来リタル序、談遂ニ信州長野ニ及ヒ、其ヨリ信州一円又同

州植産ノ事等ニ及ヒタレハ、小生ハ大ニ慰ヲ受ケ断然信州伝道ノ考案ヲ起草セリ、信州長野ハ所謂仏教ノ大本山善光寺所在ノ地ニシテ、是迄何レノ伝道社会モ悠々不断、着手セズニアリシハ、天吾人ノ為ニ、信州人ノ為ニ一ノ要地ヲ

此ノ自由主義福音ノ為ニ残シ置カレタルニアラスヤト思ヒ、成丈速ニ着手ノ工夫ヲ廻ラシ申候ニ、差当リ其衝ニ当ル人ナキニ困リ候際、兼テ御談中新潟県下運動ノ一人トナシタキ同苗公義氏ヨリ来状アリ、断然奈良ヲ去リタキノ相談アリ、此レハ同氏徳富氏ニ驢尾シテ将来新聞ニ従事シタキ意ナリ、徳富氏ニ小生ノ新伝道案、即信州着手ノ事ヲ談

シ候ニ大賛成、又公義氏モ直ニ新聞ニ従事セス、今一兩年間ハ伝道ニ従事ノ傍新聞記者ノ準備ヲ為ス、決シテ遅キニ  
アラスト申呉候間、小生モ縷々ノ書ヲ送り信州長野行ノ事ヲス、メオキ申、又一方ニハ上州ノ兄弟不破、杉田、杉山  
ノ三氏ニ書ヲ送り、今ノ悠々不断、近眼ニシテ遠キヲ見サル伝道会社ト協議セス、上州ノ働キトシテ直ニ来二三月ノ  
比ヨリ信州長野ニ着手スルノ手段ヲ為スヘキ旨申遣ハシ、又三人ノ内御一人ハ未タ雪ノ深カラサル内ニ、是非共長野  
視察ノ為メ該地ニ出張スヘキ旨モス、メヤリ居候、三兄トモ賛成シ、三人ノ内一人ハ来一月早々出張ス可キ旨被申  
候、第一ニ長野ヘ根城ヲ築キ、同時ニ須坂、中野辺ニ伝道スル事、而シテ後年、志方等ノ同級生二十人計モ卒業セ  
ハ、アノ内一兩人<sup>〔補〕</sup>「兩三人」ハ上田、松代、出来ベクバ松本ニモ出カケテモラエバ、大体信州ノ要点ハ手ニ入レリト  
存候、兎ニ角信州ヲ得テ越後ト通スルハ当然ノ手段ト存候、依<sup>〔テ〕</sup>ニ越後ノ柏崎ヘハ公義ノ外他ニ可然人物ヲ当ハメ度モ  
ノト存候

米国ヨリ帰国セシ間露トカ云フ人ハ当分長岡ノ働キヲ助ケシメ、往々ハ柏崎ニ出カケテモロウ訳ニ参ラスヤ、<sup>〔補〕</sup>三四  
月ノ頃、即チ来六月ヨリ一致ヨリ着手セサル前、柏崎ヲ渡スハ不得策ナリ」御考オキ被下度候

小生以上ノ考案着々歩ヲ進メ候ハ、上州一円ハ好果ヲ得ベク、栃木ノ中央ハ先ツ根拠ヲスヘ、武州東北ノ端ヨリ自  
由ノ白旗ヲ翻ヘシ、漸々中央ナリ熊谷、河越ヘセメ入り、東ハ福島県下ニ鼎足ノ要点ヲ占メ、仙台ハ東華学校ヲシテ  
漸進ノ計ヲ運サシメ、越後ニ通スルノ大道ヲ信州ニカリ勇進、川中島ヲ打渡リ直ニ長野ニ入り込ミ、彼ノ仏徒ヲシテ  
永眠ヲ攪マサシメ、之ヲ本城トナシテ近傍ヲ掠メ、僅々三四人ノ手ヲ以テ信州一百四万ヨノ人民ヲ攻撃セントスル  
ハ、豈只越信ノ英雄カ昔時霜月過雁ノ夜、僅ニ越山能州ノ風色ヲ併セ望ミテ大ニ快ヲ覚エシ一小事ト同日ニ語ル可<sup>ヤ</sup>ン

既ニシテ越後ニハ兄等ノアルアリ、小生ハ只言フ兄等ノ計ル所ヲ断行セヨト、万一柏崎ニ可然一人ヲ得バ、不行届ケラモ新潟ハ先ツ配置ハ出来候、此レヨリハ其ノ好結果ヲ見ン事ヲ望ムノミ、又可然有力ノ人物ヲ得、往々ハ高田ニ出張セシメニ可ナリ、豈ニ遠慮スルニ及ハンヤ

小生ハ大磯ニ来リ、昨日夜ハメツラシク八時間寝ネタリ、今朝ハ全ク筆ヲ把ラサルノ覚悟ナリシモ、思ハス一度新潟ニ飛ビ、如何トモ胸中ノ噴火ヲ支ヘ難ク、遂ニ四間足ラスノ長文トナリタリ、貴君ヨ、小生ハ当時、負傷腰抜ノ一ノ兵丁ナリ、卿等ノ卒伍ニ加ハリ勇進激闘ヲ試ムル能ハス、止ヲ得ス精神的ノ伝道者トナリ、心計ハ卿等ト共ニ北越ノ寒風積雪中ニ勇飛疾走スルノミ

嗚呼。老驥伏櫪志在千里、烈士暮年壯心不止。

余ハ自身ヲ老驥、烈士ニ比スルニアラス、只々此語ノ精神ニ比スルノミ、余ハ相替ラス小心翼翼タル之基督ノ一小僕ナリ、過日余苦心ノ余リフト一詩ヲ得タリ

偶成

看山高巍々 觀海濶洋洋

味得造化妙 小心少発揚

二十二年之秋、余到上州、欲募同志社大学之資金、日未幾発病、以故不得志空帰東京

〔秋風蕭颯渡刀川〕

〔欲去尚看岡野天〕

〔此行有趣下野□去〕

〔新雁不知孤客意〕

〔声々鳴〕

到（余去雁来）

〔赤峰辺〕\*

初めて大磯の宿に浪の声をきゝて

いにしへの人も夢間に聞きしてん

磯に碎たける波の声こへ

出タラメ和歌御一笑

終ニ臨ミ貴君御一身ノ去就ニ関シ御意見ハ如何、御一応御聞カセ被下度候也

十二月廿八日

裏

友信君

梧下

前文ノ伝道策ノ如キハ余リ関係ノナキ人物ニ示シテハ無益ナリ、貴君御面会ノ序、原、時岡ノ両君ニハ篤ト御相談、新潟ノ兄弟方<sup>(補)</sup>「三人ヲサス」ニモ御同意御賛成被下候ハ、幸甚ニ候

上州ノ不破、杉田、杉山ノ三氏ニハ已ニ大賛意ヲ表シ呉レタリ、若松<sup>(ノ)</sup>東君、福島ノ白石、小生ノ考案ヲ御賛成ナラバ、上州、越後、福島ノ三県否信州、栃木ヲ合せ、関東拔群<sup>\*</sup>ノ五県ハ早晚自由ノ旗ヲ立、一団体トナリテ運動シ、主ノ光輝ヲ顯ハスニ至ラン事ハ疑ヲ入ル可キニアラス

(貴兄方、幸ニ御賛成ナラハ小生ト共ニ熱心ニ主ノ御前ニ跪キ、此一大事ノ為ニ日夜御祈禱アリ賜ヘ)

小生ノ斯ク関東ニ全力ヲ込メ、伝道策ヲ決行セントスルハ他ナシ、関東人ニ有<sup>。</sup>為<sup>。</sup>活<sup>。</sup>潑<sup>。</sup>ノ<sup>。</sup>氣<sup>。</sup>象<sup>。</sup>アリ、又富源モアリテ大ニ独立シ易スク自治ノ政治ヲ実行シ易キヲ見タリ、殊ニ上州諸教会ノ如ク自由ノ一団体ヲ為シタレハ、

徹頭徹尾自由ヲ主唱スル小生ニ於テ、豈坐視傍觀ス可ンヤ、小生ハ当時會議上我党ノ或ル分子ヨリハ容レラレサルモノナリ、嗚呼如何ソ平等主義ノカクモ世ニ容レラレサルカ、俗眼ハ余ヲサシテ主<sup>\*\*\*</sup>旧<sup>\*\*\*</sup>ト称セリ、ア、

ジヨン、ブライトノスピーチ二冊御送申候間、貴君ト原君ニ於テ小生ヨリノクリスマストシテ御落手被下度候也、十二月廿五日ニ発セリ

成丈ヶ加藤、松村<sup>\*</sup>トハ親シク御交リ、彼等ノ歛心ヲ得ルハ大切ナリ、克ク小生ノ地位モ御序ニ明カニナシ賜ヘ

783 十二月二十八日

森信夫<sup>\*\*</sup>

①神奈川県下相州大磯百足や ②筑後国柳川長柄丁 ⑤筆写

其後は御起居如何奉伺候、陳ハ今回御地ノ小野英三郎<sup>(二)</sup>君帰国被致候ニ付、今二三ケ年間独乙大学ニ行キ理財学ヲ脩メ、将来同志社大学ノ理財部ニ教授被致度旨小生ヨリ呉々モ相勸メ申、又社員ニモ同意セシメ、同氏カ承諾アラバ何時ニテモ独乙行ノ相叶候様可取計事ニ致置候間、貴殿ヨリモ同氏一身ノ去就ニ付御相談ニ及候ハ、此好機会ヲ失ハザル様御勸メ被下間敷ヤ、御依頼奉申上候、尤モ同氏ニハ自宅之差々タル内情ニ制肘セラレ、独乙行之元氣ハ少シク相碎候様相見、同氏ノ眼前ノ事ニ抱泥、断然将来ノ大計ニ注目セラレサルハ、小生等之余リ賛成シ能ハサル所ニ御座候、兎ニ角同氏ハ未タ年若クシテ世之風潮ニ触レタル人ニ非ラズ、是ヨリハ大胆ニモ将来ノ大計ヲ被致候様、小生等呉々モ切望罷在候間、貴殿モ御相談ニ出候節ハ断然ト独乙行ヲ御勸メ被下候様仕度候、右内々御依頼申上度、艸々拝具

十二月廿八日

新島 襄

森信夫殿

尚々、近頃新潟之広津氏ヨリモ度々来状有之、諸事総テ相談仕居候  
風斗兄ニ宜シク御伝声被下度奉仰候

784

〔十二月二十八日

新島公義\*〕

⑤ 森中章光写

⑥ 森中写によれば原本ははがきとある。

昨廿七日東京を発し当地ニ来着、茲ニ於而持久之策を可施候間、将来御書面ハ左記之所ニ御遣被下度候也

相州大磯百足屋

新しま襄



785

十二月三十日

松尾音次郎

⑤ 森中章光写、柏木義門写

先日來貴君には如何被成候事かと毎々心に思ひ起し居候へ共、小生も去月廿一日より劇しき腸胃カタルに罹り、爾來大に体力を損し候故東京に止まるは懸念と申す事にて、去廿七日氣候の温和なる大磯へ転寓致し候、当地ハ大分暖にして風さへ無くは実に春日の如く、撰生に至極にして、神戸よりも暖なりと存候、当地に参りてより少々ヅ、戸外運動も出来候次第にて、存じ乍ら御無沙汰に及居候、却説貴君にハ漸く御快きよし重々大慶之至り、右につき何か奮発被成、御従事被成度由至極と奉存候、茲に御尋申上度ハ貴君之可趣場所なり、東京ハ氣候よろしからず、京都も然り、先神戸辺か熊本ならん、神戸女学校に教ゆるの機はなきや、若し御好なくハ断然飛び離れて、極氣候之暖にして咽喉病の爲によき鹿児島辺に御越し、一兩年カタルを御癒し被成候てハ如何、近頃三四万円之資本を積むことを目的となし、小生之一友人竹崎一二と申人(山路も知れり)之周旋にて、該市に一之女学校設立相成候由、御病氣撰養之為該市に御越し女子教育に御尽力ありては如何、該市にハ組合教会之分子も有之候間、旁々徐々と(説教ハ当分セズトモ)此等の人をば導き、将来該市に組合会の元素御播種ありてハ如何、之れハ一挙兩得の策かと存候、若シ貴君御望ならば小生より直に竹崎に懸合申せば、只今ならば未ダ可然人も得ざる時なれば相談は出来べしと存候、貴君にして万一思召あらば至急御回答被下度候也



十二月三十日

音次郎君

梧下

八重も来一月早々当地<sup>へニ</sup>に<sup>へ</sup>来<sup>と</sup>り、小生ノ世話致し可<sup>へ</sup>呉<sup>と</sup>、存候、鹿兒島なら<sup>へ</sup>ば<sup>は</sup>相<sup>へ</sup>応<sup>も</sup>之<sup>も</sup>月給<sup>も</sup>可<sup>へ</sup>出<sup>も</sup>と存候

・襄

786 十二月三十日

新島公義

①神奈川県下相州大磯 百足や ②大和国奈良水門町 ④墨

十二月卅日夕

襄

公義君  
梧下

歳末新年ノ祝詞乍略義共ニ申納候

廿八日付之華書本日来着、行々読ミ下さすに伊セ之山田、大和之奈良、信濃之善光寺とて如何ニも貴君之趣キ伝道さ  
るゝの地神仏ニ縁因あり、随而速ニ好果を見さるの恐も抱かれ候は実ニ御尤千万之事共なりと奉存候、然し伊セ之働  
きは年月の短き割ニハ收獲少しとせず、又因循千万なる奈良ニも四五十名之主ニ撰ハれたる民の起り候は勞して功な

しとハ申間敷ト存候、貴命之通奈良之如き実ニ其境<sup>〔通〕</sup>閑靜ニして更ニ運動のなき地なれば自然貴君發達之為ニ相成  
 らす、又小生ニも少しく見る所あり、大坂、京都辺之管轄下ニアルハチト面白からぬ所も有之候間、少し土地之懸隔  
 シテ自由自在ニ伸暢<sup>〔張〕</sup>シツ、今一ト運動ヲ試候而は如何、貴君サヘ長驅シテ河中島ヲ打渡リ長野ヲ侵撃スルノ勇氣アラ  
 ハ、小生ニハ此上モナキ満足ナル事ナリ、御承知ノ通、長野ハ多年仏ノ支配下ニアリシ人民ナル故、事或ハ遅々タル  
 モ計ラレス、然レ<sup>〔ト〕</sup>モ長野人ノ活潑ニ動キ出シ政事上ニ植<sup>〔殖〕</sup>産上ニ頭角ヲ挙げ出シタルハ、決シテ仏門徒ノ御手下ナ  
 ル人物トハ思ハレス、長野ノ如キハ養蚕地方之中心ニシテ、信州中尤財源ニ富ミタルハ長野ヲ距ル数十里外ニ出テサ  
 ルベシ、縦令長野其レ自カ<sup>〔ラ〕</sup>ニ好果ヲ速ニ結了セサルモ、佐久間ノ起リシ松代ハ五里以内ニアリ、養蚕ノ盛ナル上  
 田モ鎭路上數時間ヲ取ラサルベク、稻荷山、須坂、中野ノ如キ數小都會或ハ五里ハ或ハ三里以内ニアルアリハ、一致  
 会ナトヨリ充分根拠ヲ取極メサル内ニ、來年早々遅クトモ二三月ノ候ニハスポント意外ニモ長野ナル信州ノ中央ニ飛  
 ヒ入り、信州侵撃ノ一居城ヲ築クハ信州ノ伝道上第一ニ着手セネハナラヌ事ナリト存スル所ヨリ、貴君ニ此大任ニ当  
 ラレテハ如何ト御勸メ申タルナリ、何事ヲオキテモ長驅シテ長野ニ飛ヒコムハ一日モ猶余スベカラサル事實ナリ、一  
 致会ニハ近々上田ノ伝道者ヲ長野ニ出張セシムルト申ス事ハ已ニ吾人ノ耳朵ニモ達シタレハ、吾力輩ヨリハ速ニ常住  
 伝道者ヲ以テ其ノ中央ニ飛入り、先ツ自由ノ白旗ヲ善光寺門前ニ立ツルハ、勝ヲ信州一円ニ占ムルノ吉兆ト云ハスシ  
 テ何ソ、成程貴君ニハ少し山田、奈良等之關係より少し遅々躊躇シ賜フハ御尤之至ナレトモ、此長野行ハ前ノ二ヶ所  
 トハ大ニ相違する場合有之、実ニ大胆愉快ナル運動ナリト存候、先ツ長野ニ根拠ヲスヘ須坂、中野、稻荷山ニ着手  
 シ、此等ノ場合<sup>〔所〕</sup>ニ全力ヲ尽シ、而シテ明后年位ニ人サヘ出来レハ、松代、上田、松本等ニ手分ケシテ入り込マハ、信  
 州モ早晚吾人ノ手ニ落ツベシ、已ニ上州ノ兄弟ニモ相計リ立派ニ伝道会社ヨリ派出ト申セハ、彼ノ金ニ乏シク、又大

經綸ニモ少シク乏シク見ユル会社ニ懸合フ事ハ到底事ノ成ル見込ハナキニヨリ、上州教会ノ働キトシテ出張ヲ工風シ  
呉レヨト頼ノミ申候ハ、兼而自由主義ヲ取ラル、上州ノ兄弟連中ニモ、貴君ノ上州ト共ニ運動サル、ハ至極満足ノ  
ヨシ、多分不遠、杉山、杉田、不破之三人ノ内老人ハ視察ノ為ニ信州ニ出張サル、ベシト存候、小生も上州ニテハ志  
ヲ得ス、空ク本月十三日帰京セリ、爾來病床ニアリ、頻ニ関東、信州、越後、福島等ニ伝道スルノ大經綸ヲ工風シ出  
シ、身ハ病魔ノ一囚人タルハ心ハ基督ノ一忠僕、一兵丁、床中豈戰ヒ能ハサランヤト思ヒ、縷々ノ長文ヲ艸シ、或ハ  
新潟ニ、福島ニ、上毛ニ、武州ニ、栃木ニ、或ハ奈良ニ小生ノ思想ハ関東ニ雄飛シテ夜半猶眠ル能ハ〔サ〕ル次第、而  
シテ粗相談モ出来、来一年ハ小生モ非常ニ伝道ニ尽力シ〔大学ニ從事スルノ傍ラ仕事トシテ〕、関東ノ働ヲ強固ナラシメント企居候  
武州ハ本庄ニ着手、往々ハ熊谷、河越ニ及ホスベシ

上州ハ将来桐生ニ着手スベシ、下仁田ニモ全力ヲ尽スノ策、野州ハ此夏ヨリ栃木ニ本城ヲ築キ、往々ハ足利、鹿沼、  
小上山等ニ着手スル積ナリ

福島ハ是ヨリ郡山ニ常住伝道者ヲ置ケハ、福島ト若松ト三要地ニ着手セリト云ベシ

新潟ニハ広津等大奮発ナリ、可然人ヲ送り長岡等ハカタメタキモノト存候

嗚呼、人ナク又金ナキヲ奈何セン、茲ニ至リ男児ノ涙ナキ能ハス、已ニ先日モ縷々ノ文ヲ広津ニ送リタルトキ一詩ヲ  
得タリ

謙信ノ故事ヲ

想像ニ賜ヘ〔シ〕

不止月下併能越

跋涉八洲是我分

壮図却促男兒淚　滴々灑為縷々文

右二十二年之秋余在大磯、艸関東北越之伝道策、贈北越一友人

朝日ニ輝やく不二山を見て　十二月卅日

富士山ハ大磯を距る遠からず

朝日もて白雪を染むふしの山

君に<sup>かほり</sup>香りのあるやなきや

朝日照るふしの白雪ものいはゝ

かくあれかしと人に告くらむ

187　十二月三十日　徳富猪一郎

①相州大磯　百尾や方　②東京赤坂区榎坂五番地　御親展　④墨

来年早々御来遊を屈指奉待上候

着後早々寸書可呈之处、所々より之来状も多分に有之、為に着後もチト急わしく罷在、存し候ながら御不音に及候段

御免可被下候、扱廿七日ハ無恙来着、部屋も都合よろしく離れ家故、烟艸之喫ハ来らす大ニ静ニ有之候、又食物ニも余リ不自由ハ無之、殊ニ小生喜申候ハ暖かなる気候ニ御座候、本日なとハ日中ストウニ火を入れ不申、障子ハ明け放し午前午后も少々運動いたし候ニ少しも寒きを覚へ不申候、此分ニ而参り候ハ、大ニ摂生之為ニハよろしかるへしと存候

金森、下村之両氏在京中何卒両氏、殊ニ金森氏ニ対し将来同志社ニトル方針之所ハ充分御問ヒ合被下度候、近頃同氏ニハ一ノノーションを得たるやに存候ハ、御尋ネ置き又御闊議被下、気骨のある人物を生かし、殺さぬ方針を取れと呉々も御忠告被下度候、彼ハ予之取り来リタル茫漠然タル手段ハ暗々裏ニ反対之よし、貴兄何卒同氏之意見を御惹出し、願クハ一ヒ御投与被下度候、又下村ニも一方ニ傾き易ク、同氏之眼中恐クハサイヨンスアルノミならん、種々之魚ハ大沢之中ニ大切ニ養呉レ候様、殊ニ御忠告被下候ハ、幸甚

過日ハステーション迄御越し被下千万難有奉謝候、何卒御多忙中ニも河島氏ニ御面会被下、又可相成ハ松方大臣(三)も御面談被下候ハ、幸甚

十二月卅日

新しま襄

猪一郎賢兄

尚々、人見兄ニよろしく

788

十二月三十日

横田安止\*

②同志社 御親展 ④墨

一日千秋之思をなし居候裏も本年を関東に送るに至りしハ実ニ胸算外ニして、残念遺憾とする所ハ、一ハ政海之波瀾動遙定まらず、上下共ニ大不出来ト云わざるヘからず、一ハ其為ニ大学之事業も已ニ端緒を開らきかゝり開けず、一ハ兼而予期せし通、其冬之休暇ニハ小生も一ト先帰宅致し、貴君方ト充分御交り申、将来之為ニ種々御計申さんと楽しみ居しに、之も意之如く「ならず」、心ハ日夜相国寺門前ニ飛ぶも身ハ病魔之一囚人トなり、東京ニすら止まる事叶ハず、大学募集之端緒之相開候迄ハ関東ニ止まり持久之策を立、稍氣候之温和なる此大磯之浜辺ニ蟄居し、他日之雄飛を計る小生之心情ハ如何なるものぞ、貴君御洞察あれかし、已ニ御承知も可有之候通、小生ニハ去月廿五日上州ニ参り、募集之策をなし候に、諸事意外に相運ひ、茲かしこよりも集会を設け小生を招き呉候に、廿八日より俄ニ病ニかゝり、本月十三日迄も少しの進歩も見へず、寒氣ハ益募り来、奈帝モスコニ而全敗したるか如く空しく帰京致候、然し又々再挙ニ企ナキニあら「ね」は、来春再遊を約して歸り来申候小生も関東ニ在り、我カ組合教会ニハ尚々微々たるも大ニ発達之兆あるを見、充分小生之一臂を添へ度存候、上州を本城となし、武州、野州、福島、信州、越後等之伝道策を舁し、関東、福島、新潟之諸兄ニ分ち、来月ハ大挙する之企ニ有之候、小生病魔之一囚人たるも心ノミハ我主基督之一小信徒、自由之忠僕ニ有之、益病むも益関東ニ雄飛するの策なき能ハす

同志社之近情ハ如何、「よしの山花咲く比の朝な／＼心にかゝる峰のしら雲」古人の歌に詠せし如く、小生之心ハ日夜諸君を忘るゝ能ハす、何事を聞クニ付け而も今ハ諸君ハ如何あらんと心配いたし居候

学校も漸々機械的之製造場ニ漸々流レ行ハ、生徒の数も増したるより自然之勢ニして止む能ハさる所も可有之候得共、小生平素之目的ハ成丈法を三章ニ約シ、我カ校をして深山大沢之如クになし、小魚も生育<sup>長</sup>せしめ、大魚も自在ニ

發育せしめ、小魚大魚各其分に応し、其身を世に犠牲となし、此美ハしき日本を早晚改良して主之御国、乃チ黄金時代に至らしめん事ハ小生之日夜熱祈して止まざる所なり、貴君之同級生之中、将来望ある者とハ充分御交リ被成、又後級生四年、三年、二年位ニも氣象ある者ハ成丈御交際御引立テ、非常ニ勉強モ致され、又傍ラ特別之余暇を設けて充分ニ心術之修行を為し、百折不撓之精神を養、大胆不敵之元気を蓄へ、他日中原ニ雄飛するの準備を為されん様呉々も御勧め被下度候、又校中都花人士之子弟ニして元氣なきものも、御見捨なく御引立被下候事ハ、敗鼓<sup>○</sup>之皮<sup>○</sup>迄<sup>○</sup>も捨テサル国手之尤注意<sup>ス</sup>ヘキ所也

本日八重ニ申遣ハし五年生御一同ニ何ソ御地走<sup>〔馳〕</sup>して上ケロト申置候間、古賀、浜田之諸氏と御協議、八重之関東ニ参らざる内に一兩日前より御申込ミ、五年級御一同留守<sup>宅</sup>地に御越し御遊ビ被下候而は如何

我カ宿に問ひ来る友よことしこそ(廿三年ハ我史上一大書スヘキモノナリ)主なしとて春を忘るな御来遊之事ハ貴君之御発意之如クになし被下度候

私の留守ニして淋しき妻之心をハ慰め被下度候

(毎々貴君来遊被下候事ハ八重よりも申通参り候

私も三四月比ニハ是非京師ニ歸り親しく御話申度候



昨年カ広津等カ艸案ニ関ハリ候同志社教会之規則草案ハ、多分金森氏之手許ニ出シ候事ト存候、アレハ其後採用に相成候や、恐クハ誰モ無責任ノ如き人ノミ多く候間、恐クハ其儘ニ同氏之手許ニあり、教会ニハ等閑ニ過し行きせぬかと心配いたし候、是レハ早々御注意被下度候、自由自治ノ主義を我カ同志社ニ明白ニなし、各をして福音と共に此真理、此主義を愛慕せしむるは、日本全国之伝道ニ責任を負ふたる同志社教会ニして、一日も在再猶余之出来ざる事と存候

下村トハ充分御交り被下度候、同君ハ非常ニサイヨンスニ熱心なるも、大体書生トハ交ワる事ハ望ミオルナラン  
金森氏ニハ自ラ取ル所之一新主義あるニ似たり、何卒御交り時ニハ御直言あるも不苦候、御遠慮あるはよろしからず  
右は思ひ居候ノミ荒まし記し呈覽候、早々拝具

十二月卅日

襄

安止君

別紙拙作（御他見ハ無用）ハ近頃新潟之広津ニ送り候もの也、御一覽ニ呈す、小生之関東伝道ニ熱心なるも御察し被下度候

述懐 此二詩ハ御写之上他人ニ御示し被下候而不苦候

看山高巍々

觀海濶洋洋

味得造化妙

小心少発揚



明治二十二年之秋、余到上州、欲募同志社大学之資金、日未幾発病、以故不果志空帰東京

秋風蕭颯渡刀川

欲去尚看両野天

上野下野ヲ云フ

雁ハ来リ余ハ去ル  
新雁不知孤客意

声々鳴到赤峰辺

アカギマ山

(此ハ山泰然トシテ上毛下毛ニ蟠ル、前橋ヲ去ル遠カラス)

距

徳富君より御送本申候内、ジョン、ブライイトノスピーチハ、小生よりクリスマトとして御呈上申候分也、同級生之内、段々卒業前ニ当り目的を立つる者も可有之候間、其適応之人ハ成丈ケ伝道者に被成候様御勧め被下度候、来五月ハ合併モ必らずナキネイリに局を可結候間、何レ組合全会之全力を伝道ニ向け、九州、中国、四国、関東ニハ充分手を延ハシ申度候間、貴君成丈ケ御勧め、伝道者ト相成候者の出デ来り候様御取計被下候ハ重々ノ事ト存候、近頃我輩カ大学ノ事ニノミ奔走致し居候所より、或ル宣教師方ニハ誤而小生ハ伝道ニ不熱心ト思フ人モアラン、其ノミならず此度之卒業生中、神学ニ入ルモノ少ナキ時ハ大ニ失望可為致、又アメリカンボードモ我カ同志社ニ向ヒ自然インテレストを失ヒ可申候、左レハ同志社大体ノ進歩ニトリ、又米国ヨリ資本ヲ得ルニ付ケテモ不得策ナラン、此一点ハ御含ミ置カレ、古賀ナドニモ同意セシメ、余リ神学生ヲ輕侮セサル様、今日ノ日本ニ取り、政府も民間ノ政党モ失敗ノ多キ時ニ早ク伝道ノ長足ヲ為シ進ムハ、決シテ猶余スヘキニアラサル事ヲ御考へ、尤伝道ニ少シモ意ノナキモノハ仕方ナシ、乍然苟モ伝道ノ必要ヲ感セラル、人アラハ、伝道者ト被成候様御ス、メ被下度候、小生ハ此自由主義ノ教会ヲ日本全国ニ設立致し度候、来五月ハ非常ニ伝道会社ノ組織ヲカヘ、伝道者ヲ優待スルノ法ヲ可立候、又小生ノ胸算中ニハ此レヨリ鹿児島、山口、萩、

広島、名古屋、静岡、金沢、和歌山ノ大都会ニ侵入スル積ナリ、手コキサヘ揃、僅々十二充タサル人ニテ日本  
ノ大都会ニ着手シ得ベシ、先日広津君ヘハ三間有半ノ長文ヲ艸シ、関東ノ伝道案ヲ送申候  
別紙ノ詩ハ其時作リタルナリ、予病床ニアルモ志ハ天下ニ雄飛スルヲ如何セン、小生ノ大計画ノ（大学ノ事）  
成就致し候様日夜御祈被下度候

月未詳十五日

〔永岡〕喜八<sup>\*</sup>

④墨

綱島君より手本として戻し呉たる手紙ハ、御写しオカレシナラント存候

同氏より申来候人名ハ尽く御写置き、其々へ手紙ハ御差出被下度候

文章、文字ニ注意、又状袋も上等之分、同氏之注文通御用被下度候、綱島之手を經而遣ス手紙等は、綱島氏ニ托スト御記し被下度候

十五日

襄

喜八君

790

月日未詳

〔大久保真次郎〕\*

⑤ 森中章光写

〔前欠〕

貴論の如く合併ハ無期中止ト相成可申ト存上候〔ト〕雖、上毛、武州ハ充分自由自治ノ金城鉄壁ヲ築キ、尚将来ニ備ヘ  
オク事マツ甚必要ナルベシト存候

襄畢生ノ目的

自由教育 自治教会 兩者併行 国家万歳

血涙共勺之貴兄宜シク生ノ衷情ヲ洞察アレ

皇国ヲ思フ丹き心を朝間山によせて

朝な夕な峰に烟のたえされば 山の心根如何あるらん

③はがき ⑤写真

過日御叱正相願候分ハ兼而御談も有之通、小生少々劳心之時思ひ出せしものニ有之候間、何卒御謙遜不被遊、御添刪被下度奉希候、頓首

明治二十三（一八九〇）年

792

一月一日

半田平次郎

①東京々橋区南鍛冶町四番地

茂林館

②上州原市

③はがき

④印刷

謹賀新年

明治廿三年一月一日

東京々橋区南鍛冶町四番地  
茂林館

新島 襄

793

一月一日

河原林義雄

③はがき

④墨

⑤複写（河原林孟夫氏所蔵）

⑥代筆

謹賀新年

明治廿三年一月一日

京都同志社

新島

襄

794

一月一日

新島公義

①相州大磯

②奈良県下奈良水門町

④墨

恭賀新年

廿三年一月一日

公義殿

襄

恥之搔初として筆を試申候間、貴覽ニ呈し候

二詩共近作なり

河合家ニよろしく、環君ハ其後如何

195

〔一月一日

新島八重〕\*

⑤ 柏木義円写

⑥ 原本ははがきとある。

河原町、速水、市原様、北垣様、財部様其々へよろしく

めて度新年申納候、嗚々本日ハ御来客も有之事と存候、こゝ許には甚静にして来客一人もなく春の様にも被思不申候、本日ハ朝より詩などを作り書き初をなし大ニ楽しみ申候

御母様ニハ如何、御前様には成丈け早く御出被下度候、宿ニて食物ニハ大ニ困り入申候



④墨 ⑤写真（杉田信雄氏所蔵）

恭賀新年

昨日ハ早々新年之祝詞御投与奉謝候、小生よりハ上毛之諸兄へ宛御連名ニテ差出申候間、明三日ハ御耳迄相達申候事ト奉存候

却説小生より三兄へ宛相呈せし伝道策ハ其実三兄ニ限り内々御相談申上候事故、三兄之内御協議一決セサル内ハ余リ他ニ漏れざる様仕度奉存候、右様之事ハ兎角事之未熟之内ニ漏レ為ニ妨ケラレル事も出来可仕候間、公然ト発表スル迄ハ成丈注意致シタ<sup>ガ</sup>ヨイト申迄ニ候、若し三兄之内御協議一決ナラレ候上ハ他之兄弟トモ御相談被下度、殊ニ信州ノ策ノ如キハ事ノ稍熟スル迄ハ余リ公ニ発表セサル方得策カト存候也、貴命之如ク上毛ニモ上毛丈ケハ御運動被成候事ハ至極ト存候得共、小崎トハ充分御結ヒ被成、同氏ヲ上毛之ベストフレンドになしをくは必用と奉存候

小生も東京ニ在リ小崎トハ深交を厚し、将来伝道上ノ運動ニ付キ充分御協議致シタキモノト申オキ、殊ニ来年総会ニハ一層全力ヲ伝道ニソ、ク事ニ致し度旨申談候ハ、同氏モ至極同意ニ有之候、近々大磯ニ遊ヒニ参ルト申ス事故、信州ノ事ハ端緒ヲ開キ、同氏ノ賛成ヲ可得事ニ可仕候、又可成丈小崎ヲシテ右之如キ新運動ニハ發起人ノ一人トナラシムルニ如カス此辺之所ハ何卒不破、杉田兄トモ御相談宜ク御取計被下度候、小生は已ニ胸中ニ鬱屈シタル両毛、信州地方之伝道策ハ貴兄方へハ已吐露致し候間、此より成丈大磯之風月ニ身を寄せ撰養仕度ものと存居候、終臨ミ一言

仕度は此一事ナリ、凡天下ニ於テ非常ノ仕事ヲ為サントナレハ非常ノ果斷ヲ要セサルベカラス、万一アチラコチラ遠慮スルガ如キハヤ、モスルト人ニ後レヲ取ルノ憂ナキ能ハス、此二十三年ノ上毛地方伝道策ヲ建テラ〔レ〕ルニ於テハ非常ノ御奮発ノ非常ノ果斷決行ヲ要セラレン事、小生ノ切望スル所ニ御座候、早々貴答

一月二日

新島 襄

杉山重義兄

尚々、前文之通果斷ナル独斷トハ相違仕候而、兄弟方之御協議ノ上果斷決行ト申候也

事之未熟なる内東京辺ニ信州着手ノ事流布スレハ却テ防害ヲ受クルノ恐アルヨリ申上候也、小崎兄ハ君子故此辺ニハ余リ御注意ハアルマジ、誰彼ニ漏ラス恐アリ、依而事ノ熟スル迄ハ少シク御注意アル方ヨロシカラント申上候迄也

此書ハ何卒杉田、不破ノ両兄ニ御示し被下度候也

諸兄御連名ニ而年始状差上候内に中山光五郎、上原権太郎君之御名ヲ漏ラセリ、甚不注意ノ至り、御両名ハ御加へ被下度候也

取急乱文ハ御免

797

一月三日

半田平次郎

①相州大磯 百足や方 ②群馬県下碓氷郡原市 ④墨

目出度賀新年

当年ハ大磯ニ在リ暇ニ任セヘタ之書き初を致し候<sup>間</sup>付、心辱く候得共、拙筆<sup>\*</sup>貴覽ニ奉呈候間、御笑納被下候ハ、幸甚、乍憚御家族様御一同へ祝詞宜しく御陳被下度奉仰候

一月三日

新しま拝

半田平次郎兄

798

一月三日

松本勘十郎

⑤森中章光写 ⑥原本は代筆とある。

恭賀新年

本年ハ大磯ニ在、暇ニ任セヘタ之書初、否々恥之搔き初を致し候、甚心恥つかしく候得共、拙筆奉呈貴覧候間、御笑

納被下候ハ、幸甚

旧臘ハ態々蓮田君を以て第一銀行宛之証書尅葉并ニ御書御遣し被下難有奉謝候

一月三日

神奈川県下大磯百足屋ニ而

新しまゐ

松本老兄

梧下

799

一月三日

新島八重\*

⑤ 柏木義門写

廿三年一月一日之御文目出度拝見、諸御母上様御機嫌克御越年、殊ニ御母様には八十四年之御高齡ニ被達候よし、実ニ目出度事と奉存候

右ニ付ても御年寄之事故、只々日々便りに相成候は私と御前様のみ、然るに私ハ大学之為と乍申八十ヨ日も留守に相成、此正月も家ニおらず、此上御前様カ御留守ニ被為成候ハ、実ニ私之病氣かよろしからざるより御出向之事ト思召御心配之余り若し不慮之事ナト有之候ハ、私は甚つらき事ニ可有之候、又先日中ハ上州ニテ腸胃カタルニかゝりしより誠ニ食物に困り、東京ニ而も宿のめし、又大磯ニ参り候而も宿のめし、殊ニ田舎之事故何事も病人之食物ニ相

叶ひ不申、私之食物ハ別ニこしらひ候而日々食し居候次第、御都合相叶ひ候は御出あれと申たるなり、乍然八十四才之御母をのこし、私共兩人ニて東に在るは中々心もとなく何とも心配なしには暮らし得間敷と存し候間、私は是より別ニ誰そ料理人をたのみ、此者ニ調理法ををしえ日々何ぞ私之為ニ相成ものをこしらえ申さすべく候まゝ、何卒速ニ先日御頼み申上候通、私之食物之料理法ニ付ベレー様之妻君、リチャルド様などによく、色々の品々の調理法を横文字ニ而御記しもらひ被成、其を御送り被下候は、品物ハ一切横浜より取寄申、チト西洋風之御馳走ニ致度、又当地ニ参り候より氣候も暖かに有之、又気分もよろしく此分ならはお前達か無理ニ御出ニ不成候とも私ニハしんぼう致し、成丈け先きの短く被為在御母様へハ私に代り御つかへ被下候而、先当分御出之義御見合セニなし被下度候私の病氣よろしからざる時ハ直ニ御知らせ可申候間、其節ハ御出被下候事ニなし被下、私も此冬ハ成丈用心致し病氣ニかゝらざる様可仕候

和田君之事も何か都合出来候様ニ承り少々安心致し、此上も横田、山路様ニハ充分骨折呉候様呉々もお前様よりも御頼み被下度候、又和田様ニもコ、がしんぼう所なり、コ、テ手輕ニ御動被成候ハ、又々少し計の事柄の為ニ動かねはならぬ事も将来出来可致候間、和田ニハ此度之所ハ実ニ大切之試みなり、此困難の試みに御たえ被成候ハ、他の大困難ニも御たえ被成候事も出来可申候間、自カラを御かへりみ被成、此上ハ充分御勉強被成下、決して人ニ向ひ不足などよろしからざる旨私に代り呉々も御話被下度、先は用事のみへ度、かしく

一月三日の夜

裏

恭賀明治廿三之新年

800

一月三日

吉田賢輔

①相州大磯 ②下谷竹町拾番地 金森通倫氏持参 ⑤写真（吉田しず子氏所蔵）

昨日より徳富、小崎、金森之三兄おこし被下大ニギアヒ、今午后御帰京被成<sup>\*</sup>、後トハ火のきへたるか如し、御母様之為又大学之為に私にも仙台はぎの腹はすいてもひもじふないを学び、お前様御出がなくともさむしふないと申居候、今日ハ長岡に笑ながら話候に私の母もこの様なるアバレ息子を持つたのが御御自身<sup>〔衍字〕</sup>の不幸、天下の為に計る志のなき息子を持たれたならば御目下ニありて御孝養も却而出来たるものと申候ハ、長岡は大に笑ひ、其れは余りの御口上たと被申候

ケーデー様より英文規則ハ御遣し被下度候、又其レト一ツニ書斎の入口の左手にある棚の上に大学之旨意書ニ而英文にかきたるもの紙に包包<sup>〔衍字〕</sup>つまり有り候間、十枚程同時ニ御遣し被下度候

過日御来訪之節一寸御話申上候敝校同志社之事ニ関し榎本大臣に緩々面会仕度候付、大臣之向島別邸ニ被在候時、先師之御案内を願ひ大臣ニ接し度ものと存居候処、已ニ御承知も有之候通、小生ニハ病氣撰養之為不得止当冬ハ氣候之稍温和なる大磯ニ転寓仕候次第ニ而、何時カ先師之御案内を仰ぎ大臣ニ接し得べきものそと大磯来着已来も嘆息致し

候次第、然るに過日来京都より金森通倫と申者(此人ハ熊本之産ニして小生病氣中同志社学校之校長を属托し置候也)

来京被致、学校之事ニ関シ種々取調之廉も有之、又特別ニ大臣ニ拝眉を得て縷々御依頼申上度件も逐々相迫まり在再  
遅滞せしむるハ学校ニ取り決而得策ニ非らず、可相成ハ本年<sup>早々</sup>其目的をも達度存候間、小生之代りに右之金森氏を  
し而大臣ニ御面会為致詳細学校之近況等ハ申上、殊ニ文部省より許可を受け得度一事件ニ付縷々御話為仕度候間、先  
師ニハ何卒同氏を小生同様ニ思召被下、<sup>予め</sup>先大臣別邸ニ在るの時日を御問ひ合セ被成下、一日同氏を大臣之別邸迄御案  
内被下間敷也、伏而御承諾之程奉仰候、何レ右事件ニ付金森氏拝眉之上縷々可申上候間、同氏より御聞取之上小生之  
為否同志社学校之為御尽力被下度奉希候、勿々拝具

一月三日

在大藏  
新島 襄

吉田賢輔先師  
梧下

801

〔二月四日〕

新島八重\*

④墨

鶴田様并内のおさん殿ニも新年目出度御陳被下

広瀬様、野村様ニも

広瀬様ニは毎々御無音申上候条、御申訳被下度候

昨日も一筆申上候通、御前様之関東ニ御出之事ハ考ふれば考ふるほと上出来とは思へれ不申、西洋風ならともあれ私共は日本人ニして日本に働きを為す身ニ有之候ハ、夫婦之間柄よりも親の御事ハ重んじ申度、殊ニ八十四歳ニも被成候御年寄を寒之最中ニ見捨て関東ニ御越し被下候共御前様ニも不安心、又私ニも心に甚快からず、若しもの事有之候節ハ実ニ御互ニ残念、又世間にも申訳なき次第、又如何ニも情として忍び難き所あり、今となりてハ私カ大病ニあるも成丈御前様ニも御母様ニ御孝養有之度、最早先きの永からぬ御身なれば如何ニも大切ニなし被下、成丈御氣を付日々のめしあかりものハ柔かにして甘きもの何ソ魚之軽るきものカ、又ハ茶ワンむしの類を日々御さし上被下、此上ハ少しも御不足のなき様御注意なし被下度候、私も家ニ罷在候ハ、日々御侍へり申度候得共、国之一大事之為如斯も関東ニ止まり身も度々病ニ伏し種々の不自由も感し申候得共、私ハ元より覚悟之上の事男子の戦場に出るの同様なりと存候、然し御年齢高き御母様ニは杖とも柱共頼むは只私共兩人のみ、其耄人なる私は八十日ヨも孝養を欠き申候上、御前様も関東ニ御越し被遊候ハ、義理と云ひ人情と云ひ何分申訳之立たぬ事共なりと存候、克く此辺を御考へ先ツ関東御越しハ御見合被下度候、私も男なり、又クシリチャンなり、少し計の事ハ心抱可仕候間私ニ御使ハ被下候御積ニ而返すくも御母上様ニ御使ハ被下度候、御前様ニ御出なきとなし候ハ、先日来種々御注文申上候事ハ宜しく御頼み申上、一々只今覚へ不申候得共先日來之手紙之内尽く御覽ニ相成、私より御頼申上候品物類、米国より来りたる書類等、上へに衣るフランネル之シャツ今壹枚、其外之ものハコリニでも入り御送被下度候、是非御遣しを願ひ度ハケーデー氏よりおもらひ被下候同志社之英文規則、又書斎ニ有之候英文之大学旨意書（書斎ノ入口ノ右手ノ棚ノ上ニアリ）各拾枚位、其外近頃参り書類なり、尤簿茶色之ウスキ表紙之ウスキ雑誌ハ御遣しに不及候、青き表紙之分ハ御



遣し被下度候、教会之事ニ関ハリ候事ハ一切御送り被下度候

御遣ハしの書き留之の書ハ慥ニ落手仕候

殊ニより候ハ、私も二十日比ニは東京之用事も相済候かも不被計、左スレハ直ニ一ト先引キ上申度候間御前様ニは兎  
ニ角関東行ハ御見合可然ト存候、如何ニも氣之毒千万なるは横井之御老母様ニは昨日御死去、明六日御葬式之よしニ  
而本日長岡を私之代人となし五円持たせ遣し申候、嘸そ〳〵時雄君之留守ニ而コマル事ならんと存候、今少し金も送  
申度候得共少し送り又後ニコマル時にさし上候方よろしかるへしと存候、右様ニ取計申置候、此レハ御母様ニキカセ  
タカヨヒ

八重様

襄

河原丁之母様ニも私之母ニイセ之事ハ内々になしをき被下候ト御頼ミ被下度候

802 一月六日 松尾音次郎

⑤ 森中章光写、柏木義円写

鹿兒島友人ヨリ、来状中ノ一〃小片一寸貴覽ニ呈候、御一笑

貴書に依れば鹿兒島行ハ御同意之よし、此ハ全ク貴兄咽喉全治之策かと存候間、此一点ハ呉々も御了解被下度候、御全治ノ上は別に御相談之上明案も可有之と存候間、此れハ後日に譲り申、是より入薩の工風仕度候、此儀ハ先方とハ少しも懸合無之候得共、多分出来る事ならんと存候間申上たる也、貴兄の御健康ハ一日何時間位御教授可相成や、若し二時間か又三時間なるか、若し一週六日間二時間ならハ月給ハ若干、三時ならバイクラと大概貴兄見込之所ハ御漏し被下度候、尤先方之都合ハ如何相成可申や、少しも承知不仕候間、先大体貴兄之御見込此位ならば行くもよいと申す処を承知仕度候、何れ六日間之御約束被成、安息日ハ全ク貴兄之自由に御費被成候方可然ト存候、彼女学校ハメソディスト派なるべし、貴兄ハ飽くまでも我組合自治教会に御賛成被下、已ニ該地十有余人も組合主義之信者有之、一教会をも起さんとするの際なれば、御発声なくとも何事に付ケ此十有余人之信徒を御薫陶ありて他日好果を薩摩の辺隅に給ひ可申候間、安息日ハ特別に此等の人之為に御費し被下度候、該地の如きハ実に我が社会に勢力ある人物を出し居候て将来も尚望ミ有之候間、我組合教会を設置すること必用と存候際、該地よりの近報にハ十有余人の青年飛常の元気を以て組合組織に尽力あるよし、貴兄の行も矢張天意の存スル所カト存じ、心竊かに喜び居候、何卒前文之御尋にハ至急御回答被下度候也、早々以上

一月六日

・裏

音次郎兄

貴兄にハ何レ一方に当ルの御身なれば、百万御工風ありて先健康の御身と被成候方得策と被存候、一二年損失す

るも挽回ハイツデモ出来可申候間、御気分ハ悠々閑々泰然として将来の大計を御立被成方奉切望候

〔何×デ〕

〔之〕

803

一月七日

広津友信\*

⑤ 柏木義田享

去月三十日附之御書並ニ新年御祝詞又新潟全県之地図御恵送被下難有落手仕候、御申越ニよれば弥按手礼ハ御受不被成事ニ御決定之よし、右は彼之兩人之挙動少し面白からざるに似たり、是レカ将来敗裂之元素ト化し候而ハ甚不都合ニ候間、可成丈ケ忍ンテ御交際被下、其際ニ自治自由政治之実験專制的政治ニ優ルノ理由ヲ説キ、彼等之腦裡ニ吹込ミオキ、将来一致会ニ加勢し、彼等之誘導等ヲ為スニ至ラサル様予メ御防ギオキ被下度候、而シテ全会員ニモ自治自任之精神ハ充分御入込ミ被下度候、又彼等ヲシテ閑暇ニ苦シマシムルハ得策ニアラス、新潟市内ニ別ニ講義所ヲ設クルカ又其近傍ニ新潟教会之伝道地ヲ作り、遂ニ彼等ヲシテ多事ニ余念ナカラシムルハ御地方伝道策ニトリ必要ト存候、御恵送送<sup>〔衍字〕</sup>ノ地図ハ小生ノ鋭を養ヒ旅中之鬱ヲ散申候、新潟県ニシテ長岡ノ地位ハ新潟ニ統キテ甚大切之要点ナリ、該地ノ勢力ハ決シテ弛怠セシムヘカラス、可成丈速ニ有力之伝道者ヲ送ルハ必用ト存候、而シテ長岡より与板、小千谷町、新丁、今町ニ及ホシ◎三条ニ常設伝道者一人ヲオキ燕町、白根町、地藏堂町等ニ着手シ◎柏崎ニモ是非一人ヲオキ椎谷町其近村ニ着手シ◎新発田ヨリ充分中条ニ着手シ自治会ノ線路ニ入レ込ミ◎五泉ニ一人ヲオキ村松ニ着

手シ及フヘクハ津川ニ播種致シタキモノト存候、右ノ計画ヲ決行セシメントスルニハ今少ナクトモ三人ノ新手ナカル可ラス、三人ヲ得ストモ二人丈ケナラバ柏崎ニ一人、三条ニ一人ヲ要シタク、若シ不幸ニシテ只一人ノミヲ得ルトキハ柏崎迄線路ヲ張リタク候也

当分何トカシテ貴兄等ノ中御都合被成与板ハ固メ、三条ト柏崎ニ充分ノ手カ、リヲ作り、新潟、長岡ヨリハ此ノ中間ニ横ハル地方ノ要点ハ講義所ヲ設置シ、看版〔板〕ヲ公然トカケオキ、縦令他ノ何人カ入り来ルトモ吾人ハ已ニ先入ノ特權ヲ有スル事ヲ得ヘク候間、他日人ノ出来次第人ヲ送ルニハ甚好都合ナリ、而シテ貴兄此五月迄ノ御働ニハ其地方之主ノ有力者ト御交際アリ、充分自治教会之将来日本人ノ氣骨ヲ養成スルニ必用ノ点ナド〔ヲ〕ニ説キ、彼等ノ歛心ヲ得、シンパセーヲ繋ギ、容易ニ他人ノ為ニ動カサレザル様御尽力被下度候、此レガ新潟県伝道之大経綸カト奉存候、而シテ人ヲ得ルニ随ヒ、前上申上候通三条ニ一人、五泉ニ一人派遣シテ其要点ヲ塞ガバ、先ツ越後ハ大体吾人ノ手ニ入ルベシト存候、貴兄幸ニ前上ノ考案ニ御賛成被下候事ナラバ、先ツ第一ニ新潟之教会ヲシテ自由ノ春風ニ心醉セシメ、之ヲ将来運動ノ中心トナラシメ、名義ハ独立ナルニ願クハ県下大体ノ運動ハ充分組合会ト共ニセシメ〔モ〕（此レハ貴兄御負担アレ）時々長岡ニ御加勢ニ赴カレ長岡人ノ心ヲ我自由主義ニツナギ、傍時岡ヲ助ケ、又必要ト認メ賜フトキニ同氏ニモ充分ノ忠告ヲ加ヘ、同氏ヲ活カシテ働カシムルハ必用ナリ、万一同氏ヲシテ失敗ニ至ラシメハ不知、長岡ハ何人ノ手ニ落ツルヲ、一致会ハ已ニ該地ニ延ヲ垂レ隙ヲ伺ヒ我本城迄モ奮ハント野心ナキ能ハス、依テ同氏ノ出来不出来ハ大ニ長岡伝道ノ消長ニ関係ヲ可生候間、長岡ハ貴兄之御後見御加勢ヲ仰キ、一步モ退カシメサルノミナラス、進ンデパン種ノ如ク長岡全市其近傍ニ至迄モ自由福音ノ恩下ニ成長セシメ度候、聞ク所ニヨレバ時岡氏ニハ是迄大分金森ナドヨリハモニニ甚不都合ノ人間ナリトノ評ヲ受ケ、度々モニハ入ラスト断言シテ伝道地ニ赴キ、而シテ赴キタル

後ハ直ニモニーノ事ヲ説キ出シ、借金ナドヲ初メテ困ル旨金森氏被申候、又同氏長岡ニ赴キタルトキモ小崎氏ニハモニーハ入ラスト被申、会社ヨリハ十二円ノ月給ヲ送り候ハ、十二円ニシテ足ラス、十五円ヲ要スルナドト被申候由、又屢々金ノ伝道会社ヨリ回送ナキヲ申立、小生ヨリ借金ナド致シオル由、小崎氏ニモ苦情ガマシキ事ヲ申居候間、貴兄ニハ早く同氏ノ挙動ニ御注目被成、御面倒ナガラモ同氏ト伝道会社ノ間ニ立チ月給ノ事等ハ判然タラシメ、又同氏ニモ精々長岡伝道ノ必要且同氏ノ責任ノ重且大ナルヲ説キ、将来ボロヲサゲテモモニーノ一点ニハ決シテ他人ヨリ喋々セシメス、真実ニ廉潔之風ヲ振起シ、人ヲシテ不覺芙蓉峰頭ノ旭日ニ映スル白雪ノ美觀ヲ曉ラシメバ、同氏ニモ將來伝道者ノ資格ヲ全クスヘク、又長岡ノ働モ拡張セシメヘク候間、同氏ヲシテ真率廉潔之ライフヲ挙行スルニ至ラバ同氏一人ヲ救ヒ、又同氏一人ニヨリ多分ノ同胞モ無量ノ幸福ヲ蒙ムルヘク候間、向後御面会ノ時ハ新島ノ耳ニ如此々々ノ事ガ達シ、同氏ニハ時岡ヲ信シテ容易ニ動かサルモ余リ伝道者ニ取り好マシカラヌ風評ナリト窃カニ心配シ居ラル、位ハ御談アリテ、可相成ハ是迄ノ負債ノ所ハ御聞糾シ、小生ヨリ昨年十二月送金セシ分ナドハ(十円)受取りキリニハ不相分、一時ノ立替ナレハ会社ヨリ送金ノ有リ次第返却セネバナラサルモノナリ、此辺ハ貴兄ヨリ明了ニ御説明アリ、災ヲ未萌ニ防クノ策ヲ御立被下、又殊ニ同氏ニシテ将来失敗アルモ長岡ノ伝道地ハ他人ノ手ニ落サルノ策ヲ御立被下度候、該県下ノ人ハ氣骨ノアル代リニハ又敗裂シ易キ所モアリ、貴兄長岡ニ対シ後見人ノ大任ヲ負ヒ賜ヘ、原兄トハ屢々御交通アリテ同氏ノ失望ニ至ラサル様御加勢有之、又原氏ヲシテ奮然其任ニ当リ中条町之伝道ハ村上ノ兄弟ニ渡サズ、成丈ケ速ニ該地ヘ向ケ自由福音ノ活種ヲマキ我党ノ線内ニ入レオク事必要ト存候間、如何ナル事アルモ中条ハ決シテ先方ニ渡サヌ方得策ナリト存候、如此新渴ノ中央ニアリテ活潑ニ実着ニ懇切ニ着手セハ遠カラスシテ好果モ可期ト存候、兎ニ角原兄ニハ決シテ失望落胆セサル様間接ニ御勸被下度候、如此縷々説來說去ルモ、尚金ナク

人ナキノ嘆アリテ、壯國却促男児ノ涙ノ句ヲ御玩味被下度候、◎新潟五月以後ノ後任ニ近々帰国スヘキ米國之遊学生  
小矢野氏ハ如何ト昨日申来候、此レハ中々考ヘモノナリ、米國ニ十五年モ居リシ日本人ハ随分不適當ノ所アリテ新潟  
ナドニ送ルニハ羊ヲ狼中ニヤリタ如シ、熟考ヲ要スヘキ事ト存候、一月二日徳富、金森、小崎之三兄大磯ニ舞ヒ込ミ  
来リ中々盛ナル新年集会ニ有之候、小生モ少し宜しく候間安心可有之候、不相替縷々之長文ナリ、公義氏モ弥長野行  
ニ決シタリ、上州ノ兄弟サヘ来二月中ニハ川中島ヲ越ヘ、長驅シテ長野ニ入り込マシムルノ策ナリ、近報ニヨレハ鹿  
児島ニモ十人ヨノ兄弟ニシテ我党ノ自由主義ヲ取り、直ニ組合会設立ノ計画ヲナサルヨシ、福島県下ノ運動モ前書申  
上候通来二月ノ末カ三月早々ニハ一人松田順平ト申ス人郡山ニ赴ク事殆ンド決心セラレタリ、不破氏ニハ大ニ上毛下  
毛辺ノ伝道ヲ以テ自任セリ、同志社モ本年中ニハ是非大学ニ手初ヲ為スベシト段々工風致居候○此病衰ノオヤジモ尚  
天父ノ許シ賜フ間ハ中々屈擣仕ラス、驚馬伏櫪ノ感ナニ能ハサルモ千里外ニ馳スルノ壮心ハ聊カ胸中ニ勃々鬱屈セリ  
いしかねも透れかしと一筋に

射る矢にこむるますら雄の意地

○新年之作ハ左の通改め申候、起句丈ヶ改候也

歲月如流不待人

鶏鳴早已報佳辰

劣才縦乏濟

〔民策〕

尚抱壯國迎此春

夢中之夢

欲挽倒瀾濟此民

浮沈半世染紅塵

自今願逐赤松子

流水乱山寄我身



此レハマダ夢ジャ夢ジャ阿々\*

一月七日

裏

友信様

白木君\*\*\*ニよろしく御伝言被下度候也

804

一月十日 北垣国道

①相州大磯 百足屋方 ②京都土手町 御親展 ④墨

肅啓、陳者兼而待居候二十三年之春を迎ふるに付き、小生輩ニも種々之感情を惹起し候得は、まして牧民家たる閣下ニ於而無量之御感慨も被為在候半と奉遙察候、時下御自愛永く将来之為ニ御商量被下度奉切望候、扱閣下迄已ニ申上候通熊本県人ニして下村孝太郎ト申者四年間米国ニ留学仕、一之有名なる理化専門校ニ於 卒業仕候のみならず、米  
国屈指之大学トモ可称ジョンスホブキンス大学ニ而老年間実旋〔旋〕之修業仕候而去臘帰国相成候次第、同氏ハ元ト敝校之  
教員ニ有之候、旁直ニ之を招聘仕、彼之ハルリス氏之寄附ニ関ハリ候理化専門校之教授ニ雇入申、化学拡張之事ハ一  
切同氏ヘ打任申候付、同氏も思之儘ニ致し度と種々工風を回らし化学を教授致し候事ならは生徒中ニ段等を区分し、  
其奥蘊を究むる者と又実地応用之生徒を養成致し度ものと被申、且京都ニ相開候専門校なれば何ニとか直接府下之実職

工業等ニ利益を及ぼし度ものと工風被致、化学上応用之学科を設置致し候事ニ付き、已ニ先日来東京ニ参り、其々之化学家ニ面会致し、又帰府之上ハ学科等ニ付き一応閣下ニ拝眉を願ヒ直接京都ニ利益を与へ候学科等ニ関シ閣下之御意見も拝聞仕度候旨、昨日帰西之路次同人ニハ金森氏と同伴ニ而大磯之小生寓所迄立寄申、参堂之事相談ニ被及候間、不取敢一書相認、同氏之所望も予め奉達高聞候間、同人義参詣候ハ、御引見被下候様奉懇望候、其後閣下之御健康ハ如何、又御家族様ニハ無恙被為在候哉奉伺候、乍憚御致声被成下度奉希候、右侍史迄得貴意、艸々敬白

一月十日

新島 襄

北垣明府殿

閣下

尚々、小生義ハ旧臘上州地方ニ参り例之大学之為一奔走を試ミ申候処、寒氣之為ニ侵され腸胃カタルニ罹リ志ヲ果タサス空く帰京仕候、爾来東京ニ而摂養、又二週間前より当地ニ参り休養仕又々将来之計を立居近頃漸々回復仕候間、乍憚御休慮被下賜度奉仰候、小生も如此病魔之為ニ毎々困難ニ陥り申候得共、尚魂情の少しく存するあり、廿三年の春を迎ふにつけて

いしかねも透れかしてひと筋に

射る矢にこむる大丈夫の意地

小生歌よみニ非らざるは閣下御承知ならん、御一笑



○尚々、下村氏之応用化学として設立仕度学科ハ先染工科・陶器科・冶金術等ニ有之候得共、未タ確定不仕候、右等学科設置仕候ニ付、閣下ニハ御配慮被下置諸事御引立被下候様奉願上候

805 一月十日 新島八重

⑤ 柏木義円亨

お前様ニさし上候分如何なる事あるも他人ニ御譲なさるな、其レハ上出来ト存候まゝ、又々右之様ニハ出来まじと存候間、秘蔵ニなしをき被下度候

七日之御手紙も昨夜拝見いたし、又御さし出の荷物も只今来着、未タ明けて見ざるもさし支ハなき事と存候、偕私も大磯に参り候より氣候の暖かなる故か段々丈夫ニ相成候間、御安心被下度候

又当地ニハ橋本先生之別荘有之、幸ニ先生も当時御出被成候間、御診察を乞ひ、充分冬の手当に怠り不申候間之亦御

安心、ペレー様よりの丸薬も参り、リチャルト様よりの御書状も落手相成候、御序によろしく、十四日に彼之三四人

御招き之義（ママ）け大出来と存じ大ニ喜び申候、彼之人々を驚かさん為ニ新年之和歌を大文字ニ認め、其々に札を付けさし

上候間、お前様へさし上候分は決して他ニ御譲りなく、往々は表具なしをき被下度候、別ニ一枚ハ内々横田ニ御渡し

被下、又他之一枚ハかの人々が所望ならは鬭になし、当りし者に御渡し被下度候、もし横田氏ニ当らは何とか申分を

立、他之三人之内ニ御譲り之方よろしかるへし

而してお前様ニさし上候分二階之御前様之部屋ニかゝけをき四人之人々被来候はゞ先二階へゴザレト通し被下候ハ、一しほ面白かるへしと存候、横田君ニハ其前ニ一枚御渡し被成、他ハ出しおかす銘々ガホシイト被申候はゞ仕舞置きたる一枚を取り出しクジビキにでもなし御与へ被下度候

御老母様ハ私と思召呉々も御大切ニなし被下度候

先は用事のみ、早々以上

一月十日

八重様

襄

若し公義も被参候ハ、成丈け丁寧ニ御取扱被下度候

北垣様、財部様、富永様などニハ御序ニよろしく

御序ニ財部様ニ御願私ニ村田銃ハ御もらひをき被下度候、其ハ多分梅垣様御承知ならん

例の誕生日に間に合せ度存じ、けさ思ひ立、私のあるほ（ママ）き昔の関東武士の如き歌を半切に書き申候まゝ池袋

様より御正し被下候分＊ハ逐而気分のみきたる時に半切に大書す可く候間、若し池袋様を御逢（ニ）ひ被成候ハ、右

之趣も御話し宜しく厚く御礼申上、荒々しき歌も大分優美なる風調に相成申呉々も難有奉存候、私の歌ハあらこなしの出来ぬあはれ馬の如し、此は少しく関東武士の如き風なりと申して可ならん

806 一月十一日

原忠美\*

⑤ 森中章光写

恭賀新年

本月一日発之貴書本日京都より送付相成奉拝誦仕候、陳者貴君ニハ非常なる御奮発を以て新発田伝道ニ御負担被成候よし、小生ニ於而は感泣天父ニ謝するのみ、貴君ニも已ニ御承知も可有之候通小生ニハ新潟県下之伝道ニハ兼而熱心之賛成家ニ有之、昨年も洋行計画之有之候広津君ニ無理ニ頼ミ新潟ニ参り貰ひ候次第、新潟も其後漸々調和好都合之よし、重々之至ニ奉存候、又長岡も兄弟方カ大奮発ニ而会堂新築之計画有之候よし、御地も定而好都合ニ相運候事ト存し真ニ喜居候、何卒此廿三年ハ千歳之一遇政事上之大進歩も可有之年ならば、希クハ我カ伝道上ニも一大進歩之現象ヲ呈出せしめ度候間、尚一層御地方伝道拡張之事ハ充分御負担被下度候、尤新潟全県之運動ニ付きてハ小生より過般広津氏迄一兩度詳細陳述仕置候間、右は同氏より御聞取被下度候、小生之貴君ニ切望仕候は第一ニ新発田之本城を強固ニなし、可成丈ハ地方之有志家勢力家ナドニハ御交際被成、我カ味方トなし、而して福音之活種を御播被成候様仕度候、又世人ハ中々吾人基督教社会之人間之如ク善良ニ又迂濶に無之、実ニシャープニ有之候間、吾人も矢張蛇之如ク智く有之候は伝道上必要之一元素ト奉存候、如此新発田之働を固め、次ぎに中条町ニハ已ニ御着手ニ相成居候得共、是レニハ充分之御勢力を被竭候様、決し而村上辺之一致会兄弟之手ニハ御渡し無之様仕度候、近頃聞ク所ニよレハ一致会ニハ合併論も殆ト中止破裂之体ニ至リ候故、是よりハ一層奮発我カ組合会ニ伝道上競争を試ミらるゝならん

と窃ニ聞及、又小生も左もあるならんと信し候間、吾輩も吾輩之手にて伝道し得へキ地方ヲ無慘ニ蚕食せらるゝハ余  
 リ無氣力之至ト奉存候、競争ニハ不及候得共、吾カ守ルベキ場所ハ充分保護致すは至当之事なり、依而中条ニハ是非  
 一之根拠ヲ速ニ築キ賜へ、可出来ハ公然ト組合会〔議〕講議所ト看板位ハ御懸ケオキ被成候方可然候、又村松、五泉等ニモ  
 時々広津君ト御相談之上御出張あり、充分将来之手ガ、リヲ作り置クハ甚必要ナリ、本年六月前ニ新発田ヲ初メ中  
 条、村松、五泉辺ニ確乎トシタル組合会之手カ、リヲ作り、自由自治主義ノ教会之分子ヲ播クハ一日モ猶余スベカラ  
 サル事ト存候、此六月ニ至ラハ明治学院ニハ二十名ノ邦語卒業生あり、大ニ越後辺ニ着手スルノ大計画ある由なれば  
 吾人も空しく彼輩ニ渡スハ不都合千万ナリ、我カ主之為ニ働クヘキ良田ヲ後レテ参ル他人ノ為メニ蚕食せらるゝは策  
 之決而得たる者ニあらず、来る者ハ拒ムニ及ハス、乍去吾人ハ先ツ先進者之特權ヲ有シオルハ伝道上甚好都合ト存  
 候、依而村松、五泉等モ速ニ着手シオクハ必用なりと存候、又広津君とも御相談ありて縦令一致会之伝道者彼地方ニ  
 入込ミ漸々我党之兄弟ヲ蚕食セントスルノ日ノ来ラサル先キニ、彼ノ信者連中ニハ此ノ自由自治主義ナル組合会之申  
 合書ヲ渡シオキ、固ク約束シテ之ヲ遵奉セシムル様ニナシオクハ甚必要ナリ、如此吾人モ新発田、中条、村松、五  
 泉、新潟、三条、燕、与板、長岡、小千谷、柏崎等之地ヲ固ク團結セしめば将来越後全国ハ勿論、此レより越中、石  
 川、東北之地方迄も伝道スルニ強キ團結隊カ甚必要ナリ、又越後地方ニ福音之種ヲマキ置カハ将来同志社ニ大学科ヲ  
 オキ之ヲ維持スル等ハ越後之合力を以テ実ニ容易ト存候間、貴君よ今を慮り又将来之大計をも御考被下、本年ハ著シ  
 ク御地方ニ主之光榮を顯ハシ賜ハン事小生ノ熱禱切祈ニ堪ヘサル所也、而シテ大体之運動ニ付広津君ト一切御相談被  
 下、大ニ御拡張有之度候也、何レ此夏ハ同志社よりも誰ソ御加勢ニさし出可申候間、屈指御待受此夏ハ一運動被下度  
 候也、早々貴答

一月十一日

新島 襄

原 忠美君

御写真ハ八重京都ニ止メオキ、小生迄送り不申不埒千万ナリ、小生ヨリ貴命ニ順ヒ一葉進呈可仕候

御県下運動費カ御地方ニ出来不申カ又伝道会社より御回送不申ハ御申越次第御加勢仕度候間、諸事広津氏ト御協議申上御申越被下度候也、小生ハ大学募集之為去十月中出京、十一月下旬上州ニ参リ病ニカ、リ志を不果、空〔しく〕帰京し、爾来病を相州大磯ニ養居候、小生之心情御洞察被下度候、又大学成就之為ニ頻ニ天父ニ御哀求被下度候也、白十字社之為ニ御尽力之よしサクセスあらん事奉望候、昨年之廿四五日之比ジョンブライト之スピーチ一冊クリスマス之進物として内国通運会社ニ托し、先ツ新潟ニ遣し候間、定而今比ハ御着手ならんト奉存候

807

一月十三日

小谷野敬三\*

①相州大磯　むかでや　④墨　⑥代筆

拝啓、陳者貴兄ニハ数日前無恙御帰国之由、重疊奉欣賀候、小生も早速参趣祝還ヲ表度存候得共、当時大磯ニ而宿痾

養療中ニ有之、其義ニ及兼候条、不惡御了知被下度、他日出京之上拝眉ヲ得、縷々御高談ヲ奉伺度候、東京ニハ小生之尤も信用致候小崎公道君伝道ニ從事被致候ニ付而は、貴兄將來之御運動上ニハ同氏ト万事御協議被下候様切望致候、右御帰朝祝賀迄、匆々拝具

一月十三日

新島 襄

小谷野敬三様

梧下

808

一月十五日

青柳〔新米〕\*

⑤森中章光享

有感 不破兄ニ御話しの詩ハ多分是れならん

徒仮公事逞私慾 恍慨誰先天下憂

廟議未定国歩退 英雄不起奈神州

此詩ハ御他見固ク無用

嘆明治隆世之書生

令色巧言字倭臣

不慮天下只慮身

此句ハ御注意アレ、小生  
ノ深ク志ヲ用シ所也

請看当世学才士

鍛練鉄腸有幾人

在大磯迎廿三年之春

歲月如流不待人

鷄鳴早已報佳辰

劣才縦乏済民策

尚抱壯図迎此春

同

いわかねも透れと放つ真すらをの

心の矢さき神のまに／＼

小生も三四日前より又々胃病ニ罹リ本日も尚臥床致し候得共、不破兄迄右書相認候序、只々近作ならへ立御一笑ニ奉  
呈候

一月十五日

襄

青柳君

机下

一月十五日

広津友信\*

⑤ 森中章光写、柏木義門写

新潟県下之大運動ニ付、可相成ハ是より外国教師ニモ特別之インテレストを置カセ、<sup>〔ラ〕〔カセ〕</sup>今之急勢にも着眼せず教  
会ヨリ出セヨ、自治ノ精神ヲ出セヨナド迂濶ノ事ヲ申居ラハ幾重ニモ今ノ危急ニ迫マリ、我進テ取ラされバ<sup>〔ラサレバ〕</sup>  
人カ来リ尽ク取尽ク<sup>〔す〕</sup>へきを陳ヘ、其上ニモ聞入れず<sup>〔す〕</sup>ミシヨンモニーも出さず、從而伝道之事業を妨クルトキ  
ハ速ニ小生ニ御相談アレ、小生<sup>〔不及作〕</sup>不及貴県下之伝道ニハ応分之御加勢可仕候、若しモニー不足ノトキハ御送金  
可申候、御遠慮アル勿レ、貴兄御自身ニ入用<sup>〔トキモ〕</sup>ノ此も御漏シアレ、御加勢可仕候、三条之伝道或ハ五泉ノ伝道ニ  
付、他ヨリモニー之出デ所ナキトキハ御相談アレ<sup>〔然シ第一ニミシヨネリーノ眠ヲ覚まし、彼等ノ手ニアルミシヨンモニーを出サシムルハ得策ナリ〕</sup>

此度は只々寸楮に止め置申度候、茲<sup>〔ニ〕</sup>に至急申上度事件ハ左記之如し<sup>〔ノ〕</sup>

一三条ヘ米国返リ之真霜廉<sup>〔吉〕</sup>氏を頼む事ハ御決行有之度<sup>〔候〕</sup>事、此事ハ本日原兄より之書中一寸記し有之候

是非宣教師ニ勧め<sup>〔メ〕</sup>新潟伝道之為ニハミシヨンモニーを使用否活用致され候様今日之時勢を明了<sup>〔瞭〕</sup>ニトキ、彼等之眼を<sup>〔ニ〕</sup>

明かしめ、克々注意し奮発被致候様懇々御勸有之度候、何卒<sup>〔ヘンテ〕</sup>忍而外人ハ蔑視せず<sup>〔ス〕</sup>分カ<sup>〔ラ〕</sup>サル時ハ分カル迄

御説<sup>〔キ〕</sup>被下、是非<sup>〔共〕</sup>トモ此大運動ニハ彼等之手ニ而自由ニ相成候モニーハ<sup>〔テ〕</sup>尽く使用仕度候、是迄新潟之ミシヨンハ全

敗ト云トモ可なり、是より願クハ全勝之運命を期し度候<sup>〔ラ〕</sup>



一原氏ニハ岡山之福家氏を五泉ニ招ク之御考なる由、此レも是非御決行有之度候  
一中条ハ充分信徒之心をツナギ組合会之仲間ニなしをき度候間、其目的を以而該地ハ御固め被下度候也、又可成ハ可  
然人物を該地ニ得度もの也

一此上ハ柏崎ニ線路ヲ張ル事なり

君ハ定而御多忙ならん、一々小生之書面ニ御回答ニ及ヒ不申候、御回答なき時は君之御多忙なるを知り申候、小生も

十一日之夜より又々胃カタル之為ニ悩まされ候得共、最早大分よろしく候、御安心、松田順学氏ハ此度大奮発ニ而福

島県下郡山ニ赴き、先三春、須加川辺ニ着手スル事ニ相成可申候、此レハ小生ノ主唱ニ関ハリ申候上州之不破、杉田、杉山之三兄長野視

察之為去十日より出張之よし、長野之伝道も是より相初まり申ヘシ、大久保氏も大奮発近々熊谷ニも着手之計画な

り、今日ハ先是迄なり

一月十五日

友信兄(今ヨリ雪深ク寒風膚ヲ衝クナラン、冒寒ニセヌ様精々御用心々々々)

裏

昨日ハ京都ニ而小生之誕生日ト申事ニ而八重カ横田、浜田、波多野、古賀之四人を招ク之計画なりし、又不日

五年生も皆々招ク之計画も為致オキ候

◎君之後任ニハ誰なるか、是レニハ大ニ心配いたし居候、新潟も粗万一一新し、是より諸事緒、就かんとの際

ニ当リ広津兄ニハ最早暇を乞ハネバならぬ事と相成、可然其後任も見えず如何可為也、一之大困難事なり、当

年之卒業生中ハ青木ト寺沢兩人ノミ、寺沢ハ甚不適当之人なり、左レハ青木より外他ニ老人もなし、青木氏ハ

大分子供らしき所有之候得共、氏に頼むより他ニ上分別ハ無之候、兄ハ如何被思召候也、又他ニ有之候人物中

誰ソ御心当リハ有之候也、克々之ヤリ手カ、然ラサレハ余リヤリテニ無クトモ、教会ニハ全ク自治体（ハノ）のものを

有し自動（セシメ）せしめ、徐々ニ之を御し得るタケ、人ならば可なり、此アトノ方ならば青木氏も当り得へしと存候、

貴兄ハ如何御考を御漏（ら）し被下度候、沢田氏を招くならば速ニ御手順を（為）なすに如かす、先同氏を勧め同氏之承

諾を得、然る上教会之後任者として御勸ありてハ如何

ニ（ニユーエル）エアル先生より来状あり、近頃帰国之小野氏を君之後任として如何と相談も有之候得共、小生ハ少々疑ひ

居申候、同氏ハ十五年間米国ニ（有）ありし人なれハ日本之事情ニ（疎）迂く、当分不適當たるべし、同氏ハ少しも日本之

文字もなく手紙も書けぬ様子なり

新潟、長岡、新発田、三条、燕、与板、村上、五泉、村松、柏崎、小千谷等之戸数ハ御序之節御知（ラ）セ被下度

候

原兄より懇書出来り、小生之送りし書籍之礼を厚く申来り候、又同氏ハ中々新潟県下之伝道ニ熱心なり、小生

も同氏之相談相手と相成、同氏之目的を達し得る様加勢可仕候

一月十五日

河波荒次郎

①相州大磯 百足屋方 ②群馬県下上州 富岡基督教々会 ④墨

過日本原君カ来磯之上貴君御一身之事ニ関し種々御談し有之候間、其翌日杉山、杉田之両氏ニ一書を送り貴君之為ニ速ニ増給之所分を可為様工風被致度モノト申遣し、又先日不破兄も当所迄被尋候間、富岡ニ而至当之取扱を致され<sup>(ハヤ)</sup>ば貴君藤岡ニ趣かれ、且増給之取計等被致候而は如何ト申置候間、三兄長野行より帰県候ハ、直ニ貴兄御一身之為ニ御工風可申候間左様思召相成、新潟行ハ御断念被下度候、小生之木原君より承り候所ニよれば新潟之有志家カ貴兄を御雇被申、改進黨之勢力を張、又傍或ル人物ハ己レノ撰挙セラるゝ為ニ之を為す云々ト、万一貴君カ右様之為ニ御越し被成候ハ、小生ハ貴兄之為ニ決し而取らざるなり、改進黨之主義之為ニ働ク<sup>ヨリモ</sup>より寧ろ改進黨中某之撰挙之為ニ働クモノ、如クニ見ユレハ、某<sup>其</sup>ノ燈<sup>(提)</sup>持ト名称セラル、モ避クベカラサル事実カト存候、苟モ主ニ在リ真之自由ヲ尊ミ一個人之資格ヲ重スルモノ、取ル所方針トハ思ハレ不申候間、貴兄ニも屢御反省アリテ、可相成ハ主之為ニ彼上毛地方之人民を導き真正之自由を与へ、将来可為之元氣を御養ヒ被下候ハ、重々之事ト奉存候、右得貴意度、勿々拝具

一月十五日

新島 襄

河波荒次郎君

尚々、本文ニも申上候通此度は貴兄之増給を計候事ニ候得共、万一事成ラサル日ニハ小生ヨリ応分ノ御加勢ハ

可仕候間、可相成ハ断然新瀉行ハ御断念有之度候也、尤不破兄ニも近々長野ヨリ帰橋可仕候間、小生より申遣速ニ何ニトカ工風可被仕候、小生も一昨々日ヨリ又腹痛ニカ、リ本日も尚臥床仕居候

811

一月十五日

木原勇三郎\*

④墨 ⑤写真（鎌谷襄氏所蔵）

貴書拝誦仕候、陳者其後小生よりハ別ニ河波君迄ハ御文通ハ不仕候得共、御面会之翌日直ニ上毛之兄弟共ニ申通、河波君之為ニ断然之所分を可被成旨申遣候間、定而其手順ニ取懸居候事ト奉存候、小生も同君之為ニハ何ニトカ工風ハ可致間、貴君よりも同氏新瀉行ハ是非共御差止メ被下度奉希候、小生も熟考仕候に同氏之此挙ハ先ツモニ之為ニ動クモノト相見、其ノミならず自身カ改進黨中之耆人と被成、一個人之資格を備ヘ運動セらるゝハトモアレ、他人之撰挙之為被雇而奔走するか如きハ独立自由家之進而取るべき所ニあらざるものと相認申候、尤同氏将来之事ハ尚々重ネて上毛之兄弟共ニ申遣し、速ニ所置を付けさせ可申候間、貴君よりも同氏へ新瀉行ハ断念セト御忠告被下度奉切望候、右為貴答、早々拝具

一月十五日

新しま襄

木原勇三郎君

尚々、小生よりも直ニ同氏へハ老書相送可申候

812 一月十六日 渋沢栄一

⑤写真

寸楮拝啓仕候、陳者貴殿御来磯後早々御尋申上度存居候処、其後少々加減よろしからず、特ニ此三四日間ハ胃カタル之為臥床致居候次第ニ而、今尚参館を不果ハ遺憾千万之至ニ奉存候

伝聞仕候に貴殿ニハ過日一寸御帰京被成、其后チト御不加減之よし、如何御起居被成候也、拙書持参之永岡氏迄御漏し被下候様奉切望候、又近々御出京之御企も有之候趣なれ共、可相成御休養被遊候方上策ト御勸申上候間、御病余強き御運動あるは決而将来之御為ニ相成不申ト奉存候

当地之医師某より承り候処ニよれば、御滞留之瀧竜館近傍ニハ昨年ナドハ大ニ腸窒斯流行致候よし、但シ其源因ハ近傍之飲料水不良之よしに候ハ、御使用之飲料水ハステーション近傍ニ有之井戸之清水を御取ヨセ被成候方御安全之策かと奉存候、老婆心之至御注意迄ニ一寸申上置候也、先者小生不参之説明旁為御見舞得貴意度如此候也、艸々敬白

一月十六日

新島 襄

渋沢栄一殿

侍史

一月十六日

横田安止

④墨

兼而屈指待受申居候貴書俄然飛来大ニ鬱屈せる精神ヲ慰め申候

拟御申越之同志社大体ニ関する事共等ハ尚此上も精密ニ御勘考被下、其弊害之生する所、又除かすん〔ば〕ある可からざる所、教科之改良すへき事、教員之通弊等ハ将来も無御遠慮御通知可被下候、又小生一身ニ関する事も御カマイなく御通し被下度候、何分学校カ同志社ニ限ラス何レにも小刀細工之起り候は大ニ困却仕候、殊ニ我校ニ小刀細工カ當時之通弊ならん、然し生徒之内何ニとなく元氣回復之兆顯出せしハ可賀美事と云つへし、下村氏も（に對し）生徒中之意見ハ如何、其インフルーエン〔ス〕ハ如何預り知申度候

御説之如く改良主義之生徒中多くハ順風に駛するか如し、却而油断を為すの憂あり、余ハ基督教徒ニ對し著しき迫害之起り来ツて吾人之精神ト骨髓迄も一新鍛練せられん事を望む、吾党之中近眼ニして小成ニ安する者多く、又困難ニ逢ハ、鈍挫し易く、実ニ大事ニ當り得ざるへしと大ニ痛嘆致し居候、大概ニ申セハ悠々無鈍着ニ日を送る者多く、何之倣能もなく、アンビションもなく、アスピレーションもなく、敢為之元氣もなく、将来之目的もなく、ヌラヌラ然たる骨なきナマ子之如し之者多し、ナマ子も決而馬鹿ニハ出来ず、タ、ケハ固くなるの一奇事あり、此輩ハ叩く時ニハ固くなり可申か、兎ニ角校中ニ元氣ハ盛に相振候様切望致し居候、一タ田中賢造氏を聘し九州男子之真想〔補〕「并ニ時世之逆潮ニ立チオル保守党ノ書生中ニ非常ニ元氣アル事」を語せ度ものなり、貴兄宜しく同意を募り、同氏をして一

夕鉄鞭之如き弁ヲ振ヒ全校を叩かしむるハ大ニ為めになり可申候、御詩之趣向ハ奇妙々々、詩人之詩に非らず丈夫の忼慨なり、小生之近作も御目ニ懸申へし

ロス氏之御貸申置候書籍ハ御済ミならハ八重に御話し、上州前橋曲輪丁不破唯次郎君迄御送り有之度、又近着之書其

ト同じき者二冊之内尅ハ広津友信氏、尅ハ岡山之阿部磯雄氏に御送り被下度候

他之小冊子ハ先貴君之御手ニをき御一覽ありて不苦候、同志社教会之規則出来候ハ、十四五部ハ小生方へ御惠投被下度候、又同志社と同感之諸会へハ御送有之候も必用かと存候、先は用事のみ、艸々拝具

一月十六日夜

襄

安止君

尚々、小生も十一日之夜より又々胃カタルノ為ニ腦（安）まされ本日尚床中ニ在り、然し大ニよろし御安心、未タ

金ハ出来ず、小生ハ如此屢病ニカゝれり、世人落胆して余豈落胆せざらんや、然れ共余は元氣を繋なぎ、決して而落胆せしめず、又死に至るも後悔せしめず、病床に在り尚泰然として進取之計画を為して止まざらしむる者

ハ、一ハ活ケル天父ノ皇天に在すあり、一ハ愛する生徒の同志社ニ在るあり、余ハ幸ニ此ノ二ツノモチヰ（安）ッ  
ポワル power を胸中ニ抱ける如何ぞ、些少之事実之為ニ輕々ニ撓屈すへ（け）ん也

◎大磯に参り大に閑散之身となりしより関東、北越、奥州之伝道案を艸案し、当時已に着手し初めたり、近頃ハ関東之地図ハ尽く暗記申居候、是レ大磯ニ而病に伏すも小生之心事をして多端ならしめたる一事なり

（今屈強ノ伝道者十人ヲ得ハ上州、野州、武州、信州、越後、福島等ノ伝道ハ小生ノ計画ノ通りニ運ヒ行カン



「皇天何ソ我輩ニ奮発家ヲ賜ハサル

長江千里碧漫々 沃野饒田東北冠

地経一葉所君贈 展向南窓仔細看

仔細ニ看ルモノ、心情御遙察アレ

右題広津君所贈之越後全図以謝其好意

越後之生徒書生に御示し被下候而も不苦候

令色巧言学佞臣 不慮天下只慮身

請看当世俊才子 鍛練鉄腸有幾人

右嘆明治隆世之書生\*

詩人之如き奇麗なる詩ハ少しも出来不申候、呵々々々

貴君\*\*\*ニハ神学生中奮発家ナキヲ嘆セラル、ニ似タレトモ、彼輩ヲモ決シテ度外視シ賜フ勿レ、願クハ邦語科中

志方等、又英語神学生トハ成丈ケ親密之御交際アリ、将来伝道ノ必要ナル事等ハ御談シ、彼等将来ノ方針ニ付

キ彼是レト躊躇セサル様御勸オキ被下度候、彼等ノ内ニ基督ノ靈ヲ以テ燃ヘ揚ルカ如キ熱心家ナキヲ遺憾ト

ス、去レトモ神ハヨルダン河辺之石ヨリアブラハム之子孫ヲ起リ得ルト迄被仰タレハ、至難ノ事モ神ハ吾人ノ

為メニ為シ賜フ事ト確信シ、小生ハ尚彼ノ先生方ニ向ヒ失望ハ致サス、一旦神ノ靈彼等ノ心ニ入り込ミ勵クト

キハ、彼等モ亦意外ノ現象ヲ顕ハスニ至ルモ計ラレス、貴君敗鼓ノ皮迄モ決シテ捨テ賜フ勿レ、生ハ是ヨリ全



カヲソ、キ関東ノ伝道ニ一臂ヲ与フベシ、一致会ノ連中ハ徒ラニ延ヲ西国上方ニ垂レ、関東ニ於テ長足進歩ノ計ヲ為サ、ルニ似タリ、コソミミ片ハジナル千葉県、茨城県ナトニ手ヲ出シ、先ツ上州ニ於テ全ク後レヲ取リ、野州ニモ手ヲ延ハサス、越後ハ高田丈ニ止マリ、信州ニモ花々敷運動ハセス、福島モ手ヲ出シテ再ヒ中止シ、関東ノ粹トモ称スヘキ此各地方ニ手ヲ延ハサス、却テ関東ニハ甚手薄ナル吾カ党ノ為メニ要地ハ大概占有セラレ、今日ニ至リ初メテ目ヲ覚マシ吾人ノ線路内ニ入り込マント彼是計畫ヲナシオル由近頃吾人ノ耳朵ニ達セリ、依テ我カ輩ハ本年コソハ充分関東ニ力ヲ尽シ我カ線路ヲ固タメ、上州ハ益内部ヲ整ノヘ、其レヨリ武州ニ打出ントス、大久保氏武州ノ先導ヲナスナリ、野州ニハ此夏ヨリ栃木全町ヲ占有シ中心トナシ栃木全県ノ運動ヲ初メ、信州ニハ仏ノ本山ナル善光寺ニ飛ヒ込ミ仏徒ノ目ヲ醒マシ、大喝一声活ケル神ノ福音ヲ人民ニ入シメントス、越後ニハ広津、原、時岡ノ三氏大ニ熱心ニ働カレ先越後ノ要点ニハ大概手クバリヲ為シオレリ、此夏ニ至リ同志社ヨリ三四ノ書生諸氏カ此等ノ各県ニ趣キ加勢ヲ与フレハ大ニ関東ノ計畫ヲ進マシムベシ、鄙見ニヨレハ関東ノ人間ハ随分元氣アリ、関東ノ地ハ自由ノ活種ヲ播ク為メニハ良田沃野ナリ、一挙シテ関東ヲ得ルハ今ナリ、本年中ニ大概ヲヤリツケネハナラザルナリ、此レ予ノ関東伝道策ナリ

壮図却促男兒涙トハ人ナキヲ嘆シタルナリ、此書ハ柏木君ニ御示シ被下候モ差支ハ無之候、又同君ト御相談之上、生徒中関東ノ加勢ニ来テクレソウナル人々ヲ多分ニ御コシラヒ置被下度候

814 一月十七日

原忠美

①相州大磯 百足屋謙吉方ヨリ ②新潟県下新発田寺町 ④墨

再度の御書面を載き貴兄之新潟県民ニ対する御愛心と御決心ニハ実ニ感し入申、小生も該県之人民を愛し候所より貴兄之御決心を喜び、深く天父ニ拝謝致し涙を添へて拝謝致し候也

扱御申越之通三条は一之要点と存し候間、是非々々ミシヨン之方も御都合被成下、例之真霜君ニハ該町ニ被趣候様御断行有之度候、又五泉へも岡山之福家君を御招き被成、永久之事ニ相成り不申候ハ、セメテ一二年間も加勢に被参候様御勧ありては、右ニ付キ御地之現況と又々我等より速ニ着手セサレハ不遠他之ミシヨンより飛込ミ来り、新潟地方ハ充分蹂躪せらるゝの恐れ等も御説き明かし、一日も早く援兵を御招き被成候方可然ト奉存候

新潟県下ハ今カ固メ時なり、今速カに吾人之手を以而団結せしめされば、他日種々之人物カ入来り鹿ハ誰の手ニ落るかも知れざる程の惨状を呈するニ至らん、夫レ伝道は尚戦争之如し、時機を見而進む甚肝要なり、進而取り、取りて守り、守りて而して后其好果を主に呈する也、故ニ早く新潟県下を団結せしむるは天の吾人ニ新潟全県下伝道之大責任を与へ賜ふたるなり、然るを吾人ニして悠々不断時機を失ひ、他人をして侵入せしめ兄弟相争ふの惨状を現出するに至らば、策之決し而得たる者ニあらず

貴兄よ 御地之宣教師方とも御計り、殊ニ広津兄と御相談被成、三条、五泉之事ハ是非決行せしむへし、又柏崎着手之事も手後レニ不相成様御注意被下度候也、貴兄方之御運動費等ハ御入用之節ハ、御申次第小生よりも御加勢可仕

候、早々以上

一月十七日

原 忠美兄

襄

尚々、御働きの際御身ハ又々御大切ニなし被下度候、伝道士カ病氣をしてハなり不申候

○中条町ハ貴兄御負担充分御固メオキ被下度候、願くハ自由なる福音の活種を越後之原野ニ播き賜へ、繁茂せし

むる者ハ神なり

小千谷町ニハ未タ御着目ハ無之候哉、奉伺候

815 一月十七日 新島八重

⑤ 柏木義門写

米国より参候菊苗ノ上ニシツカリワラをカブセ寒氣の為ニ傷まぬ様なし被下度候

太陽か只南よりあたる様なしをき被下度候

定而今日ハ御文来るへしと待居候に、夕景に御文参り拝見致候、先つ内々ニ而私之誕生日ニ御祝ひ被下、母上様ニも

御機けんよろしきよし何ニよりと奉存候、又四人之兄弟も被参大満足之よし、又クジ之事ハ横田ニ当りたらは大笑ひと存候、念之為申上候に、当りたと申す事に而私の考通り又事か出来致し大ニ腹もちりて笑申候、此時の横田君の笑顔が見タカツタト申居候

私も十一日の夜少々腹痛致し申候、此レハ此日外ニ出て風を引候訳なり、俄カニ胃カタルを起し候なり、もふ今日ハよろしく候

大磯と申処ハ氣長先生計多く有之、主人ハ夜一時にならぬと何の用かなくとも寝ねず、朝ハ大ネボウ、宿之下女共も朝ネボウニ而七時ニなれ共中々起きず、手之イタクナル程タ、ケトモ来り不申、一寸用ヲ申付而も氣カ久くして少しも急ギ不申、呼ぶ時ニ返事をなせ共直ぐに来らず、俄カ病氣に医者を呼ひにやれ共夜は寝て居りて来らず、朝も直ぐ往クト申しテ半日もかゝり、来ても悠々閑々暇ノ多きにハかんしん致候、長岡も顔も長く氣も長し、余り急ぐ事ハ大不得手なり、私独が心急カワしくあるもハタ之人々ハ皆々氣長先生なる故、折々かんしやくの起る事有之候得共、起きたからとて是等之人々の氣ハ短かくはなり不申、怒レハ尚ドキマキ致し事力運バス、イヤいや短氣ニ生れたが親譲り、我れの不幸ダト独自ら明らめ申居候

(譯)

此度は不足税のかゝらぬ様可仕候、横田君参られ候時御渡被下度候

一月十七日朝

八重さま

裏

816 一月十七日

時岡恵吉

⑤ 森中章光写

恭賀廿三年之新正

貴兄よりハ早々新年の御祝詞御送附被成奉多謝候、小生よりハ其後案外之御不音申上候条御海潮被下度候、小生も大磯ニ参リテより大分よろしく候処、又々去十一日之夜胃カタルを発し、尚病床ニ伏し候次第ニ有之候ハ、遂ニ乍本意も御無沙汰勝ニ相成申候、却説御地之伝道模様ハ益よろしく兄弟方ニハ大奮発被成、已ニ会堂建設之御計画も初まり候よし大慶之至ニ奉存候、苟も基督之信徒たる者ハ己自身を清く神之御手ニ捧け、我カ心を以て神の永住し賜ふ宮殿となしをるハ申迄も無之候得共、御地ニ而兄弟方カ熱心会堂建築ニ一致なされハ実ニグードサインと可申候間、小生も御同様に喜ひ申候、右建設は勿論市中之伝道近傍之播種之点ニ至る迄も兄弟方ニハ飽迄も一致協同御地方ニ於る主之御目的を被達候様御尽力あられん事小生の切望して止まざる所なり、小生ハ元来長岡ニ対し大なる希望を抱き居る者なり、長岡之地理然らしむるカ否々長岡之人民なり、維新之際、長岡人カ頭角嶄然東北ニ於而其氣骨を顯ハし、破竹之勢をナシ天下を蹂躪した薩長之兵を迎へ、彼之一孤城を以て彼等を支ヘンとせしハ其豪胆思ひ見るべき也、余ハ深く如此氣骨ある豪胆家を敬愛する者なり、歴史中余之心を動かす者ハ如此豪胆家なり、戊辰之際長岡之城中ニ如此豪胆家ありし事ならむ今尚其遺族なからんや、余ハ其遺風存せるの然あるへしと確信せり、余已ニ此想像あり、此想像あるカ故ニ長岡人ニ対しシンパセーを持つ事茲に久し、今御地兄弟方之大に御奮発ありしを承り欣喜措く

① 貴名ノ傍ヲ見ヨ

能ハす、事之速ニ竣功センを望み、乍不及小生も貴会堂建設之為にハ応分之力を尽し度候間、此儀ハ貴兄より兄弟方ニ御通知被下度候也、小生尚床中ニ在リ相認候書狀ニ候得ば前後錯雜只感する所を記し来りたるのみ、艸々拝具

一月十七日

新島 襄

④小生ハ明治十五年初メテ会津若松ニ遊ヒ官軍之為メニ陥イラレタル孤城ヲ一周シ、又生キ残リタル人々ニモ面会シ、当時ノ有様ヲ聞キ、会津藩人ノ如此モ宗家徳川氏ノ為ニ官軍ニ抵抗シ、白骨ヲ原野ニサラスモ願ミサルノ勇氣ニハ大ニ感服致シ、其時ヨリ会津人ニ向ヒ非常ノシンパセーを顯ハシ、其レヨリ該地伝道ノ事ヲ主唱シタリ

但シ余ハ氣骨アル人間ヲ稱賛スルナリ、会津ヲ稱賛シテ官軍ニ抗スル訳ニハアラサル也

### 時岡恵吉兄

尚々ニユエル先生ニ御面会被成候ハ、小生ハ此十二日より胃カタルノ為メ悩マサレ今ニ床中ニあり、先生より之御書面ニハ未だ御返答も不申上候段決而不惡思召被下様御申陳、又右ニ付東京之小崎君などニもよく／＼相談可仕候と申上被下度候

貴兄ニハ充分諸事ニ御注意被下、真卒清潔然之伝道者之資格を備へ、懇切ニ丁寧ニ忠実ニ主ニ於ける忠僕として一挙一動も尽く主の栄光を顯ハシ賜はん事小生の切望する所ニ御座候

少しく快氣ニ趣き候ハ、貴兄之為ニ例之拙筆を振ヒ御進呈可仕心組ニ御座候

長江千里碧漫々

沃野饒田東北冠

地経一葉所君贈

展向南窓仔細看

右題広津君所贈越後全図以謝其好意

歲月如流不待人 鷄鳴早已報佳辰

劣才縱乏濟民策 尚抱壯圖迎此春

右在大磯迎廿三年之春

又

いわかねも透れと放つ大丈夫の

こゝろの矢さき神のまゝく

817 〔一月〕 新島八重

④墨

ケットウカ入用故、一昨日長岡を横浜ニやり二枚ツ、キ之白ケットウ一枚かわせ申候、此レハ只六円なり甚安し、大フトンも一枚こしらひ可申候

お前様関東に御越之事ハいまちと暖かに相成候時カよろしかるへし、私は只々母上様之事のみ心はい致し居候

未ダ慥カに分り不申候得共、公義大将ハ二月中ニハ奈良を辞し信州善光寺即長野ニ参る事ニ決すへし、関東へ参るか同氏之為ニハ相成可申ト存候

〔別紙〕

尚々、例之米国より参候金子ハ、私関東ニ而一工風致し候間、為替ハ御送不申候、此大磯ハ冬分ハ神戸より暖カニ、夏ハ海水浴盛なる場所故人々カ別荘を立、土地ハ東京之人々カ買ヒ揚ケ、今ハ町之ヨキ所ハ坪三円位なり、茲ニ高見ノ安地面大堀出もの有之、二百坪と申から当りて見たら四百坪あり、乍去二百坪を一坪一円三十二錢之割に売ルト申事故コンナ安キ地ハなし、今ステ売にしても五六百円に相成可申なり、其地を此度二百八十五円ニ而かい求申候、此夏ニなり売ラントスレハ二円ニハ大丈夫参り可申候、左スレハ四百坪を二円ニ売れハ八百円ニ相成可申候為替は横浜ニ而替へ五百二十円ヨに相成申候、三百円ハ地所ニ入り申候、余り二百円ハ先私之手許ニツカヒ、後トデウヅメ可申候、地主ハ借金之為ニ右様安くうりたるなり、此三百円ハ八百円ニハ慥ニなり可申候

〔別添図〕

「大磯之家之つ」



兼而貴君之案ニ関ハリ候同志社教会之新規則等ハ其後如何相成候ヤ、ナゲヤリニ相成不居候ヤ、既ニ横田氏ニ

818

〔二月

広津友信〕\*

⑤ 柏木義円写



モ申遣し其注意ヲ促置候間、多分 *recess* 被致候事ト存候、同志社教会之運動殊ニ五月之總會ニ持出し合併非合併ヲ決スル事ニ付キ、確乎ト動カサル方針ヲ取ラレ候様仕度候、此レハ横田氏ヲシテ有力者ニ尽ク前以テ同意セシムルニ如カス、貴君より御相談アレ

返ス／＼も新潟教会全員をして充分自治自由自立之風ヲ徹頭徹尾賛成セシメ貴族の分子ハ頭ヲ挙ケシメサル様御薫陶有之度候、又三条、柏崎之伝道ニ関シ貴兄充分ニ其途ヲ御開キ、六月以前ニ該地有志家之心ヲ御繫キオキ被下度候也

小生ノ如此屢之御文通申候事ハ成丈ケ他人ニハ知ラシメサル様御注意アリタク候、彼ノ合併賛成ノ人々ハ恐クハ妙ナル感情ヲ惹起サントモ計ラレス、御注意々々々

此レハ近作中上出来ト存候、君如何トナスヤ

長江千里碧漫々 沃野饒田東北冠

地経一葉所君贈 展向南窓仔細看

○(涎モ多分ニ相流申候)

右題広津君所贈之越後全図以謝其好意

年次未詳

819

一月四日

中村栄助\*

④墨

貴書拝読仕候、何レ先方へハ兩三日之内都合いたし相訪ヒ可申候、御手数之段難有奉謝候、早々頓首

一月四日

中村栄助兄

新島

820

一月十六日

河原林義雄

⑤ 複写（河原林孟夫氏所蔵）

今朝御光来之处、何之風情もなく恐縮之至ニ奉存候、今午后金森氏別紙之通申参かね、不取敢御知セ申上候、早々拝具

一月十六日

新島 襄

河原林義雄君

821

一月十九日

十字六四文\*

④ 墨

新年之吉慶御渾家弥御多祥御加年之よし珍重奉賀候、随而小生方も一統無異新年を相迎候間、乍憚御休意被下度奉祈上候、新年ニ入り早々御祝詞御投与難有奉謝候、右御答礼旁新年之御祝儀申上度如此候也、恐惶敬白

一月十九日

新島 襄

十字六文殿

尚々

〔後欠〕

822

一月二十四日

鎌田助

④墨

今朝小生義出校之上、別紙之通諸君ニ御通可申候處、出校仕兼候間、乍御手数別紙之通食道ニ而一応諸君ニ御知し被下、其上食道ニ御張出被下候様仕度此段奉願候也

一月廿四日

新島 襄

〔奥宛名書〕

「第二寮

新しま襄

鎌田 助君

」

823 二月二十五日

三輪振次郎\*

⑤ 複写（秦孝治郎氏所藏）

今晚祈禱会を御導被下候様奉願度候、尤今晚ハ一人教会ニ入る事を望む者有之候間、其試験をいたし度候、其積ニ而祈禱会之所<sup>（カ）</sup>ハイツモより少々短かくなし被下度候、右之段得貴意如此候也

二月廿五日

新しま襄

三輪振二郎兄

824 三月七日

伴直之助

② 出雲丁老番地 ⑤ 写真

貴書一通正ニ落掌仕候、御懇切之程鳴謝之至ニ不堪候、明朝ハ御待可申候、勿々貴答

三月七日

新島 襄

伴直之助様

825

三月二十七日

北垣国道\*

⑤ 森中章光写

御受書

御書状

老通

右御送附被下慎而落掌仕候也

三月廿七日

北垣国道殿

侍史

新島 襄  
印

826

五月十四日

北垣国道\*\*

④ 墨

御芳書

老通

鉄道問答

二冊

右落掌仕、拝眉之節万々御礼可開陳候、艸々頓首

五月十四日

新島 襄

北垣知事殿

閣下

827

五月三十日

北垣国道

②「執事」

④墨

貴墨御遣しニ相成、正ニ落手仕候也、拝復

五月三十日

新島



828

六月三日

同志社寮長\*

⑤ 森中章光写

広津友信

右は用向有之拙宅ニ被参門限ニ遅延候間、此段御届申候也

六月三日

新島 襄 印

寮長

御中

829

六月五日

い葉らき也\*\*

⑤ 森中章光写

今日夕六時比二人連レニ而晩めしを食する為参上可申候間、なんぞうまき御馳走を一人前五十錢位の所ニ而御用意被下度候、尤私之事故酒ハのみ不申、只飯計に御座候間、めしの御馳走ニよろしきものを御差出被下度候也

六月五日

い葉ら幾也様  
御店中

寺丁  
新しま裏

830

六月二十一日

同志社寮長\*

⑤ 森中章光 写

遅刻届

保高 正記

木下 金太

大和田猪平\*\*

新島 襄  
④

右者拙宅へ被参、門限遅刻ニ及候間、此段証明旁御届申上候也

六月廿一日

寮長御中

831

七月七日

竹内雄四郎\*

⑤ 森中章光写

老母義昨夜より少々快カラサル由ニテ胸部ノ下ニ何ニカチクミト痛ヲ覚候由、食事もス、ミ不申候間、乍御苦勞此人力ニ御乗し御来診被下候ハ、多謝之至ニ候也

七月七日

新島 襄

竹内雄四郎兄

832

七月十四日

徳富猪一郎

① 「岡部広君ニ托ス」

④ 墨

岡部広君を御紹介申候也

七月十四日

徳富猪一郎兄

新しま襄

833

七月十九日

北垣国道\*

②「乞御親展」

④墨

大学医学部

卒業生

斎藤 章

基督教徒ト自称シテ政談ヲ為候漫遊乞食、本日拙宅ニ相見ヘ、今夕尊館ヘ参上致スト申居候間、小生ハ差止置候得共、自然参堂候ハ、御面会之価ナキモノト存候間、此段御通知申上候也、敬白

七月十九日

新島 襄

北垣知事殿

閣下

## 八月二十四日 三輪振次郎\*

⑤ 森中章光写

過般金沢迄御安着之御報被下、又海陸無恙御帰郷之趣御報告ニ預リ安心仕、且御病人様も日増ニ御快方ニ御趣き被成候よし喜欣之至奉存候、其後は尚一層御平癒ニ趣き賜へと推察仕候、小生も早々御返書可呈之处、御存し「之」通下嵯峨村ニ避暑ニ参リ居リ、昨日帰京仕候次第故、如斯も遅延ニ及候段臥而御海容を奉希候

却説当地も逐々冷氣相催最早学校も来月十三日は開業相成候間、其比願くは御病人様も御平癒相成御来校ハ相成間敷哉、乍去可成丈御加養有之又再発之無之様仕度候、且愛兄ニは此来秋ハ如何被成候哉、定而御帰京トハ存居候得共此段も奉伺候、近来ニ至リ我教会之眠リ参、何か不振有様有之甚心痛罷在、御帰校ニも相成候ハ、篤ト御相談を遂け、是よりは一層我校内ニも基督教之精神を振興し、弥々主之御光栄を輝シ度存居候間、是非共御帰校右之為一層御尽力有之度奉懇願候、右之段得貴意旁々為貴答、如此候也、頓首

八月廿四日

新島 襄

## 三輪振二郎愛兄

尚々、御令弟御従弟様方へよろしく御致声被下度候  
御蔭により梨子か沢山結果いたしました

835

八月

鎌田助

② 西京府下相国寺門前町 同志社英学校 ④ 毛筆（赤インク）

貴書拝読仕候、陳者木村氏八幡行之御談判相出来候旨、御申越被下喜欣之至ニ奉存候、就而は伝道入費等御申越被下承諾仕候、乍御面倒も此別封ノ書状御持参被下、愚妻八重より金七円御受取、木村氏へ御渡し別ニ兄之御手許ニ残り居候金若干ト共ニ木村氏へ御渡し被下度奉存候、且右七円御受取被下、一通之御受取書八重迄ニ御渡し置候様仕度候、且木村氏発足之節兄之一之添書御渡し相成候様仕度候、右為貴答早々如此也

八月□日

新島襄

鎌田 助君

836

九月十二日

山口通\*

④ 墨 ⑥ 代筆

生ノ不遜ヲ厭ハス不徳ヲ願ミス、幸ニ一書ヲ投セラレ深切至ラサルナク、丁寧尽サ、ルナク、生ノ徳ヲ立ツルノ固カ

ラス、道ヲ脩ムルノ厚カラサルヲ譴ム、生不敏ト雖、敢テ兄ノ訓誨ヲ奉載セサランヤ、過ヲ知リテ之ヲ改メス、非ヲ見テ之ヲ蓋フハ生ノ最モ慚ツル所、兄ノ如キハ一面識ノ人ナリト雖、幸ニ言ヲ寄セラレ生ノ不徳ヲ譴ム、生一読汗背ニ流レ再三復読、恰モ大患ノ良医ニ逢ヒ病痼ノ速ニ治セスンハアルヘカヲサルヲ了知スルニ似、又却テ兄ノ生ヲ顧ミルノ深且厚キヲ謝ス、兄ノ如キハ実ニ一見旧ノ如キノ良友ト云ハサルヲ得ス、嗚呼良友ニアラスシテ誰レカ克ク如斯基訓誨ヲ忝フセラルヘケンヤ、生基督教ヲ奉シ頗ル道德ヲ脩メン事ヲ希図スルト雖、徳ノ高キ尚天ノ如シ、日夜生ノ及ハサルヲ憂フ、一徳ニ得レハ衆徳ニ失ヒ、一行ニ勉ムレハ衆行ニ怠ル、溫柔平和ヲ求メテ或ハ之ヲ得ルト雖、又事ニ臨ミ忽チ之ヲ失ヒ知ラス、知ラス旧性ノ制御スル所トナリ、或ハ発シテ怒濤ノ如ク、或ハ動テ激浪ノ如ク自ラ撿束スル能ハサルニ至ル、是生ノ性質是レ生ノ大患、生ノ平素皇天ヲ仰キ通款シ同胞ニ向ヒ慚愧シテ止マサル所、今回幸ニ兄ノ活眼生ノ大患ヲ摘発セラルニ遭遇ス、生不敏ナルモ拳々服庸兄ノ訓誨ヲ奉セサランヤ、生過チヲ知テハ之ヲ改ムルニ吝ナラサラントス、兄幸ニ休慮シ賜ヘ、生兄ノ書ヲ讀ミ沈思默考スルニ兄ハ言葉ヲ以テ生ヲ愧カシムルノ類ニアラス、自ラ徳ヲ脩メ徳ヲ以テ生ノ非徳ヲ矯メラル、ニ似タリ、生不敏ナルモ徳ヲ慕フノ念尚克ク心ニ存ス矣、生深ク之ヲ心ニ銘シテ忘レス、慎ンテ兄ニ謝セント欲ス、然リト雖基督教云々ノ訓誨ニ至テハ生ノ見ル所アリ、又深ク信スル所アリ、他日又慎ンテ陳スル所アラントス、生過日書ヲ呈シ再会スルノ面目ヲ得ハ又其ノ論ヲ上下セント陳セシハ生論ヲ上下シテ兄等ト交ヲ通セント欲スルニヨレリ、然リト雖今其ノ策ノ卑拙ニシテ甚タ誤レルヲ知ル矣、人若シ論ヲ以テ相会シ又其ノ論ヲ上下セントスレハ恐クハ朋友ノ交義ヲ敗リ敬礼ヲ失フニ至ランモ亦知ルヘカラス、吾人豈ニ慎テ之ヲ避ケサルヘケン、縱令又其ノ論ヲ上下シテ勝ヲ占ムルモ嗚呼夫レ何ノ面目ゾ、吾人ニシテ互ニ高德ヲ脩ムルナレハ宜シク匹夫ノ面目榮譽ヲ事トセサルヘシ、時論ハ變換ノ憂ナキ能ハス、高德ハ万古不易ナリ、吾人宜シク磊

落書生ノ旧慣ヲ脱却シ去リ徳ト義ト温和ヲ以テ交通シ、又宜シク人ノ徳ヲ立ツルヲ是レ勉ムヘシ、天幸ニ時ヲ与ヘ生ヲシテ兄ニ再会スルノ機ヲ得セシメハ生ハ論弁ヲ以テ相接セサルベシ、願クハ高德ヲ脩ムルヲ之レ勉メ徳ノ美域ニ進ミ徳ノ佳壘ニ遊ハント欲ス、兄等幸ニ同伴トナリ良友トナリ生ト長ク交ヲ結ヒ共ニ真理ノ樞ニ乗ルノ意アルヤ否、兄再ヒ返書ヲ忝フセハ生ニ於テ幸甚臨書万一ヲ竭サス、頓首々々

九月十二日

新島 襄

山口 通君

兄ノ御住所ヲ了読シ得ス、依テ又杉田君ノ御厄介ヲ勞シ奉ル

過日吉田ヨリ懇書ヲ寄ラル、生今回別ニ書ヲ呈セス、依テ兄ヨリ御致声被下シ事ヲ乞

837

九月十三日

松山高吉

⑤複写（松山初子氏所蔵）

⑥新島公義代筆

前刻時間割ニ付御伺ひ申候処、午前のみを希望スルハ何レノ教師モ同様ニ御座候、或ル教師のみ毎年午前ニ限ると云ふことニ付テハ兼て教員間ニモ不平あり、又生徒ノ便を計ラヌト云フことニ付テハ前年より不平あり、今年モ同様と



存候ニ付此辺御觀察有之度、小生ニ於テハ素より、一点私ナキ事故、教員生徒何レモノ便益を計り度

就てハ他教師と同様午前午後トモ御教授アル様叶はゞ、同志社教育ノ為ニ悦ふところニ御座候、然レトモ御都合モアル事と察し候ニ付本期ハ重ニ午後ニ御教授相願度、時間割を編成いたし度此辺今一応御再考あらバ大幸之至ニ御座候、右早々頓首

九月十三日

新しま

松山先生

838 九月二十六日

堀俊三\*

④墨

老母饑午めしの后俄カニ寒氣を覚、ブルクミふるへ居候間冒寒之体ニ相見候得共、何分老体之事ニ而心配いたし候間、御都合相叶候ハ、此車ニ而一寸御見舞被下候様奉仰候也

九月廿六日

新島 襄

堀 俊三兄

839

十月九日

堀俊三\*

⑤ 森中章光写

老母事、今朝ハ昨夜よりハチトヨイト申居候得共、何分力ナク候間、今日も御見舞被下候ハ、幸甚

十月九日

襄

堀 俊三兄

840

十月十日

中村栄助\*

④ 墨

老百五十円程未タ未納之分有之よし、右ニ付明夕ハ七時より又集会ヲ開カレ候よし、然レ小生ニハ明朝出発候間明夕ハ出頭〔不〕仕候間、宜しく御相談被下度候、右之老百五十円ハ是非トモ出サネハナラヌモノカ能々御吟味被下度候、右為願用如此候也

十月十日

新島 襄

中村栄介兄

本日ハ非常ニ多事、乱文之義御免被下度候

841

十月十三日

小崎弘道\*

⑤ 森中章光写、柏木義円写

今夕岡山ノ丸毛真応君ヨリ来書アリ、已ニ木村ヲ招待スル事ニ付、<sup>〈キ〉</sup>貴兄迄御依頼申候由、就テハ小生ヨリ貴兄  
迄重ネテ、<sup>〈御〉</sup>依頼可仕旨申来候間、何卒貴君ヨリ木村兄ニ御頼ミ御勸<sup>〈メ〉</sup>是非<sup>〈ニ来リ岡山〉</sup>。関西ニ来ラレ山陽ノ伝道ヲ負  
担セラレ候様御尽力被下度候、御存し之通近來関東ヨリハ此地方ノ人物ヲ引取り、為ニ不都合ヲ生候間、何卒  
木村君ニハ関西ノ一大要地ナル岡山ニ来ラレ、岡山ノ牧師無キニ苦メル群羊ヲ養ヒ賜ハン事、小生ヨリモ同君  
ニ切望スル所ニ候、何卒此義ハ至急御懸合被下度候<sup>〈処〉</sup>

本月四日付之華書拝見仕候、陳者内藤氏之令息云々ニ付已ニ同氏へ回答も仕置候、<sup>〈御坐〉</sup>○成章君アンドワ行之事ハ一応ス  
ミス先生ニ相懸合可申候得共、又神学校之校長ニ元トアンドワニ牧師<sup>〈いた〉</sup>為し居候人故、此人ニより先方ニ相計候ハ、  
却而得策<sup>〈ならん〉</sup>なるべしと存候、○山崎氏<sup>〈へ〉</sup>同氏より之来状も有之候得共、<sup>〈間〉</sup>一応返事ハ奉置候、又貴会之御都合御知<sup>〈ラ〉</sup>セ被

下至極之事ト存候、之を賛成仕候、○熊本ニ一之学校を設くる云々と御申越有之候得共、今其人なきを如何せん、又何分資金もなく候ハ、仙台之如くニ相運ひ申間敷甚遺憾千万、然し是非とも我党之学校を設<sup>へ</sup>す<sup>へ</sup>ハあるへからざる<sup>へ</sup>の<sup>へ</sup>と<sup>へ</sup>之<sup>へ</sup>地<sup>へ</sup>ト相認居候、木村君之事を先般御申越有之候得共、此地方之人物之考へ<sup>へ</sup>ニハ同君ニハ東京ニ止まらず関西ニ参<sup>へ</sup>られて<sup>へ</sup>如何、グリーン氏又小生輩よりも特ニ岡山ニ相談致し候処、未タ先方より之懸合無之候間、同君ニ委托する<sup>へ</sup>事ニならす先生方之決着を待居申候、貴兄之御見込ハ如何、若し御賛成ならば一応木村君<sup>へ</sup>ニ御計被下度候、若し是ハ岡山より貴兄ニ御頼ミの来る迄<sup>へ</sup>御待被下度候、右ハ用事のみ如此<sup>へ</sup>也

十月十三日

新島 襄

小崎弘道兄

842

十月二十五日

中村栄助\*

④墨

同志社々員之向來負担スヘキ事件等ニ付、外国人中デウイス、レールネド両氏面談ヲ被望候間今夕七時半ヨリレールネド宅迄御足労相叶可申哉、此者ニ御返答被下度奉希候也

十月廿五日

新島 襄

中村栄助兄

尤御出ガケ御立寄被下候ハ、御同行仕度候

843

十一月一日

北垣国道\*

②「御受」

④墨

西村氏へ之御添書迄通御送附被下難有落掌仕候、小生事も一昨日午后より少々不加減ニ罷在、尚臥床致居候得共、決而差シタル事ニアラス、明日ハ一寸参館仕、万々御礼開陳可申上候、右御受迄、勿々敬具

十一月一日

新島 襄

北垣明府殿

閣下

844 十一月二十五日

藤谷為寛\*

⑤ 森中章光写

拝啓、陳者先日弊校之書生老人貴館迄参上為仕候間、当人之申上候分逐一承知之事ト奉存候、過日拝眉之節ニハ何ニカ非常ニ御急キノ御様子ナルニ、其後今ニ何ニノ御回答無之如何之事カト甚訝カリ居、最早英学ハ御差止メニ相成不申候哉、将タ又別ニ可然人物ヲ御撰ヒ被成候哉、又ハ当人之申分御見込ヨリ過分ニ候哉、右様黙々ニ御附し置被下候而は御相談申上候甲斐モナク、又華族様方之御所分トモ察セラレヌ候間、何卒至急御回答被下度奉仰候、勿々頓首

十一月廿五日

新島 襄

華族

藤谷為寛殿

乍憚此之使之者へ御返書御渡被下度奉希候

845

十一月二十六日

北垣国道\*

④墨

花墨敬而拝読仕候、陳者今回閣下御東行ニ而郷氏令息之模様御承知被遊度、御義ニ而御尋有之候間、御即答可申上之處、種々之情実有之候間、閣下御発車前都合仕参館之上万縷陳述可仕候、右為貴答如此候也、敬白

十一月廿六日

新島襄

北垣知事殿

侍史

其後は打絶参館不仕段、多罪之至臥而御海涵奉希候

846

〔十一月〕

徳富猪一郎\*\*

②榎坂五番地 至急御披見 ④墨

昨夜ハ態々至重なるソツジエツチョンをなし被下、御蔭を以而一層之光輝を相加申候、甚申兼たる事ニ候得共御出局

前一寸御立寄被下候〔ハ、〕幸甚之至ニ不堪候、敬白

徳富兄

裏

有感

堪愛英倫清教輩

遺風凜烈千秋垂

又ハ自由天地

使我不存那節操

別天別地亦難期

昨夜ハ連印相濟申候

847

十二月三日

中村栄助

⑤ 柏木義門写

今夕六時半より牧師会を初候事ニ相定申候、聞ク所ニヨレハ是レハ牧師伝道師ニ相限リ候由ナレトモ、小生貴兄之御  
来車ヲ仰キ度事、乃チ至急之相談ヲ要シ候事件モ有之、旁御出被下度候、小生取計牧師会ニ御加入相成様可仕、右為  
念御通知申上候



十二月三日

襄

中村兄

848

十二月十日

〔中村栄助\*〕

④墨 ⑥代筆

前略、過刻御話申上候同志社ニ関する書類、何卒此人ニ御渡し可被<sup>〔カ〕</sup>下候也、草々不備

十二月十日

新島 襄

849

〔十二月二十五日

新島公義\*〕

⑤森中章光写

明後廿七日正午ハ餅ツキナリ、思召アラハ御来車アリ賜ヘ



年月日未詳

850

年月日未詳

安藤嘉左衛門\*

④墨

別紙之通京都より申参り、中村栄介君ニハ神戸ニ被参候よし、同君ニハ御宿ニ一泊被致候哉、若し御宿ニ不罷出ハドコソ他ニ御心当リハ有之間敷也、本日午后一時より同志社社員之会議を京都ニ相開申候ニ付、同君ニハ午後一時迄ニ山本氏之宅迄御出被下候様御通し被下度奉希候、右至急得貴意度、艸々以上

安藤嘉左衛門兄

新しま  
拝

851

年月日未詳

〔新島公義<sup>\*</sup>〕

⑤ 森中章光写

一昨日ハ甚愉快ナル遊ヲ為シ大保養仕候、何卒河合君ニ宜シク御礼御開陳被下度候、一昨夜伏水ニ一泊シ、昨日ハ鴨打ヲ試ミ候処、鴨ニ翼アリテ当ラズ、パン二羽手ニ入申候、環君入学ノコトハ当時満員ナルヲ以テ委員ノ協議ヲ要シ候間、両三日中ニハ何トカ相分可申候

852

年月日未詳

新島公義<sup>\*\*</sup>

⑤ 森中章光写

公義君

何卒聖書を充分御研窮、又深く天父ト御交之相叶候様精々奉祈候  
森君、河井家へよろしく

未タ鳳眉ニ接せざるも、貴殿之朋人金子常五郎氏より毎度貴殿之国事を憂へ邦家之為ニ為すあらんとするの高志あるを聞、心窃ニ喜ひ何時カ好機を得御面談ヲ遂げん申さん事を企居候処、今回貴殿ニ御依頼申上度条件有之、逐而参堂可仕胸算ニ有之候得共、失敬ヲ憚ラス先ツ一書を呈、金子氏ニ托シ小生之心胆を吐露シ、貴殿之御熟考を奉勞度候間〔補〕「御海涵之程奉仰度候」蓋シ御其義他ニあらず、天下青年陶冶之一大事を成就セシメンニ貴殿之御助力ヲ請ハントスルニアリ、詳細ニ付ハ同人ニ申含置き御依頼之条件□、且敝校設立之始末規則書并ニ専門校設立之旨趣書等一覽ニ呈シ度候間、御一覽之上敝校之任担之所何ニノ点ニアルカ、又小生輩ノ胸中ニ保蔵シ、将ニ国家之為竭すあらん〔と〕スル所ハ如何ナル何事ナルヤ、粗御了察可有之候得共、尚詳細之所ハ金子氏より御聞取被下度候、何レ小生も参趣自ラ丹心を吐露御依頼可申候得共、先金子を以而御依頼ニ及申度、如此候也、頓首

秋冷相催候処、御多祥被為在候半ト推察奉賀候、陳者過日当地之一士人、浜岡光哲なる者、山本氏出京之義ニ付、特ニ東京ニ參り松田公に御面談申上、且閣下ニも縷々御相談申上候よし、然るに山科老人之言語齟齬いたし候故、閣下ニ於而は何か御疑を御抱被成候様、浜岡氏より承諾仕候、閣下ニ於而如斯御疑念被為在候御事ハ御尤之事と存候、如何となれば山科之言語齟齬いたし且閣下ニ於而は浜岡氏之人となりを御存し無之に依る、浜岡氏此度之行は素山科老人其弟に向ひ、山本氏御出京致<sup>被致ナバ</sup>たら国家之御為に可相成云々被申候旨、且浜岡氏も頗山本之為るある足を知り、是非出京せしめんと計り屢小生ニ相談ニ參り候故、小生至極宜しき事と思ひ同氏と同意するのみならず、且同氏之勞を相願候次第ニ候、同氏は京師之産なれ共、平常之京師人ニ非ひ頗る<sup>〔す〕</sup>義を重する者、且<sup>同氏</sup>ありと雖切ニ天下を憂<sup>る</sup>し真男子也、故ニ此度之事ハ小生も大關係なる能<sup>き</sup>わす、且同氏之第一ニ山科に面会セさりしは、此義も山科老人之大事を談するを足らざるを知り、特に松田公に委頼事之成就を計り候也、故ニ最初ナリ山科氏之言語相違せしも閣下ニ於而浜岡氏ニ御疑<sup>に</sup>付決而御疑念無之様仕度候、浜岡氏ハ人と為り小生も熟知する所也、御<sup>閣</sup>下之<sup>賢明</sup>頗る山本氏之国器<sup>計</sup>語を御身之及<sup>乍</sup>閣下ニは山本氏之御出京セば多少国家ノ<sup>為</sup>に可相成思召被成候ハ斷然之御取<sup>計</sup>願度候、若松田公とも御相談之上彼出る<sup>と</sup>雖恐らく天下ニ益なしハとハ之を置ニ而候也、山本親戚之故を彼の<sup>〔ママ〕</sup>為に尽力する非ス、唯彼の才を空する故憂候也

## 追加

1 明治十三年五月十七日 広瀬又治\*

- ①西京 ②滋賀県下神崎郡市辺村 ③はがき ⑤複写

ドナタカ御出□□御定候ハ、其由大坂中ノ島裏丁十一番沢山保羅兄迄御通し被下度候

此度上梓相成候会儀心得御送呈申候間、会衆御一統へ御分配被下度候、且本月廿八日廿九日之兩日間大坂浪華教会ニ

於而伝道会社之集会相開候所、貴会より一兩之代議人御差出被下候ハ、難有奉存候、然し是ハ御都合次第に成し被下度候、尤旅費滞留費等ハ貴会より御支弁を乞

\*\*\*  
須田兄ト御相談被下度候、五月十七日

2 明治十四年四月十三日 広瀬又治

①西京 ②江州蒲生郡市辺村 ③はがき ⑤復写 ⑥日付は表書による。

其後は存外之御不音申上候段御海容被下度候、拟御回し之金子十五円ハ三四日愚妻落手仕候段及御答候様申居候間、此段一寸奉申上候、早々頓首

西京  
新島 襄

3 明治十四年十一月十七日 土倉庄三郎\*

⑤森中章光写

秋冷之節弥御多样奉賀候、陳者先般は御来京之処大病人在宅ニ而何之御風情もなく笑止之至ニ奉存候、其節は銘茶御投与ニ預リ、加之に大阪之御馳走を頂戴仕候条多謝之至不堪候、且其節大学設立之事ニ付余り速発之御委頼等申上候処、更ニ嫌忌し賜ワス相当之応援ヲ為スヘシトノ御答有之、小生ニ於而実ニ雀躍之至ニ不堪候、此事ハ中々大事件ニ而決而輕卒ニ着手スヘカラス、何レ不遠有志ヲ募可申候得共、第一ニ社員トモ協議仕万事差支ナキ様取運ひ、其上ニ



テ有志輩之扶助ヲ仰可申候間、何卒向後充分之御加勢アリテ民間之一大学設立アラン事ヲ希図仕候、当地御子息様方御替リ無之辰<sup>(竜次)</sup>二郎君ハ不遠シテ予備門ニ御加入ハ相叶可申、且亀三郎様ニハ御出発之翌日少々不元氣ニ有之候得共、其後ハ老婦人ニ克く御なじみ被成、別ニ一女生徒を付け御世話被致置、小生も兩三度御尋申候處、殊之外御元氣ニ而一昨夜よりハ御自身ニ而baumレー氏<sup>\*</sup>之室ニ寐度旨御発言アリ、朝夕之挨拶ハ最早英語ニテ御談アリ、昨日ハ驢馬ニ御乗被成、且行儀も殊之外宜シキ所ヨリシテbaumレー氏大ニ喜居、往々ハ役ニ立人物トナシ度モノナリト被申候、小生も段々心配仕色々相尋候處、baumレー又老婦人之申所ニヨレハ何之御不都合も無之由ナレハ、何卒御放慮有之度奉願候、其外種々申上度事件も有之候得共余は後便ニ譲り、右乍簡略為御報道如此候也、早々頓首

十一月十七日

新島 襄

土倉庄三郎様

一作間君御子息も御無恙御勉強被成候間、此段御通知被下度奉願候

一小生義用向有之一寸昨日下午、寸暇を得申候間古沢君を相尋候處、同君ハ大分同志社之為ニ焦心致され、可相成ハ速ハ大学ニ着手あり度由被申候

一亀三郎様を御世話申女生徒へハ当分二円半、乃チ食料丈御給与被下度奉存候

4 明治十六年九月十二日 杉田定一\*

①西京寺丁通丸太丁上ル ②福井県下福井旧御泉水町、岡部様ニテ ⑤複写

其後妻君之御病氣ハ如何、過日帰途敦賀より一書ヲ呈シ、大学設立御賛成之事を相願置候通御辞退無之事様奉懇願  
候、且其節吉田君、山口君之二氏ニ一書を呈シ向來之交通ヲ求メ候処、二氏よりも幸ニ書ヲ寄セラレタリ、依テ此一  
封書ヲ山口君ニ呈セント欲スルニ、同氏之住所甚不分明ニ認有之候間、再ヒ兄ニ相願ひ御送致被下候様奉希図候、右  
願用之為旁御左右奉伺度如此候也、早々頓首

九月十二日

新島 襄

杉田定一君

玉机下

妻君之御不快御大切御療養被成候様奉希望候

5 明治十七年一月一日 広瀬又治\*

①西京 ②江州神崎郡市辺村 ③はがき ⑤複写

謹奉賀新年候

右諸兄姉方へ宜御致声之程奉仰候

先日ハ参上御懇切之御取扱被成下難有奉謝候

一月一日

西京  
新島 襄

6 明治十八年九月三十日 山田良斎\*

⑤森中章光写

高知ニ道ノ伝ハリシヲ大慶トス、乍憚御賢妻様ニ宜御致声ヲ奉仰候、兄弟ニ宜シク、生モ来十一月中ニハ帰国仕度候

先般は縷々之御書面御惠投ニ預リ、特ニ日本之伝道上之形況又政治上之情実等詳細御通知被下千万奉謝候、其後勿々御回答可仕之处、生も来米以来身体尚充分に健ならず、又多事を好む米人中ニ有之候得ば何となく多忙荏苒今日迄御無音申候段御海容被下度候、其後は五体如何、定而御回腹之御事と遙察申上候、尚此上共御加養專一ト奉切望候、幸便ニ托シ寸書を仕候老兄之御好意を謝候、草々

九月三十日

アンドワ  
裏

山田老兄

此アンドワト中地ハグリ、ゴールドン両師ノ神学を修メシ学校ノアル処ナリ、生モ亦茲ニ学ビタリ

7 明治二十一年二月二十二日

内藤兼備\*

① 神戸諏訪山、和楽園 ② 北海道札幌北五条西一 ⑤ 複写（内藤晋氏所蔵）

寸楮拝啓仕候、陳者此度は遠路遙々結構なる林檎御惠送被成下、数日前安着致し私共直ニ頂戴翫味仕、又少々、多くの知人中ニも分配仕候処、今此之林檎ハ珍しきものと被申、大ニ喜具申候、小生事も近来大分快方ニ趣き参り少々身軀ニ肉付申候間、向後注意申上候快復ニ及候かとも存候間、何卒御休慮可被賜候、御令息一雄君も大ニ御壮健ニ被

為成候由御通知被下喜欣千万之至ニ奉存候、同君御入校之事ニ付御尋有之ニ付、本校予備校之概則相呈し候間、何へなり御合格ト御認被成候ハ、御来学被下度候、尤入校期限ハ来秋九月上旬之末迄 定置候間〔補〕但シ中旬ノ初メニ入校試験ニ取カ、リ申候」左様御承知可被下候、かね様ニは不相替御丈夫にして日々学校ニ御通ひの御事と奉察候、私共も札幌ハ決而恐れ不申毎々互ニ相語らひ樂しみ申居候、先は御礼旁御左右御伺申上度如此候也、早々敬具

二月廿二日

新島 襄  
同 八重

内藤御両所様

尚々、皆々様ニ宜しく御伝言被成下度奉希候

8 「明治二十一年」四月二十九日 金森通倫\*

⑤『国民新聞』六三五号附録（一八九二年一月二十三日）所収

「前欠」即ち我が同志社に於而書生諸君の神聖なる信仰と愛国心を充分養成せられ、他日世間に船出せし上は不撓の元氣を以て各々長ずる所に応じ全国の改良を計られ度事、即ち各何れのスフィヤに向ふも Reformers を以て自ら任せられ度事也、着京以来其々の人に接し府下書生の着目する所如何を尋ぬるに、只無頓着にして少しくマジメなる

者は理化学の書生なるよし、他は多くは其専科と共に叩頭学を学び居る由、又府下諸専門学校の生徒も先づ多分は奉職が目的のよし、又は拝金宗を信仰するもの夥多なる由、嗚呼日本の将来を卜すべき者は独り此青年輩に止まるべきに彼等にして已に如斯腐敗に流れ世の風潮と共に下流に就かるゝは何等の遺憾ぞや、豈流涕長太息の至ならずや、思ふて茲に至れば蓋し吾人責任の重大なるを覚へ、同志社本科の程度を進むると専門科を設置するは将来有力の士を我が校より続々輩出せしむるに甚た必要の事と感じ、振而小生の一分は竭度存候間、○○○○○君等と御協議の上諸事御商量被下、同志社の元気を一層振ひ起しの御工風有之度候、可相成は神学生等には世の風潮に流れず兀然と立ち断然と進み銳意主の御国を伝播せられんことを御勧め置被下度候、又上級生等にも度々御面会被下卒業後無益の方針を取らざる様懇に御勧告有之度候、又全校の生徒にはリホームアルスを以て自任し自重自愛信仰を厚ふし品格を養ひ元気を蓄へ百川を挽回するの覚悟を以て精々勉強被致候様小生に代り叮嚀に御話し被下度候、茲迄相認居候際貴書来到京地にて非常に御尽力のよし欣喜此事に候、何卒留守宅の所は宜しく御負担被下度奉仰候、又○○○○○のバランス等は充分御注意被下、其間髪を容れざる程にも御工風有之度候、又教員会に於て東京のホームブルに有之候事は程よく御談し置被下度、右得貴意度、草々敬白

四月廿九日

新しま襄

金森通倫兄

尚ほ妻君によりしく近頃は麻布にあるも療養中ソバは一切行はれず大閉口なり、府下に於て同志社の信用甚よろしく其人も愈其任の重を感じつゝ何卒我が校は一種無類の骨ある人物養成の点を以て自ら任じ度候也

9 明治二十一年十月十五日 加藤寿

- ①東京麻布仲之町廿番地 ②京都烏丸通御所八幡町、同志社予備校  
③はがき ⑤複写 ⑥日付は表書による。

段々之御骨折ニ而予備校之方も諸事都合宜相運来候由千万奉鳴謝候、去夏中も種々御遣し被下、且校中有志家之寄附五円も慥ニ落手仕候、其節ハ生徒も諸方ニ解散申別ニ礼書も不差出、何レ近々帰京之上右礼等ハ陳述可仕候

10 明治二十二年〔十一月〕 広津友信\*

⑤森中章光写

与板ニ而ハ三輪振二郎君ニ宜しく御伝言被下度候

長岡ニ而ハ該地之有力家ニ御接し同志社之計画等御談し置被下度候又之之階梯ニ有之該地ハ充分ニ御ツナキオキ被下度候

新潟知事ニハ御都合次第御面会被成小生より宜しく御伝言申上旨御通し被下度候

御序ニ知事ニハ東京ニ而三好司法次官之家ニ於而拝眉せし已来一切御無音申上候趣御談被下度候

裏

友信君

倉野ニ而松本ニよろしく小生参上之趣ハ一寸同氏迄申通置候上州之事之為充分工風致し呉候様御頼ミオキ被下度候

11 明治二十二年〔月日未詳〕 大久保真次郎<sup>\*<sub>2</sub></sup>

⑤ 森中章光写

追白

昨日貴兄へ御送可申為一書を認置候処、今朝貴書来着拝読候処、伝道之策懇々御説尽シ被成至極ト存候得共、茲ニ尤困難ナルハ其人ヲ得ルニ苦ム事ナリ、我カ党中謀士ナク、大略ナク、実ニ大経倫ヲ立、日本前途ノ伝道ヲ計ルニ只ニソノ人ナキヲ如何セン、阿部ノ如キ、又広津ノ如キ適応ノ人タルベキモ、組合大体ハ彼等ヲ撰ハサルベシ、入札ハ多分旧バイブルクラス人中ニ落ベシ、然ルニ大略士ナク如何セハ、小生モ殆ト此ノ一事ニハ究矣ト申候、此レハ緩々熟



考可仕候、当地募集モ少シハ好結果アルベシト存候、何レ後報ヲ以テ御知セ可申候

襄

真次郎兄

12 〔年次未詳〕一月十九日 広瀬又治

⑤複写

先達而杉浦河辺<sup>〔カ〕</sup>二氏より牧師須田君之事ニ付色々承候事件も日々不遠内都合いたし、参上之上働き之方法等ニ付同氏と篤ト相談いたし度存居候間左様思召被下、何なり共御心付之事ハ無御遠慮同氏之御忠<sup>〔告カ〕</sup>□被下候様奉願上候、且承り候ニ近來□兄ニハ少々御不出来□□殊之外心配仕候、何卒御養あり而可成は久しく此世ニ御存在主之御光荣之為御働あ<sup>〔ラカ〕</sup>□ん事を、右は乍乱文早々及貴答候也、頓首

一月十日<sup>九</sup>日

新島 襄

広瀬愛兄

御家族御一統様ニよろしく御致声を奉希候

天欄二光ハ去□□□デビス先生迄相渡申置候処、□□□ハ大坂ニ滞在ノよし近々神戸ニ迄候□よし

13 「年次未詳」三月十七日 金子常五郎

⑤『昭和六十二年明治古典会七夕大入札会目録』、一九八七年七月、明治古典会

寸楮拜啓仕候、陳者小生之友人福島県泉之産半谷高晴ト申仁ハ、此度同志社入学志願ニ候間、明日御地ニ可參候間、乍御面倒同志社近傍ニ而可然下宿所を御世話被下度此段奉希候也、早々頓首

三月十七日

新島 襄

金子常五郎君

〔封筒ウツ書〕  
「同志社学院」

金子常五郎君

「半谷高晴君持参」

14 〔年次未詳〕十月二十二日

鈴木清\*

④墨

其後は久々拝眉を不得、一昨日神戸着之上も何分疲労致し居候故、何へも御無沙汰仕、貴家ニも参上不仕候条、決而不悪思召被下度候、過日民友社之青年専人熊本ニ帰省之路次神戸教会之重立たる人ニ拝晤を得而、教会之御様子等御尋申度と被申候間、貴兄迄差上候次第ニ御座候、扨御申越之通小生調印仕御郵送申上候間、御落手可被下候、右は貴答迄、艸々頓首

十月廿二日

新しま襄

鈴木清兄

尚々、小生も近々神戸ニ移リ休養可仕積ニ候間、乍序此段申上候

女教師方ニ宜しく御伝言可被下候

15

〔年月日未詳〕

根岸〔某〕\*

⑤石塚正治編『新島先生言行録』四五―六頁 一八九一年九月

肅啓、陳ば今回小生等の企候私立大学設立の件に付御賛成被成下、金御~~授~~与相成候条深く奉鳴謝候、且之に添へ御名吟一首頂戴難有奉拝謝候、小生故郷なる安中にハ多分に知人も有之候中、貴君よりハ衆に先だち如斯も御賛意を被表候ハ、小生に取り幾重にも御好意を謝する所に御座候、右不取敢謝詞を奉開陳度如此候也、敬白

御名吟を拝謝して

恵まるゝ言葉の匂ひ松の風

小生ハ甚素人に有之候間、デタラメと可申候、御一笑



「*Die Kunst der Kunst*」の序文に「*Die Kunst der Kunst*」

「*Die Kunst der Kunst*」の序文に「*Die Kunst der Kunst*」

「*Die Kunst der Kunst*」の序文に「*Die Kunst der Kunst*」

「*Die Kunst der Kunst*」の序文に「*Die Kunst der Kunst*」

「*Die Kunst der Kunst*」の序文に「*Die Kunst der Kunst*」

「*Die Kunst der Kunst*」の序文に「*Die Kunst der Kunst*」

「*Die Kunst der Kunst*」の序文に「*Die Kunst der Kunst*」

「*Die Kunst der Kunst*」の序文に「*Die Kunst der Kunst*」

「*Die Kunst der Kunst*」の序文に「*Die Kunst der Kunst*」

「*Die Kunst der Kunst*」の序文に「*Die Kunst der Kunst*」

「*Die Kunst der Kunst*」の序文に「*Die Kunst der Kunst*」

「*Die Kunst der Kunst*」の序文に「*Die Kunst der Kunst*」

## 遺言

「*Die Kunst der Kunst*」の序文に「*Die Kunst der Kunst*」

「*Die Kunst der Kunst*」の序文に「*Die Kunst der Kunst*」



# 遺言

⑩新島八重子、小崎弘道、徳富猪一郎立合

廿一日午前五時半遺言の条々⑩

⑩同志社の前途は基督教の徳化、学文学政治等の隆興、学芸の進歩三者「相伴ひ」相待て行ふ可き事

⑩同志社教育の目的は其の宗学政治文学科学等に從事するニ係らず皆精神活力あり「真誠の自由ヲ愛し、」以て邦家

ニ尽す可き人物を養成するを務む可き事

⑩社員たるものハ生徒ヲ鄭重ニ取扱ふ可き事

⑩同志社ニ於てハ個儼不羈なる書生ヲ圧束せず務めて其の本性ニ従ひ之ヲ順導す可きし以て天下の人物ヲ養成す可き事

⑩同志社は隆なるニ従ひ機械的ニ流るゝの恐れあり切に之を戒慎す可き事

⑩金森通倫「氏」を以て余の後任と「な」す差支ナシ、氏は事務ニ幹練し才鋒当ル可ラサルノ勢アリ然れとも其の教育家として人を順育し之を誘掖するの徳ニ欠け或は小刀細工ニ陥ルの弊ナントセス

⑩是れ余の竊かに遺憾とする所ナリ

⑩東京ニ政法理財学部ヲ措くは目今の事情到底避く可らざる歟と信す

⑩日本教師と外国教師の關係ニ就てハ務めて調停の勞ヲ取り、以て其の円滑ヲ維持す可き事、余は是迄幾度か此ノ中



間ニ立て苦心あり、将来と雖も「社員〔補〕教師」諸君か日本教師ニ示スニ此ノ事ヲ以てせんことを望む

⑨余ハ平生敵ヲ作ラサルヲ期す若し諸君中或ハ余に對して釈然たらざる人あらハ幸ニ之ヲ恕せよ、余の胸中一点の芥  
莠あらす

⑩從來の事業人或ハ之ヲ目して余の功とす然れども是皆「同志〔補〕」諸君の翼賛

⑪ニよりて出来たる所と余余ハ毫も自己の功と信せず唯諸君の厚情ニ感佩す

⑫右筆記の上之ヲ朗読す先生一々之ヲ聞き首肯す、時に午前七時十分前⑬

## 2 遺言

(一)

謹て告別申上候、是迄同志社大学の為めニハ不<sup>高</sup>一方御懇配被成下候儀奉感佩候、小生没後も行末長く御心ニ懸け被成下度乍此上懇請申上候

二十三年一月廿一日午前

新島 襄

一学外

、富田鉄之助殿

陸奥

、大隈伯殿

児嶋惟謙殿

、井上伯殿

中島信行殿

、伊藤伯殿

北垣国道殿

、勝 伯殿

、松方伯殿

、青木子殿

川島醇殿

。渋沢栄一殿

西村捨三殿

遺 言

別紙ハ本年一月廿一日大磯ニ於て新島襄氏の遺言として私共立合人より閣下ニ差し出し可申上様遺命ニより茲ニ連

署ノ上奉呈仕候、謹言

新島八重子

徳富猪一郎

小崎弘道

近々御帰朝の由拝顔ヲ得度く存候処、意外ニも卒然病ニ罹りて果さず、尚乍此上同志社大学の事宜敷奉願上候

陸奥宗光殿

遺言

広津友信君

米国ニ行き哲学とシステマチック神学を修め帰り来りて以て同志社神学部のためニ全力を挙げ負担せられんことを切望す

明治二十三年一月廿一日 大磯ニ於て

別紙 襄氏  
右ハ新島先生ノ貴下ニ対する遺言ニして我等其の正確ナルヲ証せんが為めニ立合人として連印すより可差出遺命ニより連署の上奉呈す

新島八重子

徳富猪一郎

小崎弘道

人見一太郎君

君ニ謝す、医師看病婦等の周旋御芳志偏ヘニ感謝す

大久保真次郎君

益す信仰を固くし主の為めニ働かれんことを祈る、結果の出来る迄現今の地を去る勿れ

井  
横田時雄君

兄ニハ特別ニ告別の辞を呈す、将来自愛して日本伝道の為めニ御尽力あらんことを望む

遺言

横田安止君

古賀鶴次郎君

浜田

波多野培根君

同志社の前途ニ関してハ兼て談し置きたる通りなり、何卒将来は同志社の骨子の一となり以て尽力せられんことを切望す

是迄種々御厄介ニ預リ特ニ昨年病氣の節ハ非常ナル御世話ヲ辱ふし此段厚く謝スル所ナリ、今ヤ病重し再ひ見るを得す

富田鉄之助殿

新井毫君

別ヲ告ク、足下ニ再会して快活ノ談話ヲ聴ク能ハサルヲ憾む、君余ヲ信し余も亦君を信す、君須く真理ノ上ニ立て不撓その職分ヲ尽ス可し、真理ヲ蹈ミ行フハ容易の業ニあらず

(二)

明治二十三年一月廿二日五時十五分午前

芳野の山花咲く頃の朝なく

心に懸る峰の白雲<sup>㊦</sup>

余か同志社ニ関する感情常ニ此の歌の如し

右は先生最後の言<sup>㊦</sup>

(三)

㊦天ヲ怨ミス人ヲ咎めす

明治廿三年十月廿二日

芳野  
死出の山花咲頃は朝なく  
心にかゝる峰の白峰雲<sup>雲</sup>

天を怨みす人を咎めす

公義其他の諸方<sup>氏来</sup>か

る云々

るべきを聞き彼等来らは位<sup>泣</sup>かさるやう爲したし、人亦有情の人間なれば自然貫泣きに至らんを恐

廿二日午前五時二十五分

廿三日午前三時五十分

⑨大体ヲ略す

モ一十六日限り

十六日迄ハ伊勢ハ……

3 遺言

⑨ 広津氏

米国ニ行き「<sup>〔補〕</sup>哲学と」システマチック神学ヲ修メ歸り來リ、以て同志社神学部の柱石とナ<sup>〔補訂〕</sup>「<sup>〔補〕</sup>為めに全力ヲ挙げて負担せ」ラレ度との事

⑩ 横田、古賀、浜田、波多野「<sup>〔補〕</sup>の諸氏」同志社の前途ニ関してハ兼々談し置きし通りナリ、何卒将来は同志社ノ骨子の一とナリ、以て尽力セラレ度と望む

⑪ 諸教会の牧師宣「<sup>〔補〕</sup>教」師方々ニ宜敷暇ヲ告ク<sup>〔カ〕</sup>

⑫ 伊勢氏ニハ特別ニ宜敷、将来御自愛ありて日本伝道の為めニ御尽力あらんことを望む

⑬ 新井毫氏ニ宜敷、足下ニ再会ヲ<sup>得</sup>テ快活ノ談話ヲ聴く能ハサルヲ憾む、君余ヲ信し余も亦君ヲ信す、君宜敷真理ノ上ニ立て不撓その職分ヲ尽す可し、真理ヲ蹈ミ行ふハ容易の業ニあらず



⑨神戸、京都、大坂ニ教会起リ、其のインテレスを保たんかために三教会ニ任せたれとも事務渋滞今ニ<sup>[姑]</sup>沽息ノ法ニ依ル、事務的ニ快活敏速<sup>捷</sup>ニナサル可ラス

⑩大隈、井上、陸奥、伊藤、勝、青木、渋沢、児嶋、高嶋、中嶋、北垣、松方、西村捨三、川島、富田

⑪是迄同志社大学の為めニ一方御高配の儀感佩仕候、行末長く富田御尽高配被成候儀乍此上懇請申上候

Mr. Hardy ⑫

此間より度々手紙を忝ふした

Many thanks for your kind letter.

アメ<sup>カ</sup>「リ」レンボールドヘッ

デウキス氏其外

⑫余と兄と親ある兄弟の如し、十分御養生以て我國の為に御働ありたし、余面会スルヲ得ざる残念

金森〔P.V.〕

⑨大久保

益信仰を固ふし主の為に働かれん事を祈る、結果ある迄今の処を去る可らず

⑩信州、福島等の伝道は五月より伝道会社に受け持たん事を望む

東北諸州の伝道を拡張スル事ヲ務むべし

⑪信州、栃木、大谷、熊谷宮の伝道をに始むべし

⑫福田鏡之助

是迄種々御厄介になり殊に昨年病気の節ハ大なる御世話に与りたる故厚く謝する所なり今病重し、再ひ見るを得ず

⑬陸奥君ニハ近々御帰朝の由、拝顔ヲ得度と存候処、意外ニモ卒然病ニ罹りて不果、尚乍此上同志社大学の事宜敷御願申上候

⑭人見氏ニ謝す、医者奔走看病婦の周旋等御芳志偏ヘニ感謝仕候

4 個人宛遺言

一月二十一日 波多野培根

④ 墨

〔封筒上書〕  
「波多野培根殿

新島八重子

徳富猪一郎

小崎弘道」

遺言

波多野培根君

同志社ノ前途ニ関シテハ兼テ談シ置タル通りナリ、何卒将来ハ同志社ノ骨子ノ一トナリ以テ尽力セラレン事ヲ切望ス

明治二十三年一月廿一日

新島 襄

別紙ハ明治二十三年一月二十一日大機ニ於テ新島襄氏ノ貴下ニ対スル遺言ニシテ我等立合人ヨリ可差出遺命ニヨリ連署ノ上拝呈ス

明治二十三年四月一日

新島八重子

徳富猪一郎 印

小崎弘道 印

波多野培根殿

一月二十一日 原六郎

⑤原邦造編『原六郎翁伝』中巻、四八〇頁

謹て告別申上候、是迄同志社大学の為めには不一方御高配被成下候儀奉感佩候、小生没後も行末長く御心に懸け被成下度乍此上懇請申上候

明治廿三年一月廿一日

新島 襄

原六郎殿

一月二十一日 井上馨

④墨 ⑤写真（国立国会図書館憲政資料室所蔵）

謹テ告別申上候、是迄同志社大学ノ為メニハ一方御高配被成下候儀奉感佩候、小生没後モ行末長ク御心ニ懸ケ被成下度乍此上懇請申上候

明治廿三年一月廿一日

新島 襄

井上伯爵殿

〔封紙上書〕  
「井上伯爵殿

新島八重子

徳富猪一郎

小崎 弘道」

別紙ハ本年一月二十一日大磯ニ於テ新島襄氏ノ遺言トシテ私共立合人ヨリ閣下ニ差出シ可申上様遺命ニヨリ茲ニ連署ノ上拝呈仕候謹言

明治二十三年四月一日

新島八重子 印

井上伯爵殿

徳富猪一郎 印

小崎弘道 印

一月二十一日

北垣国道

⑤ 森中章光写、高橋元一郎写

謹テ告別申上候、是迄同志社大学ノ為ニハ不一方御高配被成下候儀奉感佩候、  
小生<sup>〔没〕</sup>歿後モ行<sup>〔末〕</sup>未長ク御心ニ懸ケ被<sup>〔成〕</sup>下  
度、乍此上懇請申上候

明治廿三年一月廿一日

新島 襄

北垣国道殿

一月二十一日 渋沢栄一

⑤『渋沢栄一伝記資料』第二七卷、三三二―三頁

謹テ告別申上候、是迄同志社大学ノ為メニハ不一方御高配被下候儀奉感佩候、小生没後モ行末長ク御心ニ懸ケ被下  
度、乍此上懇請申上候

明治二十三年一月二十一日

新島 襄

渋沢栄一殿

一月二十一日 横田安止

⑤森中章光写

遺言

同志社ノ前途ニ関シテハ兼テ談シ置タル通りナリ、何卒将来ハ同志社ノ骨子ノ一トナリ以テ尽力セラレン事ヲ切望ス

明治二十三年一月廿一日

新島 襄

別紙ハ明治二十三年一月廿一日大磯ニ於テ新島襄氏ノ貴下ニ対スル遺言ニシテ、我等立合人ヨリ可差出遺命ニヨリ、  
連署ノ上拝呈ス

明治二十三年四月一日

横田安止殿

新島八重子<sup>㊤</sup>

徳富猪一郎<sup>㊤</sup>

小崎弘道<sup>㊤</sup>





## 新島襄全集4 ■ 書簡編II ■ 注解

4 堀内徹（一八六五—一九三三）は彦根井伊家奥医師中島宗達の子、幼名は宗太郎。父宗達は明十社の中樞メンバーで、明治十二年（一八七九）六月四日新島襄から洗礼をうけ、彦根教会創立の柱石であった。宗太郎は同志社英学校に入り、鎌田（原田）助、松尾敬吾らは同級生。明治十五年四月九日京都第一公会（今出川公会）でD・W・ラーネッドから洗礼をうけた。父祖の医業を継ぐ志を立て、同志社を中退して上京、歯科専門学校に学ぶ。のち堀内家を継ぐ。明治二十一年十一月十日仙波きょう（於京）と結婚。のち京都に居を移し、歯科医を開業。のち第三公会（平安教会）に転会、爾後三十余年にわたって執事をつとめた。またキリスト教青年会のために尽瘁、明治三十六

年京都YMCA（基督教青年会）創立のメンバー。昭和八年十二月一日永眠。嗣子清（明治四十三年同志社普通学校卒）も歯科医。

6 この「旧号書簡」は「正五一七号書簡」（九七五—九七六ページ）では、その年代を「明治十七年」としている。しかし、以下の理由により、その年代を明治二十二年に改めた。すなわち書簡に見える大久保七熊しちくまの同志社在学期間は、明治十七年四月調べの「同志社英学校生徒名」、明治十八年九月調べの「同志社英学校概則」（『同志社百年史資料編一』所収）にはその在籍が認められず、明治二十二年一月調べの「生徒族籍氏名一覧」（『前掲書』）には「東京府芝区二本榎西町 華族 普通科二年生」と見えるが、翌明治二十三年五月調べの「同志社学校一覧」（『前掲書』）にはその名前は見当たらない。よって大久保七熊の在籍期間はずっとも幅ひろく見て、臨時編入の場合も考慮して明治十九年初頭から二十三年初頭となる。ただし、二十三年は新島襄の状態から考えられず、したがって、この書簡は十九年一月四日から二十二年一月四日までの場合が可能であるが、このうち、新島が年末から年頭にかけて京都を離れ、「本年之新年会ハ非常ニ盛大ナリシ由」と述べる状況に該当するのは二十二年一月四日しかない。

なお、「正五一七号書簡」では本文中の「大久保七熊」（九七五ページ三行目）、「大久保」（同四行目）、「七熊」（同九行目）は字数分を□で示し、「牧野伸顕」（九七六ページ一行目）は「□野□□」とはばかった取扱いをして

いるが、これらは原文通りにした。  
なお大久保七熊は大久保利通の五男、明治五年七月生まれ。したがって大久保利和としなみ、牧野伸顕、大久保利武の弟に当る。

\*ケーン・デー（Chauncey Marvin Cady, 1854—1925）はアメリカン・ボード宣教師。イリノイ州バイクに生まれ、オ

ペリン大学神学部を卒業。一八八二年中国山西省にオペリン大学から派遣された。明治十七年（一八八四）来日、同志社英学校の教員となり、英語学、英文学を担当し、明治四十四年帰国した。

7 牧野伸顕（一八六一—一九四九）は大久保利通の次男。牧野家を継ぎ、岩倉具視遣外使節には父に従って十一歳でアメリカに留学。明治十三年（一八八〇）外務省書記生となりロンドンに赴任、伊藤博文の知遇をうけた。十七年二月参事院議官補のとき、新島襄の徴兵令に対する交渉の当事者の一人となる。「出遊記」（第5巻『日記・紀行編』二五四—二五九ページ）参照。

8 加藤勝弥は注解（第3巻『書簡編』一八八九ページ）参照。内村鑑三は北越学館に赴任して僅か四カ月後、明治二十一年十二月十八日辞任して東京に帰ってしまった。内村鑑三の推輓にかかわった新島襄と北越学館の加藤勝弥との交渉経緯は、引続いて「51号書簡」（明治二十二年一月二十三日付、加藤勝弥宛）に見られる（本井康博「新島襄と加藤勝弥——北越学館をめぐる——」、『同志社談叢』創刊号、一九八一年）。

\*村井知至（一八六一—一九四四）は四国の松山藩士の家に生まれる。明治九年（一八七六）上京。横浜で商業貿易を実地に学び、その間海岸教会で稲垣信から受洗。その後同志社に編入、明治十七年六月英学校卒業、同級生には竹内（安部）磯雄、岸（麓本）能武太、新原俊秀、山岡邦三郎らがいた。同年十月竹内磯雄とともに神学校を中退（第3巻『書簡編』一八二〇—一八二二ページ注解\*\*参照）、のち四国高松で伝道に従っていた。明治二十二年三月伊勢（横井）時雄の渡米の後をうけて本郷教会副牧師となり、二十三年二月アンドーヴァー神学校に留学、二十六年九月帰国して本郷弓町教会を牧した。二十八年再渡米し、帰国後は社会主義研究会を結成。また英語学者として東京外国語学校教授。

なお「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四三九ページ）に「山岡邦三郎氏ノ来高ヲ促カシ」の記事が見える。「51号書簡」（明治二十二年三月二日付、山岡邦三郎宛）参照。

\*\*\*増野悦興は注解（第3巻『書簡編』一八四五—一八四六、一八五六ページ）参照。

9 この「55号書簡」には日付ならびに宛名の明記を欠いている。「統三〇書簡」（四六—四七ページ）では日付は「明治二十二年一月七日」付とし、宛名は「新島公義」宛である。いま、これに従い、推定としてここに掲げた。なお、文中の「御申越之趣」については「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四三一—四二〇—

月」の項）参照。

12 神山（阿部）充家については注解（第3巻「書簡編一」九二五ページ）参照。

「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四二八―四二九ページ）によると、明治二十二年一月五日の条に神山充家の知らせる消息が知られる。

熊本ノ七軒町十二番地阿部充家君ヨリ来状アリ、左ノ人物ヘハ書面ヲ送ルヘキ旨申来ル

同志社大学ノ賛成家ト認ムヘキ人

福岡県三池郡大牟田駅

有志家○永江純一○埜田卯三郎<sup>〔太〕</sup>

熊本飽田郡田崎村

価値アル有力者○高田露

同 蘆北郡水俣駅

沢水頼寛 徳富長範 岡田義勝

同 宇土郡三角港

財産家且信者○片岡大三

同 葦北郡田浦村

財産家 藤崎弥一郎

同 玉名郡川辺田村

財産家有志者○一瀬長造

薩摩国薩摩郡平佐村

長谷場純孝

同 南伊佐郡宮ノ城郷

平田成介

13 野田卯太郎（一八五三―一九二七）、政治家、実業家。大塊を号す。嘉永六年十一月二十一日筑後三池郡池田村に

生まれる。自由民権運動にたずさわリ、板垣退助の自由党に入党。明治十八年（一八八五）福岡県會議員に選出され副議長、三十年以降衆議院議員に連続当選、政友会創立にかかわる。一方、三池紡績のほか三池土木、九州製油、三池銀行、福岡県農工銀行重役。昭和二年二月二十三日没。

永江純一（一八五三—一九一七）政治家、実業家。嘉永六年筑後三池郡江浦村に生まれる。上京して法律を修め、帰郷後自由民権運動にたずさわる。野田卯太郎と三池銀行、三池紡績会社を創設、明治三十一年衆議院議員に当選、政友会幹事。大正六年十二月没。

「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四六五ページ）の明治二十二年五月三日の条に「徳富氏ノ話シニ、三池ノ有志家野田卯太郎、永江純一ノ両氏ハ非常ニ同志社賛成ノ由、此度モ百円ヨノ金ヲ以テ徳富ニ托シタル由」と見える。

14 「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四三〇ページ）一月七日の条に「広津友吉氏来書アリ。三池郡ノ野田卯太郎氏ノ紹介ト申シテ、左ノ人物ニ旨趣書及書面ヲ差出スヘキ旨申来ル」として次の記事が見える。

兩人トモ門閥家

〔筑後三池郡上内村〕  
立花弘樹  
歴木村  
小林隆基

三池鉦山局長

小林秀知

小林ニ代（リ）局長トナラ（ン）トスル人ナリ

団 琢磨

副長

小山

三池集治監長

神原富文

15 中山光五郎（一八五七—一九四三）は上州（群馬）碓氷郡細野村土塩の生まれ。明治七年（一八七四）から十一年まで小学校代用教員、のち群馬師範学校に入学、十四年卒業、直ちに新堀村小学校（現松井田）につとめる。その間、新島襄、海老名喜三郎らのキリスト教演説会に出席、十六年一月七日安中教会で海老名弾正から洗礼をうけた。十七年同志社英学校邦語神学科に入学（『池袋清風日記 明治十七年 下』（『同志社談叢』第六号別冊）によると、十一月十三日の条に「邦語神学一年生上野ノ中山光五郎氏」と見え、「同志社英学校概則」（『同志社百年史資料編1』所収）では明治十八年九月現在神学科の邦語科一年とある）。同級には阿部政恒、留岡幸助、上原権太郎、阪田忠五郎らがいた。二十一

年六月卒業（別課神学）、直ちに佐野教会に伝道師として赴任した。二十五年六月丹波の亀岡、二十八年九月上州沼田の伝道に転じ、三十年一月から再び佐野教会の牧会に当る。三十二年北海道元浦河教会に移り、四十三年十月引退、その後旭川近郊の比布で農業に従事し、かたわら旭川六条教会比布講義所伝道を助けた。

「下野佐野基督教講義所略史——講義所設立ノ顚末——」によると「佐野伝道ハ明治二十一年ニ始マレリ、故新島先生明治二十一年ノ春ヨリ秋ニ至ル迄鎌倉、東京、伊香保ノ間ニ療養セラル、其際伝道会社委員ニ協議シ下野伝道ノ第一著トシテ其根拠ヲ下野安蘇郡佐野町ニ据ルコトニ決シ、同年九月十八日中山光五郎ヲ佐野ニ派遣ス、同月廿四日講義所ヲ開設ス、素ト先生ノ経綸ハ両毛ハ姉妹国ナレハ下毛伝道ハ専ラ上毛人士之ニ任シ、先ツ佐野ヲ始トシ栃木鹿沼等ニ及ヒ以テ下毛全土ニ布教スルノ大目的ヲ抱カレシカ吾人不肖末タ其目的ノ百分ノ一ヲモ達スルコト能ハサルヲ恥ツ、先生当地伝道ノ為ニ大ニ精神ヲ尽シ密カニ金円ヲ送りテ講義所ノ入費ヲ扶助セラレタルコトアリキ〔下略〕」（同志社大学人文科学研究所蔵湯浅亨三文書）。

この書簡は小林孫平「新島襄先生の書翰」として掲載され、前書には「此書は佐野教会第一の伝道者中山光五郎氏が伝道開始一年、伝道の困難を先生に訴へしに對し寄せられたるもの、中山氏より余に贈与せられたるものである」とある。「553号書簡」（明治二十二年二月二日付）参照。

16 この「553号書簡」は宛名を欠いているが「正四六四書簡」（八六六—八六七ページ）では「浜岡光哲」宛としている。いま、これに従い推定として掲げた。なお「557号書簡」（明治二十二年一月十七日付、北垣国道宛）参照。浜岡光哲については注解（第3巻『書簡編』八四四ページ）を参照。

\*内海忠勝（一八四三—一九〇五）は天保十四年八月十九日周防吉敷村に生まれる。郷校憲章館に学び、元治禁門の変ついで四境戦争に従軍。明治元年（一八六八）六月兵庫県外務局断獄掛、のち大参事、三年十二月神奈川県大参事、四年十月岩倉遣外使節に随行してアメリカ、イギリスで地方制度を調査、帰国後大阪府参事、長崎県、三重県、兵庫県の県令を歴任、十九年七月以降兵庫県知事となる。なお彼は同郷の沢山馬之進（保羅）のアメリカ留学、帰国を周旋し、また成瀬仁蔵の女子教育を支援した。

17 明治十八年（一八八五）に着工した琵琶湖の水を京都に疏通させようとする運河計画。京都府が水運、灌漑、水力利用などを目的に田辺朔郎に測量、監督を依頼して着手。明治二十三年四月九日竣工式がおこなわれた。



19

児玉仲児（一八四九—一九〇九）は紀伊那賀郡中山村（粉河）の生まれ、明治六年（一八七三）上京して慶応義塾に学び、卒業後大蔵省に出仕。明治十二年県会創設に当り県会議員となり、十五年副議長、十八年議長、十九年那賀郡長に任命され、二十一年再び県会議長となった。なお、「出遊記」（第5巻『日記・紀行編』三〇〇ページ）によると、明治二十一年四月上京した新島は二十一日、陸奥宗光を尋ねて「紀州ノ名望家○児玉仲次○長坂邦輔ノ兩人ニ面会」と見え、「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四二二ページ）には明治二十一年十一月二十八日の条に「児玉仲次ニ一書ヲ送り、和歌山県下募集ヲ委托ス」と見える。

\*明治二十一年十一月三十日、ワシントンで駐米公使陸奥宗光と駐米メキシコ公使ロメロの間に成立した日墨通商修好条約。二十二年六月六日批准書交換、七月十八日公布された。当時締結されていた対欧米諸条約こととなり、対等条約の条項（相互に治外法権の不承認）が規定されていた。

20

「311号書簡」、「312号書簡」（第3巻『書簡編』六九六—七〇〇ページ）参照。

21

シドニー・L・ギューリックが指摘するデイヴィスとラーネットの書面は大阪土佐堀三丁目福音社印刷になる小冊子『組合一致合併問題に就ての意見』（全六七ページ）が該当すると思われる。同書の末尾には、本間重慶、宮川経輝の連名で、明治二十二年一月二十五日付の組合教会諸兄弟姉各位宛とする次の文が付されている。

又

憲法草案に対する御意見に付ては一月卅日迄に在大坂委員に御申込有之度旨御通知申上置候処宣教師よりの請求も御座候間二月廿八日迄延期いたし可成速に下名の者まで御送附致被下度希望候也

25

『保守新論』は東京本郷区龍岡町三十三番地、中正社から発刊された雑誌で発行兼編輯人は渡辺鉄城、印刷人は指原安三で、第一号（明治二十二年一月二十日発行）の社説「国家の教育を論じ、併せて同志社大学設立の事に及ぶ」で「同志社大学の旨意は尤も急激なる国家破壊主義なり、彼の発起者の眼中には国家なし、又彼の翼賛者の眼中にも国家無し、我が国家を糞土視して、之を破壊せんとするの計画は、日本人たるもの豈之に与せんや、豈之を許さんや（元傍・圈点）」と非難した。なお、この社説は第二号（同年二月十五日発行）で完結した。

\*\*ノイス（William H. Noyes, 1862—1928）はインド・マドラス・ミッション宣教師J・T・ノイスの子、一八六二年三月五日マドラスのクルドに生まれる。一八八四年アーモスト大学を卒業し、ユニオン神学校からさらにアンド



ーヴァー神学校に進み、八七年卒業。その年十月イネツ (Inez C. Hayes, オレゴン州出身、ウエレスリー大学卒業) と結婚、八八年十月ボストンのバルクリリー・ストリート教会伝道師となる。たまたまミッシヨナリー・ヘラルドで四国松山組合教会の宣教師招聘を知り、バルクリリー・テンブル・ミッシヨンから派遣されて、明治二十一年(一八八八)暮、夫婦で来日した。二十四年一月不破唯次郎の招聘で松山から前橋に移り、二十六年十一月からはアメリカン・ボードの宣教師として群馬県前橋ステーションを担当、夫婦で上毛孤児院、ミス・シェッド (Mary H. Shed) の企てた幼稚園 (のち清心幼稚園) の運営を助け、上毛の諸教会さらには遠く熊本などにも巡回伝道をおこなった。三十年四月宣教師を辞任し、五月帰国した。ノイスの上毛への招聘の経緯については「593号書簡」(三月一日付、不破唯次郎宛)ならびに「620号書簡」(四月二十二日付、不破唯次郎宛)にアンドーヴァー神学校出身のノイスに対する新島襄の懸念が見られる。

なお、新島のアメリカン・ボードに対する顧慮を述べた背景には、ノイスに関するアメリカ留学中の原田助の報告が影をおとしていると考えられる。その報告とは明治二十一年十二月二十六日発行『基督教新聞』の次の記事である。

近頃日本に關係ある事にて新聞に噴々たるもの二あり、一はノイス氏の按手礼、一は一致組合両会の合併に就ての議論に候、ノイス氏はアンドーヴァ神学校の卒業生にて先年外国宣教師たらんことをアメリカン・ボードに志願したるに來世の試験を信ずるの故を以て採用せられざりし一人なり、右の一条は當時教会の一問題となり、前年及前々年のアメリカン・ボード年会にては之に付て激き議論の末、非採用説議場に勝を得て今日に至り、爾來ノイス氏はボストン府バルクリー街教会の伝道を補助し居たる由に候、然るに去十月上旬の頃、同教会にて伝道祈禱会の節、或る一人か「ミッシヨナリー・ヘラルド」雜誌に掲載したる四国松山組合教会信徒より宣教師を送らんことを米国の信徒に訴へたる書状を読むや、会衆は其要求の熱切なるに感じ、同教会より一人の宣教師を送らんことを発言したる者あり、忽ち全会の賛成する所となり、ノイス氏に協議し遂に同氏を派遣するの議を決し、按手礼執行のため近傍なる諸教会を招き審問の上、異議なく按手礼を執行せしが、其式場にて衆議今一応アメリカン・ボードへ申出でゝ同社より派出する方穩当ならんとの勧めによりて同社に申出ることゝなれり、此事の世間に知らるゝや、新神学に同感を抱ける諸新聞は採用すべからざるの理なきを論し、

反対の諸新聞にては採用すべからずと主張したり、左ればノイス氏がアメリカン・ボードに此度採用せらるゝや否は耳目の焦点と相成たる次第に候、然る処委員会にては前年申出の節と同様の教義を維持するに於ては採用しがたしとの答書を与へたるよし、左ればノイス氏は愈一教会の費用を以て派遣せらるゝことゝ相成り申すべきかと存候、斯くの如くなればアンドワ派の人々とアメリカン・ボードの間はいよゝ遠ざかれるものゝ如し(本年クリーブランドの年会に於て同派の有名なる人々の多く欠席したるにても知るべし)、此勢ならば調和の策もますます困難なるべく、然るときは往々には新に伝道会社を分立することともならざるを知るべからずと考へられ候〔後略〕(原田助・米國智府通信)

26 伊勢時雄は会堂建築資金募集のため、自ら渡米することを決意し、日本基督教伝道会社にはかったところ、本郷教会を無牧にすることと反対された。伊勢はそのために、教会は村井知至に託し、自費で明治二十二年三月渡米した。なおその間、伝道会社からの月額三十拾円の手当は中止された。伊勢は三月十八日サンフランシスコに上陸、その後ボストン、ニューヨークをはじめアメリカ主要都市を歴訪、十月にはヨーロッパに渡り、二十三年二月二十八日有志からの寄附金一万ドル余を得て帰国した。在米中、彼は横井姓に復している(『町本郷教会百年史』)。

27 奈須義質については注解(第3巻『書簡編』)九一一―九一二ページ)参照。

29 「同志社大学設立募金日誌」(第5巻『日記・紀行編』四三二ページ)によると、明治二十二年一月二十九日の条に「○大沢善助氏ヨリ、寺町の頭ニ於テ彦根屋敷ノ跡六千三百廿七坪、価ヲ一千三百八十円ニテ買取ノ報アリ。又続テ六百坪ノ地ヲ六十三円五十銭ニテ買得ノ報ニ接ス、即チ将来大学ノ地ナリ」と見え、また卅一日の条に「○岩崎弥之助君ニ一書ヲ送り、同家寄附金八千円之内三千円丈ケハ、土地買得ノ為ニ使用スルヲ許サレト頼ミ遣シ、又同事件ニ付キ波沢栄一君(ニ)一書依頼状ヲ差出ス、此レハ同氏取扱上ノ事ニ関ス」とある。

30 須田逸平(一八五〇―一九二二)は中山道安中宿の脇本陣須田市十郎、しづ(志都)の長男。はじめ旧熊谷県神風講社の取締役となり、キリスト教排撃の立場をとったが、母しづは明治十八年(一八八五)八月二日安中教会で杉田潮から洗礼をうけ、その勧めをうけて翌十九年五月二日、妻さきとともに安中教会で星野光多から洗礼をうけともどもに篤信の教会員となった(『安中基督教教会々員名簿』)。二十一年義兄千明三郎の死後、伊香保に移り、千明仁泉亭の業を継ぐ。

なお、この「55号書簡」は日付を欠き、本文中には「当地ハ大ニ温和之好時節と相成候得共、御地ハ今ニ余寒」と見えるが、「正二三六書簡」(五三三—五三五ページ)の「明治二十二年一月〇日」とする取扱いに従って「一月」とした。

31 頭山満(一八五五—一九四四)。安政二年四月十二日簡井亀策の三男として生まれ、のち母の実家を継いで頭山と称した。愛国社の国会請願運動に加わり、明治十四年(一八八一)玄洋社を組織。「同志社大学設立募金日誌」(第5巻『日記・紀行編』四三二—四三三ページ)によると、明治二十二年一月二十五日の条に「広津友吉(友信ト改名ス)氏、九州ヨリ返ル。福岡ノ福陵新報持主頭山満。主筆川村惇ノ両氏ニ書面ヲ出スベキ旨被申」とあり、ついで一月三十一日の条に「福陵新報之頭山満氏ニ書差シ、旨趣書等ハ頭山、主筆川村惇ノ両氏ニ送ル」と見える。なお同日誌によると、新島は二月二十五日にも再び大学賛成の依頼状を出している(前掲書、四三六ページ)。

33 「55号書簡」一五ページの注解参照。なおこの「55号書簡」は二月四日付として昭和五年七月二十日発行『上毛教界月報』(三八〇号)の教報「両毛教師会並に特別伝道委員会」記事に部分的に引用されている。

36 風斗実(筑後(福岡県)山門郡筑紫村(現柳川市)出身、明治十四年十一月福岡県会議員に当選、森信夫も山門郡柳川の出身、十三年十月県会議員に当選、ともに地方名望家であった。「同志社大学義捐者姓名簿」(自明治二十一年十一月至明治二十二年四月)によると、福岡日々新聞社の取扱った計「金百三拾三元貳拾銭」の義捐金額、住所、氏名を知ることができる。

これには風斗実(「金拾円」<sup>下札</sup>「五円領収」)筑後柳川筑紫村 風斗実、森信夫は「金三拾五円」<sup>下札</sup>「拾円領収」)筑後柳川南柄町 森信夫」とあり、森信夫と同じ住所で「金三円 森エイ」、風斗と同じ住所で「金貳拾銭 風斗マキ」の名も見える。なお「同志社大学設立募金日誌」(第5巻『日記・紀行編』四三二—四三三ページ)の明治二十二年一月二十五日の条に「広津友吉(友信ト改名ス)氏九州ヨリ返ル〔中略〕柳川ニ於テハ風斗実、森信夫之両氏殊之外大学ノ為ニハ尽力致シ吳候由被語タリ」と見え、二月三日の条に「柳川之風斗実、森信夫之両氏ニ謝礼状ヲ出ス、両氏大学ノ為尽力セラル、ヲ謝ス」とある。森信夫については「53号書簡」(明治二十二年十二月二十八日付、森信夫宛)参照。

37 河波荒次郎は奈須義質の辭任の後をうけ、明治二十三年四月まで甘菜基督教会伝道師。河波は明治二十一年九月

本郷金助町講義所から伊勢時雄の薦書で甘楽教会に転入会、奈須義質のもとで教会書記をつとめ、教会合同問題に関する憲法取調委員となる。二十二年一月二十五日教会の総会で奈須伝道師の後任に推された。二十三年一月新島襄の永眠にさいしては大磯に赴き、引続いて同志社における葬儀に教会代表として出席、その年四月教会伝道師を辞任した。

なおこの書簡は大正七年九月十五日発行『上毛教界月報』（二三八号）に紹介された。

38 新島は明治二十一年十一月七日「同志社大学設立の旨意」を公表し、十二月中旬から諏訪山和楽園の借家で冬期中保養をはじめが、この二十二年二月はじめての「511号書簡」までに投函した書簡数をしるしている。

\* 斎藤寿雄（一八四七—一九三八）。甘楽教会役員、医師。明治十三年（一八八〇）から県会議員、郡会議員、議長、衆議院議員三回当選。北甘楽郡高瀬村の出身。明治十七年二月二十一日甘楽教会創立の受洗者三十五名の一人。教会設立後、宮前半五郎と選ばれて執事となり、爾後自宅で説教会が催され、また自宅を飯会堂とすることなど教会の役務に尽瘁、河波荒次郎、葉山於菟とともに教会から憲法取調委員に選ばれていた（『日本キリスト教団甘楽教会百年史』）。

41 この「511号書簡」は「正三六九書簡」（七六一ページ）では「憲法発布同志社祝会委員宛」とし、その本文は片仮名、平仮名まじりの文体であるが、収録にあたってこの書簡のもっとも早い掲載に相当する『DOSHISHA 文学雑誌』、二〇号所収「校長よりの書翰」に基づいて、これを収載した。なお「校長よりの書翰」には「当今神戸和楽園にて保養中なる新島校長は此度我が校にて催したる憲法発布祝会に就て非常に尽力せられ且又左の一書を寄せられたり、其の文に曰く」の一文が付されている。

42 九鬼隆一（一八五二—一九三二）は嘉永五年三田藩家老星野貞幹の次男に生まれ、幼名は貞四郎、万延元年（一八六〇）丹波綾部藩家老九鬼隆周の養子となり、隆一と改名。明治二年（一八六九）上京して慶応義塾に入る。五年四月文部省十一等出仕、大学南校幹事、七年四月文部少丞、文部省にあって新島襄の同志社設立を支持した。九年二月文部大丞、十年一月文部大書記官。十三年二月文部少輔となり、十七年五月まで教育行政の中樞にあって、「九鬼の文部省」といわれた。森有礼が文部省御用掛に就任するにおよんで九月特命全権公使としてアメリカに派遣され、二十年十月まで在任。二十一年帰国し、東京美術学校の開校に岡倉天心を校長に抜擢、二十二年五月帝國博物

館創設に参画して初代館長に就任した。

\*九鬼隆義（一八三七—一八九一）。旧三田藩の最後の藩主、三田県知事。福沢諭吉と親しく、同藩医川本幸民の影響をうけた。明治四年（一八七二）白洲退蔵、小寺泰次郎と神戸に志摩三商会を興した。アメリカン・ボード宣教師J・D・デイヴィス、J・C・ペリーと親しく交わり、明治八年十月創立の寄宿舎学校（神戸女学院）の創立を支援し、また神戸・三田公会創設の原動力となった。

43 「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四三四ページ）の明治二十二年二月六日の条に「大坂ノ鰻谷東之町一番地住友吉左衛門ヨリ広瀬宰平、伊庭貞剛両〔氏〕ノ英断ニヨリ大学ヘ三千円ノ寄附ヲ申込マレタリ」と見える。

44 小田川全之（一八六一—一九三三）は文久元年二月幕臣小田川彦一の長男として江戸小石川に生まれる。尚川と号す。明治十六年（一八八三）五月工部大学校土木工学科を卒業。爾後、十九年まで群馬県ついで東京府御用掛となり土木事業に従う。二十年から二十三年まで私設鉄道その他民間土木事業にたずさわり、二十三年古河家に入り足尾銅山で土木工作を管掌した。なお二十四年四月献堂された横井時雄の牧する本郷基督教会の本郷会堂は辰野金吾の設計になり、小田川は太田光郎と工事担当した。

この「517号書簡」は「正五七一書簡」（二〇八五—一〇八六ページ）では宛名を「小田川金之助」（ただし本文の宛名は「小田川金之」としているが「小田川全之」と改めた。

「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四三四ページ）の明治二十二年二月八日の条には「東京麻布今井町二十四番地工學師尚川全之君ニハ二十円寄附致異候由、又懇切ノ来狀ト同氏ノ著書（工學ノルイ）一冊送附有之候」と見える。

45 なお、この「517号書簡」は『同志社校友同窓会報』（三一号）に油谷治郎七によってその全文が紹介された。

46 「560号書簡」二〇ページの注解参照。

\*この「518号書簡」は「正五〇六書簡」（九六〇—九六四ページ）でははばかって該当部分がその字数だけ□で示されているが柏木義円亨によって、その原の姿を知ることができる。

51 大和博については「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四三五ページ）の明治二十二年二月十三日



の条に「筑後三池集治監ノ大和博氏ニ、大学ノ為尽力シ呉ル、様一通ノ依頼状ヲ出ス」と見える。

なお書簡本文の「」による補訂は森中章光筆写の稿本によった。

- 52 広津友信については注解〔第3巻『書簡編』九〇四—九〇五ページ〕参照。なお、神学科三年生である広津は郷里（福岡県山門郡筑紫村）の縁故もあり、九州における大学設立の運動にたずさわり、頭山満、野田卯太郎、永江純一、風斗実、森信夫らを歴訪、一月二十五日京都に帰った。

- 53 この「581号書簡」は同志社用箋にタイプ印刷されている。前欠で、宛名の明記もない。しかし、この書簡は「605号書簡」（明治二十二年〔三月二十一日付、原六郎宛〕）と関連し、「原氏一件」として、その宛名は渋沢栄一が推定される。「605号書簡」七九ページの注解参照。

- 55 片桐清治については注解〔第3巻『書簡編』八六五—八六六ページ〕参照。この「585号書簡」に見える学校は仙台に設立された東華学校であり、彼は明治二十一年水沢吉小路から招かれて学校の幹事・教師となり、校長代理の市原盛宏、和田正幾を助けた。なお、この「585号書簡」は『新島研究』（一九七五年五月発行、四四号）に紹介された。

- 59 中村栄助は「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四三五ページ）によると、明治二十二年二月十七日の条に「社員中村栄助米国ヨリ帰航ス」と見える。

- 61 安部井磐根（一八三一—一九一六）は天保三年三月十七日奥州二本松藩の安部井又之丞の長男に生まれる。明治元年（一八六八）二本松落城のおり、父十之丞は自刃。磐根は藩政の修復に尽力。明治十年県会議員に当選、議長となる。十一年から十五年まで安達郡長、県令三島通庸の施政にあきたらず辭任。二十三年衆議院議員、立憲改進党に所属。二十六年第二次伊藤内閣のとき衆議院副議長。三十一年三月ついで八月の第五回、第六回衆議院選挙に当選。この「591号書簡」の当時は県会議長。

なお「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四三二—四三三ページ）の明治二十二年二月五日の条によると、「福島之綱島佳吉氏ヨリ左之人名ニ書ヲ可送旨申来ル」として次の人びとがあげられている。

○福島県知事 山田信道、○書記官 永峰弥吉、○同 今井鉄太郎、学務課長井文書課長 小倉信宜、庶務課長 沼沢七郎、土木〔課長〕 佐々木奉光、兵事〔課長〕 種子田正命、農商〔課長〕 渡辺明義、典獄〔課長〕 東恣、衛生〔課長〕 三浦茂司、会計〔課長〕 北川良慎、警部長 岩下敬蔵、収税長 那珂通文、信夫郡長

田中章、師範校長 中村泰平、中学校長 和田豊、病院長 木脇良、同副院長 北村徐雲、郵便電信局長  
橋本廉平、裁判所長 音羽安成、検事長 納富利邦、○県会議長 安部井磐根、○副議長 矢野重高、常置  
委員 山口千代作、谷宗徳、柏原左源太、刈宿仲衛

なお綱島はこのほか、生糸商 佐野利八、銀行家 北村芳太郎、有志家 森谷岩松らの名をあげている。

62 この「591号書簡」には日付、宛名の明記を欠いている。「統三一書簡」(四七一—四八ページ)では日付を「明治二十二年二月」、宛名は「新島公義」宛としている。いま、これに従い、推定としてここに掲げた。

63 不敵清子は明治二十二年一月九日永眠。

64 松本勘十郎は注解(第3巻『書簡編一』八三八ページ)参照。

65 この「591号書簡」は「同志社大学設立募金日誌」(第5巻『日記・紀行編』四三九ページ)の明治二十二年三月二日の条に見える「山中百氏ノ勸ニヨリ香川県ニ着手スル事ニ致シ、山岡邦三郎ノ来高ヲ促カシ、又該地ノ「高松丸亀町」森田武左衛門、三木始ノ両氏ニ書ヲ送り、県会議長松本貫四郎氏ニ尽力セラ「レ」ン事ヲ依頼ス」に相応する。「591号書簡」の八ページの注解\*\*参照。

66 この「591号書簡」は日付、宛名の明記を欠いている。「統三一書簡」(四九ページ)では日付は「明治二十二年三月二日」付、宛名は「新島公義」宛としている。いまこれに従い、日付、宛名を推定として、ここに掲げた。

\*\*明治二十二年三月五日付、徳富猪一郎宛に諏訪山和楽園から出された「591号書簡」の端書もしくは端裏書部分は、折本仕立てのとき断裁したと思われる、徳富が新島襄の死後はやく、『国民新聞』(第二〇号、明治二十二年二月十日発行)の第一ページに掲載した記事に該当する部分は認められない。徳富の記事では「三月六日神戸和楽園より先生の発せられたる書翰の端」としている。その端書(端裏書)は次の通りである。

Freedom is my living motto.

なお、この記事は大正十四年七月二十日発行の『上毛教界月報』(三二〇号)にも太田生による「新島襄先生の書翰」として紹介された。

69 別紙は伝存しない。

70 下村孝太郎については注解(第3巻『書簡編一』七八五、七九〇ページ)参照。なお、この「591号書簡」における下

村の在米中の消息は「私立同志社波里須理化学学校設立之儀ニ付伺」(『同志社百年史資料編』四六〇ページ)に収められている「教頭履歴」のなかに次のように見える。

〔明治〕十八年九月米國「マサチウセツト」州「ウユトル」理科学学校へ入学、化学ヲ修ム

同廿一年七月卒業「バチロル・オフ・サイエンス」学位ヲ授カル

同年十月同國「ジョンホブキンス」大学ノ大学院ニ入り有機化学ヲ修ム

同年十二月独逸化学会員トナル

71 ハリスの寄附金については「661号書簡」一五〇ページの注解参照。

72 この「599号書簡」の一部が昭和五年七月二十日発行の『上毛教界月報』(三八〇号)に「両毛教師会並に特別伝道委員会」の記事の中で引用されている。

74 熊本英学校は明治二十一年四月二十日設立認可をうけ、海老名弾正は校長。熊本洋学校について大江義塾、熊本英語学会の系譜をひく男子校。

75 近藤喜則については「同志社大学設立募金日誌」(第5巻『日記・紀行編』四四〇—四四一ページ)の明治二十二年三月十三日の条に次のような記事が知られる。

近藤喜則氏來訪ス、山口漫遊中諸所ニ於テ大学ノ賛成ヲモ誘導シ呉タルヨシ。其中最賛成致シ呉タル人ハ山口県周防岩国義濟堂森脇簡氏ナル由語ラル、但シ此人ハ元ハ正金銀行ニ従事シタル人ナル由〔中略〕山梨南巨摩郡睦合村516近藤喜則氏ノ(驛趾ノ父)談ニヨル

76 目賀田護法(目加田栄)はそのキリスト教排斥論を展開した『弁斥魔教論』(明治十九年一月二十五日版權免許、同年五月一日出版、神戸元町通船井弘文堂発売)によると、その本貫は滋賀県平民、自序の年記は「明治十八年秋八月」とあって、その末尾には「洛東処士、宇治川の辺にしろす」としているが、奥付の住所は「兵庫県摂津国神戸区相生町老丁目三六三番地寄留」と見える。明道協会の会員としてキリスト教排斥、仏法擁護の運動を展開し、二十一年一月久邇宮朝彦王から護法の居士号をうける。同年九月、神戸湊川神社で宣教師アッキンソン排斥の演説をおこない、以後神戸又新日報、朝日新聞などに排耶論説を掲げ、また演説会を開いて、キリスト教排斥の活動をおこない、とくに新島襄の大学設立運動をはげしく批判する立場を表明していた(苑道春千代編『楠公拝殿之一椿事護法



活論』、神戸都文堂発売、明治二十二年五月一日出版。『明治過去帳』によると目賀田は神戸に育児院および施療院をおこして多年社会救济に尽し、三十五年五月二十日肺患で没したと、その後半世をしるしている。  
なお七月二日付新島襄宛の書簡は次の通りである。

七月二日 新島襄

①神戸市多聞通二丁目 ②京都上京区寺町通丸太町上ル ④墨

拝啓、予て決闘云々御申越の始末に付、過日来屢書面を以て御回答を相促し申候得共、今に何等の御応答をも給り不申、如何の次第に御座候哉一円了解仕兼居候と申も他なし只々此度決闘云々の局を御結びに相成不申のみならず夙に貴社大学御建設の儀ニ付ても拙者は昨年十一月卅日発刊の隔夕報知附録を以て聊意見のある所を天下の仁人に訴へ剩へ貴君か当春御病気の為当港諏訪山和楽園に御加養中にも久々にて面会し時事談話の末遂に貴君ハ躬親から拙者に対し同志社大学設立の不可を論せし隔夕報知第老号の附録は大に愛国護法の精神相溢候杯と拙者の面前に於て御批評も有之候に就てハ拙者も亦速時尊君に対し揚言して申候には此度貴君か御設立の同志社大学は至極結構の事に候得共御校の主義目的に至りてハ国家有害の基督教を基本として被為立候大学なるが故に拙者は敢て見聞の儘ニ耶蘇教の弊害と尊君の心事とを記載せし者なれハ誤謬も亦之れなしと信し侍候、然し今日は面談の序にも候得ハ此の同志社大学の不可説に対し御異論もおはしまし候ハ、承り申度と申候処、貴君には単に能く御調の上御記載になりたりと思はるゝなり、然し同志社大学の件ハ凡て金森通倫を以て担当致せ置候ニ付、不日同氏も来神致すべければ貴方(護法)に遣し篤と説話ニ及はんと申聞られ候はずや、因て拙者は重て申候には敢て請ふ、金森通倫氏の来臨を煩し申にも及はざる事なれハ何卒同氏の来神せし際御報道に預りたし、該時には拙者より罷出候て貴説を承り申さんと申候得ハ貴君は強て同氏来神の上ハ貴方へ(護法)遣し申さんと申聞られ候故拙者も尊意に随ひ一先帰宅致し爾来鶴首相待居候得共其後金森氏来神の風聞は屢耳朶に達し候にも拘らず遂に御差向にも相成不申候故不得止拙者より左の文面を以て

拝啓、先般ハ久々にて拝顔を得申候処、生憎御不快の際にて充分の商量も得不申残情此事に御座候、然し該時の御申聞には不日金森通倫氏を以て弊屋へ向け御意見御洩し被下候由承り候ニ付、爾後鶴首相待候得共尚

未憤臨を忝ふせず、去ながら其後金森氏には屢々来神も有之候て彼処此処の有志者に面し顔に勸化等も致し被居候やに聞及候得共、予て相待居候拙宅へは御来訪も無之は如何の思召に被為在候や大に訝り申候、尤も尊氏と拙者との談合より金森氏を御差向云々に相成候様の事情に相抄候事故、敢て金森氏の来臨と否とを以て同氏に對し相責可申ハ不本意の事なれとも、畢竟する所ハ尊氏の御失念乎若しくハ御違約乎の二点に緣由候より斯く閑等に相流れ候事と存候間、愈前約の通り茲兩三日中、午前十二時迄に金森氏を以て弊屋へ御差向け御意見御洩し被下候敷、又ハ拙者より尊寓へ向け罷出候て商量に可及候敷、何れとも至急の御回答を待上候、早々頓首

三月十五日

目賀田護法

新嶋 襄殿

〔中略 ここに三月十六日付、目賀田護法宛書簡が目賀田によって筆写されている〕

以上の事実は如何に神經と心臓に被為悩候節とは云へ、豪氣なる尊君にしてハ必ずしも御記憶〔イタリ〕の御事と奉存候、然るニ右応接以来已に半期の時日を経申候得共今に何の御沙汰をも得不申、又金森氏をも御遣しに相成不申、去りとして別ニ御意見御洩しにも預り不申等の御始末杯は甚以て御身柄にも不被為似御挙動とこそ奉存候、全体貴君の御内情は疾く承知も致居候ニ付此度決闘云々の始末とても前同様の轍にて荏苒閑等に被成置候御所存ならんとは奉察候得共何分決闘なんとの云々一度天下公衆の耳目に相触候以上ハ此儘に相済し可申場合にも至り兼候間、押して何分の御回答を煩し申度候、若し此上何等の御挨拶も無之候ハ最早不得止事に候故無拋当方より拝参、直接の對論に可及候条左様御了承置可被下候、先ハ最後の御掛合迄如斯候也

明治二十二年七月二日

日本魂新聞長

目賀田護法 印

同志社総長新嶋 襄殿  
侍史

77 「書目十種」については明治二十二年三月二十二日発行『国民之友』（第四五号）で「本社曩に我國に於て政治、文学、哲学、科学其他種々の芸能を以て名声を博したる学士会員、大学教授、新聞記者、著述家に向て、その最も暗

好して愛読する書籍十種（和漢洋を問はず）を指示せられんことを請へり、而して今や陸統その回答に接せり、就ては遠からず本誌に掲載して愛読諸君の好意に酬ひんと欲す、蓋し是れ各人特得の趣味を一片の紙面に錯綜排列するものにして、是れ豈に特り諸君の快楽を來すのみと謂はん哉」と見え、今日いうところの読書アンケートをおこなった。残念ながら新島襄の「書目十種は」見ることはできないが、同年四月二十二日発行『国民之友』第四八号の附録に敵谷修をはじめとする六十三名、五月二日発行第四九号に野口保興をはじめ五名、六月二十二日発行の第五四号に志賀重昂の回答、あわせて六十九名の「書目十種」を知ることができる。

78 「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四四三—四四五ページ）によると、明治二十二年三月二十日の条に「兵庫県會議員中、面会セシ人々ハ左ノ如シ 石田、善積、高津（談話）、長、森（鹿島ニテ逢フ）、内藤（田中）、衣川（大島老人ナリ）、中川（信者）、飯田（善積ニテ逢フ）「下略」と見え、貼付されている活版の名簿で、美濃郡渡瀬村の石田貫之助、神東郡川辺村の内藤利八、多可郡津万村の善積順蔵、それに神戸江場社の鹿島秀磨らには新島がしるしを付している。

なお同日（四四九ページ）の条には「石田、内藤、鹿島、善積之四氏ヲ招キシニ、石田、善積ノ二氏ハ差支有之來ラス。内藤、鹿島ノ両氏ハ招ニ応セラレ、一力亭ニ於テ共ニ晚餐ヲ喫ス。甚閑雅ナル小会ナリ」と見える。

79 この「郵号書簡」は草稿であり、日付ならびに宛名の明記を欠いているが、「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四四九—四五〇ページ）の明治二十二年三月二十一日の条によつて、その日付を三月二十一日、宛名を原六郎と推定した。募金日誌の二十一日の該当の記事は次の通りである。

数日前渋沢氏ヨリ來狀アリ、原氏ノ同氏ニ送リシ書ヲ送附ス。原氏ノ書中、渋沢氏ノ屢督促セシヨリ面白カラヌ感情ヲ起セシニヤ、予ト引合セアリタレハ此上督促スル勿レトノ意ナリ。又予ニ対シ種々は迄ノ間違ヨリ奇異ノ考ヲ抱キ、其ノ意ヲ得サル旨ヲモ陳ヘラレタリ

予ハ渋沢氏ニ間違ノ依テ生セシ所ヲ陳シ、又原氏ニモ一通ノ書ヲ送り、其ノ誤謬ノ依テ生セシ所ヲ開陳シ、其ノ意ニ任スヘキヲ説明ス

渋沢氏ヘハ、原氏之引合セアリタル後返書ヲ出サス、直ニ井上伯ニ御相談申上、又北垣知事東上之比、一応小生之所望（早ク金ヲ第一銀行（渋沢の第一国立銀行）ニ払込ミノ事）を陳シ、原氏ト御相談被下度旨御依頼申上

置候間、多分原氏ニも一応聞及ヒタル事ト存候（二月十五日付ノ書「引号書簡」中ニ原氏（督促）之少々不健ナレ「ド」モ多分頼ミしならん。又他人ニ御督促アレト相頼候処より）何ニ氣渋沢氏之方ニ未納之人々ニ御督促を頼むと申上候なりしを、渋沢氏ニ昨年七月月中ノ申合及依頼等も有之候処より、原氏之方ニ督促せられた「るな」らんと、是迄行違之嫌々を相記し相送申候

なお、この記事に見える原六郎の渋沢栄一宛書簡（遺品庫史料）は次の通りである。この書簡は東京第一国立銀行便箋に写され、日付を欠いている。

渋沢栄一 [写]

拝啓、京都同志社大学創立寄附金ニ付再応御書翰之趣承知仕候、然ル処右ニ付而は貴下ヘモ嘗テ御面談申上置候通右寄附金ハ御手元ヲ経ス小生ヨリ直ニ新島氏ヘ払込可申旨過般同氏方ヘ申遣し有之候得は今更貴下ニ対シ間合忤致スヘキ道理無之筈ニ存候、殊ニ該金タルヤ大学創立費ニ充ツルノ目的ナルコトハ今更申迄モナキ次第ニ有之候、然ルニ未タ創立確定ニ至ラザル今日ニ於テ急ニ出金ヲ要スル事ハ無御座筈ニ被存御督促ノ趣了解難致候、小生ニ於テハ一旦約定ノ上ハ敢テ出金ノ遅速ヲ如何と申訳ニハ無御座候得共、元ヨリ大学ノ創立ヲ賛成セシ義ニ有之候得者出金サヘスレハ主眼タル大学創立ハ如何成行候トモ構ハサルカ如キ不親切ノ精神ニ出シニハ無御座候、又新島氏ニ於テモ事ノ成否ニ関セス金員ヲ徵集スルノ精神ニ無之ハ万々確信シテ疑ヲ容レサレトモ未タ嚴重ニ請求スルノ場合ニ立至ラサル様存候、就而は其創立経費金額ニ充ツヘキ寄付予約金確定ノ上ハ何時タリトモ出金可致候、新島氏ハ右等ノ報知モ不致、且ツ小生ヨリ申遣候書翰ニ対シ回答モナクシテ度々貴ヲ煩候義ハ甚以テ不得其意次第ニ御座候、此義小生ヨリモ申遣ヘク候得共、右御了知之上可然先方ヘ御回答被下度、此段御答マテ如此御座候、早々不宣

渋沢栄一様

原 六郎

\*\*\*三万一千円<sup>の</sup>金額は明治二十一年七月十九日大隈重信邸における寄附申込総額である。「漫遊記」（第5巻『日記・紀行編』三五―三五二ページ）によると、大隈重信 一千元、井上馨 一千元、青木周蔵 五百円、渋沢栄一 六千元、原六郎 六千元、平沼專造（八太郎） 二千五百円、岩崎弥之助 五千元、岩崎久弥 三千元、益田孝 二

千円、大倉喜八郎 二千円、田中平八 二千円。なお「漫遊記」（第五巻『日記・紀行編』三八一ページ）参照。

81 加藤寿（一八五八一—一九四六）の履歴は「私立同志社波里須理化学校設立之儀ニ付伺」（『同志社百年史資料編一』四六二—四六三ページ）によると次の通りである。

原籍 岡山県備前国岡山市大字留田町百十七番屋敷同居

寄留 京都市上京区塔之段毘沙門町第二番戸

士族 加藤 寿

安政五年六月八日出生

一 明治四年十月ヨリ同五年十月迄岡山普通英学校ニ入塾

一同六年二月ヨリ同八年九月迄備前国児嶋郡天城静修館ニ於テ漢学ヲ修ム

一 明治十年二月ヨリ同十一年九月迄岡山池田学校ニ入学ス

一 明治十二年四月廿一日ヨリ同十三年十一月迄岡山県邑久郡書記奉職ス

一 明治十五年九月京都同志社邦語神学校ニ入り同十八年六月同科卒業ス

なお、この「008号書簡」の当時、加藤は予備学校幹事、加藤勇次郎は予備学校校長である。

83

明治十九年（一八八六）十二月、一家をあげて上京し、民友社を創設し、『国民之友』を刊行する徳富猪一郎は、はじめて父一敬、母久子を伴い、京都方面を旅行三条小橋西の万屋に泊り熊本に帰省する。同行の山田武甫は衆議院選挙出馬準備のためで、徳富猪一郎はそのために熊本県下を遊説して廻った。

\*\*\*この海老名弾正に宛てた「008号書簡」は、『008号書簡』（三月十三日付、海老名弾正宛）に次ぎ、『008号書簡』（四月五日付、海老名弾正宛）にかかわるものである。北垣国道の子息を熊本英学校にあずかることについて、新島が海老名に伝えている「北垣知事之如き人物（熱心家、之好意を繋ぐ）意図は、新島の一面をえがき出している。「元来吾人ハ金ニ頼ミ人間ニ頼マサルハ申迄も無之」とは熟知の間柄でなくては見られぬ心底の吐露であらう。

85

新島襄から披瀝された姿勢と関連して、海老名弾正が新島にどのように返答してきたかも、事の性質上見逃せない。海老名弾正の書簡を参考に掲げる。

三月二十五日 新島襄



①肥後熊本新屋敷町三百五十六番地 ②神戸港諏訪山和樂園ニテ ④墨

辱尊翰、陳者北垣氏之子息ニツキ御申越之義ハ学生之重立タル者共相談仕候処左之如ク相決申候、教員モ学生モ注意ニ注意ヲ加ヘ可相成ハ才力ト人物ヲ択テ入校ヲ許ス積ナレハ知己之招介<sup>マカセ</sup>ニヨリテ平素之氣象ヲ吟味スル筈ニ御座候間実ハ確君ノ義御断申上度候得共先生及同志社之或ル知己ヨリ之御相談トアレハ如何トモ可致候、乍憚前以テ一言申上度候事アリ

拙校ハ同志社ト異リ寄宿所ト云ヒ何ト云ヒ至テ簡暴、六枚敷ニ少クトモ四名若クハ六名モ繁居候位ナレハ随テ食物モ亦至テ鹿、菰<sup>コ</sup>四十钱之食料ニ御坐候、小々ニテモ美服セントスルモノアレハ直ニ之ヲ排撃スル故ニ、入費月謝及書籍代共目下三円ヲ要セザル程ニ御坐候、自宅ヨリ通学スル外、一切下宿ヲ禁シ、悉皆入塾為致候ニ付、実ニ敵敷習練ヲ加ヘ居候、又時々遠足シテ氣力身体ヲ試ミ申候、肥後人ニ取リテ毫モ敵敷ト申訳ニハ無之御坐候得共、京坂神之人ニハ殊ニ貴族然タル人ニハ難堪<sup>ニガミ</sup>可被為感候、因テ確君ハ或ハ逃出スノ恐アリ、此事ニ至リテハ護衛仕兼候故ニ金子ハ尽ク小生宛御送リアリテ、毫モ旅費之資タルモノ無之トキハ或ハ足ヲ縛スルニ至ベシヤモ雖モ、右之段御承知被下テ御送り有之候ヘハ小生等乍不肖充分之方ヲ尽シ御訓練可仕候、何卒九州男子ノ剛氣ヲ吹込様仕度候間篤ト御勘考可被成下候、拙校ハ明後日ヨリ試験、十日計休業、来月十日ヨリ始業之積ニ御坐候、確君ヘモ右之段前以テ承知有之様御申聞被下度候、先生ニハ申上度ハ実ニ山海之如シ、今日迄音信ヲ怠リタル理由モ縷々申上度シ、然シ復々御免ヲ蒙リテ何時カ御拝面ニ期シ度候、何卒其段御海恕可被成下候、草々拝復

三月二十五日

86 白石村治(一八六五—一九二九)は安中<sup>安中</sup>の出身、新島襄をたよって同志社に入學。のち明治学院に移り、一致教会伝道師となり、明治十七年六月より翌十八年三月まで神奈川小田原に伝道。その後、組合教会に復帰し、群馬県富岡、原ノ町伝道。明治二十年六月以降長岡伝道に従い、長岡教会(明治二十二年十月設立)初代伝道師。二十二年十月より東北の福島伝道に従事。二十四年四月組合教会との関係をたち、日本聖公会伝道師となる。四十二年聖公会牧師職を辞して、東京で古美術研究に従う。(本井康博「最初の定住伝道者、白石村治」『長岡教会百年史』)。

\*坂田忠五郎は越後村上出身、明治二十一年六月同志社別課神学卒業。はじめ五泉伝道に従事した。

87 シャフ (Philip Schaff, 1819—1893) はスイスの生まれ、一八四四年アメリカ東部ドイツ改革派教会マールサーズバーク神学校教授として招聘され、以後アメリカの教会史家、とくに教会の信条の研究家として著名。その編著である新約註解書 “The International Revision Commentary on the New Testament”, New York, Charles Scribner's Sons, 1882-84 は六巻からなる。

『新島旧邸文庫所蔵目録』によると、この新約註解書は、一、四、五、六巻が収蔵されていることが知られる。

Vol. 1 : The Gospel according to Matthew, by the editor [Schaff], 1882.

Vol. 4 : The Gospel according to John, by Milligan and Moulton, 1883.

Vol. 5 : The Acts of the Apostles, by J. S. Howson & H. D. M. Spence, 1883.

Vol. 6 : The Epistle to the Romans, by M. B. Riddle, 1884.

架蔵に欠本のあるのは未購入ではなく、貸出して未返却と考えられる。なお旧邸文庫にはシャフの著作は、この註解のほか次の書物があり、新島は在米中にこれを披閲していることが知られる。

The History of the Christian Church, 2 Vols. New and cheaper ed. New York, Charles Scribner and Co., 1869-70

The Person of Christ: the miracle of history, with a reply to Strauss and Renan, and a collection of testimonies of unbelievers, Boston, the American Tract Society, 1865

89

この「冊号書簡」は「正五八一書簡」(一一〇五一一〇六ページ)においては、本文のみで、日付ならびに宛名の明記を欠いている。「同志社大学設立募金日誌」(第5巻「日記 紀行編」四五一—四五二ページ)の明治二十二年四月二日の条に「左ノ高松ニ於ケル大学賛成家ニ礼書ヲ出ス〔下略〕」と見え、かつ「蘭啓」以下の本文が朱書きで掲載されている。したがって、日付を四月二日とし、宛名を従来の「高松有志家」を改めて、募金日誌の表現を使い推定とした。なお同誌には「高松古新町 土屋兼雄、〃西通町 平野種二、〃南新町 鈴木伝五郎、〃淀之町堀川 浜古織之助、〃西通町王子権現裏 小川正治、〃内町大神宮裏 大饗英九郎、〃裁判所内 近藤熊綱、〃内町 安藤貞、〃古新町 渡辺克哲、〃紺屋町 久保財三郎、〃宮脇村 牛窪求馬、〃天神前 松本貫四郎、〃野方木村仁

平方 ○小西甚之助、〃丸亀町 森田武左衛門」の人びとの名前が列記されており、それぞれ各人宛にこの書簡が出されたと見るべきであろう。

＊＊川西光三郎については明治二十年代初頭の大学義捐金募集運動をまとめた「同志社大学義捐者名簿」（明治三十一年一月調製、同志社資産管理委員）によると、住所は「播州姫路」とあり、義捐金は「二円」を醸出していることが知られる。

90 仏教界における新しい運動で大内青巒、辰巳小二郎、佐治実然らが提唱した。「尊皇奉仏大同団趣意書」によると、「日本の御国祚や御宗旨が此後如何なることが有るとも、決して外国の侮りを受けぬ様にせねば成らぬと云ふ志操の人々が約束して、天子様の御威光と仏法の真の道理とを何処までも保つ様にする為め取結びたる組合」、「学校の教員を雇ふにも〔中略〕彼の人は天子様を軽蔑する心が有りはせぬか、此人ハ耶蘇教などを信仰して仏法を仇に思ふ人でハ無いか」、「尊皇奉仏に心を合せ手を引合ふて、日本の元氣を強くしたまへ」とある（『国民之友』第三八号）。

93 この「山号書簡」は「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四五四ページ）に新島襄の筆ではないが、その全文を見ることが出来る。仮名遣いなどに異同が認められる。

当時兵庫県下の七教会は神戸、三田、兵庫、多聞、明石、西之宮、姫路の諸教会であり、「兵庫県以西」とはその地域区分が明らかでないが、中国地方では岡山、高梁、笠岡、天城、落合、鳥取、津山、四国では松山、小松、土佐、波止浜、九州では福岡、日向、八代の諸教会があげられる。

94 この「山号書簡」は「統九八書簡」（目次では九九書簡、一七二ページ）では日付は「明治二十一年」として月日を欠き、宛名は「某」としている。「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四五二ページ）の明治二十二年四月二日の条によると、「福島ノ綱島佳吉兄ヨリ左之人々ニ依頼状ヲ遣スヘキ旨促シ来ル」、「下記ノ人々ヘハ四月五日書面ヲ出ス」と見え、これに基づいて、日付を「明治二十二年四月初旬」と改め、宛名を「福島における有志家」として、ここに掲げた。

なお、同日誌によると、三井銀行 田中幸七、六十銀行 奥村新一郎、銀行 後藤忠吉、阿部正明、小野守穩、長尾兵次郎、粒来甚作、福島新聞社員、追加として小笠原貞信、武川廉治の名前があげられており、それぞれ各人



宛にこの書簡が出されたと見るべきであらう。

- 96 ハリスについてはすでに「613号書簡」(三月九日付、下村孝太郎宛)に触れられていたが、その寄附については「611号書簡」一五〇ページの注解参照。

\*\*\*井上馨との交渉は「同志社大学設立募金日誌」(第5巻『日記・紀行編』四三九、四五八―四五九ページ)に見える。すなわち、三月七日の条に「井上伯来神ス。九日縷々ノ書ヲ認メ伯ニ呈シ、将来ノ事ヲ依頼ス」、四月十五日の条に「井上伯ニ呈スヘキ書状ヲ認メ、〔中略〕大坂ニ於ケル注文ハ左之如シ」とあって、この「611号書簡」の本文に見られる「三千円 藤田伝三郎」以下十名の寄附金高、氏名があげられている。

- 97 「同志社大学設立募金日誌」(第5巻『日記・紀行編』四四一、四四三ページ)によると、明治二十二年三月十四日の条に「児島惟謙氏ヨリ来状アリ、来廿一日ヲ期シ同氏ノ邸内ニ集会ヲ可開通知アリタリ。其招待ヲ可受人々ハ左ノ如シ」、同十五日の条に「児島惟謙氏ヨリ来状アリ、大坂ノ集会ヲ廿一日ト定メタルトモ建野知事ニ何ソソ差合ノアルヲ以テ〔三月十六日付建野大阪府知事辭職〕、廿五日迄延引セシメタルヲ通知シ来レリ」と見える。

- 99 川崎正蔵(一八三七―一九二二)は川崎造船所を運営する造船業者。「611号書簡」(四月二十二日付、井上馨宛)に見えるように、井上馨は神戸布引の川崎正蔵邸に滞在していた。なお「同志社大学義捐金姓名簿」には川崎正蔵の名は見られない。

- 100 この「618号書簡」は「統四二書簡」(目次では四三書簡、六二―六三ページ)では宛名の明記を欠くことになっているが、はがき表書は「岩崎様」とあるので、「岩崎〔某〕」とした。

- 102 上毛共愛女学校は上毛基督教婦人会の献金で前橋岩神に開校。この直接の前身は、前年の二十一年(一八八八)六月二十一日開校の前橋英和学校、校長は不破唯次郎。発起人には新島襄のほか海老名弾正、湯浅治郎、大戸甚太郎、松本勘十郎らが名を列ねた。

- 103 この「621号書簡」は「正一〇八書簡」(二九八―二九九ページ)ではその日付は四月二十一日であるが、本文の日付によって四月二十二日と改めた。

- 105 この「623号書簡」は「正五六九書簡」(一〇八三ページ)では年代が未詳であるが、「同志社大学設立募金日誌」(第5巻『日記・紀行編』四六〇ページ)の明治二十二年四月二十六日の条の上欄に朱書きで見出し「西宮行」とあ

り、「廿五日之午前、西ノ宮ニ行キ五十田ヲ訪フ、二宮、半井氏モ来ル」と見えることにより、ここに掲げた。なお、五十田勇治郎については、同日誌の一月十日の条(四三〇ページ)に「西ノ宮東ノ町五十田勇次郎氏ニ托スルニ西宮地方ニ於テ同志社大学募集ノ事ヲ以テス、但シ安永稔氏ノ紹介ニヨル」とある。

109 この「68号書簡」は「正一七一書簡」(三九三—三九四ページ)では、その日付を「明治二十一年四月三十一日」としている。しかし、新島が四月三十日、北垣に「出京仕、黒田総理大臣殿ニモ御依頼」と述べるのは、明治二十年しかない。よって改めて、ここに掲げた。

116 『国民之友』(明治二十二年五月二十二日発行、五一号)「同志社の義捐金」(時事)の末尾には次の一文が付されている。

茲に附言せざる可らざる一事あり、去月同志社の礼拝堂に於て看棚落ち、数名の負傷者あり、皆な輕傷にして其の平癒一週間を出でず、殊に其の中の重創者とも云ふ可き金森氏の夫人の如きも、只だ驚愕の余り一時記性を失ふたるに過ぎずと云へり、然るを世間往々謬伝を伝へ、針ほどのことを棒ほどに誇張し、礼拝堂の天井落ちたり、死傷者幾名ありと、風説する者あるは抑も何の心そや、若し之を疑はゞ、幸に西京同志社に向て之を問へ、当時の現場に臨みたる数百名の生徒及び職員は則之れが証人たらん

なお金森夫人小寿の負傷のことは「同志社大学設立募金日誌」(第5巻『日記・紀行編』四五九—四六〇ページ)の明治二十二年四月二十二日の負傷者の名をあげている条には触れられていない。

118 \*\*徳富久子(一八二九—一九一九)は矢島直明の第六子、姉に竹崎順子、妹に矢嶋棋子らがいる。徳富一敬と結婚、二男四女をもうけた。長男は猪一郎、次男は健次郎、明治十九年上京後は東京第一基督教会(二十四年以降靈南坂教会)に出席、婦人会で活躍。

この「68号書簡」は「正四三八書簡」(八三九—八四〇ページ)では、日付を明治二十二年五月五日付、宛名を中村栄助としている。しかし、本文には日付ならびに宛名の明記はない。いま、本文ならびに末尾の「県会ハ明治日」をもって日付を「五月六日」付と改め、宛名とも推定としてここに掲げた。

\*\*中西光三郎(一八四五—一九一〇)は紀伊那賀郡井ノ口村(現貴志川)の生まれ。明治十二年(一八七九)県会創設のとき当選、第一回県会の副議長、十四年木国同友会成立のとき副会長、十九年伊都郡長、二十年那賀郡長に就

任。児玉仲児は陸奥宗光と深い関係に対し、中西は板垣退助の自由党の流れをくみ、明治中期の那賀郡を中心とした政界は二分の趨勢にあった。児玉仲児の紹介で臨時県会に中村栄助、新島公義を急派した新島が、同志社大学設立の演説要旨の末尾に、中西光三郎（光二郎と書す）に合点を付して中村栄助に送った配慮は深いものがある。

119 この「63号書簡」は熊本よりの帰途、五月二日、三日京都に立寄った徳富猪一郎に宛てたもので、「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四六四—四六五ページ）によれば新島は浮田和民、金森通倫、徳富猪一郎と小会議を開き同志社運営について取極めをおこなったことが知られるが、ここでは特に教会合同問題への言及であり、端裏には“Private”とあって、次第に切迫してきた組合教会内の合同問題に対する帰趨への苦慮が示される。

「64号書簡」（四月六日付、兵庫県以西諸教会兄弟宛）参照。

122 121 「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四六五ページ）の明治二十二年五月三日の条の末尾に「徳富氏ノ話シニ、三池ノ有志家野田卯太郎、永江純一ノ両氏ハ非常ニ同志社賛成ノ由、此度モ百円ヨノ金ヲ以テ徳富ニ托シタル由。金ハ徳富氏東京ニ持参ス」とあり、とくに野田、永江宛に「○其後一書ヲ出ス」と見える。

123 奥村新之丞（一八四〇—一八九三）は京都船井郡桐ノ庄の生まれ、明治五年（一八七二）船井郡第四区長、十二年から二十年まで府会議員、常置委員となる。二十年九月以降船井郡長。新島襄の依頼をうけて、自らその大学設立運動を助け、かつ広く人にすすめた。

「同志社大学義捐者姓名簿」、「同志社大学義捐者県別姓名簿」（遺品庫史料）によると、京都船井郡下の場合、個人による篤志家の義捐金のほか、丹波第一基督教会留岡幸助外四三名（二九四二〇銭）、須知青年同志会（二四）、船枝村有志中（二四）、諸畑村有志中（二四）、園部村字小山村中（一四）、本莊村字青戸有志中（五〇銭）など、きわめて地平のひろがりをもった動きが認められる。

124 浦木弘は「同志社大学創立費拾円以上義捐者氏名」（明治二十三年はじめまで）ならびに「同志社大学義捐者名簿」（明治三十一年一月調製、同志社資産管理委員）によると、兵庫教会員で一〇円の義捐金を醸出している。兵庫教会員の原簿は焼失してその生年月日、住居、受洗年月日は知ることができないが、「兵庫教会員一覧表」（明治四十三年調）によると、浦木弘は手拭商を営み、姉マス（京都看病婦学校を明治二十二年六月卒業）、妻タカラとともに教会員であり、「兵庫教会五十年史」（稿本）によると、浦木は教会執事として教会の活動に尽瘁していることが知ら

れ、新島の大学設立の旨意に深い賛意をもっていた。

125 この「612号書簡」は「正二八三書簡」（六二二一六二五ページ）ではその日付を明治二十一年五月十二日としている。しかし、文中に見えるハリスの寄附金のこととは「588号書簡」（明治二十二年三月九日付、下村孝太郎宛）に見え、「616号書簡」（同年四月十二日付、下村孝太郎宛）にもふれられており、その年代は明治二十二年である。従来を改めてここに掲げた。

126 別紙は伝存しないが、『国民之友』（明治二十二年五月二十二日発行、五一号）の「時事欄」に「同志社の義捐金」と題して、次のような記事が掲載されている。

昨年十一月初めて同志社大学義捐金を募集し、本年四月に於て其の第一回募集を了はれり、第一回に於て各新聞社及同志社に向て義捐せられたる総額は壹万〇六百五十五円四拾七銭なりとす、而して昨年同志社に於て理化学を盛んにせんことを欲し、理化学教場の建築費として壹万弗を寄附したる米人ビー、エー、ハリス氏は、同志社大学設立の趣意書を見て益々感激する所あり、頃る理化学科を拡張せんが為め、其の維持費として五万六千弗を寄附するの約を為し、之が為に三名の委員を撰み、自身死去の後に至りても、右の金額は必ず其の所有金の中より、同志社に送金すべきの約定書を認め、三名の連署を以て之を同志社に送附したりと云ふ、ハリス氏は米国コンチネンタル州ニューヨーク州の住人にして、其齢既に八十の高に達せり、而して氏の同志社々長新島氏に於ける、素より何の縁故あるにあらずといへり、顧ふに氏が義侠の精神新島氏の熱心と溶和したるにあらずんば、焉ぞ能く此の如くなるを得んや、外人にして尚ほ此の如し、況んや我邦人に於てをや、我邦人豈に義侠の精神なからんや、ノルマントンの沈没、磐梯山の噴火、尚ほ且つその心を動かす、況んや一国の地盤たり基礎たる高等の教育に於てをや、吾人は我邦人の義侠なる敢て彼の教育の為にその一身全心を擲ちて顧みざる犠牲者の志を捨てざるを信するものなり〔下略〕

129 この「614号書簡」は「正三二八書簡」（七〇一七〇三ページ）の前半部分（七〇一七〇二ページ）である。徳富猪一郎は新島襄書簡を折本仕立てで保存をはかったが、「正三二八書簡」の後半部分はハリスの追加寄附金に言及するもので、それは五月三十日以降（「616号書簡」一五〇ページの注解参照）でなくてはならぬ。収載に当って改めた。

\*\*\*この別紙は伝存しない。

\*\*\*「正三八書簡」(七〇一ページ)では「海老名」の三字は□で示されているが、原文通りとした。

131 この「64号書簡」は宛名の明記を欠くが、内容から同志社幹事を推定として掲げた。なお、備後の庄原英学校教員については「68号書簡」(明治二十二年八月十七日付、木村鎮太宛)参照。

132 児玉仲児については「58号書簡」一九ページの注解参照。この「67号書簡」は、児玉の懇切な周旋運動を謝するもので、「69号書簡」(五月五日付、中村栄助宛)参照。なお児玉仲児の長男亮太郎(一八七二—一九二二)は同志社に学び、明治二十五年普通学校を卒業、さらに政法学校に進み、明治二十八年卒業し、ミシガン大学に留学、原敬の秘書官をつとめた。

\*\*\*紀陽新聞は児玉仲児の反対党である千田軍之助(一八五六—一九一四)の組織する同志会の機関(日刊)紙。

133 この「64号書簡」は朝日新聞(明治二十二年一月三日以降大阪朝日新聞)の同志社大学募金取扱いを謝するもので、上野理一(一八四八—一九一九)は藤田軌達らとはかつて、この募金募集の紙上援助をした。

\*\*\*この通知書は日付を欠いているが、第二回募集、すなわち「丙第五八号 寄附金受取証」(明治二十二年十二月十七日付、(二三四—二三五ページ所収)に相応するものであり、「64号書簡」とはしたがって別途の記録であるが、伝存の由来に従って、「69号書簡」(五月十七日付)にあわせて収載した。

134 この寄附金受取証は印刷されたものであり、金額、但書、年月日、署名、宛名は墨書(代筆)。

135 この「69号書簡」の兩人宛の由来は、彼等が同志社教会の代議人として前年の十一月大阪教会においておこなわれた組合教会臨時総会(教会合同問題)に出席、引続いて平歳後、同問題の決着をつける神戸における組合教会総会を迎えたことによる。いうまでもなく、彼等は同志社教会を代表し、かつ新島襄のいわば「代人」に当り、この年六月、ともに神学校(本科)を卒業する新島の期待した人であった。

\*\*\*五月二十二日から二十七日にかけて、神戸教会で組合教会の懸案の問題である一致教会との合併(教会合同)、とくに「日本聯合基督教教会憲法(修正案)」の逐条審議がおこなわれた。この総会(第四回)には三十八の組合教会の代議人五十三人、番外として七名の外国人宣教師を含む三十三人が出席した。

137 この「61号書簡」は「正四九三書簡」(九三六—九三八ページ)によると、その日付は「明治二十二年」とのみあって、月日を欠いている。柏木義円の稿本によると、本文末に「廿三日」とあり、末尾に「廿二年五月廿三日 京



都消印」とある。これに従い、五月と推定して、ここに掲げた。なお「正四九三書簡」の「又追加」以下（九三八ページ）は本来別書簡であり、「818号書簡」（明治二十三年（一月、広津友信）宛 参照。

139

江指（旧姓以下同じ、渡辺）タマ（大阪、奥江（森本）タケ（兵庫）、浦木マス（兵庫）、山田（高須）イセ（兵庫）、不破（北里）ユウ（熊本）、辻本ルイ（北海道）、朝比奈トラ（愛媛）の七人『同志社百年史資料編』四〇九ページ）。

※柴原宗助は注解（第3巻『書簡編』七七九ページ）参照。なお「三本木茨木屋」は「829号書簡」参照。

※※坂田丈平（一八三九—一八九九）、号は警軒。同志社漢文学講師。備前川上郡日里村の生まれ、明治元年興譲館長となり、閑谷饗でも山田方谷の求めにより教授。十二年岡山県会議員、議長となる。十九年同志社に招かれる。二十三年衆議院議員に当選。

140

この「814号書簡」は「統八一書簡」（目次では八二書簡、二九—三〇ページ）では、その日付を「明治二十二年二月二十七日」としている。しかし、その日付は正しくは「五月二十七日」であり、改めてここに掲げた。

144

この「659号書簡」は「正三三八書簡」（七〇—七〇三ページ）では明治二十二年五月十二日付、徳富猪一郎宛としてきた書簡の後半部分（七〇二—七〇三ページ）である。「814号書簡」（五月十二日付、徳富猪一郎宛）一二九ページの注解参照。

なお、この書簡の日付を六月一日としたのは、冒頭の「慶応義塾ニモ一万三千ヨ出来候ヨシ御通知被下難有奉謝候」ならびに「電報を以て慶応義塾（塾）之寄附御知被下」に相当する左記の電報による。

- ① ミンユウシャトクトミイイチロ  
シンシマジョウ  
② テラマチトウリマルタマチアカル

ケイオウギンクキフキン—マン三セソデキタドウシシヤモフンハツセ子ハナラヌ

シンハツ局 六月一日 七時十分

146 この「688号書簡」は「正三三〇書簡」（七〇八—七一ページ）の後半部分（七〇九ページ）「御書面ハ尊宅ニテ〔下略〕から七一ページまで」にあたる。「659号書簡」一四七ページの注解参照。

※※この別紙は「659号書簡」（小崎弘道宛）と思われる。

\*\*\*「同志社社員会記録」(『同志社百年史資料編Ⅱ』一二五六、一二六五ページ)によると、金森通倫を「社長代理補助」とすることが、明治二十一年九月五日ついで七日の記事に見える。こえて二十二年五月二十八日の社員会で

「金森氏ヲ三校々長ニ任シ本年七月ヨリ一ヶ年間ヲ任期トス牧師ノ職従前ノ通」と決定した。

147

この「69号書簡」は従来「正三三〇書簡」(七〇八―七一一ページ)で明治二十二年六月二日付、徳富猪一郎宛とされてきた。しかし「正三三〇書簡」の前半部分(七〇八から七〇九ページ「只々兄等ノ御熟考ヲ仰クノミ」まで)は小崎弘道宛書簡の写しである。それは新島襄宛小崎弘道書簡(遺品庫史料)に「六月二日御認之芳翰正に落手忝く拝承仕候〔下略〕」に対応することからも明らかである。なお、徳富に報じたことは「60号書簡」の本文冒頭に「本日小崎(湯浅氏ニモ)氏ニ相送候書面之草案ハ念之為奉呈貴覽候」とあることから知られる。したがって、この書簡を改めて推定として六月二日付、小崎弘道宛として掲げた。

150

ハリス(Jonathan N. Harris, 1835-1896)の寄附金(十万ドル)に対する礼状については、「同志社大学設立募金日誌」(第5巻『日記・紀行編』、四六六―四六七ページ)の明治二十二年五月十七日の条に「ハリス氏ニ一通ノ礼状ヲ出ス」とあり、「同志社社員会記録」(『同志社百年史資料編Ⅱ』一二六四、一二六六ページ)には同年五月二十八日の議事(第十七条)に「礼状ハ日本文字ニテ美麗ニ仕立差出ス、後段ハラル子ット氏ニ依頼」と見え、こえて同記録の六月七日の記事に「ハリス氏ヘノ礼状草案ヲ新島氏ヨリ提出アリ、其文中ヘ日本人民永ク福祉ヲ受ケルト云文并ニハリス氏理学院ノ名称ヲ記シ、学科ノ唱ヘヲ理学院ト称ス」とあることによって、「62号書簡」の日付を六月七日と推定した。

ラーネッド(Dwight W. Learned)の友人であるハリスの同志社への最初の寄附金(二万ドル)については、明治二十一年十月十二日付、下村孝太郎宛書簡(第6巻『英文書簡』274書簡)に見え、十月十三日付、徳富猪一郎宛書簡(第3巻『書簡編Ⅰ』483号書簡)に触れられ、したがってハリスの名前はあげられなかったが、「同志社大学設立の旨意」(第1巻『教育編』一三四ページ)に「本年八月、米国の一友よりして更に壹万弗の寄附金を申し込まれたり」としてされた。こえて二十二年三月九日付、下村孝太郎宛書簡(598号書簡)で、その寄附金(一万五〇〇〇ドル)はさらに五万ドル追加されるかも知れないことが報ぜられ、五月八日の「同志社大学設立募金日誌」(第5巻『日記・紀行編』四六六ページ)では、その寄附金は六万六五〇〇ドルとされている。したがって五月十二日付、徳富猪

一郎宛書簡（662号書簡）ではその旨が報じられている。但し、五月十三日付、北垣国道宛書簡（665号書簡）には寄附金は合計六万七〇〇〇ドルと正式に報告されている。

ハリスからのかかる寄附金についてはアメリカン・ボードのクラーク（第6巻『英文書簡』『287号書簡』、ハーディ夫人（同288号書簡）宛にも新島の感謝の情がしるされた。ついで五月三十日付、北垣国道宛書簡（665号書簡）では、さらに三万三〇〇〇ドルの追加寄附があつて、その寄附金は十萬ドルとなつたことが報じられた。

したがつて、爾後のハリスの理化学教育のための寄附金については六月一日付、徳富猪一郎宛書簡（666号書簡）、六月四日付、井上馨宛書簡（660号書簡）でそれぞれ十萬ドルと報ぜられた。

なお英文礼状草案について「660号書簡」（第6巻『英文書簡編』）参照。

151  
この「662号書簡」は「正四四七書簡」（八四七ページ）では、その日付は年代を欠き、ただ六月七日付としている。「同志社社員会記録」（『同志社百年史資料編Ⅱ』）所収によると、明治二十二年六月七日、山本覚馬宅での常議員会の記録が見え、この書簡の「常議会相開申度」はその開催を伝えるものであることが知られる。

※この「663号書簡」は「正二一八書簡」（四九四—四九五ページ）では、その日付を「明治二十一年六月八日」としている。しかし、この書簡の冒頭に見られる「貴書拝見仕候」にはじまる文面は、明らかに明治二十二年六月六日付、小崎弘道の新島襄宛書簡に應ずるものであり、したがつて、明治二十一年を改めて、ここに掲げた。  
なお、小崎弘道の六月六日付、新島襄宛書簡は次の通りである。

六月六日 新島襄

①東京麹町区下二番町七一番地 ②京都寺町通丸太町上る 親展 ④墨

六月二日御認之芳翰正に落手忝く拝承仕候、貴書之趣少しく解し難き所有之候間更に尋申上候、先生之御趣意は先般之総会議決は過激強迫然たる所ありたるが故、其議決にハ御不同意との事にて御座候や一応御伺申上度候、倍て議會之事情其真を尽さざる所ありために御誤解あらんことを氣遣ひ申候間、当日之事情更に陳述可申候、御存之通り、迂生は何処迄ても平和を主とし、成るべく調和せんとの望にて、彼地に至り會議を開く以前、二三の人に其旨を語り申候に、一時之に同意せし趣きなりしも、同夜憲法に反対する若干の人々會議を開



き（迂生には通知せず秘密に開きしものなり）調和策に反対し、始めより議場にて討論すべしと決せし趣にて、翌日迂生が議場にて其説を述ふるや若干の人々何れも迂生の説に反対し、正々堂々議場にて討論すべき事と主張せり、迂生は之を以て甚た遺憾に思ひたるも如何とも致し方なければ、若手の人々の欲するがまゝ爲し置きたり、議事開けて後、若手の人々主張せし所を聞きたるに迂生の心には如何にも偏避なりと思惟する議論多かりしを以て、思へらく、若し斯る議論組合教会議場にて勝を制するときは我教会は此迄なりと、依て迂生は飽く迄之を排撃すへしと決心し、他人の目から見たら幾分過激にありしか知らざれども、主の爲めを思ひ、組合教会の爲を思ひ、国の爲を思ひ、力を尽くして之を排撃したり、然るに議員の多分は幸に余か輩の説を賛成しけれ、多数にて可決致したる訳にて御座候、御書面中強迫かましき手段云々の言ありたるか幾分か斯の如き事なかりしには非ず、是れ迂生も甚た悲む所なり、然れども強迫手段は誰か始に之を用ひたるか、即ち少数の反对者か若し余輩が言を容れざれば分離す云々の言を吐きたるによる、今少数の人々より己の言を用ひされば分離すと強迫し来るときに於ては、多数の人々は之を容るとするか、若しくは他の教会にて分離すと云ふとも、之を決行す、断言せざる可らず、先生其場に御臨みなくして斯る評を御下しあるは寧ろ哥酷（わどろ）と云はざる可らず、且つ此に一考を願ひ度は組合教会は数多の人々の集つて一体を爲せる教会なり、已に数多の人々にて成り立つ以上は何事を決するにも會議を催し、多数決を以て行ふべきは当然にして、若し少数の人々強迫手段を以て多数を圧するに至らば到底教会の政治なるものは行はる可らず、勿論大事を議するときには幾重にも鄭重に鄭重を重ね、為し得べき丈けの手を尽さる可らず、然れども十分の手を尽くして尚ほ不平を鳴すものあらば、是致し方なきなり、先生願くは爰に御勘考あらんことを乞ふ

先生の御位置は迂生には少しく判然せざるが、先生は合併には同意なれども、合併を実行する組合会的手段には御不同意との事なるか、此辺十分明白に御明言あり度存候、果して然らんには、先生にハ如何なる手段を以て合併を実行すべきか御勘考なるや承り度候、先生之御意見或は全会一致を以て合併を実行すべしとの事なるか、若し先生の御意見にして斯の如きとせば迂生は其意を解するを得ざるなり、何となれば数十の教会、数千の信徒尽く同説にならん事は黄河の清まんとことを待つと一般、幾年待つても到底其望なかるべし、若し斯の意見を政治上に用ゐ、又一個の教会に用ゐなば如何、到底何事をも行ふ可らず。

152

兄弟牆に聞けとも外其侮を禦くとの諺もある通り、今や吾人の周囲に敵軍雲の如くに集り來るときに於て、生等は成るべく基督教会のみならず組合教会内の平和を保ち度は万々の義に御座候、此時に際し生等か先生に向て希望する所は今や合併の議に對し不平を唱ふる者は僅々二三の教会にして、然かも其教会員中、先生の御意見判然たらざるか故、惑ふ者も少からざる次第なる時に當り、先生に於て其意見を御表白なり、公けに私に幾分か其信徒をなだむる事に御尽力ありたらは合併の事業十中八九迄は無事に結了致す事と存候  
若し先生にして此挙に出てずして若手の反對者の方<sup>かた</sup>を持ち、組合教会多数の人々に對し其所置に御不同意を御鳴らしあるに於てハ、幾分かの教会は必ず多数に對して分離するに到らん事明白なり、若し之か為め合併の事中止するに至らんも後來組合教会の分離は到底避く可からざるに至らん、是れ迂生か將來我組合教会の前途に於て甚た憂ふる所に御座候

先生の一挙動実<sup>カ</sup>に非常の結果を我教会に來す可き事を信すれば、願ふ所幾重にも其御挙止に御注意あらんことを希望仕候且つや同志社大学之大業も前途に横はり居れば、若し今回の事にて分離でも生するに至らば由々敷大事と甚た心痛仕候

迂生は一己に於ては確乎たる主義を有するにも<sup>拘</sup>抱らず、此調和には幾重にも力を尽す積に御座候、殊に同志社第一の卒業生と先生の間の親睦の為には如何なる事をも為して之を全ふせんと常に心に掛け居候

以上迂生が心情を遠慮なく吐露したる所にて御座候、言少しく失礼に渉る所あるを免れず、此辺海容の度量を以て十分御宥赦あらんことを乞ふ

六月六日

小崎弘道拜

新島襄先生

この申渡しは書面で新島襄から金森通倫に手交された。その書面は「67号書簡」参照。なお「同志社社員会記録」(『同志社百年史資料編Ⅱ』一二六ページ)には次の文面が収められている。

不肖襄儀近来兎角多病ニ罷在、同志社総長之職務ヲ難尽候ニ付、今回社員評議會之決議ヲ經テ来七月一日ヨリ向一ケ年間、本社予備校普通校神学校三校々長ノ名義ヲ以テ不肖ノ職務ヲ貴殿へ御委託申候間此段御承引有之度候也

明治二十二年六月十三日

新島 襄

金森通倫殿

153

宮口二郎（一八五二—一九三〇）は群馬原市の生まれ、明治十一年（一八七八）碓氷郡書記、十二年県議員に当選、爾後副議長、常置委員となる。碓氷社九十九組組長となり養蚕業に励む。新島襄の話をきいて求道し、十四年九月四日安中教会で海老名弾正から受洗、湯浅治郎とともに群馬における廢娼運動を推進した。十九年十月原市教会の創立者の一人となり、爾後執事をつとめた教会の柱石。また原市に碓氷英学校を開校した。なお湯浅治郎の衆議院議員引退後、自由党で出馬、当選。後年は碓氷社の運営にあたり、碓氷組合製糸の発展に尽した。

156

内田（旧姓以下同じ、土倉）政（奈良）、杉山（広瀬）恒（滋賀）、加藤徳（熊本）、竹内梅（兵庫）、東（横田）増（京都）。

157

田中賢道（一八五六—一九〇一）は熊本の医家の生まれ、竹崎茶堂の日新堂に学ぶ。明治七年（一八七四）植木学校に入り、自由民権論を主張。西南の役には西郷に組して熊本協同隊に加わる。のち相愛社員、徳富猪一郎の大江義塾、ついで熊本女学校、熊本英学校の運営を支援した。

「同志社社員会記録」（『同志社百年史資料編Ⅱ』一二六四ページ）によると、明治二十二年五月二十八日の社員会において、田中賢道に九州一円の募金運動を依頼することを決定。報酬は旅費ともに「一カ月金廿円以上卅円以下」とある。

しかし、田中賢道は六月二十五日付書簡でこれを辞退し、この「688号書簡」はそれに封入されて返却された。なお「川号書簡」参照。

158

同志社では明治二十一年六月から二十二年六月末まで学院の呼称のもとに予備校を予備学部、普通学校（英学校）を普通学部、神学校を神学部と称した。「同志社社員会記録」（『同志社百年史資料編Ⅱ』所収）、「同志社学院（予備学部・普通学部・神学部）規則」（同前『資料編Ⅰ』所収）によって各教員の身分、所属、担当教科目をあげると次の通りである。

金森通倫（社長代理、神学部教授、同志社教会飯牧師、証拠論）、加藤勇次郎（予備学部部長（主幹）、教授、数学）、浮田和民（神学部、普通学部教授、女学校主幹、史学）、奥田吉次郎（予備学部教員、漢学）、山路一三（算術教員）、福島綱雄

(準教授、数学)、藤田愛二(教授、地理学、英語学)、坂田大平(教授、漢文学)、南熊夫(準教授、英学)、清水泰次郎(教授、英語学)、志垣要三(準教授、英学)、森田久万人(神学部教授、普通学部主幹、論理学、道義学)。

161 堀俊造は同志社病院医師。第十四学年卒業生は柏木義門、磯貝由太郎、中瀬古六郎ら二十五人である。

\*「同志社社員会記録」(『同志社百年史資料編Ⅱ』所収)によると、明治二十一年六月七日の社員会で同志社英学校を同志社学院と改称、予備校や神学校などの名を廃して英語普通科、英語予備科、英語神学科、別科神学科と称することを決定。しかし、一年たらずの二十二年五月二十八日社員会で、同志社学院の名称を廃し、普通校尋常科・高等科と称し、神学校、予備校も同志社某学校と称することとなったとある。したがって、なお旧呼称がそのまま残った例と思われる。

162 この「672号書簡」の冒頭に掲げられている詩は李白の楽府日出入行の詩句で、「騷虞不折生草茎」(「656号書簡」、「659号書簡」参照)とともに、この時期に李白の詩に思いを託していることがうかがえる。

164 この「613号書簡」は「統六三書簡」(目次では六四書簡、一〇六—一〇七ページ)では「前省略」、「中略」などがあり、追而書も省略されているが原文の通り全文を掲載した。

166 内田政雄、垣見敬男、竹内甚吉はこの年六月、藤本清太郎、薄手文太郎、新野稔らと同志社の別科神学科の卒業生。なお、内田政雄の「写真の交易」(『新島先生記念集』所収)はこの「614号書簡」の経緯を述べている。

167 この「675号書簡」は「正五七三書簡」(一〇八八ページ)では草案とし、日付を欠いている。「同志社社員会記録」(『同志社百年史資料編Ⅱ』所収)の六月十三日書面とは異同が認められる。「664号書簡」一五二ページの注解参照。

169 この「678号書簡」は「統三三書簡」(四九ページ)では日付を「明治二十二年七月一日」とし、宛名を「新島公義」としている。しかし、この書簡本文には日付ならびに宛名の明記を欠いている。いま、従来の伝えに従い、日付、宛名を推定としてここに掲げた。

\*アメリカ・キリスト教青年会(YMCA)同盟学生部主事ウィンシャード(Luther De Loraine Wisland, 1854—1925)の来日を機に明治二十二年六月二十九日から七月十日まで同志社で「学生聖書研究夏季学校」として第一回が開校。その模様は『学生之大会』で見ることができる。

172 この「681号書簡」は「正四四九書簡」(八四八—八四九ページ)では、その日付は年代を欠き、ただ七月八日付と

している。「同志社社員会記録」(『同志社百年史資料編Ⅱ』所収)によると、彼が常議員に選ばれたのは明治二十一年九月五日開催の社員会においてであり、同月十日制定を見た「常議員会則」の第五条には毎月第二月曜日開催と定めている。したがってこの書簡の年代は、明治二十二年七月八日しかない。

明治二十二年六月、伴直之助(第3巻『書簡編一』八五八ページ注解参照)は田口卯吉らと東京市会議員に当選。

日下義雄(一八五二—一九二三)は嘉永四年会津藩石田希雄の長男に生まれ、日下家の養嗣子となる。維新後北海道に渡り、辛苦落魄のなかで勉学、上京して井上馨に知られて紙幣寮に出仕、明治九年(一八七六)六月井上に随行して英国に渡り、ロンドンにとどまって経済、財政学を研究、帰国後内務権書記官、農商務大書記官、駅通局長を歴任。十九年二月長崎県令(七月以降県知事)となる。のち福島県知事。

177 この「88号書簡」は「正三三三書簡」(七一四—七一六ページ)では新島公義に対して、特にはばかって、数カ所にわたって省略あるいは伏字などの措置がほどこされているが、これらをすべて改め、原文の通り掲載した。アステリックス\*の位置はそれぞれ省略部分の末尾を示す。

最初の省略は本文二行目「種々無根ノ空評ヲ採用セラレ云々」にはじまり、七行目「断然ノ所置ハ出来ス困リオル由」の\*にまでわたる部分である。

\*\*この省略は、本文八行目の「江戸ノ仇キハ長崎云々」にはじまり、同行の「小生モ甚不愉快ニ存候間」まで。

\*\*\*この省略は本文八行目末尾の「去リトテ彼ニ何ニカ出来ル云々」にはじまり、一〇行目「到底記者トナルノ見込ハナシト存候」まで。

178 この省略は本文二行目の「金森氏ヲ初メ湯浅兄等ニハ」である。

\*\*この省略は同じく本文二行目の「只今(ノ)如クトコモ云々」にはじまり、四行目の「手ニ入レリト云テ可ナラシカ」までにわたる部分である。

179 この省略は一七八ページの追而書三行目「小生ハ彼ノ大先生方ニハ益失望云々」にはじまり、以下、一七八ページ全部、ついで一七九ページにわたり、四行目「而シテ着手ノ途ハ立タ、ス」までにわたる。

\*\*金森は□□で示されている。

\*\*\*この省略は五行目の「ニシテ将来此近傍丈ハ云々」からこの行末尾「到底見込ナシ」まで。



\*\*\*この省略は一〇行目「湯浅兄ニハ必ラス此企ニハ云々」にはじまり、以下末尾「御忠告之程奉仰候」までにわたる部分である。

180

この「87号書簡」は「正五七六書簡」（二〇九一一〇九三ページ）では日付を「明治二十一年七月二十二日」とし、宛名を「佐竹篤」としている。しかし、「88号書簡」（明治二十二年七月二十日付、不破唯次郎宛 および新島襄宛 不破唯次郎書簡（明治二十二年七月十七日付）によれば、この書簡の日付は明治二十二年七月二十二日であり、宛名は佐竹篤と判断される。したがって、従来の日付を改め、本文には宛名の明記を欠いているので、佐竹篤を推定としてここに掲げた。

なお、不破唯次郎の七月十七日付、新島襄宛書簡は次の通りである。

明治二十二年七月十七日 新島襄

- ①上毛前橋神明丁三番地
- ②西京寺町通丸太丁上ル「急用」
- ④毛筆

（赤インク）

十五日御認の御書状今朝相達奉万謝候、一昨日来女学校広張之儀杉山、杉田両兄<sup>ラレ</sup> 佐竹兄ノ相談も先ツ三人丈にて致候処ニ今日中山氏ノ御書状も拝見シ、愈々佐竹兄ヲ同地へ送ルノ必要ヲ覚へ、本日ヨリ同氏ハ直ニ佐野へ向ケ出発セラレタリ、伝道会社委員大先生方之御意見ハ不分明ニ候得共、目今佐野伝道ヲ中止スルハ上策トハ上毛之人々ハ存セズ、佐竹兄ト共此夏丈ケナリトも十分ニ尽力サレタル上ニ中止スルハ当然ト存候、佐竹兄同地ニ参ラバ御伝言之如して金子ノ都合ハ相運度奉存候、高崎教会ノ如キハ独立主義ニテ内々聞ク所ニヨレバ大宮伝道費ハ出サ<sup>カ</sup>決心之由、今日迄公然ト返事無之候、松尾兄ノ来ルヲ生等ハ大ニ相待申候、下仁田伝道も困却と存候、杉田兄が近日甘榮教会へ談判へ参ラレル事ニ相談仕候、女学校も寄宿丈ハ三百円位ノ見込之新築と決定仕候間、宣敷御尽力之程奉願候、ミシヨンノ方ニハ杉山、杉田兄ヨリ書状出ス事ニ相成候、ボール<sup>カ</sup>ニモ近々書状出ス積ニ御坐候、小生ハ帰前後非常ニ多忙にて大ニ身体ニ衰弱ヲ覚ヘ花々敷運動も出来兼、大ニ不気分ニ御座候、養母ハ近小児一人ヲ伴ヒ熊本ニ帰県スル事ニ相成候、合一中止説も上毛ハ無関係ノ如ク相見候得共、自然ノ中止ニ相成候事ハ一致家も何ニモ同感ニ存候、寺沢氏ハ此月曜日前ニハ東京ニ参ラレ候由ニ

〔タ脱カ〕

テ目今前橋ニアリ種<sup>〔タ脱カ〕</sup>尽力中ニ御座候間御安心被下度奉願候、大久保氏報告次第大宮ニ小生ガ一寸参ル事ニ今日相談相定メ申候、小生ハ目今何ニ之働も出来ザル残<sup>〔タ脱カ〕</sup>念しく奉存候、種々先生ニハ小生一身上ニ御心配被下事御礼申上候、杉山へ御申越之事ハ承り候得共、同氏ノ安中も少々ハ不安心ナル所モ御座候、一致ノ為所々へ不安心疑念ヲ生シ氣ノ毒千万ニ存候、上州役者中ニハ英雄ガナケレバ一致家もナク反對家もなく、グズーとノ評ヲ蒙リ上州ニ熊本流ガナイカラ目今幸福ト存候、湯浅先生ガ近々安中ニ於一致ノ相談アル由、定テ手前勝ノ話ト推量□□<sup>〔タ脱カ〕</sup>基督教社会ニ於而余リリーダー<sup>〔タ脱カ〕</sup>ノ多数アル事ハ好カラズ、平民的ノ基督教社会ニシテ貴族□□ノ盛大ニ行レルノハ乍残念組合教会ナリ、藤岡伝<sup>〔タ脱カ〕</sup>任ノ儀も後任ノ人ノ荷物ガ着スル迄茂木兄ニ委員ヨリ報知ナクアキレハテタル事ナリ、上毛ノ臨時寄附金ハ両毛伝道費ニテ以後出テハ如何と小生ハ主張仕候得共、今日杉山ガ賛成セズ種々申上度事多シ、愚筆ニテ出来兼候、靈南坂教会も退会者<sup>〔中説共〕</sup>（一致説共）彼是不都合之評判有之候得共、小生ハ明リ申ス、例ノ中止説<sup>〔タ脱カ〕</sup>圧制スル法方ニハナキヤと疑フ所ニ御座候、ブルクリン、ミスセススカヲト婦人ヨリ親切ナル書状参り申候、此夏ハ何地へ御越被遊候や、此程御不快ノ御様子ハ如何ニ御座候や奉伺候、先日写真差出候節ハ失礼ナル書状差出し偏ニ御免被下奉願候、右ハ乱筆ヲ以て御返事迄、御令室様へヨロシク御伝へ奉願候

七月十七日

不破唯次郎

新島先生

182

飯田勇紀は明治五年（一八七二）九月熊本洋学校（第二回）入学者。明治七年九月まで在学成績が知られ、海老名弾正、市原盛宏、宮川経輝らと同級生である（杉井六郎『熊本洋学校』『熊本バンド研究』所収）。しかし、その後の消息は明らかでない。なお「正九八書簡」（二七五—二七六ページ）に見られる飯田勇紀の住所は「神戸下山手通七

丁目 支那理事府前」とある。

183

この「例号書簡」は「正四六二書簡」（八六四ページ）では日付は年紀を欠いている。新島襄が七月の末日、京都寺町通丸太町上ルの自宅にいたのは、明治十七、十八年は海外、十九年は仙台、二十年は札幌、二十一年は伊香保で、したがって、二十二年しかない。また生徒数の「七百余」とあるのも「各学校入退学取調表」（『同志社百年史資料編一』所収）によって該当することが知られる。したがって、「明治二十二年」としてここに掲げた。なお「正

四六二書簡」では秋森長五郎の住所は「香川県観音寺警察署」とある。

187 この「894号書簡」は「統三四書簡」では、日付を「明治二十二年八月四日」とし、宛名を「新島公義」としている。しかし、この書簡本文には日付ならびに宛名の明記を欠いている。いま従来の伝えに従い、日付、宛名を推定として、ここに掲げた。

188 この「895号書簡」は「統八二書簡」（目次では八三書簡、二三〇―二三一ページ）では、その日付を「明治二十二年八月十八日」としている。しかし、正しくは八月十一日であるので改めた。

190 折本仕立ての徳富猪一郎宛書簡は「尚々、上毛行」ではじまる追而書の後尾で料紙は終わっており、「先日御問ヒ合之」にはじまる一文は別紙と推定されるが、いま、しばらく「正三三五書簡」（七一―七一九ページ）に従って、そのまま掲げた。

\*\*「別紙」は新聞の切抜記事である。

\*\*\*この「897号書簡」は「正四七七書簡」（八九四ページ）では、その日付を「明治二十二年四月十四日」としている。しかし、書簡本文の日付は八月十四日であり、改めて、ここに掲げた。

191 木村鎮太は明治二十二年六月二十五日、同志社英学校第十四学年の卒業生、二十五名の一人。同級には柏木義円、磯貝由太郎、加藤延年、中瀬古六郎らがいる。「898号書簡」（明治二十二年五月十四日付、〔同志社幹事〕宛）参照。

192 「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四七一―四七二ページ）には、明治二十二年八月十九日の条に「雨ヲ犯シテ垂水ヲ去、神戸ニ来ル」、同二十日には「有馬ニ来ル〔下略〕」と見える。

193 194 柏木義円の稿本では、この朱で書かれている英文は本文のはじめ、「本日貴書ニ接シ」の前に掲げられている。この「703号書簡」は「正二三七書簡」（五三三―五三六ページ）では、その日付が年紀を欠き、ただ八月二十五日としている。しかし、この書簡は明治二十二年八月二十一日付、滝口可成の新島襄宛書簡に対応するものである。参考のため、滝口可成書簡ならびに同封履歴書をここに掲げた。

八月二十一日 新島襄

①西京寺町通今出川下ル扇町拾六番戸、藤木磯右衛門方 ②摂州有



残暑難凌御坐候処、益々御安泰御起居可被遊奉謹賀候、扱而御尊名ハ予て拝承仕り、就而ハ是非とも拝眉御面  
 謁<sup>謁</sup>を願上度と奉存候得共、今春来ハ御病氣之御様子外来人御謝絶之赴聞知仕候より不得已愚札を以而只管ニ奉  
 請願候、実ニ末ダ尊顔を不奉拜、殊ニ御病患之御庭前無縁之賤き身を以て突然願上候も甚だ以て恐縮之至ニ奉  
 存候得共、事此ニ至り最早禁<sup>前</sup>ハ兼候、何卒不敬之罪御海恕被成遣左之事<sup>情</sup>狀御聴許被仰下度、陳ハ私儀昨年八月  
 土佐教会ニ於而杉浦義一君より洗礼相受け家族等信者と相成候より何ニとか致し聖書を研究シ、処謂収稼は多  
 く工人は少シと申ニ益々感を懷き如何様とも致し伝道仕り、後來説教者之一人たらんと熱心ニ奉存候得共、最  
 早三十之齡ヲ過ぎ妻子生活之道ニ困却等世塵之為ニ被障自然徒ニ罷在候処、本年六月養蚕事業を志し福原と申  
 人を手寄り、妻子共々高知を発し高梁へ参越仕候、途中長男護地ニ而熱病ニ掛り滞留加療陸地ハ難動候より不  
 得已船車便誼之処へ転シ、唯今御当府下ニ罷有候。以後何ニ敷手蔓を求メ生活之道を計らんと日夜配慮仕候得  
 共、不信者ニ依る時ハ商業上不正等之事も多く処謂惡魔ノ巢窟とも可申景況ニも有之、殊ニ神と財とニハ兼事  
 る不能と申ニ至り益々當時勢ニ感動を被与、進で兼而より之素志相達申度と只管ニ奉企望候、就而は何卒同志  
 社使丁ナリ御門守なり何ニナリとも御差支へ無之処へ御雇被仰下間敷候や、当時節柄色々事情ニより有限御庭  
 処へ無限人ニ矚目仕候哉とも被存、甚ダ以而奉恐畏候得共、何卒御都合被仰下、後日伝道等仕候様ノ事ニも相  
 成候時ハ私之素志も被遂候儀ニ付、若しや学校御雇入御差支ニも御坐候ハ、肉躰如何程苦敷候とも為神熱心ニ  
 相働候間、西洋人奴僕タリとも御周旋を只管ニ奉願上候。他日主之御用を勤むる宥人たらんと平ニ企望仕候、  
 事情何分御洞察仰蒙り度奉懇願候、言狂ニ近しと雖も何卒身元御詮儀之上御採用仰蒙り候ハ、実ニ大旱ニ雲  
 霓を<sup>望</sup>庭タルと奉存候、依而履歷書相副へ伏而奉懇願候、尊顔を犯す之罪真平御仁免被仰下度候、合掌再拜

明治二十二年八月廿一日認メ

瀧口可成拜白

新島襄尊君

[カ] 膝下

二仲、御病患時下御自愛御專一ニ奉存上候、本文之次第突然願上る実ニ以而不敬之至り、依而は杉浦君・上

代君之御両所ニ依り御執成を願上度と奉存候得共、暑中御不在事情今日ニ迫り無拋禁へ兼候間、不遜之大罪何卒御寛大ニ被思召、偏ニ御仁免被仰下度奉願上候、頓首

〔別紙〕

御貴宅へ奉伺候処、有馬御入浴之赴拝承仕候、不得已別紙を以而奉犯尊顔候不敬ノ多罪偏ニ御海怨相蒙、何卒御一寛仰蒙り度孰レ奉待御帰館万事御挨拶可申上候、〔趣〕謹言

八月廿二日

瀧口可成拜

新島襄君

閣下

〔附箋〕  
「西京府下寺町通今出川下ル扇町拾六番戸」

寄留 高知県 瀧口可成

」

〔別紙〕

高知県土族 〔朱・以下同〕  
「高知藩」  
瀧口可成

「通称準三郎」

明治三年四月十五日  
任八等官「騎兵隊付」  
被仰之

高知県

明治七年五月

三等助教申付候事

高知県

明治八年十月

五等訓導申付候事

高知県

明治九年十月三十日

依願訓導差免候事

高知県

明治十年警視局御内命ヲ以テ国事ニ奔走ス

「九州暴動ノ際大警視ヨリ直受」

明治十一年十月十八日

上坂ノ命アリ統テ同二十八日帰京候事

明治十二年一月十一日

川路大警視ノ命ヲ奉シ大坂ニ来リ同処滞在中土佐行ノ命アリ、同年二月一日高知ニ着ス

同年三月十二日秘密御用ヲ以テ愛媛県ニ至ル同四月三十日帰京候事

同年五月四日

御用筋ヲ以テ東京出立同八日高知ニ着ス

同年六月六日

秘密御用ヲ以テ愛媛県下ニ出張同月二十五日着坂同処滞在中再度高知行ノ命アリ、同年七月一日高知ニ着ス

同年九月十二日

電報大坂出□ノ命アリ直チニ上坂、同十月二十三日帰京候事

「大坂出向否堺出張ノ命東京ヨリ飛報ニヨリ南崇寺ニ至ル、統テ京師ニ出張 贋造紙幣藤田組疑獄ノ件ニ係ル」

明治十二年十月二十九日

任八等警視属

警視局

明治十三年一月二十三日

依願免本官

警視局

「藤田組疑獄ノ件ニ係リ安藤中警視并ニ佐藤志郎等見込ノ合ワサルヨリ退ケラル依テ顯官当路者一反覆利非曲直ヲ弁解スト雖トモ政府安藤氏等ヲ誣告ナリト認定シ到底旨趣行レカタキヲ察知シテ辞表ヲ呈シタリ」

明治十三年八月三日

雇申付候事

司法省

但シ一ヶ月金拾五円給与

同日大審院詰メ

明治十四年二月十七日  
補司法省十六等出仕

司法省

同日大審院検事局詰ヲ命シ候事  
明治十四年九月二十六日

任検事補

司法省

同日月俸式十円給与

隠岐支庁詰ヲ命シ候事

司法省

明治十四年十二月二十九日

松江裁判所隠岐支庁ニ赴任ノ際検事ノ指揮ニ随ハサルノミナラズ無謂出京セシ条過失ニ付譴責

司法省

明治十五年二月十六日

任判事補

司法省

同日月俸式十円給与

同日広島始審裁判所詰ヲ命シ候事

司法省

198

吉田清太郎（一八六三—一九五〇）は伊予温泉郡松山玉川町田中善次の二男、明治七年（一八七四）吉田家の養子。十六年九月同志社普通学校入学、二十三年六月卒業。その間十七年六月D・W・ラーネッドから洗礼をうけ、二年間の病氣休学中、松山女学校の支援、山室軍平と高梁伝道をおこない、また郷里で同志社大学設立募金募集に当る。卒業後再び松山女学校で働き、三十五年以降は独自の伝道生活に入り、千駄木教会を牧した。

199

この「冊号書簡」は「正五八二書簡」（一一〇六一—一〇七ページ）では、その日付を「明治二十一年八月二十七日」としている。しかし、本文中の「先日公義之事ニ付」の新島襄書簡とは「冊号書簡」（明治二十二年七月二十一日付、徳富猪一郎宛）をさし、したがって、この書簡の年代は明治二十二年である。従来を改めて、ここに掲げた。

200

一八八九年七月二日付のL・L・D授与の通知、ならびに七月二十日付恩師シリーズからの書面に接する。七月二日付書簡は封筒を欠いているが、七月二十日のシリーズ書簡は「山城京都」の消印は八月二十二日とある。

Dear Sir,

July 2d 1889

I have the pleasure to inform you, officially, that the Board of Trustees of Amherst-College have this day conferred on you the Honorary Degree of Doctor of Laws.

Very respectfully, Yours,

E. S. Dwight

Sec. of the Board

My dear Joseph

July 20 '89

Perhaps you will have heard before this reaches you that it pleased the trustees of our college at our late commencement to confer upon you the honorary degree of Doctor of Laws, I hope this may not be unwelcome to you [下略]

(荻窪宛名 Rev. Joseph H. NeeSima / Kyoto / Japan)

202 森田久万人(同志社)、市原盛宏(東華学校)はイエール大学に、村井知至(本郷教会副牧師)はアンドーヴァー神学校にそれぞれ留学。

205 この「110号書簡」は「正三六二書簡」(七五二―七五三ページ)では、その日付は年紀を欠き、ただ「九月十四日」としている。「生徒族籍氏名一覧」(『同志社百年史資料編一』所収)によると、それは明治二十二年一月の調査になるものであるが、高田真次郎は「岡山県備中国後月郡井原村平民」、「普通科四年生」とあり、したがって、この書簡は明治二十二年とすることができる。

206 この「別紙」は社員決議の上の正式の依頼状である「111号書簡」に相当すると思われる。

207 田辺朔郎、島田道正の両技師は琵琶湖疏水工事の推進の中心スタッフである。

209 『基督教之基本』(寺沢精一訳)は大阪福音社から新島襄の死後、明治二十三年四月刊行された。「京都同志社新島襄」の序には「明治廿二年 月」の年紀が見える。第1巻『教育編』(史料75)参照。

210 第三高等中学校は明治二十二年七月、新築校舎が落成し、八月一日にここに移転、九月十一日には開校式をおこない新島襄もこの式に出席した。校長は折田彦市。この日招かれた教授陣は記録が残されていないが、田村初太郎が、そのなかにいたことが考えられる。

214 この「御加筆」とは新島襄が送った「基督教之基本」の「序」に対するものである。遺品庫史料には新島襄が徳富猪一郎に送付した原稿（墨）に対し、徳富の朱筆がはどこされている二通（内一通は徳富側で浄書し、さらに徳富の朱を入れたもの）の原稿がある。「116号書簡」参照。

215 前橋教会牧師不破唯次郎と北里ユウ（明治二十二年六月京都病婦学校卒業）の結婚。なおユウはこの年十一月末、旅行先の前橋で発病した新島襄を約二週間看病し、また、二十三年一月、大磯で看護にあたり、新島の臨終に立ちあった。

216 下村孝太郎の帰国を歓迎するとともに、ハリス寄附金に基づき、下村を「同志社ハリス理学部教授」とする理科教育にかかる諸事項が常議員会での課題であった（『同志社社員会記録』『同志社百年史料編Ⅱ』）。

217 この「111号書簡」は「正四四五書簡」（八四五ページ）では、その日付は明治二十二年十月五日としている。しかし書簡本文には日付の明記はない。いうまでもなく「120号書簡」に直接続くものであり、推定として掲げた。

218 この「113号書簡」は「正五七〇書簡」（二〇八四ページ）では、その宛名を「大沢善助」としている。しかし、書簡本文には宛名の明記はない。いま、従来の伝えに従い、推定として掲げた。

219 山中百（<sup>はや</sup>一八六〇—一九三八）は福岡の生まれ、不破唯次郎からキリスト教の勧めをうけ、同志社英学校入学、明治十五年（一八八二）二月五日西京第二公会で新島襄から受洗。十九年三月卒業を目前にして広津友信、花畑健起、辻孝次郎らと退学し、卒業はおくれたが、二十二年六月神学校をさきの広津、花畑、辻、松尾らと卒業、伝道界に入った。今治教会はその設立が明治十二年九月二十一日であり、したがって、教会は「十年祝期」に相当した。彼は十月十三日按手礼をうけ、今治教会牧師に就任した。

221 この「118号書簡」は「正一三四書簡」（三三四ページ）と同じであるが、森中章光の稿本には「尚々、小生事数日前出京罷在候」の追而書があり、これを付した。

222 明治二十二年十月十八日、黒田清隆内閣は閣議で条約改正中止を議決した。閣議の帰途、外務省前で大隈重信外

務大臣は福岡玄洋社員来島恒喜の投ずる爆弾で遭難、負傷した。

222 広津友信は新島襄のすすめで新潟地方伝道に従事することとなった。新潟では新潟第一基督教会（組合教会）と

新潟一致教会が明治二十二年四月三日合併の式を挙げ、合同して新潟基督教会となっていた。広津は一致系の大和

田清晴の後をうけて、牧会、伝道に当り、翌二十三年三月までこれを担当する。

224 群馬県知事は佐藤与三、佐藤は明治十七年七月以来、県令ついで県知事。群馬県会では全国にさがけて明治十

五年廃娼を決議し、十九年六月これを実施した。

225 島田三郎は明治二十二年五月二十八日の社員会で同志社大学設立募金運動のため、とくに東京方面を分担、委嘱  
することが決定されている（『同志社社員会記録』『同志社百年史資料編Ⅱ』所収）。

なお「同志社大学設立募金日誌」（第5巻「日記・紀行編」四七三―四七四ページ）によると、明治二十二年十月二十

226 五日の条に在京社員会の決定議事がしるされ、とくに「横浜着手ノ事」として島田に「奔走ヲ頼む事」とある。

この「131号書簡」は「正三四五書簡」（七三〇ページ）では、その日付を「明治二十二年十月二十四日」としてい  
る。しかし、書簡本文には、ただ「廿四日」とのみしるされている。「133号書簡」に相應するものとして、十月を  
推定とした。

\*\*\*この「135号書簡」は「正五六二書簡」（一〇五八―一〇六〇ページ）では、その日付を「明治二十二年十月二十四  
日」としている。しかし、十月二十五日が正しく、改めた。

横田安止（やすだ）（一八六五―一九三五）は肥後熊本の本薬園町の生まれ、幼名は寅彦。道家之山に学び、上京して大学予備  
門・成立学舎で洋学を学ぶ。明治十八年（一八八五）九月同志社英学校に入学、二十三年六月卒業。

新島襄が横田安止にきわめて深い信頼を寄せたことは、その書簡によってうかがうことができるが、わけても、  
そのことを象徴的に示すものは、明治二十三年一月十日付、新島八重宛の書簡（『郵号書簡』）に見られる。

横田は二十七、八年、参謀本部付従軍記者となり、その後大阪第百銀行、ついで九州商業銀行大阪支店長とな  
り、また市原盛宏の横浜市長となるにおよんで瓦斯局長として市政に尽力、その後再び横浜七十四銀行調査課長、  
横浜貯蓄銀行副支配人となる。大正十二年（一九二三）横浜で米、糸の商いをなす。横浜で死去。

227 広津友信については「130号書簡」ならびに注解（第3巻『書簡編』）九〇四―九〇五ページ）参照。



\*\*\*大久保真次郎については注解(第3巻『書簡編』)七八三ページ参照。彼は明治二十年一月十一日尾道の旅宿で信仰復興し、爾後余生を伝道事業に挺身することを決意して同志社に復学。二十二年七月から新島襄の意見に従い、その援助を得て埼玉県秩父郡大宮町に伝道を開始した。彼の伝道は内なる霊性の修養に心をくだき、外は教会の真の自給独立の基礎をつくることにあった。

228

児島惟謙(一八三七—一九〇八)は伊予宇和島の生まれ、明治四年(一八七二)司法省出仕。九年名古屋裁判所長、以後大審院民事乙局長、長崎控訴、裁判所長を歴任、大阪控訴院長となる。二十四年大審院長就任直後大津事件を担当した。彼は二十二年三月、新島襄の依頼に応じ、大阪控訴院長の地位にあって、大阪造幣局長遠藤謹助、大阪府知事建野郷三、第四師団長高嶋綱之助中将らと相談し、同志社大学設立運動を支援した。

なお、この「131号書簡」は、はやく明治四十三年二月二十五日発行『同志社時報』(第六三号、新島襄二十周年に当る)に掲載発表された。

229

「時危思偉人」は「135号書簡」(明治二十二年十月二十五日付、横田安止宛)の末尾にも見える。吟誦の句として、このころしばしば泛んできたことが知られる。

新島襄にとって「時危」あるいは「時艱」が具体的に何をさし、何を思っただけでなく、十月十八日の大隈重信外相の遭難、二十五日の総理大臣黒田清隆の辭表提出、三条実美内大臣の総理兼任など、十月十三日着京以来、政情激動のなかにあった。

230

和田正幾については注解(第3巻『書簡編』)七七五ページ参照。和田正幾は市原盛宏のイェール大学留学後、校長代理として東華学校の万端を執掌した。

231

富田鉄之助が旧藩青年のために地元組織した「造士義会」で東華学校の成立の基盤となった。明治二十年(一八八七)六月、その名称を「東華義会」と改めた。

232

古賀鶴次郎は福岡県御笠郡筒井村(現福岡県大野城市)の出身、明治十八年(一八八五)九月同志社英学校普通科一年に入學、二十二年十一月は四年生、二十三年六月普通科五年を卒業する(『同志社英学校概則』、「生徒族籍氏名一覧」、『同志社学校一覧』、『同志社百年史資料編』所収)。一年以来の同級生には横田安止、波多野培根、浜田正穂、鎌田亥四郎、津下紋太郎、浦口文治、奥村楨次郎らがいた。この「140号書簡」は「御懇書被下数回読了し、如何ニ



も貴君ニ御面会致し貴君之御言葉を聞くか如し、句々有精神、節々有奇骨、大ニ生之心を慰め、出京已来胸中ニ蟠まる種々無量之鬱屈せる隱雲を一掃したるか如し」とあり、新島が強い期待を寄せた一人であった。なお彼は新島襄の没後、同志社の寮務、教務を担当した。

この「140号書簡」は「正二〇二書簡」（四四三—四四五ページ）では、宛名を「古賀鶴次郎（快象）」（目次は「古賀快象」としている。

なお、ここにいる古賀が新島襄に十月二十七日付で宛てた書簡は次の通りである。

拜啓、国歩艱難之時分ト相成リ人心何トナク輕佻、切迫ニ傾クヲ觀察仕候而ハ学生ノ身分トシテ心窃カニ浩嘆ナキ能ハズ況ンヤ至誠衷情夙ニ国家生民ヲ以テ自ラ任ジ給フ先生ノ御心事如何アラント奉諒察候、想フニ今ヤ識者ノ憂慮ニ上ル可キ最要ノ事件ハ此ノ適従スル所ナクシテ滔々ト流俗ニ屈服シ去ラントスル青年少壮之思想感情ヲ如何ニシテ一宿ニ收攬随喜セシメテ其方向ヲ強固健全ナラシム可キヤノ問題ニアラント奉愚察候、然レトモ遺憾千萬当今ノ世界シテ其偉人物アルヤト思考仕候得ハ恰モ茫々宇宙人無數幾個男兒是丈夫ノ感慨ナキ能ハズ、小生ハ独リ深ク信ズ、先生ハ即チ当今青年者ノ頼テ以テ標準トスヘキ一世ノ師表者タル Great Missionヲ負ヒ給フコトヲ、噫先生ノ任ヤ重且ツ遠シ、先生幸ニ主ニ御忠勤ノ傍重々御自愛被遊候而寛大ナル御思召ヲ以テ御運動被遊様心ヨリ切願仕候、時事ノ憤慨感動ハ尤モ先生ノ御不快ヲ愈スル所以ニアラズヤト存シ候、小生等ハ天真ニ打明ケテ申セハ先生ノ命数ノ一日ナリトモ永ク久シク日本社会ヲ照ス可キ有力ナル光輝タランコトヲ切望切願仕候、言規ニ当ラズ甚ダ先生ニ呈ス可キニアラズト御叱正モ有之ベク存候得共時感結ンデ措クコト能ハズ衷情ヲ開キテ侍史ニ呈ス、不惡御垂訓之程奉願上候、頓首敬白

十月廿七日

爾の学生

鶴次郎

百拝

敬愛する

新島先生

侍史

234 「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』三九六ページ)によると、「十一月八日ノ夜 竹崎一二氏、鎌田政経、根元弥一郎ノ両氏ヲ携へ来訪ス。兩人共一□□ノガキ大将タル由」と見える。

236 吉田賢輔については注解(第3巻『書簡編』七四五―七四六ページ)参照。この書簡の「ウワ書」の表現には先輩に対する敬虔、遜讓が見られる。

237 「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』三九六ページ)に「小山私邸ニ於テ松方大臣ヲ訪ヒ大学養成ノ事ヲ依頼ス」と見え、また「同志社大学設立募金日誌」(同前書、四七四ページ)にも明治二十二年十一月十一日の条に「午后松方大臣ヲ小山ノ邸(三田一丁目小山)ニ訪フ」とある。

\*\*\*「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』三九六ページ)に「十一日ノ午前、土倉庄三郎来訪。其節、小野英二郎氏米国ヨリ帰航ノ上来訪ス。同氏ト共ニ食ス」と見え、また「同志社大学設立募金日誌」(同前書、四七四ページ)には明治二十二年十一月十一日の条に「小野英三郎来訪ス、独乙行ノ談話アリタリ」とある。

なお小野英二郎(一八六四―一九二七)は筑後(福岡県)山門郡城内村大字新外町(柳川)の出身、明治十三年一月同志社英学校に入り、十七年英学校五年生のとき徴兵新令をさけて中退。アメリカに留学、オペリン、ツイデミシガン大学に学び、この二十二年十一月帰国、柳川の橋蔭学園教員ののち、二十三年十一月から同志社政法学校教授、教頭。のち日本銀行に入り、日本興業銀行総裁、昭和銀行設立委員長に就任、金融界で活躍した。昭和二年一月十一日没。

\*\*\*綱島佳吉(一八六〇―一九三六)は美作(岡山県)真島郡新庄村の出身。明治十年(一八七七)一月浪花教会設立の日沢山保羅より受洗、同年同志社英学校に編入学し、十三年六月卒業、平安教会伝道師となり、十八年按手礼をうけ牧師。日本組合基督教会の成立に伴い東北福島(注)の伝道に携わり、その間同志社大学設立募金募集運動を推進(91号書簡)参照。二十二年五月古庄三郎の辞任後、霊南坂の東京第一基督教会より牧師就任の懇請をうけ(97号書簡)参照)、二十三年一月牧師となった。

239 「同志社大学設立募金日誌」(第5巻『日記・紀行編』四七五ページ)によると、明治二十二年十一月十四日の条に「早朝より浜町一丁目三番地佐野理八氏を訪フ、同氏ハ応分ノ力ヲ尽スト約ス」と見える。なお十一月十九日の条には「十一月十九日ノ朝、佐野利八氏ヲ浜町ノ自邸ニ訪ヒ寄附ヲ促ス、逐テ西京迄申込ムト申セリ」とある。

\*\*ゲーンズ (Marshall Richard Gaines, 1839—1924) はアメリカン・ボードの宣教師。イエール大学神学部卒業。明治十七年(一八八四)来日、同志社教師となり、伝道にも尽力した。二十二年十一月帰米した。

240

この「141号書簡」は「正三四九書簡」(七三四—七三五ページ)では、日付は「明治二十二年十一月十二日」としているが、本文には明記を欠いている。しかし、この書簡の日付を次の理由により「十一月十六日」と推定する。

まず「146号書簡」(十一月十六日付、徳富猪一郎宛)ではすでに「今朝も九時半比ニハ綱島ト一ノエンゲージも致し置候間、其前ニ一寸御来訪被下候ハ、重々」と新島からはその日の都合が伝えられていたが、一方徳富からは同日付で次の書状が新島に寄せられていた。いま日付にかかわる部分のみを引用すると、「若し綱島氏との御約束有之候ハ、御待受ニハ不及申候、本日ハ午後四時迄ハ在社ニ付御在宿の時ヲ窺て必らず御訪問可仕」とあり、事実、徳富は、この「148号書簡」にも見えるが、すでに一回、新島の旅宿を訪ね、綱島佳吉の来訪を待った。しかし、彼が来ないので一たん民友社に帰ったことが知られる。その綱島がようやくやって来たので、これを新島は徳富に「至急御披見」で送付した。その書簡が「141号書簡」である。したがって、この発信日付は十六日とするのが至当と思われる。

241

この「148号書簡」は「正四八三書簡」(九〇二—九〇三ページ)では日付は「明治二十二年十一月十九日」、宛名は「広津友信」としている。しかし、この書簡の本文は「近頃宮川関東ニ参られ云々」にはじまり、末尾は後欠の形で、しかも日付ならびに宛名の明記はない。柏木義円の写しの稿本によると、「廿二年十一月十九日 東京消印」、「元教寄屋町三丁目 成瀬松次郎方」とあるから、その発信日付はまず確定できる。なお同稿本によると、「又々至当ノ相談モ出来ベシト存候」の後、「題富士越之竜」以下「余ヲ以テ竜ニ比フルニアラス 只竜タルヲ学ハント欲スルノミ御一笑」の一文が付されている。『上毛教界月報』(昭和十年一月二十日発行、四三五号)でも同様の形の掲載であり、収載に当って、従来の後欠の形を改め、柏木義円の稿本によって詩の後書も併せて載せた。

また、広津友信の明治二十二年十二月二十三日付、新島襄宛書簡によると、「先生ノ御手紙十八日附ノ分ハ其中ニ詩アリ歌アリ、又先生ノ御主義ニ関スル者アリ、委細十分ニ承知致候、是書ハ十八日附ニシテ廿二日ニ着而シテ東京ヨリ御出シ相成候者ニ御座候」とあることから、この書簡には「題富士越之竜」以下が付加されていたと見るのが妥当であろう。よって、従来の伝えに従い、宛名を推定として掲げた。

\*\*「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』三九七ページ)によると、明治二十二年十一月十六日に該当する記事に「綱島佳吉君来ル〔中略〕宮川氏モ来ル」とある。なお「宮川経輝」(二〇七ページ)によると、宮川は十一月七日から十九日まで関東とくに上毛の伝道旅行をおこない、とくに十一月八日には新島襄と同志社の精神的改良につき意見を交えたとある。

\*\*\*この詩は「140号書簡」(明治二十二年十一月二日付、古賀鶴次郎宛)の図と相応すると見てよいであろう。

242 『上毛教界月報』(昭和十年一月二十日発行、四三五号)では、この「御一笑」のあと続けて「畢生之目的」として「自由教育 自治教会 両者併行 国家万歳〔下略〕」を掲げている。これについては「138号書簡」参照。

243 「同志社大学設立募金日誌」(第5巻『日記・紀行編』四七七ページ)の明治二十二年十一月十五日の条に見える次の記事が該当すると思われる。

上州山田郡福岡村

山岡藤十郎

大間々町

関口長次郎

野口与八

新井氏ト御協議之上御地方募集之事ハ御尽力アリ度申遣ス

244 「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』三九八ページ)の十一月二十三日の条には「松方大臣ヲ訪ヒ決答ノ所ヲ求ム、大臣ハ之ニ応セリ。安場〔福岡県〕知事、原善三郎、朝田又七、平沼專造ニ面会ス」、同二十四日の条には「河島醇ヲ訪ヒ、大学ノ事ヲ頼ム」と見える。

245 新島襄の「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」という言葉は「政事上之実況ハ実ニ実着ナル真面目ナル男兒ノ乏シキヲ覚ヘ」、さらに「徒飯公事逞私慾 忼慨誰先天下憂 廟議未定国歩退 英雄不起奈神州〔傍点・杉井〕」という当代政治社会の状況に対応するものであった。

なお漢詩に見られる「廟議未定ラズ」は、十月二十五日黒田清隆が総理を辞職し、内大臣三条実美が総理を兼任する事態を示していると思われるであろう。

246 「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」は「過日広津ニモ申遣」とあって、明治二十二年十一月、上州前橋に立出する前に「畢生之目的」として吐露された。

松方正義（一八三五—一九二四）は明治十四年（一八八一）大藏卿として国家財政にたずさわり、十八年内閣制度成立以後も引続いて蔵相をつとめた。新島襄との関係は明治二十二年十一月以降、徳富猪一郎が周旋したことが知られる（「72号書簡」、「74号書簡」、「75号書簡」参照）。この「75号書簡」は「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四七八ページ）の十一月二十三日の条に「松方大臣ヲ訪フ」、ついで二十四日の条に「大臣ニ一書ヲ呈シ將來ヲ托ス」に相当する。

\*\*この別紙は「統九七書簡」（目次では九八書簡、一六九—一七一ページ）がそれに該当すると思われる。

「統九七書簡」は、その日付を明治二十一年月日未詳とし、宛名は「某（宛書簡稿）」としている。しかし冒頭の「京浜間特別之御誘導ヲ願ヒ度人名」以下は「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四七五—四七六ページ）の明治二十二年十一月十四日以後の記事「是より着手スヘキ分」とする人名簿に相当し、その人名の後の一文である「先朝、原、平沼兩人ト同行ニテ参館候朝田又七」は「漫遊記事」（第5巻『日記・紀行編』三九八ページ）の十一月二十三日の新島襄の松方訪問の条に当る。また、末尾に掲げられている「八千円 岩崎弥之助」（実は五千円 岩崎弥之助、三千円 岩崎久弥の合計）にはじまる寄附金額とその氏名のうち、住友吉左衛門、藤田組が加わって、その寄附金額の追加決定をみるのは、すべて明治二十二年の事項に属する。したがって、この文書は明治二十一年の某宛の書簡稿ではなく、明らかに書簡に添付された別紙と見るのが至当である。とくに「朝田又七へモ御談被下」の一条から「74号書簡」の松方正義宛に付された別紙とすることができよう。

よって、従来の扱いを改め、ここに掲げた。なお「75号書簡」参照。

【別紙】

④ 墨 ⑥ 京浜間寄附金募集人名覚

京浜間特別之御誘導ヲ願ヒ度人名ハ左之通

谷元道之

種田誠一

安田善次郎

川崎八右衛門

〔○印ノ分ハ成丈ケ速ニ御談判被下度奉希候〕

○原善三郎

○茂木惣兵衛

〔三井組ハ已ニ北垣京都府知事ノ手ヲ經テ三千円ノ寄附ハ頼ミオキ申候〕

○三井組

川村伝兵衛

金原明善

原亮三郎

〔同人ヘハ大久保利和殿ヨリモ御奨励被下候様ニ願ヒ置キ候〕

東京府下ニ於テは御心当リ之人ハ多分可有之候間、小生ニ於テは多人數程重々之事ト奉存候

横浜ニ於テ將來照会ニ及ヒ度人々ハ左之通ニ御座候

〔同人ニハ小生上州ヨリ帰京ノ上ハ直ニ面談可仕計畫ニ御座候〕

高島嘉右衛門

〔同人ヘハ已ニ一回談判仕已ニ賛成丈ハ致居候〕

伏島近藏

上郎幸八

西村喜三郎

若尾育造

樋口徳二郎

大谷嘉右衛門

簗田長二郎

○朝田又七

×木村利右衛門

×渡辺福三郎

左右田金作

金子政吉

鈴木宇右衛門

右之人々之内御心当リモ可有之候間、宜シク御誘導被下置度候、可相成ハ先朝、原、平沼兩人ト同行ニテ参



館候朝田又七氏へモ御談被下候ハ、幸甚

八千円 岩崎弥之助 二千五百円 平沼專造

六千円 渋沢栄一 二千元 益田孝

六千円 原六郎 二千元 田中平八

五千円 土倉庄三郎 二千元 大倉喜八〔郎〕

三千円 住友吉左衛門 二千元 藤田組

248 この「154号書簡」は「正三五三書簡」(七三八―七三九ページ)では、その日付を「明治二十二年十一月二十五日」としているが、本文には年月の明記はない。新島襄の「今朝河島〔醇〕氏ニ面会」は「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』三九八ページ)、「同志社大学設立募金日誌」(同前書、四七八ページ)の十一月二十四日(十一月二十三日)の条に見える。よって推定とした。

249 \*\*「153号書簡」の「京浜間特別之御誘導ヲ願ヒ度人名」の注解参照。

249 この「153号書簡」は昭和十年一月二十日発行『上毛教界月報』(四三五号)に抄録の形で掲載されている。

\*\*「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』三九八ページ)の十一月二十六日の条に「知事佐藤与造氏ニ面談ス。又第二部長曾我部道夫氏ニ面会ス」とある。

254 この「153号書簡」は柏木義円の筆写による稿本によった。ところで「152号書簡」(明治二十二年十一月二十三日付、横田安止宛)には、「有感」と題して「従仮公事退私慾 忼慨誰先天下憂 廟議未定国歩退 英雄不起奈神州」の

詠草があり、書簡の末尾は次の通りである。

又過日広津ニモ申遣候通、小生畢生之目的ハ、自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳、小生之心情御洞察可被下候 〔傍点・杉井〕

したがって、まずこの「152号書簡」から、新島襄は広津友信宛に、すでに横田安止宛よりはやく、その所懐を述べ、とくに「畢生之目的」として「自由教育 自治教会 両行併行 国家万歳」という素志を書き送っていたことが知られる。しかして、いま、この新島襄の広津友信宛書簡は柏木義円写「153号書簡」という形でしか見ることができない。ところで柏木義円の筆写は抄録の形がとられ、「有感 明治廿二年十一月」以降が広津宛書簡に存在す

という確証はないが、「畢生之目的」と題する以下の三行のうち、その「心情」を吐露する言葉は、横田安止宛のそれと相違し、また、大久保真次郎宛とされる「191号書簡」の「衷情」ともこととなる。したがって、この筆写部分の「畢生之目的」を新島が伝えた人は別途に考えねばならない。しかして、最も可能性の高いのは、広津友信としないでなるまい。この推定を傍証するのは、新島の四十五周年に当る昭和十年一月二十日付発行の『上毛教界月報』（四三五号）で、広津友信宛書簡を十一月十九日付（198号書簡）、十二月二十八日付（192号書簡）、こえて明治二十三年一月七日付（893号書簡）、一月十五日付（899号書簡）と引続いて抄録、掲載しているなかに、この書簡が日付を付さないまま挿入されている。柏木は『月報』への掲載に当って、「某伝道者」として広津友信の名を掲げてはいない。しかし、これらはすべて広津宛のものである。

以上の推定のもとに、この「198号書簡」の日付を十一月とし、広津友信宛とした。

255

この「199号書簡」は「正四八九書簡」（九二二—九三二ページ）では、日付を「明治二十二年月日未詳」、宛名を「広津友信」としているが、柏木義円筆写の稿本には、日付、宛名の明記はない。したがってこの書簡の末尾に見られる「小生も出京以来既に一ヶ月ヲ経過」に基づき、かつ従来の伝えに従って日付を十一月とし、広津友信を推定としてここに掲げた。

256

この「190号書簡」は「正三五六書簡」（七四四—七四五ページ）では、日付を「明治二十二年十一月」とし、宛名を「徳富猪一郎」としている。しかし書簡の本文には、日付ならびに宛名の明記はない。いま従来の伝えに従い、日付ならびに宛名を推定として、ここに掲げた。

257

この「192号書簡」は「正六〇書簡」（一九七—一九八ページ）では、日付は「明治二十二年十二月九日」、宛名は「新島八重子」としている。しかし柏木義円筆写の稿本には日付、ならびに宛名の明記を欠いている。いま従来の伝えに従い、日付ならびに宛名を推定として、ここに掲げた。

\*\*シマード (Mary H. Shed, 1885—1932) はアメリカン・ボードの宣教師、ボストン出身。ウエスリー・カレッジに学び、明治二十年（一八八七）来日、はじめ同志社につとめ、二十一年六月新島襄に勧められ創立期の前橋英和女学校（のち上毛共愛女学校）に赴任、同女学校教育の確立に尽力、その間幼稚園（清心幼稚園）を創設、二十八年五月帰国した。



258

医師後藤源九郎については注解(第3巻『書簡編』九二五ページ)参照。

なお、新島襄のこのときの関農夫雄宅における発病経過については「漫遊記事」の十一月二十八日以降の記事(第5巻『日記・紀行編』三九九ページ)に見える。

260 \*\*不韋ユウ(一八六四—一九三六)は北里ユウ、明治二十二年六月京都看病婦学校卒業、九月前橋教会牧師不韋唯次郎と結婚。なお不韋ユウは二十三年一月大磯における新島襄の看護にあたる。二十四年夫とともに京都に移り、三十五年京都大学病院看護長となる。

260

この間の経過は「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』三九九—四〇〇ページ)参照。

261 \*\*福田和五郎は『国民之友』(明治二十二年一月二日発行・三七号)に掲げられている「同志社大学設立募金日誌」(第5巻『日記・紀行編』四七八ページ)によると、「上州吾妻郡沢渡村」、「五円」としてされている。「同志社大学設立募金日誌」(第5巻『日記・紀行編』四七八ページ)によると、明治二十二年十一月二十五日、新島襄の前橋行に同行、案内をつとめている。

263 261

新井毫の活動については「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』四〇〇ページ)参照。

この「166号書簡」は「正三六〇書簡」(七五〇ページ)では、その日付を「明治二十二年十二月十三日」としている。しかし、はがき表書きは十二日とあり、これに従った。

266 \*\*この「167号書簡」は「正四八四書簡」(九〇三—九〇四ページ)では、日付を「明治二十二年十二月十四日」とし、宛名を「広津友信」としている。しかし、柏木義円の筆写の稿本には日付、宛名の明記を欠き、前欠、後欠の断簡である。いま従来の伝えに従い、日付ならびに宛名を推定として掲げた。

267 京橋南鍛冶町茂林館、林又右衛門方。新島襄は「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』三九七ページ)によると、明治二十二年十一月十九日に京橋元数寄屋町三丁目成瀬松二郎方から転宿。十一月二十五日前橋に向い、そして再び「林屋」すなわち茂林館に寄宿する(同前書、四〇〇ページ)こととなった。

267 「正六一書簡」(二二〇ページ)では「カノロヤカマシキモノドモニ彼は云ハレヌ」としている。柏木義円筆写の稿本によって補った。

\*\*新島襄のすぐ上の姉速水とき(第3巻『書簡編』七六〇ページ注解\*\*参照)の義嗣子となった足立琢(旧姓千葉)すなわち速水琢殿は明治十八年六月同志社別科神学(邦語神学)を卒業し、ラーネッドの新約聖書注釈の刊行に協

力したが、明治二十二年十一月死去。

268 時岡恵吉は明治二十二年一月調査の「生徒族籍氏名一覧」(『同志社百年史資料編一』)によると、岡山県の邑久郡

牛窓村の出身で、この年同志社の別科神学の三年生である。当時別科神学の同級生には、同郷の浜嶋太郎、福岡の片山猪之吉、松山の園田重賢、新潟の真部俊三、京都南桑田郡の小北寅之助、上毛南勢多郡堀越の佐竹篤がいた。

時岡はこの年十月二十五日長岡に到着し、伝道活動をはじめた。

269 原忠美については「88号書簡」三三四ページの注解参照。

\*\*\*ニール (Horatio Barnister Newell, 1861-1933) はアメリカン・ボード宣教師。メイン州に生まれ、アーモスト大学、シカゴ神学校を卒業後、明治二十年(一八八七)九月来日、十月新潟に着任し、新潟教会、北越学館で活動、二十一年一月からは長岡学校教師として長岡教会も応援した(本井康博「H・B・ニューエル——長岡在住五年」『長岡教会百年史』)。

271 この「111号書簡」は「正四八五書簡」(九〇四—九〇五ページ)では、その日付を「明治二十二年十二月十六日」とし、宛名を「広津友信」としている。しかし、柏木義円筆写の稿本には日付ならびに宛名の明記を欠き、かつ、前後欠の断簡である。いま従来の伝えに従い、日付、宛名を推定として、ここに掲げた。

272 273 この「111号書簡」は昭和十年一月二十日発行『上毛教界月報』(四三五号)に、抄録の形で収載されている。

「正四八六書簡」(明治二十二年十二月二十日付、広津友信宛、九〇六ページ)では、「又将来新潟県を我党ノ手ニ入ル、大計画ヨリ又□□□□□□成丈ヶ事業ヲ挙ケテ」と、一致基督教会に対してはばかった取扱いをしているが、森中章光筆写の稿本によって「一致ノ侵入ヲ」を復した。

\*\*\*前注同様「正四八六書簡」(九〇六ページ)では、「時岡ハ永ク長岡ニ適スル人ナルヤ、君之御意見ヲ御漏シ被下度候、此レハ□□君之御周旋ナリ、先生ニハ折タルス之仕事ハ被致」とあって、小崎弘道に対する顧慮の取扱いが見られる。森中章光筆写の稿本によって、「小崎」を復した。

278 植村正久については注解(第3巻『書簡編一』八二七—八二八ページ)参照。新島公義という極く身近な人に対してのみ、一致基督教会、植村正久に対する所懐が示されている。

\*\*\*この「111号書簡」は「統三五書簡」(五〇ページ)では、日付を「明治二十二年十二月二十二日」とし、宛名は

「新島公義」としている。しかし、書簡の本文には日付ならびに宛名の明記はない。いま、従来の伝えに従い、日付、宛名を推定として掲げた。

279 この「118号書簡」については「漫遊記事」（第5巻『日記・紀行編』四〇六ページ）の十二月二十八日の条に「新潟へ一通之長文ヲ送ル」（広津友信宛の「112号書簡」に当る）と見え、これに追記する形で「廿三四日 上毛ノ三人ニ右同断」とするのに当る。

\*\*「169号書簡」二六六ページの注解参照。なお「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』四七七ページ）には、信濃銀行頭取 小坂善之助について「茂林館ニ於而同氏ノ来訪ニ預ル、茂林館之主人林屋（マキヤ） 紹介ニヨル」と見える。

281 井手義久については注解（第3巻『書簡編』七九七ページ）参照。なお井手の西群馬（高崎）教会への赴任は明治二十二年十二月で、就任式は翌二十三年三月二十五日におこなわれた。

282 茂木平三郎（一八五〇—一九〇二）は田村滝次郎・トウの長男として上州碓永郡郷原に生まれ、明治二年（一八六九）茂木家の養嗣子となる。十四年三月六日安中教会で海老名弾正から受洗。同志社に学ぶ。十六年十二月北甘楽郡南後箇村の伝道にたずさわり、翌年二月二十日甘楽第一基督教会の成立に際し伝道師となった。十八年十月緑野郡藤岡の伝道にたずさわり、二十三年四月伝道教会を設立。二十年三月から神奈川県北多摩郡八幡山の伝道にも従事した。

\*\*大久保真次郎については「漫遊記事」（第5巻『日記・紀行編』四〇二ページ）十二月十九日、二十日の条に「大久保真次郎氏来ル」と見える。

\*\*\*小北寅之助（一八六五—一九三二）は丹波（京都）南桑田郡今津村の出身。明治十六年（一八八三）九月四条（京都）教会でM・L・ゴードンから洗礼をうけ、爾後十名の家族全員が受洗。彼は十九年九月同志社神学校（別科神学）に入學、二十三年六月卒業。大久保真次郎とは同じ別科神学の学生であった。

284 白石村治（一八六五—一九二九）は日本聖公会京都教区教務所にある自筆の「伝道履歴概略」（本井康博「教会設立前後の人と事件」『長岡教会百年史』）によると次の通りである。

一、明治一七年六月ヨリ一八年三月迄神奈川県小田原ニ伝道

一、<sup>〔71〕</sup>全年一八年六月ヨリ全年一二月迄群馬県富岡町伝道、<sup>〔72〕</sup>全年一九年一月ヨリ全年廿年五月迄全県原ノ町伝道

一、全廿年六月ヨリ全廿二年九月迄新潟県長岡町伝道

一、全廿二年一〇月ヨリ福島県福島町伝道ニ着手シ全廿四年四月ニ至リ組合教会派トノ関係ヲ断チ日本聖公会ニ加ハリ引続キ明治廿七年三月迄定住伝道

一、全廿七年三月ヨリ宮城県仙台市ノ伝道ヲ始シメ三十一年一月迄定住

一、全三十一年二月奈良県五条町ニ移リ全年四月現在地ニ定住

右之通りニ候也

明治三十六年八月廿四日

白石村治

これによると白石は長岡（組合）教会の初代の伝道師となり、この年二十二年十月から福島県に移り、福島伝道に従事したことが知られる。新島は赴任早々の白石に福島を中心として二本松、川俣、梁川を伝道区とし、松田順平、東正義と「鼎足の形勢」を形成することを勧めている。

白石村治については八六ページの注解参照。なお『あかしびとたち』（日本聖公会歴史編纂委員会編）によると、白石は安中藩中沢浪平の子として安中に生まれ、少年のころ母とともに受洗、同郷の新島襄を慕って明治十四年、同志社に入学、二年後、明治学院に転じ、長老教会の伝道者として小田原に赴任したとし、小田原伝道後、同志社に戻り、神学部を卒業とある。しかし、前掲の自筆「伝道履歴概略」では、群馬県の伝道を経て長岡に設けられる組合教会の伝道師として赴任するという経緯になっている。

この「79号書簡」は「漫遊記事」（第5巻『日記・紀行編』四〇六、四一一ページ）の十二月二十三、二十四日の条、「伝道策」の記事と相応する。すなわち、この記事は十二月二十八日の条に「◎新潟へ一通之長文〔78号書簡〕広津信宛ヲ送ル」とした後、二十三、二十四日の条が追記されており、そこには「福島之白石〔中略〕ニ書ヲ送ル、此レハ福島伝道策」とある。

\*松田順平については「福島出〔中略〕伊勢時雄君帰国せし上は成丈速に郡山に行き、常住伝道者と為るべき旨相勸申候」と見え、ほぼ同様の記述が「78号書簡」（十二月二十四日付、東正義宛）、「78号書簡」（十二月二十八日付、

広津友信宛）さらに「809号書簡」（二十三年一月七日付、同上宛）、「809号書簡」（一月十五日付、同上宛）に見える。それによると彼は会津若松の出身で、当時伊勢時雄の渡米留守中、本郷教会の説教を助けており、来訪した松田順平に新島襄は伝道師として郡山に赴任することを「主唱」した。このことは「漫遊記事」（第5巻『日記・紀行編』四〇六ページ）にも十二月二十三、四日のこととして「松田順平氏ニ福島行乃郡山行之事ヲス、メタリ」としている。また、年の改まって一月十五日の条には「松田順平氏来訪ス、福島行ノ事ヲ談判ス、先月給十五円ト定ム、書籍料十円差出シ、別ニ準備金ヲ渡セ<sup>ス</sup>。小崎兄教会ヨリ派出ノ名義トナス。郡山ヲ本城トナシ三春、須加川等ニ着手スル事ニ談セリ。伝道費ハ別ニ生ノ手ヨリ送ル事ニ談セリ」（同前書、四〇九ページ）と見える。この記事は新島のしるす日記の記述のほとんど最後のそれに当る。

なお新島の葬送の記録によると、松田順平は大磯より京都にかえる新島の柩に従い、同志社公会堂における記念会で、ついで追悼会でも新島を偲んで感話を述べている。

松田順平は明治十九年（一八八六）五月二十三日、福島で押川方義から洗礼をうけ、仙台神学校に進み、二十一年十二月中途、宣教師ホーイ（William Edwin Hoy, 1853—1927）の回顧によると同志社に転入学したことがしるわれている。伊勢時雄の渡米は二十二年二月であり、当初その留守を担当することになったのは村井知至である。いま、松田順平が本郷教会の説教を助ける始期は明らかでない。また会津若松出身の松田に寄せる新島襄の冥契の思いは、その死期を迎えてきわめて深い（本井康博「松田順平（三代）——さすらい伝道者」『長岡教会百年史』）。

\*\*\*東正義（一八六六—一九一九）は四国松山の生まれ、明治十四年（一八八一）七月松山中学校を中退して同志社英学校に編入学、しかし十七年七月病氣のため中退。二十一年神戸教会伝道師に就任、二十二年三月から会津若松伝道所主任。

285 押川方義については注解（第3巻『書簡編』九二四ページ）参照。

\*\*ディホレスト（John Kinne Hyde DeForest, 1844—1911）アメリカン・ボード宣教師。コネティカット州生まれ、一八七一年イェール神学校を卒業、明治七年（一八七四）来日、大阪基督教青年会の創設に貢献、十九年九月東華学校教師となり同校創立にかかわり、また東二番丁教会を牧し、仙台を中心とした東北地方の伝道、教育に当たった。しかし二十四年七月東華学校における聖書科の削除に反対して退職した（『基督教新聞』四二八号、明治二十四



年十月九日発行。

\*\*\*三宅荒穀（一八六五—一九〇二）は岡山の生まれ、明治十三年（一八八〇）同志社英学校三年に編入学し、新島公義とは同級生、十六年六月卒業、ついで神学校に進み、十八年八月ニューブランズウィック神学校に留学、二十一年五月同校を卒業し、按手札をうけて帰国。二十二年仙台の宮城教会牧師となり、東華学校の教師も兼ねた。

287

この「180号書簡」は「漫遊記事」（第5巻『日記・紀行編』四〇六、四二一ページ）の十二月二十三、四日の条に「若松之東君ニ書ヲ送ル、此レハ福島伝道策」とある記事に相応する。東正義については「179号書簡」二八四ページの注解\*\*\*参照。

\*\*\*『基督教新聞』（明治二十二年十二月六日付、三三三号）の「教報」には「リバイバル」の詳報各地より集るゝとして「頃に至り喜ぶべきリバイバルの報道各地より集りしまゝ其長きを厭はずして此に掲載せり」と詳細な会津若松教会のリバイバルを報じている。

去る七日の事なり、ふとせし事より教会の二三姉妹の間に不和を生じたりしが小弟の説諭に依り一時は和解したる有様なりしに、如何なる故か相互の確執は一層深く遂には敵視して言語をさへ交へざるに至れり、此に於て小弟は大に憂慮せしが此の相互の不和を氷解せしむるは只聖霊の熱あるのみを悟り、夫れより度々祈禱会を催ふせしが、本月一日より催ふせし一週間連夜の祈禱会に於ては幾分か聖霊の賜を受けるを得たり、夫れより去る廿日迄は聖霊の恩雨沛然として教会の上に降らんとして降らず、小弟等受んとして受る能はざる感ありしが、去る十九日の夜、海老名氏の宅に於て組の集りを催ふせしに、如何なる故か平常に倍する集りにして、将に会を開かんとする時に当り去る九月以来蚕種売捌の爲め東京、埼玉、群馬、新潟の各府県を巡回中なりし佐藤政吉兄帰り来り旅装のまゝ夕食もなさで集会に列せしを以て、聖書講義の後、同兄に感話を依頼せしに同兄は聖霊に充され熱心に岡山孤児院の事を引き、愛と云ふ事に付感話ありしが其話や満場兄姉の心を刺せり、此に於て各々己れに真正の愛なく神をも人をも愛せざりし事を悟り、主の前に罪を悔改むる者起るに至れり、小弟は此時こそ聖霊の賜を受べき時と信じ、其翌夜乃ち二十日夜より祈禱会を催さんと発言せしに一同欣然として賛成し遂に祈禱会を開く事となれり、是れ此度当教会にリバイバルの起りし発端なり

二十日夜は祈禱会に列する者非常に多く、何となく堂内に聖霊の降臨まします如く感ぜしが、小弟は既往の事

を顧みて実に己れの愛なく、且つ従来の信仰は実に冷かなりし事を悟り、主の前に罪を悔改むるを得たりしが、続々兄弟姉妹は罪の認をなし、涙に咽んで其の罪の悔改をなし、或は従来発見し得ざりし罪を発見して悔改むる者あり、或は赦罪を乞ひ落涙して感謝するものあり、祈禱会数時間に渉るも皆時の遷るを知らず、或は泣き、或は祈り、或は歌ひ、或は謝し、十一時に至りて散会を告げしが尚ほ信徒は深更迄も各所に於て祈りて在りたり

二十一日は前夜に増したる盛会にして、神は祈りに応へ、聖霊を下し玉ひ、確く執りて動かざりし頑固なる姉妹の心を砕きて罪を悔ゆるの余りに自ら神前に出で、祈るを得ず、号泣悲慟して小弟に謝罪の祈禱を求め、自らも又た続きて其罪を謝し、遂に従来敵視せし姉妹の処に至り罪を謝し、終に握手以て心底より真実の交を現はし、惡しき教会の麴酵は取り去らるゝに至れり、嗚呼数月間結んで解けざりし姉妹間の確執も一朝俄然として聖霊の熱に遇ひ氷解して其跡を留めず、相互の麗はしき有様を見るに至りしは実に感謝の至りに堪へざるなり

二十二、二十三日の両夜は一層祈禱の精神を増し、前夜迄一時の感情なりと冷笑せし兄弟も罪を認め大に悔ゆるに至り、聖霊の恩雨は益々教会の上に注がれ、之が爲めに愈々熱心を増し、兄弟姉妹は恩寵に充さるゝと共に漸々隠微の罪をも発見して赦罪を願ひ欣に充さるゝを得たり

二十四日の安息日は未曾有の集りにして、説教後に祈禱会を催ふし集会の間隙には信徒所々に集まり祈禱を務めたり、然し此日に於ては格別の異條なし

二十五日は尚ほ続ひて祈禱会を催ふせしに如何なる故か集会する兄弟は少なかりしが、小弟等之れが爲めに愈愈祈禱の必要と又霊を熄すべからざる事を感じ、或は勧め、或は祈りしが俄然として三浦鉄造兄は非常なる聖霊の感化を蒙れり、氏は元来当教会に於ては熱心家の聞えある人なりしが、去る二十一日以来非常に己れの罪を感じ煩悶の余り朝に山に行きて祈り、夕は野に出で、祈りしも只罪の重荷を増すのみなりしが、大なる聖霊の恩化を蒙りしや、其様左ながら狂者の如く号泣悲慟して罪を謝すると共に、暫時の間堂内は只号泣感謝、祈禱の声のみなりしが、一同聖霊に充され遂に喜びの余り或は抱持するあり、或は握手するあり、朗々たる讚美の声のみは堂の内外に震動せり

此度のリバイバルの結果は延きて未信徒にも及ぼし、従来我教を蛇蝎視せし者も会堂に出席するに至り、又信徒の家族にして不信の者も断然我教に従はんと決心を起すものあるに至れり〔教員特報〕

この「冊号書簡」は「正三四三書簡」（七二八ページ）では、その日付を明治二十二年十月二十四日としている。しかし金森通倫が上京し、「廿六日」、〔当旅店（茂林館）〕で社員会を開催するのは、この年十月ではなく、次に掲げるように十二月のことである。よって、従来の十月とするを改め、十二月とし、推定としてここに収めた。

十二月二十六日開催の社員会については「漫遊記事」（第5巻『日記・紀行編』四〇六ページ）の同日の条に「午前社員ノ会議ヲ開スル、相談之上、臨席社員丈ケニテ決セシ事ハ左之如シ、相談セシ事ハ大学之扣帳之方ニ写シ置ク」と見える。

なお「同志社大学設立募金日誌」（同前書、四八一—四八二ページ）は徳富猪一郎の記録する「明治二十二年十二月廿七日 午前十時、東京新島氏寓所ニ於テ会議ヲ開ク」以下は次の通りである。

第一 原田助氏ヲ神学部教授兼同志社教会牧師トシテ聘スル事

第二 小野英三郎氏ヲ大学ノ資金ヲ以テ独逸ニ遊学セシムル事

第三 明治二十三年四月ノ通常会迄ニ大学設立ニ関スル理財学部設立ノ原案ヲ編纂セシム

東京ニ於テハ 小崎 徳富

西京ニ於テハ 金森

#### 第四 化学部

先シ化学部丈ヲ設ル事

応用化学部ヲ追加スル事

下村氏ニ取調ヘヲ委托スル事

第五 同志社女学校ヲ移動セシメ、其敷地ヲ大学ノ敷地トスル事  
右決定

小崎弘道 湯浅次郎〔治〕

新島襄 金森通倫



290

この「12号書簡」は「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』四〇六ページ)の十二月二十八日の条「新潟へ一通之長文ヲ送ル」に該当し、一連の伝道策(上毛、福島)に対応するものである。

さて「正四八七書簡」(九〇七—九一九ページ)は柏木義円筆写の稿本にもとづいており、はやく新島襄の四十五周年を記念して、昭和十年一月二十日発行の『上毛教界月報』(四三五号)に抄録の形をとり、某伝道者に宛てられた書簡として抄録紹介された。なお、「正四八七書簡」には書簡本文中、一〇カ所にわたって、□□をもって示しているところがあるが、収載に当って、すべて柏木の稿本に復し、かつその箇所を\*をもって示した。

\*\*「正四八七書簡」(九〇八ページ)では「牧師ニタノム積ト申上、貴君ヲ□□□□スルハ」としている。柏木の稿本によって□□の部分に「ツカ[シ]メント」を復した。

\*\*\*「正四八七書簡」(九〇八ページ)では、「新潟県下之伝道者トナラレテハ如何、決シテ□□□□□□□□□□ニ仕度」としている。柏木の稿本によって□□の部分に「一致会ノ方ニ頼マレヌ」を復して示した。

292

「正四八七書簡」(九一二ページ)では、「明治廿三年ニハ先ツ大□□ヲカタメ」としている。柏木の稿本によって□□の部分に「間々」を復した。

\*\*「正四八七書簡」(九一二ページ)では「小北氏ヲ招キ武州本庄ニ新開墾地ヲ開キ、同州□□又其近傍」としている。柏木の稿本によって□□の部分に「兎玉」を復した。

293

「正四八七書簡」(九一二ページ)では、「是非福島辺ニ着手、此ノ時機ヲ遅延□□□□□□懇切ニ御勸メ」としている。柏木の稿本によって□□の部分に「無カラサル事」を復した。

\*\*「正四八七書簡」(九二三ページ)では「其ヨリ信州一円又同州□□ノ事等ニ及ヒタレハ」としている。柏木の稿本によって□□の部分に「植産」<sup>(穀)</sup>を復した。

294

志方之善(一八六四—一九〇五)は肥後(熊本)の山鹿郡来民町の生まれ、陸軍教導団を経て明治十八年(一八八五)九月同志社英学校(普通科)に入學(同志社英学校概則)『同志社百年史資料編』所収)、二十一年には別科神学に進み、この二十二年暮の段階では、別科神学三年生、同級生には曾我部四郎、兼子常五郎、花田岩五郎、湯谷礎一郎ら二十一人がいた(同志社学校一覽、同前書所収)。志方は新島の死に遭い、二十四年四月以降、妻(荻野哈子)と北

海道利別にインマヌエル村の建設を図った。

※※「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』四〇六ページ)の十二月二十八日の条に「廿二年之冬余在大磯<sup>〔カ〕</sup>艸 閑東北越伝道策贈北越之一友人」とあって、次の詩がしるされている。一友人は広津友信をさすことはいうまでもない。

不止月下併能越<sup>連合</sup> 跋涉八洲是我分

壯図却促男兒淚 滴々灑為縷々文

なお「186号書簡」(十二月三十日付、新島公義宛)の末尾「謙信ノ故事ヲ想像ニ賜ヘ 不止月下併能越<sup>〔シ〕</sup> 跋涉八洲是我分 壯図却促男兒淚 滴々灑為縷々文」参照。

296 295 柏木義円筆写の稿本はこの「秋風蕭颯渡刀川」の詩を――で示しているが補って示した。  
「正四八七書簡」(九一八ページ)では、「上州、越後、福島ノ三県否信州、栃木ヲ合せ、関東□□ノ五県ハ早晚自由ノ旗ヲ立」としている。柏木の稿本によって□□の部分に「抜群」を復した。

※※「正四八七書簡」(九一八ページ)では「富源モアリテ大ニ独立シ□スラ<sup>〔ユ〕</sup>」としている。柏木の稿本によって□の部分に「易」を復した。

※※※「正四八七書簡」(九一八ページ)では、「自治ノ政治ヲ実行シ□□ヲ見タリ」としている。柏木の稿本によって□□の部分に「易キ」を復した。

※※※「正四八七書簡」(九一八ページ)では「俗眼ハ余ヲサシテ□□ト称セリア、」としている。柏木の稿本によって□□の部分に「主旧」を復した。

297 北越学館館長加藤勝弥のもとにおける内村鑑三の辞職(明治二十一年十二月 後、明治二十二年(一八八九)三月、松村介石は教頭として来任。松村介石については注解(第3巻『書簡編』)八〇九―八一〇ページ)参照。松村は高梁教会牧師辞任後、大阪に出て『福音新報』ついで『基督教新聞』の編集にたずさわり、二十年十一月校長押川方義の勧めで山形英学校教頭に就任。この年三月麻生正蔵とともに北越学館に赴任、十一月月刊誌『北光』を創刊した。

※※森信夫については「570号書簡」三六ページの注解参照。この「183号書簡」は写しであり、徳富用封筒に収められてきた。

298 この「184号書簡」は「正八七書簡」(二六〇ページ)では日付を「明治二十二年十二月二十八日」、宛名を「新島公義」としているが、ともに明記はない。いま従来の伝えに従い、推定として掲げた。

305 この「188号書簡」は「正五六四書簡」(二〇六三一〇六九ページ)では、その日付を「明治二十二年十二月二十日」としている。しかし本文の日付は「十二月三十日」とあり、改めた。

永岡喜八については注解(第3巻『書簡編一』八九七ページ)参照。

311 310 この「190号書簡」は「正二二八書簡」(三三六ページ)では日付を「明治二十一年月日未詳」、宛名は「大久保真次郎」としている。しかし、新島襄が「畢生之目的」と題して、「自由教育 自治教会 両者併行 国家万歳」を広津友信や横田安止に言い送るのは、明治二十二年十一月下旬のことである(「192号書簡」二四五ページ・二四六ページの注解、「198号書簡」二五四ページの注解参照)。したがって、この日付を明治二十一年とすることはできないが、その月日を決定するきめてはないので、月日未詳として掲げた。宛名を大久保真次郎とする蓋然性は「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』)の十二月十九、二十日の条に、前橋から東京に引揚げた新島を訪問する記事が見え、また「178号書簡」(十二月二十三日付、不破唯次郎、杉田潮、杉山重義宛)にも、大久保の来訪を伝えて「武州伝道策ヲ談シニ、氏ニ秩父ヲ負担スヘキ旨ヲス、メオキ候」とあるから従来の所伝の重みは大きい。したがって推定として掲げた。

315 この「195号書簡」は「正六三書簡」(二〇五ページ)では、日付を「明治二十三年一月一日」、宛名を「新島八重子」としている。いま従来の伝えに従い、推定としてここに掲げた。

「178号書簡」(不破唯次郎、杉田潮、杉山重義宛)参照。

318 316 横半切に「和氣満堂」と大書し、「庚寅元旦」、「為半田君」、「襄」と三行にしるし、襄の印章が見られる。

319 この「199号書簡」は新島襄の四十五周年に当る昭和十年一月二十日発行『上毛教界月報』(四三五号)に抄録の形で掲載された。

320 ベラー(John Cutting Berry, 1847-1936) フォリー(Marie Elizabeth Cove)と結婚、アメリカン・ボード宣教医として明治五年(一八七二)六月来日、十六年以降同志社で医学校、病院、看病婦学校の設立計画に参画、二十年十一月同志社病院、京都看病婦学校は開院、開校し、院長となる。

リチャード (Linda Ann Judson Richards, 1841—1930) は明治十九年一月来日、京都看病婦学校の実質的校長 (『京都看病婦学校設立趣旨』『同志社百年史資料編一』所収)。

321 「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』四〇七—四〇八ページ)の明治二十三年一月二日の条に「徳富、金森、小崎之三氏来訪ス。種々ノ面白キ談判アリタリ」と見え、三日の条には「此ノ日ノ談判ハ実ニ奇々妙々、弥出弥快ナリ」とある。

\*榎本武揚(一八三六—一九〇八)は黒田清隆内閣において森有礼の死後、明治二十二年三月二十二日から大山巖の後をうけて文部大臣に就任、同年十二月以降、山県有朋内閣において引続いて文相をつとめた。吉田賢輔とは旧幕府時代、昌平坂学問所ついで中浜万次郎の塾以来の関係である。

322 この「書簡」は「正六五書簡」(二〇九—二二二ページ)ではその日付を「明治二十三年一月四日」、宛名を「新島八重子」としている。しかし、柏木義田筆写の稿本による書簡の本文には日付の明記はない。いま従来の伝えに従い、日付を推定として掲げた。

324 横井の御老母様とは小楠の妻、時雄の母であるつせ子(旧姓矢島。竹崎順子、徳富久子の妹)。「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』四〇八ページ)の一月五日の条に「五日之夜、少しも眠り不得しハ、横井之老母死去之事を聞き、西なる都に残しある八十四才之老母之病体如何を思ひたしたるによる」として、次の歌をしるしている。

旅枕母の心を思ひやり

夜半にも夢の結はさりけり

326 この「書簡」は「正四九〇書簡」(九三—九二九ページ)では、書簡の本文中、□□によって示しているところがあるが、収載に当って、柏木義田筆写の稿本で復し、かつ、その箇処を\*をもって示した。なお、この書簡も、新島襄の四十五周年を記念して、昭和十年一月二十日発行の『上毛教界月報』(四三五号)に抄録の形をとり、某伝道者宛として収載、紹介された。したがって、「書簡」とともに、この「書簡」も柏木義田の『上毛教界月報』では、宛名を「広津友信」と明示することなく、某伝道者に宛てる形がとられた。

327 「正四九〇書簡」(九二五—九二六ページ)では、「長岡ハ何人ノ手ニ落ツルヲ□□□□ハ已ニ該地ニ□□□□レ隙ヲ伺ヒ我本城迄モ□□□□ント野心ナキ能ハス」としている。

柏木の稿本によれば、①は「一致会」、②は「涎ヲ垂」、③は「奪ハ」とあり、元に復して示した。

329

「182号書簡」二九四ページの注解\*\*参照。

\*\*「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』四〇八ページ)の一月五日の条には、この和歌は次の通りしるされている。

廿三年之春を迎へて

一月五日

石かねも透れかしとてひとすしに

射る矢にこむるますら雄の意地

\*\*\*この詩のはじめは「送歳休悲病羸身」が知られる。しかし、この詞書きによると、「起句丈ケ」を「左の通改め申候」として、「歳月如流不待人」を掲げているから、新島は「新年之作」を一月七日の段階で改めたことが知られる。

\*\*\*「183号書簡」のこの詩の第三句後半以下は柏木義円筆写の稿本では——で示され、その全容を知ることができない。しかし、一月七日付で広津友信宛にこの長文の書簡をしたためた際、この詩を新島が完結しないまま、書き贈ったとすることはきわめて不自然である。むしろ柏木が筆写の過程で、すでに熟知の詩を——で示したと見るべきであろう。「183号書簡」(一月十五日付、青柳「新米」宛、「186号書簡」(二月十七日付、時岡恵吉宛)参照。

\*\*\*「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』四〇九ページ)によると、「夢中之作」と題して、次の詩ならびに後詞がしるされている。

欲挽倒瀾濟此民

譯比半世  
半世辛苦染紅塵

自今願逐赤松子

流水乱山寄我身

330

「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』四〇九ページ)では「夢中之作」と題して詩を掲げ、後詞が付されている。

此レハマダ夢ダ夢ダ、呵々将来恐クハ夢ニアラサルベキ日モ来ルベシ

\*\*白木は麻生正蔵。「同志社英学校生徒名——明治十七年四月」『同志社百年史資料編1』所収)によると、「出身

福岡県(筑前国)

白木正蔵」とある。

明治二十年六月英学校普通科卒業。同級生には松浦政泰、丹羽清次郎、志

垣要三、山路一三らがいた。二十二年三月北越学館英語教員。

333

池袋清風の添削した和歌は次の通りである。

いわけねも透れと放つますらをの

心の矢さき神のまに／＼

解題〔95〕（第5巻『日記・紀行編』五六八ページ）参照。

なお、池袋清風（一八四七—一九〇〇）は日向都城の出身。桂園派歌人。明治十三年（一八八〇）九月同志社英学校入学、十四年五月第二公会でM・L・ゴードンより受洗、十五年神学校邦語神学（別科神学）科に入り、十八年六月卒業。同期の卒業生には馬場種太郎、速水琢麿ら、十九年六月まで同志社女学校教員、二十一年六月より同志社書籍館図書監、案山子舎で和歌指南（河野仁昭『近代化過程における伝統文学——池袋清風の英学と和歌——』『人文科学』）。

334 原忠美（一八六五—一九〇七）は岡山新屋敷の出身。明治十三年（一八八〇）十一月同志社英学校に岡山中学より編入。十五年二月五日、新島襄より洗礼をうけ、新原俊秀、岡本（安部）磯雄、滝（岸本）能武太、山中百、沢山雄之助（保羅の弟）らと第二公会に入会（『第二公会録事』『第2巻宗教編』所収、十七年春の同志社リバイバルでは関西、中国、四国に伝道、十八年六月沢山と共に卒業、神学科に進み二十一年六月岸本能武太と卒業した。八月から越後新発田の伝道にたずさわリ、爾後新発田を中心に北越伝道に従事した。『天上之友』によると「君斯地に在る満七年、最も多く心血を濺げり。無知の暴民或は講義所を襲ひ、腕白の群童或は瓦礫を君の身に抛ち、君が街道を通行するや、甲乙丙丁相和して「胴張」と呼ぶ。君此間に立ち奮戦勇闘多くの悔改者を獲、同地駐在の軍隊間に小リバイバルを起せし程なり」と見える。夫人は登茂子（旧姓山岡）、二十八年八月新発田を辞して明石教会を牧し、その年十月十日按手礼をうける。北越で同労する人びとについては注解（第3巻『書簡編一』九〇五ページ）参照。

336 小谷野敬三については注解（第3巻『書簡編一』八九六—八九七ページ）参照。

なお小谷野の帰国については明治二十三年一月十日発行の『基督教新聞』（三三七号）に「兼て米国に遊学中なりし小谷野氏へ去月廿六日桑港を解纜せしチャイナ号にて帰朝の途に就かれたれば、来る十四日頃には横浜に着せらるべし。因に云ふ、氏が米国を出立するの前、盛なる送別会ありて其模様は米国の或新聞に記載しあるを以て次号に訳出」と報じ、一月十七日発行の三三八号でこれを報じている。

小谷野敬三氏は武州熊谷の人にして今を離る事十五年前米国に渡航し、爾来勉学に志し多年一日の如く刻苦經



嘗て怠る事なかりき、氏は嘗てアムホル「ス」ト大学を卒業し、転じてアンドヴォル大学に学び、之を卒へてより米國に於て暫く伝道に従事したりしが、今度帰朝し、暫く其首府なる東京に於て青年學生の爲めに尽力し、其後は組合教会の伝道師となるの志願なりと云ふ、此送別会の会場はボストン府のショーマット教会にて、其牧師は名をエリオット・グリフ「ス」と云ひ、嘗て日本に在りて帝国大学の教授たりし人なるが故によく日本の事情に通曉し、其伝道の必要を認むるが故に、今度小谷野氏の伝道費は彼ショーマット教会より支出する事となせし由、其送別会の夜はショーマット会堂に日米兩國の国旗を翻し、或は日本の古物を以て飾り、或は花を以て装ひ、灯火影明くして昼を欺く計りなりし、其内日本の封建時代に用ひし鎧を二組装置せしが最も珍らしかりしと云ふ、其他日本語に翻訳せる聖書或は日本の地図等種々の物品を並べて飾となせり、当夜來会せる人々はアンドヴォル、アムホル「ス」ト諸大学の教師及び米國各地の伝道師等無慮数百名にて其他の來会者は合せて堂内を充滿せり「下略」。

「漫遊記事」(第5巻『日記・紀行編』四一三ページ)の一月七日、八日の条には不破唯次郎、ユウ夫妻が見舞に来て、一泊し、前橋に帰っていったことが記されている。さらに、一月九日付青柳新米の新島襄宛書簡は、その不破から新島の言つてを聞いて、お礼を述べるものである。この「88号書簡」はしたがって、新島がさらに青柳新米に所懐の詩歌を書き送ったものと考えられる。従来「続三九書簡」(五三―五四ページ)では、その宛名を「青柳某」としているが、これを改め、推定として掲げた。

なお青柳新米は「漫遊記」(第5巻『日記・紀行編』三六三ページ)の明治二十一年八月十八日の条によると、伊香保千明別荘に静養する新島を不破唯次郎によって回心した山中百と共に訪ねている。新島は青柳新米の來訪をしるし、ここに「斎藤ミブ夫<sup>ミブ</sup>ノ弟ナリ」と補記している。新島の補筆が、はげしい自由民権運動のち、回心して築地一致神学校に学び、伝道者として活動する斎藤壬生雄を知っていて、その「弟ナリ」としたか、弟新米の話から、兄の事を聞きおよんで、これを補筆したか明らかでない。

ちなみに、明治二十三年一月九日付の青柳新米書簡は次の通りである。なお青柳の住居は「群馬県前橋田中町五十五番地」と記されている。

勿卒相認メ乱文幸ニ御判読ヲ給リ度候

拜啓、其後は絶テ御存問ヲ欠き申分無之候、寒ニ入りて御眠食如何候、日夜御案し申居候処、昨日不敷牧師御地より帰橋せられ御動静を詳知致し、閣下益御清適ニ渡らせ候趣き承り欣舞踊躍國ノ為メ大賀致し候、当地御滞留之節御面悟〔暗〕之榮を給ハリ種々御訓誡を被り誠ニ有難奉感謝候、御蔭様にて小生も大ニ覚悟スル処〔暗〕之あり、一際將來之希望ヲ確ふし候得共、一身の方向ニ就てハ未だ少し決心致し兼候場合も之あり、誠ニ誓愧〔暗〕之至ニ候、今年之如きは最モ多事多忙之秋にして我儕神々僕之光ヲ現ハす可き大切な時機と存し候得共、教会ノ不振伝道之委靡甚敷誠ニ残念之至ニ候、神は小生之如き不肖ナルものを何なる所ニか用ひ給ふ事とは信認致し候得共、甚だ薄信薄弱ニして尚未ダ決心致し兼ね候間、何卒小生之為め御訓へ且ツ時々御垂教ヲ賜へらば幸福之ニ過るもの之なくと存し候

不被兄御出向之節は御面〔暗〕なること御願申分なく候、小生は元来少シモ詩歌之嗜好なく斯道ニ於てハ殆んど盲人故、敢て御高吟ヲ弄スル積りには之なかりしも、過般御面談之節当今我国有志之心実之腐敗せるを御談し申候時、閣下奮然御慷慨之余御近作とて一詩を朗吟シテ聴かせ給ハれり、此時小生は非常ナル感ヲ興し閣下ヲ御仰望致し候、平生之感覚ニ一層之厚ヲ加ヘタルヲ覚ヘ申候、依て爾來種々ニ相考ヘ候得共、全ク忘却其ノ影ヲ留メス遺憾極マリナク候折柄、不被氏出京ニ相成り候故、若シモ御面談ノ節ハ御尋ネ置キ下サレ度と請求セシ処ニ候、御示シニ相成り候御高吟之詩御鴻志之幾分を判し感激致し候  
青年会ニ賜ハリシ兩句ノ御訓言曰夜服庸致し度と存候、申上度事多けれトモ悉し難く余は後便ニ譲り申候、先は御礼旁区々ノ意申上度如此ニ候、時下寒威不常幸ニ國ノ為メ御自愛アラン事ヲ、頓首百拜

〔廿三年〕一月九日

青柳新米

新島先生

閣下

青柳新米が述べる「青年会ニ賜ハリシ兩句ノ御訓言」とは、「明治廿二年十二月十三日 新島襄敬呈 上毛青年会基督信徒諸君」とするす次のことばと思われる。新島が病氣のため上毛の運動を断念し、前橋を出立する日付となつてゐるこの「兩句」は、『上毛之青年』（明治二十三年一月十八日発行、一三〇）に掲載され、「統一書簡」（八八ページ）とされてきた。参考のため、ここに掲げる。

社会矯風之元氣 基於信基督



人心改良之精神 生於愛基督

339

この「80号書簡」も本文の一部が抄録の形で、しかも「某伝道者」宛の書簡として、昭和十年一月二十日発行『上毛教界月報』（四三五号）に収載されている。柏木義田筆写の稿本では、その日付を一月十六日としているが、「正四九一書簡」（九三〇―九三四ページ）の取扱いに従って一月十五日とした。追而書の冒頭に見られる「昨日ハ京都ニ而小生之誕生日」とは一月十四日に当ることによる。「80号書簡」（一月十日付、新島八重宛）参照。

340

同志社普通学校普通科五年生（二十八名）で横田安止、浜田正稲、波多野培根、古賀鶴次郎の四人。

同志社神学校の本科神学三年生（二人）は青木要吉、寺沢精一である。

342

「漫遊記事」（第5巻『日記・紀行編』四〇七ページ）の明治二十三年一月二日の条に「高田専門校木原□氏、河波氏進退之事ニ関し相談ニ来ル」と見える、「81号書簡」参照。

なお、甘楽基督教会の教会日誌（第三号）によると、明治二十三年四月十三日安息日の集会がおこなわれた後、河波の辞任申出がはかられたことが知られ、四月二十七日の安息日集会の記事の後に「当教会伝道師河波氏ニハ去ル十五日朝新潟表へ向ケ出発ス」とだけしるされている（『甘楽教会百年史』）。

343

この「81号書簡」は追而書にも見られるように「81号書簡」（一月十五日付、河波荒次郎宛）と対応するものである。

346

明治二十三年一月七日付、横田安止の新島襄宛書簡のなかに次の言及が見られる。その部分をのみ引用すると次の通りである。

ロースノパンフレット（合併問題に就て）ハ柏木ト其ノ大要ダケ訳シ、其ノ終リニ生等合併上の意見を加へ十枚許リノ一文ヲ草シ終リ居リ候、生ハ印刷ニ附シ合併問題再勃ノ時分配シ幾分カ我党の気焰を吐カシカトノ存念にて御座候ヒシ、今日トナリテハ是等ノ必要もナキカ如シ、先生如何ニ思召被遊御座候也、ロース氏の教会政治（小生カ拝借致シ居ル本ト同書）二冊ト同氏のホケット・マニュアル（Pocket Manual）一冊、デッキストルノA Hand-Book Congregationalism 一冊及ロイ氏のA Manual of the Principle 六冊此内に米

347

国ヨリ送附致居候、是等の書籍ハ如何に御為シ被遊ル、ヤ承リ度候  
「漫遊記事」（第5巻『日記・紀行編』四〇九ページ）は一月十五日をもって日並の記事をしるすことをおわって

るが、その一月十五日とする書出しの前に、次の詩がある。この「81号書簡」にしるされている部分は次の通りである。

●長江千里碧漫々 沃野饒田東北冠

地経一葉所君贈 展向南窗仔細看

右題広津君所贈之越後全図以謝其好意 一月八日

●令色巧言求玉紳 不慮天下只慮身

請看当世学才子 鍛練鉄腸有幾人

一月十一日

嘆明治隆世之書生

なお広津友信が新潟全県の地図を贈ってきたことについては「803号書簡」（一月七日付、広津友信宛）参照。

\*\*\*この「貴君ニハ神学生中奮発家ナキヲ嘆セラル……」以降、末尾の「生徒中関東ノ加勢ニ来テクレスウナル人々ヲ多分ニ御コシラヒ置被下度候」の追而書部分は「813号書簡」の原本には散逸してない。「正五六五書簡」（一月十六日付、横田安止宛、一〇七四—一〇七六ページ）によって補った。

柏木義円は明治二十二年六月同志社普通学校を卒業し、当時同志社予備校主任。

「遊興記事」（第5巻『日記・紀行編』二三四ページ）参照。

356 353 348

この「818号書簡」は従来「正四九三書簡」（明治二十二年月日未詳、広津友信、花畑健起宛）の「又追加」（九三八ページ）とされてきた。

しかし、文中の「同志社教会之新規則」については「888号書簡」（明治二十二年十二月三十日付、横田安止宛）で、また、この書簡の末尾に掲げられている「此レハ近作中上出来」以下「右題広津君所贈之越後全図」は「803号書簡」（明治二十三年一月七日付、広津友信宛）ならびに「813号書簡」（同一月十六日付、横田安止宛）から、その日付は明治二十三年一月のことに相当する。よって「正四九三書簡」の前半部分については、さきにふれたように「81号書簡」に、そして、いまこの部分は、その日付、ならびに宛名を明治二十三年一月に改め、推定としてここに掲げた。

359 358

この「819号書簡」は「正四四八書簡」（八四八ページ）で年次未詳としている。

十字六四文（つじろくしもん、一八二六一八九六）は本姓辻、名は六右衛門、墨溪を号す。江州日野の人。維新後改姓名。私塾を開いて子弟の教育に当り、幕末、維新期地方行政にたずさわり、また日野啓迪学校創立に当り、数学を担当した。著書に「蒲生名蹟考」（十二巻）があり、また狂歌、川柳をよくした（『近江日野町志』巻下）。

362 361

この「823号書簡」は「正五四一書簡」（一〇二四—一〇二五ページ）で年次未詳としている。

この「825号書簡」は「正一八八書簡」（四一七ページ）で年次未詳としている。

364

この「826号書簡」は「正一八七書簡」（四一六ページ）で年次未詳としている。

364

この「828号書簡」は「正三七五書簡」（七六九ページ）ではその日付を「明治十九年六月三日」としている。しかし、稿本は年紀を欠き、これを定めることができない、よって年次未詳に収めた。

365

この「830号書簡」は「正五九〇書簡」（一一二二ページ）で年次未詳としている。

365

この「831号書簡」は「正二三八書簡」（五三六ページ）で年次未詳としている。

366

この「831号書簡」は「正二三八書簡」（五三六ページ）で年次未詳としている。

金太郎、大和田猪之平とともに新二年生である。「生徒族籍氏名一覧」（『前掲書所収』）によると、明治十八年九月現在保高正記、木下現在、ともに普通科五年生であり、その年六月、普通科を卒業する。同級の人びとには柏木義円、人見牧太、木村鎮太、磯貝由太郎、中瀬古六郎らがいた。なおこの三人とも学生の演説会記録である「興風会日誌」（『前掲書所収』）にその名がしばしば見られる。保高は福岡県仲津郡道場村出身、木下は岡山県阿賀郡高地村出身、大和田（のち武田）は新潟県岩舟郡村上二ヶ町出身（『生徒族籍氏名一覧』）である。

366

この「831号書簡」は「正二三八書簡」（五三六ページ）で年次未詳としている。

367

竹内雄四郎は第1巻『教育編』史料 三〇八ページに名前が見えるが、同一人かどうか明らかでない。

368

この「833号書簡」は「正一八五書簡」（四一四—四一五ページ）で年次未詳としている。

369

この「834号書簡」は「正五四〇書簡」（一〇二三—一〇二四ページ）で年次未詳としている。

なお三輪振次郎については注解（第3巻『書簡編』七九二—七九三ページ）参照。

369

この「836号書簡」は「正五五〇書簡」（一〇三五—一〇三八ページ）で年次未詳としている。

なお『新島襄書簡集』（岩波）は宛名を「山口透」としている。

373 372 この「838号書簡」は「正五二二書簡」（九七〇ページ）で年次未詳としている。  
この「839号書簡」は「正五二三書簡」（九七一ページ）で年次未詳としている。

374 \*この「840号書簡」は「正四四六書簡」（八四六ページ）では、その日付を「明治二十二年十月十日」としている。  
しかし「漫遊記事」、「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』三九五、四七三ページ）には該当する記述は欠けており、この書簡の年次を明治二十二年とするには十分でない。したがって従来の取扱いを改め、年次未詳としてここに掲げた。

375 この「841号書簡」は「正二二三書簡」（五〇七—五〇九ページ）で年次未詳としている。

なお森中章光亨しでは「今夕岡山ノ丸毛真底君ヨリ米書アリ云々」の追而書は「赤インキにて認む」とある。

376 この「842号書簡」は「正四五一書簡」（八四九—八五〇ページ）で年次未詳としている。

377 この「843号書簡」は「正一八六書簡」（四一五—四一六ページ）で年次未詳としている。

378 この「844号書簡」は「正五〇二書簡」（九五四—九五五ページ）で年次未詳としている。

379 この「845号書簡」は「正一八四書簡」（四一三—四一四ページ）で年次未詳としている。

なお「郷氏令息」は郷純造の次男、郷誠之助であり、『男爵郷誠之助君伝』によると、明治十四年、十七歳の条に「京都に新島襄を訪ね、同志社英語学校に学ぶ、友人香坂留彦と薬売りの行商を為し、歳末に至り東京に引揚ぐ」と見えるが、年次を決定するきめ手を欠く、よって従来の取扱いに従った。

380 \*この「846号書簡」は、「正三五七書簡」（七四五—七四六ページ）ではその日付を「明治二十二年十一月」としている。しかし、末尾に見える「昨夜ハ連印相済申候」に相応する記事は「漫遊記事」、「同志社大学設立募金日誌」（第5巻『日記・紀行編』）には見当たらない。また他の年次に相応する事項も見出しえないので年次未詳とした。

381 この「847号書簡」は「正四五〇書簡」（八四九—八五〇ページ）で年次未詳としている。

382 \*この「848号書簡」は「統二二書簡」（四一—四二ページ）では、その日付を「明治二十年十二月二十五日」としている。しかし、本文には日付ならびに宛名の明記を欠いている。したがって、年次を未詳とし、従来の伝えに従って、宛名を推定としてここに掲げた。

382 この「850号書簡」は「正九五書簡」（二六九ページ）で年月日未詳としている。安藤嘉左衛門は神戸海岸通の旅宿。

383 この「851号書簡」は「続二一書簡」（四一ページ）ではその日付を「明治二十年十二月九日」とし、宛名を「新島公義」としている。しかし本文には日付ならびに宛名の明記はない。よって日付は年月日未詳とし、従来の伝えに従って、宛名を推定として、ここに掲げた。

\*\*\*この「852号書簡」は「続三八書簡」（五二ページ）で年月日未詳としている。

384 この「853号書簡」は「続九六書簡」（二六八ページ）で日付を「明治二十一年月日未詳」、宛名を「某宛（書簡稿）」としている。

この書簡は草稿であるが、新島襄の筆致ならびに用字のかしこまった格調が認められる。とくに同志社を呼ぶさいに、「敝校」とする姿勢の見られるのは、その用例を北垣国道、井上馨など特定の人に限られていることからすると、その宛先は有力貴顕が想定される。かつ「金子（常五郎）氏ヲ以小生之心胆を吐露シ、貴殿之御熟考を奉勞度」とすることからすると、東北とくに福島県の公算は高い。福島を中心とする大学設立運動は綱島佳吉の活動によって、とくに明治二十二年二月以降活発であり、その最も典型的な新島の動きは、安部井磐根宛「591号書簡」に見られ、したがって「853号書簡」もその可能性は大きい。しかし、その年次ならびにその人を確定することはできない。

\*\*\*金子常五郎（兼子重光、一八五八—一九四〇）は岩代（福島）河沼郡勝常村の生まれ、明治十三年（一八八〇）栃木県師範学校を出て小学校教員となる。十五年会津三方道路問題で、同志とともに弾正原事件に連坐、投獄され、兇徒嘯衆罪で大審院に送られたが無罪となる。三島通庸県令を相手取り不正工事廃止を宮城控訴裁判所に提訴しようと準備中、官吏侮辱罪にとわれ、十八年九月のがれて会津出身の山本寛馬をたよって同志社に身を寄せる。「同志社英学校概則（明治十八年）」（『同志社百年史資料編一』所収）によると、九月始業時の名簿に「追加」の形で普通科生、一年生と見え、二十二年一月の「生徒族籍氏名一覧」（前掲書）には、別科神学二年生とある。その間、十九年三月十四日新島襄から京都第二公会で洗礼をうけた。二十四年六月別科神学を卒業、二十六年六月按手礼をうけ、二十八年一月、会津若松教会牧師となり、爾後三十五年会津伝道に一身を献げた。

385

この「81号書簡」は「統九五書簡」（二六六一六七ページ）ではその年次を「明治二十一年」とし、某宛としてゐる。しかし、以下述べるように、その年次を明治二十一年とする根拠はなく、年次を比定する確実な手がかりはないので、「年月日未詳」、「某」宛としてここに掲げた。

なお、この書簡にあらわれる浜岡光哲は北垣国道京都府知事の府政に参画する府會議員であり、山本覚馬の指導をうけた人である。注解（第3巻『書簡編1』八四四ページ）参照。

『浜岡光哲翁七十七年史』によると、浜岡が大藏卿松方正義を訪問、紙幣整理について進言し、あわせて松方の紙幣整理に賛成する山本覚馬のことに言及したところ、松方が「思はず点頭するもの数次」と見える。また、浜岡が上京して面談した「松田公」は、明治十二年十二月以降東京府知事である松田道之と考えられ、しかも十五年七月、松田道之は現職のまま死亡する。したがって、上京して面談する「松田公」を松田道之とすると、この書簡の日付は明治十五年七月以前にならねばならない。かかる推考を助けるのは『松方正義関係文書』第二巻の紙幣整理に関する「民間ニ於ケル一二ノ賛成者」の記述である。

此時ニ当リ民間ニ於テハ熊本ノ人山田武甫、会津ノ人山本覚馬等一兩人、僅ニ侯ノ方針ニ賛成スル者アルノミ、覚馬ハ蘭字ニ通シ識見モ亦高シ、當時京都ニ居ル盲目ニシテ老齡、歩行自由ナラス、田中源太郎、浜岡光哲等常ニ之ニ随伴ス、侯大藏卿ノ印綬ヲ帶フルノ後、京都ニ赴クヤ、覚馬侯ヲ其旅館ニ訪ヒ、紙幣整理ノ断行ニ関シテ自ラ憂慮スル所ヲ陳ヘ且侯ノ方針ヲ問フ、侯告クルニ要旨ヲ以テス、覚馬曰ク貴説ハ之ヲ諒セリ、斯ノ如クンハ洵ニ国家ノ為メニ感謝ニ堪ヘス、然レトモ世人ノ紛々擾々タル、或ハ中途ニシテ凶刃ノ為メニ閣下ノ首足其処ヲ異ニスルカ如キ事ナキヤヲ恐ルト、侯笑テ曰ク固ヨリ覚悟スル所ナリ、予ノ首ニシテ飛ヘハ則チ已ム、然ラスンハ則チ成功ヲ必セント

この松方正義と山本覚馬とのやりとりは、この「81号書簡」における「閣下」を松方正義とすることの可能性を考えることとなる。しかし、なお「山科老人」とその人のかかわりは全く不明であり、なお検討を必要とする。したがって、この書簡の日付、宛名を推定して掲げることをおこなわなかった。

386

広瀬又治については注解（第3巻『書簡編1』七七〇—七七二ページ）参照。

\*明治十三年の日本基督伝道会社の年会は五月二十八、二十九日の両日にわたって大阪の浪華教会でおこなわれ



た。八日市教会はすでに前年六月五日、八名の受洗者で教会設立式をおこない須田明忠が牧師に就任しており、年会への代議人出席をもとめられた。茂義樹『七一雑報』における日本基督伝道会社（『七一雑報』の研究）所収）参照。

\*\*\*須田明忠については注解（第3巻『書簡編1』七七六―七七七ページ）参照。

387 この「追加3号書簡」は「正五八六書簡」（一一三―一一五ページ）では、その日付を「明治十九年十一月十七日」としている。しかし、その年次は「明治十四年」が正しい。したがって、第3巻『書簡編1』に収載すべき書簡である。いま、その編年順のところに収載することができなかったで、「追加」としてここに収めた。

なお、明治十四年とするのは、本文中の「其節大学設立之事ニ付」（詳細は後注解\*\*\*参照）ならびに「亀三郎様ニハ〔中略〕」昨夜よりハ御自身ニ而バームレー氏之室ニ寐度旨御発言アリ〔中略〕バームレー氏大ニ喜居」（バームレーについて、三八八ページ注解参照）が、それぞれ明治十四年のことに当ることによる。

\*\*\*山崎為徳は肺患のため京都病院に入院中であつたが、八月二十二日から新島は自宅に引き取って療養させていた。なお、山崎は十一月九日死去、十日京都第二公会で新島が告別説教をおこない（第2巻『宗教編』四九四―四九五ページ）、黒谷の新島家墓地（のち若王子墓地）に埋葬した。

\*\*\*「同志社大学記事」（第1巻『教育編』史料40）の冒頭は次のようにはじまる。

大学設立ノ事ハ同志社創立ノ以前ヨリ襄ノ宿志ニテアリシガ、窃ニ時運ノ到来スルヲ待居タリシニ、明治十四年十月中旬ノ事ナリキ、大和国大滝村ノ農士倉庄三郎氏其子ヲ伴ヒ立憲政党新聞ノ古沢滋氏ト襄ノ宅ニ来リ二子教育ノ事ヲ委託セラル、偶々談大学ノ事ニ及ビ古沢氏尤モ大学ノ必要ヲ談セラル、襄亦私立大学ノ要旨ヲ語り且同志社ニ於テ其計画アル事ヲ談セシカバ土倉氏之ヲ賛成シ応分尽力セン事ヲ約セラル（傍点・杉井）

同志社大学設立の発端は土倉庄三郎が辰二郎、亀三郎の二児を伴い、古沢滋がこれに随伴して新島宅を訪問することにはじるとする光景をこの書簡は伝えている。

388 バームレー (Harriet Frances Parmelee, 1863—1933) はアメリカのオハイオ州生まれ、レーク・イリー (Lake Erie) セミナリーを卒業、北米内国婦人伝道会から派遣されて明治十年（一八七七）十月三日来日した。同年十月より翌

十一年六月まで同志社女学校につとめ、同年九月から神戸に移って十二年九月まで神戸女学院で教えた。ついで

同年九月から十五年七月まで再び同志社女学校で英語教育を担当し、帰国した。なお明治十三年一月十二日付の「H・F・バーメリー約条書(英文)」(『同志社百年史 資料編Ⅱ』所収)では、その雇傭期間は五年で、<sup>44</sup>for the term of five years that is from Meiji 13th year 2nd month 1st day or February 1st 1880 till Meiji 18th year 1st month 31st or January 31st 1885<sup>45</sup>とあり、途中で帰国したことが知られる。彼女は明治二十四年四月二十一日再来日し、津、前橋、松山、明石で教育、伝道に従い、京都でなくなった。

389

杉田定一(一八五一—一九二九)は越前坂井郡波寄村に生まれる。明治十一年(一八七八)福井県地租改正再調整運動を指導し、国会開設請願運動を進め、自由党結党に参画した自由民権運動家。

「出遊記」(第5巻『日記・紀行編』二三九ページ)の明治十六年八月二十三日の条に「此日午后六時、下泉水町岡部氏方ニテ杉田定一氏ヲ尋ヌ。氏ハ此日大坂ヨリ戻リ来ル、夜九時過迄談シ居リシカ、家ニ病人アルヲ知リタレハ直ニ予ハ去レリ、但病人ハ杉田氏ノ妻君ナルヨシ。最杉田氏面会ノトキハ、大学ノ必要ナルト耶蘇教ノ大切ナル事ヲ説キタリ、氏ハ大ニ賛成セリ」と見える。

390

縦円広瀬又治の弟。明治十六年(一八八三)十月二十三日兄の死去後、家を継ぎ襲名。注解(第3巻『書簡編Ⅰ』七〇—七七一ページ)参照。

\*\*「出遊記」(第5巻『日記・紀行編』)の明治十六年十二月八、九、十日の記事に新島の八日市、市辺における伝道を見ることができ。

\*\*\*山田良斎については注解(第3巻『書簡編Ⅰ』八五〇—八五一ページ)参照。この「追加6号書簡」は『新島研究』(一九七五年五月発行、四四号)に紹介された。

391

内藤兼備については「39号書簡」(明治二十年十月七日付、福土成豊宛、第3巻『書簡編Ⅰ』)の追而書に「御家族へ宜しく御致声」とあり、新島襄、八重が七月初旬から九月十四日まで札幌で避暑静養の生活をしたさいの家族ぐるみの交際がうかがえる。とくに「出遊記」(第5巻『日記・紀行編』二九八ページ)の札幌到着早々の七月十四日の条の末尾に、新島が佐藤昌介の案内で農学校を見学している間に、八重は内藤家を訪ねているが、そこには次のようにしてある。

八重ハ同国人おユキ女ノ此地ニアルヲ函館ノ在、雑賀浅女ヨリ聞キ、直ニ此地ニ来シニ、近傍ニ住スルニヨリ



之ヲ訪フ

○ユキ女ハ土木課長内藤兼修君ト妻トナレリ

392

この「追加8号書簡」は明治二十五年（一八九二）一月二十三日付『国民新聞』に新島襄永眠二周年を記念して「故新島先生逸事」と題する記事が掲げられ、「断篇となりたる先生の消息文」として紹介された。この日付で東京麻布（仲之町栗津方）に止宿し、かつ金森通倫の来信に接するのは明治二十一年しかない、「出遊記」（第5巻『日記・紀行編』三〇二—三〇三ページ）参照。なお文中の〇〇は新聞掲載に当ってとられた措置と思われる。

394

この「追加10号書簡」は「正四八八書簡」（九一九—九二〇ページ）では、その年次を「明治二十二年」としている。その編年順のところに収載することができなかったため、「追加」、十一月を推定としてここに掲げた。

395

倉賀野の松本勘十郎については注解（第3巻『書簡編一』八三八—八三九ページ）参照。

\*\*\*この「追加11号書簡」は「正一二九書簡」（三三七—三三八ページ）では、その日付を「明治二十一年月日未詳」としている。本来書簡の本文を欠き、追而書のみであるが、そこには大久保真次郎からの来簡（明治二十二年十一月二十六日付）を手にして、この「追白」が書かれていることは明瞭である。よって、その年次を二十二年に改め、月日を未詳とした。編集上、編年順のところに収めることができなかったため、「追加」としてここに掲げた。

なお、参考のため新島襄宛の大久保真次郎書簡を掲げる。

十一月二十六日 新島襄

- ①武島秩父郡大宮町 ②群馬県前橋町曲輪町、不破唯次郎方届 煩親展  
④墨

〔欄外〕  
「少々秘密」ノ願意アレハ人ナキ所ニテ御覧下サレ度奉願候」

東京御駐在ノ第一書奉呈セント存シ居タリシモ、大説教会前晚餐礼執行前ニ際シ非常ノ繁忙ニテ遂ニ本意ニ背キ、其内已ニ上野江御発途ノ由承リ、御駐在所不分明ナレハ又々本日迄延引昨日ニ至リ、漸ク不破氏ヨリ不当地江御出ニナルトノ返書ヲ得タレハ其レヲ当テニシテ本書奉呈仕候

弊地大説教会ノ結果ハ可ナリト不破氏杯ニ申シ置キシガ其レハ小生知ラサル前ノ事ニテ、実ハ中等以下ノ社会

ニハ大分宜敷様子ナリ、故ニ上流門閥財産威權家ハ相携ヘテ反動ヲ願フシタリト止ムヲ得サル事ト存候、唯惜ムラクハ之ニ乗シテ大収獲<sup>〔獲〕</sup>ヲナシタキ事ナレ共、如何ンセン秩父神社ノ大祭ニテ人皆狂シ、所詮本月中旬ヨリ来月中旬迄ハ伝道ハ出来申サス候

又伝道費ノ事ハ月々五円ツ、其内六部<sup>〔六部〕</sup>ハゴルドン氏ニ頼ミ、四分ハ上州ヨリノ名前ニテ其实先生ニ御出金ヲ願ワントノ話合アリタリ、又此後ハ月六円ノ株ハ上昂ヨリ直接ニ私ニ送ルトノ事ナリ、今度ハ大ナル不都合モアルマイカト存居候

借取分ケ御伺ヒ申シ上ケ度キ事アリ、秘密ニ神裁ヲ得キタ事アリ、願曰クハ一応愚意垂聴ノ榮ヲ賜ヘヨトハ別義ニアラス、此後ノ運動ノ方針はレナリ、東京ニテ拝謁後熟ラ勘考仕候ニ該合併問題ハ如何ニモ来ル五月ニ再発スル事ハアルマシト存候。勿論アノ儘ニテ放棄スル訳ニハ至ルマシケレトモ、人皆之ヲ發言スルサヘ今日ニテハ余程氣ノ毒ノ様子ナレハ中々大勢力ヲ以テ再発スヘシトハ思ワレ申サス、实ニ小崎ガ小生ニ向ツテ言ヒシ如ク一時中止ノ報告迄ニ止マリ、其後ハ全力ヲ込メテ伝道会社ヲ奮ワスル為メニ組織變更等ニ會議ヲ費スニハアラサルヤト奉存候。小生ハ実ニ此外ニハ出テマシト存候、蓋<sup>〔蓋〕</sup>（失礼ナカラ其実ヲ言ワネハ意味尽サ、ルユヘニ敢テ斷言ス罪ヲ恕シ玉ヘ）小崎ナリ宮川ナリ海老名ナリ金森以下ハ勿論決シテ事業ニ經驗アルモノニアラス。故ニ斯タル事ニ遭遇スルトキハ早クモヘコタル、モノナリ、昨年ノ大阪、本年ノ神戸會議ニ於テ意外ニモ案外ニモ若壮者ヨリ攻撃セラレテ彼等ノ心胆ハ全ク已ニ擊破セラレタリ、尤モ其當時ハ各一時勇ヲ鼓舞シテ之ヲ攻撃スルハシタモノ、何分若壮者ハ毫モ怯ルム事ナク恐ル、事ナク、愈叩ケハ愈激昂シ何レノ処迄ニテ止マルヘクモアラサレハ彼等ハ実ニ已ニ往生シタルナリ、夫レ迎モ同輩同席ノモノナラハ尚鼓舞シテ戦フ事モアラシキ汚名ノ寒曝ラシスルニ異ナラサレハ彼等ノ愚ナルモ遂ニ之ヲ悟ラサルヲ得サルナリ、其レニテモ勦癘ハ止ム能ワス、故ニ此上ハ其巨魁タル其袋冠リタル先生ニ向ツテ一攻撃ヲ試ミ其袋ヲ抜カセ、正面ノ戦場ニ呼ビ出シ、之ヲ当ノ敵トシテ戦フトキハ否正シク利多シテ遂ニ鉦ヲ先生ニ向ケタル処、一撃ノ下ニ破ラレ一敗地ニ塗レテ立ツ事能ワス、況ンヤ側面ヨリハ壮士益攻撃シテ先生ヲ以テ吾人ノ袋冠リトスル以上ハ、吾人ヲ以テ汝等ハ実ニ人形ト思フヤ、吾人ニハ腦力ナク智恵ナキ死物トシテ智恵ハ悉ク皆汝等ノ専有物ト思惟スルヤ、

若シ果シテ然ラハ汝等ノ不明ハ実ニ憐ムニ堪ヘタリト遠慮モナク攻撃シタルカ故ニ彼等遂ニ戦フ能ワス、止ムヲ得ス今日ノ有様トナリタルナリ、殊ニ伊勢ハ感情尤モ鋭ク又敵愾尤モ深キガ故ニ、已ニ既ニ大阪ノ會議ニテ其斯クアラン事ヲ予知シタルナリ、故ニ尤モ小胆ナルモノ尤モ卑怯ナルモノハ実ニ日本ニ身ヲ隠ス事能ワス遠ク海外ニ迄遁ケ出タセリ、生ハ実ニ疾ニ彼レニ向ツテ兄悔悟セハ米國迄モ遁クルニハ及ハヌニ、広ヒ浮キ世ヲ心柄狭ク暮ラスハ兄ノ為ニ悲ムナリト諫メタル程ナリキ、彼等伊勢程ニハ敵愾モ深カラス感情モ鋭ナラス又彼程ニ卑怯ニモアルマシケレトモ、決シテ来ル五月大袈裟ニ合併ヲ主張スル丈ケノ勇氣ナキ事、胆力ナキ事、又經驗ノ力ナキ事ハ真実ニ信スルナリ、彼等ノ價格ハ実ニ此辺ニアラント奉存候、然リト雖モ万一ニモ彼等実ニ真ノ予想ノ外ニ胆力アリ氣力アリ鼓ヲ鳴ラシテ攻メ来ラハ彼等モ幾分力談スルニ足ルナリ。真ハ組合教会ノ為ニ一ヒハ斯タル人物アル事モ喜ブナリ、若シ其レ程ノ人物ナリセハ初メ決シテ植村當リヨリ眩惑サルマシ、植村ヨリ眩惑サル、人物ニ過キヌ故ニ、此度モ最早レニコソミミトシテ中止スルナリ、一時中止トカ何トカ名コソ暫時中止スル如クニ見セカクルモ、決シテ再発セシムル丈ケノ勇氣アルモノハアラス、其実ハ実ニ千万歳ノ中止ニ相違ナシ、決シテ心配ニハ及ハヌト奉存候

然ラハ吾人此後ハ暫ク枕ヲ高フシテ眠ルヘキカ、否々敵ハ先ニ天王山ヲ取ラントスルヲ悟ラサルヤ、吾人ノ敵

得

ハ今ハ組合教会中ノ貴族主義者否無主義者ニアラスシテ組合教会外ノ貴族主義者ニアル事ヲ知ラサルヘカラス、夫レ昔ヨリ戦ヲ司トルモノ未タ曾テ其亡滅ノ門ヲ防キ得タルモノアル事ナシ、蓋右ヲ防クトキハ災ニ左ヨリ起リ、前ヲ防ケハ後ヨリ起リ、常ニ災ハ備ヘサル所ニ起レハナリ、今ヤ吾人ハ常勝軍者、最後勝軍者キリストノ旗下ニ属スルカ故ニ、最終ノ勝利ハ疑ワスト雖モ、吾人ノ智ト勇トハ全クキリストニ貴キセサルヘカラスルナリ、決シテ吾人ノ智勇ヲ通シテキリストハ勝ち玉ヘハナリ、然ラハ今日ニ當リ実ニ敵ノ攻撃ノ点ヲ悟リテ先ツ之ヲ制シ自ラ真誠ノ衝路ヲ悟リ自ラ防クト共ニ自ラ進攻シ、敵ヲシテ防戦ニ暇ナカラシメ活路ヲ求ムルニノミ汲々タラシメサルヘカラス、若シ此真衝路ヲ発見セシテ無策ノ挙動ヲナストキハヨシヤ教会内ノ貴族ハ亡ホスヲ得ルモ之ヲ亡シ得ル<sup>(サ脱カ)</sup>トキハ天下ハ皆貴族主義充滿スルニ至ラン、是レ豈ニ策ノ得タルモノナランヤ、熟ラ思フニ、今ヤ一致教会ハ已ニ全ク合併ヲ断念シタリ、其全副ノ心ハ一ニ伝道ニ向ヘリ、組合教会ヲシテ互ニ争ワシメテ自ラ其間ニ乗シテ長足ノ進歩ヲナサントスルニアリト、然リト雖彼等モ全ク断念シタル如クニモ

見セカケサルヘシ、又小崎伊勢輩ヲハ成ルヘク動搖セシムヘシ、而シテ彼等ハ常ニ二途ヲ取ルナラン、若シ伊勢輩ヲシテ合併ニ奔走セシメ組合教会ヲシテ奔走ニ勞セシムルモ一策ナリ、伝道上ノ運動ヲ渋滞セシムルモ一策ナリ、又互ニ争ワシムルモ一策ナレハナリ、二ツニハ万一合併破レテ伊勢輩ヲシテ組合教会ニ人望ヲ失ワシメ、不平ヲ感セシメ、之ヲ甘ク奪フモ一策ナリ、彼等必ス此二策ノ中ニ往來シ、右スルモ左リスルモ自ラ損セサルヨフニ計ルヘシ、果シテ然ラハ吾人今日ニ當リ慧眼以テ之ヲ処置セサレハ或ハ一時貴族主義中ノ一寫トナサレンモ計リ難シ、是レ今日尤モ注意セサルヘカサルナリ、タトヒ教会内ノ微々タル貴族主義ノ奴輩ヲ撲滅スルノ快アルモ已ニ全天下ニ貴族主義充滿スルニ至ラハ吾人何ノ面目アツテキリストヲ拜シ、何ノ面目アツテキリストノ代表者タルヲ得ンヤ

以上已ニ病根及其証候ヲ陳述シタリ、今処置方法ヲ論セン、一言以テ之ヲ蓋ヘハ、非常ニ伝道ノ速力ヲ進ムルニアリ、蓋シ身体中幾分カ腐敗分子アリ、動モスレハ惡勢ヲ醸サントスルモノアリト雖モ、健康十全ナルトキハ之ヲ圧シ、漸クニシテ全ク消散セシムルヲ得レハナリ、今教会ニ滋養ヲ与フルトキハ僅微ノ腐敗ハ化善スルヲ得レハナリ、然リト雖モ一步ヲ進ンテ其細經ニ躐レハ自由思想平等主義ヲ快ク伝道セサルヘカラス、今組合教会内ニテハ此主義ヲ有スルモノヲ頑固トシ、尚宗派心アルモノヲ固陋トスルノ風勝ヲ占メタリ、今后ハ此主義ヲ有セサルモノヲ秘息セシメサルヘカラス、公然ト我レハ宗派心ニ充滿ス、コングリゲーシヨナリズムニアラサレハ実ニ日本ヲ救フ能ワサルナリト信スルナリトノ言顯ワシヲ以テ、我教会内ニ全勝ヲ得セシメサルヘカラス、而シテ此思想ヲ以テ組合教会内ニノミ勝ヲ制スルニ止ラス、此主義ヲ以テ伝道シ組合教会外則全日本國ニ勝ヲ制セシメサルヘカラス、其然ランニハ當ニ如何ンスヘキ

第一伝道会社ヲ我党ノ手ニ掌握スルニアリ、近頃小崎輩該社ノ組織ヲ變更セントスルニ意アリ、真大ニ之ヲ賛成シ置キタリ。吾人ハ此機ニ乗シテ之ヲ掌握セサルヘカラス、全体組織ハ幾百篇變更スルトモ、今日ノ如ク松山大沢宮川輩ノ手ニアラシメハ決シテ活動スル事能ワサルナリ、唯ニ活動セサルノミナラス禍害ヲ醸ス事已ニ歴史ノ証スル所ナリ、サレハ吾人ノ今日之ヲ計画スヘキハ尤モ急クヘキハ此度此人則担任者ヲ替ユルニアルノミ、吾人ハ今日予メ其候補者ヲ定メ、イザ來ル五月大会ノトキニハ兎角ノ事モナク容易ク其人ヲ選定シル様同志中ニ巧ミニ計リ置カサルヘカラス、決シテ彼ノバイブルクラスノ輩ニ与フヘキニアラス、是レ實ニ組合教会

ヲ一新スルノ策ナリ、先生其人ヲ選定セヨ、真已ニ広津ト横田ニハ申通シ置キタリ、何分ニモ其御選定然ルヘカラント存候、真ノ知ル所丈デモ上告セヨトナラハ、真ハ阿部磯雄<sup>安</sup>可ナラント、若シ万止ム<sup>得</sup>得サル事情アルナラハ小崎トシ之ヲシテ書生頭ニ養ヒ立テサルヘカラス、然レトモ之レニハ幾分ノ教育ヲ要スル事ナレハ或ハ阿部ナラハドーデアローカト奉存候、然レトモ阿部迎モ何分宗派心薄カリソーニ小生ハ考ヘ申候、唯適當至極ト言フ人ナキユヘニ先之ヲ考申候、広津ナラハ此上ナシナレトモ何分位置ニ不足アルヨフニテ万事不都合ナラン、阿部ヲ主幹ニシテ横田ノ如キモノヲ竊カニ書記ニスレハ重々ナリ

第二ニハ毛武ノ部会ヲ活動セシメ部会伝道ヲ盛ニスルニアリ、今別科四年ヲ卒業セサレハ伝道サセヌ扨トハ些ト窮屈ナリ、苟クモ信仰健カニシテ幾分ノ勢力アルモノハ遠慮ナク部会伝道者トナスニアリ、東京ノ如キハ数ヶ処ニ講義所ヲ設置シ盛ニ伝道セサルヘカラス、今日迄ノ如ク内ノ戦ニハ人見輩モ大ニ尽力シタレトモ、以来ハ成ルヘク外ノ働キニ力ヲ尽ス様是非先生ヨリ深く御示シ下サレ度実ニ祈リ奉り候、尤部会ニモ会計ノ困難等モアルヘケレトモ六分ノ助ケモアリ、又実ニ力ヲ伝道ニ入ル、トキハ決シテ一ケ年五百円ヤ千円ノ金ヲ得ルニ難渋アラス、其難渋ナルハ全ク不精神ヨリ起ルト真ハ実ニ考ヘ申候、願曰ク武毛ノ部会一致シテ今後活発ノ運動ヲナス様ニ御示シ下サレ、又此伝道上ノ運動ヲ以テ凡テノ内輪ノグヅミミヲ压倒スルヨフニ、又其平等主義平民主義ノ活氣ヲ以テ非宗派主義合併主義<sup>ヲ</sup>其人等ノ所謂開化主義ヲ沈睡セシムルヨフ一挙万得ノ処置致シタキ事ニ御坐候

第三ハ伝道師ノ製造是レナリ、今日迄ノ如ク岡山ヤ今治辺ノ煙草屋ノ丁稚トカ蒸氣間屋ノ小僧力ニテハタトヒ卒業シタレハ迎決シテ今日ノ伝道ハ六ヶ敷候、其レ迎モ人数少キハ又其上ノ疵ナリ、生ハ今日ヨリ見込ミアルモノハ悉ク神学校ニ送ル積リナリ、願曰ク御含ミ置キ下サレ各地ヨリモ成ルヘク多数送り出タス様仕度候、然ルニ其レニ付一言々上スヘキハ同志社ノ試験ハ甚タ輕薄ナリ願曰ク武毛部会ニテ試験シタルモノハ直チニ採用スル様ニ致シ度、然ラサレハ偶々難渋ノ中ヨリ資本<sup>本</sup>ヲ拵シラヘテ出<sup>出</sup>試験出京都シテ試験ニ落第シタルトキハ一方ナラス難渋ナリ、其等ノ恐レアル為ニ初メヨリ出京セヌ人モ尠カラス、故ニ陸海軍等ニハ凡テ出張試験ヲ行フナリ、同志社ニテ出張試験スル事ハ出来ヌ事ナレトモ、各地ニ伝道師アリ牧師アル以上ハ之ヲ部会位ニ委任スルハ実ニ天然ノ便利ナリ、此便利ヲ利用セシテ却テ輕薄ナル試験ノ下ニ遙ル々呼出タスハ不都合ナ



リ、人ヲ得ル能ワサルノ方ナリ、願クハ来年ヨリ能ク御協議ノ上、科程ヲ定メ責メテ武毛丈ケナリトモ部会ニ御委任下サレ度奉願候

第四小崎輩則合併連ヲ痛ク攻撃セサル事ナリ、強ヒテ攻撃スルトキハ之ヲ放逐スルノ実トナリ、一致教会ノ肥料ト相成可申、唯彼等ニハ位置ヲ与ヘスニ矢張我教会内ニ封鎖セサルヘカラス、然ランニハ第一、<sup>(一)</sup>攻撃セヌ事ナリ、第二位置ヲ与ヘサル事ナリ、第三伝道ヲ盛ニシ組合派ノ宗派心ヲ遠慮ナク若壯者ノ中ヨリ唱道スル事ナリ、右ハ小生実ニ厚ク考想スル所ニ御坐候、勿論甚タシキ間違ノ事アラン、唯理由ハ御教ヘ下サルニ及ハサレトモ右四方ノ計策中ニ就テ可否ノミ御漏ラシ下サレ度、万一神算ニ叶フ事アラハ速ニ御運ヒ下サレ度奉願候、何トナレハ真ハ実ニ今日ハ中々容易ナラヌ時節、若シ此後十年間ヲ経過スル内ニハ大ニ日本ノ主人定マリテ再ヒ動カス可カラサル有様トナランヲ恐れハナリ、グリーキ教、ローマ教、監督教深ク恐れ、ニ足ラス、況ンヤ僧侶神官ヲヤ、黙リト雖モ一致教会ノ如キ、実ニ似テ甚タ非ナルモノニシテ大ニ今日日本人民ノ智度ニ適スル如クナレハ実ニ甚タ恐れヘキノ大敵ナリ、吾人ノ備フヘキハ是レニアリ、願曰ク吾人ハ非常長足ノ進歩ヲナシ決シテ四千万人ヲシテ彼等ニ与ヘテハ吾人ノキリストニ対スル責任防クヘカラサルナリ、願曰クハ心情錯乱、前後混乱、唯御推読又死罪ヲ恕シ玉ヘヨ、恐々謹言

十一月廿六日

大久保真二郎

拜

新島大先生閣下侍史函丈

同志社学生による近江伝道は「公会記」(第2巻『宗教編』史料133)ならびに『七一雑報』によると、明治十年(一八八七)彦根地方に小崎弘道、大津地方に宮川経輝、金森通倫らが出張したことはじまる。爾後上記のほか長浜、八幡、日野、八日市などの各地にひろがり、十二年六月、彦根教会(牧師、本間重慶)、八日市教会(牧師、須田明忠)が成立した。

杉浦義一(一八五二—一九二六)は三河(愛知)の額田郡美合村の生まれ、明治六年(一八七三)三月横浜の日本基督教公会で洗礼をうけた。七年九月神戸に移ってJ・C・ペリーの助手となり、九年同志社に入学、神学を学んだ。在学中から、日野、八日市、さらに姫路地方の伝道に従った。河辺銚太郎は「公会記」(前掲書)によると越中(石川)礪波郡苗嶋村の生まれ、「第二公会録事」(第2巻『宗教編』史料132)によると、明治九年十二月三日第二公会

で金森通倫、徳富猪一郎らとともに新島襄から洗礼をうけた。十年六月小浜の伝道にたずさわり、在学中から学生伝道をおこなった。

398

鈴木清（一八四八一—一九一五）は摂津（兵庫）の三田に生まれ、藩校で漢学、武芸を学び、維新後川本清次郎から英学を学ぶ。明治七年（一八七四）四月十九日摂津第一公会（神戸教会）創立にさいし、D・C・グリーンから受洗。教会創立のメンバーの一人で、はやくアッキンソン、パロウら宣教師と阪神、中国、四国各地伝道に従事、十三年以降は北海道開拓の赤心社社長。また神戸女学院の管理、運営の事務にたずさわった。家は佐詰業を営み、神戸区会議員、神戸商業会議所議員。

399

安中の出身で根岸〔某〕とは、「言葉の匂ひ松の風」からも新島にその子固弥太の教育を托した根岸松齡がうかびあがってくる。

## 解題





第三卷『書簡編Ⅰ』は口絵写真には明治五年当時三十歳の新島襄の写真、「280号書簡」（明治十九年月日未詳、北垣国道宛）ならびに封筒の署名（「12号書簡」、「49号書簡」、「220号書簡」、「347号書簡」、「411号書簡」、「510号書簡」）を用い、本文は書簡五四二通、すなわち嘉永五年（一八五二）十月六日、新島七五三太の満九歳のときの安中藩家老尾崎直紀宛書簡（代筆）をはじめとして、明治二十一年（一八八八）月日未詳、堀貞一宛書簡「542号書簡」までを収載し、七三五ページから九二六ページにわたる注解を付した。なお、この巻の前の見返しは七五三太・敬幹の弟双六に宛てる書簡（「14号書簡」、慶応元年（一八六五）月日未詳）の前段を、後のそれは同志社大学の設立の旨意の執筆を依頼し、徳富猪一郎宛にそのマテリアルを送る、その冒頭書き出し部分（「43号書簡」、明治二十一年「十月十三日」付）を用いた。

第四巻、すなわち本巻『書簡編Ⅱ』は、口絵写真には湯浅一郎の画く新島襄の肖像、ハリス理化学校の寄附金に対する謝状草稿（「661号書簡」、明治二十二年「六月七日」付、ハリス宛）ならびに久保田米庵の画く「故新島先生長逝状景画四葉」のうち、大磯臨終図々を用い、本文は明治二十二、二十三年の書簡三二二通（明治二十二年一月一日付、福士成豊宛「513号書簡」から二十三年「二月、広津友信」宛「818号書簡」ならびに年次未詳分「819号書簡」から「849号書簡」、年月日未詳分「850号書簡」から「854号書簡」、しめて三二二通となす）と、この編纂作業の過程で新たに収蔵することとなり、もしくは既蒐集書簡で追加するもの十五通（1～15）を加え、さらに遺言Ⅰ（明治二十三年一月二十一日午前五時半 同志社社員）、2（明治二十三年一月二十一日 陸奥宗光、広津友信、人見一太郎、大久保真次郎、横井時雄、横田安止・古賀鶴次郎・浜田正稲・波多野培根、富田鉄之助、新井毫 明治二十三年一月二十二日午前五時十五分・二十五分、二十三日午前三時五十分）、3（広津友信、横田安止、古賀鶴次郎、浜田正稲、波多野培根、諸教会牧師、宣教師、アメリカン・ボード、デイヴィス、信州・福島東北伝道など）、4（明治二十三年一月二十一日 波多野培根、原六郎、井上馨、北垣国道、渋沢栄一、横田安止）を付した。遺言を書簡編に付した理由は、明治二十三年一月二十一日の段階で、新島は個人宛遺言については新島八重子、徳富猪

一郎、小崎弘道の連名で各人に送付方の指示をしていることによる、同志社社員に宛てたものをあわせて収載した。もとより書簡は、その内なる心の外的発露であり、相映発してはじめて、その拍子の高みを生じる。すなわち、発するありて、こだまあり、受けるありて、その響きを伝える。そこに吐露され、披瀝され、開陳される周波数は、もとよりこれをうける立場の人の、必ずや促さるべき呼応を期待する。かかる意味ではそこに展開される活劇は寸毫紛うことなき人生の生の呼吸である。

新島襄はその生活のなかで、その享けること、これに応じて発すること、そしてその逆のやりとりに、いかに多くの時間を割いたかは疑うべくもない。

その最後の日記である「漫遊記事」（第5巻所収）の明治二十二年十二月中旬から翌年一月初頭までに発した書簡の覚えを見ると、次の通りである。上段は「漫遊記事」（四一〇—四一一ページ）、下段は残存する書簡（推定）を示す。

十四日 時岡、大久保 ハガキ

770号書簡（時岡恵吉宛）

十四日 八重

769号書簡（新島八重宛）

十五日 広津

771号書簡（広津友信宛）

十六日 八重、公義、金森

773号書簡（新島八重宛）

〔中略〕

廿二日 公義ニ長文ヲ送ル

776・777号書簡（新島公義宛）

廿三日 上州ノ三人、長文ヲ送ル

〔白石村次、福島伝道策ヲ送ル〕

778号書簡（不破唯次郎・杉田潮・杉山重義宛）

779号書簡（白石村治宛）

廿四日 東正義、河波

780号書簡（東正義宛）

廿五日 不破

廿八日 広津―長文ナリ、八重

782号書簡（広津友信宛）

卅日 横田、不破、八重、山路一三、公義

788号書簡（横田安止宛）、786号書簡（新島公義宛）

卅日 徳富、松尾音次郎

787号書簡（徳富猪一郎宛）、785号書簡（松尾音次郎宛）

一日 公義、広津、大久保（カキ初ヲオクル）

794号書簡（新島公義宛）

二日 杉山

796号書簡（杉山重義宛）

杉田、杉山、

三日 ○河波ノ事ニ関シテカキ初ヲオクル

半田、松本

797号書簡（半田平次郎宛）、798号書簡（松本勘十郎宛）

四日 八重 (Allen Browne)

801号書簡（新島八重宛）

横井老母 死去

五日 八重

六日 葬式、松尾、篠田

802号書簡（松尾音次郎宛）

これらは、かたや「遺言」を伝えようとする裂帛の気迫があり、これをうけて「形見」とした受け手の姿勢があつて、はじめて日並の日記記事と書簡の伝存が相応じたという特別な状況を物語るものといえよう。  
したがっていま時期を少し溯って、明治二十一年十一月「同志社大学設立の旨意」を天下に公表し、「全国民の力

を藉り」ることを三度びも繰り返して「赤心を開陳して全天下に訴へ」、「吾人年来の宿志を達せんと欲す」（第1巻『教育編』史料30）と訴えた後、神戸の和楽園で休養の時を医師に勧められていたおり、河波荒次郎に宛てた書簡から、新島の姿勢を見てみよう。

この書簡は明治二十二年二月三日付で出されている（本巻「511号書簡」）。河波は奈須義質の熊本赴任後の甘楽第一基督教会（群馬県北甘楽郡富岡町）を牧する伝道者である。

〔前略〕小生モ当時旧病未タ不癒、為メニ京都ヲ去テ当地ニ休養仕候次第ニテ、兼テ計画致居候大学之為メニ奔走モ叶ハス随分遺憾ニ存候得共、病氣之事ナレハ真ニ致シ方ナク、不得止只々皇天ニ向ヒ哀泣スルノミ、乍去此企ニ付キ決シテ怠リ不申、昨十一月以來数千通之書状ハ天下之人士ニ差出シ、此一月以來自身ニモ已ニ百余通之書面ハ相認申候〔下略 傍点・杉井〕

これは休養中とはいえ、なお力をふりしぼって新島が筆を執り、同志社大学のことを訴え続けた熾烈な姿勢とその訴えを示している。

以下項目を分けて書簡編の解題を進めよう。

書簡にみる新島襄——祐筆新島家の児——

1 七五三太、敬幹の自署の姿

天保十四年正月十四日（一八四三年二月十二日）、新島襄は安中藩「御祐筆」新島民治、母登美<sup>とみ</sup>の長男として生まれた。上に十二歳年上の長姉久和<sup>くわ</sup>（簪）、ついで二姉真規<sup>まき</sup>、三姉美代<sup>みよ</sup>、そして三歳年上の四姉ときがあり、幼名は七五三太と呼ばれた。弟の双六（雙六、公鋤、文虎、哲）は彼の満五歳を迎える折の誕生である。

本全集の書簡編に収めた書簡で、この七五三太を自ら署名する最も早い例は第三巻『書簡編一』の「2号書簡」（安政五年（一八五八）七月上旬、尾崎直紀宛）であり、当時彼はすでに祐筆補助の役務にあった。爾後、密航、在米中の家信にその例が見られ、「26号書簡」（明治二年（一八六九）五月十日付、新島民治宛）には追而書に「しめた」としてしている。なお明治四年六月取得した旅券ならびに五年七月受理の田中不二麿文部理事官随員の辞令は新島七五三太である。ところで七五三太と自署する下限は「43号書簡」（明治六年（一八七三）一月二十六日付、新島民治宛）で、これは彼のほとんど満三十歳のときに相当する。そして六年三月十八日（「44号書簡」、新島民治宛）以降の在米中の家信ならびに帰国後の書簡には、もはやこの七五三太とする自署はまったく見られない。

幼名による自署は、かかる意味では十年に及ぶ海外生活によって、殊に家信において、これを称することがなく続いたというべきであろう。しかも、この署名の頭には、「不忠不孝の児」（「15号書簡」、慶応二年（二月二十一日）付、新島民治宛）の例が見られて象徴的である。

さて、安政四年十一月十五日（一八五七年十二月三十日）には七五三太の前髪卸しがおこなわれ、元服して烏帽子名・

実名は敬幹と称することとなった。したがって彼の自署にも当然、敬幹もしくは幹の一字をもつてすることがはじまる。さきの「2号書簡」がその初例であって、末尾に「敬幹 再拜再拜」と署名、添え書きし、本文中には「幹」の一字で自らを称している。ただ実際に敬幹をどのようにに訓じ、どのようにに読んだか、その命名の由来、出典を記す記録も伝存せず、明らかでない。

密航・脱国までの経過には七五三太とする場合と敬幹（幹）との混用が認められ、在米中の家信には七五三太、敬幹（書判）の併記（14号書簡、慶応元年（一八六五）未詳、新島双六宛ならびに「15号書簡」、慶応二年（一八六六）「二月二十一日」付、新島民治宛、「42号書簡」、明治五年（一八七二）九月二十九日付、新島民治宛など）も見られる。しかして敬幹と自署する下限は、ほかならぬ「42号書簡」であって、彼における「古い」日本人、祐筆の家の児という七五三太、敬幹の姿と形は、ほぼ同じ時期にその姿を消していくことになる。この理由はいうまでもなく約瑟<sup>ヨセフ</sup>と自署するようになることにはじまる。彼の約瑟と自署する例は、まずその講義ノートに——自らを表白し、また秘めた形で——示される（一八六九年五月二十七日と年紀をしるす「化学ノート（分離術）」に「新島約瑟」とある）。それはしたがって、新島における時の経過を伴った東西複眼の内部生命の変革、とくにその確立と、きわめて密接な関係があると見るべきであろう。すなわち和文書簡において、約瑟と署名する初例は「39号書簡」（明治五年（一八七二）五月三日付、新島民治宛）、「40号書簡」（同上日付、木戸孝允宛）であり、とくに「39号書簡」では「七五三太事 新島約瑟」としている。父には改めて「七五三太事」とことわっているが、木戸孝允宛には「新島約瑟」として、何らはばかる形が見られない。しかして、それは大きな自信、自恃の表白と見ることができよう。約瑟を自署する姿はヨーロッパの生活のなかで、再びアメリカに帰っての勉学の間、そして帰国、年の明けて明治八年一月初頭まで続けられる。そして、この約瑟の名は当時、漢訳聖書になじむことの多かった日本の「新人」には、きわめて心温まる響きをもって迎えられたと



推量される。安中教会に襲蔵される「武士の思ひ立田の山紅葉にしき衣すしてなと帰るへき 約瑟」とする自詠の和歌の書幅はそのことを明証している。

そして、明治八年一月六日、ついで十一日に新島は安中の千木良昌庵に、さらに一月九日、父民治に宛てて、約瑟を略して、漢訳人名を日本の姿と形に改める。新島の自署はかくて裏に改められ、ついに裏が終生の名となった。

## 2 裏の署名とその姿、形

「51号書簡」（明治八年一月六日付、千木良昌庵宛）の署名は「新島讓<sup>ジヨフ</sup> 約瑟之略也<sup>ジヨフセフ</sup>」とあり、「52号書簡」（同年一月九日付、新島民治宛）の署名は「新島裏<sup>シヨフ</sup> ジヨフセフの略也<sup>シヨフ</sup>」とし、ついで「53号書簡」（同年一月十一日付、千木良昌庵宛）の署名は改めて「新島裏<sup>ジヨフ</sup> ジヨフセフの略<sup>シヨフ</sup>」としている。したがって安中を出て東京にあり、年頭一週（一句）を経過して、漢訳名の約瑟を改めて、これを略し、讓ではなく、裏をもって名とした経過が知られる。いま書簡の原本を写真で見ることのできる「51号書簡」、「53号書簡」によると、前者は「讓<sup>ジヨフ</sup>」、後者は「裏<sup>シヨフ</sup>」であり、ともに「ジヨフ」を以て終生の呼名としたことが明らかであり、少なくとも裏をもって「ユズル」と読むことの筋道はまったくなかった。また「Joseph」の略である「Joe」は、そのまま音としてだけでなく、「呼び名」として生きつづけることを意図したと思われる。それは日本に帰って来た新島の両洋（東洋と西洋）の視軸、複眼の文化観と関連する姿勢とその形であらう。

なお、自署するに当って、裏の一字のみを使う初例は、京都三条の目貫屋で比叡山の荒廃を見て、「全時勢然（し）むる所、是歴史家の宜しく注意すべき所」と論じ、雨の京洛に入って、この度の旅を報ずる父民治宛の家信（「58号書簡」、明治八年四月六日付）であり、したがって裏を用いはじめて、四カ月を経過している。爾後、家信ならびに知友、



教友宛書簡に、それが一般になる。明治二十二年十月中下旬以降、東京、上州、ついで東京、そして二十三年初頭の大磯百足屋から発せられる多くの書状のうち、その過半が襄の署名をもつて、その真率な心情を伝えていることも顕著な特徴といえよう。しかして、この襄と自署する書簡が、まさに老蘇八十叟のいう「雲飛ヒ泉迸リ、鳥啼キ花笑フ」（『新島先生書簡集』所収徳富猪一郎序文）に相当しよう。

新島襄を自署する形について、また一言説き及ばねばならぬことがある。そもそもその書簡において、自らの姓名を自署することは、いささかの偏僻を思ふべきではあるまいが、新島襄と自署する書簡の形には二つの大きな特徴をあげることができよう。

その一つは、その姿勢に安中藩御祐筆の家筋をうけ継ぐというべきものがうかがわれるということであろう。それは書簡の文言、文体も改まり、したがって「古格」をなした形とも称すべきものである。その数例をあげれば、「75号書簡」（明治十一年十一月二日付、森有礼宛）の冒頭起筆は「秋冷相催候処弥御多祥御消光被遊候半と推察奉祝賀候」とはじまる。ことは宣教師ゴードンの寄留免許を求めるものであるが、「頓首」にいたる文言は「臨書匆卒万一を尽さず、伏して願は賢察し賜へ」と述べ、署名して、なお印鑑をおしている。「152号書簡」（明治十六年十二月三十一日付、板垣退助宛）は「一書敬而奉呈仕候、本年も最早今日を残し候処、閣下ニハ弥御壮健歳晩を御送被遊候事ト遙察奉賀候」と述べて、この年帰国した板垣にキリスト教による「新心」をすすめ、「新心ハ乃人類之活靈文化之泉源なり、閣下ニし而此新心を得らるゝならば徳不孤必有隣、文化之基之ニより立へき也」と述べる。留め書きは「頓首々々」として「客舎残燈下ニ記す」としるして署名している。「387号書簡」（明治二十一年三月二十五日付、北垣国道宛）は「昨夜参堂仕候処、御面謁御許容被下感佩之至ニ不堪候、陳者拙生企居候専門校之事ニ付尚一二件拜鳳之上御賢慮を拝聞仕度候間、今一回之拝謁を希望シ今夕六時半比参堂仕度候得共、御都合可相叶候哉奉伺度候」と面晤の機をえ

たことを感謝し、さらに今一度、明治専門学校について機会を与えられんことを願うものであり、「右為願用得貴意如此候也、頓首敬白」と結んでいる。「507号書簡」(明治二十一年十一月〔十九日〕付、勝安芳宛)は「冷氣漸々相催候際、先生益御勇健御起居被遊候半ト奉欣賀候、陳者過般は久々ニ而高門ヲ叩キ不知不識長坐ニ及ヒ御馳走頂載<sup>(乾)</sup>、又種々之御経験話ヲ拝聞仕心窃ニ覚ル所有之、深ク先生之御訓誨ヲ服膺可仕候」にはじまる。十月十二日の「長坐」のなかで、新島は「海舟座談」によると「私は余計な事を初めかけて大相困る」と大学設立運動の苦勞話をしかけたことになっている。勝の「訓誨」はきわめて重く、かつ大であり、新島は翌十月十三日いわゆる「同志社大学設立の旨意」の起草を徳富猪一郎に托し、それはすでに十一月七日新聞紙上に公表された直後の訪問であつた。「509号書簡」(明治二十一年十一月二十二日付、大隈重信宛)も東上中の厚誼を謝して、大学設立運動に周旋を依頼するもので、「肅啓、其後は打絶御無音申上候条御海容可被賜候、近来ハ御起居如何慎而奉伺上候」にはじまる、結びはさきの北垣宛と同様で「右為願用得貴意度如此候也、頓首敬白」とある。「507号書簡」(明治二十二年二月一日付、頭山満宛)の冒頭の書き起こしは「未タ拝鳳之栄ヲ得サルモ敢て一書奉呈仕度候」とややくだけた形であるが、義捐金募集を依頼し、その末尾も「真ニ鉄面皮ナカラモ此等之件ヲ御頼申上候間、御承諾之程奉切望候、右為願用得貴意度如此候也、敬白」と結んでいる。その結句は北垣国道、大隈重信と同然である。東北の安部井磐根に宛てた「501号書簡」(明治二十二年二月)は「一書奉拝啓候、厳寒之際益御多祥奉欣賀候」にはじまり、「貴下ニも右大学之旨趣書等御一覽之上充分此举を御賛成被下度」、「惓願之至ニ不堪」と述べてさきと同じように「右為願用得貴意度如此候也、敬白」としている。「72号書簡」(明治二十二年十二月十六日付、井上馨宛)は「上州之事ハ来春百花爛熳之好時節を期シ、又々再举を可図事ニ仕置キ候」と、なお「壮図」の存するところを披瀝する書簡であるが、その起筆は「拝啓、寒氣漸々相募候際、閣下ニハ如何御起居被遊候哉、敬而奉伺上候」とあり、結句は「小生之衷情何卒御了察被賜度奉希候、

右得貴意度、艸々拝具」とある。

ここに現われる新島襄の姿はきわめて慇懃であり、懇篤であり、表情を表白するのにもっとも格式を具えた形が顯著である。それは筆の運びにも見られて、いわゆる「能書家」を彷彿とさせる。敢えていえば、それは祐筆の家、新島家の血が流れていると称すべきであろうか。これらの書体、運筆、筆勢の形、模様は端正で風韻があり、古格というか、あるいは慣熟の表現というべきであろうか、漢語（漢字）の使用の頻度もきわめて高い。しかも、特定の漢字をそこに用いる心遣いにおいては、とくに北垣国道知事においてきわまれりというべきであろう。すなわち同志社呼ぶに当って、敝社、敝校の敝を使って、弊を避け、館を使って館を用いないのは、その著しい例といえよう。これは「平民」を称する新島に、なお宿している持続する「古い」ものを貴いとする柔軟な思考がうかがえる重要な「窓」といえよう。

その特徴の二つは新島襄と署名するに当って「新しま襄」（たんに「新しま」とする場合も含め）とする表記の姿と形である。

新島が在米中のサインにおいて、Nee-Sima, Nee-Shima（第6巻所収35号書簡）、Neesima とすること、ならびにこの全集の英文を Joseph Hardy Neesima とするは、すでにこれを奇とするに当らないとして久しい。しかし、世間一般において、その呼称はニイジマと濁って読んで普通とすることもこれまた久しい。ところで彼自らは和文の場合、その表記に当って、この問題はいかなる形を示したのか。

まず、その表記の例を見ると、在米中の家信、先輩に宛てた書簡にそれを見ることができ。 「30号書簡」（明治三年四月二十二日付、新島双六宛）は「新しま敬幹」とし、「35号書簡」（明治五年「三月」、吉田賢輔、尺振八宛）、「36号書簡」（同年四月一日付、新島民治宛）は、ともに「新しま七五三太」としている。この事実は新島の「島」、「嶋」、

「嶋」を呼んで、明らかに濁音をもってせず、「シマ」と呼び慣わしてきた環境、背景があつてこそ用いられる表記の姿であり、形と見るべきであらう。

では帰国してからの新島が、自ら署名するに当って、「島」の字を漢字を以てせず、「しま」の平仮名をもってこれを示す姿は、書簡における彼の衷心、心情、持続する魂の在りかを知る最も重要な鍵とすることを証明する著例となしえよう。

いま年月の確認できるものを順次にあげると次の通りである。

「93号書簡」(明治十三年九月一日付、川本政之助宛)、第二回海外中の「168号書簡」(明治十七年五月九日付、新島民治・とみ・八重・公義宛)、「227号書簡」(明治十九年一月十八日付、松山高吉・湯浅治郎・小崎弘道・海老名弾正宛)、「238号書簡」(同年二月二十日付、新島公義宛)、「244号書簡」(同年三月九日付、新島公義宛)、「278号書簡」(同年十二月十三日付、中村栄助宛)、「308号書簡」(明治二十年五月二十八日付、新島公義宛)、「309号書簡」(同年五月二十九日付、大久保真二郎宛)、「314号書簡」(同年六月十六日付、鈴木彦馬宛)、「320号書簡」(同年七月十一日付、「宮川経輝」宛)、「323号書簡」(同年八月二十四日付、柳内義之進宛)、「328号書簡」(同年十月六日付、中村栄助宛)、「340号書簡」(同年十一月二十一日付、橘仁宛)、「341号書簡」、「342号書簡」(同年十一月二十二日・二十五日付、徳富猪一郎宛)、「350号書簡」(同年十二月十七日付、湯浅初子宛)、「363号書簡」(明治二十一年一月二十三日付、中村栄助宛)、「365号書簡」(同年一月二十八日付、小崎弘道宛)、「366号書簡」(同年二月二日付、中村栄助宛)、「372号書簡」(同年三月一日付、新島公義宛)、「392号書簡」(同年三月二十九日付、徳富猪一郎宛)、「406号書簡」、「407号書簡」(同年四月二十五日・二十九日付、中村栄助宛)、「追加8号書簡」(同年四月二十九日付、金森通倫宛)、「416号書簡」、「418号書簡」(同年五月十三日・十六日付、徳富猪一郎宛)、「419号書簡」(同年五月十七日付、土倉庄三郎宛)、「429号書簡」(同年六月三日付、徳富猪一郎宛)、「437号書簡」(同年六月二十五日付、永岡喜

八宛、「441号書簡」(同年六月三十日・七月十日付、徳富猪一郎宛)、「447号書簡」(同年七月二十四日付、湯淺治郎宛)、「449号書簡」(同年八月一日付、新井乙瓢宛)、「453号書簡」(同年八月七日付、新井毫宛)、「496号書簡」(同年十一月一日付、波多野培根宛)、「548号書簡」(明治二十二年一月四日付、松尾音次郎宛)、「562号書簡」(同年一月二十六日付、小崎弘道宛)、「563号書簡」(同年一月二十八日付、伊勢時雄宛)、「597号書簡」(同年三月七日付、中村栄助宛)、「600号書簡」(同年三月十三日付、海老名弾正宛)、「603号書簡」(同年三月十九日付、徳富猪一郎宛)、「606号書簡」(同年三月二十六日付、加藤寿宛)、「628号書簡」(同年五月三日付、松山高吉宛)、「629号書簡」(同年五月四日付、海老名弾正宛)、「632号書簡」(同年五月五日付、新島公義宛)、「646号書簡」(同年五月十四日付、「同志社幹事」宛)、「662号書簡」、「676号書簡」、「681号書簡」(同年六月七日・七月一日・八日付、中村栄助宛)、「696号書簡」(同年八月十二日付、徳富猪一郎宛)、「697号書簡」(同年八月十四日付、広瀬源三郎宛)、「702号書簡」(同年八月二十三日付、松尾音次郎宛)、「705号書簡」、「706号書簡」(同年八月二十七日付、徳富猪一郎宛)、「707号書簡」(同年九月一日付、伊勢時雄宛)、「709号書簡」(同年九月十四日付、大島正健宛)、「710号書簡」(同年九月十四日付、徳富猪一郎宛)、「712号書簡」(同年九月十七日付、田中賢道宛)、「716号書簡」(同年九月二十七日付、徳富猪一郎宛)、「721号書簡」(同年「十月五日」付、中村栄助宛)、「723号書簡」(同年十月六日付、「大沢善助」宛)、「726号書簡」、「733号書簡」(同年十月十七日・二十四日付、徳富猪一郎宛)、「735号書簡」(同年十月二十五日付、横田安止宛)、「744号書簡」(同年十一月十一日付、徳富猪一郎宛)、「756号書簡」(同年十一月二十七日付、中山光五郎宛)、「784号書簡」(同年「十二月二十八日」付、新島公義宛)、「787号書簡」(同年十二月三十日付、徳富猪一郎宛)、「797号書簡」(明治二十三年一月三日付、半田平次郎宛)、「798号書簡」(同年一月三日付、松本勘十郎宛)、「811号書簡」(同年一月十五日付、木原勇三郎宛)。

ここに見られるのは家族、縁故、上州関係者のほか、徳富猪一郎、中村栄助らごく親密な人びとに宛てた書簡にそ



の使用例がきわめて高いことが認められる。したがって、「しま」はただ一字「襄」と署名することと連関して、琴瑟の調べを新島は筆の運びに托したのではないかと思われる。そして、それは耳に慣れた音と「約瑟」(ジヨウ)は、彼において連動しているのである。上州出身の故住谷悦治総長の新島襄を語るとき、敬虔な響きをもって、清音で「島」を伺った思い出は忘れられない。

## 『新島先生書簡集』について

### 1 『新島先生書簡集』

『新島先生書簡集』(以下『正新島先生書簡集』と称す)は昭和十七年(一九四二)六月一日、同志社校友会(京都市上京区新北小路町同志社内)から発行された。奥付によると、編纂者は森中章光、発行者は同志社校友会長若松兎三郎である。

本書は新島襄書簡五九二通を収め、一五四〇ページにわたる大冊である。「新島先生書簡集」の題字は浮田和民の筆で、序文は徳富蘇峰が山王艸堂蘇峰用箋に毛筆でしたためたものを、そのまま収載している。蘇峰の起筆は「書簡ハ人ナリトハ、新嶋先生ニ於テ最モ然リトスル」とあって、「先生ノ真面目ヲ識ラント欲セハ、其ノ書簡ヲ見ルニ若クハナシ」とすすめている。当時蘇峰は八十歳、「門人老蘇八十叟」としるし一三通に及ぶ自ら襲蔵する書簡を提供し、また資料蒐集の援助の労を惜しまなかった。編纂者「森中章光」が示す「凡例」によると、「編纂に当り、撮影したる資料写真の数は頗る多数」とあり、「その一部を選んで」、「コロタイプ版三十一葉」、「写真銅版三十一葉」を収めたとしている。それは書簡の一部ではあるが、原本の体裁をうかがい知る上で、現在ではきわめて貴重で

ある。なお社史資料室には、このときに撮影したガラス原板の写真がいまに襲蔵されており、このガラス原板をもって、複写の便を部分的ではあるがうるることができる。

また編纂に当って「写しによるものでは、故柏木義円氏並に故高橋元一郎氏のものが、多数を占めて居るが、柏木氏は其の生前に新島先生伝の執筆を志したるもの、而して又高橋氏は嘗て編者「森中章光」と共に新島全集の編纂を企てたるもの、併かも斯る目的のもとに苦心蒐集せられたる資料を本書に収むるを得た」と書簡の原本によらず、柏木義円、高橋元一郎らの稿本に依拠したことをこわっている。

「故柏木義円氏写」とするものは、新島の妻八重に宛てた三六号書簡（「正三六書簡」と略す、以下この例による）から「正六九書簡」に及ぶ三十四通の書簡で、それは新島の明治十七年四月にはじまる第二回欧米旅行の旅先の音信から、二十三年一月大磯の百足屋から送られた最後の書簡にわたるもので、伝存する妻宛書簡のすべてに相当する。そのほか柏木義円写には「正九六書簡」（元治元年四月二十五日付、飯田逸之助宛）、「正一一七書簡」（明治二十一年九月二十四日付、上原春朔宛）、「正一二一書簡」（明治二十一年十二月七日付、後藤源九郎宛）、「正二四七書簡」（明治十一年十二月二十三日付、千木良昌庵宛）、「正二五〇書簡」（明治二十二年十二月十四日付、時岡恵吉宛）、「正四五四書簡」（明治二十二年三月十一日付、中山光五郎宛）、「正五五〇書簡」（年未詳九月十二日付、山口通宛）の各通および広津友信宛八通（「正四八三書簡」、「正四八四書簡」、「正四八五書簡」、「正四八七書簡」、「正四八九書簡」、「正四九〇書簡」、ならびに広津友信・花畑健起宛の「正四九二書簡」、「正四九三書簡」ですべて明治二十二年から二十三年一月初めにかけてのもの）と不破唯次郎宛三通（「正五〇三書簡」、「正五〇四書簡」、「正五〇五書簡」）である。この柏木義円筆写の稿本については後述する。

「故高橋元一郎氏写」とするものは京都府知事北垣国道宛の二十二通で「正一六〇書簡」（明治十六年十月十八日付、正しくは十五年十月十八日付、校訂については後述）から「正一八六書簡」（うち「正一六四書簡」、「正一七七書簡」、「正一八

「書簡」、「正一八二書簡」、「正一八四書簡」を除く）にわたるほとんど北垣宛の過半を占めるものである。この高橋元一郎筆写の稿本については後述する。

なおこの『正新島先生書簡集』には「同志社校友会写」として十三通が収められている。児島惟謙宛（「正二三〇書簡」、萩森長五郎宛（正四六二書簡）、増野悦興宛（「正五一四、正五一五、正五一六書簡」、松山高吉・横井時雄宛（「正五二九書簡」、松山高吉・小崎弘道宛（「正五三一書簡」、森有礼宛（「正五四三書簡」、湯浅初子宛（「正五五九書簡」、横井時雄宛（「正五六一書簡」、和田正幾宛（「正五六八書簡」、小田川金之助（正しくは全之）宛（「正五七一書簡」、高松有志家宛（「正五八一書簡」）がそれである。

そもそも『正新島先生書簡集』編纂のうごきは、昭和十四年中秋、同志社校友会理事会の決議によってはじめられたわけであったが、いま明治四十三年二月二十五日発行の『同志社時報』（第六三号、なお第六二号は「新島先生二十年記念」を見ると、石塚正治（明治二十四年九月、警醒社より発行した『新島先生言行録』の編者）が「新島先生の手簡」と題して一文をよせ、森有礼外務大輔宛書簡と児島惟謙控訴院長宛書簡の二通を入手したことを報じ、全文を紹介している。この森有礼宛書簡は、ほかならぬ「正五四三書簡」であり、児島惟謙宛書簡は「正二三〇書簡」そのものである。したがって、いまこれを逐一にわたって伝来の経緯を明らかにしえないが、これら「同志社校友会写」は心ある校友によって、校友会に、ひいては同志社に招来された書簡であり、まさに『正新島先生書簡集』編纂の先駆をなす同志社、校友会のうごきであったことが明らかである。編纂者森中章光がかかる伝存の経過を顧みて、「同志社校友会写」を底本の一つとしたことが知られる。

『正新島先生書簡集』は厳しい戦時下の統制のなかで、六〇〇部の限定出版であったために、洛陽の紙価を高め、稀観書の一つである。この全集の書簡編Ⅰ・Ⅱは多くこれに依拠した。かつ、これを正して、正確を期そうと努力し



た。

## 2 『新島先生書簡集 統編』

『新島先生書簡集 統編』（以下『統新島先生書簡集』と称す）は昭和三十五年（一九六〇）二月十二日、学校法人同志社（京都市上京区今出川通烏丸東入）、同志社校友会の共同出版事業として発行された。奥付によると、編集者はさきの『正新島先生書簡集』と同じく森中章光、発行者代表は同志社理事長秦孝治郎である。

本書は新出の新島襄書簡一〇〇通（本文では途中欠番号がある）を収めている。なお、半田平次郎に宛てた七六号書簡（統七六書簡）と略す、以下この例による、なお本文番号でしめす）は「正四七三書簡」と同一であり、ついで「統七七書簡」（半田字平次宛）も「正四七〇書簡」と同一で重複している。題字は『正新島先生書簡集』を踏襲し、序文は総長大塚節治の手になり、同志社創立八十五周年記念事業の一であると述べている。コロタイプ版二十一、写真銅版十三が収められている。

編纂に当って筆写稿本によったものは「統八三書簡」（明治五年三月、吉田賢輔・尺振八宛）の一通で、「故柏木義円氏写」であり、他はすべて編集者は原本によっている。『統新島先生書簡集』はその三分の一以上が家信であり、『正新島先生書簡集』の補遺をなしている。この全集の書簡編Ⅰ・Ⅱは『正新島先生書簡集』についてこの『統新島先生書簡集』に依拠し、かつ、これを正して正確を期そうとしたことは先に述べた通りである。

なお新島襄の書簡を編集したものは、『正新島先生書簡集』を底本として、昭和二十九年（一九五四）十二月、同志社編として『新島襄書簡集』（岩波文庫版）が刊行された。そこには九十八通が収められている。

同書の「凡例」には「書簡の大部分は前記『新島先生書簡集』（『正新島先生書簡集』をさす）から校訂、転載したも

の」(傍点・杉井)としているが、書簡の原本と対校すると全く恣意的な省略、抜萃をおこなっており、「新島の精神・思想・信仰を識り、彼の人格に触れる」(「凡例」の三条目の表現)ことを企図しながらも、校訂上、きわめて重大な誤りとかつまた新島の本来的に具有した人格をも侵す二重の過ちを犯している。同書はなお刷りを重ねており、本全集書簡編Ⅰ・Ⅱによって根本的な改訂をおこなう必要がある。

### 新島襄書簡の同志社における伝存状況と書簡編Ⅰ・Ⅱの編集について

『正新島先生書簡集』、ついで『続新島先生書簡集』は編纂者森中章光の新島襄書簡原本の採訪、蒐集の努力によるものである。この両書簡集の新島襄書簡の原本の所在場所を記しているところで、同志社蔵としている例は『正新島先生書簡集』では「正三五書簡」(明治十三年二月二十五日付、新島八重子宛)、「正九二書簡」(明治二十二年四月十四日付、雨森菊太郎宛)、「正一〇〇書簡」(明治十六年十二月三十一日付、板垣退助宛)、「正一四〇書簡」(嘉永四年十月六日付、尾崎直紀宛)、「正一八二書簡」(明治二十三年一月十日付、北垣国道宛)、「正一八四書簡」(年未詳十一月二十六日付、北垣国道宛)、「正二四三書簡」(明治十六年三月三十日付、田宮勇宛)、「正三七一書簡」(明治十九年十月十二日付、同志社生徒宛)、「正四九七書簡」(明治二十年五月九日付、福土成豊宛)、「正四九八書簡」(同年同月十日付、同上宛)、「正四九九書簡」(同年十月七日付、同上宛)、「正五〇〇書簡」(同年十一月二十一日付、同上宛)、「正五〇一書簡」(明治二十一年一月三日付、同上宛)の十三通にすぎない。したがって『正新島先生書簡集』はその編纂の段階で、さきにふれた同志社校友会写を除けば、新島の家族宛書簡をはじめとして、その大半、あるいはほとんどの書簡が受信者か、もしくは他人にそれぞれ所蔵されていたことが知られる。『続新島先生書簡集』は『正新島先生書簡集』の刊行から十八年後のことである。十八年の間に、すでに新島書簡原本の伝存は大きな変化移動を見ていたが、そのなかで、さきの

『正新島先生書簡集』に未収のもので同志社の所蔵に移って、『統新島先生書簡集』に収載されたものは次の通りである。

「統一〇書簡」（明治二十一年五月、新島八重子宛）、「統一一書簡」（明治二十二年十二月八日付、新島八重子宛）、「統一二書簡」（明治二十三年一月、新島八重子宛）、「統四一」（以下本文番号を示す）書簡」（明治二十一年十一月六日付、井深梶之助宛）、「統四二書簡」（明治二十二年四月十七日付、岩崎某宛）、「統四五書簡」（安政五年七月、尾崎直紀宛）、「統四七書簡」（明治二十一年十二月、諸教会宛）、「統四九書簡」（明治二十二年四月一日付、白石村治宛）、「統五〇書簡」（明治二十二年十二月二十三日付、同上宛）、「統五六書簡」（明治十六年七月二十日付、田中源太郎宛）、「統五七書簡」（同年十月一日付、同上宛）、「統五八書簡」（同年同月四日付、同上宛）、「統五九書簡」（明治十八年十二月三十日付、同上宛）、「統六〇書簡」（明治二十二年六月十八日付、田中賢道宛）、「統六一書簡」（明治十一年四月二十八日付、寺島宗則宛）、「統六五書簡」（明治十二年三月十五日付、中村正直宛）、「統六六書簡」（明治十六年五月十八日付、同上宛）、「統六八書簡」（明治二十一年六月二十五日付、永岡喜八宛）、「統六九書簡」（同年十二月十四日付、同上宛）、「統七〇書簡」（同年同月十五日付、同上宛）、「統七一書簡」（同年同月二十日付、同上宛）、「統七二書簡」（明治二十二年二月二日付、同上宛）、「統七三書簡」（同年同月十五日付、同上宛）、「統七八書簡」（明治二十一年二月、組合会両会併合相談委員宛）、「統八九書簡」（明治二十二年三月、有志者宛）、「統九〇書簡」（明治二十一年十一月、有志者宛）、「統九一書簡」（明治二十一年十一月、押川方義宛）、「統九二書簡」（明治二十一年十一月、松平正直宛）、「統九三書簡」（明治二十一年十二月、府県会議長并議員宛）、「統九四書簡」、「統九五書簡」、「統九六書簡」、「統九七書簡」、「統九八書簡」（すべて某宛）、「統九九書簡」（各教会宛）。

したがって、新追加九八通（前述の通り一〇〇通のうち、半田半次郎、半田宇平次宛の重複を除く数）の三分の一以上の三

五通が同志社で、その原本を見ることができるようになったが、新追加のうち、なお六五通は巡歴、採訪の結果、収載のできたものであった。

さて、本全集書簡編Ⅰ・Ⅱを編集する段階において、新島襄書簡の同志社に伝存する形態は次の通りである。

# Ⅰ 原本(一)

(イ) 自筆

(ロ) 代筆

(ハ) 筆写

## 原本(二)

(ニ) ガラス原板写真

(ホ) 写真

(ヘ) 複写(マイクロ・ゼロックス)

# Ⅱ 写本・稿本

(イ) 同志社校友会写

(ロ) 森中章光写

(ハ) 森中章光稿本

(ニ) 柏木義円写

(ホ) 柏木義円稿本

(ヘ) 高橋元一郎写

(ト) 田中良一写

### Ⅲ 印刷本（刊本）

(イ) 根岸橋三郎『新島襄』

(ロ) 『七一雑報』、『福音新報』、『上毛教界月報』など

(ハ) 日本史籍協会叢書

(ニ) コンニャク版

(ホ) その他

なお原本(一)の(イ)筆写は「602号書簡」（明治二十二年三月十六日付、目賀田護法宛）、「783号書簡」（明治二十二年十二月二十日付、森信夫宛）の如きものをさす。

写本・稿本については本書簡編Ⅰ・Ⅱの編集上のきわめて重要な問題であるので詳しく言及しておかねばならない。

新島襄書簡の写本・稿本は右に略示した形態をもっている。すでに『正新島先生書簡集』において、編集者森中は写本・稿本のうち、(ニ)柏木義円写、(ハ)高橋元一郎写に多くを依拠したことをこわっていた。そのうち、高橋元一郎写による北垣国道宛書簡の多くは、その原本を同志社が収蔵することができるようになって、写本を底本とする編集を克服することができた。しかし、柏木義円写の新島八重宛をはじめとする書簡群は、本書簡編Ⅰ・Ⅱを編集する段階にあっても、いまだ、それぞれの原本を披閲する機会がなく、したがって、次のような編集上の措置を執らねばならなかった。

その第一の場合は『正新島先生書簡集』で本来、柏木義円写とする新島襄書簡は、改めて写本(ホ)柏木義円稿本をも

って校訂し、柏木義円写として掲載した。その例は「163号書簡」(明治十七年四月「七・八日」付、新島八重宛)から「815号書簡」(明治二十三年一月十七日付、新島八重宛)にいたる一連の妻八重宛書簡である。なおこれに準ずる例は「472号書簡」(明治二十一年九月二十四日付、上原春朔宛)、あるいは広津友信宛の一連の書簡、すなわち「718号書簡」(明治二十二年十一月十九日付)にはじまり、同人宛の二十三年一月七日付にわたる「803号書簡」である。

その第二の場合は『正新島先生書簡集』で柏木義円写によるとしているが、対比して校訂すべき該当書簡が柏木義円稿本に見られない場合であり、この場合は『正新島先生書簡集』の掲載している形をそのまま採用し、これを編集者である森中章光写として掲げた。その早い例は「76号書簡」(明治十一年十二月二十三日付、千木良昌庵宛)の如きである。

その第三の場合は森中章光の写本・稿本と当該書簡の柏木義円稿本と対比できる場合で、第二の場合の取扱いに基づいて、森中章光写を底本とし、柏木義円写(柏木義円稿本)とを対比して掲載した場合である。その初例は「89号書簡」(明治十三年六月十二日付、小崎弘道宛)である。この掲載の体裁はきわめて煩瑣な形をとらざるをえなかったが、原本そのものの出現をみるまでは避けられない掲載方法と考えている。なおこの種の例は「97号書簡」(明治十四年二月七日付)をはじめとする蔵原惟郭宛書簡の場合、「702号書簡」(明治二十二年八月二十三日付)をはじめとする松尾音次郎宛書簡に多く見られる。

最後に森中章光写とすることについて述べよう。森中章光の巡歴、採訪の努力によってまず、『正新島先生書簡集』が刊行され、ついで『続新島先生書簡集』が編集された。森中はいくつ編纂作業の過程で、上記両書の原稿の点検、改訂を進め、森中章光稿本を作成した。しかし、書簡編Ⅰ・Ⅱの編集の段階で、当該書簡のそれぞれの原本に立ち返って、これを底本とすることができなかった場合であり、これらは一括して森中章光写とした。



もとより史料としてのこの書簡編Ⅰ・Ⅱは、原本の出現によって、写本（稿本）に依拠した形は克服されることはないまでもない。しかしして編者としては、その原本を披閲できる日を心から願うものであり、その出現の日まで、かかる編集の形を余儀なく執ったことをご海容頂きたいと願うものである。

さらに写本の別系統のものとして加藤勝弥宛書簡について触れておかねばならない。それは田中良一写についてである。田中良一（一九〇〇—一九六五）は大正十四年同志社大学法学部を卒業後、『同志社五十年史』の編纂にたずさわり、昭和四十年『同志社九十年小史』の編纂の途中で死去した、同志社の生き字引的存在で社史史料編集所所長をつとめた。加藤勝弥宛書簡については、田中が昭和三十三年三月、筆写したものである。

以上、本書簡編Ⅰ・Ⅱは多くの写本、稿本に依拠して編集された。したがって、本書簡集の利用に当っては、『正新島先生書簡集』、『続新島先生書簡集』もなお参照される場合も考慮し、両書簡集の編成に応じてその目次に基づいた一覧を掲げ、『新島襄全集』書簡編Ⅰ・Ⅱにおいておこなった校訂事項ならびにその典拠稿本を併記し、さらに本書簡編Ⅰ・Ⅱの通し番号を示した。

対比一覧における写本欄の（K）は柏木義円写を、（T）は高橋元一郎写を示す。また、旧書簡番号欄の続四二以下はカッコ内が本文番号表示であることを示す。  
(四二)

## 『新島先生書簡集』『続新島先生書簡集』ならびに『新島襄全集』書簡編Ⅰ・Ⅱ対比一覧

旧書簡 集番号	宛 名	年 月 日	訂 正 事 項	写本	全集書 簡番号
正一	新島民治	文久二年十二月五日			四
二	新島民治	元治元年五月廿五日			一〇
三	新島民治	元治元年六月十四日			一一
四	新島民治	慶応二年二月廿一日	慶応二年〔二月二十一日〕		一五
五	新島民治	慶応三年四月十一日	慶応三年〔四月十一日〕		一八
六	新島民治	慶応三年十二月廿五日			二一
七	新島民治	明治元年三月十二日	慶応四年三月十二日		二三
八	新島民治	明治元年九月一日	慶応四年九月一日		二五
九	新島民治	明治二年五月十日			二六
一〇	新島民治	明治二年六月十六日			二八
一一	新島民治	明治四年九月六日	明治四年九月五日		三四
一二	新島民治	明治五年四月一日			三六
一三	新島民治	明治五年四月四日			三七
一四	新島民治	明治五年四月七日			三八
一五	新島民治	明治五年五月三日			三九



一六	新島民治	明治五年六月廿一日
一七	新島民治	明治六年一月廿六日
一八	新島民治	明治六年三月十八日
一九	新島民治	明治六年八月三日
二〇	新島民治	明治六年十一月廿三日
二一	新島民治	明治七年一月十一日
二二	新島民治	明治八年一月一日
二三	新島民治	明治八年一月九日
二四	新島民治	明治八年四月四日
二五	新島民治	明治八年四月六日
二六	新島民治	明治八年六月八日
二七	新島民治	明治八年六月三十日
二八	新島民治	明治八年七月廿一日
二九	新島おとみ	慶応三年十二月廿四日
三〇	新島双六	慶応二年□月□日
三一	新島双六	慶応三年十二月廿四日
三二	新島双六	明治二年六月十五日
三三	新島双六	明治三年四月廿二日

〔新島民治〕

新島とみ

慶応元年月日未詳

四一
四三
四四
四五
四六
四七
五〇
五二
五七
五八
六〇
六一
六二
二〇
一四
一九
二七
三〇

三四	新島双六	明治四年二月十一日		三二
三五	新島八重子	明治十三年二月廿五日	新島八重	八四
三六	新島八重子	明治十七年四月八日	新島八重、明治十七年四月〔七・八〕日	(K) 一六三
三七	新島八重子	明治十七年四月十四日	新島八重	(K) 一六五
三八	新島八重子	明治十七年四月廿日	新島八重	(K) 一六六
三九	新島八重子	明治十七年四月廿八日	新島八重	(K) 一六七
四〇	新島八重子	明治十七年六月十五日	新島八重	(K) 一七〇
四一	新島八重子	明治十七年六月卅日	新島八重	(K) 一七二
四二	新島八重子	明治十七年七月廿七日	新島八重	(K) 一七四
四三	新島八重子	明治十七年八月十六日	新島八重	(K) 一七六
四四	新島八重子	明治十七年八月廿五日	新島八重、明治十七年〔八月二十五日〕	(K) 一七七
四五	新島八重子	明治十七年十月卅一日	新島八重	(K) 一七八
四六	新島八重子	明治十七年十一月廿二日	新島八重	(K) 一七九
四七	新島八重子	明治十七年十二月廿一日	新島八重	(K) 一八六
四八	新島八重子	明治十七年十二月廿二日	〔新島八重〕明治十七年〔十二月二十二日〕	(K) 一八七
四九	新島八重子	明治十七年十二月卅日	新島八重	(K) 一八八
五〇	新島八重子	明治十八年一月十二日	〔新島八重〕明治十八年〔一月十二日〕	(K) 一九〇
五一	新島八重子	明治十八年一月廿二日	〔新島八重〕明治十八年〔一月二十二日〕	(K) 一九一

五二	新島八重子	明治十八年二月一日	新島八重	(K) 一九二
五三	新島八重子	明治十八年三月二日	〔新島八重〕 明治十八年三月二日	(K) 一九六
五四	新島八重子	明治十八年五月十一日	〔新島八重〕 明治十八年〔五月十一日〕	(K) 二〇一
五五	新島八重子	明治十八年七月十七日	〔新島八重〕 明治十八年〔七月十七日〕	(K) 二〇六
五六	新島八重子	明治十八年八月九日	〔新島八重〕 明治十八年〔八月九日〕	(K) 二〇九
五七	新島八重子	明治十八年八月九日	〔新島八重〕 明治十八年〔八月九日〕	(K) 二〇八
五八	新島八重子	明治十八年八月十九日	〔新島八重〕 明治十八年〔八月十九日〕	(K) 二一〇
五九	新島八重子	明治廿一年五月卅一日	新島八重	(K) 四二六
六〇	新島八重子	明治廿二年十二月九日	〔新島八重〕 明治二十二年〔十二月九日〕	(K) 七六三
六一	新島八重子	明治廿二年十二月十四日	新島八重	(K) 七六九
六二	新島八重子	明治廿二年十二月十六日	新島八重	(K) 七七三
六三	新島八重子	明治廿三年一月一日	〔新島八重〕 明治二十三年〔一月一日〕	(K) 七九五
六四	新島八重子	明治廿三年一月三日	新島八重	(K) 七九九
六五	新島八重子	明治廿三年一月四日	新島八重、明治二十三年〔一月四日〕	(K) 八〇一
六六	新島八重子	明治廿三年一月十日	新島八重	(K) 八〇五
六七	新島八重子	明治廿三年一月十七日	新島八重	(K) 八一五
六八	両親・妻・甥	明治十七年五月九日	新島民治・とみ・八重・公義	(K) 一六八
六九	両親・妻・甥	明治十七年六月六日	新島民治・とみ・八重・公義	(K) 一六九

七〇	新島公義
七一	新島公義
七二	新島公義
七三	新島公義
七四	新島公義
七五	新島公義
七六	新島公義
七七	新島公義
七八	新島公義
七九	新島公義
八〇	新島公義
八一	新島公義
八二	新島公義
八三	新島公義
八四	新島公義
八五	新島公義
八六	新島公義
八七	新島公義

明治八年九月十五日
明治十九年二月廿日
明治十九年七月十六日
明治廿年一月廿五日
明治廿年二月十六日
明治廿年三月二日
明治廿年三月十九日
明治廿一年一月十一日
明治廿一年一月十七日
明治廿一年二月三日
明治廿一年三月一日
明治廿一年四月五日
明治廿一年四月八日
明治廿一年四月廿九日
明治廿一年五月□日
明治廿一年十月廿九日
明治廿一年十月卅日
明治廿二年十二月廿八日

明治二十二年〔十二月二十八日〕
明治二十一年〔四月八日〕
〔新島公義〕明治二十一年〔四月二十九日〕
明治二十一年五月十三日

六四
二三八
二六二
二八六
二九三
二九八
三〇二
三五九
三六一
三六七
三七二
三九六
三九八
四〇八
四一五
四九二
四九四
七八四

八八	阿部政恒
八九	阿部政恒
九〇	阿部政恒
九一	阿部政恒
九二	雨森菊太郎
九三	安中基督教会
九四	安中基督教会
九五	安藤嘉左衛門
九六	飯田逸之助
九七	飯田逸之助
九八	飯田勇紀
九九	石田貫之助外三名
一〇〇	板垣退助
一〇一	市原盛宏
一〇二	井上馨
一〇三	井上馨
一〇四	井上馨
一〇五	井上馨

明治廿一年四月十三日	
明治廿一年十月卅日	
明治廿一年十一月三日	
明治廿一年十一月十四日	
明治廿一年四月十四日	
明治十二年二月十日	
明治十九年一月十二日	
明治□年□月□日	
元治元年四月廿五日	
明治四年二月十一日	
明治廿二年七月廿七日	
明治廿二年三月廿日	
明治十六年十二月卅一日	
明治十九年一月廿六日	
明治廿一年五月三日	
明治廿一年六月廿九日	
明治廿一年十月十六日	
明治廿二年一月一日	

石田貫之助・内藤利八・鹿島秀磨・善積順蔵	
安中教会・和田正幾	
安中教会兄弟	

四〇〇	
四九三	
四九七	
五〇四	
四〇一	
七七	
二二五	
八五〇	
八	
三一	
六八九	
六〇四	
一五二	
二三〇	
四〇九	
四四〇	
四八五	
五四六	

一〇六	井上馨
一〇七	井上馨
一〇八	井上馨
一〇九	井上馨
一一〇	井上馨
一一一	井上馨
一二二	井上馨
一二三	井上馨
一二四	井上馨
一二五	井上馨
一二六	い葉ら幾也
一二七	上原春朔
一二八	内田・垣見・竹内
一二九	海老名弾正
一二〇	海老名弾正
一二一	海老名弾正
一二二	海老名弾正
一二三	海老名弾正

明治廿二年二月十六日
明治廿二年四月十五日
明治廿二年四月廿一日
明治廿二年四月廿七日
明治廿二年六月四日
明治廿二年七月廿日
明治廿二年十一月六日
明治廿二年十一月廿日
明治廿二年十二月十六日
明治廿三年一月廿一日
明治□年六月五日
明治廿一年九月廿四日
明治廿二年六月廿八日
明治廿一年三月廿七日
明治廿一年十一月六日
明治廿一年十二月十七日
明治廿一年十二月廿八日
明治廿二年三月十三日

明治二十二年四月二十二日

明治二十一年十月六日

内田政雄・垣見敬男・竹内甚吉

海老名弾正・伊勢時雄、明治二十一年十一月二十六日

(K)

五八五
六一七
六二一
六二四
六六〇
六八五
四八〇
七四九
七七二
遺言
八二九
四七二
六七四
三九〇
五一一
五三六
五三九
六〇〇



一四二	長田時行	明治十六年六月九日	
一四三	織田純一郎	明治廿一年十一月十一日	
一四四	柁川武一・松山まつの	明治十六年四月廿九日	明治十九年四月二十九日
一四五	柏木義円	明治十七年一月廿日	
一四六	片桐清治	明治廿二年二月十九日	
一四七	加藤寿	明治廿二年三月廿六日	
一四八	金森通倫	明治廿年七月十二日	
一四九	亀山昇	明治廿年三月廿八日	
一五〇	阿波荒次郎	明治廿二年二月三日	
一五一	川西光三郎	明治廿二年四月三日	
一五二	川本政之助	明治十四年四月卅日	
一五三	川本政之助	明治十四年七月十一日	明治十四年〔七月十一日〕
一五四	川本政之助	明治十四年七月廿六日	
一五五	川本政之助	明治十四年十月十一日	
一五六	川本政之助	明治十八年十二月廿六日	
一五七	川本政之助	明治十九年三月八日	
一五八	川本政之助	明治廿二年一月十九日	
一五九	川本政之助	明治廿二年五月十日	明石教会
			六三八
			五五九
			二四二
			二二一
			一一七
			一一二
			一〇八
			一〇三
			六一二
			五七一
			三〇三
			三二一
			六〇六
			五八六
			一五三
			二五一
			五〇二
			一三九



一六〇	北垣国道
一六一	北垣国道
一六二	北垣国道
一六三	北垣国道
一六四	北垣国道
一六五	北垣国道
一六六	北垣国道
一六七	北垣国道
一六八	北垣国道
一六九	北垣国道
一七〇	北垣国道
一七一	北垣国道
一七二	北垣国道
一七三	北垣国道
一七四	北垣国道
一七五	北垣国道
一七六	北垣国道
一七七	北垣国道

明治十六年十月十八日
明治十七年三月廿五日
明治十七年三月廿七日
明治十七年四月二日
明治十九年二月四日
明治十九年四月廿七日
明治十九年七月三日
明治十九年七月四日
明治十九年八月卅一日
明治十九年十月廿六日
明治廿年二月廿五日
明治廿一年四月卅一日
明治廿一年五月廿八日
明治廿二年一月十七日
明治廿二年二月六日
明治廿二年五月十三日
明治廿二年五月廿四日
明治廿二年五月卅日

明治十五年十月十八日
明治二十一年三月二十五日
明治二十一年三月二十七日
明治十七年四月一日
明治二十二年四月三十日

(T)	一二七
(T)	三八七
(T)	三九一
(T)	一六二
	二三三
(T)	二五〇
(T)	二五九
(T)	二六〇
(T)	二六五
(T)	二七一
(T)	二九五
(T)	六二六
(T)	四二四
(T)	五五七
(T)	五七二
(T)	六四五
(T)	六五二
	六五五

一七八	北垣国道
一七九	北垣国道
一八〇	北垣国道
一八一	北垣国道
一八二	北垣国道
一八三	北垣国道
一八四	北垣国道
一八五	北垣国道
一八六	北垣国道
一八七	北垣国道
一八八	北垣国道
一八九	木戸孝允
一九〇	九鬼隆一
一九一	蔵原惟郭
一九二	蔵原惟郭
一九三	蔵原惟郭
一九四	蔵原惟郭
一九五	蔵原惟郭

明治廿二年六月十八日
明治廿二年六月廿三日
明治廿二年七月六日
明治廿二年九月十八日
明治廿三年一月十日
明治廿三年一月廿一日
明治□年十一月廿六日
明治□年七月十九日
明治□年十一月一日
明治□年五月十四日
明治□年三月廿七日
明治五年五月三日
明治廿二年二月九日
明治十五年三月六日
明治十六年二月七日
明治十八年二月廿日
明治十八年五月卅日
明治十八年七月三日

明治十九年六月二十三日

明治十四年二月七日

(T)	六六七
(T)	二五六
(T)	六八〇
	七一三
	八〇四
(T)	遺言
	八四五
(T)	八三三
(T)	八四三
	八二六
	八二五
	四〇
	五七五
	一一〇
	九七
	一九四
	二〇二
	二〇三

一九六	蔵原惟郭
一九七	蔵原惟郭
一九八	蔵原惟郭
一九九	蔵原惟郭
二〇〇	蔵原惟郭
二〇一	蔵原惟郭
二〇二	古賀快象
二〇三	小崎成章・亀山昇
二〇四	小崎弘道
二〇五	小崎弘道
二〇六	小崎弘道
二〇七	小崎弘道
二〇八	小崎弘道
二〇九	小崎弘道
二一〇	小崎弘道
二一一	小崎弘道
二一二	小崎弘道
二二三	小崎弘道

明治十八年七月十四日
明治十八年七月廿七日
明治十八年八月廿五日
明治十八年九月廿九日
明治十八年十月九日
明治十八年十月九日
明治廿二年十一月二日
明治十三年七月廿日
明治十三年一月五日
明治十三年二月廿五日
明治十三年六月十二日
明治十五年八月七日
明治十七年十二月十六日
明治十八年三月九日
明治十八年五月十八日
明治十八年十月十七日
明治十八年十月廿二日
明治十九年二月九日

〔蔵原惟郭〕明治十八年〔十月九日〕

古賀鶴次郎

明治十四年七月二十日

明治十八年三月十八日

(K)
二〇五
二〇七
二一一
二一二
二一四
二二三
七四〇
一一〇
八三
八五
八九
一二五
一八二
一九七
一九八
二一五
二一六
二三四

二二四	小崎弘道	明治十九年二月廿三日	
二二五	小崎弘道	明治十九年九月二日	
二二六	小崎弘道	明治廿年十月廿八日	明治二十一年一月二十八日
二二七	小崎弘道	明治廿年十二月九日	
二二八	小崎弘道	明治廿一年六月八日	明治二十二年六月八日
二二九	小崎弘道	明治廿一年十一月六日	
二二〇	小崎弘道	明治廿一年十二月廿八日	
二二一	小崎弘道	明治廿二年一月廿六日	
二二二	小崎弘道	明治廿二年六月十五日	
二二三	小崎弘道	明治□年十月十三日	
二二四	小崎弘道	明治□年九月一日	明治二十一年九月一日
二二五	小崎弘道・松山高吉	明治十七年十二月十八日	
二二六	小崎弘道・松山高吉	明治十八年十一月二日	
二二七	小崎弘道・竹越与三郎	明治廿一年十一月十日	
二二八	小崎弘道・湯浅治郎	明治廿一年十二月十日	明治二十年十二月十日
二二九	小崎・湯浅・徳富	明治廿二年二月廿一日	小崎弘道・湯浅治郎・徳富猪一郎
二三〇	児島惟謙	明治廿二年十月廿六日	
二三一	後藤源九郎	明治廿一年十二月七日	
二二八			二二九
七三七			二六六
五二八			三三五
			三四七
			六六三
			四九九
			五四〇
			五六二
			六六六
			八四一
			四六三
			一八五
			二一七
			五〇一
			三四八
			五八九

二三二 西京三教会

二三三 渋沢栄一

二三四 渋沢栄一

二三五 菅沼錠次郎

二三六 須田逸平

二三七 滝口可成

二三八 竹内雄四郎

二三九 田中賢道

二四〇 田中賢道

二四一 田中賢道

二四二 田中賢道

二四三 田宮勇

二四四 千木良昌庵

二四五 千木良昌庵

二四六 千木良昌庵

二四七 千木良昌庵

二四八 千木良昌達

二四九 頭山満

明治十六年五月廿一日

明治廿二年十一月十三日

明治廿三年一月十六日

元治元年三月十一日

明治廿二年一月□日

明治□年八月廿五日

明治□年七月七日

明治廿二年九月十六日

明治廿二年九月十七日

明治廿二年十月四日

明治廿二年十月五日

明治十六年三月卅日

明治八年一月六日

明治八年一月十一日

明治八年三月三十日

明治十一年十二月廿三日

明治十二年三月六日

明治廿二年二月一日

明治二十二年〔一月〕

明治二十二年八月二十五日

明治二十一年三月三〇日

一三六

七四五

八一二

五

五六六

七〇三

八三一

七一

七一二

七一八

七二二

三九三

五一

五三

五六

七六

七八

五六七

二五〇	時岡恵吉
二五一	時岡恵吉
二五二	徳富猪一郎
二五三	徳富猪一郎
二五四	徳富猪一郎
二五五	徳富猪一郎
二五六	徳富猪一郎
二五七	徳富猪一郎
二五八	徳富猪一郎
二五九	徳富猪一郎
二六〇	徳富猪一郎
二六一	徳富猪一郎
二六二	徳富猪一郎
二六三	徳富猪一郎
二六四	徳富猪一郎
二六五	徳富猪一郎
二六六	徳富猪一郎
二六七	徳富猪一郎

明治廿二年十二月十四日
明治廿三年一月十七日
明治十三年四月十二日
明治十三年□月□日
明治十三年六月廿九日
明治十三年七月廿一日
明治十三年八月十日
明治十三年九月廿一日
明治十四年八月廿九日
明治十四年九月十七日
明治十五年一月四日
明治十五年七月廿八日
明治十六年一月十日
明治十六年十月五日
明治十八年十二月廿日
明治十九年一月十九日
明治十九年十二月七日
明治十九年十二月廿日

明治十三年三月二十一日  
徳富猪一郎・河辺鋤太郎

明治十四年八月二十八日

明治十四年一月四日

明治十五年一月十九日

七七〇
八一六
八七
八六
九〇
九一
九二
九四
一一四
一一五
九六
一二四
一三〇
一四七
二一九
一一九
二七七
二七九

二六八	德富猪一郎
二六九	德富猪一郎
二七〇	德富猪一郎
二七一	德富猪一郎
二七二	德富猪一郎
二七三	德富猪一郎
二七四	德富猪一郎
二七五	德富猪一郎
二七六	德富猪一郎
二七七	德富猪一郎
二七八	德富猪一郎
二七九	德富猪一郎
二八〇	德富猪一郎
二八一	德富猪一郎
二八二	德富猪一郎
二八三	德富猪一郎
二八四	德富猪一郎
二八五	德富猪一郎

明治廿年二月二日
明治廿年二月廿五日
明治廿年十一月六日
明治廿年十一月廿二日
明治廿年十一月廿五日
明治廿一年一月六日
明治廿一年三月一日
明治廿一年三月四日
明治廿一年三月五日
明治廿一年三月七日
明治廿一年三月廿六日
明治廿一年三月廿九日
明治廿一年四月十七日
明治廿一年五月四日
明治廿一年五月十日
明治廿一年五月十二日
明治廿一年五月十三日
明治廿一年五月十六日

明治二十一年三月二十五日

明治二十一年五月八日

明治二十二年五月十二日

二八九
二九六
三三四
三四一
三四二
三五六
三七三
三七四
三八八
三七五
三八九
三九二
四〇四
四一一
四一二
六四二
四一六
四一八

二八六	德富猪一郎
二八七	德富猪一郎
二八八	德富猪一郎
二八九	德富猪一郎
二九〇	德富猪一郎
二九一	德富猪一郎
二九二	德富猪一郎
二九三	德富猪一郎
二九四	德富猪一郎
二九五	德富猪一郎
二九六	德富猪一郎
二九七	德富猪一郎
二九八	德富猪一郎
二九九	德富猪一郎
三〇〇	德富猪一郎
三〇一	德富猪一郎
三〇二	德富猪一郎
三〇三	德富猪一郎

明治廿一年五月十九日
明治廿一年五月廿一日
明治廿一年五月廿五日
明治廿一年五月廿八日
明治廿一年六月一日
明治廿一年六月三日
明治廿一年六月五日
明治廿一年六月卅日
明治廿一年七月十日
明治廿一年七月卅日
明治廿一年八月九日
明治廿一年八月九日
明治廿一年九月八日
明治廿一年九月廿二日
明治廿一年九月廿八日
明治廿一年十月一日
明治廿一年十月五日
明治廿一年十月七日

四二〇
四二二
四二三
四二五
四二八
四二九
四三一
四四一
四四五
四四八
四五六
四五五
四六八
四七一
四七五
四七八
四七九
四八一



三〇四	徳富猪一郎
三〇五	徳富猪一郎
三〇六	徳富猪一郎
三〇七	徳富猪一郎
三〇八	徳富猪一郎
三〇九	徳富猪一郎
三一〇	徳富猪一郎
三一一	徳富猪一郎
三一二	徳富猪一郎
三二三	徳富猪一郎
三二四	徳富猪一郎
三二五	徳富猪一郎
三二六	徳富猪一郎
三二七	徳富猪一郎
三二八	徳富猪一郎
三二九	徳富猪一郎
三三〇	徳富猪一郎
三三一	徳富猪一郎

明治廿一年十月十三日
明治廿一年十月十三日
明治廿一年十月十九日
明治廿一年十一月五日
明治廿一年十一月十六日
明治廿一年十一月廿二日
明治廿一年十一月廿二日
明治廿一年十一月廿四日
明治廿一年十一月廿七日
明治廿一年十二月五日
明治廿一年十二月六日
明治廿一年十二月七日
明治廿一年十二月九日
明治廿一年十二月十日
明治廿一年一月廿九日
明治廿二年二月六日
明治廿二年二月九日
明治廿二年二月十三日

〔徳富猪一郎〕明治二十一年〔十月十三日〕

明治二十一年十二月八日

四八二
四八三
四八六
四九八
五〇六
五一〇
五一一
五一三
五一六
五二六
五二七
五二九
五三〇
五三一
五六四
五七三
五七六
五七九

三三八	德富猪一郎
三三七	德富猪一郎
三三六	德富猪一郎
三三五	德富猪一郎
三三四	德富猪一郎
三三三	德富猪一郎
三三二	德富猪一郎
三三一	德富猪一郎
三三〇	德富猪一郎
三二九	德富猪一郎
三二八	德富猪一郎
三二七	德富猪一郎
三二六	德富猪一郎
三二五	德富猪一郎
三二四	德富猪一郎
三二三	德富猪一郎
三二二	德富猪一郎

明治廿二年三月五日
明治廿二年三月十九日
明治廿二年三月卅日
明治廿二年四月廿九日
明治廿二年五月七日
明治廿二年五月十二日
明治廿二年五月十二日
明治廿二年六月一日
明治廿二年六月二日
明治廿二年七月一日
明治廿二年七月二日
明治廿二年七月廿一日
明治廿二年八月十日
明治廿二年八月十二日
明治廿二年九月廿六日
明治廿二年九月廿七日
明治廿二年十月四日

本簡〔德富猪一郎〕と同宛明治二十二年〔六月一日〕に分置

本簡とさらに「小崎弘道」明治二十二年〔六月二日〕に分置

明治十九年八月十日

五九六
六〇三
六〇七
六二五
六三六
六四三
六四四
六五七
六五六
六五八
六五九
六七七
六七九
六八六
二六三
六九六
七一五
七一六
七一九

三三九	德富猪一郎
三四〇	德富猪一郎
三四一	德富猪一郎
三四二	德富猪一郎
三四三	德富猪一郎
三四四	德富猪一郎
三四五	德富猪一郎
三四六	德富猪一郎
三四七	德富猪一郎
三四八	德富猪一郎
三四九	德富猪一郎
三五〇	德富猪一郎
三五一	德富猪一郎
三五二	德富猪一郎
三五三	德富猪一郎
三五四	德富猪一郎
三五五	德富猪一郎
三五六	德富猪一郎

明治廿二年十月十七日
明治廿二年十月十七日
明治廿二年十月十八日
明治廿二年十月廿一日
明治廿二年十月廿四日
明治廿二年十月廿四日
明治廿二年十月廿四日
明治廿二年十月廿四日
明治廿二年十一月五日
明治廿二年十一月九日
明治廿二年十一月十一日
明治廿二年十一月十二日
明治廿二年十一月十四日
明治廿二年十一月十六日
明治廿二年十一月廿三日
明治廿二年十一月廿五日
明治廿二年十一月廿六日
明治廿二年十一月廿八日
明治廿二年十一月□日

明治二十二年〔十一月十六日〕
明治二十一年〔五月〕十四日
明治二十二年〔十一月〕二十五日
明治二十二年〔十二月〕二十四日
明治二十二年〔十月〕二十四日
〔德富猪一郎〕明治二十二年〔十一月〕

七二七
七二六
七二九
七三一
七八一
七三三
七三四
七四一
七四二
七四四
七四七
四一七
七四六
七五一
七五四
七五五
七五七
七六〇

三五七	徳富猪一郎	明治廿二年十一月〇日	年次未詳〔十一月〕	八四六
三五八	徳富猪一郎	明治廿二年十二月九日		七六三
三五九	徳富猪一郎	明治廿二年十二月九日		七六四
三六〇	徳富猪一郎	明治廿二年十二月十三日	明治二十二年十二月十二日	七六六
三六一	徳富猪一郎	明治廿二年十二月卅日		七八七
三六二	徳富猪一郎	明治〇年九月十四日	明治二十二年九月十四日	七一〇
三六三	徳富猪一郎	明治〇年〇月〇日	〔徳富猪一郎、明治二十一年九月〕	四七六
三六四	徳富久子	明治廿二年五月五日		六三三
三六五	富田鉄之助	明治十六年五月十七日		一三四
三六六	富田鉄之助	明治十六年六月十一日		一四〇
三六七	同志社教師	明治廿一年四月十一日	坂田文平・浮田和民・藤田愛二・金森通倫・森田久万人・加藤勇次郎・清水泰二郎	三九九
三六八	同志社教師	明治廿二年六月十九日	金森通倫・加藤勇次郎・浮田和民・奥田吉次郎・山路一三・福島綱雄・藤田愛二・坂田文平・南熊夫・清水泰次郎・志垣要三・森田久万人	六六九
三六九	同志社祝賀委員会	明治廿二年二月九日	〔同志社憲法発布〕祝会委員	五七四
三七〇	同志社生徒	明治十六年三月廿四日	同志社一年生	一三一
三七一	同志社生徒	明治十九年十月十二日	同志社五年生	二六九

三七二	同志社生徒
三七三	同志社生徒
三七四	同志社生徒
三七五	同志社寮長
三七六	土倉庄三郎
三七七	土倉庄三郎
三七八	中川壯外五名
三七九	中村栄助
三八〇	中村栄助
三八一	中村栄助
三八二	中村栄助
三八三	中村栄助
三八四	中村栄助
三八五	中村栄助
三八六	中村栄助
三八七	中村栄助
三八八	中村栄助

明治廿年□月十八日	
明治廿年六月十九日	
明治廿一年六月四日	
明治十九年六月三日	
明治廿一年五月十一日	
明治廿一年五月十七日	
明治八年七月廿日	
明治十六年四月八日	
明治十六年四月卅日	
明治十六年五月卅日	
明治十六年九月廿四日	
明治十六年十二月廿日	
明治十七年一月廿八日	
明治十七年二月廿六日	
明治十七年十一月廿三日	
明治十九年二月十六日	
明治十九年二月廿五日	

〔同志社生徒〕

同志社五年卒業生

同志社五年生

年次未詳六月三日

中川壯・田中次郎・鈴木勉・伊岡尹方・  
本田勝二郎・山本清、明治十四年七月二十  
日

明治十七年三月三十一日

明治十六年七月二十四日

三五二	
三一五	
四三〇	
八二八	
四一三	
四一九	
一一一	
一三二	
一六一	
一三八	
一四二	
一五一	
一五五	
一五六	
一八〇	
二三七	
二四〇	

三八九	中村栄助
三九〇	中村栄助
三九一	中村栄助
三九二	中村栄助
三九三	中村栄助
三九四	中村栄助
三九五	中村栄助
三九六	中村栄助
三九七	中村栄助
三九八	中村栄助
三九九	中村栄助
四〇〇	中村栄助
四〇一	中村栄助
四〇二	中村栄助
四〇三	中村栄助
四〇四	中村栄助
四〇五	中村栄助
四〇六	中村栄助

明治十九年三月十日
明治十九年八月十八日
明治十九年九月卅日
明治十九年十月十六日
明治十九年十月□日
明治十九年十一月十八日
明治十九年十二月十三日
明治廿年一月十日
明治廿年三月十六日
明治廿年四月十四日
明治廿年六月六日
明治廿年八月□日
明治廿年十月四日
明治廿年十月六日
明治廿年十月廿一日
明治廿年十月廿九日
明治廿年十一月九日
明治廿年十一月十二日

明治二十一年三月十日

明治十六年十月十六日

明治十九年〔十月〕

〔中村栄助〕明治二十年〔三月十六日〕

〔中村栄助〕明治二十年〔八月〕

明治二十年十月八日

三七六
二六四
二六七
一四九
二七三
二七五
二七八
二八二
三〇一
三〇五
三一
三二四
三三〇
三三八
三三二
三三三
三三五
三三六

四〇七	中村栄助
四〇八	中村栄助
四〇九	中村栄助
四一〇	中村栄助
四一一	中村栄助
四一二	中村栄助
四一三	中村栄助
四一四	中村栄助
四一五	中村栄助
四一六	中村栄助
四一七	中村栄助
四一八	中村栄助
四一九	中村栄助
四二〇	中村栄助
四二一	中村栄助
四二二	中村栄助
四二三	中村栄助
四二四	中村栄助

明治廿一年十一月廿日
明治廿一年十二月五日
明治廿一年十二月七日
明治廿一年一月十七日
明治廿一年一月廿三日
明治廿一年二月二日
明治廿一年二月六日
明治廿一年二月十日
明治廿一年二月廿五日
明治廿一年三月十日
明治廿一年三月十二日
明治廿一年三月廿日
明治廿一年三月廿一日
明治廿一年三月廿三日
明治廿一年四月四日
明治廿一年四月十六日
明治廿一年四月十八日
明治廿一年四月廿五日

明治二十年二月六日

明治二十年三月一日

明治二十一年三月十三日

明治二十一年四月十七日

三三八
三四四
三四六
三六〇
三六三
三六六
二九一
三六八
三七〇
二九七
三七八
三八一
三八二
三八四
三九五
四〇三
四〇五
四〇六

四二五	中村栄助
四二六	中村栄助
四二七	中村栄助
四二八	中村栄助
四二九	中村栄助
四三〇	中村栄助
四三一	中村栄助
四三二	中村栄助
四三三	中村栄助
四三四	中村栄助
四三五	中村栄助
四三六	中村栄助
四三七	中村栄助
四三八	中村栄助
四三九	中村栄助
四四〇	中村栄助
四四一	中村栄助
四四二	中村栄助

明治廿一年四月廿九日
明治廿一年五月十一日
明治廿一年五月廿一日
明治廿一年六月十五日
明治廿一年六月廿六日
明治廿一年七月四日
明治廿一年八月十六日
明治廿一年□月廿七日
明治廿一年□月□日
明治廿二年三月七日
明治廿二年三月卅一日
明治廿二年五月五日
明治廿二年五月五日
明治廿二年五月五日
明治廿二年五月六日
明治廿二年六月十二日
明治廿二年六月廿九日
明治廿二年七月一日

明治二十一年七月三日

明治二十一年一月二十七日

明治十九年〔一月十九日〕

〔中村栄助〕明治二十二年〔五月六日〕

明治十五年六月二十九日

四〇七
四一四
四二一
四三二
四三八
四四二
四五九
三六四
二二九
五九七
六〇九
六三〇
六三一
六三五
六三四
六六四
一二二
六七六



四四三	中村栄助
四四四	中村栄助
四四五	中村栄助
四四六	中村栄助
四四七	中村栄助
四四八	中村栄助
四四九	中村栄助
四五〇	中村栄助
四五一	中村栄助
四五二	中村正直
四五三	中村正直
四五四	中山光五郎
四五五	中山光五郎
四五六	中山光五郎
四五七	長岡喜八
四五八	長岡喜八
四五九	長岡喜八
四六〇	長岡喜八

明治廿二年七月廿六日
明治廿二年十月五日
明治廿二年十月五日
明治廿二年十月十日
明治〇年六月七日
明治〇年一月四日
明治〇年七月八日
明治〇年十二月十日
明治〇年十月廿五日
明治九年十二月十一日
明治十八年十二月十四日
明治廿二年三月十一日
明治廿二年四月卅日
明治廿二年十一月廿七日
明治廿一年八月一日
明治廿二年二月十四日
明治廿二年二月十九日
明治廿二年二月廿日

明治二十二年〔十月五日〕
年次未詳十月十日
明治二十二年六月七日
明治二十二年七月八日
〔中村栄助〕
永岡喜八
永岡喜八
永岡喜八
永岡喜八

(K)
六八八
七二〇
七二一
八四〇
六六二
八一九
六八一
八四八
八四二
六七
二一八
五九九
六二七
七五六
四五〇
五八〇
五八七
五八八

四六一	長岡喜八
四六二	萩森長五郎
四六三	浜岡光哲
四六四	浜岡光哲
四六五	浜岡光哲
四六六	原忠美
四六七	原忠美
四六八	半田宇平治
四六九	半田宇平治
四七〇	半田宇平治
四七一	半田平次郎
四七二	半田平次郎
四七三	半田平次郎
四七四	半田平次郎
四七五	馬場種太郎
四七六	東正義
四七七	広瀬源三郎
四七八	広津友信

明治廿二年□月十五日
明治□年七月卅日
明治十九年四月廿七日
明治廿二年一月十七日
明治廿二年七月卅日
明治廿三年一月十一日
明治廿三年一月十七日
明治十八年十二月廿三日
明治十九年一月十二日
明治十九年一月□日
明治十九年三月三日
明治廿年一月廿四日
明治廿一年一月六日
明治廿三年一月三日
明治廿一年十二月十七日
明治廿二年十二月廿四日
明治廿二年四月十四日
明治廿一年八月廿日

〔永岡〕喜八

明治二十二年七月三十日

〔浜岡光哲〕

半田宇平次

半田宇平次

〔半田宇平次〕明治十九年〔二月〕

明治二十二年八月十四日

七八九
六九〇
二四八
五五六
六九一
八〇六
八一四
二二〇
二二六
二二二
二四一
二八五
三五五
七九七
五三五
七八〇
六九七
四六〇

四七九	広津友信	明治廿二年二月十五日		五八二
四八〇	広津友信	明治廿二年七月廿日		六八四
四八一	広津友信	明治廿二年八月十八日		六九九
四八二	広津友信	明治廿二年十月廿一日		七三〇
四八三	広津友信	明治廿二年十一月十九日	〔広津友信〕	〔K〕 七四八
四八四	広津友信	明治廿二年十二月十四日	〔広津友信〕 明治二十二年〔十二月十四日〕	〔K〕 七六七
四八五	広津友信	明治廿二年十二月十六日	〔広津友信〕 明治二十二年〔十二月十六日〕	〔K〕 七七一
四八六	広津友信	明治廿二年十二月廿日		七七四
四八七	広津友信	明治廿二年十二月廿八日		〔K〕 七八二
四八八	広津友信	明治廿二年〇月〇日	明治二十二年〔十一月〕	追一〇
四八九	広津友信	明治廿二年〇月〇日	〔広津友信〕 明治二十二年〔十一月〕	七五九
四九〇	広津友信	明治廿三年一月七日		〔K〕 八〇三
四九一	広津友信	明治廿三年一月十五日		〔K〕 八〇九
四九二	広津友信・花畑健起	明治廿二年五月廿二日		〔K〕 六四九
四九三	広津友信・花畑健起	明治廿二年〇月〇日	明治二十二年〔五月〕二十三日と〔広津友信〕明治二十三年〔二月〕に分置	六五一
四九四	兵庫県以西諸教会兄弟	明治廿二年四月六日		六一四
四九五	福井信徒	明治十四年〇月〇日	明治十五年月日未詳	一二九

四九六	福井信徒	明治十六年十月廿三日	一五〇
四九七	福士成豊	明治廿年五月九日	三〇六
四九八	福士成豊	明治廿年五月十日	三〇七
四九九	福士成豊	明治廿年十月七日	三二九
五〇〇	福士成豊	明治廿年十一月廿一日	三三九
五〇一	福士成豊	明治廿一年一月三日	三三三
五〇二	藤谷為寛	明治〇年十一月廿五日	八四四
五〇三	不破唯次郎	明治廿一年〇月〇日	四九〇
五〇四	不破唯次郎	明治廿二年四月廿二日	六二〇
五〇五	不破唯次郎	明治廿二年七月廿日	六八三
五〇六	不破・杉田・杉山	明治廿二年二月十二日	五七八
五〇七	古沢滋	明治十九年十月十七日	二七〇
五〇八	堀貞一	明治十三年〇月〇日	一〇四
五〇九	堀貞一	明治十五年七月廿三日	一二三
五一〇	堀貞一	明治十九年十月廿九日	二七二
五一一	堀貞一	明治廿一年十一月十五日	五〇五
五一二	堀俊三	明治〇年九月廿六日	八三八
五一三	堀俊三	明治〇年十月九日	八三九
<p>           不破唯次郎・杉田潮・杉山重義・奈須義質・大谷執事、明治二十一年十月二十二日            不破唯次郎・杉田潮・杉山重義            堀金太郎、明治十四年六月十六日            堀金太郎         </p>			

五二四	增野悦興	明治十九年五月十四日	〔増野悦興〕明治十九年〔五月十四日〕	(T)	二五四
五一五	増野悦興	明治廿年二月九日		(T)	二九二
五一六	増野悦興	明治廿年十二月卅一日		(T)	三五一
五一七	松尾音治郎	明治十七年一月四日	松尾音次郎、明治二十二年一月四日		五四八
五一八	松尾音治郎	明治廿二年八月廿二日	松尾音次郎	(K)	七〇〇
五一九	松尾音治郎	明治廿二年八月廿三日	松尾音次郎	(K)	七〇二
五二〇	松尾音治郎	明治廿二年九月十日	松尾音次郎	(K)	七〇八
五二一	松尾音治郎	明治廿二年十二月卅日	松尾音次郎	(K)	七八五
五二二	松尾音治郎	明治廿二年一月六日	松尾音次郎、明治二十三年一月六日	(K)	八〇二
五二三	松方正義	明治廿二年十一月廿五日			七五三
五二四	松村介石	明治十七年三月十二日	森本介石		一五九
五二五	松本勘十郎	明治十九年一月十一日			二二四
五二六	松本勘十郎	明治廿一年八月二日	明治二十一年八月三日		四五一
五二七	松山高吉	明治十九年四月二日			二四六
五二八	松山高吉	明治廿二年一月五日			五四九
五二九	松山高吉・横井時雄	明治十七年七月十三日	松山高吉・伊勢時雄	(K)	一七三
五三〇	松山高吉・小崎弘道	明治十七年十二月十六日			一八三
五三一	松山高吉・小崎弘道	明治十七年十二月十八日	〔小崎弘道・松山高吉〕		一八四

五三二	松山・小崎・湯浅	明治十九年二月九日	松山高吉・小崎弘道・湯浅治郎	二三五
五三三	松山・小崎・湯浅・海老名	明治十九年十月十八日	松山高吉・小崎弘道・湯浅治郎・海老名弾正	二二七
五四四	松山高吉・大沢善助	明治廿一年十一月十九日		五〇八
五三五	宮川経輝	明治廿年七月十一日	〔宮川経輝〕	三二〇
五三六	宮川・海老名・小崎・横井・金森・湯浅	明治廿一年十一月廿三日	宮川経輝・海老名弾正・小崎弘道・伊勢時雄・金森通倫・湯浅治郎	五一二
五三七	宮口二郎	明治廿二年六月十四日		六六五
五三八	三輪振次郎	明治十六年二月廿日	明治十五年五月二十日	一一一
五三九	三輪振次郎	明治十六年十月十六日		一四八
五四〇	三輪振次郎	明治□年八月廿四日		八三四
五四一	三輪振次郎	明治□年二月廿五日		八二三
五四二	村上太五平	明治十九年六月十二日		二五五
五四三	森有礼	明治十一年十一月二日		七五
五四四	森田久万人	明治廿一年九月八日		四六六
五四五	森田久万人・加藤勇次郎	明治廿一年二月十九日		三六九
五四六	山岡尹方	明治十二年七月十一日	明治十四年七月十一日	一〇九
五四七	山岡尹方	明治十四年十月廿一日		一一八
五四八	山岡尹方	明治十六年四月廿八日	明治十六年八月二十八日	一四三

五四九	山岡邦三郎	明治廿二年三月二日
五五〇	山口通	明治□年九月十二日
五五一	山田良斎	明治十九年十一月十五日
五五二	湯浅治郎	明治十一年六月十九日
五五三	湯浅治郎	明治廿年三月十四日
五五四	湯浅治郎	明治廿二年七月廿四日
五五五	湯浅治郎	明治□年六月九日
五五六	湯浅治郎・徳富猪一郎	明治廿二年一月廿九日
五五七	湯浅治郎・徳富猪一郎	明治廿二年五月九日
五五八	湯浅治郎・徳富猪一郎	明治廿二年八月二日
五五九	湯浅初子	明治廿年十二月十七日
五六〇	湯浅お茂よ	明治廿年一月十二日
五六一	横井時雄	明治廿二年九月一日
五六二	横田安止	明治廿二年十月廿四日
五六三	横田安止	明治廿二年十一月廿三日
五六四	横田安止	明治廿二年十二月廿日
五六五	横田安止	明治廿三年一月十六日
五六六	横田安止	明治廿三年一月廿一日

明治十年六月十九日  
湯浅治郎・初子  
明治二十一年七月二十四日  
明治十年六月九日

湯浅もよ

伊勢時雄

明治二十二年十月二十五日

明治二十二年十二月三十日

五九四	遺言
八三六	八三三
二七四	七八八
六九	七五二
二九九	七三五
四四七	七〇七
六八	二八三
五六五	三五〇
六三七	六九三
六九三	三五〇
三五〇	二八三
二八三	七〇七
七三五	七五二
七五二	七八八
七八八	八三三
八三三	遺言

五六七	吉田清太郎
五六八	和田正幾
五六九	五十田勇治郎
五七〇	大沢善助
五七一	小田川金之助
五七二	勝安芳
五七三	金森通倫
五七四	川本泰年
五七五	川本政之助
五七六	佐竹篤
五七七	下村孝太郎
五七八	下村孝太郎
五七九	下村孝太郎
五八〇	下村孝太郎
五八一	高松有志家
五八二	徳富猪一郎
五八三	徳富猪一郎
五八四	土倉庄三郎

明治廿二年八月廿五日	
明治廿二年十月卅一日	
明治〇年四月廿六日	
明治廿二年十月六日	
明治廿二年二月十一日	
明治廿一年十一月十九日	
明治廿二年六月〇日	
明治十九年七月三日	
明治十三年九月一日	
明治廿一年七月廿二日	
明治十九年六月廿九日	
明治廿一年八月十一日	
明治廿二年三月九日	
明治廿二年四月十二日	
明治廿二年四月二日	
明治廿一年八月廿七日	
明治廿二年八月廿七日	
明治十六年九月廿八日	

明治二十二年四月二十六日	
〔大沢善助〕	
小田川全之	
明治二十一年十一月〔十九日〕	
明治二十二年〔六月〕	
〔佐竹篤〕明治二十二年七月二十二日	
〔高松における大学賛成有志家〕明治二十二年〔四月二日〕	
明治二十二年八月二十七日	
明治十五年九月二十八日	

七〇四	
七三八	
六二三	
七二三	
五七七	
五〇七	
六七五	
二五八	
九三	
六八七	
二五七	
四五七	
五九八	
六一六	
六一一	
七〇五	
七〇六	
一二六	



五八五	土倉庄三郎
五八六	土倉庄三郎
五八七	土倉庄三郎
五八八	土倉庄三郎
五八九	土倉庄三郎
五九〇	同志社寮長
五九一	山県昌隆
五九二	山県昌隆
統一	新島民治
二	新島民治
三	新島民治
四	新島民治
五	新島民治
六	新島民治
七	新島民治
八	新島民治
九	新島おみよ

明治十七年二月廿七日
明治十九年十一月十七日
明治廿年六月廿四日
明治廿一年五月八日
明治廿一年八月廿二日
明治□年六月廿一日
明治九年三月一日
明治九年五月一日
元治元年四月廿五日
慶応三年三月廿九日
明治五年九月廿九日
明治八年三月七日
明治八年三月卅日
明治八年五月五日
明治十八年三月二日
明治十八年七月四日
明治□年十二月廿五日

明治十四年十一月十七日

速水とき・新島みよ、明治二年十二月二十五日

一五七
追三
三一七
四一〇
四六二
八三〇
六五
六六
七
一七
四二
五四
五五
五九
一九五
二〇四
二九

一〇	新島八重子	明治廿一年五月□日	〔新島八重〕明治二十一年〔五月末〕	四二七
一一	新島八重子	明治廿二年十二月八日	新島八重	七六一
一二	新島八重子	明治廿三年一月□日	新島八重、明治二十三年〔一月〕	八一七
一三	新島公義	明治十九年三月九日		二四四
一四	新島公義	明治廿年五月卅一日	〔新島公義〕明治二十年〔五月三十一日〕	三一〇
一五	新島公義	明治廿年六月十二日	〔新島公義〕明治二十年〔六月十二日〕	三一二
一六	新島公義	明治廿年六月廿日	〔新島公義〕明治二十年〔六月二十日〕	三一六
一七	新島公義	明治廿年七月八日	〔新島公義〕明治二十年〔七月八日〕	三一八
一八	新島公義	明治廿年九月廿五日	〔新島公義〕明治二十年〔九月二十五日〕	三二六
一九	新島公義	明治廿年十月二日	〔新島公義〕明治二十年〔十月二日〕	三二七
二〇	新島公義	明治廿年十一月十八日	〔新島公義〕明治二十年〔十一月十八日〕	三三七
二一	新島公義	明治廿年十二月九日	〔新島公義〕年月日未詳	八五一
二二	新島公義	明治廿年十二月廿五日	〔新島公義〕年次未詳〔十二月二十五日〕	八四九
二三	新島公義	明治廿一年一月六日	〔新島公義〕明治二十一年〔一月六日〕	三五四
二四	新島公義	明治廿一年一月廿七日	〔新島公義〕明治二十年〔一月二十七日〕	二八七
二五	新島公義	明治廿一年六月廿六日	〔新島公義〕明治二十一年〔六月二十六日〕	四三九
二六	新島公義	明治廿一年七月廿一日	〔新島公義〕明治二十一年〔七月二十一日〕	四四六
二七	新島公義	明治廿一年九月八日	〔新島公義〕明治二十一年〔九月八日〕	四六七

二八	新島公義	明治廿一年九月十七日	〔新島公義〕明治二十一年〔九月十六日〕	四六九
二九	新島公義	明治廿一年九月廿日	〔新島公義〕明治二十一年〔九月二十日〕	四七〇
三〇	新島公義	明治廿二年一月七日	〔新島公義〕明治二十二年〔一月七日〕	五五〇
三一	新島公義	明治廿二年二月〇日	〔新島公義〕明治二十二年〔二月〕	五九二
三二	新島公義	明治廿二年三月二日	〔新島公義〕明治二十二年〔三月二日〕	五九五
三三	新島公義	明治廿二年七月一日	〔新島公義〕明治二十二年〔七月一日〕	六七八
三四	新島公義	明治廿二年八月四日	〔新島公義〕明治二十二年〔八月四日〕	六九四
三五	新島公義	明治廿二年十二月廿二日	〔新島公義〕明治二十二年〔十二月二十二日〕	七七七
三六	新島公義	明治〇年二月五日	明治十一年二月五日	七一
三七	新島公義	明治〇年四月一日	〔新島公義〕明治二十年〔四月一日〕	三〇四
三八	新島公義	明治〇年〇月〇日		八五二
三九	青柳某	明治廿三年一月十五日	青柳〔新米〕	八〇八
四〇	伊勢〔横井〕時雄	明治廿二年一月八日	伊勢時雄	五五一
四一	伊勢〔横井〕時雄	明治廿二年一月廿八日	伊勢時雄	五六三
四二	井深梶之助	明治廿一年十一月六日	明治二十一年十一月十二日	五〇三
四三	岩崎某	明治廿二年四月十七日	岩崎〔某〕	六一八
四四	市原盛宏・森田久万人 ・下村孝太郎	明治十七年十二月十六日		一八一

四四	上原權太郎	四三	尾崎直紀	四二	大江頼之助	四一	諸教会	四〇	志賀寛兵衛	三九	白石村治	三八	白石村治	三七	上毛基督教青年信徒	三六	須田明忠	三五	鈴木彦馬	三四	添川鉉之助	三三	添川鉉之助	三二	田中源太郎	三一	田中源太郎	三〇	田中源太郎	二九	田中源太郎	二八	田中賢道	二七	寺島宗則
----	-------	----	------	----	-------	----	-----	----	-------	----	------	----	------	----	-----------	----	------	----	------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	------	----	------

明治廿一年六月十五日	安政五年七月〇日	明治廿一年十二月十二日	明治廿一年十二月〇日	明治十六年四月廿八日	明治廿二年四月一日	明治廿二年十二月廿三日	明治廿二年十二月十三日	明治廿一年十一月七日	明治廿一年六月十六日	明治廿一年六月廿二日	明治廿一年六月廿四日	明治十六年七月廿日	明治十六年十月一日	明治十六年十月四日	明治十八年十二月卅日	明治廿二年六月十八日	明治十一年四月廿八日
------------	----------	-------------	------------	------------	-----------	-------------	-------------	------------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------

安政五年七月上旬	明治二十年十二月十二日	同志社、彦根、長浜諸教会牧師代議人并教会員	取止め	明治二十年六月十六日	明治十一年〔二月二十八日〕
----------	-------------	-----------------------	-----	------------	---------------

四三三	二	三四九	五二二	一三三	六一〇	七七九	五〇〇	三一四	四三四	四三五	一四一	一四五	一四六	二二二	六六八	七二
-----	---	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

八〇	七九	七八	七七	七六	七五	七四	七三	七二	七一	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	六四	六三
陸奥宗光	・上原春朔	宮口二郎・半田平治郎	半田宇平次	半田平次郎	速水おとき	波多野培根	永岡喜八	永岡喜八	永岡喜八	永岡喜八	永岡喜八	中山光五郎	中村正直	中村正直	德富(湯浅)初子	德富猪一郎	德富猪一郎

明治廿二年一月十八日	明治十九年十月□日	明治廿一年一月六日	明治廿一年十二月十五日	明治廿一年十一月一日	明治廿二年二月二日	明治廿一年十二月十五日	明治廿一年十二月十四日	明治廿一年六月廿五日	明治廿二年二月二日	明治十六年五月十八日	明治十二年三月十五日	明治十五年一月四日	明治廿二年六月廿八日	明治廿二年六月廿八日	明治廿二年六月廿八日
------------	-----------	-----------	-------------	------------	-----------	-------------	-------------	------------	-----------	------------	------------	-----------	------------	------------	------------

德富初子、明治十四年一月四日

速水とき・新島みよ、明治二年十二月二十五日

重復取止め

重復取止め

明治十九年十月四日

五五八	二六八	二九	四九六	五八三	五六八	五三七	五三四	五三三	四三七	五六九	一三五	七九	九五	六七三	六七二
-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	-----	-----

八〇	八二	八三	八四	八五	八六	八七	八八	八九	九〇	九一	九二	九三	九四	九五	九六	九七	九八
大和博	大和博	湯浅治郎	吉田賢輔・尺振八	吉田賢輔	吉田賢輔	吉田賢輔	吉田賢輔	組合会両会併合相談委員会	有志者	有志者	押川方義	松平正直	府県会議長并議員	某	某	某	某
明治廿二年二月十四日	明治廿二年二月廿七日	明治廿二年八月十八日	明治五年三月〇日	明治廿二年十一月十日	明治廿二年十二月廿日	明治廿二年〇月〇日	明治廿三年一月三日	明治廿一年二月〇日	明治廿一年三月〇日	明治廿一年十一月〇日	明治廿一年十一月〇日	明治廿一年十一月〇日	明治廿一年十二月〇日	明治廿一年〇月〇日	明治廿一年〇月〇日	明治廿一年〇月〇日	明治廿一年〇月〇日
明治二十二年五月二十七日	明治二十二年八月十一日	明治五年〔三月〕	〔吉田賢輔〕					〔京都府下有志者〕明治二十一年〔四月三日〕	〔有志者〕	明治二十一年十二月三日	〔松平正直〕明治二十一年〔十一月下旬〕	県会議員	取止め	年月日未詳	年月日未詳	年月日未詳	
五八一	六五四	六九五	三五	七四三	七七五	七九一	八〇〇	三七一	三九四	五一八	五二四	五二〇	五四一	八五三	八五四		

九八 九七 九六 九五 九四 九三 九二 九一 九〇 八九 八八 八七 八六 八五 八四 八三 八二 八一 八〇 七九 七八 七七 七六 七五 七四 七三 七二 七一 七〇 六九 六八 六七 六六 六五 六四 六三 六二 六一 六〇 五九 五八 五七 五六 五五 五四 五三 五二 五一 五〇 四九 四八 四七 四六 四五 四四 四三 四二 四一 四〇 三九 三八 三七 三六 三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一	某 某	明治廿一年□月□日 明治廿一年□月□日 明治廿一年□月□日	取止め（754注参照） 〔福島における有志家〕明治二十二年〔四月初旬〕 諸教会牧師・代議員、明治二十一年十二月一日	六一五 五二二
---	-----	-------------------------------------	---	------------

（杉井六郎）

新島襄全集編集委員

委員長 同志社前総長・理事長

同志社総長

委員 同志社大学名誉教授

同志社大学文学部教授

同志社大学文学部教授

同志社大学前工学部教授

同志社大学名誉教授

同志社本部庶務部長

同志社社史資料室室長

上野直蔵

松山義則

高橋虔

オーテス・ケリー

北垣宗治

島尾永康

杉井六郎

大原正次

河野仁昭



新島襄全集 4 ■ 書簡編 II

1989年8月25日  
1989年8月30日

初版第一刷印刷  
初版第一刷発行

編集者——新島襄全集編集委員会

発行者——今田 達

発行所——同朋舎出版

〒600 京都市下京区中堂寺鐘田町2 電 075-343-0621  
振替京都 5-22982

東京支店 〒101 東京都千代田区神田駿河台2-11-1  
電 03-292-2021

印刷——図書印刷同朋舎  
製本——大日本製本紙工

ISBN4-8104-0784-5



*THE COMPLETE WORKS  
OF  
JOSEPH HARDY NEFSIMA*

4

Letters in Japanese II

DOHOSHA  
1989  
KYOTO·JAPAN



何事...  
吹石之...  
...

每...身...  
...

同...社...  
...

青...年...  
...

...心...  
...

中...  
...

自由教育自法聲  
自由教育自法聲  
自由教育自法聲

自由教育自法聲  
自由教育自法聲  
自由教育自法聲

自由教育自法聲  
自由教育自法聲  
自由教育自法聲

自由教育自法聲  
自由教育自法聲  
自由教育自法聲

同志社大学図書館



8910057740